
蒼い瞳のフィアンセS

red-x

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い瞳のフィアンス

【Nコード】

N0422K

【作者名】

red-x

【あらすじ】

サイドインパクトの後、全人類は一度滅びたが殆どの人が戻ってきた。そんな状況のもと、ゲンドウはゼーレや使徒に関する情報を全世界に公開するなどしてネルフの生き残りを図り、その企ては成功しつつあった。

そんな状況の中で、シンジはアスカと二人で静かに暮らしていきたいと願ったが、その願いはかないそうになかった。シンジは、再び争いに巻き込まれようとしていた。

プロローグ

(僕は、アスカの首を絞めている。一体何故…。)

サ・ドインパクトの後、気が付いたら、アスカが僕の横で寝ていた。僕は、衝動的にアスカの首を絞めていた。そして、アスカの顔に僕の涙が垂れていった。

いつの間にか、アスカの手が伸びて僕の顔を撫でる。すると、アスカの首を絞めている力が弱まった。

(良かった、アスカは生きていたんだ。)

僕は心の中で呟いた。そして、アスカの胸の上で泣いた。

「気持ち悪い…。」

アスカがそう呟いたような気がした。気が付いた時には、アスカは再び深い眠りについてしまっていた。

-プロローグ-

アスカが目覚めたのは、それから3日後だった。

「アスカ…」

アスカを呼ぶと、僕は涙を流して笑っていた。はっきり言って、変な顔だったろう。

「ぶつ。バカシンジの顔、おかしいよ。どうしたの。」

僕は、穏やかなアスカの態度に少し驚いたが、満面の笑みを浮かべて言った。

「おかえりなさい。」
アスカも答えた。

「ただいま。」
僕は、その時、戻って来て良かったと心の底から思った。

次の日、僕はアスカに、色々なことを教えた。

サ・ドインパクトが起きたこと。

全人類が、一度滅びたこと。

殆どの人が戻ってきたこと。

父さん達が、ゼ・レヤ使徒に関する情報を全世界に公開したこと。

日本の首相が辞職し、冬月副司令の知人が新首相になったこと。

ネルフの多くの職員が戦略自衛隊に虐殺されたが、その多くが戻って来たこと。

戻って来た人の多くが、一時的な記憶喪失になっていること。

ミサトさんなど、一部の人が戻って来ていないこと。

それらのことを話すだけで、1日が過ぎてしまった。

一通り話が終わった後、僕は問いかけた。緊張の一瞬だ。

「アスカは、体力が落ちているけど、入院するほどではないらしいんだ。」

その気になれば、明日にでも退院出来るけど、どうする。」

（アスカ、大好きだ。また、一緒に暮らしたい。）

アスカは暫く考えた後、こう答えた。

「そうね。おうちに帰るうかしら。ミサトにお帰りって言ってあげないかね。」

僕の顔は、一瞬綻んだように感じたが、直ぐに困惑を浮かべた顔になった。

「ミサトさんが戻らないと、僕と二人きりになるんだけど、それでもいいの。」

(まずい、何て事言ってしまったんだ。僕はバカだ。)

言った後に、しまったと思ったが、アスカはこう答えてくれた。

「ミサトの家族はアタシ達しかいないでしょう。」

ミサトが戻るまで5年でも10年でも待ちましょう。

それが家族っていうもんよ。」

僕は、それを聞いて、泣きだしてしまった。

アスカは驚いた顔をしていたけど、どうしても泣きたくなくなった。

こうして、翌日からアスカと僕の同居が再開された。

プロローグ（後書き）

あとがき

この作品は2004年8月20日頃閉鎖した「Hunt EVE」で掲載していたもので、EOE後の物語です。

タイトルから分かるように、LRSやLMSなどではありませんが、あまりラブラブしないので、LASとも言い切れません。ややLASといったところでしょうか。

主人公はシンジで、主にシンジの視点で話が進んでいきます。各話にサイドストーリー（「話補完」）がつくことがあり、そこではアスカなどシンジ以外の視点での話が進んでいきます。たまに例外はありますが。

なお、シンジは成長はしていきませんが、最後まで少し情けないままです。人間、そんなに急に変わるものではないからです。

一方、アスカは使徒戦では豊富な経験が却って邪魔になり、本来の力を出せなかったということになっています。精神崩壊についても、アスカの心の弱さのみが原因ではなく、使徒の攻撃が大きな原因ということになっています。また、アスカの過去には影の部分もあるというマイナス面もあるという設定にしていますが、アスカはあらゆる方面でかなりの才能を見せます。あまりに常人離れしていて、シンジとは全然釣り合いが取れないので、強引な設定を作って無理やりシンジとくっつけているような感じに思えるかもしれませんが、その点は返す言葉が無いのでご容赦を。

ちなみに、この話の約20年後が「蒼い瞳のツインズ」の世界になりますので、LAS好きの人は比較的安心して読めるのではないのでしょうか。

第1話 記者会見（前書き）

第1部 婚約に至る道

カメラのフラッシュが眩しい。

何で僕はこんなところにいるんだらう。

カヲル君の遺影を胸に抱いて…。

父さんや冬月副司令がいる。

アスカやトウジもいる。

アスカは、綾波の遺影を抱えている。

第1話 記者会見

「こりゃ、バカシンジ！だましたな〜！」

「ち、違つよ。本当に知らなかつたんだよ。信じてよ。」

「うるさ〜い！バカシンジ！」

言うが早いか、シンジの頬に真っ赤な紅葉が出来ていた。

（くすん、アスカつたら、酷いよ。アスカの馬鹿！）

と思つてはみたものの、アスカには何も言えないシンジであつた。

シンジとアスカは、我が家に戻つてきたが、冬月副司令から呼び出しがあり、ネルフ本部に行くことになつたのだ。

しかも、アスカは、いったん病院に行くようにとの指示だったため、アスカの怒りが爆発した。

朝9時に退院し、10時に我が家に戻つたのに、12時までには病院に行かなくてはならないのだ。

病院から苦労してようやく帰つてきたのだから、アスカが怒るもの無理からぬことであつた。

ただ、怒りの矛先には問題があつたのだが。

苦労して病院へ行くと、待ち構えていた看護婦の手によつて、アスカの顔左半分に包帯が巻かれた。

未だにアスカの左目には視力が戻らず、眼帯をしていたのだが、その上から包帯をぐるぐる巻きにされたのだ。

後で聞いた話では、アスカの顔が公になるのはまずいと碇ゲンドウが判断したためだという。

頭全体にも包帯が巻かれ髪の毛が見えないほどになつたアスカは、車椅子に座らされた。

そして、シンジはアスカの車椅子を押して、発令所に向かつた。

発令所では、碓ゲンドウと冬月副司令、それに鈴原トウジが待っていた。

そして、冬月から、記者会見を行う旨説明があった。

冬月によると、ゼーレを叩き、ネルフを再建するためにはどうしても必要な事だという。

冬月は、『嘘を言う必要はない。思ったことを正直に言ってみなさい』と言ってくれた。

アスカとトウジは首を縦に振ったが、シンジは少しためらった後、カラルの遺影と一緒にならという条件付で最終的に折れた。

記者会見の場は、異様な雰囲気にも包まれていた。

最初にエヴァンゲリオンと使徒との戦いの記録が上映され、記者達は戦慄を覚えた。

異形の者達とロボットとの戦いに、恐怖を感じる者も多かった。次にパイロットの紹介が行われ、次の内容の文書が配布された。

『パイロットリーダー：中学3年生/女/エヴァンゲリオンパイロット
戦略自衛隊及びゼーレのエヴァンゲリオンに襲撃され重傷を負う。』

『ファーストパイロット：中学2年生/女/エヴァンゲリオン零号機
専属パイロット
戦略自衛隊の襲撃を受け戦死。』

『セカンドパイロット：中学2年生/女/エヴァンゲリオン弐号機
専属パイロット』

使徒との戦闘の際重傷を負い入院中。

サードパイロット：中学2年生／男／初号機専属パイロット
ゼーレのエヴァンゲリオンに襲撃され軽傷を負うが完治。

フォースパイロット：中学2年生／男／参号機専属パイロット
使徒との戦闘の際重傷を負うがほぼ完治。

フィフスパイロット：中学2年生／男／パイロット
使徒との戦闘の際戦死』

パイロットの紹介が行われると、記者達は驚いた。
あのような化物相手に子供達が立ち向かっていたとは、信じられない思いだった。

その時、一人の記者がどんな気持ちで戦ったのかを質問した。
車椅子の少女は、『人類の存亡をかけて戦った』と胸を張った。
これを聞いた記者達は感動した。

しかし、気弱そうな少年は、『戦いたくなかった、命を奪うのは嫌
だった、何度も何度も逃げ出した』と涙を流した。

少年は、『遺影の少年少女が自分を助けるために犠牲になった』と、
声を殺して泣いた。

これを見て、記者の多くは胸を詰まらせた。

そして、戦略自衛隊がネルフの職員をむごたらしく虐殺していった
記録が上映された。

投降する者や逃げる者に容赦なく浴びせられる銃弾。命乞いをする
者を笑って撃ち殺す兵士。

阿鼻叫喚の地獄絵だった。最後に、うずくまっている少年に兵士が銃を突きつける場面が映った。

この時、記者からどうして助かったのかと質問があった。気弱そうな少年は、『家族が助けてくれたんです』、と小さな声で答えた。

その人の話を聞きたいと、記者が尋ねた。

少年は、またもや小さな声で、『殺されました』と答えた。そして、声を殺して泣き始めた。

さらに、『この遺影の少女もきつと殺されたんです』、と車椅子の少女が呟き、涙を流した。

記者達は、少年少女達の過酷な運命を知って、言葉を失った。

最後に、ゼーレのエヴァシリーズと弐号機の戦いが上映された。

食い散らかされた弐号機を見て、何人もの記者が嘔吐感を覚えた。サイドインパクトの瞬間の映像には、誰もが見入った。

上映が終わると、冬月が概略を説明した。

少年少女達が、使徒と呼ばれる化物達相手に命懸けで戦ったこと、同じ人間に命を狙われ大きなショックを受けていること、

ゼーレの狙いがサイドインパクトを起こすことであったこと、

少年少女達の活躍でサイドインパクトによる人類滅亡が阻止されたがその原因まではわからないこと、などである。

冬月の説明の後、記者から質問があった。

ネルフの説明だと、ゼーレが一方的に悪いように聞こえるが、それは真実なのかと。

これには、シンジの怒りが爆発した。

シンジは質問した記者に飛び掛かり、襟首をつかんで絶叫した。
「彼が何をした！あの子が何をした！二人とも僕の為に命を捨てたんだ！そのどこが悪い！
なぜ殺された！教える！彼らのどこが悪いんだ！教えてくれよ！」
記者は反論出来なかった。

するとそれまで黙っていた少年がすつくと立ち上がった。

「ワイは馬鹿だからわからへん。教えてくれや。

あの女の子は、戦って戦って戦い抜いて、死んでしもうた。

あの子は戦った後はいつも傷だらけやった。

怖かったろうに、使命だからと言って決して逃げへんかった。

そんなにしてまで化物達と戦こうたのに、最後には人間に殺されてしもうた。

一体あの子は何のために生まれてきたんや。誰か教えてくれや。

あの子が何をしたんや。何か悪いことをしたんか。頼むから教えてくれや。」

そう言つて少年は頭を垂れて泣いた。

暫く静寂が会場を支配していたが、それまで二人の様子を見ていた車椅子の少女が、マイクを握り静かに語り始めた。

「私は、幼い頃から厳しい訓練に耐えてきました。

心も体もぼろぼろになりながらも歯を食いしばって頑張りました。

この世に地獄をもたらすと言われる使徒達と戦うためです。

私は幼い頃から生き地獄の中で育ってきました。

ですから他の人に同じ思いをさせたくなかつたのです。

私は人類の未来を切り開くため命懸けで戦いました。

どんなに苦しいことがあっても耐え抜いてきました。

ところが本当の地獄をもたらそうとしたのは、あろうことが同じ人間だったのです。」

そこまで言うと、少女の声は涙声になり、その瞳には大粒の涙が浮かんだ。

「同じ人間に裏切られ多くの仲間が殺されました。

私達は仲間を守るために人の姿をした悪魔どもと戦いました。そんな私達に非があるのでしょうか。

仲間の命を守るために戦うことは悪いことですか。」

少女は自らの体を次々に指しながら語った。

「私は、目をつぶされる痛みにも耐えました。

腕を碎かれる痛みにも耐えました。

はらわたを食いちぎられる痛みにも耐えました。

私はどんな痛みにも耐えられる自信があります。

でも…、死んでいった仲間を侮辱されるのだけは耐えられないのです！」

少女の頬には涙が止めどなく流れていた。少女は遺影の少女を指しながら語った。

「使徒と戦うために私は鬼になりました。

ですから私は何を言われても構いません。

地獄に行くのも当然だと思います。

ですがこの子は違います。

何度も何度も仲間の楯になってくれた本当に心の優しい子だったのです。

せめてこの子だけは気持ちよく天国に行かせてください。

せめてこの子のことだけは信じてやってください。お願いします。」

少女はそう言って頭を下げた。

会場は水を打ったように静かになっていた。

記者達は少女の手が震え、涙が床を濡らしているのに気が付いた。

静かな口調だが、少女の言葉には胸を打つものがあつた。

記者達は少年少女達がぐくり抜けてきた修羅場を想像し涙した。

もう、少年少女達の言葉を疑う者は誰一人としていなかった。

第1話 記者会見（後書き）

キャラ設定：惣流・アスカ・ラングレー

エヴァンゲリオン式号機専属操縦者。セカンドチルドレン。2001年12月4日生まれ。

ドイツ支部から転属。市立第壱中学に在籍する。明朗快活、スポーツ万能、容姿端麗、

頭脳明晰、資産家。本来は常人よりも遥かに強靱な精神力を持っているが、

第15使徒の強力な精神攻撃を受けて心を蝕まれ、壊されて、肉体にも変調をきたして入院する。

サードインパクトを境に性格が少し丸くなった…かもしれない。

キャラ設定：碇 ゲンドウ

ネルフ司令。1967年4月29日生まれ。碇シンジの父親。

シンジのことは気にかけているが、妻のユイに会うため、他の全てを切り捨ててきた。

サードインパクト後、今までのシンジへの対応を後悔するようになったが、シンジへの態度は変わらない。

しかし、アスカへの対応など、シンジから見えないところでの対応は、今までとは変わっている。

なお、ユイへの想いはまだ強い。

キャラ設定：パイロット（＝チルドレン）

パイロットリーダー：アスカが変装した姿。

ファーストパイロット：綾波 レイ。現時点では行方不明。シンジ、ゲンドウ、冬月以外の人間には、

レイは戦略自衛隊の襲撃を受け戦死したと説明している。

セカンドパイロット：アスカ。但し、アスカがセカンドであったことを覚えているのは、ネルフ内でも数名。

サードパイロット：シンジ

フォースパイロット：鈴原 トウジ

ファイフパイロット：渚 カヲル

第1話補完 記者会見その後

記者会見が終わった後、シンジ達は休憩室へ行くことになったが、その間に、アスカはシンジに色々聞いてみた。もちろん、アスカの知らない遺影の少年のことだ。

だが、シンジは教えなかった。

アスカが、なだめても、すかしても、脅しても、何を言っても教えなかった。

アスカはとうとうあきらめて、他の人に聞くことにした。

一方、トウジは何でも話した。

今まで入院していたこと、右足が駄目になったこと。

だが、それを聞いた途端、シンジの顔が青ざめたが、サードインバクトの後、

奇跡的に足が元通りになったことを聞いて、シンジの顔がぱっと明るくなった。

「良かった、トウジ。本当に良かった。」

シンジはそう言って泣きだした。

アスカはそれを見て、『フン、何て泣き虫な奴。』と言ったが、アスカは知っていた。

シンジは、自分のことでは滅多に泣かない。それがシンジの良い所であることを。

そしてお互いの近況を話し合った。

トウジがアスカ達が一緒に住んでいることをからかったので、アス

カがゲンコツ一発で黙らした。

左手でもアスカのゲンコツは威力があつた。

トウジはちよつと涙目になつたので『ヒカリがない位で泣き虫になるな!』とアスカが言つたら、本当に怒つた。

それを見たアスカは、『こりゃあ、ヒカリに脈があるわね。』と呟いた。

そんなこんなで、シンジ達は休憩室へと入って行つた。

第1話補完 記者会見その後（後書き）

キャラ設定：鈴原 トウジ

フォースチルドレン。2001年12月26日生まれ。いつもジャージ姿。

シンジとケンスケの3人でよくつるんでいる。市立第壱中学に在籍する。

片足を無くしたが、サイドインパクトの後、奇跡的に元通りになった

第2話 紅い瞳（前書き）

（ト、トウジの馬鹿。そんなこと言ったら、アスカが怒るだろう。止めてくれよ。被害に遭うのは、僕なんだから。）

第2話 紅い瞳

「何よ、シンジも鈴原も涙見せちゃって。全く情けないわね。」

「そういう惣流かて泣いてはったくせに。よう言っわ。」

「涙は女の子の特権よ！そんなこともわからないの！」

「はいはい、惣流の演技にはかなわへんな。わいかて騙されてもうたしな。」

「あつたり前でしょ。あれ位の演技は、女の子ならお茶の子さいさいよ！」

「ま、そもそもアンタ達とは頭の出来が違うしね！」

記者会見の後、ネルフのとある休憩室に戻ったシンジ達3人は、テレビを見ながらくつろいでいたが、いつの間にかアスカとトウジが言い合いを始めていた。

アスカにとっては、男の子が泣くのは情けないことらしい。

しかも、シンジならまだしも、あのトウジが泣いたのだ。

アスカにしてみれば、トウジに絡むことがつつぶん晴らしに丁度いいようだ。

一方のトウジにも言い分はある。

普段のトウジなら泣くなんて考えられないのだが、綾波の遺影を見て、感情の高まりを抑えられなかったようだ。

トウジにしてみれば、悲しい時に泣くのは当然らしい。しかも、他人のために泣くものだから。

とはいえ、二人の言い合いは、テレビがネルフのニュー・スを放映するまで続いた。

あの記者会見の後、またたく間に世界中にニュー・スが広まった。

最初にインターネットでネルフの記者会見の様子がコメント抜きで公開された。

後に様々なコメントが追加されていくのだが、最初は、記者会見のナマの様子が知らされた。

次に、テレビの特番が放映された。

その切り口は様々だったが、

「使徒という化物達と戦う少年少女達」、

「ゼーレという悪の組織と戦った少年少女達」、

「人間に仲間を殺され、悲嘆に暮れる少年少女達」

というのは各社共通のものだった。

各社のニュー・スは、概ねネルフに好意的なものだった。

元々、碇司令らが、ゼーレや使徒に関する情報を全世界に公開していたことに加え、

記者会見におけるシンジの怒り、トウジの涙、アスカの涙といったものが、

記者達の心を打ったことが大きく影響していた。

特に、アスカの涙の効果は絶大だった。

年端もいかない少女が苦しみに耐えて戦い、ぼろぼろの体になったのだ。

その少女の流す涙を疑う者などいるはずが無かった。

ましてや、少女はケガの痛みよりも疑われることの心の痛みの方が

強いと言って涙を流したのだ。

これは、シンジやトウジの顔にモザイクをかけて放映することになっていたことも関係するのだが、

どのテレビも、アスカの言葉や姿を繰り返し流した。

アスカの憂いを帯びた『紅い瞳』に誰もが見入った。

こうしてアスカは一躍有名人となった。

その後、1年近くもの期間にわたって、「紅い瞳の少女は誰だ？」

というような特番が放映されることになり、いずれも高視聴率を記録するのだった。

その頃、司令室にて、碓ゲンドウと冬月副司令がにこやかに談笑していた。

「碓、記者会見はうまくいったな。」

「ああ。シナリオ以上にな。」

「アスカ君の涙があれほど効果があるとは、

驚いたよ。彼女には、いずれお礼をしなくてはいけないな。」

「必要な時に力を貸す、それだけで充分だ。」

「そうだな。我々が礼を言っても戸惑うだけだろう。」

しかし、碓、彼女のセリフはアドリブか。とてもそうは思えないのだが。」

「だが、事実だ。」

「彼女が得意なのは理数系だけではないということか。しかも母国語でなしにあれだけ言えるとはな。」

しかも、『紅いコンタクト』を付けたのは、彼女の機転だということじゃないか。

将来、優れた女優になるかもしれんな。

実は、広報部が彼女を欲しがってな。このままネルフ本部にとどまってくれるといいのだが。」

「シンジがいる。問題ない。」

「そうだいいが、まあいい。ゼーレはどうする。」

「あの男に任してある。問題ない。」

「となると、資金の問題が大きいな。ゼーレの後ろ楯が無いのは痛いな。」

「技術を売ればいい。問題無い。使徒の脅威もある。」

「まさか、碇、使徒の脅威を種に国連から金を引き出すつもりか。それはまずいぞ。使徒が来ませんでしたではすまなくなるぞ。」

「来ないという保証はない。15年の間があったという事実もある。」

「碇、お前もずるいな。シンジ君に全てを押しつけるつもりだな。」

「フツ、問題ない。」

こうして二人は、今後のネルフの方針を固めていった。

ゼーレに対しては、マスコミを使ってその力を削ぎ落とし、殆ど無力化したため、

諜報部を中心にして、関係者の逮捕・拘束を行っていく。

Evaシリーズについては、製造に使用した一切合切の施設を接收する予定だ。

資金面では、国連から使徒の脅威を種に資金提供を続けさせ、更にEva関連の技術を売ることなどによって、従前と同様の資金を手当て出来る見込みである。

今までは、使徒が破壊の限りを尽くした後の復興にかなりの資金を割かれていたため、

今後使徒が来なければ、従前よりも資金は潤沢になるはずだ。

Evaについては、初号機と式号機が行方不明であるが、ゼーレのEvaシリーズを改造し、

新初号機、新式号機、新参号機、新四号機を本部に、新伍号機以降は、アメリカ、ドイツ、中国、エジプト、ブラジルの各支部に配備する予定である。

要は、大陸ごとに1機配備するというものだ。

ただし、ユーラシア大陸は広大なため、ドイツと中国の2カ所配備することにした。

実は、今でも中国、インド、ロシアのどこに配備するか揉めており、中国配備については仮決定である。

チルドレン達の処遇だが、基本的には今までと変わらない。

シンジが新初号機に、アスカが新式号機に、トウジが新参号機に搭

乗する。

新四号機は、パイロットが決まるまで、予備機とする。

訓練は、当面はシンジとトウジが行い、アスカは体調が回復してから合流する。

人事についてだが、行方不明のリツコの代理でマヤが技術部長代行となり、

同じく行方不明のミサトの代理でマコトが作戦部長代行となった。

人材の補充については、ゲンドウと冬月で意見が別れたため、保留となった。

他支部の影響を排除するため、あくまで日本人での補充にこだわるゲンドウと、

速やかな機能回復を優先するため、他支部の人材を受け入れるべきだと考える冬月とが対立したのである。

組織全体についてだが、二人とも、戦略自衛隊の解体と一部ネルフへの組み込みを考えていた。

実際に人間に攻め込まれたらひとたまりもない現状を何とかすべきと考えたのだ。

しかし、これについては、相当時間がかかることが予想されたため、持ち越しとなった。

さて、休憩室でのんびりとテレビニュースを見ていたシンジ達の中に、日向作戦部長代行が訪れた。
伊吹マヤ技術部長代行も一緒だ。

「みんな、今日はご苦労さま。これから、今後のことを話すので、

よく聞いて欲しい。」

そう言うと、日向は今後のシンジ達の処遇について、話し始めた。

まず、アスカだが、マヤから頼みごとがあるため、マヤの指示にしたがってほしいとのことだった。

ゆっくり休めると思っていたアスカは、当然のごとく不満気だったが、

マヤが『アスカを見込んで頼みがある』と言うので、渋々承知した。

次にシンジだが、新初号機が何とか動作するまで時間がかかるため、自宅待機となった。

当然アスカのサポートを行うことになる。

マヤが『アスカの言うことを何でも聞いてあげて』と言うので頷いたが、

その時にアスカがニツと笑ったことに気付き、背筋が少し寒くなった。

最後にトウジだが、病み上がりのため、ネルフでリハビリをする傍ら、Evaの訓練も同時平行で行うことになった。

これは、トウジがシンジやアスカと比べてEvaの訓練時間が短いためであり、少しでも二人に追いつく必要があったからだ。

「以上だが、何か質問はあるかい。」

日向が尋ねたが、3人とも質問はなく、その場で解散となった。

「シンジ、惣流の尻に敷かれちゃあかんで。気いつけや。」

「そ、そんなことないよ。いやだな、トウジったら。」

（ト、トウジの馬鹿。そんなこと言ったら、アスカが怒るだろう。止めてくれよ。被害に遭うのは、僕なんだから。）

シンジはアスカの方をちらりと見たが、特に怒った様子はなく、シンジは胸をなでおろした。
さすがに、アスカがこれからシンジをこき使おうと考えていることなど、思いもよらなかった。

第2話 紅い瞳（後書き）

キャラ設定：伊吹 マヤ

ネルフ技術部所属。階級は一尉。赤木リツコにあこがれている。
サイドインパクト後、技術部部长代行となる。

キャラ設定：日向 マコト

ネルフ本部のオペレーター。サイドインパクト後、作戦部部长代行となる。

葛城ミサトにあこがれている。

第2話補完 冬月の頼み

チルドレン達が解散した後、シンジはマヤの所へ行ったため、アスカは一人休憩室でシンジを待っていた。
そこに、冬月がやって来た。

「あ、副司令。どうしたんですか。」
アスカが尋ねると、冬月は優しい笑みを浮かべて言った。

「実は、アスカ君にお願いがあつてね。シンジ君のことなんだが。」

「碇シンジですか。」
アスカは何のことかと頭を捻った。

「シンジ君の精神状態は、今は極めて不安定な状態なんだよ。
だから、アスカ君に側に付いて欲しいんだ。」

「精神状態が不安定？彼がですか。」
アスカはまたもや頭を捻った。

「そうか、アスカ君は知らなかったね。」

冬月は、そう言ってシンジに最近起きた出来事を語りだした。

アスカが使徒の精神攻撃を受けた時、シンジが出撃を願い出たが却下されたこと。
綾波レイのクローンがリツコに破壊されるのを見て強いショックを受けたこと。

アスカが行方不明になって心配したこと。

「ファイフスチルドレン」最後の使徒と仲良くなったこと。その使徒を握りつぶして倒したが強いショックを受けたこと。シンジを助けてミサトが死んだらしいこと。ズタズタにされた弍号機を見て気が狂いそうになったこと。サードインパクトが起きた時カヲルやレイに別れを告げて戻ってきたこと。アスカに嫌われているかもしれないと思い込んでいること、などであつた。

「私の知らない間に、彼にはそんな事があつたんですか。」
アスカはあまりにもシヨッキングな出来事がシンジに起こつたことに、驚きを感じた。

「ああ、大人でもあれだけのことがあれば、普通ではいられないだろう。」
ましてや、あのシンジ君だ。精神的にかなり参っていて、不安定なはずだ。」

「でも、私の前では、そんな素振りは見えませんでした。」

「逆に言えば、アスカ君の前では精神が安定しているということだよ。」

「にわかには信じにくいのですが。」

「シンジ君はアスカ君のことを愛している。それが理由だ。」

「は？彼は、私のことが好きではありません。」

私は彼に厳しく接して来ました。

ですからそのような感情が生じることは有り得ません。」

アスカはそう言いながら、今までシンジに対して行ってきた仕打ちを思い出していた。
機嫌の良い時はこき使い、機嫌の悪い時は八つ当たりをし、当たり散らし、酷いことばかりしてきたと自覚していた。

「シンジ君は、サードインパクトが起きた時、天国とも言える場所に辿り着いた。

誰もシンジ君を傷付けず、他人を傷付けることのない、シンジ君にとっては、正に天国と言っても良い所だった。

しかも、レイ君やカヲル君がいた。

しかし、シンジ君は自分にとって、地獄とも言えるここに戻ってきた。

他人に傷つけられ、他人を傷つける可能性があるここに。

他人の恐怖があるここに。何故だかわかるかね。」

「いえ…全くわかりません。

もし、そのような世界があつて、ファーストがいたなら、彼にはこちらに戻って来る理由は無いと思います。」

アスカには本当に分からなかった。

「本当に分からないのかね。」

「はい…。」

「では、言おう。その天国には、アスカ君がいなかった。それが全てだよ。」

「う、嘘…。それじゃあ、彼は…。ま、まさか、そんなこと…。有

り得ません。

私は、彼に酷いことばかり言ってきました。ですから、そんなことは…。」

「無いと言っのかね。」

では、サードインパクト後、シンジ君が目覚めた時に、アスカ君が側に居た。

これをどう説明するのだね。」

「えっ！」

アスカにとって、それは初耳だった。

アスカには、サードインパクト後の記憶は、病院から始まっているからだ。

「信じられないかもしれない。だが、事実だ。」

「で、でも…。」

「シンジ君は、天国からいわば地獄に戻ってきた。

戻った時に、アスカ君が側にいた。

そして、シンジ君は今もアスカ君の側にしようとしている。分かるね。」

アスカは、自分が目覚めた時のシンジの顔を思い出した。シンジは涙を流して笑っていた。

「そのことは否定出来ませんが、しかし、彼は私を家族のように思っているだけで、私を愛しているとはまでは言えないと思いますか…。」

冬月は、アスカの言葉に苦笑した。二人揃って何て鈍いのだろうと頭を抱えた。

そして、色々な言葉を駆使して、アスカを説得にかかったが、アスカはなかなか納得しなかった。

そこで、冬月は、シンジから聞き出した言葉を伝えることにした。

「ここだけの話だが、私はシンジ君に、アスカ君を好きなら、はっきり伝えなさいと言ったんだよ。そうしたら、シンジ君は何て言ったと思う。」

アスカは少し考えてから答えた。

「『誤解ですよ』とでも言ったんではないでしょうか。」

「いや、シンジ君は、

『僕はアスカに好きなんて言う資格なんか無いんです。』そう言っ
て泣いたんだ。」

「えっ、な、何で…。」

「シンジ君は、アスカ君に酷いことばかりしてきたと思っているんだよ。」

「だから、嫌われていると思っ込んでいるんだ。アスカ君と同じだよ。」

「そんな、馬鹿な。彼は、私に酷いことなんてしていません。」

「でも、シンジ君はそう思っているよ。実際、私にはそう言っていた。」

「そんな…。」

「シンジ君の思っていることは、誤解かね。」

「ええ、そうです。大きな誤解です。」

「では、アスカ君の思っていることも、誤解かもしれない。違うかね。」

「否定は…、出来ません。」

「アスカ君、この際だから、教えて欲しい。」

シンジ君のことが好きかね。それとも嫌いかね。」

アスカは少し考えたが、ゆっくりと答えた。

「嫌いじゃありません。」

ですが、好きと言い切れるかどうかは分かりません。すぐく気になる存在ではありませんが。

でも、私は彼に本当に嫌われていないんでしょうか。

私は、言いくいのですが、彼の優しさに甘えて、わがままばかり言って、彼を困らしてばかりいました。

自分のプライドを守るため、彼に八つ当たりをしたのも、一度や二度ではありません。

それなのに、彼は許してくれるのでしょうか。」

「それは私が保証しよう。アスカ君もそうだが、嫌いな人間と一緒に住みたいと思うかね。」

嫌いな人間のために料理なんか作るかね。良く考えれば分かることだよ。」

アスカ君が分からないということは、それだけ気持ちに余裕が無か

ったということかもしれないが。」

「そうですか。良かった。」

アスカはそう言うと胸をなで下ろした。

冬月はそれを了解と解釈し、言葉を続けた。

「分かってくれたかね。シンジ君にとって、アスカ君は特別なんだよ。」

だからといって、アスカ君にシンジ君を愛するようには強制出来ない。

ただ、シンジ君の精神が安定するまで側に付いて欲しいんだ。

そして、出来ることなら、少しでもいいから優しくしてあげて欲しい頼む。」

そう言うと、冬月は頭を下げた。

「副司令、そんな、やめてください。」

私と彼は、血が繋がっていないなくても家族です。

彼が否定しない限り、側にいます。

それに二人で約束したんです。

ミサトさんの帰りを待とうって。

ですから、頭を上げて下さい。」

そう言うと、アスカはにっこりと笑った。

冬月はその言葉を聞いて、顔に安堵の色が浮かんだ。

「アスカ君、勝手なお願いで申し訳ないが、本当に頼む。」

彼は、本当につらい経験をした。

彼が経験したことは、君の言う『生き地獄』よりも、さらに過酷なものだったんだ。

それを分かってやって欲しい。」

「分かりました。でも、私は自分の意思で彼の側にいるつもりです。安心して下さい。」

「そうか。安心したよ。」
冬月はにこりと笑った。

第2話補完 冬月の頼み（後書き）

キャラ設定：冬月 コウゾウ

ネルフ副司令。1958年 8月15日生まれ。

大学助教授時代に碇ユイとめぐり合い、それが縁で碇ゲンドウと知り合う。

南極にセカンドインパクトの調査に出たとき、同行したゲンドウからユイと結婚したと知らされ驚く。

顔や態度にこそ出さないが、アスカやシンジのことを常に気にかけている。

第3話 アタシをお風呂に連れてって(前書き)

(え、ア、アスカは何言っているの。アスカの体を拭く。えっ！
うれしいけど、何かありそうで怖いな。僕はどうしたらいいの。)

第3話 アタシをお風呂に連れてって

トウジと別れてから、やっとの思いで、住まいに辿り着いたシンジとアスカだったが、

既にアスカのお腹は空っぽになっていた。

「お腹空いた、お腹空いた。シンジ、早くご飯作ってよ。」

「はいはい。これから作るから、ちょっと待ってて。」
「そう言つとシンジは晩ご飯の準備を始める。」

「シンジ。その前にお風呂お願いね。」

「はいはい。アスカ、ちょっと待ってて。」
「そう言つて、シンジは風呂の準備をすると、直ぐに料理を始める。」

今日は、アスカの好きなハンバーグだ。

既にご飯はタイマーで炊いておいたので、味噌汁とサラダを作れば、後はハンバーグだけだ。

シンジは冷蔵庫から挽き肉を出すと、上手にこね始めた。

「シンジ。お風呂まだ。」

いい所でアスカの邪魔が入る。

だが、シンジは嫌な顔一つせずに風呂の湯加減を見る。

「アスカ、ちょうどいいよ。もう。入ってもいいよ。」

それを聞いて、アスカは風呂に入ろうとしたが、一瞬、動きが止ま

った。

「アタシ、どうやって入ればいいの？」

アスカは、自分の体が思うように動かないことをすっかり忘れていたのだ。

アスカは大いに迷った。

しょうがないから風呂に入らず、タオルで体を拭こうか。

でも、せっかく風呂が沸いているのに、もったいない。

とはいえ、シンジに入れてもらうのも恥ずかしい。

だが、そんなこと言ってられない。

その時、アスカに良い案が浮かんだ。

要は、シンジに裸を見られずに風呂に入れればいいのである。

アスカは、タオルで大事なところだけ隠せばいい、水着だと思えばいい、

そうすれば、シンジも意識しなくて済む、ウン、そうしようと結論を出した。

アスカは、さんざん迷ったが、結局、シンジに手伝ってもらったことにした。

この時、アスカは、自分が病院で寝ていた時にシンジが自分に何をしたのか、知らなかった。

このため、シンジのことを人畜無害な男の子と思っていたのである。もし、病院でのシンジの所業を知っていたら、アスカは決してこんなことを頼まなかっただろうし、

この後の展開もかなり変わっていたことであろう。だが、アスカは頼んでしまったのである。

「シンジく。こっちにきて〜。」

(まったく、アスカは人使いが荒いや。)

そう思いつつも、シンジは『はい』などと返事をしてしまう。惚れた男の弱みである。

シンジがリビングのソファで横になっているアスカの所へ行くと、アスカはさも当然というように言い放った。

「シンジ、小さいタオルを2枚持ってきて。」

「え、どこにあるのかわからないよ。」

(そんなこと急に言われても、アスカの部屋に何があるのかわからないよ。)

「じゃあ、アンタのでもいいわ。とにかく、直ぐに持ってきて。」

「わかった。ちょっと待ってて。」

(まったく、わがままな所は分かってないな。)

アスカに反論しても怒らせるだけだと経験則からわかっていたため、シンジは自分の部屋に行き、タオルを2枚持ってきた。

下手にアスカの部屋をいじろうものなら、どんなとばっちりに遭うかわかったものではないからだ。

「これでいいかい。」

(早くしないと料理が作れないよ。まったく、アスカときたら、わがままなんだから。)

「ありがと。ちょっとあっち向いて待ってて。」

シンジは、頭を捻りながらも、言う通りにした。
しばらく「そごそ」という音がしていたが、まもなくすると止んだ。

「いいわよ、こっち向いて。」

その声に振り向くと、なんと、アスカが裸になっていた。

シンジが渡したタオルは胸と腰に巻いてあるが、それ以外は、肌が丸見えである。

しかも、アスカの胸が大きいのと、シンジが持ってきたタオルが小さいことから、

アスカの胸が今にも見えそうな感じである。

シンジは思わず真っ赤になってしまった。

「ア、ア、アスカ、なんて格好してるんだよ。」

シンジの声は見事に裏返っていた。

「だって、しょうがないでしょう。」

アンタに運んでもらわなきゃ、アタシは風呂に入れないんだから。

それとも、アタシに服を着たまま風呂に入れて言うの？

四の五の言わずにさっさとアタシをお風呂に運ぶの！い・い・わ・ね！」

アスカは相変わらず命令口調である。

本当はアスカも恥ずかしいのだが、アスカが恥ずかしがっていると、シンジが余計に意識してしまうことが分かりきっているため、アスカはあえて強がって見せているのだ。

「う、うん、わかったよ。その代わりに、目を閉じているよ。」

（目なんか開けてたら、スケベって言われちゃうだろうな。）

「ア、アンタ、バカア？」

アタシが目を閉じたら、アタシを運ぶ時に転ぶかもしれないじゃない。

アタシが落ちてけがでもしたらどうするの。

ハハアーン。さては、わざと転んで、その隙に私のタオルをうまくはぎ取るうって魂胆ね。

シンジったら、本当にドスケベね。」

「ご、誤解だよ。そ、そんなことないよ。」

(えっ、そう来るの。あちゃあ、読み違えたか。)

「だったら、さっさと運ぶ。風邪ひいちゃうでしょ。」

「わ、わかったよ。」

シンジはこれ以上抵抗しても無駄だと悟ると、ようやく観念し、アスカを持ち上げて風呂に運んだ。

「シンジ、ありがとね。また呼んだらすぐ来てね。」

「う、うん、わかったよ。」

アスカがにっこり笑って礼を言ったが、シンジはアスカを直視できずに、さっさとキッチンに戻って料理の続きをした。

(うーん、アスカは僕をからかっているのかなあ。

でも、アスカは風呂好きだし、アスカの言う通り、僕が運ばないと、アスカが風呂に入れないのも事実だし。

そうだよな、からかうなら、とつくに笑いだしているよな。

でも、笑ったアスカってやっぱりかわいいな。)

シンジは、アスカがからかっているわけではないと判断し、冷静になるように自分に言い聞かせた。

(でも、僕の前であんな姿になるなんて、僕のことを信じているのか、

それとも男だと思っていないのか、どっちなんだろう。

どっちにしても、あまりいいことじゃあないかな。

でも、こんなこと、ケンスケには絶対言えないな。

うらやましいって言われるだろうな。

でも、普通に考えると、いいことだよな。

女の子のあんな姿を見られるなんて。

しかも、アスカは性格を抜きにすればかわいいし、普通なら、あんな姿をお目にかかるなんて、滅多にないしね。

ぜいたく言ったら罰が当たるか。(

そんなことを考えていると、アスカからお呼びがかかった。

「シンジ〜。こっちにきて〜。」

シンジはお風呂に入ると、絶句した。

アスカの体は洗ったばかりのため、体中が濡れており、体に巻いた白いタオルが透けて見えていたのだ。

一瞬、目をそらそうとも考えたが、悲しい男の性が、いったん目に入ってしまったため、

目を離すことが出来なくなってしまったのだ。しかも、アスカは気付いていないらしい。

「シンジ〜。アタシを湯船に入れてよ〜。」

「う、うん、わかったよ。」

(風邪ひいちゃうと可哀相だから、素早く入れなきゃ。)

シンジは、アスカが風邪をひいてはまずいので、素早くアスカを持

ち上げ、湯船に入れた。

「シンジ、ありがとね。また呼んだらすぐ来てね。」
またアスカはにっこり笑う。

「う、うん、わかったよ。」

そう言うと、シンジはそそくさとお風呂から出た。

（うーん、怒らないアスカはアスカらしくないけど、笑顔のアスカはかわいいな。

どっちのアスカが本当のアスカなんだろう。どっちも捨て難いかな。）

そうこうしているうちに料理は出来上がった。

すると、見計らったようにアスカの声がした。

「シンジ。バスタオル持って、こっちにきて。」

シンジは言われた通り、バスタオルを持って行った。

すると、アスカはちよつと困った顔をしていた。

そして、さも申し訳なさそうな顔をして言った。

「シンジ、どうしようか。アタシのぼせちゃって、体を拭けそうにないの。」

でも、シンジはアタシの体を拭くなんていやだよね。どうしようかな。」

アスカは、久々のお風呂に喜んでしまい、ついっいのぼせてしまったらしい。

（え、ア、アスカは何言っているの。アスカの体を拭く。

えっっ！うれしいけど、アスカは何か企んでいそうで怖いな。

僕はどうしたらいいの。(

シンジは、固まってしまった。

第4話 素直になれたら（前書き）

（アスカがこれからもずっと、せめて今日位に優しいといいんだけどな。）

そうすれば、僕も余計な苦勞が減るし。

明日もアスカが素直になってくれたら嬉しいな。）

シンジはアスカの言う通りにした。

「次はバスタオルでアタシの頭を拭いて。」

「うん。」

シンジはアスカの言う通りに頭を拭いた。

「次は…、悪いけど、バスタオルでアタシの体を…拭いて。」

「うん。」

シンジは淡々と返事をし、アスカの言う通りに体を拭くことにした。もちろん、淡々と返事したのは、アスカのことを思いやつてのことである。

まずアスカの右に位置し、左腕でアスカの頭を支えると、アスカの体に巻いてあった2枚のタオルをそつと取り除いた。

シンジは鼻血が出そうだったが、強い精神力で耐えると、アスカの頭に置いていたバスタオルをつかみ、ゆっくりとアスカの体を拭いていった。

最初は背中から。次に肩、腕、胸、足先、太股の順番である。

シンジが太股まで拭き終わると、アスカの足が開かれた。

シンジはさつと太股の内側を拭くと、バスタオルをアスカの体に掛け、アスカの体を持ち上げた。

そうして、アスカの部屋まで運んで行った。

シンジは、ベッドの上の先程敷いておいた新しいバスタオルの上にアスカをそつと置いた。

すると、アスカは小さな声で言った。

「シンジ、アタシの下着とタンクトップを出して。」

「ええつ、アスカの下着の場所なんてわからないよ。どこにあるか教えてよ。」

「アタシが指さした所を探してみて。」
そう言って、アスカが指を指す。

シンジはアスカに言われた所を探して、アスカの下着をなんとか見つけ出した。
タンクトップも同様である。

「じゃあ、着せて。」

「うん。」
そう言うと、シンジは悪戦苦闘しながらも下着とタンクトップを着せる。

「ありがとう。嫌なことさせちゃって、ごめんね。でも、どうしてもお風呂に入りたかったの。本当よ。」

「僕は別に嫌じゃないから。気にしなくてもいいよ。」
シンジは、笑顔で答えた。

「アンタ、今日は優しいのね。」

「あはは、そうかな。」

（う、いつも優しいのに、気付かないのかな。ちょっと悲しいな。）

「優しいついでに、明日も頼むわね。」

「えっ、明日も。」

（まさか、何かの罠じゃないよね。）

「もう、アタシの見ちゃったんでしょ。だったら、気にしてもしょうがないじゃないの。」

「でも…。」

（念のため、もう一回だけ断っておこう。そうしないと、スケベって言われそうだし。）

「そんなに嫌なの？アタシ嫌われちゃったのかなあ。」

「嫌ってわけじゃあないけど、アスカは本当にそれでいいの。」

（う、アスカ、ちょっと怒っているのかな。嫌がったのはまずかったかな。）

「だって、もう見られちゃったんだもん。今更格好つけてもしょうがないでしょ。」

「そうだね。わかったよ。」

（ま、まずい、アスカ怒らないで。）

「良かった。シンジ、ありがと。」

アスカは、にっこりと笑った。

「じゃあ、ごはん食べようか。」

（やっぱり、笑顔のアスカはかわいいや。いつも笑ってくれるといいな。）

「うん。」

アスカが返事をする、シンジはアスカを抱き上げ、キッチンへと運んだ。
やっと晩ごはんである。

アスカはテーブルに座らせてもらって、口を開いた。

「ねえ、シンジ、お願いがあるの。」

「ん、なあに。」

「アタシの利き腕がまだうまく動かないの。だから、ごはん食べさせて。」

「ええっ。」

（どうしたんだろう。今日のアスカは変だ。何かあったのかなあ。）

「驚かなくてもいいでしょ。アタシだって、頼みたくないんだから。でも、腕が思うように動かないんだから、しょうがないでしょ。」

「うん、わかったよ。」

アスカの頼みにシンジはまたもや折れた。

こうして、当分の間、シンジはアスカにごはんを食べさせることになってしまった。

「今日は、色々なことがあって疲れちゃったなあ。」
シンジは、一人呟いた。

シンジもようやく食事やら何やらの後片付けを終えて、布団の中にいた。

思うのは、やはりアスカのことである。

今日のシンジは、朝早くからアスカを病院に迎えに行き、

アスカを支えながらへとへとになって家に戻ったら、直ぐにネルフ本部まで呼びだされた。

ネルフへ行ったら、記者会見に駆り出され、それが終わったら、マヤの所へ寄ってアスカに渡す書類やらを受け取り、帰りもアスカを支えながら帰って来たのだ。

帰ったら、アスカに休む暇もなく、こき使われたのだから無理もない。

「でも、その後は、いいことが続いたよね。」
シンジは思い出しながらニコニコする。

最初は、胸と腰にタオルが巻いてある以外は、裸のアスカを見たこと。

シンジにしてみれば、生唾ものである。思わず前かがみになってしまった。

リッコがいれば『無様ね。』と言ったに違いない。

だが、シンジも普通の男の子。女の子の裸に興味があるし、見たいなとも思うのだ。

ましてや、アスカみたいな美少女ならば尚更だ。
シンジは思わず『何て綺麗なんだ。』と言う所だった。

次の幸運は、アスカの体を拭いたこと。

シンジは、あまりの幸運に恐ろしくなり、思わず断ろうとしたが、アスカが悲しそうな顔をしているのに気がついて、アスカの言う通りにしたのだ。

だが、結果的には、これがうまくいった。

下手に断っていたら、アスカの機嫌を損ねていただろうし、いい目も見れなかつただろう。

下手をすれば、暫く口も聞いてくれなかつたかもしれない。

(やっぱり、断らなくて良かったなあ。)

シンジはその時のことを思い出し、ニコニコしていた。

シンジの生涯で最良の日が来たのだから、無理もない。
彼女いない歴14年、女の子の裸なんて、雑誌やビデオなんかでしか見たことがなかつたのに、

今日は目の前で、ナマで、モロに見てしまったのだ。

実際は、風呂でマナの裸を見たり、病院で上半身裸のアスカを見たことがあるが、

チラリだったり、精神状態が不安定だったりで、しっかりと見たのは、今回が初めてだったのだ。

3番目の幸運は、風呂場での紳士的な態度にすっかり安心したアスカが、

シンジに下着を着せることまでお願いしてきたこと。

シンジが内心で飛び上がりながら喜んでのは言うまでもない。

ここで、シンジは悪戦苦闘するフリをして、普段は決して見ることができない所を中心に、

しっかり目に焼き付けていた。

アスカはのぼせて頭が朦朧としていたらしく、全く気付いた様子はない。

シンジの作戦勝ちである。これで、当分の間、オカズに困ることはないだろう。

（アスカの裸、本当に綺麗だったな。夢じゃないよね。本当だよね。）

シンジは未だに夢心地である。

シンジは、あまりの幸運に夢か幻かとも思ったのだ。

しかも、信じられないことに、アスカにお礼まで言われたのだから、疑うのも無理はない。

（裸を見せてもらって、お礼まで言われるなんて、僕は何て幸運なんだろう。）

やっぱり、今のアスカは、おかしいな。明日になったら元に戻っていたりして。

あはは。今日一日はラッキーデーで、明日は元に戻ったりして。（あくまで心配性のシンジであった。）

（しかも、明日も頼まれたんだよね。）

そうだ、明日も同じことをするように頼まれたのだ。

こんなに幸運が続くと、ほっぺたをつねりたくなるシンジであった。

（でも、こんなことになるなんて、ついこの間までは考えられないよね。）

シンジはアスカとの出会いから順に思い出していった。

初めて会った軍艦の上、

一緒にシンクロして倒した第6使徒、

ユニゾンの訓練、

マグマの中で死にそうになったアスカ、
レイとアスカと3人で倒した第9使徒、
死を覚悟した第10使徒、
N2爆弾から守ってくれたアスカ、
マナの代わりになってもいいと言ってくれたアスカ、
第14使徒に無残に敗れたアスカ、
第15使徒に心を攻撃されたアスカ、
廃人のようになったアスカ、
敵のエヴァに蹂躪されたアスカ、
サードインパクト後に隣にいたアスカ、
昨日やつと目覚めたアスカ。

シンジの脳裏に浮かぶアスカは、時には強く激しく、時には弱かったが、優しいアスカはあまり記憶にない。

（アスカだったら、今日は大胆だったけど、からかっている様子はなかったし、本当に具合が悪かったんだよね。

そうじゃなきゃ、僕に裸なんて見せるわけないもんね。

でも、明日が怖いな。今日のことを全部忘れて、身勝手なことを言いそうだな。

でも、その時はその時か。）

シンジはちよつと明日のことが心配になった。

（アスカがこれからもずっと、せめて今日位に優しいといいんだけどな。

そうすれば、僕も余計な苦勞が減るし。

明日もアスカが素直になってくれたら嬉しいな。）

（よし、明日は紳士に徹しよう。

これでアスカの信頼を得られたら、アスカの裸が毎日見られるんだ。

しかも、アスカに喜んでもらえる。

もしかしたら、アスカが素直になってくれるかもしれない。

こんなチャンスを逃がしちゃ駄目だ。
(

シンジは、決意を新たにしながら、ゆっくりと眠りに着いた。

第4話補完 アンラッキーデー

その夜、アスカは先程までのことを思い出していた。

（全く、参ったわね。シンジに裸を見られるなんて。

あいつが悪いんじゃないから、怒ることも出来ないし。最悪ね。

今日は、アンラッキーデーってところかしら。）

アスカは、利き腕がうまく動かないため、体を洗うのに時間がかかり、体が冷えてしまったのだ。

そこで、冷えた体を暖めようと思って、長風呂にしたのだが、今度のはぼせてしまったのだ。

そう、決してシンジを誘うためではなかったのだ。

（シンジはアタシの裸を見て幸せよね。

その割には、あまり喜んでるようには見えなかったけど。

アイツ、少しおかしいのかしら。

それとも、優しいからかなあ。

それともお子様なのかしら。

でも、アタシって変わったわね。

以前なら、アイツのこと優しいなんて思わなかったのに。

何でかなあ。）

アスカは自分の変化に気付き始めていた。

（アイツったら、アタシが笑ったら、ニコニコしてたわね。

アタシが怒ると、引きつった笑いをするくせに、あんないい笑顔も出来るんだ。

考えてみたら、アタシはアイツに嫌な事をみんなやらせてたわよね。

掃除に洗濯、料理に炊事。

それに買い物に付き合わせたり引き回したり。

アイツ何で嫌がらないんだろう。

アタシの事好きなのかな。

それとも、家族だと思っっているからかな。
どっちなんだろう。

気になるけど、本人には聞きづらいな。

確率的には五分五分かな。

でも、アタシもアイツのことどう思っているのか、良く分からないから、アイツも同じかもね。)

アスカはシンジのことを異性として意識し始めていた。

(今日は、少し優しくしたつもりだけど、わかってくれたかな。

以前だったら、ありがととか、ごめんねとか言わなかったもんね。
やっぱり、もうちょっと優しくしてあげようかな。

あんな笑顔がこれからも見れるといいな。

そうだ。明日からは、シンジがいいことしたら、お礼を言おう。

アタシが悪いことしたら、ちゃんと謝ろう。

それだけでも結構違うわよね。

えっと、でも、それって、良く考えたら当たり前のことじゃないの。

何でアタシったらそんなことも出来なかったんだろう。

はあ、自己嫌悪。アタシって、性格悪いのかしら。

そう言えば鈴原の奴がアタシのこと性格ブスとか言ってたわよね。
かなり当たっているじゃない。

まあいいわ。過ぎたことをとやかく言ってもしょうがないし。

前進あるのみ。

そうじゃなきゃ、アタシじゃないわ。)

アスカはそんなことを考えながら、ゆっくりと眠りに着いた。

第5話 悪夢（前書き）

（アスカ。いくらなんでもまずいよ。僕は狼になっちゃうかもしれないんだ。）

第5話 悪夢

(あれ、ここはどこだ。)

シンジは、暗闇の中で、一人立ちすくんでいた。

「僕は何でこんなところにいるの。」

しかし、シンジの問いかけに、誰も答えない。

遠くに、何か白い物が見えた。シンジはそれに向かって歩いて行った。

シンジは白い物に近づいていく。

「一体あれは何なんだ。」

まだ遠くて分からない。

「あれは何だ。何か嫌な予感がする。」

しかし、まだ見えない。シンジは走り出す。

「あれは一体何だ。何で胸騒ぎがするんだ。誰か答えてよ。」

しかし、答えは返って来ない。

シンジは何故か恐怖を覚えた。

「誰か教えて。あれは何だ。」

すると、急に視界が開けてきた。

白い顔をした量産型のEvaがニヤツと不気味に笑っていた。その口には、ちぎれた内臓がくわえられていた。

「まさか！」

シンジは駆け寄った。

「まさか！まさか！まさか！」

シンジは叫んだ。

だが、白いEvaは飛び去って行った。

後には、肉塊が残されていた。

その肉塊の中に、シンジは、見慣れた物を発見した。

「嘘だ！」

シンジは力なく膝から崩れ落ちた。

シンジは肉塊の中にボロボロになった赤いプラグスーツを発見したのだ。

「アスカア！」

(良かった。あれは夢だったんだ。)

シンジはほっとした。だが、その時、再びシンジの耳を絶叫が襲った。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
！」

アスカの声だ。

シンジは飛び起きて、アスカの部屋に飛び込んだ。
アスカは寝ていたが、酷くうなされているようだ。
そして、苦悶の表情を浮かべている。

シンジはアスカの側に寄って、アスカの様子をうかがった。
その時、再びアスカが叫んだ。

「シンジ！」

その声にシンジは驚いて動けなくなった。

「シンジ！」

アスカは飛び起きて、シンジに抱きつく。

「シンジ！シンジ！シンジ！シンジ！シンジ！シンジ！」

アスカは、シンジを強く抱きしめた。

そこで、アスカの目が覚めた。

目が覚めても、アスカはシンジに抱きついていていた。

目からは大粒の涙を流していた。

「アスカ、どうしたんだよ。落ち着いて。大丈夫だから。」
シンジは優しく言う。

「うわぁ〜ん。シンジ〜、怖かったよ〜。うわぁ〜ん。」

アスカは泣きじゃくる。

「アスカ、怖い夢を見たんだね。でも、もう大丈夫だよ。安心していいよ。」

シンジは、『精神的にかなり不安定になっている。』という冬の言葉を思い出した。

「シンジのバカ！何でもっと早く来ないのよ！怖かったんだから、本当に怖かったんだから。もっと早く来なさいよ！」

「アスカ、ごめんね。怖い夢を見たんだね。でも、もう大丈夫だよ。」

シンジの優しい声にアスカは徐々に落ち着きを取り戻した。

「あのね、白い奴が襲ってきたの。」

アタシ逃げただけよ、追いつかれて。

怖かった、本当に怖かったの。本当に、死ぬかと思った。」

「そうか、でも大丈夫だよ。奴らはもういない。心配しなくていいよ。」

シンジはそう言って微笑む。

だが、アスカはまだ震えている。

「ねえ、シンジく、お願いがあるの。」
アスカは少し震える声で言う。

「どうしたの、アスカ。」
シンジもアスカの様子が変なのに気付き、優しく聞く。

「怖いから、一緒に寝て欲しいの。」

「ええっ！」

シンジは固まってしまった。

「ねえ、お願い。本当に怖い。何でも言うこと聞くから、お願い。」
アスカも必死である。怖い夢を見た後なので、不安でたまらないのだ。

だが、シンジは考え込んでしまった。
つい先程まで、アスカの裸を思い出してニヤニヤしていたのだから無理はない。

今一緒に寝ると、シンジの理性が保たれるかどうか、自信が無かったのだ。

ためらうシンジを見て、アスカは驚くべき行動に出た。

アスカはシンジを布団の中に引きずり込むと、ためらわずにタンクトップを脱ぎ捨て、
下着1枚の姿になり、シンジに抱きついたのだ。

「シンジ、お願い、見捨てないで。」

アスカは涙を流して懇願した。

こうなると、シンジは断れない。

アスカの頼みに従い、シンジは、アスカを抱きしめた。

シンジは上半身に何も身に付けていなかったため、心地よい温もりが感じられ、

それがより一層アスカの心を和ませた。

いつの間にか、アスカの目が閉じられていて、シンジの顔の近くにあった。

シンジは、アスカを優しく抱き、そつとキスをした。

シンジの背中に回されたアスカの腕にも力がこもった。

5分にもなるうかという長いキスの後、名残惜しそうに二人の口は糸を引いて離れた。

二人とも舌を絡めるキスは、初めてだった。

既にシンジの頭は真っ白である。

アスカの頭もとろけそうになっていた。

「シンジ、お願いだから、後ろから抱きしめて。」
アスカの求めに応じて、シンジはアスカの後ろから抱きしめる形をとる。

「シンジって、あったかい。いつまでもこうしていたいな。」

アスカはそう呟いた。そして何気なくシンジの右手を取り、自分の左胸に当てる。

シンジの手のぬくもりに安心するアスカ。

だが、納まらないのはシンジである。

シンジの理性による歯止めにも限界はあるのだ。

「でも、アスカ。僕も男だから、アスカに襲いかかるかもしれない

よ。それでもいいの。」

シンジが尋ねたが、アスカは微笑みながらこう答えた。

「アタシ、シンジのこと信じてるわ。だから、大丈夫よ。」

「でも、僕だって男なんだよ。どうなるか、わからないじゃないか。」

（アスカ。いくらなんでもまずいよ。僕は狼になっちゃうかもしれないんだ。）

「大丈夫よ。シンジは優しいもの。そんなことしないわ。アタシ、信じてるから。」

そう言くと、安心したようにアスカはすやすやと眠ってしまった。既に寝息も立てている。

（一体、なんなんだよ〜！）

シンジは叫びたかった。

いきなりいい雰囲気になったかと思えば、同じくいきなりアスカは寝てしまったのだ。

かといって、先程のアスカの悲鳴を聞いたシンジには、アスカに襲いかかることは出来やしない。

ましてや、アスカはシンジのことを信じてると言ったのだ。

その期待を裏切りたくはなかった。

せっかく、今日はいい雰囲気になったのだから、今後もこの雰囲気を大切にしたいかった。

（はああつ、僕は一体どうすりゃいいの。）

シンジの体の一部は熱を帯びていたが、シンジにはどうすることもできなかった。

今、左手はアスカの首の下を通しているため、動かしくい。

はつきり言つて、両手がふさがつて、何も出来ない状態である。
アス力を起こす気ならともかく、せつかく、すやすや寝ているアス
力を起こすような真似は、ためらわれたのだ。

(僕は、どうすりゃあ、いいんだよ。)

シンジの悲しい叫びが、心の中を木霊した。

ふと『無様ね。』と誰かが言ったような気がした。

第5話補完 アスカの悪夢

時は少し遡る。

「あれ、ここはどこ。」

アスカは、暗闇の中で、一人立ちすくんでいた。

「何故、アタシはこんなところにいるの。」

しかし、誰も答えない。

「ここはどこ、アタシは何でこんな所にいるの。」

やはり、誰も答えない。

「ここはどこ、誰かいないの。ねえ、誰かいるなら出てきてよ。」

しかし、誰も答える者はいない。

「カッン、カッン。」

遠くから、誰かが歩いて来る音がした。

「あなたは誰？ここはどこなの。」

その後ろから現れたのは…。

「シンジ！」

アスカはシンジに抱きつく。

「シンジ！シンジ！シンジ！シンジ！シンジ！シンジ！」

アスカは、シンジを強く抱きしめた。

そこで、アスカの目が覚めた。

第6話 地獄を選びし者

(しまったああああああああああああああああああ！)

シンジは、一人頭を抱えていた。

実は、シンジは、一旦は眠りについたのだが、夜中に目を覚ましてしまったのだ。

そこで直ぐに眠れば良かったのだが、シンジの体の一部が熱くなり、とうとう我慢の限界を超えてしまったのである。

その結果、シンジは、自分の煩惱を吐き出したのだが、シンジは、あるうことか、

アスカの下着を汚してしまったのである。

(まずい、これじゃあ、アスカに殺されるよ。)

シンジは思い切り後悔したが、もう遅かった。

(はあ、しょうがない。

もう、どうにでもなれだ。明日は素直にアスカに謝ろう。もしかしたら、許してくれるかもしれないし。

でも、多分駄目だろうな。)

シンジはいきなり落ち込んでしまった。

(僕は、何てことをしてしまったんだ。

せっかく戻ってきたのに、アスカに嫌われてしまったら、何のために戻ってきたのか分からないよ。

いや、嫌われるならまだいい。

アスカが家を出るなんて言ったら、僕はどうすればいいの。)

だが、シンジは、以前のシンジとは少しだが違っていた。今のシンジは、僅かでも希望を持つことができるのだ。

シンジは希望を持った。

アスカが気付かないかもしれないという希望を。

以前のシンジなら、希望を持つなど、考えられないのだが。

(気付かれてから謝ったとしても、許してくれないかもしれない。でも、その時はその時だ。

今から恐れていてもしょうがないや。)

ともかく、シンジはアスカに言われるまで、黙っていることにした。アスカに気付かれない、万に一つの可能性に賭けたのである。

(それに、僕は、天国を捨てて戻った来たんだ。

もう、僕には失う物は何も無い。

例え、アスカに嫌われても良い。アスカさえ生きていれば。だから、嫌われることを恐れちゃいけないんだ。)

シンジは、自分の手を強く握りしめた。

(だから希望を持つとう。

どんな僅かな希望でも、自分からあきらめたらおしまいだ。心を強く持つとう。あの時と同じ位強い心を。

僕は、アスカのためなら、地獄だって何だって、行くことが出来るんだ。

これ位のことでは動揺するなんて、おかしいよ。)

シンジの心はいつの間にか落ち着きを取り戻していた。

こうして、シンジは、いつしかサードインパクトの時の夢を見ていた。

いつの間にか、シンジの前にカヲルが立っていた。カヲルはシンジに言った。

「ここは、君にとって、天国なんだよ。それでも行くの。」

「ああ、僕は行く。」

「向こうは、君を傷付ける人が一杯いるよ。それでもいいのかい。」

君にとっては、地獄とも言うべき所だよ。それでも行くのかい。」

「ああ、それでも行くよ。」

「君は、何故あえて地獄のような場所へ行くんだい。」

「僕は、行かなきゃならないから。」

「ここは気持ちがいいよ。まさに天国だよ。君を傷付ける人はいないよ。」

「でも、ここにはアスカがないんだ。」

「君は、天国よりもアスカ君を選ぶのかい。」

「そうだよ、カヲル君。僕は、アスカのことを心から愛している。それに気付いたんだ。」

だから、僕は『アスカのいない天国』よりも、『アスカのいる地獄』を選ぶ。

それが僕の本心だから。

僕は、そのことにやっと気付いたんだ。」

「向こうは苦しいよ。地獄よりも苦しいかもしれない。シンジ君に耐えられるのかい。」

「ああ、苦しいと思う。辛いと思う。でも、もう逃げちゃいけないんだ。」

人に傷付けられるのはいやだけど、人を傷付けるのはもっと嫌だけど、逃げちゃいけないんだ。」

「君は本当に耐えられるのかい。」

「分からない。耐えられるかもしれない。耐えられないかもしれない。でも、一つだけ、確かなことがある。」

僕には、アスカが必要なんだ。

アスカさえいれば、僕はきっと何処でも、何にでも耐えられる気がする。

例え地獄でだって耐えてみせる。そう思うんだ。」

「アスカ君がそんなに好きなのかい。」

「そうだ。僕はアスカが大好きだ。」

「アスカ君に会うためなら、地獄でさえも行くのかい。」

「そうだよ。アスカに会うためなら、僕は地獄の果てまでも行ってやる！」

シンジが叫ぶと、カヲルはにっこり笑った。

「そうかい。シンジ君は、大切なものを見つけたんだね。良かった。僕は嬉しいよ。」

いつの間にかカヲルの姿は消えていた。

こうして、シンジの夢は終わった。

「ふああああ。」

翌朝、シンジは大きなあくびをしながら起きた。

「ああ、良く寝たな……。」

「アンタ、何でアタシの隣で寝ているのかしら。理由を聞きたいわね。」

おそろしく冷たい声でした。

「え、アスカ、おはよう。」

シンジからは、アスカの顔が見えないので、とりあえず無難な返事をした。

「シンジ、何でアタシと一緒に寝てんのよ。聞かせてもらおうじゃない。」

「覚えていないの。」

（ああっ、アスカだったら、やっぱり忘れてるや。）

「覚えてない。」

「昨日の晩、僕が寝ていたら、アスカが急に悲鳴をあげたんだ。」

（でも、アノことには気付いていないみたいだ。）

「ほーっ、それで。」

「僕が近寄ったら、アスカが泣いてて、一緒に寝てくれって頼んだ。」

（ふう、良かった。安心した。）

「あっそ。それで。」

「『お願いだから、後ろから抱きしめて。』なんてアスカが言うから、言う通りにしたんだよ。」

（うまく切り抜けられるかもしれないな。）

「それで。」

「これで全部だけど。」

（ああ、嘘がばれませんように。）

「ふうん、アタシがそんな作り話を信じると思っているの。」

正直に言えば、軽い罰で許してあげるかもしれないわよ。」

「ほ、本当だよ。アスカは本当に覚えてないの。」

（ここは、つっぱるしかないな。）

「記憶に無い。」

「そ、そんなあ…。」

（あれ。雲行きが怪しいぞ。）

「他に言う事はないのね。じゃあ、判決を言い渡すわよ。アンタ、死刑!」

「ええっ!そんなあ。」

（げっ。アスカったら、無茶苦茶だよ。）

「正直に言わなかったからよ。」

「そうか、信じてくれないんだね。いいよ、それなら。」

でも、アスカがそこまで言うなら、僕にも考えがあるよ。」

（うーん、確かに正直じゃないけどね。）

「はん、なあに。言ってみなさいよ。」

「もう、いくら頼まれても、アスカとは寝ない。絶対だよ。それでいいね!」

（さあて、ここが勝負どころだ。）

「シンジ、アタシがそんなことで困るとでも思っているの。」

「思っているぞ。」

「今晚もアスカは悪夢を見て、僕に助けを呼ぶよ。」

「でも、もう助けに行かないからね。全部アスカが悪いんだからね。」

（いいぞ。アスカだったら、動揺しているぞ。）

アスカは、シンジにそこまで言われて考えこんだようだ。

「アタシ、本当に覚えていないのよ。」

「でも、少しでもアタシを信じてあげて。病院で看病してくれたしね。だから、アタシが昨日のことを思い出すまでは、執行猶予にするわ。」

「えーっ、無罪じゃないの。」

（しめた！何とかかなりそうだ。）

「どうしても無罪がいいなら、それでもいいけど、

そうすると、さっきからアタシの胸に触っているこの手は、言い訳の余地無く有罪よ。」

「それでもいいのね。」

「あっ！」

シンジは慌てて自分の手を引っ込めようとしたが、もう遅かった。

アスカにガツチリ手を掴まれてしまった。

したがって、シンジの両手は、アスカの胸に乗ったままである。シンジは自分の愚かさを悔やんだが、もう遅い。

「どつすんの！」

アスカが容赦なく言う。

「執行猶予でいいよ。」

シンジはアスカに力無く言った。

「じゃあ、アタシの言うことを何でも聞くのよ。聞かなかったら執行猶予は取り消し！」

「ええっ、そんなあ。」

（まあ、執行猶予でもいいか。）

「いいの、もう決まり！」

「とほほ。」

（落ち込んだ振りをすれば、追及されないだろう。）

「アタシに逆らうなんて、100万年早いよ、シンジのくせに。」

「はあ……。アスカにはかなわないや。」

（アスカったら、結構単純だから、こう言えば大丈夫さ。）

「あれ、今何時。え、6時半。じゃあ、後30分したら起きるのよ。いいわね。」

「え、でも、このままでいいの。」

（え、僕の手はアスカの胸の上にあるんだよ。いいのかな。嬉しいけどね。）

「後30分よ。い・い・わ・ね！」

「うん、わかったよ。」

シンジの両手は、まだアスカの胸の上にあったが、シンジにとっては、とても嬉しいこと

だったので、逆らうのはやめた。

（やったあ。うまく切り抜けたぞ。

僕は賭けに勝ったんだ。

アスカが何か言ったら、執行猶予を理由にすればいいや。

でも、本当に助かった。良かった。）

シンジは安堵した。

結局、二人は7時まで、そのままの格好であった。

なお、起きた時にシンジが裸なのに気付いたアスカが、シンジを思い切り蹴りあげたの言うまでもない。

だが、アスカはまだ、シンジの暴発には気付いていないようだ。気付かれたら、どんな目に遭うかわからない。そのうち、シンジの意識は薄れていった。

「ちょっと、シンジ！そんなに痛かったの！何か返事なさいよ！」

アスカが声をかけたが、シンジは、完全に意識を失っていた。

シンジが意識を取り戻すのは、それから30分も経った後であった。

さすがにアスカはシンジに謝ったため、その場は事なきを得たが、シンジの心には、アスカの暴力に対する恐怖感が芽生え始めていた。

第7話 マヤのお手伝い

アスカとシンジが朝食を終えた頃には、8時を過ぎようとしていた。アスカは、マヤの仕事の手伝いをする約束になっていたことを思い出し、シンジに尋ねた。

「ねえ、シンジ。昨日マヤからお仕事頼まれたでしょう。出してみて。」

「うん、ちょっと待ってて。」

そう言うとシンジは昨日マヤから預かった書類やらDISKやらを持ってきた。

それを見たアスカは目をぱちくりさせた。

「え〜っ、そんなにあるの。で、一体いつまでにやればいいの。」

「えっ、え〜っど。」

シンジは昨日のマヤとの会話を思い出していた。

「シンジ君、これお願いね。」

悪いけど、急いでやるように、アスカちゃんに伝えて欲しいの。今人手不足だから、病人に頼むのは気がひけるんだけど。」

「ええ、大丈夫ですよ。僕も手伝いますし。」

アスカなら、僕より優秀だから、そんなに時間はかからないと思っ

ます。

で、いつまでに終わらせればいいんですか。」

「ええ、実は明日……。」

そこまでマヤが言った所で、電話がかかってきた。

マヤは、真剣な表情で相手と喋っていたが、急に電話を切ると、シンジに向かって言った。

「ごめんなさい。急なトラブルがあつて、今すぐ行かなくてはいけないの。」

じゃあ、明日またね。」

そう言うと、マヤは足早に去って行った。

「明日か。大丈夫かな。」

ちよつと心配になるシンジであつた。

「マヤさんは、昨日の時点で、明日にって言っていたから、今日中になるかな。」

「え〜っ、シンジ、ホント！嘘でしょう！」
アスカの目が点になった。

書類の分量も多く、とてもじゃないが、普通にやっていたら、到底今日中に間に合わないように感じたのだ。

「う、うん。ごめん、僕も、アスカなら大丈夫って言っちゃったんだ。」

(あれっ、まずいこと言っちゃったかな。)

「んも〜、シンジったら、勝手な事言わないでよ。」

アスカは憤慨してみせた。だが、実はそれほど怒っていないようだ。

「しょうがない、シンジも手伝うのよ。」

アスカは、シンジをこき使える名目が出来たことに、喜びを感じているようだ。

「うん、分かった。手伝うよ。何をやればいいの。」

「そうね〜。体を使う仕事は、全部シンジね。」

そう言っつて、アスカはシンジに次々と指示を下した。

最初はパソコンの準備である。

1台では足りないなので、アスカはシンジやミサトのパソコンも用意するように言った。

3台のパソコンとドライブを接続するのもシンジである。

アスカはというと、シンジがパソコンの準備をしている間は、書類を物凄いスピードで読んでいた。

だが、次第にこめかみの辺りに青筋が立っていた。

それを見ていたシンジは、ちょっと不安になった。

「アスカ。マヤさんに頼んで、締切を伸ばしてもらおうか。」

だが、素直じゃないアスカは、これに反発した。

「こんなの、普通の人には1週間はかかるけど、アタシは天才少女な

『疲れた!』
『お腹空いた!』
『肩が凝る!』
『指が痛い!』
『腕が痛い!』
『水飲みたい!』
『トイレ行きたい!』
などと言っては、シンジに肩や腕を揉ませたり、足を揉ませたり、トイレに連れて行かせたりと散々こき使った。
食事や水は、シンジに口まで運ばせ、アスカは殆ど休む間も無く、パソコンを駆使したのである。

シンジはお蔭でかなり疲れてしまったが、悪いことばかりでは無かった。
アスカが間違えて『胸』と言ったので、シンジが反射的に胸を揉んでしまったのだが、
アスカは何故か気が付かなかったようで、何事も無かったのだ。
おかげでシンジは、ほっとしたと同時に、何か得したような良い気分になった。

「おつりゃああああああああああああっ!これで最後よ!」
アスカが叫んだ時には、時計は夜の6時を示していた。

「シンジ、終わったわよ!」

「やったね！さすが、アスカだ。」
シンジはそう言っただけでこりする。

「まあね、アタシにかかれれば、こんなの楽勝よ。」
アスカは得意満面だ。

「シンジ、早速マヤの所へ行きなさいよ。」

「え、でも、食事はどうするの。」

（あれ、何かおかしいな。お腹空いたって言うと思ったのに。）

「シンジが帰ってきてからでいいわ。どうせ、シンジがいないと何も出来ないし。」

「うん、わかったよ。じゃあ、なるべく早く帰って来るよ。」

（まあいいや。なるべく早く帰って来るようにしよう。）

「運ぶモノがモノだから、諜報部の人に送ってもらいなさいよ。」

「うん、分かったよ。」

シンジはそう言うと、シンジ達の護衛役の諜報部員に連絡した。

実は、その方が早く帰って来れるからなのだが、アスカは機転を利かし、

機密を運ぶから止むなしという理由で、諜報部をアッシーに使うことにしたのだ。

「…じゃあ、そういうことで、よろしくお願いします。」

諜報部と連絡が取れたシンジは、急いで出て行った。

シンジは30分ほどで、マヤの所に辿り着いていた。普通に來れば1時間はかかるので、大幅な時間の短縮である。マヤは自分のデスクでパソコンを叩いていた。

「マヤさん。お約束のものを届けに來ました。」

マヤを見つけたシンジは声をかけたが、何故かマヤは怪訝そうな顔をしていた。

「どうしたの、シンジ君。アスカちゃんの面倒を見るんじゃないの。」

「えっ、マヤさんが今日來るように言ったから來たんですよ。」

「アスカちゃんに頼んだ仕事のこと？今日は進捗状況だけでも良かったのに。」

「はあ？」

シンジは訳が分からなかった。何か、話がかみ合っていない。

「マヤさん、一応頼まれた物は仕上がったんで、持ってきたんですが。」

（あれ、マヤさん、何言っているんだろう。）

「シンジ君。アスカちゃんに頼んだ作業は、私がやっても1週間やそこらじゃ終わらないのよ。」
だから今日持ってきたのは、おそらく1日分のものだと思うわ。
アスカちゃんは、何か勘違いしたのかしら。
全部終わらないと、受け取ってもあまり意味はないの。
だから全部終わってから持ってきて欲しいのよ。
シンジ君は、どこまで作業が終わったのか分かるかしら。」

「え、僕は全部終わったって聞きましたから、てっきりこれが全部だと思ってました。」

(えっ、これで終わりじゃないの?)

「ごめんなさいね。私がちゃんと言わなかったのが悪いのよね。
後でアスカちゃんに電話で進捗状況を聞くわ。
だから、悪いけど、それは一旦持って帰って。」

「でも、アスカは終わったって言うてました。だから、これは置いていきたいんです。」
シンジは、このまま持って帰るとアスカの怒りが炸裂することが分
かりきっていたので、珍しく強硬だった。
さすがにマヤもシンジが強硬な理由に気付いたようだった。

「うーん、そうね。シンジ君も無駄足になつては悪いものね。
分かったわ。DISKを貸して。」

シンジがDISKを渡すと、マヤはそれをドライブに入れた。

「今、MAGIにチェックさせているわ。」

それで、どこまで終わったか、大体分かると思うから、ちょっと待
つててね。

「コ・ヒ・でもどう。」

「は、はい。いただきます。」

（ふう、良かった。このまま持って帰っていたら、アスカの怒り爆発だもんね。）

シンジは勧められるまま、コ・ヒ・を飲んだ。

しばらくすると、ドライブからDISKが出てきた。チェックは終わったらしい。

マヤは、パソコンを操作すると顔色が険しくなった。

「う、うそ…。」

マヤの顔は真っ青だった。

「マヤさん、何か問題でもありましたか。」

シンジが声をかけたが、マヤは首を振った。

「シンジ君。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、あなたはどれ位手伝ったの。」

「と、いいいますと?」

「具体的に、入力作業はどれ位やったのか聞きたいの。」

「僕は、入力は一切やってません。」

パソコンをセットした後は触っていません。

僕が手伝ったのは、主に食事を作ったり、物を動かしたりといった事位です。」

そう言った後、シンジはマヤの質問の意図を誤解し、こう答えた。

「マヤさん。アスカはまだ、右手が思うように動かないんです。だから、入力の時も左手だけしか使っていませんでした。ですから、間違いが多いかもしれません…。」

だが、それを聞いたマヤはさらに顔を強張らせた。

「マヤさん、一体どうしたんですか。」

シンジはちよつと語気を強めて聞いた。

「う、ううん、何でもないの。」

アスカちゃんには、私が物凄く感謝していたって言うておいて欲しいの。

シンジ君、お願いね。」

「ええ、わかりました。」

じゃあ、アスカには、残りの作業も急いでやるように言うておきますよ。」

「ううん、いいの。私、渡す物を間違えたみたい。」

だから、アスカちゃんは全部仕上げ終わっているの。」

また、連絡するから、その後もっとたくさん仕事をあげるわね。」

「はい、わかりました。」

シンジは一礼すると、去って行った。

しばらくして、青葉がマヤの側に寄って来た。

青葉は、一部始終を聞いていて、気になってやって来たのだ。

「マヤちゃん、怖い顔して、どうしたんだい。」

「私、アスカちゃんがどうしても技術部に欲しいの。青葉さんも協力して。」

「おいおい、どうしたんだい。話が見えないけど。」

「私、アスカちゃんにお仕事を頼んだの。」

それが、私で1か月、先輩でも1週間はかかる程の分量だったの。」

「へっつ、そりゃあ、アスカちゃんも大変だろう。」

今頃、ひいひい言っているんじゃないかい。」

「それが、昨日頼んだのに、もう出来上がっているの。彼女、本当に天才だわ。」

「えっつ、嘘だろう。」

「しかも、アスカちゃんは、利き腕がうまく動かないのよ。」

しかも、MAGIにチェックさせたら、結果は完璧。ミス無しなのよ。信じられます?」

「そりゃあ、驚いた。」

「こうしちゃいられないわ。アスカちゃんのことを広報部が欲しいがっていたの。」

司令に直訴しないと。」

言うが早いのか、マヤは走り出していた。

「あの、アスカちゃんがね。」

青葉は、マヤの後ろ姿を呆然と見送った。

「…というわけで、アスカちゃんを技術部にください。お願いします。」

マヤはゲンドウに頭を下げた。

「アスカ君は、そんなに能力があるのかね。」
横から冬月が口を出した。

「はい、驚異的な能力です。」

彼女を技術部に頂ければ、NR計画は少なくとも1月、ER計画は3月予定が繰り上げられます。

正直言つて、彼女無しでは、私の体が持ちません。スケジュール的にも、99%不可能です。

ですから、広報部ではなく、技術部にください。お願いします。」

そう言つてマヤは再び頭を下げた。

「淀よ、どうする。話を聞くと、アスカ君は技術部に渡した方が良さそうだな。」

「…結論は後ほど連絡する。以上だ。」

ゲンドウは結論を出さずに、マヤが帰るよう促した。マヤは一礼すると、司令室を出て行った。

マヤが退出した後、冬月は、ゲンドウに問い質した。

「碓よ、どうしてマヤ君に良い返事をしなかったんだ。どう考えても、アスカ君は、マヤ君の言う通り、技術部に回すべきだろう。」

「本人の意向を聞いてからだ。」

「お前がそんなことを言うとは、意外だな。」

「それより、おかしいとは思わないか。」

「何がだ。」

「ふっ。まあいい。」

こうして、アスカの扱いは、保留となった。

第7話 マヤのお手伝い（後書き）

キャラ設定：青葉 シゲル

ネルフ本部のオペレーター。サードインパクト後、マコトと違い昇進出来なかった。
マヤに気がある。

第8話 恋人・その1 -

シンジは、アスカのことが心配で、急いで帰った。

そして、玄関を開けようとした時、アスカの悲鳴が聞こえた。

「ぎゃああああああああああああああああああああ
！」

シンジは慌てて家に入り、アスカを探した。

アスカは、パソコンを目の前にして、床に転がっていた。

「アスカ、大丈夫！」

シンジはアスカの元に駆け寄って、アスカを抱き起こした。

「シンジ！」

アスカはシンジに抱きつく。

「シンジ！シンジ！シンジ！シンジ！シンジ！」

アスカも、シンジを強く抱きしめた。

アスカは、体中に冷や汗をかいており、顔は真っ青だった。

「うわあ〜ん。シンジ〜、怖かったよ〜。うわあ〜ん。」

アスカは泣きじゃくる。

「アスカ、怖い夢を見たんだね。でも、もう大丈夫だよ。安心して。

「いいよ。」

「シンジのバカ！何でもっと早く来ないのよ！怖かったんだから、本当に怖かったんだから、もっと早く来なさいよ！」

アスカは、昨日と同じことを言っつてシンジを責める。

「アスカ、ごめんね。怖い夢を見たんだね。でも、もう大丈夫だよ。」

シンジの優しい声にアスカは徐々に落ち着きを取り戻した。

「シンジ、ごめんね。アタシ、昨日も同じ夢を見たのね。」

そして、シンジと一緒に寝るようをお願いしたのよね。」

アスカは少し震える声で言う。アスカはやっと昨日のことを思い出したようだ。

「そうだよ。やっと思い出したんだね。」

（ふう、良かったやつと思いで出してくれたよ。これで、死刑は取り消しだね。）

「うん。だから、お願い。今日も怖いから、一緒に寝て欲しいの。」

「ごめん。今日は勘弁してほしい。」

シンジは今朝のことを思い出していた。

急所を思い切り蹴られて、悶絶したため、シンジの心には、アスカの暴力に対する恐怖感が芽生えていたのだ。

「え〜っ！なんで！どうして！」

「理由は、アスカが良く知っているはずだよ。」
シンジの目はちよつときつかつた。アスカは身に覚えがあるので、ちよつとたじろいだ。

「わ、わるかつたわよ。謝るから、怒らないで。」

「怒ってはいないけど。でも、今朝は凄く痛かつたんだよ。だから、怖くてアスカとは寝られないよ。」

シンジは、あまりにも勝手な事を言うアスカに対して、少しだが、腹を立てていた。

怖いから一緒に寝ようと言いながら、朝になるとそんなことはきれいさっぱり忘れて、急所を蹴りあげるアスカに。

「うっ。」

アスカは二の句が告げなかつた。だが、これで怯むようなアスカではない。

「もう、あんなことしないから。」

「そんなこと言っても、信じられないよ。」

シンジは、アスカに対して、深い疑念を抱いてしまっていた。いくら、シンジが優しくしてお人好しでも、ものには限度があるのだ。

「じゃあ、どうすれば信じてくれるのよ。」

「どうしても駄目。」

「意地悪!」

「だって、アスカが悪いんじゃないか。」

本当に痛かったんだよ。僕は何もしていないのに。

それなのに、アスカだったら、思いつき蹴りあげたうえに、いい気味なんて言って、酷いとは思わないの。」

「うっつ。」

シンジの言うことが正しいので、うなる事しか出来ないアスカだった。

だが、小悪魔的な笑みを浮かべると、色仕掛けで攻めてきた。

「シンジ〜。一緒に寝てくれれば、後でキスしてあげる。それでどう。ねっ。」

シンジは、アスカの可愛い笑顔に一瞬心がよろめいたが、直ぐに今朝の痛みを思い出して正気を取り戻した。

「嫌だ。」

（キスぐらいじゃ駄目だ。それに、あんな痛い思いをするのは、もう嫌だよ。）

普段のシンジなら、簡単に落ちていたはずだが、今朝のことがよっぽど堪えたのだろう。

シンジは、首を縦に振らなかった。

「シンジ〜。一緒に寝てくれれば、胸を揉み放題よ。それでどう。」

「駄目。」

（アスカの嘘つき！どうせ、後で忘れたとか、覚えていないとか言うに違いないんだ。）

それじゃなきゃ、マヤさんの胸のことだとか、洞木さんの胸だとか言って誤魔化すに違いない。

僕だってバカじゃないさ。いつまでも騙されたりするもんか！

「シンジく。一緒に寝てくれれば、体を触り放題よ。これでもだめ？」

「駄目。」

（アスカもしつこいな。僕のことをバカにしているよ。そんなに僕が騙され易いと思っっているのかな。）

「シンジく。一緒に寝てくれれば、体中、キスし放題よ。これでもだめ？」

「駄目。」

（アスカも、演技がうまいな。でも、僕は絶対に騙されないよ。）

「しょうがない。最後の一線を超えなければ、何でもOK！これなら良いわよね。」

「だから、駄目だって。」

（何だよ、最後の一線って。）

どうせ、床に線を書いて、これを超えなきゃ何してもいいなんて言うんだろ。

まったく、人をバカにしてるよ。）

シンジは、次第にいらついできた。

「最後の一線を超えなきゃ駄目なの？シンジのドスケベ！」

「だから、そういう問題じゃないの。」

シンジは思わず大きな声を出してしまった。

「うっつ。」

アスカは、唸り声をあげると、考え込んでしまった。

アスカが考え込んでいる間、シンジは、これからアスカが何をするのか、考えていた。

（まさかとは思いつけど、裸になって抱きついてきたらどうしよう。そうになったら、エッチなことしちやおうかな。

女の子に恥をかかせちゃいけないよね。そうなるといいな。

それ以外だったら、断ろう。

どうせ、アスカのことだから、色仕掛けでくるに違いないんだ。中途半端なことだったら、きっぱり断ろう。）

シンジはいつの間にか、妄想モードに入っていた。

シンジも男の子である。

アスカの蹴りには恐怖するが、それ以上のご褒美が目の前にぶら下がれば、食いついてしまうのだ。

今のシンジは、どんなご褒美が出るのか、楽しみでもあった。

そのうち、アスカは意を決したような顔をして、口を開いた。

「分かったわ。じゃあ、これで最後のお願いにするわ。」

そう言うときアスカは、少し顔を紅くした。

「だから、何言っても駄目だよ。」

シンジは、ムスツとした顔をする。

だが、心の中では、アスカが何かエッチなことを言うのではないかと、大きな期待を抱いていた。

だが、アスカが言ったことは、シンジの予想を大きく外れていた。

第8話 恋人・その2・

「一緒に寝てくれたら、アタシ、シンジのこと…す、少しだけでも、好きになってあげる。」

そして、シンジが望むなら、シンジの恋人になってもいいわよ。」
アスカは、俯いたまま言った。

「えっ！」

シンジは驚愕した。

アスカが色仕掛けで来ること思っていたため、予想外のアスカの言葉に、シンジは直ぐには返事が出来なかった。

（ま、まさか、アスカは本気で言っているんじゃないだろうね。そ、そんなはずないよ。

あのアスカが、こんなことを言うなんて、おかしいじゃないか。僕のことを好きになるなんて、有り得ないよ。

でも、本気だったらどうしよう。

もし、今言ったことが、本当だったら！）

シンジは、あせった。

てつきり、アスカがシンジのことをからかっていると思い込んでいたが、どうも、そんな雰囲気ではなさそうだ。

それに、アスカは、確かにシンジの恋人になってもいいと言った。これは、後で誤魔化しがきかないことだ。シンジの頭は混乱し、体の動きが止まってしまった。

傍目には黙り込んでいるように見えたのだろう。

そんなシンジを見かねたように、アスカは口を開いた。

「シンジ、やっぱりアタシのこと、嫌いなのか？」
アスカは、悲しそうな目をしていて、瞳も潤んでいる。

（え、何でそうなるの。僕がアスカのことを嫌いになるはずがないじゃないか。

アスカは誤解しているよ。でも、まずいよ。もし、アスカが本気で言っていたら。

アスカの誤解を解かなきゃ、最悪の事態になっちゃうよ。

どうしよう。アスカが僕のことをからかっている可能性も、まだあるし。

一体、僕はどうしたらいいんだ。）

シンジは、何を言ったらいいのか迷い、様々な考えが浮かんでは消えていった。

そんなシンジを見て、アスカはため息をついた後に、こう言った。

「もういいわ。アタシ、シンジがアタシのこと好きかもしれないって思っていたの。

だから、わがままばかり言っていたの。

いつかシンジがアタシのこと好きだって言ってくれたら、

アタシ達は恋人同士になるのかななんて思ったりもしていたの。」

アスカは声を落としながらそう言うと、一筋の涙を流した。

（ア、アスカが涙を流すなんて！）

シンジの知る限り、アスカは泣くのが嫌い、嘔泣きはもっと大嫌いだった。

アスカは、本気なのかもしれないと、シンジは思い始めた。

「でも、アタシ、思いつきり勘違いしてたのね。アタシったら本当に馬鹿よね。でも、もういいの。シンジの気持ちがあったから。シンジはいいやアタシの相手をしているって分かったから。アタシ、シンジよりも素敵な人を探すから。だから、こんなこと、もう二度と言わないわ。もう、二度と…。うっつ…。」
アスカは顔を手で覆い、嗚咽をもらした。

（アスカは、本気だったんだ！）

シンジは、そう思った瞬間に決断した。もし、この機会を逃したら、アスカとの間に深い溝が出来るだろう。そして、もう二度とこんな機会は無いかもしれない。騙されても良い、アスカのことを信じてみよう。

「違う！」

シンジは唐突に、しかし、力強く言った。

「え…。」

その瞬間、アスカの顔が上がった。アスカの頬には、いく筋もの涙が流れていた。

（アスカは本当に泣いていた！やっぱり、本気だったんだ！）

シンジは、もう迷わなかった。

「違う！勘違いじゃない！」

僕は、アスカのことが大好きだ。

だから、勘違いじゃない！」

シンジの声は震えていた。

「えっ、ホント。本当なの。」

アタシみたいなわがままな女のことか本当に好きなの？

アタシのことが嫌いじゃないの。

アタシのことをからかっているんじゃないの。」

アスカは、不安げな顔をして聞いてきた。

「う、うん。本当だよ。信じてアスカ。僕は、アスカが大好きだ。」

シンジの顔は、真剣だった。

「じゃあ、アタシと一緒に寝てくれるのね？」

アスカの顔は、まだ不安そうだ。

「う、うん。でも、今朝みたいなことにはならないって約束してくれる。」

シンジは頷いたが、やはり、今朝のことは気になっている。

「も、もちろんよ。」

アスカは強く頷く。心なしか、アスカの顔が、少し明るくなったよう気がした。

「アスカ。」

「な、なあに。」

「今言ったこと、本当なの。僕のこと、嫌いじゃないの。信じていいの。」

シンジは澄んだ目で、アスカのことを見つめた。

今までの経験から、やはり少し不安になったので、思わず聞いてしまっていた。

アスカは少し考えていたが、急に行動を起こした。

「アタシは、嫌いな人とは喋りたくないし、一緒に住まないし、そしてこんなことは絶対にしないわ。」

言うが早いか、アスカはシンジを抱きしめて、キスをした。

「！」

シンジは、最初は反射的に離れようとしたが、アスカが舌を絡めてきた時点で諦めた。

(ア、アスカからキスしてくるなんて。

昨日はアスカの頭が混乱していたから、ラッキーだと思っていたけど、今日は違う。

アスカは、自分の意思で僕にキスしているんだ。だったらアスカの思いに応えなきゃ。

アスカ、やっぱり僕は、アスカのことが大好きだよ。)

シンジは意を決して、アスカの背中に手を回し、そのまま、熱い抱擁を続けた。

長いキスの後、ようやく二人は顔を離れたが、二人の顔は真っ赤だった。

しばらく、二人は黙っていたが、アスカが沈黙を破った。

「シンジ。これで信じてくれた？」

アスカは、ほんのりと頬を染め、小首をかしげてシンジのことを見る。可愛い笑顔だ。

「う、うん。」

シンジの頬も紅くなっている。

（これで信じなきゃ、バカだよ。いくら僕でも、そこまでバカじゃないよ。）

「じゃあ、アタシに何か言うことあるんじゃない？」

「ア、アスカ、僕はアスカが大好きだ。だから、僕の、こ…恋人になつて欲しい。」

（い、言っちゃったよ。）

アスカ、どうか、舌を出さないで。からかっているなんて言わないで。

嘘だなんて言わないで。

僕は、なけなしの勇気を振り絞つたんだから。）

シンジは、内心では大きな不安を抱えながら、恥ずかしそうに、しかし、いつになくはつきりと言った。

そして、その結果は直ぐにアスカの口からもたらされた。

「うん、いいわよシンジ。アタシ達今から恋人同士ね。これからも優しくしてね。」

アスカも頬を真っ赤に染めた。

「う、うん。もちろんだよ、アスカ。」

（やった〜！嘘じゃないよね。アスカは確かに恋人になってくれるって言ったよね。）

シンジは感激した。苦節14年の彼女いない歴にして、初めて恋人が出来たのだ。

しかも相手は、人がうらやむような、とびっきりの美人であるアスカなのだ。

（嬉しい。夢みたいだ。

でも、ここでほっぺたをつねったら、思い切りアスカにバカにされそうだから、やめておこう。

でも、本当に夢みたいだ。）

シンジは、さすがにほっぺたをつねるのはやめた。

今の雰囲気がぶち壊しになることが間違いないからだ。

そんなとき、アスカは甘えた声で、こう言った。

「じゃあ、アタシ、シンジの恋人だから、今まで以上に甘えてもいいわよね。」

「う、うんいいよ。」

シンジは恥ずかしそうに応えた。

舞い上がっていたので気付かなかったが、アスカは密かに『今まで以上に甘える』今まで以上にこき使う』という図式を考えていた。

が、シンジは、アスカの企みまでは気付かないようだ。

やはり、アスカの方が2枚も3枚も上手である。

シンジは、アスカの嘘泣きにも気付かないのだから。

だが、シンジにとっては、一層こき使われることになっても、アスカに甘えられる方が良いだろう。

「シンジ、嬉しい。」

アスカは、まるで天使のような優しい笑顔を浮かべた。

実は、これがアスカの最終兵器なのだ。

毎日鏡の前で練習している、とびっきりの笑顔なのだ。

これで落ちない男は滅多にいないだろう。

普段のきつい顔のアスカとの落差が激しいため、シンジに対しては、一層効果があったようだ。

シンジはその笑顔を見て、メロメロになった。

「アスカ、綺麗だよ。アスカってこんなに可愛かったんだね。」

シンジは、アスカの顔に見とれてしまった。

「あーら、シンジったら、アタシのこと、可愛いつて思っていないかったの。」

「うーん、何て言ったらいいのかわからないけど、僕がアスカの事を好きになったのは、外見じゃないんだ。

アスカは他の人と違って、僕に構ってくれたし。

悪い所も教えてくれたし、ぐいぐい引っ張ってくれたし。

それに、アスカって凄く輝いて見えたんだ。

いつも明るくて、行動力があって、僕にないものを一杯持っていたんだ。

こんなんじゃ、理由にならないかな。」

「ううん、いいの。それだけ分かれば充分よ。」

「アスカ、大好きだよ。」

(これは、本当だよ。)

「うん、ありがとう。あたしも、まだ少しだけど、好きよ。」

「少しだけ?」

(えっ、そんな?。)

「だから、さっき言ったでしょ。一緒に寝てくれれば、少しだけ好きになるって。」

「少しだけか。でも、今はそれで充分かな。」

(そうだよな。恋人になってくれるだけでも良しとしなきゃ。)

「シンジが優しくしてくれたら、もっと好きになるかもよ。シンジ次第よ。」

そう言って、アスカはもう一度につこり笑った。

「うん、分かったよ。」

シンジも微笑んだ。

「とりあえず、今は夕食かな。ちょっとお腹空いちゃった。」

「あ、ごめん。もうこんな時間か。急いで夕食を作るね。」

「ねえ、シンジ。今日は、一緒にお風呂入ろうよ。」

「えっつ。それはちょっと...。」

「やっぱりアタシのこと、好きじゃないんだ。」

アスカは落ち込むような仕草を見せた。

「ううん、そんなことないよ。わ、分かった。一緒に入ろう。」
シンジは慌てて言った。今更恥ずかしがってもしょうがないと思っ
たからだ。

「アタシの体を洗ってね。正直言って、昨日は自分で洗うのが辛か
ったの。」

左手だけしかうまく動かなくて、アタシ、泣きたくなる位大変だっ
たんだ。」

そう言うと、アスカは舌をペロリと出した。

「うん、分かったよ。じゃあ、ちよっと待っててね。」

(そうか。気付かなくて、ごめんね。)

そう言うとシンジはアスカを持ち上げて、リビングへ運んで行った。

118

今日の夕食は、時間が無かったこともあり、チャーハンになった。
アスカは昨日と同じくシンジに食べるのを手伝ってもらった。
もちろん、昨日以上に甘えてである。

その結果、シンジの顔がにやけっぱなしだったのは言うまでもない。

アスカは、食べ終わると、シンジに『耳を貸して。』と頼んだ。

シンジは、不思議に思いながらも、アスカに耳を貸した。そうした
ら…

「ちゅっ。」

シンジの頬で音がした。シンジが驚いてアスカを見ると、アスカは
笑っていた。

「食べるのを手伝ってもらったお礼よ。」

「え、ええええええ！」

(い、今のつて、キスだよ。ど、どうして。)

「ごめん、嫌だった？」

アスカの顔が少し暗くなった。

「そ、そ、そ、そんなことないよ。う、嬉しいよ。」

シンジは思い切り動揺した。

「シンジ、嬉しいの？良かった。またこれからもしてあげるね。

だって、アタシ達、恋人同士だもの。これ位は…ね。」

そう言つて、アスカは少し頬を染める。

「う、うん。」

シンジは満面の笑みを浮かべる。シンジの心は、かなりハイになっていた。

「じゃあ、次はお風呂ね。よろしくね、シンジ。」

「う、うん。ちょっと待つて。タオル持つて来る。」

「ちょっと待つた！今日は、小さいタオルはいらないからね。」

「ええっ！じゃあ、アスカは裸じゃないの。それつてまずくない。」

「もう！どうせ最後には全部見るんだから、同じでしょ。」

もう、勘弁してよね。アタシが風邪ひいちゃうじゃない。」

「あ、ご、ごめん。」

「分かればいいのよ。」

シンジは、アスカに促され、バスタオル用意して、戻ってきた。

「じゃあ、シンジ、よろしくね。」

「えっと、何をすればいいのかな。」

「はあ？アタシを裸にして、とっととお風呂に運ぶのよ。おわかり。」

「そ、そうだね。」

(あれ、いつものアスカに戻ったのかなあ。)

シンジは頭をひねりながらも頷くと、アスカの服を脱がして、お風呂に運んだ。

「ああ、いい湯だね。やっぱり、お風呂はいいわね。ちょっと狭いけど。」

「い、いめだね。」

アスカの後ろでシンジが謝る。今は、湯船に二人で浸かっているの

「シンジがアタシの腕をちゃんとマッサージしてくれたらね。その時のご褒美よ。」

「えっ。」

（まさか、本気かなあ。）

「ん、もう。いいから、左手。」

「う、うん。」

そう言つと、シンジは、アスカの左手を丁寧にマッサージし始めた。

「あ、いいわね。気持ちいいわ。そう、そこそこ。」

アスカは心地良さそうな声を出した。

しばらくマッサージをしたシンジだったが、アスカの反応が無くなつたのに気付いた。

「アスカ、返事してよ。」

シンジが呼んでもアスカは返事をしない。

シンジは、アスカがまたからかっていると思い、反撃することにした。

「返事が無いなら、ご褒美をもらつよ。」

シンジはそう言つて、アスカの胸を揉みだした。

アスカの胸は柔らかくて、弾力性があつて、とても揉み心地が良かった。

シンジはとっても幸せな気分になった。

「アスカ、起きてよ。起きないともっとエッチなことするよ。」

しかし、返事は無かった。アスカは、本当に眠ってしまったのだ。

第8話 恋人・その2 - (後書き)

やっぱりシンジです。有利な立場になったかと思いきや、やはり最後にはアスカの思い通りになってしまいます。でも、最後に良い思いをして、めでたし、めでたし。

第9話 今は立ち止まって（前書き）

シンジは考えた。

アスカは何を考えているのか。

どうすれば、アスカの心をつなぎ止められるのか。

そのためには、自分は何をすべきか。

シンジは自分なりの結論を見出すために思考する。

第9話 今は立ち止まって

アスカがお風呂で寝てしまったので、シンジはアスカを起こそうと色々試してみたが、結局アスカは起きなかった。

そこで、シンジは止むなく、アスカを湯船から引つ張り出して、自分の膝の上に乗せ、アスカの体を拭くことにした。

まずアスカの右に位置し、左腕でアスカの頭を支えると、ゆっくりとアスカの体を拭いていった。

最初は背中から。次に肩、腕、胸、足先、太股の順番である。

太股まで拭き終わると、アスカの足を開き、さっと太股の内側を拭くと、バスタオルをアスカの体に掛け、アスカの体を持ち上げた。

そうして、アスカの部屋まで運んで行った。

シンジは、ベッドの上の先程敷いておいた新しいバスタオルの上にアスカをそつと置いた。

そして、もう一度体を丁寧に拭いていき、アスカの下着を出して、悪戦苦闘しながらも下着を着せた。

「ふっつ。」

シンジはやつと一息つくくと、アスカの方を見た。

裸に下着を1枚付けただけの姿だった。

その姿を見て、シンジは思わず、アスカの上に覆い被さった。

そして、アスカが起きないようにと、自分の体重がかからないようにして、軽く抱きしめた。

暫く抱きしめた後、顔を上げて、アスカの顔を近くで見つめた。

良くみれば、見るほど可愛い寝顔だ。

「アスカって、こんなに可愛かったんだ。」

シンジは、思わずにっこりする。

普段はあまりアスカのことを見つめることが無いので、こんなにも可愛いとは、つい最近まで気付かなかったのだ。

シンジとて、普通の男の子だ。こんな美人が自分の恋人になって、嬉しくないはずがない。

「夢じゃあないよね。」

心配性のシンジは、ここに至っても、まだ不安なようだ。

「この唇が、僕の唇とくっついたんだよね。」

シンジは、アスカの形のいい唇をみつめる。

シンジは、アスカに軽くキスをした。

そして再びアスカを軽く抱きしめた。

アスカの温もりがシンジの心臓の鼓動を激しくさせる。

(どうしよう。このまま、アスカと…。いや、駄目だ。そんなことをしたら、嫌われるかもしれない。)

今は、我慢しないと…。

シンジの心は激しく揺れた。

1時間後、シンジは、今朝と同じ体勢になっていた。
アスカが好きな、後ろから包む形でアスカを抱きしめているのだ。
苦悩の結果、シンジは、アスカと最後の一線を超える選択はしなかつた。

（僕らはまだ中学生だし、早すぎるよ。

それに、アスカは僕の恋人になってくれると言ってくれたんだし、僕のことを『信じてるから』とも言ってくれた。

それなのに、アスカを裏切るようなことはしちや駄目なんだ。

もっと、アスカと仲良くなって、アスカが僕のことを好きになってくれて、それからじゃなくちゃ。

確かに、アスカとそういうエッチなことはしたいけど、アスカに嫌われたりするのは、絶対に嫌だ。）

シンジは、一瞬の快樂よりも、暖かな良い関係が続くことを選んだのだ。

それは、言うのはたやすいが、実行することは難しい。

例えるなら、14年間ずっと空腹でいたのに、急に目の前に現れたごちそうを我慢するようなものだ。

これには、アスカが恋人になったことが大きく関係していた。

ごちそうが、誰か他の人に食べられるかもしれないと思えば、急いで食べようとするのが普通であり、

いつかは食べられると思えば、がっつかないものだ。

しかも、シンジは好きなものは最後までとっておくタイプだったのだ。

イチゴのショートケーキのイチゴを最後に食べるのがシンジだった。こうして、アスカの貞操は守られた。

だが、シンジはなかなか寝つけず、いつしか、アスカのことを考え

ていた。

（アスカは、まだ精神的に不安定なんだ。僕と一緒に寝ないとあんな悪夢を見るなんて。冬月さんがアスカの様子を見て欲しいって言っていたけど、聞いておいて良かった。

だけど、僕も悪夢を見るんだよね。

でも、アスカと一緒に寝ると大丈夫みたいだ。

これは、お互い様なのかな。

でも、アスカはいつまで悪夢に悩まされるんだろう。

早く治って欲しいけど、治ったら僕はお払い箱になるのかな。

でも、大丈夫だよな。

アスカと一緒に暮らそうって言ったのは、悪夢とは関係無いし。）

そこでシンジはため息をついた。

（はああつ、今の僕って、いいところ無いよね。

エヴァが無ければ、何もやること無いし。

それなのに、アスカは、マヤさんが驚くほど仕事が早いのに、僕はアスカがいなければ、何もやること無し。

何と言っても、アスカの体調が良くて、悪夢を見なかったら、どうなっていたんだろう。

きつと、アスカはネルフでバリバリ仕事をやっていたよね。

それに対して、僕は家で家事でもやっていたのかなあ。

これじゃあ、駄目だ。

アスカとの差が広がるばかりじゃないか。）

シンジは頭を抱えた。

（このままじゃ駄目だ。

だけど、どうしていいのかわからない。

僕は一体どうしたらいいんだろう。

加持さんがいれば、何か言ってくれるかもしれないのに。

今のままの僕だと、アスカはいつか、離れてしまいかもしれない。

でも、待てよ。アスカは、一体僕のどこがいいんだろう。(

シンジはしばらく考えていたが、これといったものは浮かばなかった。

(アスカは、今の僕でもいいのかな。

駄目な男に母性本能をくすぐられる女の人もいるっていうし、
だとしたら、無理に頑張っても、逆に嫌われちゃうかもしれない。

ああ、僕が鈍くなかったら、もうちょっと、何とかなったのに。
一体僕はどうしたらいいの。)

結局、シンジはアスカの気持ちを分かっていることを思い知らされた。

(アスカは、いつ精神的に立ち直るのかなあ。

あの悪夢はいつ見なくなるんだろう。

1週間かな、1か月かな、それとも…。その間は、アスカの世話が
出来るけど、その後は…。

悔しいけど、どうしようもないね。

それより、アスカはいつまで一緒にいてくれるのかなあ。

治った後、アスカに逃げられたら最悪だね。

どんなことをしてもアスカの心を捕まえておかないと。

しばらくは、アスカの機嫌を取らないといけないね。

ああ、嫌だ。

アスカと離れるなんて、絶対に嫌だ。)

シンジは厳しい顔をしたが、一瞬、良い考えが浮かんだ。

（そうだ！アスカをネルフから離れないようにすればいいんだ。アスカの能力は折り紙付きだし、ネルフもアスカのことを必要としているし。

何と言つても、アスカのプライドが保たれるから、アスカの機嫌も良くなるだろうし。

ネルフのことなら、僕も手伝えることがあるはずだ。

マヤさんや日向さんに頼めば、アスカの手伝いをさせてもらえるかもしれない。

アスカと一緒に仕事をすれば、仲良くなれる機会も増えるし、僕自身も仕事を覚えれば、一石二鳥じゃないか。

僕は、今まで、何て後ろ向きに考えていたんだろう。

それじゃ駄目だ。前向きに考えないと。

それに、ネルフにいれば、アスカが同年代の他の男と知り合う機会も減るじゃないか。）

シンジは、やっと安堵した。

（でも、それでいいのかな。

それに、アスカは僕のことを一体どう思っているんだろう。もう一度冷静になって考えようかな。）

シンジは、頭を切り換えて、アスカとの関係について、もう一度整理することにした。

（僕は、日中は全部アスカの手伝いをして、食事も全部作ってる。

お風呂もアスカと一緒に、着替えとかも全部僕がやっている。しかも、夜は一緒に寝ているし。

うーん、これじゃあ、どう考えても恋人以上だなあ。

普通はここまでしないよね。

僕達は、いつの間にか、恋人みたいな、いや、それ以上の関係になつていたんだね。)

シンジは苦笑した。これでは、アスカと恋人になつても、状況に大して変化はない。

(トウジによく夫婦ゲンカつてからかわれたけど、そうだったのか。冷静に振り返ると、僕とアスカは、周りから見ると、仲が良かったんだね。

僕は鈍いから、気付かなかったけど、アスカもそうだったのかなあ。)

シンジは出会つた頃からのシンジを思い出していた。

(アスカは、最初からわがままだった。

でも、僕はマグマの中に飛び込んで、アスカを助けてあげた。

毎日、おいしい食事を作つてあげた。

お弁当もいつも作つてあげた。

家事全般を殆どやってあげた。

こき使われてもあんまり文句を言わなかった。

わがままを言つても聞いてあげた。

アスカが何を言つても笑つて許してあげた。

当たり散らしても受け止めてあげた。

何も悪くないのにアスカが怒ると謝つてあげた。

それに…アスカのために、僕とつて地獄とも言つべき所に戻つて来た…。)

シンジは、いつしか苦笑していた。

（アスカは僕に対して、感謝してくれているのかなあ。アスカは僕に酷いことばかりしてきた。

機嫌が良いときはこき使われた。

嫌がる僕をあちこちに引き回した。

つまらないことがあると僕に文句を言った。

嫌なことがあるといつも僕に当たり散らした。

気に入らないことがあると僕に怒った。

僕が困っても助けてくれなかった。

悪いことはみんな僕のせいにしていた。

シンク口率で抜いた時も八つ当たりした。

僕は何も悪いこととしていないのに。

アスカだったら、何て酷いことばかりするんだろう。

それなのに何で僕はアスカのことが好きなんだろう。

何でアスカに優しくするんだろう。

何で、何で、何で…。

こんなアスカのことを好きになるなんて…。）

シンジの目にはいつしか決意の色が浮かんでいた。

（でも確かなことがある。

僕は、アスカの外見に惚れたんじゃない。

僕は、アスカの体目当てじゃない。

アスカの良い所悪い所まとめて好きなんだ。

今まで誰も構ってくれなかった。

今まで誰も励ましてくれなかった。

今まで誰も怒ってくれなかった。

今まで誰も心配してくれなかった。
今まで誰も引っ張ってくれなかった。

でも…

アスカは僕に構ってくれた。
アスカは僕を励ましてくれた。
アスカは僕を怒ってくれた。
アスカは僕を心配してくれた。
アスカは僕を引っ張ってくれた。

アスカだけが僕を変えようとしてくれた。

でも、アスカは僕に好かれて嬉しいの？
アスカは僕のが好きなの？
嫌いじゃないのは確かなようだけど。
分からない…。

アスカの気持ち分からない…。

でも、これだけは言える。
今はアスカが必要。

アスカがいると心が安らぐ。
アスカがいないと不安が襲う。
アスカがいると笑顔が浮かぶ。
アスカがいないと笑顔が消える。

だけど、これ以上余計なことを考えるのはよそう。
今、大事なのは、アスカの側にいること。
アスカに笑顔を見せること。
アスカが笑顔を浮かべること。

今はそれが全て…。)

シンジは、ため息をついた。

(やっぱり、考えすぎるのはだめだ。

不安ばかりが先に立つ。

深く考えるのはやめよう。

僕は自分の気持ちに素直になればいいんだ。

無理をする必要はない。

当分の間は、アスカと恋人でいて、その間にアスカの気持ちを理解しよう。

アスカが僕のことを好きになるのか、他の人を好きになるのか、まだ分からないけど、

やるだけやってみるしかないのだから。)

そこで、シンジは『アスカ君には、精神的支えが必要だ。例えば、

恋人がいるといいかもしれない。』

という冬月の言葉を思い出した。

(アスカは辛い思いをしてきたみたいだから、僕が一所懸命支えよう。

それ位は僕にも出来るはずだ。

冬月さんの言うことが本当なら、僕が支えれば、アスカの心は癒されるはずだ。

アスカのために、頑張るんだ。

アスカのことを大好きな僕なら出来るはずだ。)

シンジは、アスカの笑顔を思い出した。

（今はそれでいい。

アスカの精神が立ち直るまで、僕は精一杯、アスカを支えていこう。その上で、アスカに自分の気持ちを伝えていこう。

今はゆっくり考える時期だ。

今すぐ結論を出さなくてもいい。

時には立ち止まるのも必要だから。

急ぐ必要はないのだから。）

自分の気持ちに整理をつけたら、シンジの心は軽くなった。いつしか、シンジは、寝息を立てていた。

第9話 今は立ち止まって（後書き）

偉いのか、臆病なのか、シンジはアスカにエッチなことをやり放題だった絶好の機会を、

みすみす逃します。超ドスケベなシンジにとっては、苦渋の選択だったでしょう。でも、

後にそれが報われる日が来ます。もし、この時シンジが野獣になっていたら、アスカとは

離ればなれになっていたかもしれません。

第10話 新たな友人（前書き）

僕達に友人が出来ただけで、ちょっと変わっているんだ。
長い髪をした美少女だけど、たまに変なことを言うんだ。
それも、どうもアスカのことを気に入っているらしい。
一体これからどうなるんだろう。

第10話 新たな友人

「ふあああつ。」

シンジは大きなあくびをする。

「ああ、良く寝たな…。」

シンジが呟くと同時だった。

「アンタ、何でアタシの隣で寝ているのかしら。理由を聞きたいわね。」

アスカの恐ろしく冷たい声でした。

「え、アスカ、おはよう。」

（こ、これは、昨日と同じ展開じゃないか。）

「シンジ、何でアタシと一緒に寝てんのよ。聞かせてもらおうじゃない。」

「覚えていないの。」

（嘘だろう。）

「覚えてない。」

「昨日の晩、僕が帰ってきたら、アスカが急に悲鳴をあげたんだ。」
（何なんだよ。）

「ほーっ、それで。」

「僕が近寄ったら、アスカが泣いてて、一緒に寝てくれって頼んだ

んだ。」

(そうだよ、泣いてたよ。)

「 あっそ。それで。 」

「 『一緒に寝てくれたら、アタシ、シンジのこと…す、少しだけど、す、好きになってあげる。』

そして、シンジが望むなら、シンジの恋人になってもいいわよ。』
なんてアスカが言うから、僕はアスカと一緒に寝ることにしたんだよ。」

(そうだよ、恋人になったんじゃないか。)

「 それで。 」

「 これで全部だけど。 」

(頼むよ、思い出してよ。)

「 ふうん、アタシがそんな作り話を信じているの。 」

「 ほ、本当だよ。アスカは本当に覚えてないの。 」

(思い出せないの？嘘だろう。)

「 記憶に無い。 」

「 そ、そんなあ…。昨日も同じこと言っていたのに。 」

(そんな、バカな。)

「 他に言う事はないのね。じゃあ、判決を言い渡すわよ。アンタ、死刑! 」

「ええっ！そんなあ。酷すぎるよ。」

（本当に忘れちゃったの。酷すぎるよ。）

「正直に言わなかったからよ。」

「そうか、信じてくれないんだね。」

「いいよ、それなら。でも、アスカがそこまで言うなら、僕にも考えがあるよ。」

（しょうがない、昨日と同じように言ってみよう。）

「はん、なあに。言ってみなさいよ。」

「もう、いくら頼まれても、アスカとは寝ない。絶対だよ。それでいいね！」

（昨日は、これで良かったよね。）

「シンジ、ふざけたことを言うと、グーで殴るわよ。目を閉じなさい。」

そう言うと、アスカはシンジの方を向いた。

「アスカ、酷いよ。僕の言うこと聞いてよ。」

（げっ、今日は強気だ。やばい。）

「今すぐ目を閉じる！閉じないと、物凄く痛く殴るわよ！」

シンジはいやいや目を閉じた。だが、口は動いていた。

「アスカ、聞いて…。」

（そ、そんなあ。）

シンジの声はそこで止まった。シンジの口は、アスカの口でふさがれたのだ。

シンジの舌にアスカの舌が絡み、シンジの顔に浮かぶ表情は、戸惑いから困惑へそして歓喜へと変わっていった。

どれ位の時間が経ったのだろうか。アスカとシンジの口が糸を引きながら離れていった。

「シンジく、ごめんね。」

ちよつとからかってみたくなったの。

キスしてあげたから、許してちょうだいね。」

もつとも、キスは一緒に寝てくれたお礼だけだねえ。」

アスカは、そう言って、可愛くにつこりと笑った。

「もう、アスカだったら、勘弁してよ。寿命が縮まったじゃないか。」

そう言ってシンジは口をとがらせた。

（あゝ、びっくりした。）

怒りたいけど、こんな笑顔を見せるなんて、反則だよ。これじゃあ、怒りたくても、怒れないじゃないか。）

「だって、からかえるのって、今回限りでしょ。」

。明日からは、さすがに無理だし。」

まあ、可愛い彼女のキスに免じて許してね。」

「え、彼女って。」

「あゝ、シンジのバカア。
アタシ達、恋人同士になつたんじゃないの。
だから、アタシはシンジの『彼女』でしょ。
それとも、単なる同居人の方がいいのかしら。」

「い、いや、そんなことないよ。」
(げっ、やばっ。怒らせちゃったかな。)

「じゃあ、アタシはシンジの何なの。」

「えっと、アスカは、僕のこと、恋人で、つまりは、彼女…かな。」
(うわあ、恥ずかしいな。)

「なにももってんのよ。まあいいわ。
でも、これだけは忘れないで。
他人に聞かれたら、シンジがアタシに告白したって正確にいうのよ。
シンジが恋人になって欲しいって言ったから、アタシはOKしたんだからね。」

そこんところは絶対に間違えちゃ駄目よ。」

「う、うん。分かったよ。絶対に間違えないよ。」
(アスカも変なことにこだわるよな。別に、どうでもいいのに。)

「絶対よ。じゃあ、早速だけど、可愛い彼女のために朝食を作ってくれないかしら。
シンジ、お願い。」

「うん、いいよ。」
シンジは起き上がると、洗面所から濡れタオルを持ってきて、アスカに渡すと、朝食の支度を始めた。

一方、アスカはタオルで顔を拭くと、布団の脇に置いてある鏡に向かい、髪をとかし始めた。朝の身支度の始まりである。時計の針は7時を指している。

「アスカ、ご飯出来たよ。」
シンジから声がかかる頃には、アスカの身支度は殆ど終わっていた。身支度に必要な物は、前日にシンジが布団の枕元近くに用意してあったため、あまり手間はかからなかった。後は、シンジに着替えを手伝ってもらった。

「シンジの料理って、おいしい。」
アスカはにこにこしながら朝食を頬張っている。対するシンジも頬が緩んでいる。

「アタシって、こんなおいしい料理が毎日食べられるなんて、幸せね。」

「そ、そんなことないよ。」
(アスカったら、甘えちゃって、可愛いな。)

「いつもありがとね。」

「ううん、どういたしまして。僕もアスカに喜んでもらって嬉しいよ。」
シンジの顔はまだ真っ赤である。

もちろん、今日もシンジはアスカの口に食事を運んでいるため、真つ赤なのであるが。

「ふふつ。で、シンジ、今日は何か用事ある？」

「ううん、無いけど。」

「じゃあ、ちょっと連れて行って欲しい所があるんだけど。」

「うん、いいよ。で、どこに行くの？」

「近所よ。じゃあ、食べ終わったら、車椅子の用意をお願いね。」

「うん、いいよ。」

その後二人は良い雰囲気の中で食事をした。シンジは、何故かとても心地よい感じがした。

（恋人になったら、アスカの態度がこんなに変わるなんて。

こんなに良い雰囲気ですごい出来栄のは久しぶりだね。良かった。

冬月さんの言う通り、僕が恋人になることで、アスカの精神的支えになれたのかな。

アスカが元気になれば、僕も嬉しいし。

いつまでも、この状態が続けばいいな。）

そんなことを考えながら、シンジはにこやかに食事を続けた。

もちろん、食事の後に、シンジの頬にアスカがキスしてきたのは言うまでもない。

「あつ、シンジ、そこそこ。そこよ。」

アスカは周りをきよるきよるしながら、とあるマンションを指す。

アスカは、シンジに車椅子を押ししてもらって、自宅近くのマンションを目指していたが、

割合簡単に目的の場所を見つげられた。

「アスカ、このマンションに何の用なの。」

「後で教えるわ。」

そう言うアスカはマンションの中に入って行った。

アスカはエレベーターに乗ると、12階のボタンを押した。

そして、目的の階で降りるときよるきよるしながら、動いて行った。

そして、アスカは、1208号室の前で動きを止めた。

「シンジ、ブザー押して。」

アスカの頼みに応えて、シンジがブザーを押そうとした時、後ろから声がした。

「そ、惣流さん…。」

二人が驚いて振り返ると、髪の高い美少女が立っていた。

ストレートのさらさらの茶髪に細面の顔、左右に長い瞳が印象的な、アスカとは違ったタイプの美少女だった。

「おはよう。アタシは、惣流・アスカ・ラングレーよ。こっちはア

タシの彼の碇シンジ。

あなたは、もしかすると、森川雪さんかしら。」

「は、はい。」

少女は驚いているようだ。

「今日は、お礼を言いに来たの。」

そう言うと、アスカはにっこりと微笑む。

「も、もしよろしかったら、うちにあがってください。ここでは、何ですから。」

その少女は、顔を少し赤くしながら言った。

「それじゃあ、ちょっとだけおじやまするわ。」

アスカは少し迷ったが、好意に甘えることにした。

「シンジ、肩貸してね。」

アスカはそう言うと、シンジの助けを借りて、森川さんの家の中に入って行った。

「...と、言う訳で、ユキはアタシを見かけて、ネルフに連絡してくれたのよ。」

お蔭でアタシは、危ない所だったけど、助かったらしいの。」

精神が崩壊して街を彷徨っていたアスカを見つけ、

ネルフに連絡したのは、森川雪であることをアスカはシンジに話し

た。

「だから、ユキはアタシの命の恩人なの。ありがとう、ユキ。」

本当に何てお礼を言ったらいいか。」

アスカはユキに頭を下げた。

早速『ユキ』と呼んでしまふところがアスカらしい。

「そうか。森川さん、アスカを助けてくれて本当にありがとう。心からお礼を言うよ。」

シンジもそう言うのと、にっこり笑った。

「えっ、そんな。私は当たり前のことをしただけです。から。気にしないでください。」

ユキはそう言って俯いた。

「でも、本当に助かったわ。ありがとうね。」

アスカはにっこり笑って言った。

それから3人は、学校の話題で1時間程盛り上がった。

先生のこと、友人のことなどだ。

A先生と3年生のB子が出来ているらしいとか、

Aの男の子とBの女の子がつきあっているとかいった類のとりとめのない話だったが、

シンジもアスカも、久々ににぎやかで楽しい時間を過ごした。

3人は笑いながら話していたが、突然、ユキが改まって聞いてきた。

「あのく、さつき、惣流さんは、碓君のことを彼って言うってませんでした?」

それを聞いてシンジは内心驚いた。

（えっ、そうだったけ。気付かなかったよ。

アスカが他人に僕のことを『彼』って言うなんて、嬉しいけど、恥ずかしいな。）

一方、アスカは当然の如く答えた。

「ええ、そうよ。」

「えっ、聞き間違いじゃ無かったんですね。」

「まあね。」

「二人がつきあっているっていう噂は本当だったんですね。」

「うーん、本当とは言えないわね。

だって、アタシ達が恋人同士になったのは、つい昨日のことだもの。」

「えっ、そうなんですか。で、どちらが告白したんですか。」

「えっと〜。」

アスカはチラッと、シンジの方を見た。

「実は、僕からアスカに告白したんだ。」

シンジは、アスカの意図を理解し、口を出した。

アスカは心の中でニンマリとしたようで、顔に少しだが、笑顔が浮かんだ。

「と、いう訳なのよ。ユキ、分かった？」

「ええ、でも、碓君のどこがいいんですか？」

「優しいところかな。他にも色々あるけどね。」

「そう言うアスカの顔が少し紅くなる。」

「ちょっと意外でしたね。」

「でも、惣流さんが付き合う位の人だから、碓君は見かけによらず、
凄い人なんでしょうね。」

「いいこと言うわね。シンジは、そんじょそこらの軟派な野郎とは、
一味違うのよ。」

「分かる人にしか分からないけどね。」

「アスカの顔がパツと明るくなった。」

「そうなんですか。私、碓君のこと、見直しちゃいました。」

「碓君で、実は、凄い人なんですね。」

「あはははは。そうでもないけどね。」

「（も、森川さんて、ずいぶん、飛躍した考えを持っているんだね。」

「アスカと付き合うと、何で凄い人になるんだろう。ちょっと、ついでいけないや。」

「褒められているのかどうか良く分からないため、シンジは乾いた笑
いをする。」

「そんなことないです。惣流さんが付き合う人ですから、碓君は凄
い人なんです。」

それなのに、碓君は謙遜しているんですね。さすがだわ。」
ユキは、真剣な表情で言った。

「まあ、それ位にして。アタシも恥ずかしいし。」
さすがのアスカも、ユキの理屈には付いていけないようだ。

「そうですね。碓君のどこがいいかについては、後でゆっくりと、詳しく聞きますから。」

本人の前では言えませんがね。」

「ユキ、あんたって、そういう人だったの。」
アスカはちよつと驚いたような顔をした。

「ごめんなさい。でも、凄く知りたいんです。惣流さんて、人気者
ですもの。」

ユキはそう言うと、ペロツと舌を出した。

「まあいいわ。ユキは命の恩人だし。でも、今は駄目よ。もうちよ
としてからね。」

「はい、それでいいです。」
ユキはアスカの良い返事を聞いて、にっこりと笑った。

9時半になり、そろそろ帰ろうかという時に、ユキがアスカの体調
のことを聞いてきた。

「惣流さん、体調はいかがですか。」

「良くなつてはいるけど、まだ、風呂も一人では入れないのよ。」

「えっつ。じゃあ、私が一緒に入りましょうか。ねっ、そうしまし
よう。」

「えっつ。」

アスカの顔にあせりが浮かんだ。

（うぐん、どうしよう。）

アスカの裸は見たいけど、毎日一緒にお風呂っていうのも大変だし、
僕の理性が保てないよ。

ここは、誰かに手伝ってもらった方がいいかな。

よし、OKサインを出しておこう。アスカが気付くといいけど。（

そう考えると、シンジは右手でOKサインを出した。

すると、アスカがチラッとシンジの方を見た。

アスカは少し考えていたようだが、ユキの申し出を快く受けること
にしたようだ。

「お言葉に甘えても、いいのかしら。」

「ええ、私は全然構わないわ。」

それどころか、お役に立てた方が嬉しいの。

学校はいつ始まるか分からないし、やる事が無くて、死にそうなのよ。」

「じゃあ、お願いするわ。何時頃だったらいいのかしら。」

「そうね。6時位ならいいかしら。」

「じゃあ、待ってるわね。また後でね。」
そう言っつて、シンジ達は帰って行った。

こうして、シンジ達は、森川雪という新たな友人を得たのだった。

第10話 新たな友人（後書き）

キャラ設定：森川雪

マンション住まいで、妹と弟の3人で暮らしているが、母を幼い頃に亡くしたため、炊事、掃除、洗濯などの家事一切を担っている。シンジ達の隣の2-Bであるが、アスカのことが大好きで、後にヒカリアにアスカ教の信者と言われるほど憧れている。学校の外では、時間の許す限りアスカの後をストーカーのように密かにつけ回しており、精神が崩壊して街を彷徨っていたアスカを見つけたのも、偶然ではない。密かに女子だけのアスカファンクラブをつくり、その代表になっていたりする。

外見はストレートのさらさらの長い茶髪、細面で左右に長い瞳が印象的な、清楚な感じの美人であり、クラスで一番の美人であるが、アスカやレイの美しさとは比べるべくもない。マナとは良い勝負かもしれない。性格はややおとなしく、少し抜けているところがあがるが、基本的にはしっかり者である。

これからは、ネルフに絡まないところでは、準レギュラーと断言していいほどよくちよく登場する予定。

第11話 マヤのお願い

ユキの家から戻ると、アスカは開口一番、シンジに尋ねた。

「シンジ、アタシと一緒に風呂に入れなくなって、本当に良かったの？」

「うん、ちょっと残念だけど、理性を保つので、結構大変なんだ。」

だから、少しホツとしているのも事実なんだ。」

「へへっ、それってどういう意味かな？」

アスカはニヤリと笑いながら聞く。

「アスカって、可愛いし…、このままだと、アスカに変なことをしちゃいそうで怖いんだ。」

でも、そんなことをして、アスカに嫌われたくないんだ。」

シンジはつつむき加減でそう言った。

(こんな答じゃまずいかな。でも、本当のことだし。)

シンジは心配したが、取り越し苦労だったようだ。

「ふうん、シンジも普通の男の子なんだ…。」

「あつ。いや、その、えっと。」

シンジは自分の言ったことに気付कि、真っ赤になった。

「いいのよ。褒めてくれてありがと。それに、正直に言ってくれて嬉しいわ。」

でも、安心して。最後の一線を超えなければ、シンジのこと、嫌いにならないから。」

「うーん、超えない自信がないんだけど。」
(アスカって、物凄く可愛いからね。今まで抑えられたのが奇跡だよ。)

「大丈夫よ。シンジはアタシのことが好きなんですよ。だったら、アタシに嫌われるようなことは出来ないわ。それに、アタシはシンジのこと、信じてるから。」
アスカはそう言うと、にっこりと微笑む。

「そ、そうだよね。」
アスカが信じてくれるなら、僕もアスカの信頼に応えるように努力するよ。

だって、アスカのことが大好きだから。」
(そ、そうだよね。アスカは僕のことを信じてくれているんだ。ああ、僕は自分が恥ずかしいよ。)
アスカのような、純真な心が羨ましいよ。)

シンジは、本当に真剣な表情で言った。

「ありがとう、シンジ。」
アスカは再び微笑んだ。

「ピンポン。」
ちょうどその時、いい雰囲気壊す音がした。
シンジはちよっと残念そうな顔をして玄関へと向かった。

「あ、マヤさん。おはようございます。」

突然の訪問者はマヤだった。

「シンジ君、急に来ちゃってごめんね。また、お仕事をお願いなの。」

「ええ、いいですよ。どうぞ、上がってください。」

「悪いわね。お休みのところ、お邪魔して。」
そう言いつつ、マヤはリビングへと向かった。

「マヤ、おはよう。」

アスカは、少し機嫌が悪かったが、相手がマヤと知って、機嫌が元に戻ったようだ。

「おはよう、アスカちゃん。昨日はありがとうね。物凄く助かったよ。」

「ううん、どういたしまして。あれ位、お茶の子さいさいよ。」
アスカはそう言って胸を張る。

「そう、助かるわ。今日は、悪いけど、これ全部お願いね。」
マヤはそう言つと、書類がたくさん入った紙袋を差し出した。
昨日の書類の優に5倍はありそうだ。

「まさか、これ全部今日中なの？」
アスカの頬がひくついている。

「うづん、出来れば1週間位でやってくれると嬉しいんだけど。」
マヤはひくつくアスカを見て、慌てて答える。

「1週間ね。シンジが手伝ってくれば、何とかなるかもね。」
書類をぱらぱらと見ながら、アスカが言う。

「本当、ありがとう。お願いね。」
マヤの目は輝いている。

実は、この仕事は、本来は半年位かかるものと思っていたので、マヤにとって、アスカは天使に見えるのだ。

「分かったわ。じゃあ、出来たら連絡するわね。」

「ええ。それと、もう一つアスカちゃんにお願いがあるの。」

「えっ、なあに。」

「実は、アスカちゃんのことを色々な部署で欲しがっているの。」
アスカちゃんは可愛いから、広報部が特に欲しがっているの。」

「へえっ。そうなの。」

「でも、私は、うちに欲しいの。」

だから、出来たら技術部を希望してくれると嬉しいんだけど。お願い
いできないかな。」

「ふうん、面白そうね。」

分かったわ。マヤだったら知らない仲でもないし。

正直言つて、アタシは理工系が好きだから、丁度いいかもね。
で、何をやるの。」

「アスカちゃんは、エヴァのパイロットだから、その経験を活かして、兵器開発をやって欲しいの。」

同じ理由で、エヴァの運用管理もね。」

それで、余力があれば、MAGIの運用管理を手伝って欲しいの。」

「そ、それって、半端な仕事量じゃないでしょう。」

「アスカちゃんなら大丈夫よ。出来る範囲で構わないし。」

「まあ、いいわ。」

でも、体が言うことを聞くようになるまでは、このままでいたいんだけど。」

要は在宅勤務がいいんだけどね。」

「ええ、いいわ。といっても、アスカちゃんが技術部に所属したらの話だけどね。」

「駄目そうなの。」

「ううん、分からないの。碇司令もはっきり言わないし。」

私は司令に直訴したんだけど、同じことをしている所があるのかもね。」

「さっき言っていた、広報部？」

「そうね。他にもあるかもしれないの。でも、先輩がいないから、私は物凄く大変なの。」

MAGIの運用管理だけでも、気が遠くなるほどの仕事量があるの。」

「

「じゃあ、人を増やせばいいじゃないですか。」
(冗談じゃないよ。アスカと一緒に時間が減るじゃないか。)

それまで黙って聞いていたシンジが口をはさむ。

「シンジったら、バカね。今のネルフじゃあ、お金が幾らあっても足りない状況なのよ。
新しく人を雇うお金なんて、あるわけ無いじゃない。」
アスカはあきれて言った。

「そうね。アスカちゃんの言う通り、今のネルフはお金が無くて、人員増は難しいの。
だから、今の人員でやるしかないのよ。」

「それに、機密事項を扱う人間は少ない方がいいいでしょ。
元々、アタシ達チルドレンは機密を嫌ほど知っているし、そういう点からも、うってつけなのよね。」

「ふうん、そんなもんなのかなあ。アスカって、良く知っているね。」
シンジはアスカを少し尊敬した。

「そりゃそうよ。機密をスパイにべらべらと得意気に話す誰かさんとは違うもの。」
そう言いながら、アスカはシンジのことを見る。

「うっ。」「めん。」
(ヤバイ。マナの一件だな。)

シンジは反射的に謝った。

「まあまあ。じゃあ、私は今日はこれで失礼するわ。アスカちゃん、出来たらお願いね。私を助けると思って。それじゃあね。」
「マヤはそう言つと、去って行った。」

「さうて、どうしようかな。」
マヤが去った後、アスカは呟いた。

「やっぱり、アスカは技術部に行きたいの？」
（ふう。アスカはネルフで働く気がいい。良かった。これで、アスカの側にいる機会が増えるかもしれない。）

「まあね。マヤ一人じゃ、無理だし、しょうがないでしょ。まあ、司令が何を考えているのかは分からないけどね。」

「そうか。アスカは忙しくなっちゃうね。」
（アスカが忙しいとあまり会えなくなるかもしれないな。）

「シンジも遊んでないで、ネルフで働いたら。そうしたら、アタシと一緒に時間が、少しは増えるわよ。いくら忙しくても、食事の時間位は一緒になれるでしょ。」

「そうだね。僕も考えてみるよ。」
（やった。これなら、アスカの手伝いがしたいと言えば、OKしてくれるかも。）

『アタシと一緒に時間が、少しは増えるわよ。』
なんて言うってことは、一緒に働こうって意味だよな、きつと。（

「じゃあ、今日頼まれた仕事は二人でやるのよ。アタシが先生になって、みっちりとしごくから、覚悟しなさい。」

「ええつ。そんなあ。」

（おっと、アスカの仕事が手伝えるなんて、ラッキー。

これで、ネルフでもアスカと一緒に働けるかもしれないよ。でも、僕の下心がばれるとまずいから、演技しておこう。）

シンジはがつくりと肩を落とした。

そして、その日から1週間、アスカの厳しいしごきが始まるのだった。

その日の夜6時丁度に、ユキはやって来た。

ユキは、アスカとシンジに仕事を続けるように言つと、夕食を作り始めた。

もちろん、3人分である。

お蔭で、二人は7時まで仕事を続けることが出来た。

「夕御飯、出来ましたよ。」

ユキの声がすると、シンジとアスカは食卓へ向かった。

そして、3人で和気あいあいと食事をした。

ユキは、アスカのことを、色々と聞いたりせずに、

『惣流さんのお話が、何でもいいから聞きたいな。』

と言つたため、アスカの自慢話を中心になつてしまった。

アスカは、1時間かけてガギエルとの戦いの顛末を自慢気に話し、途中で何度かシンジが『こんなこともあったんだよ。』と口を挟むといった調子だった。

ユキは、アスカの自慢話を嬉しそうに聞いていたため、アスカも上機嫌になった。

食事の後は、シンジは洗い物、アスカとユキはお風呂となった。

ユキは思ったよりも力があり、シンジの力を借りずにアスカを持ち上げて、風呂へと運んで行った。

自宅でお風呂に入ってきたというユキは、アスカの体を洗うと、二人して湯船に浸かり、

女の子同士の話に花を咲かせた。

ファッションの話を中心に、殆ど一方的にアスカがしゃべりまくるのだが、ユキは結構嬉しそうな様子だった。

アスカも良い聞き相手が出来て上機嫌だった。

ユキが風呂を出て、帰る支度が出来た頃には、9時を少し回っていた。

ユキは明日以降も来てくれることを約束し、嬉しそうに帰って行った。

アスカと話したことが、とても楽しかったようだ。

帰り際に、アスカはユキにちよつとした頼みごとをした。

ユキが帰った後、シンジにはアスカのマッサージが待っていた。

「アスカ、どう？気持ちいい？」

シンジの手がアスカの腕をさする。

「うん、シンジ、ありがとう。もうちょっと優しくしてくれるとい

いな。」

「うん、わかったよ。」

「そう、そこそこ。そこが気持ちいいわ。もっとやって。」

「はいはい。お嬢様。」

「シンジがこんなにマッサージがうまいんだったら、もっと早く頼むんだっとな。」

あゝ、失敗した。」

「でも、昔のアスカだったら、嫌がったんじゃないかな。」

「そうかもね。でもいいわ。過ぎた事は忘れないと。」

「それでこそ、アスカだよ。アスカは、前向きに生きなきゃ。」

「褒めても、何も出ませんからねえ。ふふっ。」

「出なくてもいいよ。僕に優しくしてくれればね。」

「そうね。朝はからかって、ごめんね。許してね。」

「もう、いいよ。アスカは愛情のこもったキスをしてくれたし。」

「シンジ、まだ愛情はこもってないのよ。わ・か・っ・た？」

「ちえっ、残念だな。」

シンジは本当に残念そうに言った。

「あつたり前でしょ。愛情をこめてほしかったらもつともつとアタシに優しくするのよ。」
「いい、分かった。」

そんな平和な会話をしながら、30分ほどマッサージを続けた後、二人は横になった。
眠りにつこうとするシンジに対して、アスカが声をかけた。

「ねえ、シンジ、起きてる?」

シンジがアスカの後ろにいることから、アスカからはシンジの顔が見えないため、アスカは小声で言った。

「うん、起きてるよ。」

シンジも小声で答える。

「シンジにお願いがあるんだけど、いいかな。」

「うん、なあに。言ってみて。」

「うん、アタシって、シンジのことを知っているようだけど、以前のシンジのこととか、結構知らないことが多いでしょ。」

シンジもアタシのことを知らないじゃない。

でも、アタシ達って家族でしょ。それじゃあいけないと思うのよ。だから、アタシ達、もっとお互いのことを話した方がいいと思うの。シンジはどう思う。」

「そうだね。僕もそう思っていたけど、切り出せなかったんだ。」

「じゃあ、夜のこの時間は、お互いのことを聞き合う時間にしましよう。」

「じゃあ、早速、アタシから。シンジの小さい時のことを教えて。」

「小さい時のことか。あんまり、いい思い出はないけどね……。」
そう言いつつも、シンジは、アスカに自分の子供時代の事をぼつりぼつりと話し始めた。

公園でお母さんが迎えに来る友達が羨ましかったこと、周りにあるものに当たり散らしたこと、
自分がいらぬ子だとずっと思っていたこと。
シンジはそんなことを淡々と話した。

アスカはそれを聞いて、驚いたような様子だったが、
でも、しばらくすると、寝息が聞こえてきた。

アスカはいつの間にか眠りについていた。

第11話補完 マヤの反論

シンジ達の家から帰った後、マヤは司令室に直行した。
ゲンドウに呼ばれていたのだ。

「アスカちゃんを技術部にくださるのでしょうか。」

マヤは尋ねた。だが、意外にも答はノーだった。

「アスカ君は、広報部からかなり強い引きがあるのだよ。」
冬月が説明する。

「でも、アスカちゃんがいないと、本当に困ります。
しかも、本人の希望も確認しています。」

「ですから、是非技術部に下さい。」
マヤはそう言って頭を下げた。

「だが、アスカ君について、面白い調査結果が出たのだよ。」
冬月はすまなさそうに言う。

「と、いいますと。」

「アスカ君の能力が驚異的なのではなく、どうも、アスカ君は、M
AGIを使っていた形跡があるのだよ。
だから、アスカ君は驚異的なスピードで処理が出来たのだと思う。」

「それは、本当ですか。」
マヤは、心底驚いたようだ。

「ああ。だから、私と碇はアスカ君の能力が驚異的ではないと判断したのだよ。」

「だったら、広報部の方がアスカ君も活躍出来るだろう。」

それを聞いたマヤは啞然とし、口をポカンと開いたままだった。

「そういうわけで、マヤ君には悪いがアスカ君は広報部に回すつもりだ。」

冬月は、本当にすまなさそうな顔をして言った。

だが、シヨックから立ち直ったマヤは反論を開始した。

「司令も副司令も、大きなミスを犯しています。」

「うん、なんだね。」

冬月は、ちよつと驚いた顔をした。

「お忘れでしょうか。私もMAGIを使えるんですよ。」

それでも、アスカちゃんの方が早いんですよ。」

その意味が分かりませんか。」

「分からないが、それがどうしたのかね。」

「アスカちゃんは、私よりもうまくMAGIを扱えるということですよ。」

それが分かった以上、アスカちゃんは広報部なんかには渡せません。絶対に！」

マヤの迫力に、ゲンドウと冬月は自分達の誤りを認めない訳にはいかなかった。

第12話 ミニスカート

「ふあああつ。」

シンジは大きなあくびをする。

「ああ、良く寝たな…。」

シンジが呟くと同時に、アスカが声を掛けてきた。

「シンジ、おはよう。」

アスカの優しい声がした。

「え、アスカ、おはよう。」

シンジは、アスカの優しい声に安心したのか、明るく返事をした。

「シンジのお蔭で、昨日もぐっすり眠れたわ。ありがとう。」
そう言うと、アスカはシンジの方を向いた。

「シンジ、ご褒美よ。」

アスカの声はそこで止まった。シンジの口は、アスカの口でふさがれたのだ。

「さあ、シンジ、昨日の続きをやるわよ！早く食事の用意をして！」
長いキスが終わると、アスカは元気よく言った。

続きとは、昨日マヤに頼まれた書類の処理のことだ。

昨日は運良くユキがいたため、1時間程であるが、余分に仕事が出来て、かなり助かったのだ。

「今日も森川さんがいると、助かるんだけどね。」
シンジがぼろつと呟く。

「ユキに、あんまり迷惑をかけられないでしょ。」
アスカは直ぐに反論する。

だが、ちょうどその時、玄関のチャイムが鳴った。

「あれ、こんな時間に誰だろう。」

そう言いながらも、シンジは玄関に向かった。

「あれ、森川さん、おはよう。」

どうやら、突然の訪問客は、ユキのようだ。アスカは慌てて起き上がった。

「「ごじゃ、なんだから上がったよ。直ぐにアスカも起きてくるから。」

シンジはそう言うと、ユキをリビングに案内した。

「ちょっと待っててね。アスカを連れてくるから。」

シンジはアスカの部屋に入り、暫くしてからアスカをリビングに連

れて来た。

「どうしたの、ユキ。」

ユキを見るなりアスカは尋ねた。

「おはようございます、惣流さん。朝食はまだですよね。」

「うん、これからシンジが作るそこだけだ。
まだ、朝の7時だ。」

「良かった。実は、惣流さんと食べようと思って、サンドイッチを作ってきたんです。」

ユキはそう言っつて、テーブルの上にサンドイッチを広げだした。

「あれ、いい匂いがするね。」

シンジも匂いには合格点を付けたようだ。

「ユキ、ありがとう。お言葉に甘えて、皆で食べましょう。」

かくして、3人は楽しくおしゃべりしながら、サンドイッチを頬張った。

7時半を回った頃、アスカはユキに問いかけた。

「今日はどうしちゃったの、こんなに早い時間に。」

「ええ、昨日はお二人とも、ネルフのお仕事で大変だったでしょう。ですから、私も何かお手伝いしたいと思って来たんです。」

食事を作ったり、お掃除したり位は出来ますから。もっとも、お昼には、いったん家に戻りますが。」

「そう。それだけでも助かるわ。ありがとう、ユキ。」

「そんな。私は、惣流さんのお役に立てるだけで、嬉しいですから。」

「じゃあ、後は任せたわ。シンジ！とつとと始めるわよ！」

アスカは意気揚々として仕事を始めたので、シンジもアスカの手伝いを始めた。

シンジとアスカが悪戦苦闘している間、ユキは掃除に洗濯、炊事、布団干しと、テキパキと片付けていった。

そのお蔭で、シンジは、アスカの手伝いに専念することが出来たため、思ったよりも早く仕事は進んでいた。

「惣流さん、碇君、お昼ご飯ですよ。」

12時を少し回った頃、ユキに呼ばれて、アスカ達はリビングにやって来た。

テーブルの上には、ミートスパゲッティ、ドリア、サラダ、コンソープが並んでいた。

「あら、いい匂いね。おいしそう。」

「そうだね。森川さんて、料理が上手なんだね。」

「ありがとうございます。それでは、いただきますしょう。」

こうして、3人は、またもや楽しそうにおしゃべりしながら、食事を楽しんだ。

食後の紅茶タイムが終わるとユキは家に帰った。妹達の面倒を見るためだ。

もちろん、夕方には、また来てくれるはずだ。

「よし、シンジ、もう一踏ん張りよ。」

アスカはシンジにハツパをかけた。

「うん、頑張ろう、アスカ。」

(アスカと一緒に出来るなんて、嬉しいな。)

こうして二人は今日もマヤに頼まれた仕事を片付けていった。

今日も、夜6時丁度に、ユキはやって来た。

ユキは、アスカとシンジに仕事を続けるように言うと、夕食を作り始めた。

「夕御飯、出来ましたよ。」

ユキの声がすると、シンジとアスカは食卓へ向かった。

今日のメニューは洋風で、メインはステーキだった。

それ以外にも魚のムニエルやサラダ、そしてクラムチャウダーなどが並んでいた。

しかも、パンとご飯のどちらも用意されていた。

「あら、結構豪華ね。嬉しいな。アタシはパンがいいな。」
シンジの料理は和風が主体であるため、洋風の食事はあまり多くない。

そのためか、アスカの顔は、ニンマリしていた。

しかも、アスカのステーキは、一口大に切られて、食べ易くなっていた。

「ユキって、気が利くのね。ありがとう。」

「喜んでもらって、嬉しいわ。残らず食べてくれると、もっと嬉しいですけど。」

「そんなに食べたなら、太っちゃわよ。」

「そうですね。」

「むづ。少しは否定しなさいよ。ほら、シンジ！そこで笑わない！」

シンジは、クスクス笑っていたため、アスカに一睨みされる。

「ははは、アスカごめんよ。でも、アスカは、もっと太らなきゃ駄目だよ。」

「くすん、酷いわ。シンジはアタシのことが嫌いになったのね。」

「そ、そんなことないよ。僕はアスカが好きだよ。」

「ふふふ、仲のよろしいことで。」

「もう。シンジのバカ。」

こんな調子で、3人で和気あいあいと食事をした。

ユキは、今日も『惣流さんのお話が、何でもいいから聞きたいな。』
と言ったため、アスカの自慢話为中心になってしまった。

アスカは、1時間かけてイスラフェルとの戦いの顛末を自慢気に話し、

途中で何度かシンジが口を挟むといった調子だった。

もつとも、今日はアスカが、話しを自分に都合のいいように解釈して話したため、

シンジが文句を挟むことが多かった。

そのせいで、アスカが『どっちの言うことを信じるの?』と、何度も聞いたが、

ユキは、アスカの肩を持ったので、シンジはガクツと肩を落としていた。

このため、アスカは今日も上機嫌になった。

アスカ曰く、『アタシの方が人徳があるのよ!』ということらしい。
食事の後は、シンジは洗い物、アスカとユキはお風呂だ。

ユキは昨日と同様に、アスカを持ち上げて、風呂へと運んで行った。
ユキは、アスカの体を洗うと、二人して湯船に浸かり、またもやフ
アッションの話を中心に花を咲かせた。

「ねえ、ユキ。例のもの、買ってくれた?」

「ええ。赤、青、緑、黄、白、黒、オレンジ、ピンク、紫ですよね。
後は、豹皮ですね。」

言われた通り買いましたよ。」

「ありがとね。」

「でも、あんなので外出するんですか。」

「まさか。家の中でしか着ないわよ。外に出る時は、上に何か着るわ。」

「そうですね。あの格好じゃ、ちよつと派手ですものね。」

「そうかなあ。」

「そうですね。」

アスカは、ユキに買い物を頼んでいた。それは、上下同じ色のブラとミニスカートだ。

ただし、ブラは外で着ても大丈夫なタイプであったが、さすがにアスカはそのまま外出

するつもりはない。ドイツとは勝手が違うからだ。

「あれを着て、碇君を悩殺するんですね。」

「ち、違うわよ。暑いからよ。あつたり前でしょ。」

まあ、シンジが喜ぶかもしれないって思ったのも事実だけどね。」

「いいなあ、碇君は。羨ましいですね。」

「ユキ、アンタ、逆でしょ。レズじゃあるまいし、変なこと、言わないですよ。」

「へへっ、ごめんなさい。で、今日は何色にしますか。」

「そうね。最初はやっぱり赤ね。」

「惣流さんなら、そう言うと思いましたわ。」

ユキはにっこり笑った。

それから30分程経っただろうか。シンジはアスカに呼ばれた。

「シンジく、ちょっと来て。」

「はい。」

アスカに呼ばれて、シンジはアスカの部屋へ向かった。

そこで、シンジは思わず鼻血を流すところだった。

アスカは、上下共赤い色をしたブラとミニスカートという格好だったからだ。

「ア、アスカ。どうしちゃったの、そんな格好で。」

シンジが焦るのも無理はない。

アスカは、水着姿にミニスカートともいうべき格好だったからだ。

シンジは視線を落としたため、ちょうど、アスカの足の辺りに視線が向かった。

（ア、アスカって、やっぱり可愛いな。でも、恥ずかしくて、見られないや。）

だが、アスカはシンジの反応にがっかりしたようだ。

思った反応とあまりにも違ったらしい。

シンジが、さつきから何も言わずに、アスカのミニスカートの辺り（実際には、アスカの足の辺り）を見ているのが原因だろう。

「あら、シンジ。そんなに似合わないかしら。」

アスカは、少し落胆したように言う。

だが、その言葉に、シンジは我に返ったようだ。

「に、似合うよ。アスカ、と、とっても綺麗だよ。」

その言葉を聞いて、少し暗かったアスカの顔が、パツと明るくなる。

「えへへっ。ホント？」

「う、うん。思わず、見とれちゃったよ。」

シンジはそう言うと、アスカに近寄ってきた。そして、いきなりアスカに抱きついた。

「アスカ、何て可愛いんだ。アスカ、大好きだよ。」

シンジはアスカを力強く抱きしめる。

アスカは、一瞬、何が起きたのか分からず、戸惑っていたが、シンジの背中に手を回して、目をつぶった。

だが、それも束の間。はっとした顔になり、目を開いて叫んだ。

「バ、バカ、何するのよ、シンジ！ 離れなさいよ。」

アスカの顔は真っ赤になった。

「アスカは、僕のことを嫌いになったの？」

「バカ！周りを良く見なさいよ！」

その声に驚いてシンジが辺りを見渡すと、ユキのにやにやした顔が目に入った。

シンジの顔が一瞬にして、蒼白になる。

「ごめん、アスカ。」

そう言うなり、シンジはアスカから体を離れたが、もう遅い。ユキに、しっかり見られてしまっていたからだ。

「あら、いいんですよ。私のことは気にしなくても。いないと思って、どうぞ、続きをしてくださいな。」
ユキはくすくす笑っている。

「んも〜、シンジったら、信じらんない。何、盛ってんのよ。」
アスカの顔は、恥ずかしさで一杯で、真っ赤なままだ。

「ごめん、つい…。アスカが凄く可愛かったから…。」
シンジはそう言っとうなだれる。

「そうですよ。惣流さんが可愛い格好をするからですよ。
碓君のせいじゃないですから、あんまり責めちゃ、可哀相ですよ。」
ユキはニンマリしている。

「もう、いや〜。」

アスカは、両手で顔を隠して、イヤイヤした。
そんなアスカを見て、ユキはにっこりと微笑むのだった。

ユキが帰る支度が出来た頃には、9時を少し回っていた。

ユキは、今日も嬉しそうに帰って行った。

帰り際に、『いいものを見させてもらいました。』と言ったので、アスカとシンジは真っ赤になった。

ユキが帰った後、シンジにはアスカのマッサージが待っていた。

今日のマッサージの時は昨日と違って、二人とも口を開かなかった。会話をせずに、30分ほどマッサージを続けた後、二人は横になった。

眠りにつこうとするシンジに対して、アスカが声をかけた。

「ねえ、シンジ、起きてる？」

アスカは小声で言った。

「うん、起きてるよ。」

シンジも小声で答える。

「今日も、昨日の続きをお願いしたいんだけど、いいかな。」

「うん、いいよ。」

シンジはアスカに自分の子供時代の話をした。

昨日は、幼稚園と小学生低学年のときの話だったので、今日は小学校高学年からの話だ。

昨日と同じく、暗い話が多かったが、シンジは淡々と話しを続けた。話は、シンジがこの街に来る直前のことまで続いた。

「じゃあ、今日はこれで終わりにするね。おやすみなさい。」

シンジはそう言つと静かになつたが、しばらくして、アスカの方からシンジに話しかけてきた。

「ねえ、シンジ、起きて。」

「ああ、起きてるよ。」

「さっきはごめんね。アタシが悪かつたわ。ユキが帰ってからにすれば良かったのよね。」

「ううん、僕も悪かつたんだよ。周りも見ないで、アスカに抱きついたりして。」

「ねえ、聞いて良い？」

「うん、なあに。」

「何で急に抱きついてきたの。」

「ううん、うまく説明出来ないけど、アスカがとっても可愛いくて、思わず抱きしめたくなっちゃったんだ。」

「ごめんね、驚いたよね。」

「ううん、本当は、凄く嬉しかったの。」

アタシ、シンジに褒めて欲しかっただけなんだけど、あそこまで喜んでくれるとは思わなかつたから。」

アタシ、毎日着るわね。」

「えっ、毎日？洗濯しないの。」

「全部で10色あるのよ。」

だから、組み合わせは100通りもあるの。だから、楽しみにしてていいわ。

ユキがない時なら、抱きしめてもいいからね。」

「そ、そう。た、楽しみにしているよ。」

この時、アスカは、良い気分になっていた。

シンジに着ているものをこんなにも褒められたことは、今までは無かったし、

『悪夢を見たくないから恋人になった。』などということは、綺麗さっぱり忘れて、

シンジとは、本当の恋人気分でいたからだ。

この時のアスカは、シンジのことを本当に好きになりかけていたのだ。

だが、アスカはかなり大きな勘違いをしていた。

シンジは、アスカの胸を見ないように、ミニスカートの辺りばかり見ていたのだが、

アスカは、シンジがミニスカートの方を気に入ったと思ってしまったのだ。

一方、シンジは、刺激が強いため、さっきの格好は止めて欲しかったのだが、

アスカの嬉しそうな声を聞いて、止めて欲しいとは言えなくなってしまっていた。

しかも、10着も買っていたとは。シンジは心の中で、深いため息をついていた。

もちろん、アスカはシンジがそんなことを考えているとは、想像すらしていないだろう。

（アスカは可愛いけど、ちょっと刺激が強すぎるよ。
僕は、水着だって、まともに見られないんだよ。
やっぱりわかってくれないだろうけどな。）

シンジはいつしか眠りについていた。

第12話補完 アクセス

ゲンドウは、諜報部に連絡を取っていた。

「そうか…。分かった…。」

ゲンドウは、諜報部との連絡が終わると冬月に向かって首を振った。

「そうか、駄目だったか。」

冬月は肩を落とす。

「マヤ君の言うことが正しいようだな、碇よ。」

ゲンドウも冬月の問いかけに対して頷く。

「しかし、アスカ君がこれほどとは思わなかったな。」

ゲンドウは、今度は答えない。

だが、冬月は続けて話す。

「MAGIを使っているのは間違いないと思われるのに、どうやって使っているのか全く分からないとは。」

アスカ君は手品でも使っているのか。」

ゲンドウは、諜報部を使ってアスカがどうやってMAGIにアクセスしているのか調べたが、結果は出なかった。

アスカの家の回線からデータのやり取りがあるのは確認できたが、一体どこに繋がっているのかが、全く解明できないのだ。

しかも、MAGIの方も不正にアクセスされた形跡はない。MAGIのコピーも同様にアクセスされた形跡はなかった。

そうになると、アスカがMAGIを使わずに処理をしているか、誰にも分からない方法でアクセスしているか、どちらかになる。ゲンドウは後者だと睨んで調査したが、全然解明出来なかった。そこで、アスカの家の回線を直接調べるという方法を取ったのだが、それでも駄目だったのだ。

普通は、アクセス先からアクセス元をたどるので、経路を探すのが非常に困難になるのだが、今回は、アクセス先もアクセス元も両方分かっているのに、経路が分からないのだ。

しかも、MAGIにアクセスした形跡を消すことは、リッコでも難しいことだった。

もちろん、内部から行つのならリッコ以外でも出来ないことはないが、外部からとなるとリッコでも出来るかどうか、怪しいものだった。もちろん、マヤでは不可能だ。

だから、この一点だけを見てもマヤよりもアスカの方が、MAGIの扱いに長けていると考えられるのだ。

「仕方ない。アスカ君を呼んで、直接聞くしかなさそうだな。」

冬月が呟くと、ゲンドウも頷いた。

第13話 トウジとヒカリ（前書き）

僕とアスカは恋人同士になったけど、トウジと洞木さんの仲は、あれから全然進展していない。

親友のヒカリのためと、アスカが一肌脱ぐことになった。もちろん、僕も協力する。

嫌だけど、嫌とは言えないだろうな。

第13話 トウジとヒカリ

「ふあああつ。」

シンジは大きなあくびをする。

「シンジ、おはよう。」

アスカは、優しく声をかける。

「アスカ、おはよう。良く眠れた？」

シンジは、いつも通りに、明るく返事をした。

「シンジのお蔭で、昨日もぐっすり眠れたわ。ありがとう。」

そう言うと、アスカはシンジの方を向いた。

「シンジ、ご褒美よ。」

アスカの声はそこで止まった。いつもの朝のキスだ。

キスの後、アスカはニヤツと笑って言った。

「実は、シンジにお願いがあるの。」

シンジは物凄く嫌な予感がしたが、アスカの笑顔からは逃れられなかった。

「さあ、シンジ。今日は何色のミニスカートがいい？」

アスカは3日前にミニスカートを10色買い、

一昨日からシンジに何色がいいのか聞いてくるようになったのだ。

最初の日こそ、色々な色を試しに着てみたのだが、シンジが鼻血を出してしまったため、シンジの希望を聞くことにしたのである。

(一昨日は緑、昨日はピンクだったよね。だったら、今日は…。)

「そうだね、今日は青がいいかな。」

そう言って、シンジは青いミニスカートに同色のブラを出し、アスカに着させてあげた。

「青ね。いいんじゃない。」

アスカは微笑む。

嫌いな色は買っていないから、何でもいいはずなのだが、やはりアスカも女の子である。

恋人に選んでもらった色を着たいようだ。

「どう、シンジ。似合うかな？」

アスカはシンジに聞いた。

シンジは答える代わりに、アスカを抱きしめた。

最初にシンジにお披露目した日に、シンジはアスカを抱きしめてしまったが、

アスカがあまり嫌がっていないようだったので、次の日からも、シンジは誉めると同時に抱きしめることにしたのだ。

「アスカ、何て可愛いんだ。アスカ、大好きだよ。」

自然にアスカを誉めるセリフが口が出る。

みるみるうちに、アスカの顔が真っ赤になる。

「えへへっ。ありがと、シンジ。」

アスカは、嬉しそうな顔をした。

そして、しばし時間が止まった。

「あつ、そうだ。シンジ、紺のシャツも取って。」

今日は、二人してマヤの所に行く予定だった。

ユキが家事全般をやってくれたため、シンジがフリーになり、結果として、

6日はかかると思われた仕事が4日で終わったのだ。

ネルフに行くとなると、ミニスカートは良くても上がブラだけでは、ちよつとマズイ。

このため、上には紺色の半袖シャツを着ることにしたのだ。

アスカがシャツを着ている時、玄関のチャイムが鳴った。もう、7時になっていた。

「あ、森川さんだ。」

シンジは玄関に向かった。

「森川さん、おはよう。」

シンジはそう言うのと、ユキをリビングに案内した。

「ちよつと待っててね。アスカを連れてくるから。」

シンジはアスカの部屋に入り、暫くしてからアスカをリビングに連れて来た。

「おはようございます、惣流さん。今日は、巻き物にしました。」

ユキはそう言って、テーブルの上に太巻き、ネギトロ、鉄火巻きなどを広げだした。

「ユキ、おはよう。じゃあ、食べましょう。」

かくして、3人は今日も楽しくおしゃべりしながら食事をした。

朝食が済んだら、直ぐにアスカとシンジはネルフへと向かった。ユキは残って、掃除や洗濯を引き受けてくれることになった。アスカ達は、ユキにお礼を言ってから出かけた。

ネルフでの用事は、簡単に済んだ。

マヤは、アスカ達が急に現れたため驚いた顔をしていたが、MAGIでチェックして問題無しと分かると、かなり大げさなお礼を言った。

「アスカちゃん、こんなに早く出来るなんて思わなかった。

本当に助かる。もう、神様、仏様、アスカ様、シンジ様だわ。

お礼に何でも言うつことを聞いてあげるわ。」

「実は、青葉さんに頼み事があるんですけど、マヤさんからも頼んで欲しいんですが。」

「シンジ君が。もちろん、いいわよ。」

「お願いします。じゃあ、悪いけど、アスカはここで待っていて。」

「ええ、いいわよ。行ってきなさいよ。」

こうして、シンジとマヤは青葉シゲルの元へ向かった。

40分後、シンジはシゲルにお礼を言っていた。

「すみません、無理なお願いをしちゃって。」

「いや、シンジ君の役に立てて、嬉しいよ。」

「トウジは何て言っていましたか。」

「ああ、快く、了解してくれたよ。」

シンジ君のことを、『幸せになって欲しい』とも言っていたよ。」

「そうですか。トウジは、友達思いの良い奴なんです。」

「でも、さっきは驚いたよ。まさか、シンジ君から、恋の相談を受けるとはね。」

シゲルは、シンジを刺激しないように、落ち着いた口調で話した。

「僕も驚いているんです。」

最初会った時は、アスカのことを高慢ちきで嫌な女だと思っていたました。

でも、違ったんです。アスカは口は厳しくても、本当は優しいんです。

けれど、アスカのプライドが邪魔をして、中々素直になれないんです。最近そのことに気付いてからは、アスカのことが気になって、夜も寝つけないんです。

これじゃあいけないと思って、何度かアスカに好きだと言おうと思っただんですが、

アスカを目の前にすると何も言えないんです。

何か、きっかけがないと駄目なんです。」

「だから、それは今回俺が作ったから、何とかモノにするんだよ。

まあ、相手があのアスカちゃんだから、バチーンと一発やられるだろうけど、怯んじやいけないよ。

攻めて攻めて攻めまくるんだ。」

「はい、頑張ります。」

「おそらく、トウジ君と一緒に告白しようと言ってくるだろうから、ウンと言えればいい。

後は、アスカちゃんの前で勇気を振り絞ってごらん。

シンジ君の言うように、誰かと一緒に告白した方が少しは気が楽だろう。」

そう言って、シゲルはウインクした。

つい20分ほど前、シンジはシゲルに恋の相談をした。

アスカが好きでたまらないが、断られるのが怖くてどうしても告白出来ない。

誰かと一緒に告白すれば、或いは勇気を出せるかもしれないから、何とかトウジを説得して欲しいと。

(青葉さん、騙したようでごめんなさい。これも、トウジのためなんです。)
シンジは、心の中でシゲルに謝るのだった。

さらに20分後、車椅子に乗ったアスカとシンジがトウジの所に訪れた。

ヒカリも一緒だった。

「トウジ、調子はどうかな。」

「鈴原、元気？」

「鈴原、死んでない？」

三者三様の問いかけだった。

「ああ、調子はええ。センスはどうや。」
トウジはシンジに問いかけたが、アスカが遮った。

「コイツ、全然駄目よ。気が利かないし、役に立たないし、もう最悪！」

全く、バカシンジなんだから。そのうち、生ゴミに出そうかしら。」

「ちょっと、アスカ、言い過ぎよ。」

ヒカリがさすがにたしなめる。

「いいのよ、こんなウジウジした奴。こら、バカシンジ！アンタのせいで、ヒカリに文句言われちゃったじゃない。」

謝りなさいよ！このバカ！」

アスカは、キツイ顔をしてシンジを睨んだ。

「ごめんよ、アスカ。」

シンジはうなだれた。

そんなシンジの様子をしばらく見ていたトウジだったが、たまりかねて声をかけた。

「ちょっと、センセ、こつち来いや。」

トウジは、シンジをアスカ達から見えない所へと連れて行った。

「どないしたんや、センセ。惣流にやり込められて。悔しくないんか。」

「いいんだ。実際、僕は意気地なしだし。」

「ああ、もう。センセは惣流のこと、好きなんやろ。さっさと、告白しいや。」

「僕には、そんな勇氣はないよ。」

トウジだって、そうだろう。

洞木さんのことが好きなのに、何も言えないじゃないか。

僕だって同じだよ。」

シンジは、トウジがヒカリのことを気に入っていることを知っていた。

「おっ、言ってくれるやないか。

じゃあ、約束や。

ワイは、これから委員長に告白するから、センセも惣流に告白するんや。

男と男の約束や。」

「ト、トウジ…。」

「約束や！」

トウジはシンジのことを澄んだ目で見つめた。

「わ、わかったよ。」

シンジは、トウジと目を合わせられなかった。

シンジとトウジが戻って来たのを見て、アスカが声をかけた。

「なによ、二バカで、何の相談。どうせ、いやらしいことでしょう。」

アスカは鼻で笑う。

だが、トウジはアスカを相手にせずヒカリの前に立った。

同様に、シンジもアスカの前に立った。

トウジの合図を皮切りに、二人同時に告白を始めた。

「い、委員長。ワイは、委員長のことが好きや。付きおつてくれ。」

「ア、アスカ。僕は、アスカが好きだ。付き合っただけだ。」

これに対する反応は、天と地の差があった。

ヒカリは、赤くなりながらも直ぐにコクリと頷いたが、アスカはいきなりシンジの頬を引っぱらいた。

「バシーン。」

乾いた音がして、シンジの頬は、真っ赤になった。

「アンタ、バカア！」

こんなところで、いきなり告白なんて、デリカシーってもんが無いの！
一体、何考えてんのよ！

ホント、あつたま来るわね！

ふざけんじゃないわよ！」

アスカの凄まじい怒鳴り声にびっくりしたトウジとヒカリだったが、さらに驚くべきことが起きた。

シンジが急に、アスカの口を自らの口で塞いだのだ。

左手を挙げてシンジを殴ろうとするアスカを、シンジの右手がつかんで止めた。

アスカはしばらく抵抗したが、次第に抵抗が弱まっていった。

二人の様子を近くで見っていたトウジも、意を決したようにヒカリにキスをした。

こちらはシンジと違い、最初から全く抵抗を受けなかった。

こうして、2組のカップルの熱いキスが続いた。

2組のカップルは、お昼に食堂で鉢合わせした。4人とも、出会うと同時に真っ赤な顔になった。その中で、最初に口を開いたのは、ヒカリだった。

「ア、アスカ達は、どうなったの。」
ヒカリの顔はまだ赤い。

「う、うん。多分、ヒカリ達と同じだと思う。」

「えっ。じゃあ、碓君と付き合うの?」

「お、おかしいな。」

「ううん、そんなことないよ。ねっ、トウジ。」

「そ、そや。二人とも、お似合いや。」

「そ、そう。ありがとう。」

アスカは、恥ずかしそうにもじもじしていた。

そんなアスカを見て、トウジは驚いた。

さっきまでのキツイ顔が信じられない位、穏やかで照れた顔をしていたからだ。

「ほお、惣流も、年貢の納め時か。」

「ふ、ふん、いいでしょ。」

アンタだって、同じじゃない。

変なこと言つと、ヒカリから怒つてもらうわよ。」「
アスカは、頬を膨らまして言つたが、刺の有る口調ではなかったの
で、トウジは安心することが出来た。

「そりゃ堪忍や。」「

「まあいいわ。こうなつたからには、乾杯よ。」「

「へ?」「

と、トウジ。

「いいの。アタシが乾杯つて言つたら、乾杯なの。ジュースでいい
から。」「

アスカはジュースを頼み、来たと同時に乾杯を急かした。

「じゃあ、二組のカップルが出来たことに乾杯するわよ。

もてない男どもに、可愛いくて素敵なお彼女が出来たことを祝して、
かんぱ〜い!」「

「かんぱ〜い。」「

「かんぱ〜い。」「

「かんぱ〜い。」「

残る3人も、アスカに合わせて乾杯した。

こうして、和やかな雰囲気になつたところで、4人とも普段よりも
恥ずかしそうにしゃべるのだった。

その頃、発令所は大騒ぎだった。シンジがアスカに告白するという話を聞いたマヤは、悪いと思いつつも覗き見することにしたのだ。

しかも都合のいいことに、シンジ達が告白した場所、つまり、アスカ達が居た場所は、何故か監視カメラの真ん前だったので、かなり鮮明な映像が得られたのだ。

それだけなら良かったのだが、マヤはうつかりしてメインスクリーンに映像を写してしまったのだ。

こうして、シンジの告白シーンと二人のキスシーンは、ネルフ職員が多くが知るところとなった。

昼食の後、シンジとアスカはチルドレン専用の休憩室に来ていた。ここならば、誰も入って来ないからだ。

「シンジ、さっきはごめんね。痛かったですよ。」
アスカはシンジの頬を優しく撫でた。

「大丈夫だよ。それに、トウジ達も嬉しそうだったし、良かったよ。」

「そうね。シンジのお蔭ね。ヒカリも喜んでいると思うわ。ありがとう。」

実は今日の朝、アスカはシンジに計画を打ち明けた。
このまま行くと、ヒカリとトウジはすれ違いになる可能性がある。
ならば、今のうちに二人をくっつけてしまおうというものだった。
そのため、昨日のうちにアスカはヒカリをここに来るよう呼んでいたのだ。

だが、シンジには、別の思惑があった。

シンジは、シゲルやマヤを始めとするネルフの人達に、

シンジとアスカが付き合っているという事をオープンにしたかったのだ。

さらに、シゲルやマヤに、シンジとアスカの仲が進展したのは、シゲル達が1枚噛んでいると思わせたかったのだ。

そうすれば、少なくともマヤやシゲル達は一度手を貸した手前、シンジとアスカと一緒にいられる時間が出来るように配慮してくれるだろうし、

ネルフの中でアスカに変な虫がつく可能性が大幅に減ると思ったのだ。

この思惑はうまくいき、シゲルとマヤは、シンジ達が付き合うようになったのは、

自分達が仲立ちをしたおかげだと思うだろう。

後でアスカが気付いても、アスカもマヤを騙したことになるから、本当のことは言えないはずだ。

後は、アスカとの仲が進展したり後退したりした時に、シゲルやマヤに相談すれば、

良い助言を得られるだろうし、色々な手助けも期待出来る。

『将を射んとすれば、まず馬を射よ』という格言がシンジの頭の中に浮かんだ。

ちよつと違つような気がするが、今のシンジは気付かない。
シンジは、思わずにっこりする。

シンジは、ふと、我に返つた。

目の前には、お礼の言葉を言うアスカがいた。

シンジは、少し考えた後で恥ずかしそうに言った。

「僕のお蔭なら、何かご褒美があると嬉しいな。」

アスカはそんなシンジを見て、『クスッ』と笑い、口を尖らした。
シンジは直ぐにアスカの意図を理解し、微笑みながらキスをした。

第13話 トウジとヒカリ（後書き）

キャラ設定：洞木ヒカリ

アスカの親友。2002年2月18日生まれ。市立第一中学に在籍する。

クラスの委員長で、割合真面目な性格である。アスカの協力によって、かねてから想いを寄せていたトウジと恋人同士になった。

第13話補完 接触

暗い部屋の中で、低い男の声がした。

「盟主様。」

「何だ。」

「惣流・アスカ・ラングレーとの接触到に成功しました。」

「で、返事はどうだった。」

「OKです。」

「そうか。」

「惣流・キョウウコ・ツエツペリンの友人だと言ったら、思ったよりもすんなりと。」

例の写真の効果は絶大でした。」

「そうだろうな。」

「ただ、色々と条件を付けられました。」

「何をだ。」

「ゼーレに関する情報の提供、
エヴァに関する情報の提供、
従業員200人規模の企業の提供、

ネルフに対する敵対行為を一切しない確約、
以上4点です。」

「まあ、妥当だろうな。」

「その代わりに、時価数億円の宝石は、突っ返してきました。」

「はははっ。さすがだな。言う通りにしてやれ。」

「はっ、わかりました。」

「それから、彼女に対するガードを5倍にしろ。
ネルフの邪魔にならんように、うまくやれ。以上だ。」

「はっ。」

男が返事をすると同時に通信は切れ、
それまで盟主と呼ばれた男が写っていた画面には、もう何も写って
いなかった。

「惣流・アスカ・ラングレーか。一筋縄ではいかないな。」

男はそう呟くと、部屋を後にした。

第13話補完 接触（後書き）

キャラ設定：盟主^{めいしゅ}

謎の組織のトップ。その正体・目的は不明だが、影に隠れてチルドレン達のガードをするよう部下に指示している。

第14話 おかえり

「惣流・アスカ・ラングレー、命令により、出頭いたしました。」

「碓シンジ、同じく出頭しました。」

二人は今、ゲンドウと冬月を前にしていた。

つい、先程まで、二人はいちゃいちゃしていたのだが、緊急の呼び出しを受けて、飛んできたのだ。

「まあ、二人とも、固くならず、楽にしてくれたまえ。」

二人の固い表情を見て、冬月が緊張を解くように声をかける。

そうして、二人が落ち着いた頃を見計らって、冬月は話し始めた。

「現在、ゼーレとの戦いは、終わっていない。

向こうから攻めて来ないのは、おそらくゼーレにはもう、エヴァがないのが原因だと推測される。

したがって、このままの状態が続くと、いつしか敵は再びエヴァを作り攻撃してくるだろう。

これは絶対に防がなくてはならない。

また、攻めて来ない理由の一つに我々の戦力不足がある。

残念なことに、我々は国外に攻め込む戦力を有していない。

それが分かっているからこそ、敵はのんびり構えているのだろう。

我々も、当初は諜報部を中心にして関係者の逮捕・拘束を行っていたつもりだったが、

実際には関係各国の協力が得られず、諜報部は、出国すら予定が立たない状況なのだよ。」

そこで、冬月は大きくため息をついた。

「各国の支部も組織の防衛に精一杯で、外に攻め込める状況ではない。」

下手に動いて軍隊に攻め込まれたら、支部なんてひとたまりもない。そうになると、残された我々の手段は世論に訴えて、敵の力を少しでも削ぐことなのだよ。

しかも、悪いことに、国連自体がゼーレのコントロール下にある。だから、我々は、当面の策として、各国家と手を結ぶことにしたのだ。

本部は日本国と、ドイツ支部はドイツ国と、それまでのわだかまりを捨てて、協力することにしたのだよ。」

そこで、冬月は再びため息をついた。

「だが、そんなことでは、当面はしのげても、長くは続かない。いずれは敵に攻められてこの本部も陥落するだろう。」

だから、何らかの手だてを考えなければならぬ。

そこで、S計画、ゼーレ殲滅・掃討計画のことだが、それを立案し、早急に行う必要がある。

だが、それにはネックは二つある。何だか分かるかね、シンジ君。」

「え、えっと、ミサトさんやリッコさんがいないことですか。」

(そんなこと、急に聞かれても、分からないよ。)

シンジは、心の中で文句を言った。

「それもあるが、もっと根本的なことだよ。アスカ君は分かるかね。」

「MAGIとEVAですね。」

「そうだ。」

我々は、NERV再生計画、通称NR計画と、EVANGERION再生計画、通称ER計画を立案したが、その二つのネックが解消されないのだよ。

MAGIの運用がうまくいかない現状では、組織の維持すら難しい。ましてや、EVAの再生など、夢の又夢だ。

このままでは、我々は、座して死を待つしかないのだよ。我々がおかれている状況は分かってくれたかね。」

「はい。」

アスカとシンジは声を揃えて答えた。

「MAGIについては、マヤ君の努力のお蔭で何とかネルフの運用に支障のない程度には

運用出来ているが、EVAの再生が出来る程度には至っていない。

やはり、リツコ君の抜けた穴は大きい。

そこで、我々は半ば諦めかけていたが、最近、一筋の光明を見いだした。

それが、アスカ君、君だよ。」

(えっ、冬月さんは、一体、何を言うんだらう。)

シンジは首を傾げたが、アスカの返事はすげなかった。

「はて、何のことですか。」

「アスカ君は、最近、MAGIを外部から使用したね。そんなことが出来る者は、今のネルフにはいない。」

そのことだけを捉えても、アスカ君の力が、MAGIに必要なのだよ。
もちろん、待遇の改善は当然として、昇給や昇進も考えている。
今考えているのは、2階級昇進と、技術部副部長のポストだ。受けてくれるかね。」

冬月の目は真剣だった。

(えっ、アスカが副部長！す、凄いよ、アスカ)

シンジは驚いた。だが、アスカの答えは冷たかった。

「申し訳ありませんが、お断りします。」

その瞬間、冬月の顔が呆然とする。

(えっ、何で断っちゃうの？アスカは、何を考えているんだろう。)

シンジが考えているうちに、冬月は、気を取り直して聞いてきた。

「どうしてだね。理由を教えて欲しいのだが。」

アスカは深呼吸をすると、淡々と答えた。

「理由はいくつかありますが、大きなものは、計画自体が稚拙で失敗する可能性が高いこと、NERVの最高幹部に信頼が置けない人物がいること、この2点です。」

沈んでいく船の中でどんなに頑張っても意味がないですし、船長に信頼が置けなければ、これもまた同じことです。」

「ははは。アスカ君は手厳しいね。では、協力してくれる可能性は無いのかね。」

「知っていることを全て教えてください。最低条件です。他にもいくつか条件がありますが。」

「何が知りたいのかね。」

「母の死の真相です。」

(えっ、アスカのお母さんの話…。)

シンジは、急な話の展開についていけなかった。

「そうか。話す時が来てしまったか。」

冬月は、視線を落とした。

「君のお母さん、キョウコ君は、シンジ君のお母さん、ユイ君と同様、エヴァのコアの中に取り込まれてしまった。」

その後、ユイ君のサルベージは失敗したが、キョウコ君のサルベージは一応成功した。

だが、それは不完全だったようだ。

後は知っての通り、キョウコ君は自殺してしまった。

そのため、サルベージしたのが本当にキョウコ君かどうかは、検証出来なかった。

キョウコ君が何をやろうとしたのかも、結局は謎のままだ。

だが、対外的にそんなことは言えないので、ネルフは、

キョウコ君が精神汚染を受けて自殺したということにしてしまった。これが私の知り得る限りの全てだよ。」

「そうですか。ママは一度はエヴァに取り込まれたんですね。」

そう言ったアスカの顔は、やっぱり、というような顔をしていた。

(アスカのお母さんも、エヴァに取り込まれていたんだ。)
シンジは、初めて聞く話に驚きを隠せなかった。
そんなシンジの心とは関係無しに、冬月は、話を続ける。

「そうだ。他に聞きたいことはあるかい。」

「もう一つだけ、碇司令にお聞きしたいことが。シンジのことが好きですか。」

(えええっ。)

シンジはそれを聞いて固まってしまふ。

また、ゲンドウの体もピクリと反応するが、答えの代わりに、ゲンドウは、アスカに質問した。

「…何故そんなことが知りたい。」

「答えてくれれば、お教えします。」

ゲンドウは、少しためらった後、静かに、しかし、はっきりと言った。

「…私は、今でもユイを愛している。そのユイと私の子だ。答えはイエスだ…。」

「そうですか。良かった。

子供のことが嫌いな親なんて、人間として、信じられませんから。それが理由です。」

「と、とうさん…。」

（父さん、初めて僕のことを好きって言うてくれた。信じていいのかな。信じてもいいんだよね。僕は、要らない子じゃ無かったんだよね。）

シンジの目に涙が浮かんだ。

シンジは、初めて父に好かれていると言われたのだ。

そのため、嬉しい気持ちで一杯になった。

そんなシンジを見て、ゲンドウは更に続けた。

「…シンジ。今まで悪かった。

許してくれとは言わないが、いつかは全てを話す。

その時には分かって欲しいと思う。」

ゲンドウのサングラスの奥に、一瞬だが、光るものが見えたような気がした。

「では、条件だが、一体何かね。」

冬月がゲンドウを思いやってか、話を続ける。

「私なりに、立案した作戦があるので、それを見ていただきたい。

次に、ある人物の協力を得たいので、手配をお願いしたい。

3つ目は、今住んでいる部屋の隣も使わせていただきたい。

4つ目は、私の昇進はここだけの秘密にさせていただきたい。以上です。」

「まあ、いいだろう。その作戦案とは、どこにあるのだね。」

「ここです。」

アスカは1枚のDISKを取り出し、冬月へと渡した。

「返事は明日で構いませんが、今日の6時までにはお願いしたいことがありますので、

遅くとも4時までには、DISKを見て下さい。」

「ああ分かったよ。だが、我々の質問にも答えて欲しい。」

「何でしょうか。」

「どうやって、MAGIにアクセスしたのかね。しかも、アクセスした痕跡を残さずに。」

「実は、アクセスには、隣の部屋の回線を使いました。

ちよこつと線を引くだけでしたから、思ったよりも簡単でした。

それで、私から発信した記録がどのも残らなかった筈です。

MAGIにアクセスした痕跡を残さなかったのは、開発者コードを使ったからです。

これにより、アクセスした痕跡を全て消すように命じました。」

「その開発者コードというのは、一体何かね。」

冬月の目が大きく開かれる。

「赤木ナオコ博士、私の母、碓ユイ博士の3人だけが持っていたといわれる、特別なコードです。

これにより命令したことは、他のあらゆる命令に優先するのです。ですから、実際には、私はMAGIにアクセスしましたが、その記録は抹消されたのです。」

「そうか。そんなものがあつたのか。」

冬月は驚いた顔をした。

「赤木博士も、碓ユイ博士も、誰にもそれを伝えなかったのでしょう。」

私だけが、母から受け継いでいたのです。」

「そうか、そんなからくりがあつたのか。」

「もつとも、私がこれを知つたのは、最近のことです。偶然、母の残した記録から見つけ出したのです。」

「事情は分かつた。では、明日また来て欲しい。」

それまでには結論を出すことにしよう。

それでいいかね。」

「結構です。良い返事をお待ちしています。」

アスカはそう言うと、ペこりと頭を下げた。

そんなアスカをシンジは感謝の気持ち一杯で見つめていた。

（ありがとう、アスカ。）

アスカは僕のことを思いやってくれたんだね。

やっぱりアスカは優しいね。

アスカを好きになって、本当に良かった。本当に……。)

シンジは心の中で、アスカに深く頭を下げるのだった。

アスカ達が家に帰ると、ユキがパーティーの用意をしていた。

「ユキ、ありがとう。シンジもこれから手伝うからね。」

「えっ、アスカ、一体どうしたの。」

「お祝いよ、お祝い。」

アタシの昇進祝いに、カップル誕生祝いに、あとは秘密。」

そう言っアスカはにっこりしたが、シンジはげんそうな顔をしていた。

「まあ、いいけどね。あれっ、リ、リビングが…。」

シンジの目が、今度は点になった。何と、リビングの広さが倍になっていたからだ。

「な、なんで…。」

シンジは、良く目をこらして見た。そして、ようやく理解した。

「と、隣の家と繋がったんだ。」

シンジは、さっきアスカが冬月に『今住んでいる部屋の隣も使わせていただきたい。』

と言ったことを思い出した。

「こういうことだったのか。アスカ、何でこんなことしたの。」

「だって、この方がパーティーをやり易いでしょ。」

「それだけなの。」

ちょっと、シンジの目がきつくなった。

「アタシ、何か悪いことしたの？」

シンジったら、怖い顔してるよ。

アタシ、広い方が良いと思ったから…。」

アスカは、瞳を潤ませる。今にも泣きそうな顔になった。

「そ、そんなことないよ。ごめんね、怖い顔しちゃって。ちょっと、驚いただけだよ。」

（ま、まずい。アスカが泣きそうな顔をしているよ。

さっきまでは、アスカに感謝していたのに、僕って、何てバカなんだろう。

アスカ、本当にごめん。）

シンジは、アスカの涙にはとことん弱いことや、先程の一件もあり、態度が一変した。

「本当に、驚いただけ？」

「うん、そうだよ。ごめんね、この通り。僕が悪かったよ。」

シンジは手を合わせて、頭を下げる。

「だ〜め。アタシを泣かそうとしたから、許してあげないもん。

許して欲しかったら、今直ぐに、ユキを手伝って。」

「わ、わかったよ。」

返事をすると同時に、シンジはエプロンを着て、ユキを手伝った。

「こんばんわ。」

6時前になって、ヒカリとトウジがやって来た。ケンスケも一緒だ。その頃には、パーティーの用意はすっかり出来ていた。テーブルの上を、所狭しと豪華な料理が並ぶ。

「お前ら、いいなあ。」

ケンスケが、いきなり恨めしそうな声を出す。

トウジ達から、アスカ達が付き合うことを聞いたのだ。

3バカトリオの中で、ケンスケだけが独り身になってしまったのだ。

「うっさいわね。もてない男のひがみなんて、みっともないいたらありゃしない。」

「おい、惣流。ケンスケが可哀相やないけ。」

「いいのよ。他人の幸せを祝福出来ない奴なんて、もてないに決まってるわ。」

ねえ、ヒカリ。相田ったら、ヒカリと鈴原が付き合うのが面白くないみたいよ。」

それを聞いて、ヒカリはケンスケを睨む。それを見て、トウジはたちまち無口になる。

「まあ、いいわ。」

じゃあ、乾杯の前に、皆に紹介するわ。

アタシの命の恩人の、森川ユキさんよ。

今は、アタシの家の、家事全般をやってくれてるの。とてもいい子で、相田みたいなの、オタクにはもったいないから、手を出さないように。」

それを聞いて、皆どつと笑う。一人落ち込むケンスケ。

「あと、二人お客さんが来るかもしれないんだけど……。」

アスカが言つと同時位だった。

「ピンポーン。」

ちょうどその時、玄関に誰かが来たようだった。

シンジはアスカに急かされて、玄関へと向かった。

「はい、どなたですか。」

シンジが聞いたのとほぼ同時に玄関が開く。

「あっ！」

客の顔を見たシンジの動きが止まった。

「あの、こんばんわ。私、ここに来るように言われて来たんですが……。」

その客は、動きの止まったシンジを見て、戸惑ったように話す。

だが、シンジの目からは、涙が次々とこぼれていく。

（良かった。やっぱり、生きていたんだ。良かった。本当に良かった）

た。」

シンジは、心の底から喜んだ。

「おい、シンジ、どないしたんや。」

トウジが痺れを切らしてやって来たが、トウジも金縛り遭ったように動かない。

そこに、ユキに肩を貸してもらって、アスカがやって来た。客の顔を見て、アスカの目からも涙が流れる。

シンジの目の前には、シンジの大切な家族の一人である、ビール大好き女と、

その親友である、猫好き女が立っていたのだ。

「…おかえりなさい。」

シンジは、絞り出すようにして、声を発した。

その顔は、涙でくしゃくしゃだった。

第14話 おかえり（後書き）

あとがき

ビール大好き女と、猫好き女が誰なのか、分かりますよね。他のSSだと、リツコはゲンドウと結婚したりしていますが、ここでは別の道を歩ませるつもりです。そのためには、記憶喪失であるのが都合がいいんですね。

ゲンドウについては、まだユイを諦めていないという設定です。それほどまでにユイが好きなら、シンジのことも本音では好きなのだろうと思います。

今のところ、主立ったキャラで出すかどうか迷っているのが、綾波とカヲルです。綾波が出るとアスカが霞んでしまうし、カヲルも扱いが難しいのです。

ゲームのキャラは、山岸さんは出しません。良く知らないのです。マナは、今の所ちよい役で出すつもりです。

キャラ設定：相田ケンスケ

2001年9月12日生まれ。シンジとトウジの3人でよくつるんでいる。

市立第壱中学に在籍する。エヴァのパイロットを希望している軍事オタク。

また、写真関係にも強く、アスカを始めとする、美人女子生徒の写

真を

男子生徒に売りさばいて儲けている。

今後は、要所要所でそこそこの活躍をする。

第14話補完 中学校再開

冬月は、ゲンドウに話しかけていた。

「碓よ、どうする。アスカ君の計画は、不確定要素が大きいようだが…。」

ゲンドウは、少し考えた後に答えた。

「…問題ない。」

冬月は、それを聞いて肩を落とす。

「碓よ、本当に、あの計画がうまく行くと思うのか。」

ゲンドウは、冬月の問いかけに対して頷く。

「失敗しても、我々にマイナス要素はない。

うまくいけば、大きなプラスとなる。

賭は賭けだが、賭けるチップは少ない。

セカンドは、失敗したらMAGIの管理運用に専念させれば良い。いずれにせよ、問題ない。」

「そうか。そういう見方もあるな。

分かった。では、アスカ君の計画をベースにしよう。

だが、そうなるとアスカ君の階級は、一尉でも低いな。

当面は二佐、計画が成功すれば一佐にするか。」

「ああ、それでいいだろう。」

「そうなるよ、アスカ君を補佐する人物が必要になるな。シンジ君に、赤木君が必要だろう。」

それに、身辺警護のために葛城君というのが妥当だろう。そうなるよ、アスカ君の頼み通り葛城君達は病院ではなくて、葛城君の家に送ることにしよう。」

いいな、碓。」

二人とも、今日の6時迄に着くようにしないと。」

「ああ、悪いが、そのように手配してくれ。」

「後は葛城君達を中学校の先生にする件だが、教育委員会に依頼しておこう。」

しかし、アスカ君も考えたな。」

葛城君が英語の先生で、アスカ君達の担任だと。」

それに、赤木君が理科の先生とはな。」

「葛城三佐は、惣流二佐の身辺警護。」

赤木君は、MAGIとの通信のサポートという任務をこなすには、最適と言えるだろう。」

「そうだな。」

葛城君は、英語もドイツ語もこなせるし、

赤木君は、中学生の理科なんて、簡単過ぎる位なものな。」

よし、そうなるよ中学校の再開は、早い方がいいな。」

2〜3週間以内に、強引に開校させるか。」

「任せる。」

「じゃあ、私は早速手配を始めよう。」

冬月は、そう言って部屋を後にした。

「…シンジの恋人か。シンジには、もったいないな。ゲンドウは、そう呟くと、かすかな笑みを浮かべた。」

第14話補完 中学校再開（後書き）

あとがき

今後は、学園エヴァみたいな雰囲気も出てきます。

ミサトやリツコは、一応理由があるので、学校の先生にしちゃいます。

やはり、チルドレンの警護は、重要な役割ですから。

実は、チルドレンを狙って様々な組織が第三新東京市に潜入を試んでいます。

全て撃退されているという前提があります。

やはり、パイロットは命懸けなんです。戦闘時もそれ以外も。

第15話 帰ってきたミサト（前書き）

ミサトさんが帰ってきて、本当に良かった。

アスカと二人だけの生活ではなくなるのは、ちょっと残念だけど。

アスカも喜んでみたいだ。

リッコさんも一緒にいるのは少し驚いたけど、これでまた我が家も賑やかになるかな。

第15話 帰ってきたミサト

「ミサトさん、お帰りなさい。」

シンジは、涙で顔をくしゃくしゃにしながら言った。

「あの、すみませんが、私のことを知っているんですか。」
ミサトは真顔で尋ねてきた。

「えっ。」

シンジの顔が強張る。

「あなたの名前は、葛城ミサト。」

この家の持ち主で、アタシ達の家族よ。」

シンジの後ろから、アスカが大きな声で言う。

「後ろの人は、赤木リツコ。ミサトの親友よ。」

今日からアタシ達の家族になるのよ。」

二人とも、そんなところで突っ立っていないで、早く上がりなさいよ。」

「は、はい。お邪魔します。」

「失礼します。」

ミサトとリツコは、あいさつして家の中に入ってきた。だが、その時。

「駄目よっ!」

唐突にアスカが叫んだ。

「えっ…。」

ミサトとリツコは目を丸くした。

「アタシ達の家族って言ったでしょ。自分の家に入る時はどう言うのよ。」

「あ……。た、ただいま。」

「ただいま。」

「そうよ、合格ね。お帰りなさい。

じゃあ、二人とも、とつとと上がりなさい。

今日は、貴女達がこの家に来たお祝い会よ。

ミサトが帰ってきたのと、リツコがアタシ達の家族になると、併せてのお祝いパーティーよ。」

「ア、アスカ。ミサトさんが帰って来るのを知ってたの。」

（さっき言っていたのは、ミサトさん達のことだったのか。）

「何となくね。まあ、そんなことはいいから、始めましょっよ。」

アスカは皆を急かす。シンジ達は首をかしげながらも、リビングへと向かった。

「かんぱ〜い！」

アスカの合図で、全員が乾杯する。

といつても、ジュースでだ。

何故かミサトやリッコもジュースで乾杯している。

乾杯が終わり、一息ついたところで、アスカが説明を始めた。

さすがのアスカも、シンジの突き刺すような視線に耐えかねたのだ。

「え〜と、みんな驚いているだろうから、アタシから説明するわね。ミサトとリッコは、一度あの世とやらへ行ったらしいんだけど、サードインパクトのお蔭で、こっちに戻って来たの。

でも、その時に強いショックを受けて、記憶喪失になっちゃったのよ。

そこで、今までネルフの病院で治療を受けていたんだけど、良くならないんで家に戻ることになったの。

記憶を失う前の環境と同じにした方が、記憶が戻り易いだろうという判断なの。

でも、リッコは独り暮らしだったから、親友であるミサトと一緒に住むことにしたのよ。

そついう訳で、二人はこれからここで住むの。

だから、今日はそのお祝いパーティーという訳なのよ。

みんな、分かったわね。」

一気に喋ると、アスカは周りを見渡した。

一瞬、沈黙が支配したが、ケンスケが静寂を破った。

「ミサトさん、相田ケンスケです。あなたの恋人です。思い出して下さい。」

「えっ…。」

驚いた顔をするミサト。

いきなり自分の歳の半分位の少年から恋人だと言われたのだから、無理も無いのだが。

だが、それを口火にして大騒ぎになった。

「おのれ、ケンスケ！ 抜け駆けしおつて！」
トウジがケンスケを睨み付ける。

「すずはら。抜け駆けつて何なのよ。」
今度は、ヒカリがトウジを睨む。

「ケンスケ。ミサトさんが固まっちゃっよ。冗談はやめてよ。」
シンジは困った顔をする。

「そうよ。ミサトは、このシンジが好きだったのよ。
でも、ごめんね。」

シンジはアタシの方が良いって言って、ミサトのこと振っちゃったのよ。」

「アスカ。変なこと言わないでよ。」
「ますますミサトさんが固まっちゃったよ。」
「ますます困るシンジ。」

「ミサトさん。」

相田ケンスケ、相田ケンスケこそが、本当のあなたの恋人です。
騙されないで下さい。

他の人は、嘘をついているんです。」

「おのれ、ケンスケ！ 適当な事言いおつて。」
トウジは、まだ言っている。
そんなトウジをヒカリが睨む。

ミサト、リツコ、ユキの3人は、目を丸くしているが、それ以外の者は、各自でてんではばらに、好き勝手なことを言い合っている。

はつきり言って、收拾不能の事態になりかけていた。

「クスツ。」

そんな時、ミサトが笑いをこぼした。

「ミ、ミサトさんが笑った。」

シンジが気付き、顔がパツと明るくなる。

「ミサトさんが笑った。」

ケンスケも気付いて笑う。

「ミサトが笑った。」

アスカも笑顔だ。

つられて、みんなどつと笑いだす。

ミサトの屈託の無い笑顔は、その場に居た皆の心を和ませる効果があったようだ。

（良かった。本当に良かった。）

みんなで笑うのが、こんなに楽しいなんて。

サイドインパクトなんて、起きなきゃ良かったと思っていたけど、そのお蔭でミサトさんは生き返ったんだ。

これもみんな綾波のお蔭だ。

綾波……。一体どうなったんだろう。

どこかで生きているよね、きっと。（

アスカはと見ると、笑いながらも涙を流していた。

シンジ無論気付かなかったが、この時、アスカは重大な決心をしていた。
エヴァに頼らずに生きていこうという決心を。
シンジがそのことに気付くのは、ずっと後のことであるが。

パーティーは延々と続いた。

最初のうちは、ミサトもリツコも質問責めに遭った。
そこで分かったのが、ミサト達が病院で治療を受けていたことや、
今日になって急に退院したこと、ここに来るように言われたこと、
などであった。

ミサト達への質問が一段落すると、今度は、ミサト達が質問する番
だった。

ミサトの質問に対しては、シンジ、トウジ、ケンスケ、ヒカリが、
それぞれ答えていった。

今度は、皆真面目に答えていった。

ミサトが、アスカとシンジの保護者で、ネルフの作戦本部長だった
こと。

トウジやケンスケやヒカリにも愛想が良かったこと。

以前、ミサトが昇進した時にも、皆で祝賀会を開いたこと。

ミサトは、その話を食い入るように聞いていった。

そして、皆でミサトのことを語りだした。

トウジ曰く、

「ミサトさんは、とても優しい人や。」

ワイが入院している時、殆ど毎日のように来てくれはった。忙しいにもかかわらず、毎日、毎日、ワイに申し訳ないと言ったんや。

ミサトさんは、悪うないのに。」

ケンスケ曰く、

「ミサトさんは、忙しいにもかかわらず、俺の写真のモデルになってくれたんです。嬉しかったな。

惣流や洞木は嫌がっていたけど、ミサトさんだけは気前良くウンと言ってくれた。

シンジの大切な友達だからと言って。

俺はそれを聞いたとき、シンジの奴が本当に羨ましかったよ。」

ヒカリ曰く、

「私はミサトさんから、アスカのことをくれぐれもよろしくと、頼まれていました。

アスカはいい子だから、何があっても受け入れてやって欲しいって決して、突き放さないでって。

もちろん、そんなことは分かっていたし、言われなくてもそのつもりだったんですが、

私はその時、アスカが羨ましくなりました。

ミサトさんは、単なる上司ではなくて、本当の家族だなあって、思ってたんです。」

シンジ曰く、

「僕は、今まで人に頼られたことは無いし、優しくされたことも無かったんです。

ミサトさんは、そんな僕に優しくしてくれたんです。

それだけでなくて、悪いことをした時は、容赦なく叱ってくれまし

た。

僕は、本当のお姉さんが出来たようで、本当に嬉しかったんです。ミサトさんに会って、初めて家族の温もりというものを、味わったんです。」

（そうですよ、ミサトさん。僕達は、家族ですよ。）

ユキ曰く、

「惣流さんも、碓君も、毎日のようにミサトさんに帰って来て欲しいって言っていました。」

二人にとって、かけがえのない家族だと。

今の皆の話を聞いて、なるほどなあって、思いました。

本当に、帰ってきて良かったですね。」

ミサトは、いつしか大粒の涙を流していた。

一方、リッコはアスカと二人で話していた。

リッコのことを知っている者がいないせいもあるし、

シンジにしても、どちらかというところ、リッコは苦手だったからだ。

そんなリッコに対して、アスカは、加持やミサトから聞いた話や、

MAGIから得た情報を元に、リッコの過去の話をしていった。

大学時代にミサトと出会ったこと。

ミサトが加持と付き合い合うようになったこと。

その後、ミサトや加持の3人でつるむことが多かったこと。

母のナオコの影響で科学者になったこと。

ネルフの前身であるゲヒルンに就職したこと。

MAGIの開発に携わってきたこと。

その後、エヴァの開発責任者になったこと。

使徒と呼ばれる正体不明の敵の調査をしていたこと。

ネルフの技術部の責任者であったこと。

それらのことをひとしきり話した後、アスカはリッコに言った。
「過去のことは、思い出さなくても良いわ。」

これからのことが大切だから。

人間、誰しも思い出さたくないことがあるものよ。

だから、全部思い出そうとしないで、徐々に思い出せばいいわ。
万一、思い出せなくても、これから思い出を作ればいいのよ。」

リッコはそれを聞いて、一筋の涙をこぼした。

リッコも、薄々感じていたが、ミサトには人が集まるのに対して、自分にはアスカしか来ない。

そのアスカも、本来はミサトの家族なのだから、ミサトと話したいに違いないのだ。

「アスカ、あなたは、私と仲が良かったのかしら。」

リッコは、思わず聞いてしまったが、アスカは首を横に振った。

「嘘を言ってもしょうがないから、本当のことを言うわね。」

アタシとリッコは、はっきり言って、仲は良くなかったわ。

でも、アタシも同じように、あまり友達を作らない性格だったし、
科学者としてのリッコは、尊敬もしていたから、嫌いじゃなかったわ。」

「そう…。」

リッコは俯いた。聞かなければ良かったと思ったのだろう。

「だから、さつきも言ったでしょ。」

過去にこだわることには無いのよ。

アタシも、ついこの間まで友達がいなかったけど、今はこうやって、友達もいるし、恋人もいるし、家族だっているのよ。

要は、自分がこれからどうするかよ。過去は関係ないわ。」

「アスカ…。」

「なに、しけた顔してんのよ。

今日は、お祝いなんだから。ぱあっといくわよ。

ちよつと、相田っ！こっちに来て、何か芸をきなさいよ。

そうね、鈴原と二人で、掛け合い漫才でもしなさいっ！良いわねっ！」

ケンスケとトウジは、アスカの剣幕に逆らえず、仕方なく、言う通りに掛け合い漫才を始めた。

それを見たリツコが笑う。ミサトなどは、ケラケラと笑っている。

「おおっ、リツコさんも、笑うと可愛いですね。写真のモデルになつてください。」

「ふふふっ。あまり、大人をからかわないで。

でも、いいわ。誉めてくれたお礼に、モデルになってもいいわ。」

「えっ、ありがとうございます。」

いつの間にか、リツコも皆の輪に入っていた。

こうして、お祝いパーティー会は盛り上がったが、夜中の1時を回る頃には、

一人、また一人と、睡魔に襲われて沈んでいって、アスカとシンジを残すのみとなった。

当然、みんなはリビングで雑魚寝である。

もつとも、ヒカリとトウジは、ちゃっかり並んで寝ている。

シンジは、風邪を引かないようにと、毛布を出して、みんなにかけていく。

シンジがみんなに毛布を掛け終えた頃、アスカは小声で言った。

「シンジ、アタシ達も寝るわよ。」

「みんながいるんだけど、今日はどうする。」

「関係ないわよ。いつも通りに寝るわよ。」

「でも、明日の朝に、何て言われるか、分からないよ。それでもいいの。」

「うつさいわね。そんな時はそんな時よ。」

実際は、物凄く恥ずかしかったのだが、やはり悪夢の恐怖の方が勝っていたため、

今日もアスカとシンジは、一緒に寝ることにした。

そして、横になろうかという時、アスカはシンジに尋ねてきた。

「ねえ、シンジ、起きてるわよね？」

「うん、起きてるよ。」

「ミサトが戻ってきて、良かったね。」

「うん、本当に良かった。」

「黙ってて、ごめんね。」

シンジのお父さんに掛け合ったんだけど、ミサトが来るかどうか、はつきり言って、自信が無かったの。

だから、うまくいかなかった時のことを考えて、シンジには黙っていたの。

悪気があった訳じゃ無いのよ。それだけは分かってね。」

「ううん、アスカ。気にしなくてもいいよ。」

僕は、何も出来なかったんだし。

それよりも父さんに掛け合ってくれたなんて、ありがとう、アスカ。

「

「いいのよ。じゃあ、おやすみ。」

「おやすみ。」

二人は、たちまち寝息を立てだした。

第15話 帰ってきたミサト（後書き）

あとがき

アスカは、第7話で、シンジがマヤの所へ行った留守時に、M A G Iのデータから、ミサトとリッコが病院で生きていることを知ったんです。しかし、ゲンドウがすんなり二人を返すわけがないと思い、二人をS計画の中に組み込んだのです。そうすれば、二人を返してくれる可能性が高いと思ったのです。アスカの作戦は見事に当たり、二人は帰ってきました。後は記憶が戻るのをゆっくり待つだけです。

パーティーでは、こんな席順だと思って下さい。

アスカ シンジ トウジ ヒカリ

リッコ ユキ ミサト ケンスケ

第16話 S計画

翌朝、運良く誰にも見つかることなく、シンジ達は起きることが出来た。

「おはようございます。」

ユキの元気な声がして、シンジ達の部屋に入ってきた。

「おはよう、森川さん。」

「おはよう、ユキ。」

二人同時に返事をする。

「まあ、朝っぱらから、仲のよろしいようで。」

ユキはウインクする。

「ん、もう。今、シンジが起こしに来てくれたのよ。」
「もちろん真つ赤な嘘だが、シンジ達は既に着替え終わっていたため、ばれなかったようだ。」

シンジは、内心ホッとしていた。

アスカも同じ気持ちだろう。

「それじゃあ、朝ご飯を作ろうか。」

シンジは立ち上がるうとした。

「もう、出来てますよ。」

ユキは再びウインクする。

「ホント。じゃあ、食べましょう。シンジ、肩貸して。」

シンジは、アスカに肩を貸して、リビングへ移動した。

「おっはよ〜。」

「おはようございます。」

シンジとアスカは同時に朝のあいさつをする。

これに対して、みんなは気のないあいさつを返してきた。
みんな、まだ眠いようだ。

「は〜い、みなさん、起きてくださいね。」

今朝は、サンドイッチですよ。

早い者勝ちですからね。」

そう言つて、ユキはみんなを急かした。

テーブルの上には色々な種類のサンドイッチが並べてあり、コーン
スープが人数分あった。

コーヒーと紅茶も、各自が自由に飲めるよう用意がしてあった。

みんな、眠そうな顔をしながら、サンドイッチを口に放り込んでい
った。

今朝の話題は、これからどうするのかというものだった。

昨日のうちに、ミサト達の話題は尽きていたからだ。

そこで、ここでもアスカの独壇場となった。

「中学校が再開されるのは、後2週間位後よ。」

そこで、ミサトやリツコは、教師として、働くことになるわ。

アタシとシンジと鈴原は、学校が終わったら、ネルフに直行よ。

ヒカリと相田は、文化祭の準備をやってもらっわ。」

「えっ。」

一同は、目を丸くする。

「秋の文化祭が流れちゃったでしょう。」

だから2月中に文化祭をやることにしたのよ。

もちろん、アタシ達のクラスが何をやるのかは、決まっているわ。

相田、アンタが監督になって、映画を撮るのよ。

当然、主役はアタシよ。

相田は、シナリオをよ〜く考えるのよ。

アタシは、格好良くて、可憐で、優しく、美しいという設定よ。

まあ、そのまんまだから相田は全く苦労しないわね。良かったわね。

┌

ケンスケはそれを聞いて、頬を引きつらした。

事実上の監督が誰になるのか、分かってしまったからだ。

ケンスケは心の中で涙した。

（ア、アスカ。一体、何を考えているの。）

一方、シンジも何か物凄く嫌な予感がしていた。

アスカが自慢げに話す時は、ろくなことがないからだ。

（僕も映画に出るのかな。

でも、何の映画だろう。）

主役がアスカなら、もしかしたら、恋人役がいるのかもしれない。

もしそうだとしたら、僕以外の方がアスカの恋人役をやるなんて、

絶対に嫌だ！

ケンスケが監督なら、アスカの恋人に僕以外の人をやらせないよう

に頼まなくちゃ。

ケンスケ、絶対に僕を裏切らないで。）

気付かないうちに、シンジはケンスケを睨み付けていた。

朝食の後、アスカの指図で、ユキを除く全員がネルフへ行くことになった。

ユキは留守番で、掃除や洗濯をしてくれることになった。出かけるときに、少し寂しそうな顔をしていたが。

ネルフに入ると、直接司令室へ全員で向かった。

そこで、ミサトとリツコはシンジ達の学校へ当分の間出向することを命じられた。

記憶を取り戻すまでは、以前の任務に就くことは不可能であるため、チルドレン達と行動を共にするようにとの理由だった。

そして、ヒカリやケンスケは、ミサト達に協力するよう頼まれたのだった。

話が終わると、アスカとシンジを残してマヤの所へと向かった。

マヤの案内でリツコの家まで行き、当面必要なものをシンジ達の家
に運ぶためだ。

残されたアスカとシンジは、ゲンドウと冬月の前にいた。

「…シンジ。お前は下がっている。」

「いえ、シンジもここにいる必要があります。」

「…何故だ。」

「シンジは、私と碇司令や副司令との連絡要員として、欠くことが出来ません。

なぜなら私がこれから行う計画の立案者であることは、隠しておいた方がいいと思いますが、

私が計画のことで何度もここに打ち合わせに来たら、誰だって怪しむでしょう。

唯一、シンジだけが親子だからという理由で、ここに来て怪しまれないのです。

昨日、私の昇進はここだけの秘密にしていただけだとお願いしたと思いますが、

これも同じ理由からです。

あ、でも、給料はちゃんと上げて下さいね。」

「…そうか。分かった。だが、シンジ。お前は黙って聞いている。」

「まあ、碇よ、そう硬いことを言うな。

シンジ君、どうしても言いたいことがあったら、言っても良いよ。」

「ありがとうございます。」

「では、本題に入ろう。」

昨日碇と話し合ったが、アスカ君の計画は採用させてもらうことにした。

そこでだ。

立案者であるアスカ君には、当然ながらS計画の最高責任者になつてもらう

異存はないね。」

「はい。

ですが、表向きは責任者は副司令ということにしておいて下さい。眞実を知るのも、この4人だけということをお願いします。

理由は言うまでもないと思いますが。」

「分かった。

後は申し訳ないが、NR計画とER計画の方もアスカ君に責任者になつてもらいたいのだよ。

理由は分かっていると思うが、S計画とリンクしているからだ。

もちろん、これも私が表向きの責任者ということでも構わない。

だが、このままではアスカ君は大変だろう。

そこで、補佐する人間が必要になると思うが、誰が良いかね。」

「補佐する人間は、先程の皆と、ネルフ関係者が2000人程度必要です。」

「2000人か。それは、ちょっと難しいな。」

「ネルフ関係者であれば良いのです。

記憶を無くして直ぐには職場復帰出来ない者や、

殉職者の家族で働く意思のある者であれば良いのです。

しかも、表向きは給料や補償金を払えないから、

民間の会社に出向させるという名目である方がありがたいです。」

「そうか。

それなら、こちらとしても助かる。」

人を遊ばせておく訳にはいかないし、殉職者の家族の面倒をどう見るかについても、課題にはなっている。だが、何をするのかね。」

「これから、私の創る会社で働いてもらいます。S計画で、重要な働きをしてもらつつもりです。

もちろん、本人達は単なる仕事をするという意識で充分です。各々が自分の仕事をきっちり行い、それがうまく組合わさって、初めてS計画が遂行されます。

ですが、個々の仕事を行う人達は、S計画に参加しているという意識は不要ですし、有害無益ですらあります。

なぜなら、敵の目を欺くために、この計画の多くは、ネルフの外で行う必要があるからです。

ネルフ自体が動けば、敵に計画が察知される恐れがありますが、民間の会社が動く分には、計画が察知されにくくなるはずですが。しかも、会社の人間が、自分達の目的を知らなければ、こちらにとって都合なのです。」

「そうか。確かにその通りだな。」

「それに、敵を騙すには、まず味方からとも言いますが、計画の全容を知る人物も、ここにいる4人だけに止めたいと思います。」

NR計画とER計画はオープンにして、ネルフがこの2つの計画に専念していると見せかけます。

それをゼーレが信じれば、この勝負は半分勝つたも同然です。」

「しかし、アスカ君。この計画は、本当に君が考えたのかね。」

「いえ、違います。原案は、MAGIに残っていた計画案です。」

それに私の考えを入れてアレンジしたのです。」

「元は、誰の考えなのかね。」

「確証はありませんが、おそらく、碓ユイ博士かと。」

「何故、そう思うのかね。」

「原案でも、主人公はこの4人でしたから。」

この4人を知る共通の人物と言ったら、碓ユイ博士しか考えつきません。

発案者が赤木ナオコ博士でしたら、ミサトやリツコが中心的役割を担っている筈です。」

「ユイ君は、アスカ君が中心的な役割を担うと思っていたのかね。」

「おそらく。」

MAGIの開発者コードを私の母に伝えたのも、おそらくユイ博士でしょう。

ユイ博士は、私の母と図ってエヴァの中に入ったのでしょう。

そして、私とシンジが、同じエヴァのパイロットになることや一緒に使徒と戦うことも計算していたのでしょう。

そして、使徒がいなくなつたとき、自分達の子供がどんな目に遭うのか危惧していたのでしょう。

ゼーレは、碓司令と副司令だけではかなう相手ではないということが、分かっていたのですね。」

「ははは。」

最後は手厳しいね。

だが、返す言葉もない。

アスカ君の言う通り、ゼーレは巨大な組織だ。簡単には倒せない。」

「それに、正面から戦っても、相手になりません。ですから、相手の思いもよらない方法で奇襲するしかないのです。ですから、例の件は、必ずお願いします。」

「ああ、文化祭の件は、教育委員会に依頼しておいた。中学校の再開も今月中には大丈夫だろう。」

では、これでS計画は正式にネルフの作戦として採用しよう。アスカ君は最高責任者として、2日に1回はシンジ君を通じて進行状況を報告するように。

私の方からの伝達事項も、シンジ君を通じて行う。それでいいね。」

「わかりました。」

作戦開始は、来月の13日ということで、何とかなりそうですね。」

「あと、1カ月か。忙しくなるな。後は、アスカ君の表向きの顔だが、こちらも無理なお願いをしなければならぬだよ。」

本業は、技術部の副部長と技術部のいくつかのチームリーダーのだが、

それ以外にも、広報部や諜報部のチームリーダーと作戦部のサブリーダーも引き受けて欲しいんだよ。」

「ええっ……。断っちゃ駄目ですか。ちょっと、多くありませんかね。」

「悪いが、アスカ君を欲しがる部署が多くてね。」

可愛いから欲しいという部署が、正直言ってネルフの全部署。恋人が居ると分かっているけど、そうなんだからね。能力を見込んでというのが、その内の半分といった所だよ。」

「えっ。何で、アタシとシンジのことを知っている人がいるんですか。」

「そうか。君達は知らなかったか。言いにくいのだが、シンジ君の告白シーンが、何かの手違いで発令所のスクリーンに大写しになってね。誰も知らない者がいないんだ。」

「も、もしかして、あ、あの…。」

（そ、そんなあ。あんな所を、他の人に見られていたなんて、恥ずかしいよ。）

シンジは真っ赤になった。

「ああ、シンジ君も意外だね。アスカ君に強引にキスするなんて。それを聞いてアスカは倒れそうになったが、車椅子に座っているせいで倒れることは無かった。」

「シンジ、犯人は、マヤよ。後で白状させましょう。」

「そんな…。あのマヤさんが、そんなことをするなんて…。」

（し、信じられない。あの、マヤさんが…。）

「アタシ以外にそんなことが出来るのは、マヤしかいないのよ。絶対に間違いないわ。」

アスカの顔は、怒りに燃えていた。

後日、マヤはシンジ達（要はリツコと）と一緒に住みたいと言ってきたのだが、

アスカとシンジは、冷たく睨んで断ったのだった。

そんな二人の心とは無関係に、ゲンドウが声をかけてきた。

「…シンジ。お前に話がある。」

「何だよ、父さん。」

「お前に選ぶ権利を与えよう。良く考えて答えるんだ。」

惣流二佐は、重要人物だ。

だから警護体勢を万全にする必要がある。

その際、お前は邪魔になるのだ。

だから、ネルフの外では、惣流二佐から離れてもらおう。

別の者に身辺警護を行わせる。」

「ええっ、そんなのないよ、父さん。」

「話は、最後まで聞け。」

もし、お前が諜報部に入り、惣流二佐の身辺警護を行いたいのなら、話は別だ。

だが、その場合は、覚悟が必要になる。

分かるか。」

「そんなの、分からないよ。」

「んもうっ、シンジったらバカね。」

敵を殺さないとかアタシが死ぬって場合、アンタは人を殺せるの。その覚悟が必要ってことなのよ。」

「ええつ。そ、そんなの分らないよ。」

「なら、アタシの警護は出来ないわ。

アタシだって、死にたくないもの。

そんな意気地なしは必要ないわ。」

「そ、そんな…。アスカだったら、酷いよ。」

（僕が人殺しになってもいいの。）

「アンタ、バカア。

恋人が死ぬかもしれないのに、守れない男なんて最低じゃない。

シンジがそこまで腰抜けだとは思わなかったわ。」

「で、でも…。」

（そ、そうか。確かにそうかもしれないけど、いきなりそんなことを言われても…。）

「でもも、かかしも無いのよ。

生き残るのは、アタシか敵のどちらかだとしたら、どちらに生き残って欲しいのよ。」

「もちろん、アスカだよ。」

（アスカが死ぬなんて、考えられないよ。）

「そのためには、敵を殺さなきゃならないのよ。分かった？」

もし、そんな事態になったら、ためらわずに敵を殺すのよ。

いい？」

（そうか。そうだよな。世の中、きれいごとばかりじゃないものね。でも、人殺しなんて絶対に嫌だ。死んでも嫌だ。絶対に、絶対に嫌なんだ。でも…、アスカが死ぬのはもっと嫌だ。そうか。選択肢は多くないんだね。アスカのことを思い続けるなら、もう答は一つしかないんだよね。）

シンジは、少し俯いて考えていたが、拳を強く握りしめて顔を上げた。

「う、うん。わ、分かったよ。」

人を殺すのは嫌だけど、アスカのためなら、出来そうな気がする。ううん、やらなきゃいけないんだよね。」

（そうだ。僕は、アスカのためなら、何だってやってやる。）

その様子を見て、ゲンドウはしばし暖かな瞳で二人を見つめていたが、すぐにいつもの目に戻った。

「結果は出たようだな。」

碇シンジ二尉、諜報部副部長を命じる。

惣流二佐の身辺警護専任とする。

いいな。」

「う、うん、分かったよ、父さん。」

「今は覚悟だけでいい。」

だが、いずれはそんな日が来るかもしれない。

心構えだけは持つておけ。

当面は、3年だ。

3年以内に、惣流二佐と同等の格闘技の技術を身に付けろ。

明日からは、毎日3時間は、軍事教練を受けるんだ。

いいな。」

「わ、分かったよ。」

シンジは、少し不安になった。

自分は、アスカのことを良く知らないということを知らされたからだ。

アスカの格闘技の腕なんて、シンジは知らなかった。

今まで格闘技の訓練そのものが、アスカはシンジ達と別に行われていたからだ。

（3年以内って言ったよね。アスカって、そんなに強いのかな。今度、聞いてみよう。）

最近は、素直で優しくなったせいもあり、アスカの外見からは、普通の女の子と変わらないように見える。

だが、良く考えれば、幼い頃からずっと訓練してきた筈だ。

普通の人と比べものにならない位の戦闘技術を身につけているに違いない。

それも、少なくとも5年以上は続けている筈なのだ。

（3年で追いつけるのかな。

いや、出来るかどうかじゃなくてやらなきゃならないんだ。

アスカの側にいるためには。）

シンジは、これからの辛い訓練を思って、暗い気持ちになりかけた

が、

アスカの笑顔を見て、そんな気持ちも振っ飛んだ。

何故か、アスカは、シンジに笑顔を向けていたのだ。

こうして、色々あったが、アスカを最高責任者として、

S計画、NR計画そしてER計画が始動することとなった。

第16話 S計画（後書き）

アスカが笑顔をシンジに向けたのは、物凄く嬉しいからです。

『シンジは、死んでも、他人を傷つけどくない。』

『アスカのためなら、他人を傷つけてもいい。』

この二つから導き出されるのは、『アスカのためなら、死んでもいい。』ということなんです。

アスカは、それに気付いたんですね。だから、嬉しくて、シンジに笑顔を向けたわけです。

第16話補完 遺言

「ちくしょう！何てこった！」

男は、敵から逃げていた。だが、追手によって、追い詰められていく。

「俺が、あんなミスをするなんて。」

男は、敵のアジトと思われた場所にうまく潜入したが、ほんの小さなミスを犯した。

彼が犯したミスは、些細なものだった。

だが、結果として、敵に追い詰められることとなってしまった。

「バン！」

目の前を鉛玉が横切った。

「久しぶりだな。」

男が視線を向けると、戦場では、決して出会いたくないと思う、昔の戦友が立っていた。

コードネームは、ジャッジマン。

殺しのプロであり、彼に裁けない人はいないと言われるほどの腕を持った男だ。

その力量は、誰しも認めるところだった。

「一体、何を嗅ぎ回っていたんだ。だが、まあいい。お前はここで最期だ。」

「バン！」

男は、拳銃に手をかけようとしたが、無駄だった。

ジャツジマンの、神業とも言える早撃ちによって、男の拳銃は、弾かれてしまった。

男は、丸腰になった。

「昔のよしみだ。遺言があれば、聞いてやる。」

男は、万策尽きたことが分かったため、覚悟を決めた。

「…ある女性に、伝言して欲しい。」

男は絞り出すように言った。

「ほう、何だ。」

ジャツジマンは、真剣な表情になっている。

「心から愛していた。すまない。そう伝えて欲しい。」

「ほう、お前にも、そんな女がいたのか。で、その女は誰だ。」

「…葛城ミサト。ネルフの作戦部長だ。」

そう言うと、男は死を覚悟して、目を閉じた。

第17話 帰還指令（前書き）

アスカにドイツへの帰還指令が来るなんて。

アスカは遠くへ行つて、もう二度と帰つて来ないかもしれない。

そんなのは嫌だ。何か良い方法はないの。

第17話 帰還指令

ゲンドウ達との話が終わると、シンジとアスカは食堂へと向かった。そろそろ、昼食の時間に迫っていたからだ。

「ねえ、アスカ。早く帰ろうよ。」

「駄目よ。今日は、ここで5時頃まで働くのよ。分かった？」

「僕は、どうすればいいの。」

「アタシのことが好きなら一緒に居ると思うけど。」

「えっ、一緒にいても良いの。」

「だって、シンジはアタシ専任の護衛でしょ。」

アタシの側にいるのが当たり前でしょ。

全く、何聞いているんだか。

物忘れがひどいわよ。」

「う、ごめんよ。」

「まあ、いいわ。そう言う訳だから、シンジも手伝ってね。」

「うん。」

シンジは、何故か嬉しくなった。

もちろん、アスカと一緒に居られるからである。

こうして、二人は昼食を共にした。

「じゃあ、食べたから、早速MAGIの所へ行くわよ。」

アスカは、昼食を済ませた後そう宣言すると、MAGIの端末へと向かった。

もちろんシンジもその後を付いて行った。

目指す端末は、アスカ専用の部屋の中にあつた。

リッコやミサトの部屋と同程度の大きさの個室が、アスカに対しても割り当てられるようになったのだ。

もちろん、急造であるため大したものはないが、それでもMAGIに繋がっている端末が5台、

プリンタが2台、DISKドライブが2台、コピーメーカー1台が揃っていた。

入口には、『技術部副部長室』と書かれたプレートが掲げられていた。

「ちょっと狭いけど、まあまあかな。後で、色々入れようかな。」

アスカは一人呟くと、作業の準備に取りかかった。

端末から本体に入り、必要なデータを端末に落とし込む。

そうして、黙々と作業をこなしていく。

その様子を見たシンジは、自分が何をしたいのか、不安になった。

「僕は、何をやったらいいのかな。」

シンジが尋ねると、アスカは、ニヤニヤしながら、こう答えた。

「シンジは、使徒とエヴァの戦闘シーンのファイルを探して。」

「も、もしかして、今朝言っていた、映画のためなの。」

「もちろん、そうよ。映画に使えるようなシーンを探して、保存しておいてね。」

「そ、そんなことに使うなんて、まずいんじゃないのかな。」

「いいの。つべこべ言わずに、さっさとやるの。」
「アスカはそう言うと、端末の前で作業を始めた。」

「もう、アスカったら、強引なんだから。」
シンジは膨れっ面をしながらも、渋々という仕草で作業を始めた。だが、その心の中は、アスカと二人つきりということから、にやけっぱなしであった。

一方、シンジに映画関係の仕事を任せたアスカは、別の作業を行っていた。

S計画、NR計画、ER計画に関する作業で、自宅では出来ないものは、今ここで行う必要があったからだ。

ここで、NR計画について概要を説明すると、主に次の4つの要素から成り立っている。

本部施設の修復と改良、人員の補充と育成、組織の再編成と装備の改良、各支部との連携の強化である。

いずれの要素においても、MAGIの力が必要なのだ。

本部施設の修復と改良に関しては、改良の仕様作成と修復・改良工事のスケジュール管理に。

人員の補充と育成に関しては、人材採用と研修計画のスケジュール管理に。

組織の再編成と装備の改良に関しては、再編組織の効率化のチエックと装備改良の設計及びスケジュール管理に。

各支部との連携に関しては、各支部の個人データの把握等に。いずれにしても、MAGIの力に負うところが大きい。

また、ER計画についても同様である。

ER計画も主に4つの要素から成り立っている。量産機の修復と改良、パイロットの選抜と育成、武装の改良、戦闘支援システムの確立である。

これらについても、MAGIの力が必要なのだ。

アスカは、素案を数十通り作成しており、それをMAGIに分析させ、

予算やスケジュールなども加味しながら、徐々に案を絞っていった。最終的に、3案位に絞るまでがアスカの当面の仕事になる。

それを冬月に提出すれば、ゲンドウと相談して必要な修正を加え、その後、実務担当者を招集して、最終案を決定する手筈になっている。

それをアスカが承認すれば、後のアスカの最高責任者としての仕事は、スケジュール管理が主なものになるのだ。

だが、これらの事は、シンジには内緒であった。

しばらくすると、アスカが一息ついた。

「ふう。」

アスカが言うと同時位に、アスカの携帯電話に着信があった。

「ごめん、シンジ。1時間位、席を外して。ドイツの友達から電話なの。」

「うん、いいよ。」

シンジは、何の疑問も持たずに出て行った。

シンジは、部屋を出ると、ゲンドウの元へと向かった。

実は、ゲンドウに『後で一人で来い。』と言われていたのだ。

（父さんは、一体何の用なんだろう。）

シンジは考えたが、さっぱり見当が付かなかった。

（まあいいや。父さんに聞けば分かるだろう。でも、物凄く嫌な予感がするな。）

シンジは、嫌な予感を振りほどくように、急いでゲンドウの元へと向かった。

「えっ、アスカがスパイだって！」

ゲンドウに思いがけない事を言われたシンジは、呆然としていた。

驚くシンジに対して、冬月が説明を続けた。

「アスカ君は、スパイと決まった訳ではない。その疑いがあると言うことなんだよ。」

今は言えないが、アスカ君には秘密が多い。色々調べているのだが、アスカ君の経歴の一部が改ざんされている疑いがあるのだよ。」

「でも、それだけでスパイとは言えないと思います。経歴は、誰かがアスカの知らない所でいじった可能性だってあるじゃないですか。」

「シンジ君の言う通りだよ。だが、何故改ざんする必要がある。おかしいじゃないか。」

「でも、アスカはスパイなんかじゃありません。アスカがそんなことをするはずがありません。僕には分かりません。」

「我々も信じたい。だが、アスカ君は、さっき我々に嘘を言った。シンジ君は気付いたかね。」

「えっ。」
シンジは当惑した。

アスカの言った嘘というのが、全く分からなかったからだ。

「その調子だと、気付かなかったようだね。無理も無い。MAGIの開発者コードのことだが、そんなものは存在しない筈な

んだよ。

シンジ君は、アスカ君のお母さんがエヴァに取り込まれたのが何時か知らないだろうが、10年前のことだった。

だが、MAGIが完成したのは、それから5年後のことなんだよ。MAGIが完成する5年も前に、開発者コードが分かっていたなんて、考えられないんだよ。

そうは思わないかい。」

「そ、それは…。」

シンジの顔は青ざめた。冬月の言う通り、いくら何でもつじつまが合わないからだ。

「それに、アスカ君は、最近お母さんの記録から見つけたと言っていたが、それもおかしい。

アスカ君のお母さん、キョウコ君がエヴァに取り込まれた後、ネルフはキョウコ君の記録を全て調べている。

キョウコ君も優秀な科学者だったから、機密漏洩があつたら非常にまずいことになる。

だから、キョウコ君の私物は、全て厳重に調べられているのだよ。しかも、アスカ君はキョウコ君から譲り受けた物は殆ど無い。

それなのに、最近になって見つかったなどと、いくら何でも有り得ない話なのだよ。

分かるね、シンジ君。」

「は、はい…。」

シンジの体は震えていた。

もし、アスカがスパイだったら、ネルフがアスカに何をするのかと思うと、想像するだけで恐ろしくなったのだ。

もし、アスカが本当にスパイだったら、アスカの生命が奪われるかもしれない。

そう思うと、シンジは身震いした。

「しかも、ユイ君が開発者コードを知っているなんて話は聞いた事がない。

シンジ君もそうだろう。

もし、アスカ君の話が本当なら、シンジ君も開発者コードとやらをユイ君から聞いている筈だ。

シンジ君は聞いた事があるかね。」

「いいえ。僕は、母さんの顔を覚えてすらいませんから。しかも、母さんの記録なんて、何も受け継いでいません。」

そう言うと、シンジはがっくりと肩を落とした。

「そうだろうな。やっぱり、アスカ君は嘘を付いているな。」

「でも、アスカはスパイなんかじゃありません。本当なんです。」

「シンジ君の気持ちも分かるが、君は、霧島マナ君の時もそう言っていたのを忘れていないかね。

霧島マナ君は、スパイじゃ無かったのかね。」

「い、いえ…。」

シンジは、泣きそうになった。

確かにマナの時もスパイじゃないという自信があり、そう言い張ったが、マナは本当にスパイだったからだ。

シンジがいくらアスカがスパイじゃないと言っても、信じてくれな

いだろう。

「だが、まだ決まった訳ではない。そこで、シンジ君に頼みがある。アスカ君の行動を、常時監視して欲しいのだよ。もし、アスカ君がスパイだったら、怪しい行動を取る筈だ。それを見落とさないで欲しいのだよ。」

「分かりました。でも、もしアスカがスパイだったらどうなるんですか。」
シンジは、恐ろしくて聞きたくなかったが、勇気を振り絞って聞いた。だが、冬月の返答は、予想に反して、厳しい内容では無かった。

「少なくとも、ネルフの外には出せないだろう。どの位続くかは分からないが、軟禁状態になるだろう。」

「ア、アスカの生命に、危険は無いですか。」

「ああ。仮にも、ネルフに貢献したキョウコ君の娘だ。我々がアスカ君の生命を危険に晒すような事はしないよ。むしろ危険なのは、アスカ君をスパイとして使っている組織だろう。証拠隠滅のため、アスカ君は消される可能性が高い。シンジ君、もしアスカ君のことが好きなら、アスカ君がネルフを出ないように見張っていて欲しい。」

そして、アスカ君がスパイだったら、改心するように諭して欲しい。

「

「わ、分かりました。僕は、何があってもアスカから離れません。」
シンジは、そう言う拳を強く握りしめた。

「ちょうど良いタイミングというか、悪いタイミングというか、アスカ君にはドイツ支部から帰還指令が来ている。

我々は、アスカ君にこのことを聞かせて、どのような返事をするのか試すことにした。

もし、アスカ君がスパイなら、これを機会に本部を出ようとするだろう。

ここまで言えば、シンジ君が何をすべきか分かるね。」

「はい。僕は、アスカが本部を出ないように監視します。」

「くれぐれも、アスカ君のことを我々が疑っているなどと、言っ
てはいけないよ。」

「はい。絶対に言いません。」

「では、アスカ君をここに連れて来て欲しい。良いかね。」

「はい、アスカを連れて来ればいいんですね。」

シンジは、部屋を出ると、アスカの元へと向かった。

（アスカ。

君はスパイなんかじゃないよね。

絶対に違うよね。

僕はアスカのことを信じるよ。

誰が何と言おうと。）

シンジの顔には、苦渋の色が浮かんでいた。

しばらくして、シンジはアスカの所へ行き、呼び出した。

「アスカ、父さんが呼んでいるんだ。直ぐに来て。」

アスカは、ゲンドウの前に行くときびくびくした様子だったが、ゲンドウの言葉を聞いて、驚いているようだった。

ゲンドウはアスカに、ドイツ支部からの帰還指令が来たことを伝えたのだった。

それを一緒に聞いたシンジは、アスカの手前、驚いた振りをした。

「…どうするか、自分で結論を出してから、報告するように。」

それだけしかゲンドウは言わなかった。

こうして、シンジとアスカは、重苦しい雰囲気のまま、ゲンドウの元を去り、副部長室へと戻った。

そして、二人とも黙々と作業を続けるのだった。

作業をしながらも、シンジはアスカのことを考えていた。

（アスカがドイツに行かない様にするにはどうしたらいいんだろう。）

シンジは考えたが、妙案は思い浮かばなかった。

しかも、アスカが本当にスパイだったら、ドイツへ行ったが最後、もう二度と会えないかもしれないのだ。

だが、シンジは、アスカがスパイかもしれないという考えを頭から

払い落した。

恋は盲目というが、正に今のシンジはそういう状況であった。

（アスカは…スパイなんかじゃない…。）

シンジは、アスカのことを心から信じていた。

だが、マナの時の経験が全く活かされていないのも事実だった。

本来は、冷静に事実を整理分析し、対応策を考えなければならぬのだが、

アスカを信じる余り、何も考えないシンジであった。

第17話 帰還指令（後書き）

あとがき

スパイの嫌疑をかけられたアスカ。そのアスカを信じるシンジ。だが、事態はさらに悪くなり、そして思わぬ方向へと向かう（かもしれない）。

シンジはというと、アスカの側に居ることしか考えないため、第三者から見ると、

ちよっと情けないことに……。でも、本人は結構喜んでいたりします。

第17話補完 スパイ疑惑

シンジとアスカが部屋を出た後、冬月はゲンドウに尋ねた。

「アスカ君は、本当にスパイなのかね。」

これに対し、ゲンドウは少し間を置いて答えた。

「…今の所は、五分五分だ。」

「ならば、シンジ君にあのような言い方をしない方が良かったのではないかね。」

いぶかる冬月に、ゲンドウはこう言い切った。

「いや、あれで良い。」

「ほう、何故かね。」

「今のアスカ君は、ネルフの生命線を握っている。

今はスパイでなくとも、いずれそうなる可能性がある。

だから、シンジにアスカ君をしつかり監視してもらわないとな。」

ゲンドウはそう言うと、ニヤリと笑った。

冬月は、その一言で全てが分かった。

今のアスカは、チルドレンであるシンジを思いのままに動かせるつえに、

もう一人のチルドレンであるトウジも、ヒカリを通じて動かすこと

が出来る。

MAGIも思いのままに操ることが出来、そのうえ、ミサト、マヤ、マコト、シゲルなどのネルフ幹部の皆と仲が良い。今のアスカが他の組織の言うなりになったら、それだけでネルフ崩壊の危機である。

しかも、冬月は知らなかったが、アスカはリツコとも仲が良いのだ。

「アスカ君に頼りすぎということか。」

冬月は、深くため息をついた。

「碓よ、ならばどうする。」

冬月が尋ねたが、ゲンドウは苦々しい口調で答えた。

「全ては、シンジ次第だ。」

第18話 シナリオ

リツコの家に向かったメンバーは、リツコが身の回りの品を持ち出す手伝いをしていた。

記憶喪失のため、リツコは物の置場所が分からず、結構時間がかかってしまったが、

それでも昼前には家の着くことが出来た。

「みなさ〜ん、お帰りなさい。」

家に着くと、ユキが料理を用意して待っていた。

「惣流さん達は、夜までかかるそうよ。だから、ここにいる皆で食べましょう。」

リビングのテーブルの上には、人数分のドリア、3種類のスパゲツティー、

大きな2つの皿に分けられたサラダ、人数分のコーンスープ、などが並んでいた。

アス力達が来ないことが分かったので、この前と殆ど同じメニューにしたのだ。

ユキは料理は出来ても、レパトリーはそんなに多くはない。だから、結構、同じような料理が続くことが多かった。

そのため、アス力達がいけないことは、好都合だったのだ。

「洞木さん、後はお願いね。すぐ戻るから。」

ユキはそう言うと、2人分の食事を持って、自分の家に向かった。妹達の間である。

最近のユキは、アスカの家で料理を作って、それを自宅に持っていくことが多かった。

その方が、2度作らなくて済むからだ。

何故か、ユキは、妹達をアスカ達に会わせることを避けていた。

『居ると凄くうるさくて、私が気を遣うから。』というのが理由だった。

「ええ、任せて。言ってらっしゃい。」

ヒカリは笑顔でユキを送る。

「へえ、結構な量があるやんけ。これなら、腹一杯食べられそうや。」

「スパゲッティとサラダは、量が充分すぎる程あるので、トウジは喜んでいる。」

「やっぱり、人数が多いといいですね、リッコさん、ミサトさん。」

「ケンスケもニコニコ顔だ。」

これは、料理のせいというよりも、左右にミサトとリッコが座って居るせいだろう。

「じゃあ、皆さん、食べましょう。」

「いったただきま〜す。」

ヒカリの合図で、皆が食事を始める。

ドリアとコーンスープは、人数分があるが、それ以外は早い者勝ちである。

全体的に量はたっぷりあるが、好みにバラツキがあると、減るスピードに差が出てしまうのだ。

料理を作ったユキは、皆の好みなど知るはずもなかったから、自分の好きなものが早くなる可能性があるのだ。と言っても、たくさん食べるのは、トウジ、ケンスケ、ミサトの3人であるが。

「おい、トウジ。あんまりがつつくなよ。」

「ケンスケも、ワイのカルボナーラを取るんやないで。」

幸い、ケンスケがミートソース、トウジがカルボナーラ、ミサトがナポリタン、その他の3人がサラダを主に食べていたので、争いになることは無かった。

こうして、遅れて来たユキも含めて、6人共お腹一杯食べたのだった。

食後には、コーヒーか紅茶である。ここで、朝の映画の話題が出た。

「おい、ケンスケ。どんな映画にするんや。」

「おいおい、惣流のことを分かってないな。あの惣流が、俺に全部任せる訳無いだろう。」

映画のあらすじは、もう大体固まっているのさ。」

ケンスケは、そう言いながら、ポケットからDISKを取り出した。

「この中に、3通りのストーリーが入っている。もちろん、作ったのは惣流さ。」

「どんな内容なの。知りたいわ。」

ヒカリも興味があるのか、身を乗り出す。

「じゃあ、これから見てみようぜ。」

ケンスケは、シンジの部屋にあったパソコンを持ってきて、DIS Kの内容を見ることにした。
その内容とは…。

ストーリー 1

スーパー美少女のアスカとスーパー美男子のXがエヴァに乗り込み、二人で使徒を倒しまくる。
使徒をほぼ倒し終わった時に、悪の組織ゼーレの攻撃を受けて、二人は傷付き、倒れる。
アスカが最後の力を振り絞って、敵を殲滅するが、敵はサードインパクトを起こしてしまう。
絶望的な状況の元、アスカの愛の力によって奇跡の力を得たXは、その力を利用し、
世界を平和へと導き、悪の手先を滅ぼす。
そして、悪の組織と戦い続けることを誓う。

(注)

- ・Xは、18歳位の超美男子とする。ラブシーン有り。
- ・シンジとトウジは、単なるクラスメート。レイは登場しない。

・総司令と副司令は登場しない。ミサトとリツコのみ登場。

ストーリー2

スーパー美少女のアスカとレイは、エヴァに乗り込み、使徒を倒しまくる。

シンジとトウジは足を引っ張る。

使徒をほぼ倒し終わった時に、悪の組織ゼーレの攻撃を受けて、4人は傷付き、倒れる。

アスカが最後の力を振り絞って、敵を殲滅するが、敵はサードインパクトを起こしてしまう。

絶望的な状況の元、レイは死と引き換えにアスカへエヴァの力を渡す。

アスカのエヴァは、その力で世界を平和へと導き、悪の手先を滅ぼす。

そして、アスカは、悪の組織と戦い続けることを誓う。

(注)

・総司令と副司令は登場しない。ミサトとリツコのみ登場。

・エースパイロットはアスカとレイ。

ストーリー3

スーパー美少女のアスカは、ネルフの作戦部長で名参謀だ。

親友のレイは、エヴァに乗り込み、使徒を倒しまくる。

シンジとトウジも共に戦う。

使徒をほぼ倒し終わった時に、悪の組織ゼーレの攻撃を受けて、3人は傷付き、倒れる。

そこへ秘蔵のパイロットを投入し、敵を殲滅するが、敵はサードインパクトを起こしてしまう。絶望的な状況の元、アスカの好判断により、最後の力を得たエヴァは、

その力で世界を平和へと導き、悪の手先を滅ぼす。

そして、アスカは、悪の組織と戦い続けることを誓う。

(注)

- ・総司令は、ミサト。副司令は登場しない。リツコは登場。
- ・エースパイロットはレイ。

「うん。」

皆頭を抱えた。

「おい、ケンスケ。」

1だと、シンジが黙ってやせーへんで。

今朝、シンジはケンスケのことを睨んでいたさかいな。惣流と他の奴がくつつく展開は、血を見るで。」

「トウジもそう思うか。」

俺も、シンジの視線は感じていたんだ。

やっぱり、1は止めよう。

友達を無くすもんな。」

「でも、碓君は、2にも反対するんじゃないかしら。」

綾波さんのことをあまり出して欲しくないだろうし。」

とヒカリ。

「じゃあ、3しかないか。」
肩をすぼめるケンスケだった。

その後、皆でワイワイ言いながら、3を元に、ストーリーを組み立てていった。
それが次のストーリーである。

ストーリー3改

スーパー美少女のアスカは、ネルフの作戦部長で名参謀だ。
エースパイロットのシンジは、レイやトウジと共にエヴァに乗り込み、使徒を倒しまくる。
使徒をほぼ倒し終わった時に、悪の組織ゼーレの攻撃を受けて、パイロット3人は傷付き、倒れる。
そこへ秘蔵のパイロットを投入し、敵を殲滅するが、敵はサードインパクトを起こしてしまう。
絶望的な状況の元、傷付いたシンジを見て、アスカは愛を告白する。
アスカの愛の告白に力を得たシンジは、最後の力を振り絞る。
その力で世界を平和へと導き、悪の手先を滅ぼす。
そして、アスカとシンジは、悪の組織と戦い続けることを誓う。

(注)

- ・総司令は、ミサト。副司令は登場しない。リツコは登場。
- ・エースパイロットはシンジ。

「よし、これならシンジも喜ぶよ。」
ケンスケは得意満面である。

「うん、これなら、シンジも文句は言わないはずや。」
トウジも胸をなでおろしている。

「後は、アスカがウンって言うかどうかね。」
ヒカリはやや不安げである。

「惣流さんなら、大丈夫だと思いますけど。」
とユキ。

「そうや。惣流かて、シンジの手前、反対しないやろ。」
トウジは二人が恋人になったから大丈夫と踏んだのだ。

「よし、それじゃあ、これで行こう。」
ケンスケが最終判断を下す。

「でも、私が司令なんかでいいのかしら。」
ミサトはちよつと不安らしい。

「私だって、技術部長なのよ。不安だわ。」
でも、あんなおじさんよりも、ミサトが司令だった方が、客受けは
いいと思うわ。」

リツコは、どうも全くゲンドウのことが記憶に無いらしい。

そんなことを話しているうちに、いつの間にか夕方になってしまっていた。

結局、アスカが帰ってきてから決定しようということになったが、ケンスケは皆で言おうと主張したため、大人数での夕食が決定した。

アスカ達が帰って来たのは、7時頃だった。

「あら、今日も凄い料理なのね。」

テーブルの上には、子牛のステーキをメインに、フルコースとも言
うべき料理が並んでいた。

ちゃんとしたお店ならば次々と運ばれてくる筈だが、そこは一般家
庭、全部一度に並んでいる。

家に入った時には、少し機嫌の悪そうだったアスカだが、料理を見
るなりニンマリとしていた。

料理が良ければアスカの機嫌が良くなるだろうというユキの発案だ
ったが、ズバリ当たったようだ。

「でも、どうやって食べようかしら。」
ふとアスカが呟く。

それを聞いたユキは、青ざめる。アスカの右手が本調子でないこと
を忘れていたのだ。

「う、ごめんなさい。」「
ユキは俯いてしまう。」

「いいよ。僕がアスカの手伝いをするから、気にしないで。」
(ちよつと恥ずかしいけどね。)

シンジが慰めの言葉をかけた。

「しょうがないわね。シンジに頼むことにするわ。ユキも気にしないで。」

アスカが笑ってユキを慰めたため、ユキはホッとした。

こうして、アスカはシンジに食べさせてもらうことになった。

そのためか、二人の周りは物凄く暑かったという。

夕食の後、皆でコーヒーやら紅茶を飲みながら、ケンスケが映画のストーリーを説明した。

そして、ケンスケは、最初にシンジに感想を聞いた。

「アスカが主人公だし、活躍するし、良いと思うよ。」

シンジはにこやかだった。自分とアスカがこいびとになるという展開なのだから、不満があらう訳がない。

アスカはそんなシンジを見ていたが、肩をすくめて言った。

「まあ、気に入らないけど、相田の腕じゃあ、その程度が限界みたいね。」

シンジが良いなら、まあ良いわ。」

その言葉に、その場に居た全員がホッとした。

こうして、映画のシナリオは、ほぼ固まり後は、ケンスケの腕次第となったのである。だが、ケンスケは、アスカを少し甘く見ていたことに後悔する破目となる運命だった。

今回決まったシナリオは、元々アスカが考えていたものと大差がなかった。

だが、アスカは、自分からシンジと恋人になるというストーリーは提案出来なかったため、皆がそういうストーリーを提案するように誘導したのだ。アスカの作戦勝ちである。

だが、シンジにとってもこのストーリーは、望ましいものだった。

（アスカから愛の告白を受けるなんて、映画の中のこととはいえ、嬉しいな。

やっぱりケンスケは良い友達だね。）

シンジは、心の中でケンスケに感謝していた。

第18話補完 守る理由

暗い部屋の中で、一人の男が画面を見つめていた。

その画面には、初老の男が写っていた。

男は、彼のことを『盟主』と呼んでいた。

「盟主様。」

「何だ。」

「惣流・アスカ・ラングレーから、連絡が入りました。」

「で、内容は？」

「惣流・キョウコ・ツエツペリンの件ですが、かなり時間がかかります。」

現時点では、生死の確認まで至らないとのことでした。

「何っ。それでは、生きているかもしれないと言っことか。」

「その点については、分からないとしか言いようがないそうです。」

これには、かなり深い裏がありそうです。」

「そうか……。で、他に何か言っていないかったか。」

「はっ。他のパイロットの警備をして欲しいとのことでした。」

今のネルフでは、パイロットの警備には不安があるとのことでした。どういたしましょうか。」

「いいだろう。言う通りにしてやれ。だが、中学校の中までは難しいぞ。」

「それについては、彼女が手筈を整えるそうです。」

「分かった。で、第3新東京市のガードはどうなっている?」

「はっ。サイドインパクト以降、10を超える組織が侵入を図っていますが、全て水際で撃退しています。」

特に最近では、MAGIのサポートがあるため、こちらに被害は殆どと言っていいほど出ていません。」

「いいだろう。これからもその調子で頼む。」

「ただ、これには、惣流・アスカ・ラングレーから要望がありました。」

「何だ。」

「あと一月後には、侵入を試みる敵対組織が質量共に激増することです。」

これに対処してほしいとのことでした。」

「ふうむ、では、レッドアタッカーズを使うとするか。」

「良いのですか。彼らとジャッジマンとの間で、一悶着あったと聞いていますが。」

特に、レッドウルフとの間に。」

「彼もプロだ。心配は無用だ。それよりも、2月中に送り込むから、

手配するのだ。」

「はっ。でも、これだけのことをする価値があるのでしょうか。かかる経費も膨大なものになります。」

我が組織にとって、どのような利点があるのでしょうか。」

「これは、我が組織にとって、大きな賭だ。」

我々がネルフに加担すれば、ネルフはゼーレに勝つ可能性がある。そうなった時、ネルフは非公開とはいえ、表の組織だから、裏世界を纏めることは出来ない。」

そこで、我々の出番となるわけだ。」

その時の利益は計り知れないだろう。」

これまでに要した費用など、たかが知れている。」

「なるほど。」

「ネルフが我々を公認するとも思えんが、黙認ぐらいはしてくれらるだろう。」

だが、それだけでは心もとない。」

だから、エヴァのパイロットとの信頼関係を築いておく必要がある。エヴァのパイロットとの信頼関係が深ければ、他の組織への睨みも利くだろう。」

「そこが分からないのですが。」

何故、エヴァのパイロットとの信頼関係が必要なのでしょう。」

「何故、エヴァが他国から軽んじられているのか、知っているだろう。」

「ええ、あれは局地戦以外に使えませんから。」

電源ケーブル無しでは5分しか動けないんじゃないやあ、兵器としては使
い物になりません。」

「その弱点が無くなるとしたら。」

「ええっ！ま、まさか。」

「使徒が来てから他の組織は引き揚げていったから、あまり知られ
ていないが、

エヴァは電源ケーブル無しで動いたこともあるのだ。」

「！」

「今後、エヴァは無敵の兵器となるだろう。」

そして、パイロットの重要性はますます高まるだろう。

敵対する組織や国に対して、エヴァを送り込むぞという脅しが利く
だろう。」

「ですが、そつうまく言うことを聞いてくれるでしょうか。」

「『演習』を行う場所くらいは、我々の言う通りにしてくれるだろ
うよ。」

「た、確かに、それ位なら大丈夫でしょう。」

「だが、そのためには、彼らの機嫌を損ねることがあってはならん
のだ。

分かるな。特に碇シンジは、人が傷付くのを嫌うという。

だから、その点は最大限に気を遣う必要がある。

そのためには、並の傭兵では駄目だ。」

「それは分かりました。でも、なぜ、惣流・アスカ・ラングレーなのですか。」

「いくら何でも、ネルフ総司令の息子は言うことを聞かないだろう。それに、綾波レイは行方不明と聞く。」

鈴原トウジでは役不足だ。」

「消去法ですか。私からすると、あのように頭が切れすぎる相手は苦手なのですが。」

「だが、彼女は人を裏切ることはないだろう。」

過去の経歴を調べたが、彼女は今まで一度たりとも、自分から人を裏切ったことは無い。

どんな小さなことでもだ。

ドイツでは、かなり酷い目に遭ってきた故に、かなり攻撃的な性格をしているようだ。」

普通なら心がねじ曲がってもおかしくないのだが、彼女は辛い経験故、裏切りを忌み嫌うのだろう。」

彼女の信頼を曲がりなりにも勝ち得たのは幸運だった。

我々の調べでは、ドイツにおいて彼女の信頼を勝ち得ていたのは、加持リョウジと葛城ミサト、それに数人位だそうだ。」

「分かりました。では、例の件で、さらなる信頼を得られそうです。」

「絶対に彼女を守るのだ。」

万一、彼女が死ぬようなことがあれば、我々の努力は水の泡となる。それだけは避けるのだ。」

「はっ。」

男が返事をすると同時に通信は切れ、それまで盟主と呼ばれた男が写っていた画面には、もう何も写っていないかった。

「惣流・アスカ・ラングレーか。

盟主様のお遊びと思っていたが、どうやら我が組織の浮沈にかかる大事のようだな。

気を入れ直さんとな。」

男はそう呟くと、部屋を後にした。

第18話補完 守る理由（後書き）

謎の組織の目的が、徐々に分かってきました。少なくとも、今のところは味方です。

第19話 プロポーズ

映画の話が一段落した後、客は次々と帰って行った。

アスカはユキに頼んで、ヒカリを泊めてもらうことにした。

ケンスケはトウジの部屋に泊まることになり、連れ立って帰って行った。

問題はミサトとリツコであったが、アスカは正直に事情を話した。

使徒に精神攻撃を受けて以来、精神的に不安定であること、体調を崩して最近まで入院していたこと、

一人で寝ると悪夢にうなされるため、シンジと一緒に寝ていること。そして証拠として、今日ネルフから持ってきた使徒の映像とアスカの入院時の映像を二人に見せたのである。

記憶を失って以来、一般人と同じ感覚を持つようになった二人にとっては、

その映像はかなりインパクトがあったらしく、簡単に信じてくれた。このため、二人は堂々と一緒に眠ることが出来たのである。

二人が横になって直ぐにアスカが口を開いた。

「ねえ、シンジ。アタシはドイツに行った方が良いのかな。」

「そんなことないよ。アスカは、こっちで頑張って欲しいな。」

ミサトさんが帰って来たことだし、アスカが居た方が、ミサトさんの記憶が戻り易いと思うし。

僕も、アスカのことが好きだからというのもあるけど、それ以外にも居て欲しい理由がたくさんあるんだ。」

「でも、どつやって断るの。何か、良い断り文句があるの。」

「うん、それは…。」

シンジは黙ってしまふ。

「そうよね。元々、アタシはドイツの人間だから、戻って来いって言われたら、戻るのが筋なのよね。」

義理とは言え、両親も居るし。ここに居る理由は無いのよね…。」

その日はそれ以上、会話は進まず、二人はいつしか眠りに付いた。

朝、アスカの着替えの時に、急にシンジはアスカに声をかけた。

実は、今朝メールチェックをしていたら、変わった内容のメールが届いていたのだ。

「ねえ、アスカ。変なメールが届いたんだけど。」

「うん、なあに。」

「ミサトさんをネルフの病院の302号室で寝かせておくようにって言う内容なんだ。」

そうすれば、ミサトさんの記憶が戻る可能性があるって言うんだ。アスカはどう思う。」

「その内容なら、ミサトに危害が及ばないから、言う通りにしてもいいんじゃない。」

もしかしたら、ミサトの知り合いが来て、何かしてくれるかもしれないし。」

駄目で元々っていう気持ちで、アタシは賛成するわ。」

今のままじゃあ、進展は無いもの。」

「そうだね。駄目で元々だよな。」

でも、僕は今日の午前中は用事があるから、トウジに頼むよ。」

だから、アスカも一緒に行って欲しいんだ。」

今日からシンジは、軍事教練が始まるのだ。」

「ええ、いいわよ。じゃあ、また大勢でぞろぞろと行くわね。」

「そうだね。頼むよ、アスカ。僕も、午後から行くから。」

そんな会話をしていたら、玄関のチャイムが鳴った。ユキがやって来たのだ。

今日は、ヒカリやトウジやケンスケも一緒だった。

「...と言う訳で、トウジ、頼むよ。皆もお願いします。」

シンジは、トウジ達にミサトをネルフの病院に連れて行くことをお願いした。

情報元がはっきりしないため、トウジは難色を示した。

だが、ミサトの表情が暗くなったことに気付いたケンスケが賛成し

たことから、
アスカが賛成にまわり、ユキとヒカリが同調した。
このため、結局シンジの提案通り、ミサトを病院に連れて行くこと
になった。

「まあ、良いってことよ。ミサトはんの記憶が戻るかもしれないし。
」
トウジは笑って言う。

「そうそう。でも、僕と恋人になってくれないのは辛いけどね。」
ケンスケは、本気がどうか分からないことを言う。

「そう言うことだから、シンジは心配しないで行ってらっしゃい。」

「うん、アスカ、それにみんな、行ってきます。」

そう言って、シンジは朝食後、急いで出かけて行った。
残る者達も、食後のコーヒーや紅茶を飲み終わると、ネルフへと出
かけて行った。
今日も留守番のユキを除いてだが。

昼食は、ネルフの食堂だった。
皆でワイワイやっている、ケンスケが皆に映画撮影の協力を依頼
してきた。

「実は、ミサトさんがご臨終っていうシーンを撮りたいと思ったん

「ただ、この際だから協力してくれないか。」

ケンスケの話では、ミサトが死んで、皆が涙を流すシーンを撮りたいのだという。

最初はミサトも嫌がったが、ケンスケの語った

『映画の中で死ぬ人は長生きするという迷信がある。』ということ
を信じたのか、結局OKした。

ケンスケの説明では、ミサトの恋人役のエキストラが1名病室に入
ってきて、ミサトの死を嘆くというものだった。

リッコが医師の役、ヒカリが看護婦の役だ。

ケンスケの合図と共に、ミサトの顔に白い布がかけられ、シンジ、
アスカ、トウジがミサトにすがってすすり泣いた。

その時、急にドアが開き、一人の男が入ってきた。

「か、葛城…。ま、まさか…。」

「残念ですが、つい今し方、葛城ミサトさんは、お亡くなりになり
ました。」

リッコが小さな声で言うと、看護婦役のヒカリは嗚咽をもらし、う
つすらと涙を流した。

「な、なんてこった…。うおおおっ。」

男は大声で叫び、シンジ達を押し退け、ミサトの側に寄って行った。

「お前が死んで、やっと分かるなんて…。俺は、大馬鹿だ。

葛城、俺はお前のことを、心から愛していたんだ。

ちくしょう！俺は、そんなことも分からなかったなんて。
葛城、俺が悪かった。頼む、生き返ってくれ！お前を愛しているんだ。！」

男は、とても演技とは思えないほど泣きじゃくり、肩を震わせた。

その時、アスカが急に叫んだ。

「あつ、心電図が動いたわ。先生！ミサトさんは、生き返るかもしれません。」

その声に、男はハツとして顔を上げる。その顔は、涙でくしゃくしゃだった。

「そ、そんな。有り得ないわ。死んだ人が生き返るなんて。」「
リッコは取り乱して叫ぶ。

「急いで人工呼吸をすれば、助かるかもしれません。」

アスカの言葉に男は即座に反応し、人工呼吸を始めた。何度も何度も。

何度目かの人工呼吸の後、ミサトの目が開かれた。

「かつらぎ！」

男は大声で叫んだ。

「か、かじなの…。」

ミサトの目は涙で潤んでいる。

「かつらぎー！」

男は、尚も大声で叫んだ。

「もう、どこにもいかないで……。」

ミサトの目も涙でくしゃくしゃだった。

「もう、離すもんか。葛城、結婚してくれ。俺は、お前のことを愛しているんだ。」

それを聞いたミサトの目は、大きく見開かれたが、すぐに小さな声で返事をした。

「うん……。うれしい……。」

ミサトの顔は、真っ赤だった。

「パチパチパチパチ……」

誰かが、拍手を始めた。

すると、それが部屋中に広がっていった。

病室の中は、幸せな雰囲気にもまれていった。

だが誰一人として、泣いているふりをして腹を抱えて笑っていたアスカに、気付く者はいなかった。

加持のプロポーズの1時間後、皆はネルフの食堂に居た。

ミサトは、加持の横で少し顔を赤らめながらも、微笑んでいた。まわりの皆も、ニコニコしていた。

「やあ、お恥ずかしい所を見せちゃったな。シンジ君にはやられたよ。」

俺は、本当に葛城が死んだと思ってしまったよ。」

「すみません。」

今朝メールが来て、言う通りにすればミサトさんの記憶が戻る可能性が高いというものでしたから。

でも、まさか加持さんが来るとは。」

「ははは。一体誰だい。そんなお節介をする人は。」

「ジャッジマンというペンネームだったと思います。」

「何っ。それは本当かっ。」

加持は驚いたように、目を見開いた。

「ええ。加持さんのお友達なんですか？」

シンジは、加持の反応に違和感を感じたが、そのまま質問した。

「まあ、そんなもんだ。お節介焼きのな。」

そう言うと、加持は肩をすくめた。

「でも、良かったわよね。」

シンジのお蔭で、ミサトの記憶が一部とはいえ、戻ったんだから。加持さんも、シンジに感謝しないとね。」

アスカは、ニヤニヤしながら言う。

「そうだな。シンジ君には感謝しないとな。」

「か、加持さん。目が笑っていないんですけど。」

「そうか？俺は、シンジ君には感謝してるぞ。いつか、この借りは絶対返すけどな。」

そう言う加持の目は、確かに笑っていなかった。

人前で、あんな恥ずかしい事をする破目になったのだから、無理もないが。

「シンちゃん、私は感謝してるわ。」

少しだけ記憶が戻ったし、加持とようやく結婚出来そうだし。

シンちゃんがいなかったら、私は加持のことを思い出せなかったかもしれないもの。

本当にありがとう、シンちゃん。」

ミサトは、幸せそうな笑顔を浮かべてシンジを見た。

「まつ、葛城がそう言うなら、俺としても素直に感謝しないとな。ありがとうシンジ君。大きな借りが出来てしまったな。」

加持はそう言っ、頭を掻いた。

「でも、加持さん、今まで何してたのよ。」

アスカが疑問を投げかけた。

「まあ、それはおいおいな。ちょっと、単独行動をしていたのさ。」

加持は、笑ってごまかした。

「まあ、良いわ。でも、これからどうするの。」

もちろん、ミサトと一緒に暮らすんでしょっね。」

「いきなりそれはまずいだろう。」

でも、当面は、葛城と同じマンションで暮らすよ。

問題は、いつ結婚するかだな。

準備やら何やらで、どれ位かかるか。

葛城の希望もあるだろうし、記憶が完全に戻ってからにした方が良
いかもしれないし。」

「ミサトはどうしたいの。」

アスカは、今度はミサトに振った。

「うーん、良く分からないけど、あんまり待ちたくないのよね。」

ミサトは、元のキャラクターを取り戻しつつあるようで、以前の話
し方に近い言い方になっている。

「じゃあ、3月の下旬はどう。春休み中なら、学校に影響は無いし。」

「

「えっ、学校って、どうということだい、アスカ。」

「加持さん。ミサトさんは、僕らの学校に出向するんですよ。」

シンジの言葉を聞いた加持は、見事に固まってしまった。

その後、ゲンドウにあいさつをした方が良いという話になり、二人
は連れ立ってゲンドウの所へと向かった。

加持帰還と、二人が結婚するという報告である。

そして、皆その場で解散となった。

トウジはリハビリで、ヒカリはその手伝い。

ケンスケは、シナリオ作りのために、一旦帰宅。

リツコは、ネルフの執務室の整理。
アスカとシンジは、昨日の作業の続きをするため、アスカの執務室である副部長室へと向かった。

シンジは作業をしながらも、これからどうやってアスカに声をかけようかと考えていた。

昨日の夜、睡眠時間を削って考えた結果、アスカがドイツに帰らなくてもすむ方法をたった一つだけ考えついたのだ。

だが、それにはアスカの協力が必要なのだ。それでシンジは頭を悩ませていた。

（アスカは、一体何て言うのかなあ。やっぱり駄目かなあ。）

シンジは迷った。言うべきか、言わざるべきか。だが、シンジは、アスカが遠くへ行ってしまうのを恐れる気持ちの方が強かった。

こうして、アスカに、珍しくシンジの方から声をかけた。

「ねえ、アスカ。今日はちょっと寄り道したいんだけど。シンジは心なしか、思い詰めたような顔をしていた。」

「ええ、いいわよ。でも、何処へ行くのよ。」
アスカは、シンジの顔が気になったが、どうせすぐ分かるだろうと思ひ、気軽に返事した。

「うん、ちょっとね。」
シンジははぐらかした。

アスカはちよつと不審そうな顔をしたが、結局アスカは、シンジの誘いに乗った。

シンジは、アスカを郊外の公園に連れ出した。
もう既に日は暮れており、星が見えるような時間だった。
シンジは、空を見上げながら、唐突に尋ねてきた。

「ねえ、アスカ。星は何で輝くと思う。」

「はあ、シンジったら、そんなことを言うために、アタシを連れ出したの。」
アスカの表情が少し歪んだ。

「うん、そうだよアスカ。僕は星を見ると、いつも何故星が輝くのか、疑問に思うんだ。
それで、アスカがどう思うのか、聞きたいんだ。」

「科学的に言えば燃えているからでしょう。燃えると言っても、核融合でしょうけど。」

「そうだよね。燃えているんだよね。
僕は思うんだ。星は、燃えているから綺麗なんだって。
人も同じじゃないかな。」

頑張つて燃えている人は、輝いて綺麗なんだよ。
いつか言ったかもしれないけど、僕は小さな頃から星が好きだった。
その理由が、やっと分かったんだよ。」

「ふくん、シンジは星が好きだったんだ。」

「うん。僕は最近、やっと星が好きなの理由に気付いたんだ。
でも、もう一つ気付いたことがあるんだ。星と同じように、輝いて
いる人が好きなんだって。」

だから、僕はアスカのことが好きになったんだって。」

「な、なに言ってるのよ、急に。恥ずかしいじゃない。」
アスカの顔は、真っ赤になった。

「急にこんなことを言つて驚くかもしれないけど、僕はアスカと会
わなければ、

何も努力しないで、輝きを失うところだったと思うんだ。

でも、僕はアスカと出会つて、輝きたいと思うようになった。

でも、情けないけど、アスカがいなきゃ駄目なんだ。

アスカが側に居ないと、僕はどうやって輝いたらいいのか、分から
なくなるんだ。

僕には、アスカが必要なんだ。」

「シンジ…。」

「アスカ。僕は、アスカにドイツに行つて欲しくない。

僕は、アスカのことが大好きなんだ。

僕は、アスカのために輝きたい。

だから、僕の側に居て欲しい。

アスカ。結婚して欲しい。」

シンジの顔は、いつになく真剣だった。

「……。」

アスカは、シンジの真剣な表情に、息を飲んだ。

「もちろん、今すぐというのは、無理だつて分かっている。だから、今は何も言わずに、この指輪を受け取って欲しい。」

シンジは、いつの間にかダイヤの指輪を手にしていた。いわゆるエンゲージリングだ。

「アスカ。頼む。これを受け取って欲しい。」

「駄目よ。受け取れないわ。」

アスカは、首を横に振る。

「アスカ。お願いだ。受け取って欲しい。好きなんだ。」

「ううん、アタシは、シンジの気持ちを受ける資格がないの。アタシは、シンジのことを利用することしか考えていない、悪い女なの。」

シンジに言えない秘密を一杯持つてるし、性格も悪いし、気が強いし、家事も出来ないし、高慢ちきだし、どうしようもない女なの。

今日もドイツに帰りたくないから、シンジと婚約した振りでもして帰るのを断ろうなんて思っていたの。

シンジの気持ちなんて、これっぽっちも考えてなかった。

アタシは、自分のことしか考えない最低女なの。だから、シンジの気持ちは受けられないのよ。」

「それでもいい。」

正直に言ってくれてありがとう。

僕はそんなアスカが好きになっちゃったんだ。

だから、お願いだよ。」

「アタシは、気が変わったら、シンジのことをポイって捨てちゃうかもしれないのよ。」

「それでもいいよ。」

「アタシは、シンジのことを好きじゃないかも知れないのよ。」

「それでもいいよ。」

「アタシは、凶暴で、気が強くて、わがままなのよ。」

「それでもいいよ。」

「アタシは、最低な女なのよ。」

「それでもいいよ。」

「何で、何で…。何でシンジはそんなに優しいの。」

「決まっているじゃないか。アスカのことを…心から愛しているからだよ。」

「シンジ、本当にいいの。」

アタシは、婚約の振りをする事しか考えていないのよ。

いわば、偽りの婚約なのよ。それでもいいの?」

「今はそれでいいよ。」

いつか、アスカには、もう一度プロポーズするよ。

それまでは、偽り…。

いや、偽りというのは嫌だから、仮初めの婚約ということでもいいよ。

「

「仮初めね…。分かったわ。」

そこまで言うのなら、シンジの気持ちを受けるところにするわ。

今のアタシは、正直言って余裕が無いの。

悪夢のせいもあるし、自分の気持ちを整理出来ないの。

だから、シンジの気持ちに応えることが出来ないの。

でも、勘違いしないで。

シンジのことは嫌いじゃないし、どちらかと言うと好きだと思ってるの。

けれども、家族として好きなのか、男として好きなのか、

好きという以上の感情があるかどうか分からないのよ。

そう遠くないうちに答えを出すようにするわ。いつかきつと。

でも、今はあくまでも仮の婚約よ。それでいいのなら。」

そう言うと、アスカは左手を差し出した。

その薬指に、シンジはゆっくりと指輪をはめた。

「アスカ、愛してる…。」

シンジの顔が、アスカに近づいていく。

「シンジ…。ごめんね、わがままばかり言って…。許してね。」

そう言いながらも、アスカは目を閉じる。

こうして、長いキスが始まった。

キスの後、二人の顔は真っ赤になって、口を開けずにいた。だが、ようやくアスカが口を開いた。

「ねえ、シンジ。今日は洒落たレストランで食事でもしない。」

アスカの気分はいつになく高揚していた。

アスカといえども、女の子である。

プロポーズされて、嬉しくない筈がない。

今の高揚した気分を維持したいと思うのは自然であったし、そのためには、

家に帰るのではなくて、洒落たレストランで食事して、良い気分になりたいと思ったのであった。

だが、シンジは何故か慌てた様子で断った。

「で、でも、今日は色々あったし、家で食べようよ。」

アスカは、何かピーンと来たようだ。

「シンジ、何か隠しているでしょう。正直に言いなさいよ。」

アスカが険しい顔を見ると、シンジは観念したように白状した。

「実は、トウジに、今日アスカにプロポーズすることは、話してあるんだ。

だから、今頃は、お祝いの準備をしているかもしれないんだ。

第19話 プロポーズ（後書き）

あとがき

ようやく、シンジはアスカにプロポーズします。

アスカを一途に思うシンジに対して、心の傷が癒えずに、はつきりとした気持ちにならないアスカ。

シンジは、アスカの心が固まるまで待つつもりでしたが、

アスカのドイツ帰還を防ぐため、大勝負に出ることにします。

結果は、吉と出たのですが、やっぱりシンジです。最後の詰めが甘いですね。

第19話補完 謎

加持とミサトが、揃ってゲンドウの所にあいさつをしに行ったとき、加持はミサトと婚約したことを報告した。

「…そうか。」

ゲンドウは、無愛想に応えたが、冬月は違った。

「そうか、おめでとう。良かった、良かった。」

そう言っつて、二人の肩を叩き、祝福した。

ミサトはもちろんのこと、加持までもが、感激のあまり、涙を流した。

あいさつが終わった後、二人はそれぞれの執務室に戻ったが、加持だけが呼び戻された。

「どうして、急に戻ってきたのだね。」

加持は冬月に聞かれ、自分の身に起きたことを全て話すことにした。

加持は、追い詰められて、拳銃に手をかけようとしたが、無駄だった。

ジャッジマンの、神業とも言える早撃ちによって、加持の拳銃は弾かれてしまった。
加持は丸腰になった。

「昔のよしみだ。遺言があれば、聞いてやる。」

加持は、万策尽きたことが分かったため、覚悟を決めた。

「…ある女性に、伝言して欲しい。」

加持は絞り出すように言った。

「ほう、何だ。」

ジャッジマンは、真剣な表情になっている。

「心から愛していた。すまない。そう伝えて欲しい。」

「ほう、お前にもそんな女がいたのか。で、その女は誰だ。」

「…葛城ミサト。ネルフの作戦部長だ。」

そう言うと、加持は死を覚悟して目を閉じた。

だが、しばらくの間静寂が辺りを支配した。

そして、ふいにジャッジマンが口を開いた。

「悪いが、お前の遺言は、彼女には伝えられそうにない。」

「どづいづことだ。」

「彼女は今、危篤らしい。もって1日だそうだ。だから、俺では間に合わん。」

加持はそれを聞くと、がっくりと肩を落した。だが、ジャッジマンは続けて言った。

「俺も、鬼ではない。お前に選ばせてやるっ。」

「なにっ。」

加持は、目を開いた。

「二つに一つだ。一つは、この場で俺に撃たれて死ぬ事。

もう一つは、お前の口から彼女に遺言を伝える事。どっちが良い。運が良ければ、彼女の死に目に間に合うだろう。」

「お前が無条件でそんなことを言うのか。」

加持は、ジャッジマンを睨んだ。

「もちろん、条件はあるさ。」

お前が結婚式やら婚約披露パーティーやらを開く時は、俺を招待する事。

これが絶対条件だ。」

「貴様、何を考えている。」

「それは言えないさ。俺はどちらでもいいが、どうするっ。」

「決まっているさ。彼女に会いたい。例え、どんな事があるうとも。」

「

「そうか、懸命な判断だ。生命を粗末にするもんじゃない。

じゃあ、一時休戦だ。」

きっかり24時間後には彼女の所に送り届けるよう、手配しよう。付いて来い。」

ジャツジマンは、そう言うと、背中を向けて歩きだした。

こうして、加持はミサトと再会することになったのである。

「これが、私が戻ってきた理由の全てです。」

加持が全てを話終わると、ゲンドウも冬月も、頭を抱え込んだ。どう考えても、敵の目的が読めないのだ。

「加持君。」

その、ジャツジマンという男は、君がネルフに所属していることを知らなかったのかね。」

「そんなことはないでしょう。」

ただ、どちらかというところ、ゼーレの手先だと思っていたかもしれないません。

おそらく、そうですね。」

「そうになると、その男は敵ではないかもしれないな。」

すると、それまで黙っていたゲンドウが口を開いた。

「その男は、どこまで一緒だった？」

「病院の入口付近まで、一緒に付いてきました。それが何か。」

「最近、奇妙な事が多い。」

この第3新東京市への潜入を図る工作員が、何故か妨害に遭っているらしいのだ。」

「だが、私は妨害に遭っていませんが。」
加持は、肩をすくめた。

「碇、まさか……。」

「ジャッジマンとその仲間が妨害しているっていうことですかい。」
加持が冬月の言い損なった言葉をつなぐ。

「そうとしか、考えられない。」

「だが、碇よ。誰が、何の目的でそんなことをする。」

「分かん。だが、我々にとって、悪い事ではない。
今、他国の組織に潜入されるのは、我々にとって、得策ではない。
しかも、我々に防ぐ手段は少ない。」

「まあ、我々にとっては、渡りに舟ってとこですね。」

「もう一つ、加持君に聞きたいことがある。アスカ君のことなんだ
が。」

冬月は、アスカの話題を持ち出した。
アスカと付き合いの長い加持の意見を聞きたいからだ。

「アスカが何か。」

「実は、彼女の行動に、不審な点があつてね。スパイではないかとの疑いがあるのだよ。」

今、彼女には、ドイツから帰還指令が出ていると伝えてある。

もし、素直に帰るなら、彼女がスパイではないかと疑っているのだよ。」

そうして、冬月は、アスカの不審な点について、全て加持に語った。加持は、しばらく考えた後、ゆつくりと答えた。

「アスカは、帰りませんよ。それに、スパイでもないでしょう。」

「ほう、何故かね。」

「アスカは、私の知らない所で、かなり酷い目に遭っていたようです。」

ドイツを離れるときも『もう、二度と戻るもんか。』って寝言でも言っていた位ですよ。」

「本当かね。」

「それに、アスカは、私がガードしているとき以外は、常にドイツ支部の支配下にありました。」

ですから、ドイツ支部のスパイ以外は、有り得ませんよ。

ですが、ドイツ支部のスパイかどうかについては、言わずもがなでしょう。」

アスカは、あいつらの言うことは、絶対に聞きませんよ。

私に言わせりゃ、シンジ君の方が、よっぽど可能性がありますよ。」

「そうかね。」

「ただ、これからは違います。」

もしかしたら、誰かに騙されてということも考えられなくもないでしょう。

「今後は、十分気を付けた方がいいでしょうね。」

「そうか。ならば、アスカ君の監視を強化しよう。」

冬月は、加持の言葉を聞いて心が軽くなった。

だが、加持は反対に、アスカに対しての疑いを強めていた。

ジャツジマンの反応が早すぎるのだ。

これは、ネルフ内に内通者がいることを意味する。

しかも、加持とミサトの仲を知っていて、加持又はミサトに好意を持っている人間である可能性が高い。

該当するのは、アスカとシンジ位しか思い浮かばない。

加持の頭の中では、(1) シンジ単独、(2) シンジとアスカ共同、二つの可能性が浮かんだ。

アスカが加持を慕っているのは間違いないが、それはシンジも同じである。

一方で、加持とミサトの仲を知っていて、二人の仲を取り持つなんて、

シンジならやりそうだが、アスカがそんなことをするなんて考えられないのだ。

しかも今日見た限りでは、アスカは文化祭に向けて、かなり張り切っている。

新型兵器のパイロットの勧誘にせよ、周りの者を抱き込みつつあるのだ。

これは、いつ抜けても良いようにというスパイの手口ではない。

だが、一方で、アスカが開発者コードの件で、嘘を言っている可能性は高い。

その線からゲンドウに反発したシンジが、アスカを抱き込んだという図式が成り立つ。

ゲンドウも冬月も、シンジのことは、全く疑っていないようだが、シンジの方が、アスカよりは、よっぽど他国の組織が接触する機会が多く、怪しいことこのうえない。

だが、加持の直感は、シンジが単なる気の弱い男の子だと告げている。

スパイなんて、大それたことをするような子供とは考えられなかった。

だが、もっと分からないのが、ジャツジマン達の考えである。

加持を助けて、何のメリットがあるのか。

アスカとシンジがスパイだったとしても、それが加持を助ける理由にはならない。

何か別の理由がある筈なのだ。

幾ら考えても、加持には分からなかった。

まさかあのアスカが、謎の組織と対等に渡り合っているなどは、大人達の想像を遥かに超えていたのだ。

加持は、幾ら考えても結論が出ないため、考えること自体が嫌になっってしまった。

「ふう、嫌ですね。子供達を疑うなんて。」

加持の独り言に、冬月がしきりに頷いていた。

なお、加持は部屋を出るときに、一尉への昇進と諜報部長代行を命じられた。

第19話補完 謎（後書き）

キャラ設定：加持リョウジ

ネルフ諜報部所属。階級は一尉。1985年6月17日生まれ。隠密行動をとっていたが、アスカに謀られ急遽ネルフに戻り、ミサトにプロポーズすることになる。戻った後は、諜報部長代行となる。アスカとシンジの良き理解者であり、アスカとシンジから慕われている。

第20話 仮初めの婚約

アスカは、シンジがトウジにプロポーズのことを話したことを知り、猛烈に怒っていた。

「ねえ、アスカ。機嫌直してよ。お願いだよ。」

シンジは、泣きそうな顔をしてアスカに懇願した。だが、アスカは冷たく首を振った。

「ねえ、アスカ。ごめんよ。何でも言う事聞くから。お願いだよ。」

シンジの顔は、蒼白になっていた。

そんなシンジを見て、アスカは険しい顔つきで言った。

「何でも言う事聞くの?」

「う、うん。」

「じゃあ、こっつしなさい。」

アスカは、シンジの耳元で何かを囁いた。すると、シンジの耳は真っ赤になった。

「そ、そんなこと、出来ないよ。」

「シンジはさっき、何でも言う事聞くって言ったのに、嘘だったのね。」

もう、二度とシンジから指輪なんて受け取らないわ。」

「う、嘘じゃないよ。わ、分かったよ。」

シンジは観念したように、携帯電話を取り出して、電話をかけた。

「あ、トウジ。残念ながら、駄目だったよ。ちょっと早すぎたみたいだ。」

アスカに結婚してくれっていきなり言ったら、バチーンと一発食らっっておしまいだっただよ。

だから、今日は残念会になっちゃったよ。」

シンジは、とっても悲しそうな声で言った。

家に帰ると、皆がパーティーの準備をしていた。

「えっ、なあに、どうしたの。」

アスカは驚いた。

シンジのプロポーズを断ったので、パーティーがあるなんて思ってもいなかったのだ。

だが、ヒカリがやって来てにこりと笑って言った。

「加持さんが来るのよ。だから、みんなでお祝いするの。」

「えーっ、ホント。良いわね、お祝いしましょ。」

アスカもにつこりと笑った。そんなアスカを見て、ヒカリはおそろおそろ聞いてきた。

「ねえ、アスカ。碓君のプロポーズを断ったって本当なの。」

「えっ。何で知ってんのよ。まあ、いいけど、そういうことよ。」

「何で断ったのよ。アスカは、最近素直になってきたと思っていたのに。」

「ちよつと意外だったわ。」

「じゃあ聞くけど、今、鈴原にいきなりプロポーズされたら、ヒカリはウンって言うの？」

「それが素直って言えるの？良く考えなさいよ。」

「うっ…。確かにアスカの言う通りかもね。私はまだ早いつて思うもの。」

「でしょ。別に嫌いだから断ったんじゃないのよ。シンジもそれ位は分かっているわよ。」

「じゃあ、碓君も心配する必要は無いわね。」

「ええ。アタシとシンジは、恋人同士つていうのは変わらないし。ただ、結婚なんていうのを考えるのは、まだ早いよね。」
「そう言つと、アスカはウインクしてみせた。」

「そうね、アスカの言う通りだわ。」

ヒカリは、ほつとしたような顔をした。

そんなことを話しているうちに、ミサトと加持がやって来た。

「よう、アスカ、シンジ君。これで、俺も年貢の納め時だよ。
笑顔の加持がいた。」

「婚約おめでとう。」

「婚約おめでとう。」

「婚約おめでとう。」

皆で二人を祝福し、飲めや歌えやの大宴会となった。

夜12時を過ぎると、皆は次々と眠り始めた。
シンジは、またもや皆に毛布をかけていった。
だが、ケンスケの所に行くと、小声で囁いた。

「ケンスケ、お願いがあるんだけど…。」

シンジは全員に毛布をかけると、アスカに声をかけた。

「アスカ、ちょっと涼もうよ。」

アスカは頷くと、シンジと二人でバルコニーに出た。
そして、しばしの沈黙の後、静かにシンジが語りかけた。

「ねえ、アスカ。星は何で輝くと思う。」

「まあ、シンジだったら、そんなことを言うために、アタシを連れ出したの。」

アスカは、にっこり微笑む。

「うん、そうだよアスカ。」

僕は星を見ると、いつも何故星が輝くのか、疑問に思っただ。それで、アスカがどう思うのか、聞きたいんだ。」

「燃えているからかしら。燃えると言っても、核融合ね。」
アスカは首を傾げる。

「そうだよね。燃えているんだよね。
僕は思っただ。」

星は、燃えているから綺麗なんだって。
人も同じじゃないかな。

頑張つて、燃えている人は、輝いて綺麗なんだよ。
いつか言ったかもしれないけど、僕は小さな頃から星が好きだった。
その理由が、やっと分かった
んだよ。」

「シンジは、星が好きだったの。」

「うん。僕は最近、やっと星が好きな理由に気付いたんだ。
でも、もう一つ気付いたことがあるんだ。
星と同じように、輝いている人が好きなんだって。
だから、僕はアスカのことが好きになっただって。」

「な、なに言ってるのよ、急に。恥ずかしいじゃない。」
アスカの顔は、真っ赤になった。

「急にこんなことを言って驚くかもしれないけど、僕はアスカと会わなければ、何も努力しないで、輝きを失うところだったと思うんだ。」

でも、僕はアスカと出会って、輝きたいと思うようになった。でも、情けないけど、アスカがいなきゃ駄目なんだ。アスカが側に居ないと、僕はどうやって輝いたらいいのか、分からなくなるんだ。

僕には、アスカが必要なんだ。」

「シンジ…。」

「アスカ。僕は、アスカにドイツに行って欲しくない。」

僕は、アスカのことが大好きなんだ。

僕は、アスカのために輝きたい。

だから、僕の側に居て欲しい。

アスカ。結婚して欲しい。」

「それは、さつき断ったでしょ。アタシ達にはまだ早いつて。」

「もちろん、今すぐというのは、無理だつて分かっている。」

だから、今は何も言わずに、この指輪を受け取って欲しい。」

シンジは、いつの間にかダイヤの指輪を手にしていた。

「アスカ。頼む。これを受け取って欲しい。」

「駄目よ。受け取れないわ。」

アスカは、首を横に振る。

「アスカ。お願いだ。受け取って欲しい。好きなんだ。」

「うっん、アタシは、シンジの気持ちを受ける資格がないの。

アタシは、気が強いし、家事も出来ない女なの。

だから、シンジの気持ちは受けられないのよ。」

「それでもいい。正直に言ってくれてありがとう。

僕はそんなアスカが好きになっちゃったんだ。

だから、お願いだよ。受け取って。」

「アタシは、冷たい女なの。それでもいいの。」

「それでもいいよ。」

「アタシは、気が強くて、生意気な女なのよ。」

「それでもいいよ。」

「アタシは、シンジのことを好きじゃないかも知れないのよ。」

「それでもいいよ。」

「何で、何で…。何でシンジはそんなに優しいの。」

「決まっているじゃないか。アスカのことを…心から愛しているからだよ。」

「シンジ、本当にアタシでいいの…。」

分かったわ。そこまで言うのなら、シンジの気持ちを受けることにするわ。」

そう言うと、アスカは少し俯きながら左手を差し出した。その薬指に、シンジはゆっくりと指輪をはめた。

「アスカ、愛してる…。」

シンジの顔が、アスカに近づいていく。

「シンジ…。」

アスカは目を閉じた。

二人のキスが終わろうとした頃、不意に加持の声がした。

「よう、アスカ、シンジ君。婚約おめでとう。これで、俺達はお仲間だな。」

笑顔の加持がいた。

「婚約おめでとう。」

「婚約おめでとう。」

「婚約おめでとう。」

皆が、次々と祝福する。

ケンスケは、さきほどシンジに頼まれたため、ビデオカメラを構えている。

もちろん、この告白のことは、ケンスケが皆に伝えたのだが、アスカは、わなわなと震えだした。

「シンジ、一体これはなあに。」
シンジを思い切り睨む。

「ア、アスカ。怒らないでよ。」

（えっ、アスカったら、何で怒るんだよ。）

シンジはうるたえた。

「だから、なあにつて聞いてるんだけど。」

アスカは、思いつきり不機嫌そうな顔をする。

「ごめんよ。つい、ケンスケに告白することを喋っちゃったんだ。」
実際は、ビデオに撮るようにと頼んだのだが。

「ふん、覚悟は良いわね。」

アスカの目がキラリと光った様な気がした。

それを聞いた皆は、アスカの次の行動を予測していた。

トウジ曰く、

（このバカシンジって言うて、シンジのこと、どつくやろつな。

シンジの奴も可哀相に。

シンジは、あの凶暴女の一体何処がええんやろ。

全く、シンジも分からんやっちゃな。）

ヒカリ曰く、

（まずいわ。アスカは怒っているわ。何かしでかしそう。ドキドキ。）

ケンスケ曰く、

(惣流は、怒っているぞ。シンジは、ただじゃ済まないな。婚約した夜に、婚約破棄したりして。惣流なら、十分あり得るな。わくわく。)

加持曰く、

(さうで、アスカはどう出るかな。物凄く怒っていそうだけど。血を見るかな。)

ミサト及びリツコ

「？」

ユキ曰く、

(惣流さん、声も出ないほど、喜んでいるのかしら。良いわねえ。)

だが、アスカは誰もが予想しなかった行動に出た。

「良くもアタシに恥をかかしてくれたわね。覚悟はいいわねっ。」

「う、うんっ。」

(うつつ、何を、どう、覚悟するんだよっ。)

シンジは、自分の顔に冷や汗が流れるのがはっきりと分かった。

「今から言う事を誓うのよっ。一つ、碇シンジは、アスカの言う事は何でも聞きます」

「碇シンジは、アスカの言う事は何でも聞きます。」

(げっ、まずいっ。でも、どうしようもないよっ。)

シンジは、反射的に答えてしまった。

「二つ、碇シンジは、浮気をしません。」

「碇シンジは、浮気をしません。」

(あっ、また言っちゃった。)

「三つ、碇シンジは、アスカのものです。」

「碇シンジは、アスカのものです。」

(ええいっ、もうやけたっ！)

「よろしい。では、許してあげる。」

アスカは、そう言うなり、シンジにキスをした。

これにはシンジはもとより、他のみんなも驚いてあっけに取られていた。

唯一の例外は、ビデオカメラを回していたケンスケ位なものだろう。

だが、沈黙は長くは続かなかった。

祝福の声と拍手が二人を包んだ。

アスカもシンジも真っ赤だった。

拍手の後は、皆が二人をからかったが、アスカは開き直った。

「ふっんだ。羨ましいでしょ。悔しかったら、真似してご覧なさい

よ。」
ニヤニヤしながら、シンジと腕を組んで、からかうトウジを挑発したのだ。

これには、さすがのトウジも沈黙を余儀なくされた。

今までのアスカだったら、照れて、

『こんな奴好きじゃないわよっ！可哀相だからウンって言ったのよっ！』

なんてことを言った筈だが、照れるのを乗り越えて開き直ってしまったようだ。

加持も、そんな様子を見て、アスカに感嘆していた。

少し前のアスカなら、過剰に反応していたに違いないのに、今は余裕をもってかわしている。

加持の予想に反して、シンジを責めたりしなかった。

（アスカも成長していたんだな……。それとも、本当にシンジ君に惚れたか。）

加持は、父親のような目でアスカをみつめていた。

だが、それも長くは続かなかった。

ミサトがアスカをからかったため、

『ミサトは、指輪も買ってもらえないの。可哀相ね〜。』

アタシのシンジに頼んで、買ってあげようかしら。』などと反撃されたのだ。

「かじ〜っ。私も指輪欲しいよ〜。アスカのより、大きいのがいいよ〜。」

酔ったミサトが絡んできたため、あまり蓄えの無い加持は、青ざめることになった。

こうして、その日の夜、皆はミサト達とアスカ達を肴に、再び騒ぎまくった。

皆が寝静まった頃、シンジとアスカは、バルコニーで酔いを覚ますために、涼んでいた。

そこで、アスカはニンマリとしていた。

実は、バルコニーでシンジに告白させたのは、アスカの考えだったのだ。

アスカは、皆の前で告白させることによって、シンジに罰を与えたのだ。

シンジは、バルコニーで公園でのプロポーズを再現することを強要された。

但し、アスカはシンジにそっと耳打ちして、アスカがさっきと違うことを言っても慌てないように、

そして、仮初めという部分は言わないようにと言い含めた。

そして、公園でのシーンが、ほぼ再現されたのだった。

しかも、ケンスケにビデオカメラを回させるように仕向けてある。

そのうえで、シンジに3つの誓いを立てさせることに成功したのだ。シンジの完全敗北？いや、アスカの完全勝利である。

アスカは、今日ケンスケが撮った映像を文化祭の映画に使うつもりなのだ。

真実の記録として。そうすれば、シンジに変な虫が寄って来ないと考えたのだ。

もちろん、シンジはそんなことになるとは思っても寄らない。

第三者から見ると、仮の婚約と言いながら、婚約者を縛るのだ。好きかどうか分からないシンジを独占するというのは、誰がどう考えても、

アスカのわがままなのだが、こういう所は、サードインパクトの後でも変わっていない。

だが、シンジも悪いことばかりではない。

アスカが婚約者となれば、アスカに近づく悪い虫を堂々と払いのけることが出来るのだ。

しかも、以前よりもさらに親密な仲になるチャンスが増えるのは間違いない。

例えば、二人だけで旅行なんてことも可能になるし、二人だけで暮らすことも不可能ではないだろう。

他人の前でも、前よりは堂々とイチヤイチャ出来るだろうし、アスカが拒むことも少なくなるだろう。

少なくとも、堂々と手をつなぐことが出来るようになるだろうし、もしかしたら、人前で堂々とキス出来る様になるかもしれないのだ。

（恥ずかしかつたけど、アスカともっと親密になれるチャンスなんだ。だから、良いことなんだ、そうい思わなきゃ。）

シンジは、さきほどまで落ち込んでいたが、ようやく復活した。

もっとも、アスカはこのことに全く気付いていないようだ。

さて、しばらく二人は黙っていたが、アスカが口を開いた。

「アタシ達、婚約したんだね。何か、信じられないわね。」

「そんなことないよ。だけど、僕らにとっては、これが第一歩なんだ。」

（そうだね、結婚するまでは、安心出来ないや。）

「アタシ、本当にシンジと結婚することになるのかな。」

「うん、きっと僕とアスカは結婚するよ。」

（そうだ、絶対に見せるよ。）

「まあ、いい男になっていたら、考えてやってもいいわ。」

「なってみせるさ。そして、僕はアスカを幸せに見せるよ。」

（絶対に幸せに見せる。）

「ふふふつ。今日のシンジは、自信満々ね。」

「僕は、星を見ると、人生って本当にはかないものだと思うんだ。」

だからこそ、人間は精一杯生きていくと思うんだ。

星はいつかは燃え尽きるよね。人間も同じだよ。

燃え尽きるまでどれだけ輝けるかが大事だと思うんだ。

これからもアスカは輝いていくと思うし、僕もアスカと一緒に輝いていこうと思っている。

二人で頑張れば、きっと幸せになれるさ。」

「何よ、もう。アタシの気が変わるかもしれないって言ったでしょ。」

「変えさせないさ。僕は頑張つて、アスカにふさわしい男になるんだ。」

「おおっ、言ったわね。この、にわか自信家がっ。」

そう言いながらも、アスカは笑ってシンジの肩に自分の頭を預けた。そんなアスカの頭をシンジは優しく撫で続けた。

アスカは、しばしの間良い気分だったが、そのうち、静かに寝息を立てた。

シンジはそんなアスカの寝顔を優しく見つめるのだった。

（アスカ、とても綺麗だよ。僕は、君を愛している。きっと幸せにしてみせるよ。）

今、この瞬間、二人の心は間違いなく繋がっていた。

アスカはシンジを必要とし、シンジもアスカを必要としていた…。多分…。

これからも、二人には辛いこと、悲しいことが起きるだろう。

喧嘩もするだろうし、意地を張り合ったりもするだろう。

だが、今日の気持ちを忘れなければ、きっとどんな障害をも乗り越えていくに違いない。

夜空の星は、綺麗に輝いていた。婚約した二人を祝福するように。

第一部完

第20話 仮初めの婚約（後書き）

あとがき

ようやく、シンジとアスカは婚約します。

最後の詰めが甘いシンジですが、結局はOKができました。

アスカは、シンジのことが好きだとは思っているけれど、自分の気持ちに対して自信が無いのです。

だから、中途半端な行動になってしまいます。

アスカが本当にシンジのことを好きと認識するのは、まだ先の話のようです

第20話補完 キャラクター一覧、年表、特務機関ネルフ新組織図（20話時点

第20話補完 - その1 - キャラクター一覧（20話終了時点）

1 エヴァンゲリオンパイロット（チルドレン）

・碓 シンジ（いかり しんじ）

主人公。エヴァンゲリオン初号機（新初号機）専属操縦者。サードチルドレン。

ネルフ総司令碓ゲンドウの子供。母親碓ユイとは死別している？2001年6月6日生まれ。

市立第壱中学に在籍する。内気な性格で、最初はEvaに乗ることを嫌がる。

サードインパクトの時に、アスカのことを心から愛していることに気付いたため、

アスカに告白し、彼女いない歴14年に終止符を打った。

その後、ドイツへ帰還指令が下されたアスカから離れたくないため、アスカにプロポーズし、引き止めようとした。

色々とドタバタしたが、アスカのフィアンセになったため、幸せ一杯である。

もっとも、相変わらずアスカに頭があがらない。

・惣流・アスカ・ラングレー

エヴァンゲリオン式号機専属操縦者。セカンドチルドレン。2001年12月4日生まれ。

ドイツ支部から転属。市立第壱中学に在籍する。

明朗快活、スポ・ツ万能、容姿端麗、頭脳明晰、資産家。

本来は常人よりも遙かに強靱な精神力を持っているが、第15使徒の強力な精神攻撃を受けて心を蝕まれ、

壊されて、肉体にも変調をきたして入院する。

退院後も、悪夢に悩まされたが、シンジの添い寝によって、解決しつつある。

シンジのことを好きなのかどうかは、自分でも分かっていないが、シンジの優しさに徐々に惹かれつつあり、以前よりもシンジに対して、優しい笑顔を向けるようになった。

プロポーズされ、現在は、シンジのフィアンセである。

・綾波 レイ（あやなみ れい）

エヴァンゲリオン零号機専属操縦者。ファーストチルドレン。

彼女に関するデータは全て抹消済。市立第壱中学に在籍する。

アルビノといわれる色素異常のため、肌の色は真っ白。肉が嫌い。

現在、カヲルと一緒に火星にいるらしい。

・鈴原 トウジ（すずはら とうじ）

エヴァンゲリオン新参号機専属操縦者。フォースチルドレン。20

01年12月26日生まれ。

いつもジャージ姿。シンジとケンスケの3人でよくつるんでいる。

市立第壱中学に在籍する。アスカの策略に乗り、現在、洞木ヒカリと恋人同士になっている。

・渚 カヲル（なぎさ かをる）

エヴァンゲリオン操縦者。フィフスチルドレン。しかし、その実体は、第17使徒タブリス。

最後の使徒。シンジのことを気に入り、シンジを生かすため、あえてシンジの手にかかる。

今は、レイと一緒に火星にいるらしいが、近々こちらに戻ってくるらしい。

・パイロットリ・ダ・

アスカが紅いコンタクトで変装した姿。

量産型のエヴァンゲリオン9体をすさまじい勢いで倒したことが公になっているため、人気がある。

正体を知っているのは、ネルフの一部職員のみ。今後の出番は無い？

2 アスカやシンジの友人

・洞木 ヒカリ（ほらき ひかり）

アスカの親友。2002年2月18日生まれ。市立第壱中学に在籍する。

クラスの委員長で、割合真面目な性格である。

アスカの協力によって、かねてから想いを寄せていたトウジと恋人同士になった。

・相田 ケンスケ（あいだ けんすけ）

2001年9月12日生まれ。シンジとトウジの3人でよくつるんでいる。

市立第壱中学に在籍する。エヴァのパイロットを希望している軍事オタク。

また、写真関係にも強く、アスカを始めとする、美人女子生徒の写真を男子生徒に売りさばいて儲けている。

・森川 雪もりかわ ゆき

オリジナルキャラ。ゼーレのエージェント。

アスカを監視しているが、アスカのことは大好きで、憧れている。

ゼーレから貰う生活費が収入の全てで、妹と弟を養っている。

最近、アスカ達と仲良くなり、アスカの家の家政婦代わりとなって炊事、掃除、洗濯などの家事一切を担っている。

中学3年からはアスカと同じクラスになる。

・霧島 マナ（きりしま まな）

戦略自衛隊のスパイだが、事実上はゼーレのエージェント。

シンジを監視したうえ、Evaの秘密も探ろうとしていた。現在は所在不明。

3 ネルフ職員

・葛城 ミサト（かつらぎ みさと）

ネルフ作戦部長。階級は三佐。1985年12月8日生まれ。アスカとシンジの保護者。

エヴァンゲリオンの戦闘指揮を担当している。使徒の為父親を失ったので、その仕返しをしたいとネルフに就職する。

サードインパクト後、記憶喪失になるが、帰還した加持にプロポーズされ、喜んで受けるとともに、記憶が一部戻る。

2月から、シンジ達の中学校の担任になる。

・赤木 リツコ（あかぎ りつこ）

ネルフ技術部長。階級は一尉。1985年11月21日生まれ。エヴァンゲリオンの開発責任者。

ゲンドウと浅からぬ仲だったが、サードインパクト後、記憶喪失になり、

ゲンドウのことは、ただのおじさんだと思うようになって。今は、アスカ達と一緒に暮らしており、アスカとは仲良しになっている。

なお、本人は気付いていないが、アスカが誰かとかくっつけようと画策している。

2月から、シンジ達の中学校の教師になる。

・伊吹 マヤ（いぶき まや）

ネルフ技術部所属。階級は一尉。

サードインパクト後は、技術部部長代行となる。赤木リツコにあこ

がれている。
シンジがアスカに告白したシーンを誤って公開したため、アスカに恨まれる。
そのため、アスカに頭が上がらず、本来はアスカの上司なのであるが、
立場が逆転し、アスカの下僕となりつつある。

・加持 リョウジ（かじ りょうじ）

ネルフ諜報部所属。階級は一尉。1985年6月17日生まれ。
隠密行動をとっていたが、アスカに謀られ、急遽ネルフに戻り、ミサトにプロポーズすることになる。
戻った後は、諜報部部長代行となる。
アスカとシンジの良き理解者であり、アスカとシンジから慕われている。

一方で、ドイツ時代の女性関係をアスカに握られているため、アスカに対しては頭が上がらない。

・碓 ゲンドウ（いかり げんどう）

ネルフ司令。1967年4月29日生まれ。碓シンジの父親。
シンジのことは気にかけているが、妻のユイに会うため、他の全てを切り捨ててきた。
アスカ曰く、髭親父。

・冬月 コウゾウ（ふゆつき こうぞう）

ネルフ副司令。1958年8月15日生まれ。

大学助教授時代に碇ユイとめぐり合い、それが縁で碇ゲンドウと知り合う。

南極にセカンドインパクトの調査に出たとき、同行したゲンドウからユイと結婚したと知らされ驚く。

アスカやシンジのことを常に気にかけており、アスカとシンジが恋人になるきっかけを作った。

アスカとシンジの両方から信頼されている。

・日向 マコト（ひゅうが まこと）

ネルフ本部のオペレーター。サードインパクト後は、作戦部長代行をしている。

葛城ミサトにあこがれていたが、ミサトが加持と婚約したため、かなり落ち込んでいる。

・青葉 シゲル（あおば しげる）

ネルフ本部のオペレーター。

皆に気付かれないように、密かにマヤにアタックしていたが、全く相手にされなかった。

だが、シンジの恋の悩みをマヤと一緒に聞くことにより、マヤとの仲は親しくなりつつある。

アスカがそうなるよう仕組んでいることを知っており、アスカには頭が上がらない。

二人の仲の障害である（と思いついでいる）リツコを誰かと無理やりくっつけようと密かに画策している。

最近、そのことで、アスカと良からぬ相談をしているらしい。

・碓 ユイ（いかり ゆい）

シンジの母。ゲンドウの妻。シンジが幼い頃、初号機に取り込まれる。

・惣流・キョウコ・ツエツペリン

アスカの母。

ドイツ支部（旧ゲヒルン）にてエヴァのシンクロの研究をしていたが、精神汚染を受け、アスカが幼い頃自殺したとされているが、真相は不明。

4 その他

・ペンペン（ぺんぺん）

温泉ペンギン。アスカ、シンジ、ミサトと同居している。

・キール・ロレンツ

人類補完委員会のメンバー

・ジャツジマン

オリジナルキャラ。謎の組織のエージェント。凄腕の傭兵でもある。加持とは面識がある。第3新東京市のガードとゼーレ調査の責任者。後に、第3新東京市のガードは、アメリカの傭兵部隊、レッドアタッカーズに任せることになる。

・盟主^{めいしゅ}

オリジナルキャラ。謎の組織のトップ。その正体・目的は不明だが、影に隠れて、チルドレン達のガードをするよう、部下に指示している。

・キャシー

オリジナルキャラ。謎の組織とアスカとの連絡員。その正体は不明。

・レッドウルフ

オリジナルキャラ。アメリカの傭兵部隊、レッドアタッカーズの一員。

格闘技、兵器、爆弾、変装、諜報戦など、あらゆる分野のエキスパートであり、

唯一、ジャッジマンに勝ったことがあるほどの凄腕。

謎の組織に雇われて、アスカ達の身辺警護のために近付いてくるが、その年齢、性別など正体は一切不明。

第20話補完 - その2 - 年表 (20話終了時点)

蒼い瞳のフィアンセの年表を作りました。エヴァは、TVと映画の設定が違っていたり、つじつまが合わなかったりすることが多いので、整理したものです。つじつまが合わないところや分らないところには、私が独自に設定しています。なお、話の展開の都合上、この年表が変更される場合もあり得ます。

1999 冬月コウゾウ (京都大学教員)、研究室で碓ユイと出会う。

冬月コウゾウ、六分儀ゲンドウの指名で身元引受人として警察署出頭。

秋 碓ユイ、冬月にゲンドウと付き合っていることを告白。

2000

9・12 (火) ゲンドウ、資料と共に南極より引き上げ、日本へ向かう。

9・13 (水) セカンドインパクト発生。南極大陸融解。地軸のずれにより生態系激変。

9・15 (金) インド・パキスタン国境で難民同士の軍事衝突。世界各地で内戦。

9・20 (水) 東京に新型爆弾投下。以後東京は閉鎖区域に。

2001

2・14（水） バレンタイン休戦臨時条約締結。各地の内戦状態閉塞。

6・6（水） ゲンドウ・ユイの間に、シンジ誕生。

第2新東京市（長野県松本市）に遷都。

9・12（水） 相田ケンスケ誕生。

12・4（火） 惣流・アスカ・ラングレー - 誕生。

1226（水） 鈴原トウジ誕生。

2002 ゲンドウ・冬月等セカンド・インパクト正式調査の為、南極へ。

国連、船中でゲンドウはユイと結婚していることを冬月に報告。セカンドインパクトの原因を「大質量隕石落下」と発表。

2003 冬月、人工進化研究所所長碓ゲンドウに、セカンドインパクト事実公表を迫る。

ゲンドウ、冬月を「ゲヒルン」に誘う。

2004 箱根地下第2研究所実験中、碓ユイ消失。碓ゲンドウ一時失踪。

帰還後「人類補完計画」・「アダム計画」推奨を提言。

シンジ、ゲンドウとの別居生活開始。

2005 葛城ミサト、第2東京大学で赤木リツコ、加持リョウジと知り合う。

惣流・アスカ・ラングレー、セカンドチルドレンに選出。

（映画は2008年。）

同日、惣流・キョウコ・ツェッペリン自殺。（映画は2

- 008年。
）
第2次遷都計画。第3新東京市着工。
2007 葛城ミサト、加持リョウジと別離。
2008 赤木ナオコ、A G I基礎理論完成。赤木リツコ、ゲヒル
ン入所。E計画勤務を拝命。
2009 葛城ミサト、ゲヒルドイツ第3支部入所。
2010 綾波レイ、ゲンドウに連れられ、ゲヒルン来所。
赤木ナオコ博士、M A G Iシステム完成。同日夜、綾波
レイを絞殺し、自殺。
ゲヒルン解体。同日特務機関ネルフ発足。同組織に移行。
2012 碇ユイ8度目の命日。
2014 綾波レイ、第3東京市第壱中学校に転入。
2015
第3使徒、サキエル、第3新東京市に襲来。
汎用人型決戦兵器エヴァンゲリオン稼働開始。
暴走した初号機によって使徒殲滅。
06 碇シンジ、第3東京市第壱中学校に転入。
06 第4使徒シャムシエル、シンジにより殲滅（第3使徒
出現の3週間後）。
07 第5使徒ラミエル、シンジにより殲滅。
07 J A暴走。

07 第6使徒ガギエル、アスカとシンジにより殲滅。

0721(火) アスカ転校(TVでは9月21日でした。)

0804(火) 第7使徒イスラフェル登場。

0811(火) 第7使徒アスカとシンジにより殲滅。

0815(土) 第8使徒サンダルフォン、アスカにより殲滅。

08 第9使徒マトリエル、アスカ達により殲滅。

09 第10使徒サハクイエル、アスカ達により殲滅。

マナ登場

09 第11使徒イロウル、リツコとMAGIにより殲滅。

09 第12使徒レリエル、暴走した初号機によって殲滅。

09 米国ネルフ第2支部、エヴァ4号機へのS2機関搭載
実験中に消滅。

第13使徒バルディエル、ダミ-プラグに操られた初号機
機によって殲滅。

10 第14使徒ゼルエル、暴走した初号機によって殲滅。

初号機、使徒の捕食によりS2機関獲得。

11 シンジ、初号機からサルベ-ジされる(使徒出現の3

3日後)。

11 第15使徒アラエル、レイによって殲滅。

12 第16使徒アルミサエル、レイの自爆によって殲滅。

エヴァンゲリオン零号機自爆により、第3新東京市壊滅。

12 第17使徒タブリス(カヲル)、シンジにより殲滅。

2016

1・02(土) A-801発令により、ネルフ超法規的保護破棄
戦略自衛隊による軍事介入。
1・03(日) 人類補完計画、ゼーレにより発動。サードインパ
クト発生。

(第1部) 婚約に至る道

1・06(水) アスカ目覚める。
1・08(金) 記者会見。
1・09(土) マヤの仕事を仕上げる。アスカとシンジが恋人に
なる。
1・10(日) ユキと友人になる。マヤに再度仕事を頼まれる。
1・11(月) アスカ、ミニスカートを買う。
1・13(水) ヒカリとトウジをくつつける。
1・14(木) アスカがS計画の最高責任者となるがドイツから
帰還指令。映画のシナリオ決定。
1・15(金) 加持帰還。加持とミサトが婚約。アスカとシンジ
も婚約。

第20話補完 - その3 - 特務機関ネルフ新組織図(20話時点)

総司令官：碇ゲンドウ

副司令：冬月コウゾウ

各国支部（支部長は、副司令相当職）

アジア方面　　：中国支部（北京、Eva配備予定）、インド支部、インドネシア支部

ヨーロッパ方面：ドイツ支部（ベルリン、Eva配備予定）、ドイツ第2支部ハンブルグイギリス支部、フランス支部、ロシア支部

北アメリカ方面：アメリカ支部（Eva配備予定）、アメリカ第3支部マサチューセッツ

南アメリカ方面：ブラジル支部（Eva配備予定）

アフリカ方面　　：エジプト支部（Eva配備予定）

オーストラリア：オーストラリア支部

注）ベルリン、ハンブルグ、ペキン、マサチューセッツには、マギタイプのコンピュータが設置されている。（映画の設定より）

本部組織図

総務部（総務人事財政・施設管理）

総務部長：冬月コウゾウ（副司令兼務）

特命部長

E計画（EVANGELION開発計画）　責任者：赤木リツコ

S計画（ゼーレ殲滅・掃討計画）責任者：惣流アスカ（対外的には冬月）

NR計画（NERV再生計画）　責任者：惣流アスカ（対外的には冬月）

ER計画（EVANGELION再生計画）責任者：惣流アスカ（対外的には冬月）

作戦部　（戦闘時の作戦指揮、武器弾薬の管理、パイロットの管理）

作戦部長：葛城ミサト（但し、市立第壹中学校へ出向）

部長代行：日向マコト

Sチーム（作戦立案、戦況分析） チーフ：日向マコト、サ

ブ：碓シンジ

Tチーム（通信、情報分析担当） チーフ：青葉シゲル、サ

ブ：惣流アスカ

Evaパイロット（チルドレン） チーフ：碓シンジ、

サブ：惣流アスカ

初号機パイロット：碓シンジ

式号機パイロット：惣流アスカ

参号機パイロット：鈴原トウジ

技術部（技術開発研究、EVA・MAGIの運用管理）

技術部長：赤木リツコ（但し、市立第壹中学校へ出向）

部長代行：伊吹マヤ

副部长：惣流アスカ

Aチーム（MAGI運用管理） チーフ：赤木リツコ（事実

上はアスカ）サブ：伊吹マヤ

Bチーム（EVAの運用管理） チーフ：惣流アスカ、

サブ：伊吹マヤ

Cチーム（兵器開発） チーフ：伊吹マヤ（事実上

はアスカ）

Dチーム（使徒の研究） チーフ：伊吹マヤ、

サブ：惣流アスカ

Xチーム（新兵器パイロット） チーフ：惣流アスカ、

サブ：相田ケンスケ

広報部（隠蔽工作、宣伝工作、ネルフのPR）

広報部長：マリス・アマリス

Aチーム（使徒隠蔽工作） チーフ：マリス・アマリス

Bチーム（ネルフのPR） チーフ：惣流アスカ
Sチーム（対ゼレ戦略） チーフ：マリス・アマリス（
事実上はアスカ）

保安部（本部施設内の保安）
保安部長：真田ヒロシ

諜報部（諜報謀略、本部施設外の身辺警護）
諜報部長：空席
部長代行：加持リョウジ

副部長：碓シンジ（アスカの身辺警護専任）
Nチーム（ネットを利用した諜報・謀略活動） チーフ：碓シンジ（事実上はアスカ）

・各登場人物の階級

二佐：惣流アスカ二佐（TⅠ後に三尉から昇進。但し対外的には三尉のまま）
三佐：葛城ミサト三佐（TV12話で一尉から昇進）
一尉：赤木リツコ一尉、伊吹マヤ一尉、日向マコト一尉、加持リョウジ一尉
二尉：青葉シゲル二尉、碓シンジ二尉
三尉：鈴原トウジ三尉、綾波レイ三尉
一曹：相田ケンスケ一曹

（注）TⅠとは、サードインパクトの略、緑はTⅠ後に昇進等した
もの。

第2部 ゼーレとの戦い 第21話 紅いドレス

プロポーズした翌日の朝、シンジは、アスカの優しいキスで目が覚めた。

「んんんっ…。」

（アスカがおはようのキスをしてくれるなんて、嬉しいな。）

シンジは、朝から良い気分になった。そして、起きたと同時にアスカに声を掛けた。

「アスカ、おはよう。」

「ええ、シンジ、おはよう。」

アスカも明るく返事をする。
すると、シンジはアスカを腕に抱えたままぐるりと半回転し、アスカの上に覆い被さった。

「アスカ、大好きだよ。」

今度は、シンジの方からアスカにキスをした。
最初は口、そして頬…と、次々に場所を変えてキスをした。

（あれ。アスカったら、あんまり嫌がらないや。これはチャンスかもしれない。）

シンジは調子に乗って、どんどんエスカレートしていった。

「はい、シンジ、今日はそこまでよ。」

だが、世の中そんなに甘くはない。

アスカは、にっこりと笑いながらシンジの頭を両手で掴み、優しく引き離した。

(あゝあ、もうちょっとでいいから、続きをしていたかったな。)

シンジは心の中でばやいたが、顔はにっこりとしていた。

今回も何とか、運良く誰にも見つかることなく、シンジ達は起きることが出来た。

そして素早く二人は着替えた。そろそろユキが来る時間だからだ。

「おはようございませう。」

案の定、ユキは元気な声でアスカの部屋に入ってきた。間一髪である。

「おはよう、森川さん。」

「おはよう、ユキ。」

シンジとアスカは、二人同時に返事をする。

「まあ、朝っぱらから仲のよろしいようですね。」

ユキはウインクする。

「ん、もう。今、シンジが起こしに来てくれたのよ。」

アスカは言い訳するが、今回は通じなかったようだ。

「あつ、惣流さん、下着が脱ぎっぱなしですよ。床に落ちてますよ。」

ユキの言葉にアスカは平然としていたが、シンジは大慌てとなった。

（えっ、まずいよ。一緒に寝ているのがばれちゃうよ。）

「えっ、どこにあるの。どこどこ、教えて。」

そう言っつて、シンジはおろおろした。

アスカは頭を抱えそうになったが、ユキはにっこりして言った。

「冗談ですよ。」

それを聞いたシンジは、頭の中が真っ白になった。

（し、しまった。後でアスカに怒られちゃうよ。トホホ…。）

シンジは、目の前が真っ暗になった。

「大丈夫ですよ。みんなには黙っていますから。」

ユキは再び微笑んだ。

「ちょ、ちょっと、何誤解してるのよ。ユキが考えるようなことは

していないからね。」
アスカは、慌てて言った。

（そうだよ。アスカとは何もしてないのに。）

そうだ。シンジは、アスカに腕枕をしていただけなのだ。

変な誤解をされてはたまらない。

アスカとの間でも、結婚するまでは最後の線は超えないことを昨夜約束した、

いや、させられたばかりなのだ。

まあ、シンジはかなり不満ではあったが。

シンジはそれまで、心の中では淡い期待を抱いていたのだが、

『アタシ、結婚するまでは綺麗な体でいたい。アタシのことが好きなら、もちろんOKよね。』

とアスカがニッコリ笑って言ったものだから、抗える筈が無かった。

それも、シンジからはエッチなことはしてはいけないが、アスカからならば何でもOKというものだった。

一緒に寝るのも、本来はエッチなことと言えなくもないのだが、アスカが望んだから問題無いということなのだ。

シンジからすると蛇の生殺しなのだが、男のことを良く知らないアスカだからこそ成せるのだろう。

しかも、シンジがいつ結婚するのかと聞くと、『アタシは、ミサトやリツコと同じ歳になるまで結婚しないかもね。アタシが好きなら、それまで待ってくれるわよね。』
と言って、からかうのだ。

（アスカったら、ずるいや。）

シンジは、落ちこんだ。
シンジと結婚するからそれまで待ってと言っのなら、まだ納得出来る。

だが、アスカは誰と結婚するのか分からないけど、結婚する時期まで待てと言っのだ。
とてもじゃないが、やってられない。

だが、うやむやのうちに、中学生のうちはキス止まりということになってしまったのだ。

シンジは反論しようかと思っただが、思い止まった。
アスカが眠っているときに、シンジは暴発したり色々あるからだ。
それをアスカは責めたりしないが、下手に反論するとそのことを持ち出されるかもしれないからだ。

（アスカの意地悪。こうなったら、一杯キスしてやるんだっ。ふんっだ。）

シンジは憤慨したが、アスカに言えるはずもなかった。
こうして、シンジはかなり長い間、お預けを食らうことになったのである。

だから、ユキの誤解はシンジにとっては、迷惑以外の何者でもなかった。だが…。

「はいはい、分かっていますよ。」
ユキは笑顔のままである。

どう考えても、信じていないように見える。
シンジはむくれるしかなかった。

「それじゃあ、朝ご飯を作ろうか。」

シンジは、その場を誤魔化す様に立ち上がるうとした。

「もう、出来てますよ。」

ユキは再びウインクする。

「ホント。じゃあ、食べましょう。」

アスカは、シンジと一緒にリビングへ移動した。

「おっはよ〜。」

「おはようございます。」

アスカとシンジは同時に朝のあいさつをする。

これに対して、みんなは気のないあいさつを返してきた。みんな、まだ眠いようだ。

「は〜い、みなさん、起きてくださいね。」

今朝は、おにぎりですよ。早い者勝ちですからね〜。」

そう言っつて、ユキはみんなを急かした。

テーブルの上には、色々な種類のおにぎりが並べてあり、味噌汁も人数分あった。

コーヒーと紅茶も、各自が自由に飲めるよう用意がしてあった。

みんな、眠そうな顔をしながら、おにぎりを次々と口に放り込んでいった。

朝食が終わり、コーヒータイムになっても、みんなの顔はまだ眠そうだった。

そのためか、シンジ達をからかう者はいなかったため、シンジは内心ホツとした。

今朝の話題も、これからどうするのかというものだったが、シンジとトウジはネルフで訓練を、アスカと加持はネルフで仕事をする必要があり、リツコとミサトはアスカの手伝いをする事になった。このため、残るケンスケ、ヒカリ、ユキの3人が映画の話を進めることになった。

なお、余談だが、トウジはチルドレンであるため、

シンジ達と同じコンフォート17に住むことになり、数日前に引越して来ていた。

ヒカリは妹と一緒に、ユキの所に当分の間住むことになった。

自然とユキの家には、ユキの妹達、ヒカリの妹、トウジの妹が集い、一緒に勉強したり、遊んだりして、結構楽しく過ごしていたのだ。

ともあれ、ヒカリ達を残して、シンジ達はネルフへと向かった。

「シンジ、最初に碇司令にあいさつしましょう。」

ネルフに着くなり、アスカが言った。

「ええっ、嫌だなあ。止めようよ。」

シンジは思い切り嫌な顔をしたが、アスカは無言を言わせなかった。

「あのねえ、アタシ達未成年なんだから、親が認めない婚約なんて意味ないのよ。分かっているの。」

その言葉に、シンジは首を楯にするしかなかった。

二人してゲンドウに婚約を報告しに行ったところ、そこに居合わせた冬月とともに、意外そうな顔をしていたが、特に反対は無かった。

「良かるう…。」

ゲンドウは、極めて無愛想ながらも了承した。

だが、冬月はゲンドウとは対照的に、話を聞くなりニコニコし、『おめでとう。』と言って二人を励ました。そして、『お祝いをしよう。』と言い出した。

冬月によると、加持の帰還とミサトとの婚約、アスカとシンジの婚約は、ネルフ職員にとつて、サードインパクト後に起こった数少ない明るいニュースなのだそうだ。

そして、職員の士気高揚に大いに貢献することから、1週間後にネルフ関係者のみを集めて、婚約披露パーティーを開催したいと言うのだ。

「ええっ、婚約披露パーティー！」

シンジは、冬月からパーティーのことを聞いて驚いた。アスカのことが気になったからだ。

最近のアスカは、短い時間なら歩くことが出来るようになったが、長時間立ち続けることは、まだ出来なかったからだ。

それでは、パーティーの楽しみが半減してしまうのだ。

ドレスにしても、座ってばかりではあまり映えるものではない。

（アスカは、大丈夫かなあ。）

シンジがアスカの方を見ると、案の定、アスカは渋い顔をしていた。

（それに、アスカはドレスなんて持っていたっけ。）

シンジの記憶では、アスカはドレスを日本に持って来てなかった。

アスカは主役なのだから、良いドレスを着たいのだろうが、今からだと気に入るドレスを選ぶのに、間に合わないかもしれない。

シンジはそこに思い当たった。

（もしかしたら…。ちょっと、アスカの機嫌をとろうかな。）

シンジはそう思って、アスカに声をかけた。

「大丈夫だよ。アスカは何を着ても綺麗だから。」

シンジがにこやかに言うと、アスカの機嫌は少しは良くなったようだ。

「えへへへ。まあね。アタシは何着ても似合うものね。」

「でしょ。だから、今日はドレスを選びに行こうよ。」

「選ぶって、何処へ行くの。」

「うーん、良く分からないけど、ドレスを売っている所。デパート以外にはどこで売っているのかな。」

「まあ、いいわ。とにかく行きましょう。」

こうして、二人はドレスを買い出かけることになった。

ドレス選びは、かなり困難を極めた。

本来のアスカなら、何度も試着してから選ぶのだが、今回はそうそう試着も出来ないからだ。

結局、シンジがドレスをアスカに見せて、気に入ったものだけ試着するという方法にしたのだが、なかなかアスカの気に入るドレスが見つからなかったのだ。

シンジは、疲れているだろうに、嫌な顔一つせずにつき合っている。以前のシンジなら、考えられないことなのだが。

いったん試着すれば、シンジが褒めちぎれば、アスカも決心が付いたかもしれないが、試着しないのではどうしようもない。

シンジ達は、何軒もお店を回ってへとへとになった。

二人が疲れ果てた頃、あるお店の前に飾ってあったドレスにアスカが目止めた。

それは、アスカの好きな、紅い色を基調としたドレスだった。

肩が露出しており、ちょっと大胆かなと思ったが、どうやら、アスカは気に入った様子だ。

「ねえ、シンジ。これなんてどうかしら。」

アスカが尋ねてきた。シンジからも、なかなか良いドレスに見えた。

（アスカにとっても似合いそうだ。）

「ねえ、アスカ。試着してみようよ。」

そんなシンジの押しもあって、アスカはそのドレスを試着することにした。

運の良いことに、愛想の良い店員で、普通なら『子供に買えるのかしら。』

などと言われかねないのだが、その店員はニコニコしながら、試着を手伝ってくれた。

「どう、似合うかしら。」

アスカが試着した姿を見ても、シンジは何も言わなかった。あまりの可愛さに、声を失っていたからだ。

（アスカがこんなに可愛いなんて。）

シンジが黙っていたので、アスカは機嫌が悪くなったらしい。

「むっつ。何か言いなさいよ。」

アスカが怒ったような声を発すると、シンジは慌てて答えた。

「ご、ごめんよ、アスカ。あまりに綺麗なんで、声も出なかったんだ。」

その瞬間、ポツと音がしたかと思うほど、アスカの顔は真っ赤になった。

「そ、そんなのあったり前でしょ。アタシを誰だと思っているのよ。」

そんなことを言いつつも、アスカは嬉しそうだった。

結局、アスカは、そのドレスを買うことにした。

「あの、これ、いただきたいんですが。」

アスカが店員に言うと、びっくりした顔をしていた。

まさか、買うとは思っていなかったのだろう。

だが、さすがはプロである。

後は事務的にテキパキと進めていく。

「はい、お買い上げありがとうございます。お支払い方法は、いかがいたしましたしょう。」

「はい、カードをお願いします。」

そう言って、アスカはネルフ発行の写真入りのクレジットカードを差し出した。

店員は、『こんな子供が何故?』と言いたそうな顔を一瞬したが、

直ぐにカードを機械に通して支払いに問題が無いことを確認すると、一転してにこやかな顔になった。

おそらく、彼女のノルマにとつて、大きなプラスになったのだろう。そのドレスは、100万円もしたのだから。

シンジもそうだが、チルドレン達の本来の給料はミサトの半分位なのだが、

色々な危険手当によつて、かなりの高額になっていた。

しかも、生活費はミサト持ちだったため、かなりの蓄えになっていたのだ。

アスカは、ネルフの在籍期間が長いため、優に1億円以上、

シンジも、エヴァの搭乗手当が、1日50万円と高額なため、

1年に満たないながらも、3千万円以上の給料が支給されていた。

シンジは、エヴァに取り込まれていた33日間だけで、1、650万円もの手当が支給されていたのだ。

もっとも、アスカの指輪を買ったため、シンジの蓄えは、何割かが減っていたのに対し、アスカは投資によつて、その額を10倍以上に増やしてはいたが。

こうして、アスカは紅いドレスを手に家に帰り、ミサトやリッコに見せびらかした。

これに対して、ミサトが齒噛みし、翌日には加持に泣きついたのは言うまでもない。

第21話補完 密談

ネルフエジプト支部で、二人の男女が密談をしていた。女の名前はサーシャ。ロシア系イスラエル人である。

蒼い瞳、長い金髪、長身、スリム、白い肌が特徴の美少女だ。目が大きい、大人しい感じがする、14歳の娘だ。

サーシャは、ロシアで生まれ育ったが、幼い頃にイスラエルに移住した。

親が軍関係の仕事をしていたこともあり、小学生の時から本格的な軍事訓練を受けていた。

親戚のザナドの親がネルフに勤めている関係から、中学生になってからは、エジプト支部で研修生として厄介になっていたのだ。

一方の男の名前はザナド。エジプト人である。

黒い瞳、黒いちじれた短髪、長身、スリム、褐色の肌が特徴の、精悍な顔つきをしている14歳の少年だ。

正義と愛を重んじる、勇敢なイスラームの戦士でもある。

サーシャとは親戚の間柄だ。

幼い頃に、狂信者によるテロで母親を失っており、テロリストを心の底から憎んでいる。

このため、サーシャと同じく、小学生の時から本格的な軍事訓練を受けている。

世界中からテロリスト共を一掃するのが、ザナドの望みである。サーシャと同じく、研修生という名目でエジプト支部にいる。

二人は、国籍や宗教は違えど親戚であることもあり、割合仲が良かった。

「ねえ、ザナド。ちょっと、お願いがあるんだけど、聞いてくれないかなあ。」

サーシャは、ニヤリと笑う。

「サーシャのお願いは、ろくなことがないからなあ。どうしようか。」

「あなたの好きな、『例の』彼女の写真が手に入ったんだけど、そんなことを言うんだったら、他の人にあげちゃおうかなあ。」

「えっ、本当かよ。」

「本当よ。」

「じゃあ、見せてみるよ。」

「あなたが、私の頼みを聞いてくれると言っのならね。」

「うっ、分かったよ。」

支部の中には、サーシャ達の個室がある。

それほど広くはないが、1DK位の広さはあるだろうか。

二人はサーシャの部屋で、パソコンの画面を見つめていた。

「どう、嘘じゃないでしょ。」

画面には、紅い瞳の少女が写っていた。

しかも、笑った顔、むくれている顔、すました顔、百面相とまではいかないが、20枚ほどの様々な表情の少女の画像が写し出されていた。

「す、凄い……。」

この少女の写真や画像データは、中々手に入らないのだ。

その少女の画像がこんなにあるとは、ザナドには信じられなかった。

「こ、これはどうやって手に入れたんだ？」

「ネルフ本部のお友達からね。ソルトっていうの。ちょっと難しい頼まれごとをされて、その報酬として要求したらくれたのよ。」

ソルトは、インターネットを通じて知り合った友人だ。

色々と言ったり、一緒に悪さをしたり、結構面白い奴だった。

奴と言っても、お互いの性別・年齢すら分からないので、男とは断言出来ないが、話の内容や漏れ聞く経歴から、サーシャは30代の男だと確信していた。

そのソルトから、最近久々に連絡が来たのだ。

しかも、かなりバイ内容の仕事の依頼と共に。

ソルトの話では、ソルトはネルフ本部の幹部の一員であり、秘密の作戦を遂行するために、サーシャの助けが必要だという。

同じような依頼を、他に3人ほどしているとも言った。
ソルトやサーシャと共に、ハッキングを行った仲間で、MAGIで
すらハックしたことから、ハッカー達からはミラクル5と称えられ
ているのだが。

だが、さすがにその内容を知って、サーシャはソルトに対してネル
フ幹部である証を求めたのだ。

その証として送られてきたのが、先程の画像だ。

確かに、ネルフ幹部でもなければ、あのような画像は手に入らない
であろう。

何しろ、マスコミ各社が血眼になって探しても、例の記者会見以来、
写真1枚手に入らないのだから。

「分かったよ。やる、何でもやるよ。」

そのような事情があって、ザナドは快諾した。

この、紅い瞳の少女の画像を手に入れることは、不可能だと諦めて
もいたからだ。

友人達にも、自慢が出来る。

その日から、ザナドは睡眠時間を削って、サーシャから頼まれた仕
事を手伝った。

それは、おそろしく複雑なプログラムであった。

第21話補完 密談（後書き）

キャラ設定：サーシャ

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、エジプト支部に所属している。

蒼い瞳、長い金髪、長身、スリム、白い肌が特徴の美少女。

目が大きいのが、大人しい感じがする、14歳のロシア系イスラエル人。

MAGIへのハッキングに成功した、伝説のハッカーグループ『ミラクル5』の一員。

ザナドとは親戚。

キャラ設定：ザナド

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、エジプト支部に所属している。

黒い瞳、黒い縮れた短髪、長身、スリム、褐色の肌が特徴の、

精悍な顔つきをしている14歳の少年。

正義と愛を重んじる、勇敢なイスラームの戦士でもある。

サーシャとは親戚。

第22話 婚約披露パーティー 前編

（あつ、今日もアスカがキスしてくれた。）

シンジは、今日もアスカのキスで目を覚ました。

婚約した翌日から、アスカは毎日キスをして起こしてくれるのだ。シンジは、もう嬉しくてたまらない。

だが、恥ずかしいので、そんなことは、顔には出さない。

「ふあああつ。ああ、良く寝たな…。」

シンジは、嬉しい気持ちを押さえてアスカに声を掛けた。

「アスカ、おはよう。」

「ええ、シンジ、おはよう。」

アスカも明るく返事をしてきた。アスカの機嫌は良いようだ。すると、シンジはアスカを腕に抱えたままぐるりと半回転し、アスカの上に覆い被さった。

「アスカ、大好きだよ。」

今度は、シンジの方からキスをした。

最初は口、そして頬、額…と、次々に場所を変えてキスをした。だが、今日はいつもと様子が違った。

いつもは、この辺でアスカがストップをかけるのに、まだその気配が無いからだ。

（今日は、もうちょっと進んでもいいのかな。）

アスカは、シンジのなすがままになっていた。

しばらくして、シンジとアスカは、一緒にシャワーを浴びていた。

「んもう…。」

シャワーの音で良く聞こえなかったが、アスカは、ぷりぷりしているようだ。

「ごめん、アスカ。アスカがあまりにも可愛いから…」

シンジは謝る一方だ。

シンジは寝ぼけていたせいか、歯止めが利かずに約束を違えて、キス以上のことをしてしまったのだ。

それを、我に返ったアスカが、押し止めたのだ。

（まずいよ。アスカは怒っているかな。）

シンジは、アスカが約束を破ることが嫌いなのを知っているため、蒼白な顔をして謝った。

さすがに、こんな日に、アスカの機嫌を損ねるとまずいと思ったからだ。

だが、可愛いと言ったのが良かったのだろう。アスカは思ったより

も優しかった。

「アタシも、無理なお願いだってというのは分かっているけど…、シンジ、アタシのことが好きなら、お願いだから分かって頂戴。ねっ。」

アスカは、両手を合わせて頬に当て、首を傾げてニコツと笑った。最近アスカが考案した『可愛くお願い』のポーズだったが、シンジはあまりの可愛さに、思わず笑みが浮かんだ。

（良かった。アスカはあまり怒っていないや。本当に良かった。）

そして、明るく返事をした。

「うん、これからは気を付けるよ。アスカのことが大好きだから。」

そう言うと、シンジはアスカを抱きしめた。

全く、言った側からこれである。

シンジは、全く懲りていなかった。

今日は、加持の帰還とミサトとの婚約、アスカとシンジの婚約を祝うパーティーがある。

これらは、ネルフ職員にとって、サイドインパクト後に起こった、数少ない明るいニュースだった。

そして、職員の士気高揚に大いに貢献すると考えた冬月の提案で、ネルフ関係者のみを集めて、婚約披露パーティーを開催することに

なつたのだ。

パーティーは夜からであるため、時間の心配は無かった。夕方に、この家に皆が集まり、揃ってネルフへ行くことになったのだ。

だから、ヒカリやユキ達が朝はいないため、アスカ達は慌てることなく起きることが出来たのだが、

シンジのせいで、二人は余計な時間をかける破目になっていた。

シャワーから出ると、素早く二人は着替えた。そろそろユキが来る時間だからだ。

「おはようございます。」

ユキは、いつも通りの元気な声で、アスカの部屋に入ってきた。いつもと同じく、間一髪である。

「おはよう、森川さん。」

「おはよう、ユキ。」

シンジとアスカは、二人同時に返事をする。

「まあ、今日も、仲のよろしいようぞ。」

ユキはウィンクする。

「ん、もう。今、シンジが起こしに来てくれたのよ。」

アスカは、毎回のよう言い訳する。

「あつ、惣流さん、下着が脱ぎっぱなしですよ。床に落ちてますよ。」

ユキの言葉に、アスカは今日も平然としていたが、シンジは今日も引っかかって大慌てとなった。

「えっ、どこにあるの。どこどこ、教えて。」
そう言つて、シンジはおろおろした。

寝た後に下着を脱ぐようなことはしていないのだから、床に落ちて
いるなんて有り得ないのだが、そんなことは何かしていると思ひ込
んでいるユキは知らないし、シンジも気付かないのだ。

アスカは、頭を抱えそうになったが、ユキはにっこりして言った。

「冗談ですよ。」

それを聞いたシンジは、またもや頭の中が真っ白になった。

（まずい。またやっちゃったよ。トホホ…。）

「大丈夫ですよ。みんなには黙っていますから。」

ユキは再び微笑んだ。

「はいはい、漫才はそこまで。シンジもユキをからかわないこと。」

アスカは、そう言つと、シンジに対してウインクした。

（あっ、そうだ。昨日アスカと打ち合わせしたんだっけ。）

シンジもさすがに落ち着いて、言つべき言葉を思ひ出した。

「駄目だよ、アスカ。森川さんつて、本気にしていたんだから。」

それを聞いたユキは、肩をすくめた。

「あら。碓君も真に迫っていたのに、演技だったのね。がっかりだわ。」

こうして、二人はユキをまんまと騙して、朝食へと突入した。

「おっはよ〜。」

「おはようございます。」

アスカとシンジは同時に朝のあいさつをする。

これに対して、ミサトは気のないあいさつを返してきた。まだ眠いようだ。

これに対し、リツコはしつかりとした返事を返してきた。

「は〜い、みなさん、今朝は、ピザトーストですよ。」

ユキの声にテーブルの上を見ると、数種類のピザトーストが並べてあった。

チーズの上には、コーンやサラミといったトッピングが何種類か乗っかけていた。

コーンスープとコーヒーも人数分あった。

こうして、家族4人＋ユキで朝食を摂ることになったが、今朝も昨日と同じように、アスカが一人がしゃべりまくることになった。

だが、シンジも、ユキも、リツコもニコニコしていた。

そう、みんなアスカのことが好きなのだから。

一人ミサトだけが寝ぼけて、ポケットとじていた。

朝食が終わりコーヒータイムになると、話題は今日のパーティーをどうするのかという事になった。

シンジはネルフでの訓練を休み、アスカと一緒に行く。

加持はネルフで仕事をする必要がある、ネルフで合流だ。

リツコはミサトの着付けの手伝い、ユキはアスカの手伝いである。

残るトウジ、ケンスケ、ヒカリは、アスカ達の準備が終わった頃にやって来る手筈である。

アスカは、ケンスケが来るのは、ビデオ撮影のためだとシンジ達に説明していた。

ケンスケは、ある条件と引き換えにアスカの下僕となり、今ではネルフに所属しているが、まだシンジ達には秘密だったのだ。

アスカはそれを誤魔化すために、今回はユキをケンスケの助手として、パーティーに呼んである。

いつも留守番ばかりで申し訳ないとの配慮と、何とかケンスケとくっつけてやるうという魂胆とがあるのだが。

「アスカ、本当に綺麗だよ。」

ドレスを着たアスカを見て、シンジは目を細めて言った。

ただでさえ美少女であるアスカであったが、正式なドレスを着てき

ちんと化粧をしたアスカは、
並の女優など問題にならない位に美しかった。
ネルフの中で、アスカの取り合いが起こるのも無理はない。

「へへへへっ。ありがとっ、シンジ。」

アスカも、満更ではないのか、機嫌が良い。

側にいるユキが二人の熱気にあてられて顔を赤くしていても、気付かないほどだ。

対するミサトも青を基調としたドレスで、これまた普段のミサトからは想像も出来ないほど綺麗だった。

「ミサトさんも、とっても綺麗です。」

(アスカほどじゃないけど、ミサトさんも物凄く綺麗だ。)

「あーら、シンちゃん、ありがとう。アスカとどっちが綺麗？」

「僕にとって、アスカ以上に思える女性なんていません。もちろん、アスカです。」

(あれ、ミサトさんって、何で分かりきったことを聞くんだろう。)

シンジは、からかわれたことすら気付かない。相変わらず、ポケボケっとしている。

「あら、良かったわね、アスカ。」

ミサトがアスカをからかうが、アスカも負けていない。

「加持さんも、おなじように言ってくれるかしら。ミサト、賭けて

みるっ？」

「うっ。」

ミサトは、声が詰まってしまった。
加持だと、一体何を言うのか、想像もつかないからだ。
だから、迂闊に賭けなど出来ないのだ。

「賭けるまでも無いってことね。アタシの勝ちね。」
アスカは勝ち誇る。

「ふ〜んだ。アスカも性格悪くなったわね。」

「あ〜ら、いつ昔の記憶が戻ったのかしら。
記憶喪失っていうのは、加持さんを引っかけするための嘘だったのかしら。」

「ア・ス・カ。あなた、ちょっと言い過ぎよ。お姉さんは悲しいわ。」

そう言っつてミサトが手で顔を隠しながらイヤイヤすると、シンジはクスクス笑った。

「何よ、シンジ。アタシの味方じゃないの？」

アスカがシンジを睨んだが、シンジは笑って首を振った。

「うっん、ミサトさんが、元に戻ったんで、嬉しいんだよ。」

シンジがそう言っつてニッコリすると、ミサトは急に笑顔になった。

「あ〜ん、やっぱりシンちゃんはいいい子ね。お姉さんは嬉しいわ。」
そう言つてミサトがシンジに抱きつこうとしたので、シンジは慌ててよけた。

そうこうしているうちに、ケンスケ達がやって来た。
ケンスケは、目を輝かせてアスカとミサトの写真を撮りまくった。
今日撮る写真は、ミサトの分についてはアスカから販売許可が出たのだ。
もちろん、アスカの下僕になった見返りである。

「いやあ、やっぱり、二人とも綺麗だよ。被写体として、申し分無いね。」

ケンスケはニコニコしながら、写真を撮る。
ケンスケは、中学校が再開された後ミサトの人気が上がることを見越しており、写真がどれだけ売れるものかと想像していたのだ。
また、アスカを誉めて、後々の自分の待遇を良くすることも考えてのことである。

「いやあねえ。お姉さんをからかって。」

ミサトが嬉しそうな顔で言う。嫌だと思っていないのが、誰にでも分かるほどだ。

そんなのんびりとした雰囲気の中、リッコだけが冷静だった。

「あら、そろそろ時間ね。」

その言葉に、皆が時計を見る。確かにそろそろ出かけないと、遅刻する可能性がある。皆、慌てて出かけることになった。

「うわ〜っ。広いですね。」

ユキは一人感心していた。ネルフに来るのも初めてだし、こんなに広いホールも初めてだった。しかも、会場のテーブルの上には、和洋中の料理が所狭しと並んでいる。

基本的に立食だが、ホール脇には椅子がたくさん並んでいる。

「森川さん、感心していないで、写真、写真。」

ケンスケがユキを急かす。

ケンスケにとつては、ネルフの着飾った美女達を一人残らず写真に納めたいのであろう。

だが、ユキはそれを友達思いで責任感が強いからと勝手に思い込んでいた。

ちなみにケンスケは主にビデオ撮影を、ユキが写真撮影を担当していた。

「ごめんなさい、相田君。今行きますね。」

そう言いながらも、ユキはサンドイッチを少々持って行った。空腹だともたないと思っただろう。

ユキは両手のふさがっていたケンスケの口に、半ば強引にサンドイッチを詰め込んだ。

「フガフガ。」

急なことに、ケンスケは慌てて何かを言おうとするが、声に出せない。

「腹が減っては戦は出来ぬって言いますよ。食べながらも、撮影は出来ますから。」

そう言つてユキが微笑む。

ユキの白い指が唇に触れたため、ケンスケはちよつと赤くなつたが、直ぐに気を取り直して撮影を開始した。

「あつ、相田君！お願い、こっちに来て！」

ケンスケとユキはアスカに呼ばれたため、いつもと口調と声色が違うことに違和感を感じながらも、慌ててアスカの元へと向かつて行った。

婚約披露パーティーはホテルで開くことも考えられたが、警備の都合もあつて、ネルフ内で行うことに落ち着いた。

その代わり、ホテルの料理人を2日も拘束する破目になり、少々値段に響いた。

2日も拘束する破目になつたのは、身辺調査や身体検査などをかな

り念入りに行つたせいである。
誰かが他国の工作員の侵入を妨害しているらしいとはいえ、ここで何か起きたときの影響を考えると、慎重すぎるということはないだろう。

だが、悪いことばかりではなかった。

ネルフ内で開くことから、交代で全員参加が可能になったのだ。

これは思わぬメリットであった。

しかも、有事の際は、即座に全員が対応可能なのである。

そのうえ、パーティーの時間の制限が無かった。

このため、当初は2時間と予定されていたパーティーが、結局5時間以上に及ぶことになるのだが。

第22話 婚約披露パーティー 前編（後書き）

ようやく、シンジはアスカにプロポーズします。

アスカを一途に思うシンジに対して、心の傷が癒えずに、はつきりとした気持ちにならないアスカ。

シンジは、アスカの心が固まるまで待つつもりでしたが、アスカのドイツ帰還を防ぐため、大勝負に出ることにします。

結果は、吉と出たのですが、やっぱりシンジです。最後の詰めが甘いですね。

第23話 婚約披露パーティー 後編

さて、今日のパーティーで、シンジとアスカはどこからも引つ張りだこであった。

主役であるから当然なのだが、アスカの足の調子が万全ではないため、迷った末に苦肉の策を用いていた。

大人達は、酒が入ると、ちょっと下品なことを言い出す。

必ずと言っていいほど、誰かが『キスしろ。』と言うのだ。

それを逆手に取って、『はい。』とにこやかに言って、シンジとアスカはキスをした。

キスしている間は、シンジがアスカを支え、足に負担がかからないようにするのだ。

実のところ、この案は、アスカの方から事前に相談があったのだ。

シンジとしては、断る理由は全くない。

かえって、アスカに寄ってくるかもしれない虫どもを払うのに丁度いいと思ったのだ。

だから、喜んで了承した。

こうして、二人は大人達の前で恥ずかしげもなく抱き合って、それは長い時間キスをしたのであった。

シンジは、キスを重ねる度に上手になっっていくのが自分でもはっきりと分かった。

シンジは最初のうちこそぎこちないキスだったが、回数を重ねるうちに、かなり自然にキスが出来るようになっていったのだ。

(これで慣れれば、人前でもアスカとキス出来るようになるかも。

シンジの心の内を知らない大人達は、そんな二人を見て初々しいと感じていた。

シンジとアスカはちょっと恥ずかしそうにしながらも、堂々とキスをしていた。

大人になればなるほど、体面やら面子とやらが邪魔をして、そんなことが、出来なくなるのだ。

ネルフの大人達は、心からこの二人のことを祝福した。

暗かったネルフの雰囲気、一筋の光が差し込んだような気がしたのだ。

その意味で、冬月の狙いは大当たりと言えよう。

パーティーは、シンジとアスカに誰かしらのグループが近付いて来て、一通りあいさつをして、皆で写真を撮って、時にはキスをして、そして離れていくという繰り返しだった。

写真を撮るのは、さきほど呼ばれたユキであり、ビデオ撮影はケンスケが担当していた。

キスを重ねるシンジとアスカを、羨ましそうに眺めていたユキとケンスケだったが、二人とも、お互い羨ましそうに見ていることに気が付き、真っ赤になった。

パーティーが進むにつれて分かったことだが、シンジにとって意外なことに、自分が年上のお姉さん連中から、割合と人気があったのだ。

婚約者であるアスカが隣にいるというのに、このお姉さん連中は、シンジの頬にキスの嵐を浴びせるのだ。

だが、さすがのアスカもこの日は短気を押さえ、笑顔を崩すことはなくにつこりとしていたが、シンジは、内心アスカが怒っていることが分かっていただけのため、気が気ではなかった。

シンジとは対照的に、アスカに対しては同様なことは起きなかった。シンジは、内心おかしかったが、真相はシンジの背後にゲンドウとミサトの影を感じたため、みんな我慢していただけのことだった。

もしそうでなかったら、アスカは優に100人を超える男達に求婚されていただろう。

アスカの取り合いで乱闘騒ぎが起きた可能性も高い。それほど人気のあったアスカだが、それ以上にゲンドウとミサトは恐れられていたのだ。

そのうち、アスカの周りにドイツの友人らしき女性陣が集まってきた。

シンジはドイツ語が分からないため、適当にニコニコしていたが、アスカが友人と楽しげに話すのを見て、自分が何て言われているのか、気になりだした。

「アスカ、お友達は僕のことを何か言っているの。」

シンジは思い切って聞いてみた。

さつきから、アスカの友人が自分のことをちらちらと見ているのが気になったからだ。

「勇敢なのに、優しそうで良い男だって。皆、羨ましいって言うるわよ。」

今日は、さらに上機嫌と化粧とドレスが加わり、今まで最高の笑顔だった。

（アスカ、さっき言ったことは、本当なの？信じていいの？でも、この笑顔は本物だよね。
でも、好きになりそうって言うんだから、今は違うのか。
でも、希望が湧いてきたよ。）

シンジの顔は、さらに明るくなった。

ドイツから来た友人達は、アスカの笑顔に驚きを隠せなかった。
こんなにも優しく幸せそうな笑顔は見たことがなかったからだ。

驚いたのは、ユキヤケンスケも同じである。

（惣流さんて、こんなにも綺麗だったのね。
何てステキな笑顔。
碇君も負けていないけど。
本当にお似合いのカップルだわ。）

（惣流が、こんなに幸せそうな笑顔を浮かべるなんて、信じられないよ。
性格ブス？だったらここまでステキな笑顔は出来ないよな。
シンジが羨ましいよ。
悔しいけど、シンジだからこそ、惣流もこんな笑顔を浮かべるんだろうな。
俺も負けていられないよ。）

シンジとアスカの周りは、ほのぼのとした幸せそうな雰囲気包ま

れていた。

この二人を、遠くからみつめる目があった。ゲンドウと冬月である。

「碇よ。今のアスカ君の笑顔を見たか？」

「…うむ。」

「あんな幸せそうな笑顔は、初めてみるぞ。これは、ひよっとすると本気かもしれん。」

ゲンドウは、アスカとシンジの婚約が偽装だと見抜いていた。

いくら何でも、ついこの間まで憎み合っていたのだ。

そうそう、愛情が生まれるはずがない。

一緒に暮らしているのも、アスカの日本での知り合いがミサトしかないためだ、そう思っていた。

だが、あんな幸せそうな笑顔が、演技で出来るだろうか。

ゲンドウは、迷いを生じていた。

一方、冬月はゲンドウと違い、二人は本気だと考えていた。

二人の気持ちを直接聞いたことがあるし、アスカがシンジを憎んでいるように見えたのも、周りの誤解だとアスカから聞いていたからだ。

だが、猫を被ったアスカを見抜けないところは、まだまだ冬月も大甘である。

「…そうかもしれない。」

ゲンドウは、自分が読み違いをしたと思っていた。

さて、もう一方の主役達は、思わぬ攻撃を受けていた。

アスカ達が頼まれると必ずキスしていたため、ミサト達も同じように頼まれていたのだ。

だが、30歳を過ぎた二人が、そうそう人前でキスなど出来ない。ミサトも加持も、顔を引きつらせるしかなかった。

「アスカったら、まさかあそこまでするのは…。あっちゃあ。ま
ずったわねえ。」

ミサトは、何人かの知り合いに、アスカ達がキスするよう迫るよう
に頼んでいた。

そして、困った二人を見て、からかってやろうと思っていたのだ。

ところが、アスカは、何のためらいもなしに、シンジとキスをしま
くったものだから、自分達にも余波が来てしまったのだ。ミサトは
本気で後悔していた。

一方の加持は、もっと悲惨な目に遭っていた。

良く考えれば当たり前前なのだが、主役4人のうち3人までもがドイ
ツ支部にいたのだから、ドイツから大勢の客が来ることは十分予想
された筈なのだが、加持はすっかり失念していたのだ。

「婚約おめでとうございます。」

ドイツ支部の女性達が、ニコニコしながら入れ替わり立ち替わりに加持に祝福をするのだが、去って行くときに、決まったように加持の足をヒールで思いっきり踏んづけて行くのだ。

それでも、足を踏まれるのはまだ良い方で、よろめいた振りをして抱きつき、鳩尾にエルボーを食らわせたり、急所蹴りを食らわせたりする者も少なくなかった。

ドイツ女性恐るべしと言いたいところだが、本部の女性も数は少ないけれど、同じことをする者がいた。

ミサトが全く気付かないのが、せめてもの救いだったが、加持は本気で今日一日を乗り越えられるかどうか、心配になった。自業自得とは言え、たまったものではなかった。二ヘラ笑いも、限界に近付いていた。

「よう、女性に大人気だな。」

そんな加持の耳に、聞きたくない声が聞こえてきた。

振り向くと、金髪で蒼い瞳をした筋肉質の男、ジャツジマンが立っていた。背は185位もある。

「ど、どうやってここに...。」

加持は、驚愕した。

こんな危険人物が堂々と本部の中にいるのだ、背筋が寒くなった。保安部は一体何をしているのかと、恨み言も言いたくなる。

加持は身構えたが、ジャツジマンは両手を広げた。
何もしないという意味表示である。

「おいおい、そんな怖い顔をするなって。
今日は、本当に祝福しに来ただけなんだ。
何もしないさ。信じてくれよ。」

加持は、ジャツジマンの顔を見つめた。
どうやら嘘はついていないようだ。

ジャツジマンは駆け引きはするが、嘘をつく男ではないこと位は分かっていた。

加持は一安心すると、ふつと肩の力を抜いた。

「分かってくれたか。良かったよ。」
ジャツジマンも肩の力を抜いた。

「良く無事だったな。最近、この町に入るのを邪魔する奴らがいるらしいが。」

加持はジャブを放ったが、ジャツジマンはストレートに返してきた。

「ああ、俺の部下達だからな。」

「一体、何の目的だ。」
加持は険しい顔で睨む。

「まあ、言ってもよかろう。雇い主の意向は、エヴァのパイロット達の保護だ。」

「ふつ。そんな戯言を信じろとでも。」

「信じなくてもいいさ。我々は、ネルフの邪魔にならないようにうまくやるだけさ。」

「一応言っておくが、お前の彼女も今までに2回狙われたんだぞ。」

「なにっ。」

「ロシアとフランスの組織だ。さらつつもりだったらしいがな。」

「嘘をつくな。」

「ま、どうでもいいさ。一応、証拠らしきものを渡しておくけどな。」

「そう言うと、ジャツジマンは懐から1枚のディスクを取り出して、加持に渡した。」

「エヴァのパイロットと彼女の生命が惜しかったら、我々の邪魔だけはしないでくれ。」

「ジャツジマンは、そう言うと、不敵に笑った。」

「分かった、とは言えないが、一応礼だけは言っておこう。」

「加持もニヤリと笑う。」

「ここだけの話だが、今月中に、レッドアタッカーズがこの町を守りに入る。」

「うまくやってくれよ。」

「なにっ。それは、本当か。」

「加持も、噂には聞いたことがある、アメリカで最も優秀と言われる」

傭兵集団だった。

ロシアのスペツナズやアメリカのグリーンベレーなど、政府の支配下にある部隊と同等以上の実力があると言われる傭兵集団は、世界でも数少ない。

その中でもレッドアタッカーズは、イギリスのレインボースター、フランスのヴァンテアン、ドイツのワイルドウルフなどと並ぶ有数の傭兵集団なのだ。

同じ人数ならば、グリーンベレーすら凌ぐ力があるとも言われている。

とてもじゃないが、そんな連中が来るなんて信じられなかった。

加持は、さらに問い詰めようとしたが、思わぬ邪魔が入った。

「加持さーん。おめでとうございます。」

シンジは、加持を見かけて声をかけた。

「あれ、加持さん、この方はお友達ですか。」

加持の側に知らない男がいるのを見て、シンジは、尋ねた。

「ああ、そうさ。古い友達さ。ジャツジマンって言うのさ。」

(ジャツジマン。 あっ、あの人か。)

シンジは、ジャツジマンがメールを送ってきたことを思い出した。

「あっ、そうですか。僕は、碇シンジです。加持さんの弟みたいなもんです。」

シンジはそう言って頭を下げた。それを近くで聞いていたアスカも寄って来た。

「私は、惣流・アスカ・ラングレーです。加持さんの妹みたいなものです。加持さんと仲良くしてくださいね。お願いします。」

アスカもそう言って、頭を下げた。そして、アスカはユキを呼びつけた。

「森川さん、写真撮って。」

言うが早いか、加持とジャッジマンの腕をつかみ、ユキに何枚か写真を撮らせた。

「あつ、加持さん、もっと笑って下さい。」

加持が笑っていなかったので、ユキは注文をつけた。加持は、覚悟を決めて、ニコリと笑うしかなかった。

だが、それだけでは終わらなかった。

アスカは、トウジも呼んで、チルドレン＋加持＋ジャッジマンの写真は何枚も撮った。

あげくの果てに、各チルドレン＋加持や、各チルドレン＋ジャッジマンという写真まで撮ったのだ。

アスカは、あちこちで同じようなことをしてきた。

リッコやヒカリやマヤは当然として、ゲンドウや冬月なども、有無を言わずに腕を組んで、一緒に写真を撮っていたのだ。

加持は、『全く、アスカの写真好きにも困ったもんだ。』とぼやいていた。

後日、ゲンドウと冬月の執務室に、アスカとのツーショットの写真が誰にも気付かれないよう、密かに飾られることになる。

この二人との写真は、特別に頬にキスしているところを写していたからであろう。

こっそりと写真を見てニヤニヤしている二人を見た者がいるとかいないとか。

写真撮影が終わると、ジャッジマンは去り際に、笑顔でこう言い残していた。

「お前を撃たなくて、本当に良かったよ。

あんない子達に恨まれるところだったものな。

ま、当分は、仲良くしようぜ。

ああそうだ、レッドウルフがいたみたいだぜ。

奴の気配がしたんだが、気付いていたよな。」

そんな気配を感じなかった加持は、言葉を返すことが出来なかった。

こうして、加持だけ一部女性陣の祝福を受け損なっていたが、ネルフ全員の祝福を受けて、パーティーは12時を回る頃無事終了した。

第23話 婚約披露パーティー 後編（後書き）

キャラ設定：ジャッジマン

謎の組織のエージェント。凄腕の傭兵でもある。加持とは面識がある。

第3新東京市のガードとゼーレ調査の責任者。

後に、第3新東京市のガードは、アメリカの傭兵部隊、レッドアタッカーズに任せることになる。

第23話補完 笑顔の理由

今日の婚約披露パーティーでのこと、ドイツから来たアスカの友人が、口を揃えたように『良い人をつかまえて羨ましい。』というのだ。

アスカは、思わず『えっ、何で?』と、言いそうになったが、よく話を聞いてみると、他の支部ではシンジの人気は物凄く高かったようだ。

本部でこそ情けない一面を良く知られていたシンジだったが、他の支部では実績のみが知らされていたためらしい。

何の訓練も受けなかったにもかかわらず勇敢に使徒に立ち向かったこと、不利な状況の元でも使徒との初戦に勝利したこと、チルドレの中で最も使徒殲滅の実績があること等々。いずれも客観的に見ると、凄いことであった。

特に、実戦を経験した者ほどシンジに高い評価をしていた。

誰しも初めての实戦では小便をちびり、膝を震わせ、満足に戦えないのが普通だからだ。

厳しい訓練を重ねた大人でさえそうなのだから、何の訓練もしない中学生が、想像を絶するバケモノ達に立ち向かうこと自体が称賛されるのだ。

例えるならば、銃を持ち、防弾チョッキを着た兵士の前に、ナイフ一本で立ち向かうようなものだ。

しかも相手は殺意を持ち、実際に殺人を犯しているのだ。

余程訓練された兵士でも、初戦なら満足に戦うことが出来ないだろう。

実戦とは、そういうものなのだ。

だが、初戦に勝利したうえ、その後も敵の攻撃を受けて何度も死にかけてにもかかわらず、シンジは戦い続け曲がりなりにも勝利を納めてきた。

男達はシンジのことを尊敬し、女達は英雄と称えていたのだ。

（ふうん、そうだったんだ。そうよねえ。アタシは長い間、厳しい訓練を受けてきたけど、シンジは普通の中学生だったのよね。普段はおどおどしていたし、ぼけぼけっとしているから分からなかったけど、良く考えたら、シンジって、結構凄い男だったんだ。アタシが負けたのは、シンジが凄すぎたせいなのね。）

今更ながら、シンジの凄さに気付くアスカだった。

そんなシンジと婚約したアスカを、友人達は社交辞令ではなく、本気で羨ましがっていた。

（今のうちに、唾をつけておいて、得をしたのはアタシだったりして。思ったより、シンジって人気があつたのね。でも、何でシンジは、全然訓練をしていなかったんだらう。あの髭親父、きつと何か隠しているに違いないわ。）

ふと、疑問が浮かぶアスカであつたが、友人に話しかけられてそんな疑問はすぐに頭の中から消え去った。

実は、アスカは友人達を呼ぶのが嫌だった。

アスカの目から見たシンジは、優しいけれど頼り無い少年だった。

アスカは、常々、自分より優秀な男以外は好きにならないと公言していたが、どう見てもシンジは普通の少年に見えた。

だから、友人達に馬鹿にされると恐れていたのだ。

だが、実際にふたを開けてみれば、アスカの恐れは杞憂にすぎなかった。

それどころか、誰もがシンジのことを褒めたたえた。

最初にシンジを見たとき、皆意外そうな顔をした。

シンジのことを筋肉モリモリ男だと思っていたらしい。

だが、実際には、線の細い優しそうな男だった。

そのことが、逆にこれからの将来性を感じさせていた。

あまり鍛えなくてもこれだけの成果をあげるのだ。

鍛えれば、もつと優秀な男になると。

シンジのことを褒めちぎる友人達のお蔭で、アスカは鼻高々だった。久しぶりに、アスカの自尊心がくすぐられることとなり、アスカは自然と上機嫌になっていった。

「アスカ、お友達は僕のことを何か言っているの。」

アスカが友人と楽しげに話すのを見て、シンジも安心したのだろう。自分が何て言われているのか、気になりだしたようだ。もちろん、シンジはドイツ語が理解できないからだ。

アスカは、けなしてからかかってやろうかなど思ったが、変なことを言うと、シンジの顔が歪むだろうと思いなおした。自分の良い気分を少し分けてもいいかなど。

「勇敢なのに、優しそうで、良い男だって。皆、羨ましいって言うてるわよ。」

アスカはそう言うと、シンジは思いもかけないほめ言葉に、真っ赤になってしまった。

そんなシンジを見て、アスカはちょっとからかってみたくなくなった。そして、シンジの耳元で小声で囁くいた。

「アタシ、シンジのこと、見直しちゃった。本気で好きに、な・り・そ・う。」

（ふふふっ。シンジのこと、見直しちゃったし、全くの嘘じゃないものね。）

「本当なの？」

そう言うと、シンジの顔は、パツと明るくなり、満面に笑顔を浮かべた。

今まで見た中で、一番優しくて、明るい笑顔だった。

それを見たアスカは、胸がドキツとした。

（な、なにさせているの。シンジの顔なんて、見慣れているのに。でも、いまのシンジの笑顔は、包み込むような優しい笑顔。

シンジったら、こんな顔も出来るんだ。

アタシ、本当にシンジのことを好きになっちゃっつかも。

でも、やっぱり好かれた方が良いけどね。

おっと、アタシもお返ししなきゃ。）

「アタシの顔を見れば、分かるでしょ。」

そして、アスカは、シンジに対して2度目となる、最終兵器の笑顔を返した。

まるで、天使のような優しい笑顔。

今日は、さらに上機嫌と化粧とドレスが加わり、今まで最高の笑顔になったことだろう。

シンジの顔は、さらに明るくなった。

第24話 休日の過ごし方

「ああつ、もう、つつかれたあゝ。」

パーティーが終わり、家に辿り着いた時には、既に夜中の2時を過ぎていた。

アスカもシンジもミサトもリツコも皆へとへとになっていた。とくにアスカは、物凄く疲れていたのだろう。声にでていた。

「じゃあな、葛城。今日はゆっくり休めよ。アスカもな。」

皆を送ってきた加持は、そう言いながらにっこり笑ってさきほど帰って行ったところだ。

何故か、足が痛そうな様子だったが。

「お風呂、どうしようか？」

ミサトもリツコも寝室に直行した後、シンジはアスカに聞いたが、アスカはどうしようか迷った素振りをしていた。

「アタシ、もう寝る。シンジも寝ようよ。」

だが、結局そのまま寝ることにしたようだ。

今日のパーティーで疲れたのだろう。

そして、ドレスも何もかも脱いで、アスカはベッドで横になった。

「うん。」

シンジは、明るく返事をする。アスカの横に寝た。

「おやすみ。」

そう言うと、アスカはシンジにキスをしたきた。

そして、シンジに抱きついたまま、眠りについた。

「アスカって、本当に可愛いな。」

シンジはアスカの寝顔に見入っていたが、あまりの可愛さにキスをした。

だが、それだけでは済まずに、徐々にエスカレートし暴走していった。

「好きよ、シンジ…。」

シンジの暴走が止まらなくなりそうになったその時、アスカの小さな寝言が聞こえてきた。

その声にはっとしてシンジは思い止まった。

（はっ、まずい。起きちゃったかな。）

シンジは、動きを止めてアスカを見つめたが、アスカは静かに寝息を立てていた。

どうやら、今のは寝言らしい。

(あっ、僕は、いつの間にか暴走していたんだ。)

シンジは、ようやく我に返った。

(今朝もあんなことがあったのに。)

シンジは、今朝も暴走しかけたことを思い出した。

(アスカは、『アタシのことが好きなら、お願いだから分かって頂戴。』 って言っていた。

僕がアスカのことを好きだから我慢するって、信じているんだ。それなのに、僕はもう少しでアスカの信頼を裏切るところだった。)

シンジの心の中に強い後悔の念が渦巻いた。

(それに、アスカは、寝言とはいえ、好きって言うてくれたんだ。ここであせって変なことをしたら全てぶち壊しだし、何と言ってもアスカの心を傷つけてしまう。僕は、何てことをするとこらだったんだ。)

シンジは、アスカの顔を見た。とても安らかで可愛い寝顔だ。

「僕は、アスカのことを愛しているのに、何てことを…。アスカ、ごめんね。もう、こんな卑怯な真似はしないね。」

シンジはそう呟くと、アスカに優しくキスをして抱きしめた。そして、シンジも疲れていたのだろう。そのまま眠りについてしまった。

だが、シンジは気が付かなかったが、二人を見つめる目が4つあった。ミサトとリッコである。

ミサトは、今日はちよつと危ないと思っていたのだ。その感はずバリ当たったのだ

が、ミサトが飛び出して止めようかという寸前で、シンジは思い止まったのだ。

「今日は大丈夫そうね。」

ミサトが小声で言った。

「ええ。と、いつか、当分大丈夫そうね。」
今度はリッコである。

「でも、ちよつち、残念かも。」

「ミサト、あなたねえ。」

「へへっ。ゴミンゴミン。」

こうして、ミサトとリッコは、安心して自分の部屋へと向かった。

翌朝、シンジは目を覚まして、仰天した。

アスカと抱き合っており、アスカの頭をつかんでキスしたままの体勢で寝ていたからだ。

シンジは、アスカに気付かれないようにと、そつとアスカの唇から口を離れた。

だが、その瞬間、アスカの目が大きく開かれた。

「おはよう、シンジ。」

（ま、まずいつ！）

シンジは、それを聞いて、真っ青になった。

もちろん、アスカが激怒していると思ったからだ。

シンジは、経験上、アスカが物凄く怒っているときは、冷静な口調になることを知っていた。

だが、アスカは更に冷静な口調で、続けて言った。

「シンジ、アタシ、この体勢のままだと苦しいんだけど。」

（あつ、アスカの上に乗ったままじゃないか。）

そう言われて、シンジははっとした。

アスカは、シンジが上に乗っかっていたため、シンジの体重がかかっていた。

これでは、アスカは苦しいに違いない。

「う、ごめんよ。」

シンジは大慌てで、アスカから体から離れた。

「ぶつっ。苦しかった。」

アスカはそう言ってため息をついた。

「アスカ、本当にごめんね。」

（まずいっ！アスカは激怒しているかも。）

「ううん、いいの。でも、何でこうなったのかは教えてくれるわよね。」

にっこりと微笑むアスカに、シンジは背筋が寒くなるのを感じた。

（まずい。アスカは本気で怒っているよ。）

シンジの心の中はパニックに陥っていた。

なぜなら、アスカは本気で怒るときはわめいたりせず、底冷えがするような冷たい口調になるからだ。

今のアスカがまさにそう感じられた。だが、…。

「シンジ、勘違いしないで。怒っている訳じゃないのよ。

ただ、何があつたのか、知りたいだけなの。

絶対に怒らないから、教えてちょうだい。」

シンジの怯えた顔を見たせいか、アスカは優しく話しかけてきた。

どうやら、本気で怒っているわけではないかもしれない。

（あれ、アスカは怒っていないのかな？）

このため、シンジも少し落ち着きを取り戻すことができ、正直に全てを打ち明けた。

シンジの話が終わった時、アスカは優しく言った。

「ふうん、そうだったの。正直に言ったから、今回は許してあげるわね。」

でもアタシは、嘘をつかれたり、裏切られたりするのが、一番嫌いな。

それだけは覚えておいてね。」

それを聞いたシンジは、放心状態になった。

恐ろしい罰があると覚悟していたのに、おとがめ無しだったので、それまで極限まで張りつめていた気が、一気に抜けたからだ。

「あら、罰が無いのもまずいかしら。」

やっぱり、シンジには罰を与えるわね。

アタシをお風呂に連れて行って、シャワーを浴びるのを手伝うこと。いいわね。」

それを聞いて、シンジは本当に安堵した。

シャワーを浴びて、髪が乾く頃には、もう9時過ぎになっていた。今日は、まだユキは来ていない。アスカが呼んだら来る手筈になっていたからだ。

もっとも、さきほど呼んだので、もうすぐ来る筈だ。

「おはようございます。」

今日も、ユキは元気な声で、入ってきた。

「おはよう、森川さん。」

「おはよう、ユキ。」

アスカとシンジは、二人同時に返事をする。

「まあ、今日も、ますます仲のよろしいようすで。」

ユキはウインクする。

「あら、分かる〜。」

アスカも負けじと切り返す。どうやら、本当にシンジのことは怒っていないようだ。

「そうですね。婚約したんですから、今更ですよね。」

さすがに、ユキは太刀打ち出来ないと分かっただらしい。朝食の用意を始めた。

今日は、正月からちよつと日が経っているが、お雑煮である。

具だくさんの豚汁らしきものに、ちよつと小さめの食べ易い大きさに切ったお餅が、5個位入っていた。

「昨日は、あまり食べられないと思ったので、ポリユームのあるものにしたんです。」

ユキはそう言つて、ハフハフしながらお餅を食べた。

「ふ〜ん、これがお餅なんだ。」

アスカは、お餅を食べるのは初めてなので、ちよつとおっかなびっくり食べていたが、どうやら気に入ったようすで、お代わりをしていた。

「どうぞです、惣流さん。」

「何か、体があつたまるような感じがするわ。」

それに、伸びるなんて、面白いわね。また、いつか作つてよ。」

「ええ、いいですよ。でも、気をつけて下さい。」

お餅3個で、ご飯1杯のカロリーがありますから。」

それを聞いたアスカがむせる。

「ユ、ユキ……。それを早く言いなさいよ。」

まったく、もう……。アタシは太りたくはないんだから。」

アスカはぷりぷりしたが、その仕草が可愛かつたため、皆で大笑いした。

朝食の後、シンジはネルフへ軍事教練をしに出かけ、ミサトは加持のところへ、リツコはアスカと一緒にネルフの仕事、ユキは炊事に掃除、洗濯などを行うことになった。

午後からは、ヒカリやケンスケがこの家に来ることになっていた。

ネルフに到着すると、シンジはトレーニングルームに直行した。

最初の1時間は、ランニングと腹筋、腕立て伏せを組み合わせたメニューをこなす。

シンジは、基礎的な筋力や体力が、まだまだ十分にはついていない

からだ。

その後には本格的な訓練が始まる。概ね30分交代で、柔道、合気道、逮捕術のそれぞれの講師から訓練を受けるのだ。

シンジの任務は、アスカの護衛であるため、空手やその他の格闘技を学ぶよりも、相手の力を利用する合気道や、相手の力を封じ込める逮捕術などを採り入れることにしたのだ。

「先生っ！お願いしますっ！」

シンジは、柔道の講師に何度も掴みかかっては、軽くいなされて、床に叩きつけられる。

こうして、受け身を覚えていくのだ。

普通の人間なら、間違いなく飽きてしまうのだろうが、シンジは違った。

自分が気を抜けば、アスカに万一のことがあったときに、後悔することが分かっているからだ。

シンジは、毎日、毎日、30分もの間、繰り返し受け身を繰り返した。

柔道が終わると、次は合気道だ。合気道は、相手の力を利用して、技をかける。

柔道とは違って変わって、講師が攻めて、シンジが技をかけていく。講師は、最初の数回、シンジに技をみせるのみで、後はシンジが技をかけるのだ。

最初は、講師は全く同じ動作で襲いかかり、シンジが技をかけるという繰り返しだ。

何十回何百回と、同じ技を繰り返し返して、シンジが技をモノにしたなら、講師は攻撃のパターンを少し変えて、襲いかかる。

シンジは、またもや同じ動作を何回も繰り返し返して、体で技を覚えるのだ。

最後の逮捕術は、襲いかかっている敵の動きを封じ込めるためのものだ。

これも同じように講師が - この講師のみセルフ職員ではなく現職警官が交代で担当するのだが - 襲いかかり、シンジがその動きを封じ込めるといふ動作が繰り返し返される。

講師は、最初の数回のお手本と、時折思い出したようにアドバイスする時以外は、技をかけて来ない。

シンジは、繰り返し技をかけ、時折講師のアドバイスを受けて、体で技を覚えていくのだ。

「ありがとございましたっ！」

逮捕術の訓練が終わる頃には、シンジの息はあがっており、しゃべるのも一苦労なのだが、最後のあいさつだけは、気力で声を振り絞って言うのだ。

だが、これで終わりではない。この後は、本来の軍事教練が待っている。

毎回メニューや講師が違うのだが、激しい訓練が続く。

（僕がアスカを守るんだっ！）

アスカに対する、一途な気持ち、シンジの気力を支えていた。そうでなければ、体力も運動神経も人並み以下のシンジが、このような訓練に耐えられようはずもない。

こうして、1日に3時間とはいえ、シンジは精根尽き果てた状態でお昼時を迎えるのだ。

「よお、センス。調子はどうや。」

食堂でトウジが声をかけてきた。今日のお昼は、トウジと二人きりだ。

いつもは、アスカ、ミサト、リツコなどと一緒にわいわい賑やかに食べるのだが、あいにく今日は、皆コンフォート17にいる。

「もう、へとへとで、声も出ないっていう感じだよ。」

そう言ってシンジは肩をすくめた。

「惣流がいないと、空元気も出ないっちゅうわけか。」

「トウジだって、そうだろう。洞木さんがいないと、元気ないじゃないか。」

シンジが口を少し尖らせて言うと、トウジは頭を掻いた。凶星だからだろう。

「まあ、そんなことより、メシや。ワイにとって、この時だけが至福の時間やからな。」

トウジは、そう言いながら、親子丼を食べ始めた。

それ以外にも、野菜炒めにほっけ、お好み焼き - しかも関西風 - まである。

「トウジは大食らいだからなあ。」

そう言うシンジも、ご飯が大盛りの肉じゃが定食に、野菜炒め、チキンカツと、トウジほどではないが、かなりの量だ。シンジも運動の後で、かなりお腹が空くのだろう。

「まっ、しっかり食おうやないか。」

「そうだね。」

こうして、シンジとトウジは、二人きりで、ちょっと寂しい昼食を摂った。

このあとは、シンジは昨日やらなかった分の訓練が待っており、トウジも別メニューの訓練が待っているのだ。

「お互いに頑張ろつや。」

「お互いの彼女のためにね。」

シンジがにやけて言うと、トウジはウツと言って、喉にお好み焼きを詰まらせた。

それを見たシンジは、大笑いした。

こうして、休日返上で訓練に励むシンジには、さらなる試練が待ち構えていた。

アスカが久しぶりにシンジの手料理を食べたいと言うのだ。

アスカの頼みを断れるはずもないシンジは、帰りにトウジと二人でスーパーに寄って、挽き肉をたくさん買っていった。

もちろん、今日はアスカの好きなハンバーグにするつもりなのだ。

もちろん、他の女性陣への配慮として、ケーキとハーゲンダッツのアイスを大量に買うのも忘れていなかった。

こうして、夜は久々にシンジの料理だったので、アスカはご満悦だったが、シンジはへとへとになって、いつもよりも早く眠りについた。

第24話補完 指輪

時は少し遡る。シンジが午後の訓練をしている頃のことだ。ミサトが出かけた際に、加持はアスカに電話をかけた。

「よお、アスカ。まずは、お礼を言うよ。」

「例のモノが届いたのね。」

「ああ。良くあんなものを集められたな。」

加持は舌を巻いていた。

アスカが加持に送ったのは、今まで加持が手を出してきた女性の一覧と、

加持と付き合ったことを示す証拠の数々であった。

女性の一覧には、『解決済』、『交渉中』、『交渉予定』などの文字が書き込まれていた。

『交渉中』、『交渉予定』と書かれている女性は、比較的大人しい性格の女性だったのだ。

『解決済』と書かれているのは、そうではない女性と、パーティーに来ていた女性達だった。

加持は、誰のお蔭で助かったのかを知った。

「まあね、苦勞したのよ。お蔭で、パーティーの時は、急所蹴りや鳩尾打ちくらいで済んだでしょ。」

「おいおい、じゃあ、もっと酷いことになっていたっていつのかい。」

「加持さんも、あつまいわねえ。毒物や爆発物を用意していた人もいたのよ。」

技術部門の女性には、手を出しちゃあ駄目なのよ。」

「う、嘘だろ。」

加持は、背筋に寒いものが走った。

「本当よ。お蔭で苦労したのよ。」

まあ、お世話になった加持さんのためだから、どつってことないけどね。」

「アスカ。幾らかかった。」

加持は、聞くかどうか迷ったが、一応聞いてみた。

「知らない方がいいわ。」

だが、アスカの答えは、予想されたものだった。

おそらく、加持には返せないほどの額なのだろう。

「でも、アスカは、お母さんの遺産に手を付けられなかったよな。」

「ふっふっふっ。甘い。ママの遺産を担保にして、現金を高利貸しから借りたのよ。」

失敗すれば、すっからかんだったけど、一か八かの賭けに勝って、ママの遺産を100倍以上に増やしたのよ。」

「おっ、おい。お母さんの遺産で、百万ユーロはあったよなあ。」

「そうね。もう、1億ユーロ以上はあるわよ。」

実は、それ以外にも、ドルや円を持っているのだが…。

「ア、アスカって、そんなに金持ちだったんだ。」

「後悔しても遅いわよ。加持さんは、ミサトを選んだんだから。」

「後悔はしないさ。でも、困った時は、貸してくれよな。」

「良いわよ。ミサトには内緒でね。今回のことも、もちろんだけどね。」

「ああ。そう言えば、もう一つお礼を言わないといけないな。指輪の件で、葛城は、涙を流して喜んでいたぞ。」

「そんな、良いのよ。」

「アタシは、まだまだ見せびらかす機会があるけど、ミサトはあれが最後なもの。」

「だが、まさか、シンジ君があんな大きな指輪を買うとはな。」

「あれ、一千万円はするわよ。」

「シンジったら、ミサトのことなんか全然考えないんだもの。」

「まあ、アタシのことを考えて、あんな大きなものを買ったんだろうから、」

「アタシとしては、嬉しくもあり、複雑な気分だけど。」

「シンジ君には、何て言ったんだい。」

「シンジには、パーティーに持っていくのを忘れたって言ったのよ。実際に置いていったしね。」

「何か言っていたかい。」

「取りに戻るなんて言ってたのよ。もう、頭が痛くなったわ。だから、アタシ、言ったの。」

「皆がダイヤばかり見て、アタシの美しさに目がいなくなるから、いいんだって。」

「はははっ。アスカらしいな。」

「うん、でも、シンジったら、『そうだね。』って、真顔で言うのよ。」

「アタシ、真っ赤になっちゃった。」

「そうか。アスカも、良い男をつかんだな。」

「シンジ君は、ひ弱そうに見えるが、芯はしっかりしてるし、優しいぞ。」

「男の強さっていうのは、心の強さと優しさがなければ駄目だ。」

「腕力が強いのは、本当の強さじゃない。」

「アスカの思いやりに気付かないのは、経験不足だからだ。」

「アスカなら、分かるよな。」

「あつたりまえでしょ。」

「おっと、葛城がそろそろ戻ってくる頃だ。それじゃあ、アスカ、本当にありがとう。」

「良いってことよ。それじゃあね。」

「そう言って、アスカとの電話が切れた。」

加持は、アスカに感謝の気持ちで一杯だった。

加持も、アスカの本心は分かっていた。

あのアスカのことだから、シンジから貰った指輪を自慢したくてしようがない筈なのだ。

だが、アスカはシンジが不機嫌になることを分かっていたうえで、あえて指輪をつけなかったのだ。

（優しい娘だとは知っていたが。

あの年頃の女の子だったら、普通は我慢出来ないのに、アスカには、大きな借りが出来ちゃったな。）

もし、パーティーでアスカが指輪をしていたら、ミサトのつけていた指輪が霞んでしまうのは間違いなかったからだ。

加持は、アスカが指輪をしていないことに気が付いたミサトが、一瞬だが、安堵の顔を見せたことを見逃さなかった。

そして、そのすぐ後に見せた、アスカへの感謝の気持ちがこもった温かいまなざしも。

感の良いアスカのことだ。

悪口を言い合っているようでも、ミサトの本心をとっくに見抜いていたに違いないのだ。

アスカの指輪と自分の指輪を比べられるのが嫌だったことを。

だからこそ、アスカにとって初めてとも言える晴れの舞台であったのに、ミサトのことを考えて指輪をしなかったのだ。

（お蔭で、今までにない葛城の笑顔が見られたよ。アスカ、本当にありがとう。）

加持は、皆に指輪を見せびらかして、得意そうに笑っていたミサト

を思い出した。

アスカの思いやりがなかったら、あの笑顔は見る事が出来なかっただろう。

幸運なことに、アスカが中学生であったため、誰もアスカが指輪をしていないことに不審を抱かなかった。

アスカは、不器用だが優しい娘だ。

攻撃的な性格のため、周りから誤解され易いが、本当は誰よりも他人の心を思いやる素晴らしい娘なのだ。

加持は、誰よりもそのことを知っていた。

（シンジ君は、一体いつになったらアスカの優しさに気付くことやら。）

加持は、深いため息をついた。

第25話 始業式

「ああっ、もうっ。校長先生の話って、何で長いのよ。」

アスカは、ぶくたれた。今日は2月1日、月曜日。約3週間遅れの始業式だった。

このため、どの学校でも恒例の、校長の長話となった訳である。

「アスカ、大丈夫だった？」

シンジは、本当に心配そうな顔をしていた。

退院から3週間以上も経っているが、アスカの体調がまだ万全ではないことを知っているからだ。

「駄目よ。シンジ、教室までおんぶしてよ。」

「そ、それは…。」

（ア、アスカだったら、何てこと言うんだよ。恥ずかしいじゃないか。）

さすがに、シンジもうんとはいえない。

「冗談よ、早く教室へ行きましょう。」

そう言うと、アスカは走り出した。

「ちえっ、アスカの嘘つき。」

シンジは小声で文句を言った。だが…。

(良かった。アスカが元気になって。)

シンジの顔は、にこやかだった。

シンジ達のクラスでは、新しく担任になったミサトが新任のあいさつをしていた。

「今日から、皆さんの担任になった、葛城ミサトよ〜ん。よろしくね〜。」

ミサトがあいさつすると、男子は喜びの声を上げた。ついさつき、新任の美人の先生が4人も紹介されたのだが、そのうちの一人が自分のクラスの担任になったのだ。男なら喜ばずにはいられない。

「担任の先生が変わって、良かったな〜。」

「しかも、凄い美人だぜ〜。」

「ラッキー！」

そんな会話が、教室内で飛び交った。だが、それも束の間。ミサトが制止する。

「はーい、そこまでよーん。みんなに重大なお知らせがあるの。」

ミサトの真剣な声に、皆注目した。

「このクラスで、最近、婚約した人がいます。」

「おおっ!」

教室はどよめいた。

(ああ、どうしよう。何て言ったら良いのかな。)

シンジは、内心ドキドキしていた。アスカも同じらしく、俯いている。

だが、ミサトは、1回外して見せた。

「それは、私よーん。新学期には、人妻だから、よろしく!」

ミサトが一気に言うと、教室内には、『チエツ』とか『あーあ』とかいった、落胆の声があがった。

(何だ。僕達のことを言うんじゃないのか。)

シンジは肩をなでおろした。だが、そんな様子を見て、ミサトはニヤリと笑った。

「だが、しかーし、私だけじゃあ、ないのよねえ。」

はい、シンちゃん、後はよろしくねーん。頑張ってねー。」

ミサトの指名を受けて、シンジは一瞬ビクリとしたが、ゆっくりと立ち上がった。

すると、教室は水を打ったように静かになった。

そして、シンジはクラス全員の視線を浴びることとなった。

（ええいつ、僕も男だ。しっかりしろっ。）

シンジは、自分を励まして、何とか言葉を発することが出来た。

「い、今ミサト先生が言われた通り、僕はつい先日、婚約しました。そ、その相手を今から紹介します。」

僕の婚約者は、そ、惣流・アスカ・ラングレーさんです。」

その言葉を受けて、アスカも顔を真っ赤にしながら立ち上がった。

「はい、じゃあ、二人とも前においで。みんなにあいさつよ〜ん。」

ミサトに促されて、二人は黒板の前に立った。

「ぼ、僕は、こ、この惣流・アスカ・ラングレーさんと先日婚約しました。」

み、皆さんに黙っていようかとも思いましたが、

や、やはり正直に言おうと思い、こ、この場を借りては、発表します。」

皆さん、よろしく願います。」

続けて、アスカも皆に頭を下げた。

「私、惣流・アスカ・ラングレーは、この碇シンジ君と婚約しまし

た。
皆さん、よろしく願います。」

だが、急な発表に、みんな反応出来ず沈黙が続いた。
だが、やはり友人はいいものだ。トウジが大きく拍手をすると、
ケンスケ、ヒカリ、ミサトそして次々にクラスメート達が拍手をし
ていった。

「皆さん、ありがとうございます。」

(トウジ、ありがとう。)

シンジは、目を潤ませた。アスカは、真っ赤になって俯いたままだ
った。

二人の左手の薬指には、おそろいの指輪が光っていた。

つい先日のこと。

アスカとシンジは、ゲンドウ達のところへ来たとき、ドイツ支部が
まだアスカのことを諦めていないことを知らされた。
婚約は偽装ではないかと疑っているとのことだった。

「そ、そんな…。」

シンジは絶句した。だが、アスカは怒りながらも、ゲンドウに聞い
てきた。

「では、どうすれば良いのですか。」

それに対して、冬月が代わりに答えた。

「二人が婚約しているということを、周囲に知らせるのはもちろんのこと、

しばらくは仲良くして、喧嘩をしない方が良いと思うのだよ。分かるね。

もしかしたら、ドイツ支部の手先が、証拠を掴もうと、見張っているかもしれないのだよ。」

「では、学校の皆にも、公表しろということですか。」

「そうなるね。」

「はあ〜。」

アスカはため息をついた。学校の皆には知られなくなかったからだ。この歳で婚約なんて噂のネタにされるのは間違いないからだ。当分の間、聞き耳を立てることになりそうだ。

「しょうがないよ。学校が始まったら、皆の前で言おうよ。」

シンジの言葉に、アスカもイヤイヤながらも同意せざるを得なかった。

「ん、もう。それしかないようね。

でも、シンジが言うのよ。アタシは頷くだけだからね。

それで良い?。」

「うん、分かったよ。」

シンジは重苦しく答えた。

「でも、シンジからもらった指輪は、普段ははめられないわね。どうしようかしら。」

「ええっ、何で？」

「あんなに大きいのかな、何か行事のあった時以外ははめられないの。」

「だから、普段用のを買いましょう。そうしたら、シンジもはめられるしね。」

「何か嫌だな。」

「そう言わないの。おそろいのを買っからいいでしょ。」

「おそろいか。うん、だったら良いかな。」

(アスカとおそろいなら、変な虫が近付かなくなるかもね。)

シンジはそう思ってにっこりした。

そして、二人は宝石店に行き、小さなダイヤが10個ほどちりばめられたプラチナリングを買って、指にはめることにした。

お互いに贈り合うことにしたため、費用は折半であったが、シンジが買った婚約指輪の100分の1位の値段で済んだ。

ダイヤは合計で1カラット位だったが、それでも、中学生が指には

めるには、ちょっと高価なものだろう。

こうして、学校が再開されると、イヤイヤながらも、アスカとシンジは、皆に婚約を公表することになったのである。

「じゃあ、映画の話に移るわよ〜ん。」

一通りの騒ぎが収まると、ミサトが口を開いた。

「悪いけど、相田君と洞木さん、よろしくね〜ん。」

ミサトの指名を受けて、ヒカリとケンスケが前に出た。

「皆さんに既にご連絡していると思いますが、今度の文化祭で、我がクラスでは、映画上映を行いたいと思います。異議はありませんか。」

『異議なし。』との声が幾つかあがった。

「はい、それでは、映画の内容や、今後のスケジュールについて、説明します。」

まず、ケンスケが映画の内容を説明し、その後にヒカルがスケジュールを説明した。

30分ほどしてそれらが終わると、質問や意見を受け付けることになった。

答えるのは、ケンスケである。

「はい、しつもん。費用はどれくらいかかりますか。」

「費用は、全てネルフから補助されます。だから、気にしなくて大丈夫。」

それを聞いて、少くない生徒がホツとした。

「はい、しつもん。機材はどうするんですか。」

「僕のツテで最高の機材を揃えます。でも、費用はネルフ持ちだから大丈夫。」

と、このようにケンスケが次々と質問に答えていき、映画の件はすんなりと決まっていた。

やはり、費用を出さなくて良いということが大きく、反対する者はいなかった。

また、全員が何らかの形で出演することも確認された。

そして、早速明日から撮影が始まることになった。

だが、チャイムが鳴り、休み時間になると、クラスの半分近くの生徒が教室を飛び出して行った。

おそらく、シンジ達の婚約の話を広めるのだろう。

また、残る者達もシンジとアスカの周りに群がってきて、次々に質問を浴びせてきた。

シンジには、かなり厳しい質問が待っていた。

「惣流とどこまでいったんだ？」

「キスまでだよ。僕達、中学生だし。」

シンジが答えたが、誰も納得しなかった。

「嘘をつけ。一緒に暮らしているのに、そんなことが有る訳無いだろう。キリキリと白状せい。」

「もう、やったんだろ。正直に言えよ。」

「やったかどうかなんて、聞いていないんだ。どの位やってるかを聞いているんだ。」

「週に何回やっているんだ。嘘はつくなよ。」

周りの男達の目は血走っていた。

学校一の美少女であるアスカと同居していることでさえ羨ましいのに、

婚約までするなんて、許すまじという雰囲気だった。

特に、マナとの一件があったため、シンジ「美人の転校生キラー」という、

誤った先入観もあった。

皆の前では大人しいが、裏では何をやっているのかわからないというのが、

シンジに対する評価になった。

そうでなければ、美少女がシンジに次々となびくのはおかしいとい

う理屈だ。

したがって、アスカとキスだけというのもうさん臭いと思われ、
厳しい追及を受けることになった。

シンジにとつても、皆の疑いは身に覚えが有るし、さりとして真実は
語れないし、

非常に弱ったことになっていた。

お蔭で、シンジは休み時間になる度に男子 - それも他のクラスの男
子が殆どなのだが - に取り囲まれ、
厳しい追及を受ける破目になった。

一方、アスカへの質問は、

「ねえねえ、碓君からプロポーズしたの？」

「何て言ってプロポーズしたの？」

「その指輪は、婚約指輪なの？」

「どこまで進んでいるの？」

「碓君のことは、下僕じゃなかったの？」

「碓君のどこが気に入ったの？」

「何で急に婚約したの？」

等々……………。

これに対し、アスカは最初のうちは、かなり律儀に答えていた。

「もちろん、シンジからプロポーズしたのよ。」

「それは秘密。でも、後で明らかになるから、それまで待っていてね。」

「そうよ。二人おそろいなもの。」

「中学生だもの。キスマでよ。あつたりまえでしょう。」

「下僕なんて、冗談に決まっているでしょ。」

「優しいところかなあ。それに、思ったよりも頼もしいところがあるし。」

「アタシが綺麗になっていくものだから、誰かに取られない内に、つなぎ止めようってことだと思うけど。」

等々……………。

シンジに対する質問と比べると、緩やかなものだったし、何を聞いても優等生の答で押し通すアスカに対して、強引に聞こうとする者がいなかったため、女性陣のアスカへの問い詰めは、大したものではなかった。

だが、それに反比例するように、シンジへの攻撃は強まっていた。

トウジが睨みをきかしていたため、暴力に訴える者はいなかったが、シンジは次第にやつれていった。

しかも、シンジを糾弾する者は、次第が増えていったのだ。また、その内容も次第に厳しいものになっていった。

「惣流さんを妊娠させたんだろ。」

「そうだよ、そうじゃなければ、こんなに急に婚約なんてしないよな。」

「でも、そうなら、霧島さんと付き合っていた時、惣流さんともそういう仲だったことになるよな。」

「碇って、二股かけていたのか。許せんな。」

「霧島さんも妊娠させたんじゃないのか。」

「うらやましい〜。」

「とんでもない奴だ。」

「お前、正直に言えよな。」

皆、口々に勝手なことを言って、シンジに詰め寄るので、シンジはうんざりしていた。

本当は、逃げ出したかったが、逃げたところで、後を追ってくるのは間違いなく、

それならばトウジやアスカのいる教室内の方が安全だというのがアスカの意見だったので、

シンジは止むなく従っていた。

「シンジ、屋上へ行って食べようよ。」

お昼休みになってもシンジの周りに人だかりが出来るのを見て、アスカが助け船を出した。

「う、うん。今行くよ。」

（アスカ、助かったよ。ありがとう。）

シンジは、渡りに舟とばかりに席を立って、アスカのいる方へと向かった。

邪魔をしようとする者もいたが、アスカが一睨みして排除した。

皆、シンジには不満を持っていたが、アスカには逆らえなかったため、シンジはようやく解放されたのだった。

「アスカ、助かったよ。ありがとう。」

屋上へ着くなり、シンジは安堵した。

今日一日は、まるで針のむしる状態だったから、物凄く疲れたのに、お昼まで食べ損なうところだったからだ。

「いってことよ。アタシはこれでもフィアンセだからね。」

アスカはそう言ってニッコリと笑った。

（アスカって、やっぱり可愛いや。アスカの笑顔を見ると、疲れもふっとんじやうよ。）

アスカの笑顔に元気を取り戻したシンジもニッコリと笑い、やっと落ち着いた雰囲気になった。

そうこうしている内に、トウジやケンスケ達もやって来た。

もちろん、ヒカリとユキも一緒だ。

ケンスケは手にお弁当を3人分持っていた。

アスカとシンジの分だ。

実は、今日から生徒にお弁当が支給されることになっていた。

建前は、記憶を失ったネルフ職員の失業対策と、生徒の親の負担軽減であった。

アスカの発案で、費用はネルフ持ちである。

これは、非常に好評だった。

第3新東京市の復興やらで、生徒達の親の多くは何らかの形で駆り出されていたため、

忙しくて弁当を作っている暇などない。

この市内では、専業主婦というものは少なかったから、今までは働いている親が作っていたが、

とてもじゃないが、それどころではなかった。

しかも、毎日お弁当を作ることは、女性にとっても苦痛であったし、男性にとっても同様だった。

ネルフ関係の仕事に就いている親達の苦痛を軽減する意味で、非常に有意義だったのだ。

もっとも、アスカの本心は、婚約したのに、フィアンセに弁当を作

らせるのがみつともないという、
極めて個人的な理由が全てだったのだが、まあ、結果オーライである。

こうして、6人はお弁当と一緒に食べるのだが、今週は種類を選べず、皆同じものになった。

来週からは何種類かのメニューの中から選ぶようになるのだが。

「いただきます。」

ユキの合図で、皆食べ始めた。シンジとアスカにとって、このひとときが、今日初めての
安らぎの時であった。

だが、シンジの受難は、始まったばかりであった。

第25話補完 資格抹消

始業式の数日前、本部にて、今年になって初めてのシンクロテストを行った。

当初は、ここまで来るのに、後3カ月以上かかるはずだったが、主にアスカの活躍によって、大幅に期間が短縮されていたのだ。

このテストには、3人のチルドレンが参加していた。

それに加えて、ゲンドウ、冬月、リツコ、ミサト、加持、ヒカリといった面々が立ち会っていた。

加持とヒカリは、アスカのことを考えて、特別に許可されていた。

「アスカ、あまり気負わないようにね。」

シンジは、何を言っているのか迷ったが、とにかく声をかけた。

「シンジったら、心配しなくてもいいわよ。

当分は、ろくな成績を出せないのは分かっているから。」

そう言っつて、アスカは笑って応えた。

「それじゃあ、テストを始めるわね。」

マヤの言葉を合図に、テストが始まった。

テストの結果は、事前に予想された範囲だった。

シンジが80%、トウジが40%、アスカは何と9%だった。

シンジとトウジは、エヴァの起動に問題無かったが、アスカは起動指数すら下回っていた。

この結果により、アスカにはゲンドウから命令が下された。

「セカンドチルドレンの資格は抹消する。」

「父さん！そんな、酷いよ！」

シンジは叫んだが、アスカがそれを押し止めた。

「シンジ、止めて。アタシが望んだことなの。だから、止めてちょうだい。」

「でも！」

「アタシのことが好きなら、それ以上言わないで。お願い。」

そこまで言われると、さすがにシンジは何も言えない。

「分かったよ…。」

シンジは力無く呟いた。

「その代わりに、アタシのことを守ってね。お願い。」

今度は、守秘回線を使って、シンジにしか聞こえないように言ってきた。

「もちろんだよ、アスカ。」

シンジの顔は、少しでも明るくなったが、アスカの顔は複雑だった。

第26話 エヴァ、起動

学校が終わると、アスカ、シンジ、トウジのチルドレン達はネルフへと向かった。

本来、始業式の日は、すぐ帰るもののだが、かなり授業がつぶれていたため、今日は、6時間目まで、まるまる授業があったのだ。このため、ネルフに着く頃には、3時を回っていた。

アスカ達がネルフに来たのは、今日、エヴァの起動テストがあるからだ。

このため、マヤは最近は大忙しであったし、一応技術部長であるリツコも、始業式に出たらすぐにネルフへ来ていた。

リツコは、まだ以前のようにはいかないのだが、マヤが『先輩がいと、安心出来るんです。』と言い張るので、マヤと一緒にテストに立ち会っているのだ。

そんな所に、アスカ達を引き連れて、ミサトがやって来た。

「どう、リツコ、準備の方は？」

「ほぼ終わったわ。マヤが頑張ったお蔭ね。」

「そう。じゃあ、シンジ君、悪いけど、直ぐに用意してくれる。」

「ええ、分かりました。」

シンジは、返事とともに更衣室へと向かった。

だが、以前と違って、アスカに小さく手を振っていた。

アスカの方も、少し赤くなりながらも、控えめに手を振った。

これに気付かぬミサトでは無かったが、これから行われるテストの重大性について、十分理解していたため、見てみぬふりをして、マヤに声をかけた。

「マヤちゃん、あとどれ位でテストが始まるの？」

「そうですね。後、1時間後位でしょうか。」

「じゃあ、コーヒーでも飲んでみましょう。」

ミサトはそう言うと、アスカとトウジを引き連れて出て行った。

「マヤ、後はお願いね。」

「あ、先輩。」

リッコも後をついて行ったため、マヤは少し落ち込んでしまった。

「やっぱり、リッコのいれたコーヒーは、おいしいわね。」

「あら、ミサト。そんなこと言っても、何も出ないわよ。せいぜい、お代わり位よ。」

「えへへっ、ごめん。その、お代わりちょうだい。」

「まったく、そう言えばいいのに。」

リツコはあきれたが、アスカとトウジはケラケラ笑っている。こつこつという所は、リツコもミサトも、以前とは変わっていないようである。

「よう、みんなご一緒か。」

ひょっこり、加持も現れた。

「あ、加持さん。お久しぶりです。」

律儀にトウジがあいさつするが、他のメンバーは毎日のように会っているせいか、軽く会釈をする程度だ。

実は、これには理由がある。加持が諜報部の部長代行を命じられた時に、アスカの発案で、加持、ミサト、リツコ、アスカ、シンジの各個室を横並びにして、つなげてしまったのだ。

アスカからすると、ミサト、リツコ、シンジの3人に、毎日のように仕事を手伝ってもらうつもりだったので、その方が都合が良かったのだ。ミサトの部屋の横に加持の部屋をつなげたのは、ミサトと加持が少しでも多くの時間を共有出来るようにと考えてのことであった。

裏の理由としては、マコトやマヤのことがあった。

マコトは、ミサトに失恋したため、ミサトと二人で話し合うことを避けていたので、二人きりにならないようにと配慮したのだ。

マヤは逆にリツコと二人きりになろうとしていたため、これを防ぐ

ためでもあった。

このため、アスカ達と一悶着あったマヤは、あまりここに近づけないでいた。

このため、マヤの使いとして、シゲルが顔を出すことが増えており、自然とマヤとシゲルが言葉を交わす機会が増えていた。

それはそれで、アスカはシゲルから非常に感謝されていた。

そんな訳で、部屋のつながった5人は、結構、和気あいあいと仕事をしていた。

当然、リツコのコーヒーの消費量も多い。

特に、アスカとリツコはずっとこの場で仕事をしていたため、二人はかなり打ち解けるようになっていた。

シンジは、午前中は、訓練があつたし、ミサトにしても、ちよくちよくと席を外すことが多かったからだ。

結果的に、午前中は、アスカとリツコが二人きりになることが多かった。

そのためか、アスカはリツコの影響を受けて、ネルフ内では白衣に伊達メガネという格好で過ごすようになっていた。

もっとも、今日は学校帰りであるのと、トウジがいるため、制服のままであるが。

「テストがうまくいくといいわね。」

皆でワイワイしている中、何気なくミサトが呟くと、アスカが口を出した。

「ふん、そんなの、うまくいくに違いないわよ。何たって、アタシ

が協力したんだもの。」

そう言って胸を張る。

「シンジがやるからって言わんのか。」

トウジは少しあきれた様子だ。

「シンジは、今回が初めてじゃないし、失敗する要素にはなんないのよっ！」

アスカは、そう言って口を尖らす。

「確かにそうね。今回は、技術的な問題が大きいもの。」

リッコもアスカに同調する。

「はあ、そんなもんですか。」

さすがのトウジも、リッコの言うことには、耳を傾けるらしい。

「えっ、リッコ。そんなこと、初耳よ。」

ミサトが目を丸くしたが、リッコは苦笑した。

「今回のエヴァは、敵のものを拝借したでしょ。」

だから、色々と技術的な問題が生じる可能性があるのよ。

一つ一つの可能性は小さくても、問題の数が多いと、無視出来なくなるわ。

だから、今回のテストは、一番安心出来るシンジ君なのよ。」

リッコは言っただけから、少し良心が痛んだが、このメンバーでは、本当のことは言えない。

特に、コアのことについては、ゲンドウ、冬月、アスカ、シンジ、マヤとリッコ以外の者は知らされていない。

また、知られてもいけないのだ。

今回の技術的な大きな問題点は、そのコアに関わるものだった。

参号機から試験的に導入した、デジタルコアについては、稼働実績が無い。

参号機があんなことにならなければ、もう少しましな状況になっていたのだが。

実は、初号機のコアには生きて人間が取り込まれたのが、そんなことをしていたのでは、エヴァの量産は出来ないと判断したゲンドウが、コアに生きた人間ではなく、デジタルデータをインストールするよう命じたのが、碇ユイがエヴァに取り込まれた直後だった。

その後、ドイツにて、ゲンドウの指示を無視して実験が行われ、アスカの母親のキョウウコが式号機に取り込まれてからは、特に厳禁とされた。

だが、何度実験を繰り返しても、デジタルデータでは稼働せず、参号機の時も、半ばあきらめかけた実験だった。

結果的には起動したのだが、本当にうまくいったのか、それとも、使徒がとりついていたらからなのかは分からなかった。

そのため、今回の実験が成功すれば、その成果は計り知れないものとなる。

また、うまくすれば、ユイやキョウウコのサルベージにも役立つかも

しれないのだ。
もっとも、初号機と式号機が見つければの話ではあるが。

今回のテストにおいては、デジタルデータは、アスカが作成したものが採り入れられていた。

アスカ曰く、『特別な方法で変換した』とのことだった。
その特別な方法について、リツコとマヤが理論を聞いたのだが、結局理解出来なかった。

このため、リツコとマヤは冷や汗ものであったが、テストがこんなに早く実現したのは、
間違いなくアスカの功績であったこともあり、アスカの言う通りにするということになったのだ。

アスカは、リツコ達には説明しなかったが、ゲンドウと冬月には従来のデジタルデータの問題点を指摘し、
自分の編み出した方法を採用するようにと、強く申し入れていたのだ。

これは、自分の母親であるキョウウコの実験にも関係するのだが、キョウウコは、ユイの失敗を教訓にして、
エヴァに取り込まれた後、その逆の作業を行おうとして、失敗していた。

このため、キョウウコは完全な形では戻れなかったのだ。

アスカは、この点に着目し、エヴァに取り込まれる時に、3分割して取り込むようにしたのだ。
そうすれば、完全に取り込まれることは無いし、無理に戻す必要も無くなるのだ。

3分割する根拠は、MAGIに求めた。

もつとも、口にするのはたやすいが、それを実現すると、かなりの技術的障害が生じる。
だが、アスカはそれを一つずつ潰していき、新たな方法を生み出したのだ。

一番の問題点は、3分割したデータの融合方法であった。理論上は、うまくいくはずであったが、理論通りにいくかどうかは、全て今日の実験にかかっていた。

このため、アスカは、皆にはユイのデータだと思い込ませておいて、実際には、自分を実験台にしていた。

ユイのデータと偽ったのは、自分を実験台にしたことを隠すためと、今後のことを考えてのことである。

すなわち、自分に悪意を持っている者が使った場合に、シンクロ率が落ちるようにとの、冷徹な計算の結果であった。

そんな訳で、アスカは、隠れて自分のデジタルデータを何度も取り込んで、これまた何度も融合させる実験を行ったのだ。

こうして、ようやくデジタルデータをインストールしたコアが実用化の運びとなったのである。

皆には、ユイのデータだと偽ったが、これには、リッコの記憶喪失が都合が良かった。

ゲンドウには、リッコがこっそりとユイのデジタルデータを保存していたと説明出来たからである。

こうして、今回のテストは、初めてづくしのことが多く、技術部の面々も、

失敗する可能性が非常に高いものであるとの認識があったのだが、

そのことは作戦部には意図的に伝えられなかった。
ミサトが目丸くするのも、無理からぬことなのだ。

リッコもこうした事情の大半を知っていたため、関係者以外には、
秘密を押し通すことにしたのである。

「あら、そろそろ時間ね。」

リッコは、そう言って話をうまくそらそうとして、まんまと成功し
た。

一方、更衣室で、シンジは密かにある決意を固めていた。

（僕がアスカを守るんだ。そして、アスカが戦わなくても済むよう
にするんだっ。）

シンジは、アスカがチルドレンの資格を抹消された時、ゲンドウの
ことを恨んだが、よくよく考えてみれば、
エヴァなんて危ないものに、好きな女の子を乗せるといふ考えるこ
との方がおかしいとの結論に達したのだ。

（僕は、父さんのことを誤解していたのかもしれない。）

シンジは、ふと、アスカが以前言っていたことを思い出した。

ダミープラグのせいで、トウジが死にかけた時のことについて、ア
スカは、

ゲンドウがシンジの身を案じたからではないかとの考えだったのだ。確かに、あのままシンジが戦わなかったら、シンジは死んでいたかもしれない。

そうなる、ゲンドウはシンジの命を助けたことになる。

それを思うにつれ、自分が戦わないことによつて、多くの人間が苦しい思いをしたかもしれないことに気付いたのだ。今後も、自分が頑張らなくては、アスカに負担がかかるのは間違いない。

下手をすると、囷に使われて、命を落す可能性すらあるのだ。

(アスカが死ぬなんて、それだけは絶対に嫌だ。)

シンジは、強く拳を握りしめた。そして、強い決意をその瞳にたたえた。

シンジは、まだまだひよつこだが、いっぱしの戦士の目をしていた。

シンジがエヴァに乗り込むと、早速テストが始まった。

「シンジ君、いいかしら。」

「はい、大丈夫です。」

シンジのOKが出ると同時に、LCLがエントリープラグを満たし

ていく。

「主電源接続。」

「全回路動力伝達。」

「第2次コンタクト開始。」

「A10神経接続開始。」

「初期コンタクト全て異常なし。」

「双方向回線開きます。」

「……シンクロ率……80%」

発令所をどよめきが包んだ。予想以上のシンクロ率だった。

「ハーモニクス全て正常。」

「エヴァ、起動します。」

その瞬間、エヴァ・新初号機 - の目が光ったかと思うと、ゆっくりと右手が上がり、左足が前に踏み出された。

「やった、成功だ!」

「ヤッホー!」

発令所は、明るい声で満たされる。

そうしているうちに、メインスクリーンにシンジの顔が映った。

「やったよ、アスカ。」

シンジの顔は綻んでいた。

「あたり前でしょ。このアスカ様が頑張ったんだから。」

「でも、何か、アスカの匂いがするよ。」

それを聞いたアスカの顔は少し赤くなった。

「シンジが落ち着くようにと思って、LCLにアタシの匂いを付けておいたのよっ。」

それを聞いたシンジばかりか、周りの者まで赤くなった。

アスカは、しまったと思ったが、時既に遅し。

ミサトがニヤリと笑っていた。

アスカは、今夜の宴会で、散々冷やかされるだろうと、覚悟を決めた。

一方、起動自体が成功すると、シンジには、次は荷物運びが待っていた。

「何で、力仕事があるんだよ。」

シンジはぼやいたが、シンジは、量産型エヴァをもう何体か、別のケージに運び込む破目になった。
新式号機及び新四号機となるべき機体である。

これだけの巨体をいくつも動かせるほどの資金が、今のネルフには無かったとまでは言えないが、かなりの額になるため、節約されていたのだ。

「あゝあつ。」

シンジのぼやきに対して、トウジが笑っていた。

「しつかりせよ、センス。」

だが…。

「明日は、あなたにもやってもらおうわ。」

リツコの一言に、トウジは真っ青になるのだった。

こうして、テストが万事うまくいったため、その夜は、コンフォート17で、盛大な宴会が繰り広げられることとなった。

だが、この動きを事前に察知していたアスカによって、ミサトの家ではなく、新たに設けられたミサトの家と同じ階の宴会部屋にて行われることになったため、アスカ達は、途中で脱出することが出来た。

だが、当然ミサトやリツコは明け方まで飲み続け、学校を早くも休むことになる。

第26話補完 キャシー

暗い部屋の中で、一人の男が画面を見つめていた。その画面には、初老の男が写っていた。男は、彼のことを『盟主』と呼んでいた。

「盟主様。」

「何だ。」

「レッドアタッカーズの招集が完了しました。先行部隊は、既に着任しています。残りの者も、1週間以内には着任する予定です。」

「早いな。上出来だ。」

「はっ、ありがとうございます。」

「惣流・アスカ・ラングレーの警護は、どうなっている?」

「はっ。彼女の学校に、女教師2名を送り込みました。近々、女生徒1名、男生徒2名も送り込む予定になっています。」

「女生徒が1名だけか。」

「はっ、なにぶんにも、あの年齢では、優秀な女兵士は、そうはおりませんので。」

「いざという時に、楯になれば良いのだがな。」

「はっ、それはそうですが、ジャッジマンとレッドウルフが、かえって足手まといになると反対しまして。」

「ふうむ、そうか。ならば、連絡要員でよい。数名配置せよ。彼女の行動を把握することと彼女の味方になることが任務だ。」

「はっ、それでよろしければ、直ちに人選に入ります。」

「では、頼むぞ。」

「はっ。」

そこで通信は途切れた。

「キャシー、こっちに来い。」

「はい、大佐。なんででしょうか。」

「盟主様の命令だ。惣流・アスカの周りに、連絡要員を数名配置することになった。人選は君に任せる。」

「そのうちの一人は、私では駄目でしょうか。」

キャシーは、そう言いながら、トレードマークである大きなメガネを無意識のうちに触っていた。

「うづむ。」

大佐と呼ばれた男は、考え込んだ。悪い考えではない。キャシーが惣流・アスカの周りにいれば、連絡も付きやすくなるというメリットがある。

「まあ、よかろう。」

「はっ、ありがとうございます。」

その時大佐は、キャシーがニヤリとした笑みを浮かべたことに気付かなかった。

こうして、それまで組織とアスカとの連絡要員であったキャシーが、近々、初めて出会うこととなるのだった。

第26話補完 キャシー（後書き）

キャラ設定：キャシー

ドイツ系アメリカ人で、蒼い瞳、短い金髪、スリムな白人の少女。活発な感じで、大きなメガネをかけており、美人とは言えないが、スタイルの良さと優しい感じの笑顔がそれをカバーして余りある。アスカの髪を短くして、金髪に染めて、メガネをかけたような感じ。ジャツジマンと同じ組織に属していて、謎の組織とアスカとの連絡員でもある。

第27話 炎のアスカ

始業式から3日経って木曜日になったが、シンジは相変わらず厳しい追及を受けていた。

「惣流とどこまでいったんだ？」

「キスまでだよ。僕達、中学生だし。」

シンジはいつものように答えたが、返ってくる反応も同じだった。

「嘘をつけ。」

「一緒に暮らしているのに、そんなことが有る訳無いだろう。」

「キリキリと白状せい。」

「もう、やったんだろ。正直に言えよ。」

「やったかどうかなんて、聞いていないんだ。」

「どの位やってるかを聞いているんだ。」

「週に何回やっているんだ。嘘はつくなよ。」

「惣流さんを妊娠させたんだろ。」

「そっじゃなければ、こんなに急に婚約なんてしないよな。」

「霧島さんと付き合っていた時、惣流さんともそっという仲だったこ

とになるよな。」

「碇って、二股かけていたのか。許せんな。」

「霧島さんも妊娠させたんじゃないのか。」

「うらやましい〜。」

「とんでもない奴だ。」

「お前、正直に言えよな。」

周りの男達の目は、相変わらず血走っていた。

婚約発表から3日も経つのに、言うことは毎回同じである。

学校一の美少女であるアスカと婚約するなんて、許すまじというやつかみなのだが、かなり根深いものがあるようだ。

トウジとアスカが睨みをきかしていたため、暴力に訴える者はいなかったが、シンジはいいかげん疲れてきた。しかも、シンジを糾弾する者は次第に増えていくのだ。

皆口々に勝手なことを言っつてシンジに詰め寄るので、シンジは本当は逃げ出したかったが、逃げたところで後を追ってくるのは間違いなく、それならばトウジやアスカのいる教室内の方が安全だというのがアスカの意見だったので、シンジは止むなく従っていた。

「あなた達、いい加減してよ！」

さすがに、アスカは切れた。シンジが可哀相なこともあるが、自分

のことを根掘り葉掘り聞こうとする、この連中のことが腹に据えかねたのだ。

「わ、わかったよ。」

アスカの怒った顔を見てさすがにまずいと思ったのか、男子生徒達はそそくさと逃げて行った。

「覚えてろよっ！」

シンジに向かって捨てゼリフを吐く者もいたが、シンジはよつやく安堵したようだ。

「助かったよ、アスカ。」

「ええ、アタシもそのうちに収まるだろうと思っていたから黙っていたけど、これじゃあねえ。」

アスカは肩をすくめた。あまりにもしつこいからだ。

「でも、アスカが怒ったから、もう来ないと思うけど。ありがとう、アスカ。」

シンジはにっこりとしたが、世の中そう甘くは無かったのだ。

お昼休みになってもシンジの周りに人だかりが出来るのを見て、ア

スカはまたもや頭にきた。

「あなた達、いい加減してっ！」

そう言うなり、物凄い目付きで睨んだのだ。人だかりは、直ぐに消え去った。

「アスカ、ありがとう。助かったよ。」

「良いのよ。その代わり、アタシが困った時は助けてよね。」

アスカはそう言いながらペロツと舌を出した。

「平和だね〜。」

それを見ていたケンスケが、一人呟いた。

アスカ達がのんびりとお昼を食べている頃、体育館の裏で、悪巧みをしている連中がいた。

自称、アスカ親衛隊の面々である。

「惣流さんは、碇に騙されているんだ。」

「そうだ、みな、碇が悪いんだ。」

「天誅を下そう。」

「そうだ、そうだ。」

こうして、『碇シンジ、天誅計画』が実行されようとしていた。

6時間目の授業中に、シンジの元に1通のメールが届いた。

『折入って、相談して欲しいことがあります。』

今日の放課後に、学校近くの公園に来てください。
なお、変な誤解を招きたくないなので、惣流さんには内緒にしてください。
さい。

2年B組 佐藤ミキ『

(あれ、なんだろうな。)

シンジは頭を捻ったが、そのうちわかるだろうと気に止めなかった。

放課後、シンジの元に一人の少女がやって来た。

「あの、碇君ですか。」

「ええ、そうだけど。」

「私、佐藤と言います。メールの件は、いかがでしょうか。」

「僕じゃなきゃ、駄目なのかな。」

「ええ、霧島さんのことなんです。」

「ええつ。」

「お願いします。きつと来てください。」

そう言うなり、少女は走り去って行った。

「マナか…。」

シンジは、アスカの目を盗んで公園へと向かって行った。

「あれ、あの娘は何処かな？」

公園に着いたシンジは、周りを見回した。だが、佐藤という女の子の影も形も見えない。

「しょうがない、帰ろうか。」

シンジがそう言って後ろを振り向いたところ、柄の悪い高校生の集団が視野に入った。

シンジは、何か嫌な予感がして顔を元の方向に戻したところ、これ

また柄の悪い高校生の集団が出現していた。

シンジは、携帯電話の緊急ボタンを押して高校生の集団から離れようとしたが、

その集団はシンジの向かう方向へと先回りし、いつの間にかシンジの周りを囲っていた。

身の危険を感じたシンジは、走ってその包囲網を抜けようとしたが、足を引っかけられてしまった。

「いてっ。」

シンジが声を出すと、高校生の集団から一人の男がシンジの前に歩いてきた。

「お前が碇シンジだな。」

「そうですが、何の用ですか。」

「お前が惣流アスカさんを妊娠させたとの噂があるが、本当か？」

「根も葉も無い嘘です。」

「そうか。じゃあ、話は早い。お前は惣流さんと即刻別れるんだ。」

「いきなり、何てことを言うんですか。」

（冗談じゃない。何でアスカと別れなきゃいけないんだ。）

シンジは、怒って言い返した。

「うるさい！いいから別れるんだ。」

「嫌です。」

「何いっ！」

男の顔は、それまでの穏やかな表情から、憤怒の顔へと一変した。

「許さんっ！」

男は、いきなりシンジに殴りかかった。

「っ！っ！」

シンジは、避ける暇もなく、叩きのめされた。

「おっ！っ、こいつは痛い目を見ないと分からんらしい。やっちまえっ！」

それを合図に、男達が殴り掛かってきた。

「ぎゃああああっ！」

（い、痛いっ！）

シンジは、全身を襲う激痛に悲鳴をあげたが、そんなものには気にもとめずに男達はシンジを殴り続けた。

シンジは、体を襲う激痛に耐えるしかなかった。

「シンジっ!」

シンジの意識が薄れかけた頃、公園に着いたアスカが見たのは、血まみれになってなお

殴りつづけられているシンジと、20人ほどの高校生の集団だった。

「止めなさいよっ!」

アスカの叫びに高校生達は、一瞬動きが止まったが、リーダーらしき男の合図で再びシンジを殴り始めた。

「止めてって、言ってるでしょっ!そんなことをしたら、シンジが死んじゃうっ!」

アスカは悲痛な叫びをあげたが、リーダーらしき男がアスカの前に出てきて、

舌なめずりをしながらこう言った。

「止めてもいいけどよ。その代わりに、お前さんを好きにさせてもらおうか。」

男の顔には、いやらしい笑いが浮かんでいる。

アスカは拳を強く握りしめ、怒りの感情が暴発しないようにと俯くと、静かな口調で言った。

「これが、最後よ。シンジを離しなさい!今すぐに!」

アスカは、底冷えがするほどの、冷たい声で言った。だが、男はアスカのことをなめきっていたのか、何も気付かずにせせら笑っていた。

「ほう、じゃあお前さんは、俺様が最初に頂くとするか。」

そう言うと、男はアスカに近付いてきた。

もし、その男が訓練された兵士なら、殺気を感じて動けなくなっていたことだろう。

また、アスカの格闘技の腕を知っていたならば、裸足で逃げ出していただろう。

だが、不幸なことにその男は、どちらでもなかった。

アスカまで後一步というところまで来た時、男は急に宙を舞った。

「バキッ！」

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
っ！」

何かが折れる音と男の悲鳴に、高校生達は動きを止めてアスカの方を見た。

そこには、目がつりあがり炎でさえも凍らすほどの冷気を纏った顔に、

歴戦の勇士でさえも身震いするほどの凄まじい殺気と、紅蓮の怒りの炎を纏ったアスカがいた。

それから、しばらく経った頃、アスカは、シンジと一緒に加持の車に乗っていた。

「加持さん、助かったわ。」

「まあ、アスカには、借りがあるしな。これ位、お安いご用さ。」

そう言って、加持は車を発進させた。車の中では、シンジが気を失っている。

「あいつらのことは、お願いね。」

アスカは、今では後ろの方に見える公園を見た。公園では、両手両足の骨を折られた高校生達が、ネルフの車に乗せられて、病院に運び込まれるところだった。

しばらくして、シンジはよつやく目を覚ました。

「あれっ、ここは？」

だが、アスカの部屋のベッドで寝ていることには、直ぐには気付かなかったようだ。

（あれっ、僕は高校生に殴られて、気を失って、それから…。）
シンジは自分の記憶をたどったが、シンジが目を覚ましたことに気付いた美しき同居人が、大きな声で遮った。

「シンジっ！良かった。大丈夫だったのね。」

「うん、僕はどうしたんだろう。」

「シンジは不良に絡まれて、一杯殴られて、意識を失ったのよ。アタシ、シンジが死んだかと思って、心配したんだから。」

まったく、アタシを守ってくれるなんて大見え切って、大嘘じゃない。」

「ごめん、アスカ。悪かったよ。」

「じゃあ、もう二度とアタシの側から無断で離れないでね。」

「うん。でも、誰が助けてくれたの。」

「えっと、加持さんよ。」

アスカの話では、アスカがかけつけた時にはシンジは既に血まみれになって倒れており、怒ったアスカが高校生達を相手に戦ったが、多勢に無勢すぐに窮地に陥ったのだが、そこに颯爽と加持が現れたとのことだった。

アスカは、加持が現れるとこれ幸いと、すたこらさつとシンジを連れて逃げ帰ったというのだ。

そうして、急いで医者を呼んだところ見た目ほど酷い怪我では無く、しばらく安静にするようにと言われたとのことだった。

「後で加持さんにお礼を言っておきなさいよ。」

「うん、分かった。でも、アスカは、ずっと看病してくれてたの？」

「も、もちろんでしょ。家族だし、フ、フィアンセだもの。」

アスカは、そう言うと、少し紅い顔になった。

「そうか……。ありがとう、アスカ。大好きだよ。」

シンジは、そう言ってアスカの手を握りしめた。

「じゃあ、早く良くなってね。これは、お薬がわりよっ。」

アスカは、言うなり、シンジにキスをした。

「じゃあ、大人しく寝ていなさいよっ！」

アスカは恥ずかしさを隠すためか、大声でわめきながら部屋の外に出て行った。

アスカが部屋の外に出るとミサト達の声がした。

「アスカ、シンちゃんは、目を覚ましたの？」

「うん。」

「良かったじゃない。」

「うん、ありがと。」

「何よ、アスカったら、泣いちゃって。」

「だって、だって、心配だったんだもん。」

シンジは血まみれだったのよ。本当に死ぬかと思ったんだから。」

シンジはそんなことを聞きながら、ちよっぴり幸せに浸っていた。

（アスカったら、僕のことを心配して涙まで流してくれたんだ。酷い目に遭ったけど、アスカに心配してもらって嬉しいや。）

そんなことをのんびりと考えていると、戸が開いて加持が入ってきた。

「あ、加持さん。助けていただいたそうで、ありがとうございます。」

「シンジ君には、いつも葛城が世話になっているからな。気にするなよ。」

それよりも、あんまりアスカを心配させちゃ、駄目だぞ。」

「はい、すみません。」

「今は落ち着いているが、血まみれになったシンジ君を見て半狂乱になってしまったんだぞ。」

「えっ、アスカが？」

「ああ、そうだ。信じないのか。」

「だって、アスカは、トウジが死んだかもしれないって時も冷静でしたし、

綾波が死んだかもしれないって時もそうでした。加持さんの時だつて…。」

「そうか。ってことは、やったな、シンジ君。」

アスカの心をばっちり掴んでいるっていうことじゃないか。」

「そ、そうなるんですか。」

「ああ、そうだ。もう一息で、俺と葛城みたいになるぞ。」

「えっ、それはちょっと…。」

「おっ、言うなあ、シンジ君も。」

まっ、それだけ言えるんなら、もう大丈夫ってことかな。安心したよ。」

「あっ、そうだ。加持さん、僕に殴りかかってきた高校生は、一体…。」

「ああ。いずれ分かんと思うから言うが、全員、病院送りにした。もう、二度とシンジ君の前には現れないだろう。」

「病院送りって?。」

「彼らの手足の骨は、全部折っておいたよ。まあ、半年は病院から

出て来れないだろう。」

「加持さん、それって、あんまりじゃあ、ありませんか。」

「シンジ君、甘いことを言っつては駄目だ。」

「今、君が動けなくなつて、そんな時にゼーレが攻めてきたらどうする？」

葛城やアスカが死ぬかもしれないんだ。

そんなこと、許せるかい。俺は絶対に許せない。

「彼らは、自分がどれだけ愚かなことをしたのか、身をもつて知るべきなんだよ。」

「でも…。」

「シンジ君。君は優しい。だが、優しいことも、時には罪になる。彼らを野放しにしていたら、他の誰かが犠牲になるかもしれない。例えば、彼らがアスカや洞木さんを襲うかもしれない。」

「そうすると、彼女達に、一生消えない傷が残るかもしれないんだ。それでもいいのかい。」

「良くは、…ないです。」

「いずれ分かる時が来るさ。」

「まあ、これで、シンジ君や周りの人間にちよっかいをかける人間はいなくなるだろう。」

「それに、君達のガードも、もっと強化するよ。」

「助けてもらつて言うことじゃないとは思いますが、何か、釈然としませんね。」

「アスカの笑顔を取るか、不良どもの自由を取るか、どちらを選ぶんだい？」

「そりゃあ、もちろん、アスカの笑顔を取ります。」

「はははっ。分かっているじゃないか。まっ、アスカを大事にしてやれよ。」

加持はそう言うと、部屋を出て行った。

だが、シンジは何か、割り切れなかった。

（確かに、加持さんの言うことは分かるんだけど。

でも、やっぱり良くないような気がする。

でも、僕の代わりにアスカが襲われたら絶対に嫌だ。

僕がアスカを守ってあげられない以上、偉そうなことは言えないのか。）

シンジは、釈然としないながらも加持の言うことに納得せざるを得なかった。

シンジは、これでまた一步、大人へと近付いたのかもしれない。

第27話補完 戦いの序曲

高校生達が病院に運び込まれようとしていた時、公園から離れた所にジャツジマンとレッドウルフが並んで座っていた。

「あれが、惣流・アスカ・ラングレーか。あんな強い女に警護なんか必要なのか？ 凄まじい強さじゃないか。」

ジャツジマンはそう言うと、肩をすくめた。

「ああ、そうかもしれないが、彼女も人間だよ。油断を突かれることがあるかもしれないじゃないか。」

そう答えるレッドウルフは、見たところ、15、6歳位の少年に見える。

「彼女と戦うには、軍隊が必要なんじゃないか？」

そんなことをしばらくの間レッドウルフと話していたが、ジャツジマンは頃合いとばかりに話を切った。

「まあいいさ、どっちでも。俺は、報酬分に見合った分を働くだけさ。」

どっちにせよ、俺は彼女を守るだけだ。」

ジャツジマンはそう言って、その場を去った。

＊＊

それから数日後、市内のとあるホテルの広いホールに、レッドアタッカーズのメンバーが続々と集まってきた。

それ以外の組織のメンバーも集まり、総勢2千人を超えていた。

集めたのは、ネルフである。

今後予想されるゼーレの攻撃に備えて傭兵をかき集め、守りを固めるためだ。

全員が集まったのを確認すると、加持が正面に置かれた台の上に立ち上がった。

「みんな、聞いて欲しい。俺は、ネルフ諜報部の部長代行の加持リョウジだ。

これから、我々は、ゼーレと戦うことになる。

ここにいる者達は、俺の命令に従って戦うことになる。

命令違反をする者がいると、作戦行動に支障が出る。

だから、俺の命令に絶対服従を誓ってもらう。」

加持が一気に言うと、ホール内の傭兵達は、口々に不満を言い出した。

そして、そのうちの一人が皆の声を代弁すべく、加持の前まで進んで行った。

「おう、加持さんよお。あんたの言うことも分かるが、俺は、俺のやり方でやらせてもらうぜ。」

あんたの命令に絶対服従っていうことは、あんたに俺の命を預ける

ことになるんだよ。
とてもじゃないが、実力も分からないあんたの言うことなんて、聞けないぜ。」

男はそう言って加持を睨んだ。

加持もその男を物凄い目付きで睨み、一触即発の状況になった。だが…。

「待ってください。」

そこに、アスカが現れた。

「あん、お嬢ちゃんは誰だい？」

男は、笑いながらアスカを見た。こんなところに、子供が何をという顔をしていた。

「私は、エヴァンゲリオンのパイロット、碇シンジのフィアンセです。」

私達は、ゼーレのせいで一回は命を失いました。

もし、もう一度同じことが起きた場合、もう二度と奇跡は起こらないでしょう。

それでは、シンジが命をかけて守ったことが無駄になってしまいます。

だから、そうならないように加持さんに命を預けてください。お願いします。」

アスカはそう言って頭を下げた。

男は何かを言おうとしたが、それは初老の男によって遮られた。

「サードチルドレンは、命をかけて人間の世界を守ったといわれている。」

そのサードチルドレンのフィアンセ殿がそこまで言うほどの男だ。我々『ヴァンテアン』は、命を預けよう。」

そう言うと、初老の男は加持に向かって片膝をつき、頭を下げた。他のヴァンテアンの傭兵達も、次々にそれに倣った。

「我々、『ワイルドウルフ』も、加持に命を預けよう。」

その声と同時に、ドイツの傭兵達も加持に向かって片膝をつき、頭を下げた。

「我々も、加持に命を預ける。」

ジャツジマンも加持に向かって片膝をつき、頭を下げた。ジャツジマンの部下達もこれに倣った。

「僕は、レッドアタッカーズのレッドウルフだ。僕も、加持に命を預けよう。」

その声と同時に、レッドアタッカーズの傭兵達も加持に向かって片膝をつき、頭を下げた。

ジャツジマンとレッドウルフは、この場の誰もが認めるほどの凄腕だった。

その二人が揃って加持に命を預けると言ったため、最初に加持に食ってかかった男は蒼白な顔になっていった。

「俺も命を預ける。」

「俺もだ。」

雪崩を打ったように、ホール内の傭兵達は、加持に向かって忠誠を誓っていった。

そうして、最後には、加持に食ってかかった男も含めて、全員が加持に跪いた。

「皆さん、ありがとうございます！」

アスカは、深々と頭を下げた。

こうして、ゼーレを迎え撃つ準備は、着々と進んでいった。

第27話補完 戦いの序曲（後書き）

キャラ設定：ジャッジマン

謎の組織のエージェント。凄腕の傭兵でもある。加持とは面識がある。

第3新東京市のガードとゼーレ調査の責任者。

後に、第3新東京市のガードは、アメリカの傭兵部隊、レッドアタッカーズに任せることになる。

キャラ設定：レッドウルフ

アメリカの傭兵部隊、レッドアタッカーズの一員。

格闘技、兵器、爆弾、変装、諜報戦など、あらゆる分野のエキスパートであり、

唯一、ジャッジマンに勝ったことがあるほどの凄腕。

謎の組織に雇われて、アスカ達の身辺警護のために近付いてくるが、その年齢、性別など正体は一切不明

第28話 試写会

文化祭の2日前に、ようやく映画が完成した。シンジが怪我をするというというアクシデントがあったが、幸いにもシンジの分の撮影は終わっていたため、スケジュールには影響は出なかった。

そして、映画の最終チェックと称して、クラス全員で試写会を行うことになったのである。

場所は、映画上映を予定している場所と同じ体育館だ。

既にケンスケの手配によって、映画を上映するための機材の搬入や設置は終わっていた。

体育館の中では、既にクラス全員と、ミサト、リツコ、加持、ユキらがいる。

皆、試写会が始まるのを待ちわびているのだ。

「よし、試写会開始！」

ケンスケは上機嫌だった。そして、その合図で映画が始まった。

最初に、セカンドインパクトの映像が大写しにされる。

CGだが、かなりリアル感のある映像に仕上がっている。

南極に赤い光が広がり、その中からいく筋かの光る羽が生えてくる。ごく短い時間だが、光る巨人が映される。

そして、テロップが流れる。

「セカンドインパクト。」

それは、第1の使徒アダムと第2の使徒リリスから人類を守るため、引き起こされた災害。

だが、人類を影で操る謎の組織「ゼーレ」は、
真実を包み隠し、巨大隕石が原因だと発表し、世間を欺こうとした。
」

海に漂うカプセルが映る。

「南極にいて、唯一助かった少女、葛城ミサトは、

後に使徒から人類を守るために結成された国連所属の非公開組織「
ネルフ」の司令となる。」

カプセルからは、少女時代のミサトが現れる。

「そして、将来彼女の部下に、人類を救う救世主、
惣流・アスカ・ラングレーが作戦部長として迎えられる。」

壱中の制服を着たアスカが大写しになる。

そして、アスカの背後から、金色に輝くタイトルが浮かび上がる。

「救世主アスカ - 使徒&ゼーレVSエヴァンゲリオン - 」

タイトルが徐々に薄くなっていっただかと思うと、急に海に変わる。

そして、その海から突如として使徒が現れる。

その使徒に戦車隊が集中砲火を浴びせるが、使徒は悠々と上陸して
いく。

本物の使徒の映像を使っているため、物凄いド迫力である。

『急に現れた第3使徒。だが、使徒に通常攻撃は通用しない。』
テロップが流れる。そして、場面は急にネルフの発令所へと移る。
正面のスクリーンには、使徒の姿が大写しになっている。

「15年ぶりね。」

『ネルフ総司令葛城ミサト』というテロップが流れる。

「そうね。間違い無いわね。」

『ネルフ技術部長赤木リツコ』というテロップが流れる。

「じゃあ、そろそろアタシ達の出番ね。マコト、マヤ、エヴァの準備はいいわね。」

『ネルフ作戦部長惣流・アスカ・ラングレー』というテロップが流れる。

「はい、パイロットの用意は完了しています。」

『ネルフ作戦部部长代行日向マコト』というテロップが流れる。

「はい、エヴァンゲリオンの出撃準備も完了しています。」

『ネルフ技術部部长代行伊吹マヤ』というテロップが流れる。

「ミサト、ごっちはいつでもOKよ。」

「アスカは、ミサトの方を向いて叫ぶ。」

「分かったわ。もう少し待ってて。」

使徒に大型ミサイルが直撃するが、何ら効果が無い。次にN2地雷が爆発する。だが…。

「爆心地にエネルギー反応！」

『ネルフ作戦部青葉シゲル』というテロップが流れる。

「やっぱり、通常兵器は通用しないわね。」

アスカが腕を組んだ姿が大写しにされる。

「国連軍から、指揮権が委譲されましたっ。」

シゲルが叫ぶと同時に、ミサトが命令を下す。

「いいわよっ、アスカ！ やっちゃって！」

「オーケー！ シンジを呼び出して。」

アスカが言うなり、スクリーンの一部にシンジが映る。

『ネルフ作戦部所属パイロット碓シンジ』というテロップが流れる。

「アスカさん、準備出来てます。」

「よし、エヴァンゲリオン、発進！」

アスカの声と派手な身振りと共に、エヴァが射出される。そして、使徒と対峙する。

「シンジ、訓練通りにやって。緊張しないでね。」

「分かった。」

こうしてエヴァは、使徒に飛び掛かっていく。だが、使徒の手前の光の壁に激突した。

「シンジ、その壁を中和して、こじ開けて。」

その言葉通りに、エヴァは光の壁をこじ開けて、使徒の手を掴み蹴り飛ばす。

「良いわよっ！そのまま攻撃よっ！」

エヴァは使徒に馬乗りになって、もぎ取った使徒の胸の骨のようなものを何度も打ち下ろした。

すると、使徒はエヴァに張り付き、その身を丸めた。

「シンジ、使徒は自爆するかもしれないわよっ。直ぐに離れて！」

アスカの言葉にエヴァは使徒から離れたが、その瞬間、使徒は大爆発を起こす。

「自爆か。勝ったわね。」

アスカは腰に手をやり、胸を張った。アスカお得意のポーズだ。

「アスカさん、助かったよ。ありがとう。流石は、名作戦部長。」
爆炎の中からエヴァが現れ、シンジの顔がスクリーンに映った。

「はんっ！そんなこと言っても何も出ないわよ。」

「ちえっ。残念。」

そして、発令所内には笑い声が響いた。

急に場面は変わって、第壱中学校が大写しされる。

のどかな学校生活が映し出され、2年A組のメンバーの日常の行動が次々と映し出される。

ある者は笑い、ある者は怒り、ある者は騒ぐ。

その中で、アスカの大声が響きわたる。

「シンジ！今日は訓練よっ！忘れないでっ！」

「分かったよ、うるさいなあ。」

「うるさいとは何よっ！」

バチーンと音がしたかと思うと、シンジの頬に真っ赤な紅葉が出来

上がる。

「なんや、賑やかやな。」

『ネルフ作戦部所属パイロット鈴原トウジ』というテロップが流れる。

「いつものことですよ。」

『ネルフ作戦部所属パイロット洞木ヒカリ』というテロップが流れる。

窓の外を眺める綾波も映る。

『ネルフ作戦部所属パイロット綾波レイ』というテロップが流れる。

「平和だねえ。」

ケンスケが呟く。

その後も、アスカの素晴らしい作戦と類まれなる優れた指揮により、ネルフは次々と使徒に勝利していく。

第4使徒は、コアの存在に気付いたアスカの指示によりシンジがコアを攻撃して、使徒を倒す。

第5使徒は、バルーンダミーを出した途端加粒子砲で攻撃してきたため、アスカはエヴァ出撃を延期。

戦自から借りた陽電子砲でシンジが遠距離から狙撃し使徒を倒すが、零号機が初号機をかばい大破する。

その結果、綾波レイが大怪我をする。

第6使徒は、ドイツから運ばれてきたエヴァ式号機に襲いかかってきた所を、

初出撃のトウジとヒカリのペアが、アスカの見事な作戦によって倒す。

第7使徒は、シンジとトウジのペアで挑むが、敗北を喫す。

そして、アスカの発案によりシンジとトウジはユニゾン訓練を行い、見事再戦に勝利する。

第8使徒は、ヒカリが捕獲に成功するが、使徒が成長したため殲滅に移行する。

苦戦するヒカリに、アスカが冷却パイプを切って使徒の口の中に入れるよう指示し、見事勝利する。

だが、命綱が切れて沈んでしまい、初号機に乗ったトウジがヒカリを助ける。

以後も、アスカの見事な指揮と、シンジ、トウジ、ヒカリ、綾波といった

パイロットの頑張りによって、使徒に勝利を納めていく。

CGを用いて、若干事実と異なる使徒の最期を演出したりする。

最期の使徒を倒した後、闇の組織ゼーレの存在が明らかになる。

存在が明らかになったゼーレは、戦自を使って圧倒的な戦力でネルフを包囲する。

圧倒的な戦力差に絶望しかけ落ち込んだアスカとヒカリに、シンジとトウジが愛の告白をして、勇気を取り戻す。もちろん、使われた映像は、以前マヤが撮ったものである。

一方の戦自も、内部で反抗する者が現れ士気が下がる。一部若手幹部がネルフ侵攻に反対し、サボタージュをした。

実は、この出演者達は現職の戦自の兵士達である。

ケンスケの叔父は戦自におり、ケンスケがエヴァ絡みの映画を撮ることを知って、是非にと出演を頼み込んだのだ。

出演者達は、実際にネルフ侵攻に反対して一時監禁されていた者達ばかりであった。

なお、このことによって、後日戦自とネルフとの対立緩和に一役買うことになる。

このような状況下で、ゼーレとネルフの戦いが始まった。

当初は有利に戦いを進めていたゼーレだったが、満身創痍となった零号機の自爆攻撃により、ネルフが攻勢をかける。

だが、ゼーレが投入してきた量産型エヴァによって形勢は一挙に逆転し、

初号機によるサードインパクトが始まるうとしていたまさにその時、アスカが涙を浮かべて叫んだ。

「シンジ！愛しているわっ！死なないでっ！」

その声に我に返ったシンジは、戒めを振りほどき、量産型エヴァを一瞬にして倒す。
こうして、ネルフは一時の勝利を得た。

戦いの後、総司令のミサトは重傷を負って手術をするが、その甲斐もなく心臓の鼓動が停止する。
そこへ顔面蒼白となった加持が現れ、号泣し、ミサトにキスをする。

『この時、愛の力が奇跡を呼んだ。』というテロップが流れる。

「かつらぎー！」

加持は、大声で叫んだ。

「もう、どこにもいかないで……。」

ミサトの目も涙でくしゃくしゃだった。

「もう、離すもんか。葛城、結婚してくれ。俺は、お前のことを愛しているんだ。」

それを聞いたミサトの目は、大きく見開かれたが、すぐに小さな声で返事をした。

「うん……。うれしい……。」

ミサトの顔は、真っ赤だった。

「パチパチパチパチ…」

周りにいる者は、祝福の拍手を惜しげなく送った。

さらに場面が変わって、夜のバルコニーにアスカとシンジが立っている。

シンジは、意を決したようにアスカにプロポーズする。

これに対して、アスカはシンジに3つの誓いを立てさせる。

シンジが誓い終わると、二人は熱い抱擁を交わし、熱情的なキスをした。

「アスカ、愛しているよ。これからも、アスカを守るために、命をかけて戦うよ。」

「うれしい…。アタシも頑張るわ。二人で戦いましょう。」

再び二人は熱いキスをする。

『こうして、悪の組織「ゼーレ」の侵攻を防いだネルフだが、これからも戦いは続く。愛するシンジと力強い仲間達の助けを借りて、明日もアスカは戦い続ける。』

人類の平和と未来を守るために…。』

テロップが流れると同時に、英語の歌が流れる。今人気急上昇のシンガー、セイレーンの歌だ。そして、アスカとシンジの二人は、影となり、闇に消えていく。

『これは、一部映画用に脚色しているが、ノンフィクションである。ゼーレとネルフの戦いは、今も現実に続いている。アスカ、シンジ、トウジら少年少女達は、今も戦い続けているのだ。人類の平和と未来のために。』

そのテロップがしばらく流れると歌が終わりを迎え、映画は終了した。

「すっごくいい！感激！」

「あの使徒って、凄いで迫力だったな。」

「エヴァも、物凄く迫力があつたよなあ。」

「アスカさんって、格好良かったわねえ。」

「碓君も、格好良かったわ。」

クラスメイト達は、感動と感激に包まれていた。

だが、例外もいた。

「ア、アスカにやられた…。まさか、公開するなんて…。でも、アスカとの仲が公認になったから、良しとするかな。」

「おのれ、惣流め。やりおったな。ケンスケも同罪や。」

「きゃっ、恥ずかしい。でも、鈴原の恋人役で、良かったかなあ。」

「げっ。あれって、この映画に使う奴だったの。忘れてたあ。」

「くっ。この俺が泣く姿を撮られるなんて、不覚だ。」

「相田君って、名監督だったのね。」

「あら、あれが有名な、シンジ君の告白シーンなのね。」

「みんなが感激してくれて、嬉しいなあ。」

「げっ。アタシ、愛しているわっ、なんて言っちゃったんだ。恥ずかしい。」

こうして、とにもかくにも映画の試写会は、無事に終わった。

その後、公式のネルフ組織図が配られた。

現役のエヴァのパイロットは、シンジとトウジの二人だけとなって

いた。

特務機関ネルフ組織図

総司令官：碓ゲンドウ（映画では葛城ミサト）
副司令：冬月コウゾウ（映画では未登場）

世界主要国に支部有り。

本部組織図

・総務部 総務部長：冬月コウゾウ（副司令兼務）

・作戦部 作戦部長：葛城ミサト（映画では惣流・アスカ・ラン
グレー）

部長代行：日向マコト チーフ：青葉シゲル

Evaパイロット チーフ：碓シンジ、サブ：

鈴原トウジ

・技術部 技術部長：赤木リツコ

部長代行：伊吹マヤ

・広報部 広報部長：マリス・アマリリス（映画では未登場）

グレー

チーフ：惣流・アスカ・ラン

・保安部

保安部長：真田ヒロシ（映画では未登場）

第28話 試写会（後書き）

あとがき

ようやく映画が完成しました。トウジがヒカリに告白したシーン、加持がミサトに告白したシーン、シンジがプロポーズしたシーンが映画の中で使われました。

第28話補完 ガード

ネルフ内の会議室に、加持、ジャッジマン、レッドウルフが集まっていた。

チルドレン達のガードを強化するためである。

最初にジャッジマンが口を開いた。

「既に、私の部下の女性が2名、教師として第壱中学校に入っている。

それ以外に、明日にでも女生徒1名、男生徒2名も転校させる予定だ。

これに加えて、女生徒を各クラスに1名ずつ計4名を連絡要員として送り込むつもりだ。

学校内では、これ位で十分だろう。」

「ほう、大したもんじゃないか。」

加持は微笑む。だが、目は笑っていない。

あまりの手際の良さに、警戒しているのだ。

加持は、『盟主』がアスカをガードするよう指令を出していることを知らないため、

何か裏があると勘繰ったのだ。だが、ジャッジマンは気付かないフリをした。

「こっちは、特に頼まれていないから、何もしていないけど、どうするの、加持さん。」

今度は、レッドウルフが口を開いた。

「そうだな。シンジ君、トウジ君、アスカに、各2名ほど、ガードを付けて欲しい。」

「惣流アスカに、ガードは必要ないんじゃないか。」

「アスカは、やりすぎることがあるのさ。だから、そのための歯止めも必要なんだ。」

「あつ、なるほどねえ。それなら分かるや。了解した。早速今日中に人選して、明日にでもガードを付けるよ。」

「ああ、頼む。それ以外にも、頼みがあるんだが。」

「いいよ、言ってみて。」

「作戦部長と技術部長にもガードを頼みたいんだが。」

「ああ、加持さんのフィアンセとその友達だね。良いよ。2人位で良いかい。でも、学校の中と、ネルフの中はどうするの?」

「学校にいる時は、学校の外で待機していて欲しい。アスカ達のこともあるし。」

「ネルフ内にいる時も、同様にネルフ外で待機して欲しい。」

「ああ、良いよ。」

「悪いな。感謝するよ。」

だが、加持がそう言った瞬間、レッドウルフの携帯電話が鳴った。

「ちょっと、ごめん。」

レッドウルフは加持達に背を向けると、電話の相手からの報告を聞いていた。

そして電話が終わると、加持の方を向いた。

「ねえねえ、加持さん。」

惣流アスカ達には、ジャツジマンの部下とワイルドウルフのガードが張りついているよ。

葛城さん達にもね。それなのに、まだ必要なのかな。」

「お、おい。それは初耳だぞ。」

「しかも、彼らはネルフに入れるパスを持っているみたいだよ。ねえ、ジャツジマン。」

それを聞いた加持はジャツジマンを睨むが、ジャツジマンは素知らぬ顔をした。

「おい、ジャツジマン。どういうことだ。」

「パーティーの時に言ったろ。お前の彼女は狙われているんだ。守って何が悪い。見殺しにした方が良かったのか。」

それを言われると、加持も弱い。それ以上は、責められなくなる。

「ワイルドウルフは、おそらく惣流アスカの指図だよ。そう考えるのが自然だね。」

フィアンセが襲われたのが、よっぽど堪えたみたいだね。」

「アスカか。うん、後で聞いてみるか。で、一体何人付いているんだ。」

「えくと、ワイルドウルフは、惣流アスカ達パイロット3人と、作戦部長、技術部長、洞木ヒカリとその姉妹、森川ユキとその弟妹、相田ケンスケ、それに加持さんに各2人付いているね。」

「お、おい、俺にもか。」

「ああ、そうだよ。」

それに、ジャツジマンの方は、惣流アスカ達パイロット3人と、作戦部長、技術部長、洞木ヒカリ、森川ユキに、これまた各2人だね。これ以上付けてもいいのかな。」

「いや、もう良い。」

加持は、げんなりしたように言った。だが、ジャツジマンが再び口を開いた。

「いや、良くないな。俺の部下達は、学校以外からは手を引く。その後をレッドアタッカーズが引き継いで欲しい。」

「そうかい、僕はいいけど、加持さんはどうかな。」

「…任せる。」

そう言って、加持はうなだれた。

自分の知らない所で話が進みすぎているのに、少々うんざりしたからだ。

これで、アスカ達には、常時ワイルドウルフのガードが各2人、レッドアタッカーズのガードが各2人、計4人付くことになる。加えて、学校内には、チルドレンのガードが大人2人、子供3人付くことになった。

そして、次は第3新東京市の防備とゼーレの情報収集に話が移った。

一方その頃、とある病院で大勢の中学生が入院していた。皆、アスカの中学の生徒達だ。皆体に包帯を巻いていた。その中には、森川ユキの友達の佐藤ミキもいた。佐藤ミキは、シンジを公園に呼び出した少女だ。

「あゝあ、これで1カ月は、学校に行けないなあ。」

ミキはぼやいた。

「文句言わないの。田中君なんか、両手が複雑骨折で、3カ月は入院だって言うし。」

ユキは、そう言ってなだめた。

「そうよねえ。1カ月の入院で済んだことに感謝すべきかもね。」

そう、シンジに天誅を加えようと企てた者達は、皆不慮の事故などに遭って、入院していたのだ。

しかも、全員が事故の原因を決して言わなかった。

後日、ネルフが少年達を襲ったという噂が流れた。だが、事実はネルフは関係無く、裏でアスカの意を汲んだワイルドウルフが動いていた。

ミキもアスカの呼び出しを受けて、『腕の一本も、もらおうかしら。』と言われ顔面蒼白になったのだが、ユキが何とかとりなして、怪我したフリをして1カ月入院するということまで許されたのだ。

アスカは、シンジを痛めつけた連中を一人残らず病院送りにすることにした。

アスカは、裏でゼーレが動いていると考えたのだ。だとすれば、今後素人でシンジを襲おうと考える者が出ないように、徹底的に叩く必要があったのだ。

碇シンジに手を出すと痛い目に遭うことが分かれば、普通の人間ならば同じ事はしない。しかも、単に手引きした者でさえも病院送りになるとすれば尚更なのだ。

だから、アスカは必ず佐藤ミキを病院送りにする必要があると判断したのだ。

アスカは、相手が素人であろうと甘くはなかった。プロも恐ろしいが、素人も数が多いと脅威となる。

対応を誤れば、シンジの命を危険にさらすことになるからだ。事実、高校生達がやり過ぎていれば、シンジは亡き者になっていた可能性もあるのだ。

そのため、独断でワイルドウルフを使って事の真相を探り、シンジ達のガードもさせることにしたのだ。

結局、ゼーレは無関係であることが分かったのだが、真相を探る過程で相手を徹底的に痛めつけ、

結果として悪巧みに加担した者は、全員病院送りになったのだ。

こうして、シンジを襲った者、襲わせようと企てた者は、皆病院送りとなった。

このため、以後シンジを襲おうと考える者は皆無となった。

第28話補完 ガード（後書き）

あとがき

アスカは、シンジや友人を守る為に、加持に内緒でワイルドウルフとも手を結びました。

アスカには、ワイルドウルフとのつながりがあったから、そんなことが出来たのです。

そのつながりとは…。次話以降に明らかになっていきます。

第28話補完その2 スパイ疑惑2

ネルフ内の司令室に、ゲンドウ、冬月、加持の3人が集まっていた。

「どうだね、加持君。アスカ君の様子は？」

冬月が少し不安そうに尋ねる。

「正直言つて、私は、アスカがスパイなんて有り得ないと思つていました。」

しかし、先日の一件以来、不安が増してきているのも事実です。」

先日の一件とは、シンジが襲われた時のことだ。

加持がかけつけた時、アスカは多くの高校生達を叩きのめしていた。

「アスカが叩きのめした高校生達は、例外なく、両手両足の骨が折られていました。」

おそらく戦っている最中に折ったものと思われませんが、これは、私でも困難なことです。」

どうもアスカは、私も知らないような特殊訓練を受けているとしか思えません。」

「そうかね。では、アスカ君はやはりスパイの可能性が高いか。」

「しかし、それにしても腑に落ちないことが多いのも事実です。アスカは、結局ドイツ支部に戻らない選択をしました。」

それに、先日の一件もシンジ君を助けようと思つてのことです。アスカがスパイならば、そのような事はしないはずです。」

「ふむ。しかし、我々を安心させようと思つてのことかもしれんな。」

「ならば、他の方法があるはずです。」

「アスカは、シンジ君が襲われて半狂乱になつて高校生達を叩きのめしたのです。」

「それが何を意味するかはお分かりでしょう。」

「そうだな。私もパーティーでのアスカ君のあの笑顔が、偽物とは思えないのだよ。」

「アスカは、間違い無くシンジ君のことを好きか、それに近い感情を抱いています。」

「万一、スパイだったとしても、少なくともシンジ君がこちらにいる限りは、」

「アスカは裏切るようなことはしないでしょう。」

「だが、仮に、アスカ君がスパイだとして、どこのスパイになるんだね？」

「ゼーレかドイツ支部のスパイだったが、サードインパクトか或いはその前後を境にして」

「考えを改めたというのが、一番可能性としては高いでしょう。」

「それならば、今後は安心出来ます。」

「なるほど。」

「次に、今は迷っているという可能性もあります。」

「こつちに付くか、ゼーレに付くか、未だに心が揺れ動いている可能性が。」

「それならば、危険だな。」

「最後に、全く別の組織のスパイという可能性です。」

「アスカは、どうもレッドアタッカーズやワールドウルフと、独自の連絡ルートを持っているようなのです。」

「ですから、その線も怪しいと思います。」

そこまで加持が言ってから、ゲンドウが初めて口を開いた。

「傭兵達を集めたのは、アスカ君だ。」

彼らには、ネルフからは1円たりとも金を渡していない。

だから、独自の連絡ルートがあっても不思議ではない。」

だが、これには加持も冬月も驚いた。

「碇よ、それは初耳だ。では、一体彼らは何故やって来たのだ。傭兵ならば、金無くしては動かないはずだぞ。」

冬月の疑問に、加持が答えた。

「副司令。それはおそらく、アスカの個人資産から出しているのでは。」

私は、本人から聞いたことがあります。アスカには100億円を超える資産があるそうです。」

それだけあれば、傭兵を雇うことも可能です。」

「何っ。アスカ君は、自分の資産をつぎ込んでいるというのか。」

だとすると、アスカ君がスパイであるという可能性は、かなり低くなるぞ。」

少なくとも、ゼーレのスパイではあるまい。」

「…そうだな。全てはゼーレとの決着がついてからだ。私もアスカ君を信じたい。」

「碓よ、それは、シンジ君がアスカ君のことを好きだからなのか。」

「否定はしませんよ。ですが、それだけではないのです。今は言えません。」

こうして、アスカの扱いは決まった。

少なくとも、ゼーレのスパイであるという疑惑は可能性が低いと判断された。

そうして、当分の間、アスカは今まで通り何の制約も無く行動させることになったのである。

この瞬間、ゲンドウと冬月は、ネルフの未来をアスカに賭ける道を選んだのであった。

第28話補完その2 スパイ疑惑2（後書き）

あとがき

怪しい動きをする一方で、ネルフのために働くアスカに、ゲンドウや冬月も一抹の不安を抱きながらも、アスカに賭けることになりました。

第29話 決戦！第壹中学校（前編）

2月12日の金曜日、シンジ達のクラスに、転校生がやって来た。男2人に女4人だった。

うち4人 - 最初に紹介される4人 - がジャッジマンの組織の人間である。

しかも、全員が他支部のチルドレン候補生であった。

「喜べ、男子、そして女子。転校生が大勢来たわよ。」

ミサトは、6人もの転校生が来たので、ウキウキしているようだ。これで、当分の間、話題には事欠かないだろう。

「はい、じゃあ皆さん。順番にあいさつしてね。」

ミサトに促されて、転校生達は次々とあいさつした。

「アリオスです。よろしく！ワシントンから来ました。」

アリオスは、アメリカ支部から来た。

蒼い瞳で茶髪、長身だが体格のがっちりとした白人の少年だった。ハキハキとした感じで、好感が持てる。実は、トウジのガード役である。

（わあ、格好良いな。女の子にもてそう。でも、さわやかな感じで、良い人みたいだ。）

シンジは、次々と転校生の感想を頭に浮かべた。

「マックスといます。ブラジリアから来ました。皆さん、よろし

くお願いします。

僕の母は日本人なので、日本語はばっちりです。」

（線が細いなあ。でも、何か優しそうな人だ。）

マックスは、ブラジル支部から来た。線の細い優男で、メガネをかけている。

黒い瞳に青い髪で、一見すると白人に見える。シンジのガードが担当だ。

「ミリアだ。ブラジルから来た。よろしく頼む。日本語は得意ではない。以上。」

（うっ。以前のアスカよりも性格がきつそうな感じだなあ。大丈夫かなあ。）

ミリアも、ブラジル支部から来た。

標準よりもやや大きめの体格で、蒼い瞳に緑の髪で白い肌をしている。

ややキツイ目付きではあったが、転校生の中では、一番の美人だった。

アスカのガードが担当だ。

「キャシーです。マサチューセッツから来ました。皆さん、よろしくね。」

（この娘は優しそうだ。アスカ達ともうまくやっていけそうな感じかな。）

キャシーは、アメリカ第3支部から来た。蒼い瞳に短い金髪、スリ

ムな白人の少女だった。

活発な感じで大きなメガネをかけており、美人とは言えないがスタイルの良さと

優しい感じの笑顔がそれをカバーして余りある。

アスカの髪を短くして、金髪に染めて、メガネをかけたような感じだ。

アスカとジャツジマンとの連絡が主な任務だ。

「ハウレーン・プロヴァンスだ。パリから来た。よろしく頼む。」

（この娘も性格がきつそうだな。でも、スタイルがいいなあ。背も高いし。）

ハウレーンは、フランス支部から来た。蒼い瞳にピンクの髪、長身でスリムな白人の少女だ。

ミリアほどではないが、目付きが鋭い。

美人度はミリアよりも劣るが、格好良いお姉様という感じで、女性からの人気も出そうだ。

ハウレーンは、フランスの傭兵組織、ヴァンテアンとネルフの連絡役だ。

「マリア・カスタードですつ。ハンブルグから来ました。皆さん、よろしくね。」

（この娘は、ドイツから来たのか。アスカのことを知っているかもしれないなあ。後で聞いてみようかな。）

マリアは、ドイツ第2支部から来た。蒼い瞳に青い髪の白人の少女だった。体型は標準並。

大人しそうな感じで、決して美人とは言えないが、人懐こい笑顔が

印象の少女だ。

マリアは、ドイツの傭兵組織、ワイルドウルフとネルフの連絡役だ。アスカとも顔見知りで、加持の女性関係を調べる手伝いをしたこともある。

アスカはその時のついで、マリアを通じてワイルドウルフと連絡を取っていた。

男子生徒の人気はミアとハウレーンに分散し、女子生徒の人気もアリオスとマックスに分散した。

なお、ハウレーンは一部女子生徒に人気を博した。

こうして、シンジ達は新たな仲間を迎えたのだった。

転校生達は、休み時間になると周りから質問攻めにあっていた。

特に男子生徒はミアとハウレーンに、女子生徒はアリオスとマックス群がっていた。

そして、マリアとキャシーは、アスカの側に来っていた。

「お久しぶりね、マリア。例の件、ありがとう。助かったわ。」

例の件とは、ワイルドウルフと話をつけるのに、マリアの助けを借りたことである。

「いいえ、どういたしまして。アスカ、お久しぶりね。」

マリアはそう言うと、にっこりと微笑む。

「それに、キャシーね。会うのは初めてよね。」

アスカは、今度はキャシーの方へ話しかけた。

「そうね。初めまして、アスカさん。」

「アスカでいいわ。そうね、とりあえず、皆に紹介しようかしら。」

アスカは、シンジ達を呼び寄せた。

「みんな、聞いて。こっちの青い髪の方がマリア・カスタード。

アタシがドイツに居た時からの友人で、趣味は機械いじりとパソコンっていう、

ちよっと変わった趣味だけど、優しくて良い娘よ。」

「マリア・カスタードです。よろしくお願いします。」

「こっちが、キャシーよ。最近ネルフと手を結んだ組織の、連絡員なの。

見かけは優しそうだけど、喧嘩はアタシと同じ位強いと思って良いわよ。多分だけどね。」

「キャシーです。皆さん、よろしくね。でも、アスカさんって、喧嘩が弱いよね。」

私と同じ位だなんて、弱いってことですよ。」

「まあ、そういうことにしとくわ。じゃあ、こっち側ね。」

この大人しくて優しそうなのが碇シンジ、アタシのフィアンセよ。」

「碇シンジです。よろしくお願いします。」

(良かった。アスカの紹介が無難で。)

シンジは、何て言われるのか、内心ひやひやしていたが、結局杞憂に終わった。

シンジは、『ポケットとした奴』とか『弱っちい奴』と言われるかもしれないと考えていたのだ。

そんなシンジの心の葛藤に気付かないアスカは、気にせず続けて言った。

「で、こっちがアタシの親友で、料理が上手な洞木ヒカリよ。」

(やっぱり、洞木さんは親友か。そうだよな。)

「洞木ヒカリです。仲良くしましょうね。」

「こっちがヒカリの恋人で、シンジと仲の良い、鈴原トウジ。」

(えっ、トウジの紹介も普通だ。どうしたのかな。アスカらしくないよ。)

「鈴原トウジや、よろしゅう頼むわ。」

「最後に、アタシの下僕で、写真好きでミリタリーオタクの相田ケンスケ。」

(うっ、ケンスケだけ差があるなあ。でも、ケンスケはよく怒らないよなあ。)

「相田ケンスケです。よろしくお願いします。」

「じゃあ、シンジ。アタシ達、女4人でちょっと一回りしてくるわ。」
「
そう言うと、アスカとヒカリは教室の外へ出て、マリアとキャシーを連れ出した。
おそらく校舎内を案内するのだろう。」

アスカの姿が見えなくなると、シンジはケンスケに謝った。

「ごめんね、ケンスケ。アスカが変なことを言って。」

「いいよ、シンジ。気にするなよ。嘘は言っていないし、俺は気にしないよ。」

ケンスケの優しい言葉に、シンジはホッとした。

さて、お昼はいつものメンバーに加えて、マリアがいた。
ちなみに、他の転校生達はハウレーンを除いて、固まって食べていた。
ハウレーンは、お姉様好きの女子生徒に囲まれて、お昼ご飯を食べていた。

「ユキ、こちらがマリア・カスタードよ。」

「初めまして。マリア・カスタードです。よろしく願いします。」

「で、こっちが森川雪。アタシの仲の良い友達なの。」

「初めまして。森川雪です。ユキって呼んでください。」

「じゃあ、私もマリアって呼んでね。」

こうして、マリアはアスカ達のグループの中に、違和感無く溶け込んでいった。

お昼ご飯を食べ終わると、キャシーが転校生達を引き連れてやって来た。

そして、初対面の者もいるため、お互いに一通りあいさつをしていた。

シンジのグループが6人＋マリアで、キャシーのグループが男2人、女5人に女教師2人の計9人であったため、大人数でのあいさつになっってしまった。

なお、ここは一応学校であるため滅多な話が出来ないということで、続きはネルフ内ということになった。

もっとも、それは表向きの理由で、きな臭い話をヒカリとユキには聞かせたくないという

アスカの思いやりであった。

ここで、ケンスケにとって嬉しい出来事が起きた。

何の気まぐれか、アスカはケンスケに皆の写真を撮るようにと言っ

ただ。
ケンスケは、ニコニコしながら皆の写真を撮りまくっていった。

放課後になると、シンジ達はネルフへと向かった。

他のクラスは、明日の文化祭の準備で大忙しだったが、シンジ達のクラスは昨日の試写会の時点で、

準備は全て終わっていたため、特にやることが無いのだ。

ポスター貼りなども全部外注したため、生徒のやることは殆ど無かった。

映画の上映会場となる体育館の飾りつけを、月曜日から皆で放課後にやる位ですんでいたのだ。

今日も飾りつけが好きな者が10人位居残りする予定だったが、それも夕方までの話である。

ネルフに入ると、アスカはあらかじめ予約していた会議室へと向かった。

当然のように、シンジも付いていく。

そして、今後予測される事態について、アスカは説明を始めた。

明日と明後日の文化祭で、エヴァンゲリオンと使徒を題材にした映画を上映する。

その中で、ゼーレの存在についても暴露することになる。

このため、早ければ日曜日にゼーレの手が伸びてくる可能性がある。

その時、真つ先に狙われる可能性があるのが、エヴァンゲリオンのパイロットであるシンジとトウジである。

アスカもシンジのフィアンセということで、狙われる可能性が高い。また、3人の周りの人物も狙われる可能性がある。

それを防ぐには、今のネルフの陣容では心もとない。

そこで、ジャツジマンやレッドアタッカーズ、ワイルドウルフの力を借りて、ガードする必要がある。

基本的にはワイルドウルフの2名が側でガードし、レッドアタッカーズの2名がやや離れて守る。

それに加えて、学校ではジャツジマンの部下が3人をマンツーマンでガードし、

女教師2名はミサトとリツコをガードする。

守る対象は、アスカ、シンジ、トウジの3人と、その家族・友人である。

具体的には、ミサト、リツコ、加持、ヒカリ及びその姉妹、ユキ及びその弟妹、トウジの妹、ケンスケの計14人だ。

このため、ガードする人間は64人+5人にその交代要員を併せ、100人以上にもなる。

だから、組織の枠を超えて連携を取る必要があるのだ。

それ以外にもゼーレが何らかの破壊工作を仕掛けてくる可能性がある。るので、これにも対処する必要がある。

また、最終的には、ゼーレが再度軍事侵攻してくる可能性が高い。

その時は最小限の人員のみガードに当たり、それ以外は敵の軍事組

織と交戦することになる。

侵攻時期については、概ね1カ月以内と予想される。

したがって、遅くとも3月一杯がガードする期限となるはずであるから、その間は気を引き締めてほしいこと。

以上のことを、アスカは皆に説明した。

「質問は、何かある？」

アスカが最後に質問の時間を取ったところ、キャシーが尋ねてきた。

「あの、鈴原君の妹って、話を聞いていないんですけど。」

確か、ガードの対象は13人だと聞いていますが…。」

それを聞いたアスカは驚いた。

「え〜っ。じゃあ、鈴原の妹って、誰もガードに付いていないの？」

「そうなるかしら。」

「あっちゃあ〜。どこで漏れたのかなあ。いいわ。」

今からでもいいから、ガードをつけてね。」

ほら、今すぐに電話して。マリアもお願いね。」

アスカに急かされて、キャシーとマリアはそれぞれの組織に電話して、

至急鈴原の妹にもガードを付けるように要請した。それが終わったのを見計らって、アスカが尋ねた。

「あなた達、加持さんとも打ち合わせをしたんでしょ？」

「ええ。でも、加持さんは、ガードの対象は13人だって言っていたそうですけど…。」

キャシーは言いよどむ。

「まったく、加持さんたら、しょうがないわねえ。

これから、その手の打ち合わせには、シンジも参加させようかしら。」

(そうだよ。 僕も賛成だ。)

シンジが強く頷くと、アスカがこちらを見に来た。

「じゃあ、これからはそういうことで、よろしくね。後、他に質問はあるかしら。」

アスカが尋ねたが、皆飲み込みが早いのか、もう質問は出なかった。

「じゃあ、良いわね。ガードは既に始まっているわ。

ワイルドウルフは先週の金曜日からだけだね。じゃあ、よろしくお願ひするわね。

明日からは、いつ戦争になってもおかしくないから。」

その言葉を最後に、皆解散した。

翌日、シンジはアスカ、ヒカリ、ユキ、トウジ、ケンスケらと一緒にマンションを出た。
現在、ヒカリとその姉妹は、シンジと同じマンションに住んでいる。ケンスケも同じだ。

ヒカリもケンスケも親が仕事で忙しいため、帰りが遅いことから、アスカがマンション内に部屋を用意するように取り計らったのだ。

表の理由は、映画製作に便利ということがあったが、裏の理由としては、ガードしやすいということがあった。
ガードする対象が散らばると、それだけガードする人間も散らばるため、効率が悪くなるのだ。

このため、ガードの対象となる人物は、ユキを除いて全員このマンションに住んでいる。

なお、人数が多いため、朝食は分かれて食べている。
シンジ達の家にはユキとケンスケが来て食べており、ヒカリの部屋にはその他のメンバーが集まって食べている。
これも、ヒカリとトウジを一緒にというアスカの思いやりと、お料理上手なユキとヒカリを分けるといふ、現実的な必要性から来たものだ。

もともと、シンジも料理が得意なのだが最近ユキにやってもらい、シンジが料理する機会はぐっと減った。
シンジの負担をなるべく減らしたいというアスカの考えで、料理はユキが殆どやっている。
シンジが料理するのは、休日位である。

ユキも、アスカ達の食べるものを料理出来ることは嬉しく、かつアスカからもらうアルバイト料が結構高額なので、かなりユキの家計は助かっていたりする。

「行つてきまゝす。」

皆が声を揃えて言うと、リツコとミサトも

「行つてらっしゃい。」

と言って送り出した。リツコ達は車通勤であるため、少し遅く家を出る。

家を出ると、最初はシンジとアスカ、トウジとヒカリ、ケンスケとユキがそれぞれペアになって歩いていく。

そして人通りが増えてくると、男同士と女同士に分かれるのだ。

シンジは、歩いているうちにとあるポスターが目に入った。

（あれは、アスカのポスターじゃないか。）

「あれ見てよ。映画のポスターが張つてあるよ。」

シンジの言葉に皆歩みを止めて見ると、ネルフの制服に身を包んだアスカが、手を腰に当てて立っているポスターが見えた。

その横には、ヒカリ、レイ、ミサト、リツコも立っている。

背景には、3体のエヴァが並んで映っている。

「何じゃこりゃあ。男が映ってないんか。」

「むさ苦しい男は、必要ないのよ。この方が客が集まるのよ。」
アスカの言葉にヒカリとユキも頷いたため、男性陣には返す言葉は無かった。

初日は、10時から映画上映を始める。

次は12時から、14時から、16時から、合計4回の上映である。

「相田、準備はいいわね。」

「ああ、惣流、大丈夫さ。昨日も確認したから、OKさ。」

ケンスケは胸を張る。

この映画は、ケンスケにとって、監督処女作になるため、かける意気込みも半端ではない。

アスカから資金面は心配ないと言われていたため、高額な機材を惜しげも無く使っているのだ。

特に音声関係はお金をかけた。

スピーカーも高性能なものを通常の映画館よりも多く用意した。どの席に座っても、臨場感溢れるサウンドが聞こえるようにだ。

椅子もゆったりとした物を選んだ。

このため、パイプ椅子なら1000人近く座れる広さがある体育館であったが、

500人位しか座ることが出来なかった。

心配された観客だが、予想以上の人出で、第壱中学校生徒は後日見られるからという理由で外部の人間を優先したにもかかわらず、第1回目の上映から満席となった。

あぶれた人には整理券を配って、次回上映の10分前に集合するように伝えた。

「ふふふつ、大成功ね。」

アスカは、得意気に言った。

結局、第2回目の上映時に長蛇の列が出来たため、立ち見も可にして700人位詰め込んだのだが、それでも客をさばけず、18時と20時の2回も追加上映をしたのだ。

「良かったね、アスカ。今日は満員御礼だね。」

（笑っているアスカって、やっぱり可愛いや。）

シンジも、アスカが喜んでいるのを見て良い気分だった。

やっぱりシンジはアスカのことが好きだから、アスカの笑顔を見れるのは、嬉しいことなのだ。

だが、二人で良い雰囲気だったが邪魔が入った。ミサトである。

「ちょっと、アスカったら、こっちに來なさいよ。シンちゃんもよ。」

「

「はい。」

二人は元気よく返事をして、リビングへと戻った。

今日は、マコトの誕生日なので、簡単なパーティーを開くのだ。もう、19時近い。

間もなく主役のマコトが、ネルフから直接来ることになっている。

いつものメンバー以外に、シゲルやマヤも呼んでいた。

一方、ケンスケだけは映画の上映回数が増えたため、まだ学校にいる。

それ以外のメンバーは、16時の回が始まったら切り上げて家に戻っていた。

シンジとアスカは、学校でも家でもパソコンにかじりついていたが、ようやく一息つくことになる。

「さて、ヒカリとユキが作った、おいしい料理を食べましょうか。」

そう言うと、お腹がキューと可愛く鳴ったため、アスカの顔は真っ赤になった。

シンジは笑って良いのか、知らん顔をしているのか、ちょっと困ってしまった。

その夜、文化祭初日の映画上映が終わった後、第壱中学校の明かり

は全て消え静寂が支配していた。
その中を音もなく進んでいく集団がいた。

その集団は、10人位であろうか。

上はセーターにジャンパー、下はジーパンという格好であった。
それが1人のリーダーの指図で、学校内の1カ所を目指していた。

「プシューン。」

静寂を破るかすかな音がしたかと思うと、男達はさつと散開した。
1人だけ地に伏していたが、ある者は校舎の影へ、ある者は車の影
へと身を隠した。

「プシューン、プシューン。」

あちこちでかすかな音がして、その度に男達の数は減っていった。
最後の男が倒れるのに、ものの10分もかからなかった。

「ふん、あつけないな。」

校舎の影の中から一人の少年が現れた。レッドウルフである。

「こいつらをアジトに連れて行け。洗いざらい喋らせるんだ。」

レッドウルフは部下達に指示を与えると、再び闇の中に消えていっ
た。

そう、中学校に潜入して捕まったのは、ゼーレの作業員達である。

映画のことを察知して、妨害工作を仕掛けようとしていたのだ。

さすがにゼーレと言うべきか、他の組織が市内に入る前に撃退され

るのに対して、ゼーレの職員達は、市内に易々と侵入してきたのだ。

既に、この中学校も戦場と化していた。

第29話 決戦！第壱中学校（前編）（後書き）

キャラ設定：アリオス・テオマン

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、アメリカ支部に所属している。市立第壱中学2年A組に在籍する。蒼い瞳で茶髪、長身だが体格のがっちりとした白人の少年。ハキハキとした感じで、好感が持てる。ジャツジマンの部下でトウジのガード役。

キャラ設定：マックス（マクシミリアン・ジーナス）

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、ブラジル支部に所属している。市立第壱中学2年A組に在籍する。戦闘機乗り。線の細い優男で、メガネをかけている。黒い瞳に青い髪。母は日本人、父は白人のハーフ。ジャツジマンの部下でシンジのガード役。

キャラ設定：ミリア

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、ブラジル支部に所属している。市立第壱中学2年A組に在籍する。戦闘機乗り。標準よりもやや大きめの体格で、蒼い瞳に緑の髪で、白い肌をしている。ややキツイ目付き。ジャツジマンの部下でアスカのガード役。ミラクル5の一員でもある。孤児で親の顔は知らない。

キャラ設定：ハウレーン・プロヴァンス

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、フランス支部に所属している。
市立第壱中学2年A組に在籍する。
蒼い瞳にピンクの髪、長身でスリムな白人の少女。フランスの傭兵
部隊、ヴァンテアンに所属。

キャラ設定：マリア・カスタード

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、ドイツ支部に所属している。市
立第壱中学2年A組に在籍する。蒼い瞳に青い髪の白人。体型は標
準並。大人しそうな感じで、決して美人とは言えないが、
人懐こい笑顔が印象のちよっと可愛い雰囲気少女だ。傭兵部隊ワ
イルドウルフに所属。
ミラクル5の一員でもある。なお、父のウォルフは、ワイルドウル
フの隊長である。

設定：ミラクル5

MAGIへのハッキングに成功した、伝説のハッカーグループ。
アスカ、サーシャ、マリア、ミリア、ミンメイの5人

あとがき

第3部で活躍する(?) 予定のチルドレン候補生達を出しました。
一気に出すと、名前を覚えきれないと思い、小出しにすることにし
たのです。

でも、これっきり二度と出て来ないキャラもできるかもしれませんが
…。

一方、映画上映と共に、シンジの通う中学校もゼーレの侵入を許
してしまいます。

これにネルフはどう対抗していくのか。

最近、良いところ無しのシンジに活躍の場面はあるのでしょうか。

第29話補完 嵐の前

ネルフ内の会議室に、加持、ジャッジマン、レッドウルフが集まっていた。

文化祭初日の映画上映が終わった後、ゼーレが仕事を仕掛けてきた件について、協議するためである。最初にジャッジマンが口を開いた。

「この第3新東京市に、10グループ、約100人が夜陰に乗じて侵入を試みた。

うち3グループは、私の部下が都市外にて補足し撃退した。

3グループはレッドアタッカーズが迎撃し、敵の身柄を確保した。残る4グループについては、残念ながらロストした。」

次はレッドウルフだ。

「3グループのうち、1グループは、第壱中学校で捕らえた。残り2グループは、ネルフの近辺で捕らえたよ。

今、敵の目的を探っているけど、やはり口は割らないねえ。」

最後は、加持である。

「残り4グループのうち、2グループはワイルドウルフが捕らえている。

後の2グループについても、ヴァンテアンが捕らえている。

一応は、これでカタがついた。」

加持が話し終わるのを待って、レッドウルフが問いかけた。

「でも、ゼーレのことだ。これでは終わらないよ、加持さん。」

「ああ、でも、敵がどう動くか分からない以上、今の体制を変えても意味が無いだろう。」

「そんなことないさ。攻撃は最大の防御だよ。」

「そうしたいところだが、なんせ我々には駒が無い。」

「あるさ。それに、もう動き始めているよ。」

「何っ、そんな勝手なことを！」

「おいおい、加持さん、怒らないでよ。」

勘違いしないで欲しいけど、この第3新東京市内のことは加持さんの指示に従うけど、それ以外のことは約束出来ないよ。」

「それは詭弁だ。勝手に動かれると、こちらの防御にも関わってくるだろう。」

今すぐに、変な動きはやめるんだ。」

「いやだね。」

だが、そこにジャッジマンが割って入った。

「レッドウルフ、加持の言うことを聞け。」

お前もこの時期に、下手に相手を刺激しない方が得策だと分からないわけでもあるまい。」

「じゃあ、じじじじじ。」

事前に加持さんにどういう動きをするのか報告して、加持さんが駄目だと言うことはしない。

それ位で勘弁してよ。僕達も雇い主は加持さんだけじゃあないんだからね。」

その言葉、『雇い主は加持さんだけじゃあない』に、加持は何故か言い知れぬ違和感を覚えたが、レッドウルフの言うこともあながち間違いではないため、妥協することにした。

「まあ、いいだろう。だが、少なくともゼーレに対する直接攻撃は絶対に避けてくれ。藪を突つきたくは無いんだ。」

「ああ、分かったよ。加持さんも心配性だなあ。」

そう言って、レッドウルフはケラケラ笑った。

「それよりも、明日のことが重要だろう。明日はもつと大部隊でくるぞ。」

今度は、倍以上の人数で来るだろう。下手すると、500人規模かもしれない。」

「明日は、第壱中学校で決戦だね。ああ、とっても楽しいね。」

レッドウルフは、さらに大きな声で笑った。

同じ頃、転校生の一人、ハウレーンが父親に向かって頭を下げていた。

「父さん、頼む。今度の戦いで、1個中隊を指揮させて欲しい。」

「駄目だ。お前はまだ若い。もう少し待つんだ。」

ハウレーンの父、バレスは、ヴァンテアンの隊長だった。

このためハウレーンは父親に掛け合って、1部隊を指揮して今度の戦いで功績をあげようとしていたのだ。

1個中隊とは、ヴァンテアンでは50人規模の小隊4隊、計200人を束ねる指揮官だ。

「父さん、頼む。仲間、皆同意してくれたんだ。」

それを聞いて、バレスは苦笑した。

「分かった、いいだろう。但し、約束するんだ。戦う時は、常に先頭に立て。」

そして、逃げる時は、常に最後尾に付け。それが指揮官としての、最低限の務めだ。」

「分かったよ、父さん。」

ハウレーンは、頭を下げて、去って行った。

「ハウレーン、死ぬんじゃないぞ。」

バレスは、目頭が熱くなるのを抑えきれなかった。

第29話補完 嵐の前（後書き）

キャラ設定：バレス

ヴァンティアンの隊長。ハウレーンの父。

第30話 決戦！第壹中学校（中編1）

「良い調子ね。ネットの中で、アタシの映画が話題を呼んでいるわ。」

アスカは、一人呟きほくそえんだ。

今はマコトの誕生パーティーが終わった後、11時頃である。

「どう、アスカ。うまくいっているの。」

シンジはそう言って、アスカのパソコン画面を覗き込む。だが、実はアスカの側に来たかっただけだったりする。

「ええ。色々なサイトで、今日の映画のことが載ってるわよ。こりゃあ、明日も満員御礼ね。まあ、アタシが主役だから、当然よね。」

「そうだね。アスカは可愛いからね。」

シンジはニコニコしながらアスカを見つめた。

シンジは、アスカを見ているだけで幸せな気分になれるからだ。

「な、なに、当たり前のことを言ってるのよ。それよりも、明日は今までの会場だけでは入りきらなくなる恐れがあるわね。」

「一応準備だけはしておきますか。」

アスカはそう言うと、ケンスケに連絡を取った。シンジは、慌てるアスカを可愛いと感じていた。

「おはようございます。」

翌朝、いつものようにユキがやって来た。

「おはよう、ユキ。」

「おはよう、森川さん。」

最近では、3人もリビングで朝のあいさつを交わしている。先にアスカが声をかけた。

「ユキ、今日はなあに。」

「サンドイッチにコーンスープでいいですか。ご飯とハンバーグも出来ますが。」

「そうね、サンドイッチでいいわ。」

アスカの返事を聞いてから、ユキは料理に臨む。

アスカからユキのアルバイト代が出ていることもあり、朝のメニューはアスカの意向が尊重される。

昼がお弁当で必ずご飯が付いていることもあり、朝はパン食のことが多くなっている。

メニューの件が片づく、アスカはシンジと一緒にパソコンを並べてネット内を調べ始めた。

だが、アスカがふと言葉を漏らす。

「あれ、メールが…。」

アスカに昨日の夜、メールが入っていたようだ。

「こ、これは…。やっぱりね。」

差出人は加持だった。

その内容は、昨日のジャツジマンやレッドウルフ達との会話がそのまま入っている。

ゼーレの侵入は予想されていたとはいえ、易々と学校内に侵入を許したのは、アスカにとっても驚きだったらしい。

「アスカ。僕の所にも、加持さんからメールが来ているよ。」

シンジの所にも同じメールが来ていた。

もっとも、アスカの所には加持以外にもキャシーやマリア、ハウレインからも同じ内容のメールが来ていたのだが。

（何か動きだしてくるような気がする。こんな変な予感は当たらないで欲しいけど。）

シンジは、今日にも何か起きそうな、嫌な予感がしていた。

今日もいつものように、シンジはアスカ、ヒカリ、ユキ、トウジ、

ケンスケらと一緒にマンションを出た。

「ねえねえ、皆、ネット見た？うちの映画が話題になっていたわね。」

珍しく、ヒカリが口火を開いた。

「ああ、ワイも見たんやが、ごつつう人気みたいや。」
とトウジ。

「エヴァンゲリオンと使徒の映像が物凄くリアルだって評判なんだから。」
とケンスケ。

「エヴァのパイロットも格好良いって話よ。」
とヒカリ。もつとも、ヒカリの言うパイロットとは、トウジのみを指しているのだろう。

「それに、主演女優にプロを使っているって話になっていましたよ。」
プロを使えば、人気が出るのも当たり前だって。
確かに惣流さんは、プロ顔負けですけどね。」
とアスカびいきのユキ。アスカが喜ぶことをさらっと言う。

「でも、凄いね。1日上映しただけで、こんなにも話が広まるもんなんだね。」

「何、言ってるのよ。」

内容が秀逸、映像もリアル、それにノンフィクション、登場人物は粒揃い、

最後に主演女優が並のプロより完璧な演技に類まれなる美貌とくれば、当然よ。

これだけの条件が揃うことなんて、滅多に無いもの。」
とアスカ。

「けっ、よう言うわ。」

と小声でトウジ。だが、運良くアスカには聞こえなかったらしい。その代わり、ヒカリに睨まれ、小さくなるトウジ。既に、ヒカリの尻にひかれているらしい。

そんなことはおかまいなしに続けるケンスケ。

「そうだね、それに、歌手も一流どころを使ったからな。惣流様々だね。」

実は、試写会の際には最後にしか曲は流れなかったが、本番では挿入歌として、

2曲も別の有名な歌手の曲が入っていた。

「そうなんですか、さすがは惣流さんですね。」

ユキは、目を輝かす。

トウジは何か言いたげだが、多勢に無勢、言いたいことを我慢するしかない。

ユキが入ってからには特にグループ内の空気が変わり、アスカの悪口を言いにくい雰囲気になっていたのだ。

トウジは知らなかったが、トウジがヒカリに告白するお膳立てをアスカがしたため、

ヒカリとアスカはより一層仲良くなっていた。

ユキは以前からとある事情によってアスカびいきであるし、ケンスケもアスカの下僕になったため以前に増してアスカの言うことを聞くようになっていた。アスカにベタ惚れのシンジに至っては問題外である。

当然トウジは面白くないが、アスカが以前よりも人当たりが柔らかくなったためと、シンジを馬鹿にするようなことを言わなくなったため、トウジも以前ほどはアスカに反発することはなかったし、特に争いを起こすほどには至らなかった。

何よりも、シンジが良く笑うようになったのがトウジにとっては嬉しいことであり、それがアスカの態度の変化によるものであることが大きいことが分かっていたから、トウジとしても、アスカに対して感謝の念を持っていたのだ。

皆が映画の話で盛り上がっていたが、学校の近くに来た時、ユキが驚きの声をあげた。

「あつ、あれは何ですか。」

ユキは、学校の近くの空き地を指した。そこには、大きなスクリーンと数百席の椅子が並べられていたからだ。

「ああ、あれは、臨時の映画館さ。」

アメリカなんかじゃ、屋外で車の中から見る映画館もあるんだよ。まあ、それじゃああまり大勢の人数で見ることが出来ないから、あ

あいう風に、椅子を並べたのさ。」

ケンスケが解説した。

「へえ、おもしろいやんか。あれだと、大勢来ても何とかなるんやないか。」
とトウジ。

「ああ、そうだね。でも、今日が晴れて良かったよ。」

ケンスケはホッと胸をなでおろしていた。

中学校に着いてからは、全員が別行動になる。
アスカとシンジは、職員室のリッコとミサトの席でパソコンにかじりつく。

ケンスケは映画上映の総指揮者であるため、体育館にへばりつく。
今日は空き地にも顔を出すことになるだろう。

ユキはクラスが違うため、自分のクラスの手伝いである。
ユキのクラスは喫茶店にしたため、ユキはウエートレス役である。
開いた時間にアスカに差し入れしたり、ケンスケの手伝いをしたりしている。

トウジとヒカリは交代で映画上映を手伝うが、それ以外は自由時間で文化祭を楽しむのだ。

昨日行ったお化け屋敷に、今日も行こうとヒカリは言っている。

「なんや、あんなところどこがええんや。」

トウジはぼやいたが、ヒカリの笑顔には逆らえない。

結局、昨日に続いてお化け屋敷でヒカリの悲鳴を聞き、ヒカリにしがみつかれるのだ。

ヒカリとトウジは、お昼時になると職員室へと向かった。

アスカ達と食事をするためである。

お弁当は今日も支給されるため、二人でアスカ達の所に届けに行くのだ。

「アスカ、どう調子は？」

ヒカリの言葉に、アスカはちょっと驚いた顔を見せる。

「えっ、もうお昼なの。」

そう言っつて、時計を見てもう一度驚く。もう12時になっている。

「そうか、もうお昼なのね。じゃあ、食べましょうか。シンジも食べようよ。」

「うん、そうするよ。」

こうして、4人で和気あいあいとお昼ご飯となった。

ちなみにケンスケは現場を離れられないため、体育館に釘付けであ

る。

このため、アスカに頼まれたユキが昼食を届けに行っている。まずユキが食事を済ませ、次にケンスケが食べている時にユキが映画の機械の番をするのだ。

一応時間差はあるが、一緒にお昼を食べることになったため、ケンスケは内心大喜びである。

女の子と二人でお昼ご飯を食べるなんて、ケンスケは今までに一度も無かったからだ。

しかも、なかなかの美人であるユキとなのだから。

このため、ケンスケはトウジが思う以上にアスカに感謝しており、この辺がアスカの人使いのうまい所だ。

こき使いはするけれど、ちゃんとおいしい思いもさせてくれるものだから、少し位けなされたり、罵倒されてもケンスケはアスカの言うことを良くきいた。

しかもアスカは、ユキの前ではケンスケを一応立てるのだ。

飯にけなしたとしても、ユキがいる時はちゃんとフォローしたりする。

ケンスケもその点は良く気付いており、お返しにアスカの行動をシンジヤトウジに対して、フォローしたりしている。

「さて、もう少し頑張るか。森川さん、ありがと。もう代わるよ。」

ケンスケは食べ終わると、真っ先にユキに言った。

「ええ、じゃあ頑張ってください。えっと、それから、これは義理なんですけど。」

ユキは、ケンスケに包装紙で包まれた物をケンスケに渡した。

「えっ、これは…。」

ケンスケは動揺し、うろたえた。

「碓君や鈴原君にも渡しますが、あの二人は決まった人がいますから、ちよつと小さめにしました。」

私、男の人とおつきあいするつもりは無いので、こういうことはするつもりは無かったです、いつも仲良くさせてもらっていますので、義理チョコでも良ければもらってください。」

「あ、ああ。義理でも嬉しいよ。森川さん、ありがとう。」

「じゃあ、また後で。」

そう言ってユキは去って行った。

残されたケンスケは、感激に打ち震えていた。

何と言っても、苦節14年一度もチョコなどもらったことは無かったのだから。

義理といっても、今もらったチョコは、本命並の大きさだった。

「うっうっ。惣流の下僕になって良かった。ありがとう、惣流。」

アスカの配慮だと思いつきり勘違いするケンスケだった。

アス力達がお昼ご飯を食べ始めた頃、加持はネルフ本部でゼーレ部隊の迎撃を指揮していた。

第3新東京市からかなり離れた所に、ゼーレの部隊が発見されたのだ。

このため、各傭兵部隊が出撃していた。

早くもシンジの悪い予感当たっていたのだ。

「敵の戦力を知らせてくれ。」

加持の問いかけに、シゲルが答えた。

「ゼーレの部隊は、4方面から侵攻中。

北と南から10部隊、西と東から15部隊、合計50部隊です。各部隊は約10人、計500人が侵攻中です！」

「各部隊の対応状況を知らせてくれ。」

加持の指示に対して、各方面担当のオペレーターから返答があった。

「東の部隊はヴァンテアンの部隊、約200人が応戦中です！」

「西の部隊はリッツ大尉の部隊、約200人が応戦中です！」

「南の部隊はワイルドウルフの部隊、約200人が応戦中です！」

「北の部隊はエドモン中尉の部隊、約100人が応戦中です！」
数字的には500人对700人でネルフ側が有利だが、こういう戦いは兵力だけで決まるものではない。
個々の兵士の力量や、武器の装備、地形等々、様々な要素が勝敗を左右するのだ。

このため、加持は第壱中学校のある市東部を重視し、レッドアタックカーズを中学校付近に展開させ、さらにフランスの名だたる傭兵部隊であるヴァンティアンを配置していた。

一般的には守る方が有利だが、今回のように守るのが難しい場所である場合は、かなり攻める方が有利である。
攻める側は強力な武器が使い放題なのに対して、守る側はそうはいかないからだ。
当然、加持はその辺は十分承知であるため、気が抜けない状態であった。

「東の部隊は、敵3部隊を殲滅、現在も応戦中です！」

「西の部隊は、敵1部隊を殲滅、現在も応戦中です！」

「南の部隊は、敵2部隊を殲滅、現在も応戦中です！」

「北の部隊は、敵1部隊を殲滅、現在も応戦中です！」

次々と緊迫した声で、ゼーレとの応戦状況が入ってくる。

戦闘開始から既に30分ほど経っていた。

加持は、真剣な表情のままマコトの方を見た。

「日向君、他の部隊の配置状況を知らせてくれ。」

「はい、アスカちゃん達のガード約100人は市東部、第壱中学校
近辺に待機、

レッドアタッカーズの部隊、約200人が第壱中学校の周辺に展開、

市内中心部西寄りにレインボースター約200人が待機、

市内中心部東寄りにジャッジマンの部隊約200人が待機、

市東部にヴァンテアンの部隊約200人が待機、

市西部にグエン中尉の部隊約100人とカルロス中尉の部隊約100
人が待機、

市南部にワイルドウルフの部隊約200人が待機、

市北部にレッドアタッカーズの部隊、約200人が待機しています
！」

「さて、どうするかな。」

加持は悩んだ。現時点では、東と南は問題なさそうだが、北と西が
やや危うい感じである。

戦力も拮抗している。そこで、北と西に増援部隊を派遣することを
決めた。

「北と西に増援部隊を派遣しろ。北にはカルロス中尉の部隊、西にはグエン中尉の部隊だ。その後にはレインボースターの部隊を移動させるんだ。急げっ！」

加持は、何か嫌な予感がして、ジャッジマンの部隊は動かさなかった。同様に、いつでも動けるように、レッドアタッカーズは臨戦体制のままとした。この判断が、後で効いてくるのであった。

「ええっ、何それっつ。」

職員室では、アスカが大声を上げていた。ユキがシンジとトウジにチョコを渡すのを見て、初めてバレンタインデーのことを知ったのだ。

「アタシは何も用意していないのよ。シンジ、ごめんね。」

「アスカ、気にしなくていいよ。今は大事な時だし、アスカは知らなかったんだから。」

「ん、もう。ヒカリもユキも水臭いわね。教えてくれてもいいのに。」

「アスカ、ごめんね。すっかり忘れてたわ。自分のことで手一杯で。」

」

「惣流さん、ごめんなさい。てっきり知っているかと思っていましたので……。」

二人とも、肩を落した。

「ううん、良いのよ。もう時間も無いし。でも、ユキ、ちょっと頼まれてくれる。」

アスカはユキの耳元で何事かを囁いた。

「はいっ、分かりました。」

ユキは元気に返事をした。

「東の部隊は、敵7部隊を殲滅、現在も応戦中です！」

「西の部隊は、敵2部隊を殲滅、現在も応戦中です！あつ、増援部隊が到着しました！」

「南の部隊は、敵5部隊を殲滅、現在も応戦中です！」

「北の部隊は、敵3部隊を殲滅、現在も応戦中です！間もなく増援部隊が到着します！」

今も緊迫した声で、ゼーレとの応戦状況が入ってくる。

「被害状況を教えてくれ。」

加持の声にすぐさま返答があった。

「東の部隊は、被害無し！」

「西の部隊は、怪我人が10名、いずれも軽傷です！」

「南の部隊は、被害無し！」

「北の部隊は、怪我人が数名、いずれも軽傷です！」

今のところ、かなりネルフ側が押しているようだ。

それに、ヴァンテアンの攻撃も素晴らしい。

被害らしき被害が無いうえに、既に敵兵力の半分近くを削っているのだ。

「おい、ヴァンテアンの指揮官は誰だ。」

加持が尋ねると、マコトから意外な答えが返ってきた。

「ハウレーン・プロヴァンスです。アスカちゃんのクラスメイトですよ。」

「何っ、アスカと同じ歳なのか？」

加持は驚きを隠せなかった。

同じ頃、パソコンの画面を見ていたアスカが、急に大声で叫んでいた。

「こ、これはっ！いけないっ！」

「どうしたのさ。」

シンジが尋ねたが、アスカはもう聞いていなかった。既に、携帯電話片手に怒鳴っていた。

「マリア！作戦Rよ！急いでっ！」

そして、すぐさま電話を切ったかと思うと、また別の所に次々と電話していた。

「リッコ！これからMAGIのサポートお願いっ！良いわねっ！マヤも使っっ！」

「キャシー！レッドアタッカーズの全部隊を第壱中学校近辺に集結させてっ！」

えっ、加持さんの許可が無い？アタシが良いって言ったら良いのよっ！分かったわねっ！」

「マックス！ガード全員で学校の周りを固めてっ！ゼーレが攻めてくるわっ！」

そして、電話が終わると、急に服を脱ぎだした。

「ア、アスカ。」

(ど、どうしたんだよ、アスカ。

も、もしかして、バレンタインの、チョコの代わりなのかなあ。
もしそうだったら、嬉しいけど、ど、どうしよう。)

シンジが目を白黒させているうちに、アスカは下着を残して全て脱いでしまった。

「シンジ、今更恥ずかしがるような間柄じゃ無いでしょ。ちゃんとしなさいよっ。」

シンジ、悪いけど、あんたも脱いでもらうわよ。」

(え、嘘でしょ。も、もしかすると、もしかするかも。

だとしたら、言う通りにした方がいいよね。

でも、違ったらバカみたいだし。一応、聞いてみよう。)

「え、嫌だよ。理由を言ってよ。」

「つべこべうるさいのっ。いいから、裸になるのよっ!」

アスカは、強引にシンジの服をはぎ取っていった。

最後の1枚を脱がせ終わるのに、5分とかからない早業だった。

それから30分近く経った頃、ネルフの発令所では相変わらず緊迫した雰囲気だった。

「南の敵部隊は、後3部隊になりました！」

「東の敵部隊は、後1部隊になりました！」

「西の敵部隊は、一部を討ち漏らしました！現在追撃中！」

「北の敵部隊も、半分近く討ち漏らしました！現在混戦模様！」

加持は、頭を抱えた。夜ならばともかく、昼に相手を取り逃がすとは。

「レッドアタッカーズに至急連絡しろ。10部隊ほど、相手にしてもらおうとな。」

加持は、現在唯一フリーであるレッドアタッカーズに期待するしかなかった。だが…。

「レッドアタッカーズは、東に向かって移動中です！」

「何っ！どういうことだっ！」

加持は激怒した。自分に命を預けると言っておきながら、勝手な動きをしたのだ。

加持にとって、許し難い行動だった。

その良いタイミングで、アスカから電話が入ったのだ。

「加持さんっ！」

アタシの判断で、ちょっと部隊を動かすからねっ！
理由は後で言うわっ！良いわねっ！」

「お、おいっ！アスカ！」

加持が叫んだが、既に電話は切られていた。

「一体何があったんだ。」

加持は首を捻った。あのアスカのことだ、何かしら理由がある筈なのだ。

だが、加持には理由が分からなかった。

現在、確かに北と西は危うく支えているような状況だが、東は順調なはずなのだ。

だが、少し考えた後、加持ははっと気付き、マコトに命令した。

「ハウレーンを呼び出せ！今すぐにだ！」

「は、はいっ！」

マコトは、すぐさまハウレーンを呼び出し、正面のスクリーンに映した。

「ヴァンテアンのハウレーンです。初めまして。もうすぐ敵は殲滅します。ご安心を。」

ハウレーンはそう言って敬礼した。

「ほう、ちょっと聞きたいことがある。」

「はい、なんででしょうか。」

「昨日のお弁当は、何を食べたかな。」

「なつ、何を言うんですか。昨日は、学校は休みですよ。」

「ふん、この偽物め。こっちはとくに気付いているぞ。お前らは包囲されている。覚悟するんだな。」

昨日は、文化祭だったから、お弁当を配っているんだよ。本物のハウレーンなら知っているはずだ。」

「あははははっ。もうばれたか。感の良い奴がいるんだね。」

そう言って、ハウレーンの顔をした女は、顔の皮膚・おそらく特殊なマスクなのだろう。-を剥がしていった。

「あっ！」

マヤが叫んだ。その顔には見覚えがあったからだ。

「渚…カヲル君…。」

スクリーンには、紅い目をした少年が映っていた。そして、その少年は、酷薄な笑みを浮かべていた。

第30話 決戦！第壹中学校（中編1）（後書き）

あとがき

第壹中学校の位置が分からなかったので、第3新東京市の東側ということにしました。

コンフォート17についても位置が分からないので、第3新東京市の東側ということに

しました。コンフォート17について、現在の仙石原の西側付近、第壹中学校は台岳付近と

いう想定です。もし間違っていた場合、内容を修正するかもしれません。

さて、いよいよカヲル登場です。果たして、彼は本当のカヲルなのか、それとも…。

傭兵部隊配備状況

東はヴァンテアン2個中隊、400人。

西はリッツ大尉200人、グエン中尉100人、カルロス中尉100人。

南はワイルドウルフ2個中隊、400人。

北はレッドアタッカーズ1個中隊、200人とエドモン中尉100人。

市内中心部にレインボースター1個中隊、200人とジャツジマンの部隊200人。

予備としてレッドアタッカーズ1個中隊、200人。

ガード役が昼は主に第壹中学校付近に100人。但し、通常は部隊としては機能しない。

第30話補完 登場！ラブリーエンジェル！！

「たたかいのな〜か〜で〜 いきて〜き〜た〜
くにんのせんきと〜 ひと〜の〜い〜う〜

だがわれわれは〜 ふくしゅうのため〜
かばねとな〜った〜 とものため〜

なみだをすてて〜 あまか〜ける〜
ゆめをすてて〜 ちをか〜〜〜ける〜

ラブリーエンジェル〜 うでが〜おれても〜たたかう〜
ラブリーエンジェル〜 からだが〜くちても〜たたかう〜

しにがみのか〜ま〜が〜 よくに〜あ〜う〜
じごくのしし〜と〜 ひと〜の〜い〜う〜

だがわれわれは〜 とまれない〜
たたかいだけが〜 いきがいさ〜

どろみずすすつて〜 たえし〜の〜び〜
かえりちあびて〜 いきの〜〜〜びる〜

ラブリーエンジェル〜 おんなを〜すてて〜たたかう〜
ラブリーエンジェル〜 いのちを〜すてても〜たたかう〜

へりの中、8人の少女達が古い日本のアニメソングの替え歌を歌っていた。

ちゃんとした日本語に直すと次のようになる。

「戦いの中で生きてきた 9人の戦鬼と人の言う
だが我々は復讐のため 屍となった戦友のため^{とも}

涙を捨てて天駆ける 夢を捨てて地を駆ける

ラブリーエンジェル 腕が折れても戦う
ラブリーエンジェル 体が朽ちても戦う

死神の鎌が良く似合う 地獄の使者と人の言う
だが我々は止まらない 戦いだけが生き甲斐さ

泥水すすって耐え忍ぶ 返り血浴びて生き延びる

ラブリーエンジェル 女を捨てて戦う
ラブリーエンジェル 命を捨てても戦う」

ここにいるのは、15歳から19歳までの若い少女達だ。
物凄い美人からちょっと可愛い娘までいるが、それは大したことで
はない。

ここにいる少女達は、ドイツ屈指の傭兵集団であるワイルドウルフ
の中でも、
精鋭中の精鋭なのだ。

ワイルドウルフの精鋭部隊、ラブリーエンジェル。
噂では、女性兵士のみで構成されているが、その強さは半端ではな
く、

1個中隊ですら壊滅させてしまうほどのものらしい。

あのジャツジマンですら一目置くほどの、世界屈指の精鋭部隊、それがラブリーエンジェルなのだ。

10人にも満たない人数で、幾多の戦いを乗り切ってきた、戦士の中の戦士、それが彼女達なのである。

敵兵士からは、悪魔、戦鬼、死神などとも呼ばれていたが、その実態を知る者はいなかった。

ただ、銃よりも格闘戦を得意としているようだった。

彼女達は、色でお互い呼び合っている。ここにいるのは、ブルー、イエロー、ブラック、オレンジ、パープル、ブラウン、ピンク、グリーンの8人だ。

その中でも、最年長なのがブルーである。

歌が終わった頃合いを見計らって、ブルーは皆に話しかけた。

「みんな、これから、ゼーレの精鋭中の精鋭、黒竜部隊と戦うよっ！
！覚悟はいいねっ！」

黒竜部隊とは、今まで噂の域を出なかった、ゼーレの特殊部隊である。

噂では数人単位、もしくは単独で行動し、一人でも1個小隊相手に互角以上の戦いをするという、化物みたいな相手である。

「今回の敵は、1分隊、10人だよっ！」

ちよっと相手の方が多いけど、あたしら、ラブリーエンジェルの名を汚すようなことは、

絶対にするんじゃないよっ！

それから、あたしの感じやあ白龍部隊もいると思うよっ。
だから、気を引き締めてかかるんだよっ。」

ブルーはそう言いながら、皆の反応を探った。

ある者は青ざめ、ある者は震えている。

「ブルー、あたしさあ、これから遺書を書くから、ちょっと待ってよ。」

「ぶっ。」

「ばか、何言っただよ。」

「あははははっ。」

「アホッ！」

ピンクの言葉にみなあきれ返るが、彼女の一言で場の雰囲気緩和されたのも事実だ。

続けて、オレンジが大きな声で言った。

「あたしは男を知らないまま死ぬのは嫌だから、今適当なのを捕まえるからさあ。」

「ちょっと時間くれないかなあ。」

さすがに、これには皆ゲラゲラ笑った。

「ひい、おかしい。笑わせないでっ。」

「なによっ！あたしは真剣よっ！だって、今回ばかりは勝ち目ないじゃん。」

オレンジはぷりぷりする。

「え〜と、みんな、こちらを見て欲しい。」

ブルーは、壁面に備えつけた液晶画面に映像を映した。そこには銃を雨あられと打ち込まれても揺るがない、オレンジ色のバリアーが映っていた。

その向こうで、紅い目をした少年が冷たい笑みを浮かべている。

「こいつら10人のために、ヴァンテアンの精鋭1個中隊、200人が壊滅した。」

現在、レッドアタッカーズ2個中隊、400人が応戦しているが、足止めすら出来ない状態だ。

相手にとって不足はない。思いつきりたたきのめすんだ。

ラブリーエンジェルの名を世界に轟かすんだ。」

ブルーは檄を飛ばしたが、効果は無かった。

それどころか、かえってさらに暗い雰囲気になってしまった。

まあ、当たり前と言えば当たり前である。

敵の無敵さを思い知らされたのだから、無理も無い。

「なに、しけた顔してんだよっ！そんなことじゃあ、レッドに笑われるぞ。」

だが、その一言で、ガラツとその場の雰囲気が変わった。

「ブルー、今レッドって言ったな。あいつが来るのか？」

「まさか、アメリカの生意気な坊やのことを言ってるんじゃないだろうね。」

「おい、どうなんだよ！」

みんなの期待が高まってきた所で、ブルーは腕を腰に当て、胸を張って言った。

「あつたり前じゃない。最高の敵には、最高のメンバーで当たらないとね。」

あたし達ワイルドウルフの守り神、アメリカの紛い物じゃあない、本物の紅い狼が、牙を研いで待っているんだよっ！」

「本当かつ！早く言えよっ！」

「なんだ。じゃあ、男はもうちょっと後でも良いわね。」

「あいつさえいれば、きつと勝てるぜ！」

「でも、あいつって、アメリカ人じゃなかったっけ。」

「うっさいねわね。言葉のアヤってもんよ。」

急に皆の顔が明るくなった。

「よし、景気付けに、あいつがいつも口ずさんでいた歌でも歌うか。」

「ああ、『まっくらね』か。」

「そうね。日本語で、意味が良く分からないけど、何かノリが良い歌だったね。」

「じゃあ、歌うぞ！」

「「おっ！」「」

こうして、彼女達は再び歌い始めた。

「ちっちゃなころからいきじごく〜 12であくまとよばれたよ〜
…」

それは、レッドが良く口ずさんでいた歌だった。

彼女の母が好きだった歌の替え歌らしい。ノリの良いの歌であった。

だが、レッドは、歌詞の意味を覚えてくれなかったため、

ラブリーエンジェルのメンバーは、楽しい歌だと思っていたのだ。

こうして、急に賑やかになった少女達を乗せて、ヘリは、第壱中学校の北東にある森へと向かった。

第30話補完 登場！ラブリーエンジェル！！（後書き）

キャラ設定：ラブリーエンジェルについて

ブルー（ウルフ） ラブリーエンジェルの隊長。青い髪の少女。体格のがっちりした、もう大人に近い19歳。

ブラウン（ウルフ） 茶色い髪の少女。ワイルドな16歳。

グリーン（ウルフ） 緑の髪の少女。気が強く、自信満々の15歳。

イエロー（ウルフ） 黄色がかった髪の少女。無口で性格のキツイ18歳。

ブラック（ウルフ） 黒髪の少女。明るく元気な17歳。

ピンク（ウルフ） ピンクの髪の少女。明るく元気な15歳。

オレンジ（ウルフ） オレンジ色の髪の少女。底抜けに明るい17歳。

パープル（ウルフ） 紫色の髪の少女。人形みたいに大人しい17歳。

レッド（ウルフ） 赤い色が好きな少女。明るく元気な14歳。赤い死神とも呼ばれる、その正体は…。

あとがき

ついにワイルドウルフの最精鋭部隊が登場します。

最後の一人、レッドとは、果たして誰なのか？

第31話 決戦！第壹中学校（中編2）

発令所で加持達がカヲルの姿を見るよりも、30分以上前のことである。

ハウレーン率いるヴァンテアンの部隊は、敵に猛攻撃を加えていた。

「ハウレーン隊長！敵は、後1部隊を残すのみです。」

部下の報告にハウレーンの心は躍ったが、悟られまいとして努めて落ち着いた口調で答えた。

「最後の1部隊といえども、気を抜くなっ！全力で戦えっ！」

「はっ！分かりましたっ！」

兵士は敬礼をして去って行った。

ハウレーンの部隊は、ヴァンテアンの中でも精鋭ばかりを集めている。

その甲斐あって、ゼーレの攻撃を最も押し返していた。

MAGIの助けもあつたため、敵の位置や数、装備など、欲しい情報がかかり入ってきていることもあり、常に先手を打てたことも幸いし、負傷者も思ったほどには出ていなかった。

このままだと、ほぼ完全な勝利が目前であるとハウレーンが思ったのも無理はない。

ネルフにそう思わせることが敵の狙いだったのだ。

最初に東と南を他方面よりも大部隊で攻め、あっけなく撃退され、相手が油断した隙を突いて反攻に移るのがゼーレの真の狙いだったのだ。

このため、ネルフが他方面に増援部隊を送った時に、反攻を開始する手筈になっていた。

そこに、北と西に増援部隊が派遣されたのである。

ゼーレの予想と違って、予備兵力を全部投入した訳では無かったが、それでも東方面に展開出来る部隊が減ったことには変わりなかった。ゼーレは、最後の1部隊に反攻するよう指令を発したのである。

「痛っ！」

渚カヲルは、戦いの最中に、頭痛を覚えた。頭の中に何かが入って来るような感覚を覚えた。そして、ある言葉が浮かび上がった。

「ワレワレハ、ハンコウヲ、カイシスル。」

カヲルは、頭の中に浮かんできたその言葉を、何回も繰り返した。言った。

こうして、最後の1部隊の反攻が開始された。

この時点でハウレーンの部隊の運命が決まってしまったとは、誰も知るはずもなかった。

「ハウレーン隊長！敵が反攻を開始しました。」

「何っ！」

ハウレーンは首を捻った。

これだけ戦力差が開いたのだから、敵にはここに止まって戦う意味が無いと考えていたからだ。

ハウレーンは、どうするか考えた。

一気にカタを付ける方法が好きなのだが、いつも父親に猪突猛進は慎むように言われていたため、安全策を採って遠巻きに攻撃を仕掛けることにした。

これならば失敗しても味方の損害は少ないし、なによりもほぼ勝ちが見えたこの時点では、危険の高い賭をしてもメリットは無いと考えたからだ。

ハウレーンのこの考えは正しかったのだが、不幸なことに、敵の能力は予想を遥かに超えていた。

「ドギューン！ドギューン！ドギューン！」

「ドギューン！ドギューン！ドギューン！」

「バン！バン！バン！バン！バン！バン！」

何人かは、被弾した仲間を担いで、戦列から離れていく。

「一体、どうしやがったんだ。あれだけの銃撃でも倒れないとは、奴らはバケモンかっ！」

「いや、あれを見るっ！オレンジ色の光が、弾を跳ね返しているぞ。」

「おい、俺は夢でも見ているのか。」

「いや、そうではないらしい。おい、誰か隊長に知らせろっ！こいつらは、おそらく黒竜部隊だ。奴ら、今まで猫を被っていやがったんだ。」

こうして、ヴァンテアンの兵士達は、絶望的な状況で戦うことになった。

「ハウレーン隊長！大変です！最後の1部隊は、黒竜部隊のようです！」

幾ら銃弾を撃ち込んでも、全部弾かれてしまいます！」

「何だと！」

ハウレーンには、思い当たるものがあつた。ATフィールドである。そうになると、相手は使徒ということになる。それならば、人間では勝ち目は無い。

だが一方で、このまま撤退すると背後の中学校にいる、大勢の一般

人から多数の死傷者を出してしまふ。

「だれか！本部に黒竜部隊のことを、知らせるんだっ！」

「駄目ですっ！通信が途絶していますっ！」

「ちくしょう！やられたっ！」

ハウレーンの頭には、クラスメート達の顔が浮かんでいった。

「短い付き合いになってしまったな。」

ハウレーンは、時間稼ぎをするため命を捨てる覚悟をした。

「ア、アスカ。一体どうしたんだよ。」

シンジは情けない声で言った。

シンジは、今体に何一つ付けていない。

アスカに全部脱がされたからだ。

「それを言う前にちょっとおまじないね。」

アスカはそう言うと、シンジにキスをした。

(こゝこの展開は。き、期待してもいいのかな。)

シンジも最初は驚いたような顔をしていたが、下心が膨らむにつれて、徐々に幸せそうな顔に変わっていった。

シンジは、アスカがチョコレートに代わり、何か良いことをしてくれると期待していたのだ。

だが、1分ほどキスした後、アスカは紙袋の中から服を取り出した。

「シンジ、つべこべ言わないで、すぐにこれを着るのよ。急いでっ
！」

（えっ！これだけ期待させておいて、あんまりだよ。うっうっ。）

シンジは何を想像していたのか、期待が大きく外れたと分かった心の中で滝のような涙を流したが、アスカの勢いに負けて、言う通りにするしかなかった。

シンジが着はじめると、アスカも急いで着替え始めた。

胸をタオルに似た布で巻き、迷彩服の上下を着て、頭からマスクを被り、革のグローブと変わった靴を身に付けた。

最後はゴーグルで目を覆い、ベレー帽を被った。

シンジも基本的に同じ格好である。

「シンジ、似合っているわよ。」

表情は見えないが、アスカの声は笑っている。

「ねえ、アスカ。一体これはなあに。何でこんな格好をするのさ。」

「ねえ、シンジ。一度しか言わないから、良く聞いて。

今、ゼーレの特殊部隊がアタシ達を目指してやって来ているのよ。」

しかも、頼みの傭兵達は、苦戦しているのよ。
だから、アタシ達が出張る必要があるのよ。」

「えっ、分からないよ。特殊部隊なんか、戦えないよっ。歯が立つ訳無いじゃないか。」

シンジは、アスカの言うことが理解出来なかった。

そんなに強い敵ならば、自分達が行っても役に立たないと考えたからだ。

「相手の特殊部隊は、10人いるの。それが、10人と、ATフィールドを使えるのよ。」

だからシンジの言う通り、普通の人間じゃあ全然歯が立たないのよ。」

「えっ、ATフィールドを使っつて？まさか…。」

「そうよ。シンジのお気に入りのおいつが来たのよ。渚カヲルがね。シンジ、前に言ってたよね。夢を見たって。」

カヲルが来るけど記憶を失っているかもしれないって。

シンジに会えば思い出すからって。」

「う、うん。」

確かに以前シンジはアスカにそう言って、笑い飛ばされたことがあった。

「多分、10人中1人がシンジの知っているカヲルだと思うのよ。」

だから、シンジはそのカヲルって奴の記憶を呼び覚まして欲しいの

よ。どう、出来る？」

「うん、やるよ。」

「その間に、アタシは他の奴らを倒すわ。」

効くかどうか分からない試作品だけど、アンチATフィールド発生装置が完成しているの。」

これをワイルドウルフの精鋭部隊に持たせて、カヲルもどきをやってけるわ。」

「えっ、じゃあ、アスカも行くの？駄目だよ、危ないよ。」

「シンジの気持ちは嬉しいけど、カヲルの目を覚ますのはシンジにしか出来ないと思うのよ。」

逆に、アンチATフィールド発生装置の操作はアタシにしか出来ないの。」

だから、アタシ達はちょっとの間、別れなくてはならないのよ。」

「でも…。」

「でもも、かかしもないのよ。それしか方法は無いのよ。」

今奴らを止めないと、ヒカリやユキや鈴原や相田なんか、殺されるかもしれないのよ。」

シンジはそれでもいいの？」

「もちろん、良くないよ。」

「じゃあ、良いわね。」

と言っても誰が本物か見分けないといけないから、最初は二人で敵の後ろから近付いて、シンジが本物を見分けるの。」

そうしたら、一旦下がって、ワイルドウルフの精鋭部隊と合流する

わ。

そこでアタシとシンジは別れるの。「ここまでが良い?」

「うん、うん。」

「シンジは、ジャッジマンかレッドウルフと一緒にカラルの所へ行つて、目を覚ませるの。」

そうしたら急いで逃げて、カラルをワイルドウルフに引き渡すのよ。

「

「えっ、なんでさ。」

「急いで逃げるのは、おそらくカラルの目が覚めたら、新たな敵部隊が現れるから。」

ワイルドウルフに引き渡すのは、他の部隊だとカラルが殺されるからよ。」

「えっ。何でなの?」

「カラル達はね、ヴァンテアンの部隊の連中を血祭りにあげるわ。そんな奴を、他の傭兵達が許してくれると思うの?」

速攻で息の根を止められるわ。分かった?」

「うん、分かったよ。」

でも、アスカったら、何でこんな格好をしているの。まるで兵隊みたいじゃないか。」

「シンジ。アタシ、前に一杯秘密を持っているって言ったの覚えてる?」

「うん、覚えてるよ。」

「その秘密のうちの一つがこれ。アタシは、ドイツにいた時は、傭兵もやっていたのよ。」

（えっ、アスカは、今傭兵って言ったよね。

傭兵って、お金をもらって戦う、戦争のプロじゃないか。

アスカがその傭兵だったなんて。）

「えっ！嘘！」

「嘘じゃないわ。アタシ、ワイルドウルフにいたのよ。」

アスカの言葉に、シンジは呆然とした。

急にそんなことを言われても、どう言ったら良いのか分からなかったからだ。

「ねえ、シンジ。聞いているの？」

「う、うん。も、もしかして、アスカは人を、そ、そのこ、殺したことがあるの？」

シンジは恐る恐る聞いた。シンジにとっては、傭兵＝人殺しなのだろっ。

すると、アスカは少し怒ったような顔をしてこう言った。

「アタシはねえ、誰かさんがエヴァに乗りたくないって駄々をこねたから、戦自の連中を数千人は殺してんのよ。アンタ、分かってんの！」

それを聞いたシンジの顔は、さらに蒼白になった。

（そ、そんな。僕のせいで、アスカが…。）

「アタシのことが嫌いになった？良いわよ、嫌いになっても。アタシは、シンジに強制はしないわ。

でも、アタシは行く。今行かないと、後悔するから。」

アスカはそう言って、シンジに背を向けて歩こうとした。だが…。

（まずい！僕はまた、アスカを傷つけてしまった。

駄目だ。今度こそ口に出して言わないと、アスカが遠くへ行ってしまう。）

それだけは、それだけは、絶対にいやだ！

シンジは後悔した。

アスカが傭兵をしていたなんて聞いて驚いたが、シンジが好きになったのは今のアスカなのだ。

過去のアスカがやったことに囚われてもしょうがない。

それにアスカが理由も無しに悪いことをする筈がないと信じたかった。

それに、何よりもアスカを失いたく無かった。

そう考えたシンジは、何とか想いを言葉にすることが出来た。

「…アスカを嫌いになる訳が無いじゃないか。」

アスカの背中越しに、シンジは小さく呟いた。

シンジに心の葛藤があったため、小さな声になってしまったのだ。

「えっ。」

アスカは驚いてこちらを振り返った。

アスカの顔は、期待と不安とをごちゃ混ぜにしたような顔だった。

（今だ、今言うしかない、僕の想いを！アスカを不安にさせるなんて、僕は最低だっ！）

シンジは、自分の想いを全てアスカにぶつけると心を決め、先程よりも一際大きな声で言った。

「僕が、アスカを嫌いになる訳が無いじゃないか。

僕は、誓ったんだ。アスカが行くなら、地獄の果てでも付いていくよ。」

僕は、アスカのことが好きなんだ。

僕は、世界を敵に回してもアスカと一緒にいる。」

シンジはそう言うと、拳を強く握りしめた。

「シンジ…。」

アスカの涙腺は緩んでいた。だが、まだ不安そうな顔をしている。

（良かった。もう一押しだ。以前のアスカとは違う。

今度は、僕の言うことを聞いてくれている。

言わないで誤解されるのは絶対に嫌だ。

たとえ恥ずかしい想いをしても良い、アスカを失うことに比べたら、何てことないよ。

もう、絶対にアスカを失いたくない。）

「何度でも言うよ。僕は、アスカが好きだ。アスカのためなら、この手が血に染まっても良い。もちろん、アスカの手が血に染まっても、嫌いになんかならないよ。」

だって、アスカは優しいから。意味もなく、手を血に染めるなんてことはしないから。」

シンジは、澄んだ目でアスカを見た。強い決意を込めて。

シンジの思いは、うまく伝わったようだった。

アスカは、シンジに軽くキスをする、シンジの手を掴んで走り出した。

「私は、もう死ぬのか。」

戦場で、最後まで踏みとどまって戦った兵士が倒れていた。

全身血だらけで、体を動かすのもやっとの状態だった。

ヴァンテアンは30分近く持ちこたえたが、それが限界だった。既に全部隊が壊滅し、敗走していた。

その兵士の側に、紅い目をした少年が立っていた。

少年は、兵士の頭を狙って、銃を向けていた。

その指に力がこもった時、急に後ろから声がした。

「カヲル君！」

紅い目をした少年が、はつとして振り向いたが、声の主は見えなかった。

「イマノコエハ、ナツカシイカンジガスル。」

少年が呟き、再び兵士を見ようとしたが、もうそこには誰もいなかった。

「隊長！駄目です。敵をくい止められません。」

「ちくしょう。何て奴らだ。こちらの攻撃が効きやしない。」

ジャツジマンは唇を噛んだ。

今は、レッドアタッカーズに加えて、ジャツジマンの部隊も応戦していたが、それでも、敵の侵攻を足止めすることすら出来なかった。

敵の少年達は、どんな攻撃も受け付けなかった。

銃はもちろんのこと、ライフルやバズーカでも全く効かなかったのだ。

そこで、ジャツジマンは加持に作戦変更の許可を得ることにした。今の加持の指示は、極力味方の損害を少なくせよというものだったが、それでは敵の足止めすら出来ないからだ。

「おい、加持さんよ。何か打つ手はあるのか。」

「ああ、さっきアスカから連絡が入った。」

そちらに、ワイルドウルフの部隊が到着する。
それまで持ちこたえるんだ。

ワイルドウルフが到着したら、お前達はタイミングを合わせて一斉に撤退するんだ。」

「おい、加持さんよ。ワイルドウルフは、全部で400人だろ。協力しなくて平気かよ。」

今は、600人でも足止めがやっとなんだぜ。
その3分の2の戦力で、どうやって戦うんだよ。」

「ジャツジマン、そちらに向かったのは、9人だ。」

「おい、何の冗談だ。N2爆弾でも抱えさせて特攻でもするのかよっ。」

「いや、それでも、奴らには勝てないだろう。」

「おい、何言っているんだ。じゃあ、どうやって奴らを止めるんだ。」

「俺にも分からん。」

「な…。」

ジャツジマンは、あきれて物が言えなかった。
そのジャツジマンの頭上に、ヘリが到着した。
8人の少女達が乗ったヘリが。

へりからは、次々と少女達が降りてきた。

「ジャツジマン大尉。ラブリーエンジェル隊長、ブルーです。ご苦労さまです。」

ブルーとその他のメンバーは、ジャツジマンに敬礼した。一応、今は上官になるからだ。

「ああ、ご苦労。今は、ここから東、約500mの地点で応戦している。」

「では、作戦開始から5分後に総撤収をお願いします。」

「おい、どうやって戦うつもりだ。」

お前さん達は、死ぬつもりか。奴らのことを知らないのか。悪いことは言わん。死にたくなければ、今すぐに帰るんだ。」

ジャツジマンは厳しい顔で言った。

それにブルーが反論しようとした時、どこからとなく女の歌声が聞こえてきた。

「たとえこの身を裂かれても、地獄の業火に焼かれても、決して逃げずに戦うよ、それがアタシの、生きざまよ。」

あゝあ アタシの人生真つ暗ね、いつつも損な役だけど、仲間を守るためならば、命を捨てても、惜しくない。」

あゝあ アタシの人生真つ暗よ〜 だけどアタシは逃げないよ〜
誰かがアタシの身代わりにく〜 きっと地獄にく〜 落ちるから〜」

「おい、この歌はっ！」

「『まっくらね〜』だよ！」

「あいつだっ！本当に来てくれたんだっ！」

ラブリーエンジェルのメンバーは、目を輝かせて声のする方向を見た。

すると、森の茂みの中から、二人の兵士が現れた。そして、そのうちの一人が声を発した。

「お待たせっ！紅い狼が来たよっ！」

胸を張り、手を腰に当てて立っていたのは、ラブリーエンジェルの赤い死神ともトップエースとも称されてきた、自称超絶美少女戦士、惣流・アスカ・ラングレーだった。

第31話補完 決戦！第壹中学校（中編2・5）

アスカは、ラブリーエンジルのメンバーを前にして、胸を張り手を腰に当てて立っていた。

アスカの耳に聞こえる銃撃の音、鼻に感じる硝煙の匂い、いずれもアスカにとって久しぶりのものだった。

（ああ、アタシは帰ってきたんだ。

この硝煙の匂い、銃撃の音、なにかも懐かしい感じがするわ。戦場に再び足を踏み入れることになるとは思わなかったけど、みんな、アタシは決して逃げたりしないよっ！一緒に戦うんだっ！）

アスカは、心の中で力強く叫んでいた。そして、過去の自分を思い出していた。

アスカは、幼い頃から父親の知れない子として周りの大人から蔑まれ、子供達からは想像を絶するいじめを受け続け、唯一の味方であるはずの母からは殺されかけたりという、辛く苦しい日々を唇を噛みしめて耐え抜いてきた。

そのうえ母親が目の前で首を吊っている場面を目撃し、それでいて決して心がねじ曲がったりせず、

人類の未来を賭けて戦うために、心も体もぼろぼろになりながらも、歯を食いしばって厳しい訓練に耐えてきた。

訓練に付いていけなかったら、パイロットから降ろされたら、自分
は見捨てられるかもしれないという恐怖と孤独に怯え続ける毎日を
過ごすという、まさに生き地獄のような日々能耐ながらも、決し
て負けない、決してくじけない、決して逃げたりしないと誓って、
常に前向きに頑張ってきたのだ。

そんなアスカに、幸運の女神は微笑まず、さらなる地獄の試練が待
ち受けていた。

アスカが12歳の時に、何の手違いか、いきなり一人で戦場に放り
出されたのだ。

周りは敵だらけで、銃弾が雨あられと降り注がれる、そんな過酷な
運命が待っていたのだ。

だが、アスカはくじけなかった。

将来現れるだろう使徒と戦うために、どんなことをしてでも生き抜
くことを決意し、心を鬼にして戦い続けたのだ。

泥水をすすって渴きを癒し、空腹に耐えながら戦い、奇跡的に勝利
を収め、生き残ったのだ。

そんな忍耐と戦いの日々を送ってきたアスカの過去を、ラブリーエ
ンジエルのメンバーは知らない。

アスカは、決して人前では弱音を吐かないからだ。

だが、皆アスカのことを心の底から信頼していた。

戦場という極限状態では、安いメッキはすぐに剥げてしまう。

だが、アスカの勇氣と、熱意と、心意気が本物であることは、徐々
に周りの者の知るところになった。

どんな苦しい時でも、どんなに辛い時でも、アスカは決して諦めた
りしない。

太陽の如く輝く笑顔と陽気な言葉で仲間をいつも鼓舞するのだ。何度、仲間達は心を救われたことか。

『大丈夫よっ！このアタシが付いているからねっ！』
『このアタシに任せなさいっ！』

その言葉に、何度仲間達は勇気を振り絞ることが出来たことか。

今ここにいるメンバーの多くは、アスカに一度ならずとも命を救われたことがある。

アスカは、危機に陥った仲間を決して見捨てるようなことはしなかった。

たとえ、どんなに絶望的な状況であろうとも、アスカは仲間を最後まで助ける努力を惜しまなかったのだ。

そんなアスカを、次第に仲間達は慕い、信頼を寄せるようになっていった。

そして、命を預け合う仲間のみが共有する信頼感が芽生えていったのだ。

アスカは、その信頼に応えるべく、今まで戦ってきたし、これからも戦い続けるだろう。

それを知るからこそ、ラブリーエンジェルの少女達は、アスカの登場を願っていたし、その努力に裏打ちされた実力を疑う者はいなかった。

そんなアスカは、ラブリーエンジェルにとって希望の光であり、最後の頼みの綱なのである。

だから、アスカが現れたことによって、ブルー達は、心の底から喜んでいった。

第32話 決戦！第壹中学校（中編3）

アスカがラブリーエンジェルの前に姿を現す時よりも、1時間半ほど前のことである。

シンジは、アスカに連れられて校舎の外に出た。

そしてしばらく走った後、アスカは急に立ち止まった。

「シンジ、聞いて欲しい歌があるの。何も言わずに聞いてくれる？」

アスカの問いかけに、シンジは疑問を持ちながらも頷いた。アスカの顔が真剣だったからだ。

シンジが頷いたことを確認したアスカは、シンジに背を向けてゆっくりと歩きながら、静かに歌いだした。

「ママには首を絞められて、大人に陰口叩かれて」

子供はいじめの雨嵐、殴られ蹴られて、つねられた」

あゝあ アタシの人生真っ暗ね、生きるの辛い毎日よ」

必ずいつかは見返すと、唇かみしめ、耐えたのよ」

（アスカ。一体何て悲しい歌なんだ。）

歌詞さえ聞かなければノリの良い楽しい曲のようだが、それをアスカはとても悲しく歌っていた。

いくら鈍感なシンジでも分かった。その歌詞は、アスカのこれまでの人生を凝縮したものだったのだ。

歌のあまりに悲しすぎる内容に、シンジはきつく唇をかみしめた。

（アスカ。僕は、アスカのことを誤解していたのか。アスカはいつも明るかったから気付かなかったけど、小さい頃はいつもいじめられていたのか。）

僕は、決して幸せな訳じゃなかったけど、それでも一緒に遊んでくれる友達はいた。

けど、アスカにはそれすらいなかったなんて。）

シンジは、目からいつの間にか涙が溢れてきた。

（そうか。きつと、心ない大人が、アスカの生まれのことを喋ったんだ。）

それで、アスカはいじめられたのか。アスカは何も悪くないのに。酷い、酷すぎるよっ！）

シンジは唇を噛んだ。

「.....」

大きくなったら人類の〜 未来を賭けて〜 戦って〜
ママの願いを知ってから〜 生きる支えが〜 出来たのよ〜

あ〜あ アタシの人生真っ暗ね〜 寝る間も惜しんで頑張ってる
地獄をもたらす使徒どもと〜 この身を捨てても〜 戦うよ〜

（アスカがエヴァにこだわっていたのは、そういう訳だったのか。）

アスカは、ママの願いをかなえるためエヴァに乗って、

人類の未来を賭けて戦うことを生きる支えにして生きてきたのだろ

う。

シンジは、何故アスカがあれほどエヴァで戦うことにこだわったのか、やっと理由が分かった。

（でも、そんなの悲しすぎるよ。アスカには、他に何も無かったの？綾波みたいに。）

シンジは、悲しく辛かったであろうアスカの幼い頃を想って、涙が止まらなかった。

「いきなり空から落されて〜 気付けば周りは敵だらけ〜
鉛の弾が雨あられ〜 死ぬのは嫌よと〜 戦った〜

あゝあ アタシの人生真つ暗ね〜 どんどん湧き出る敵兵士〜
気付けば体は血まみれよ〜 これは夢よと〜 嘆いたの〜

.....

歌が進むにつれて、アスカの思いとは関係なく傭兵にされて、戦いを強いられたのだろ〜うことが分かってきた。

それでもアスカは必死に戦って、生き延びてきたのだ。

（アスカは、そんな目にあってきたのに、何で耐えられたんだろう。僕だったら、絶対に耐えられないよ。）

シンジは、呆然とした。

自分は不幸だと言って拗ねて、何の努力もせずに自分の殻に閉じこもってきたシンジに対して、

アスカは心も体もボロボロになっても、涙さえも我慢して、小さな

体で耐えてきた。

そのうえ、いきなり戦場に投げ出されて、考える暇もなく戦ったの
だろう。

そんなアスカの戸惑いがひしひしと感じられるような歌だった。

「

ちっちゃな頃から生き地獄　12で悪魔と呼ばれたよ
敵の中に突っ込んで　近寄る者皆　切り裂いた

あゝあ　アタシの人生真っ暗ね　心は荒んでいくばかり
良い子になろうとしたのに　どこで歯車　狂ったの

.....

シンジは、記者会見でのアスカの言葉を思い出していた。

あの後、アスカは演技だと言っていたが、そうでは無かったのだ。

アスカは、幼い頃に母親を失い、厳しい訓練に耐えてきた。

それなのに、周りには誰も味方はいないし、泣きたくても涙を流せ
ない。

夢も希望も無い、それはアスカにとっては、まさに生き地獄だった
のだろう。

そして、拳げ句の果てに、戦場にいきなり投げ出され、戦つことを
余儀なくされたのだ。

おそらく、それは12歳の頃なのだろうが、アスカにとって、身を
切るような辛い想いだったに違いない。

それでもアスカは、泣かない、負けない、くじけない、力の限り戦
うと心に誓って、耐え抜いて来たのだ。

何と悲惨な人生だったのだろうか。

（アスカは、ただの負けず嫌いじゃなかったんだ。単にプライドが高いだけだと思っていたけど、そうじゃ無かったんだ。

僕は、アスカのことを何も知らなかったんだ。）

シンジは俯いた。歌に込められていたアスカの強く悲しい決意に、シンジはアスカのことを全く理解していなかったことを思い知ったのだ。

アスカは、ママの願いをかなえるため、人類の未来を賭けて戦うため、どんなことをしても生き抜くと誓って戦い抜いたのだろうか。

もし、シンジがアスカと同じ目に遭っていたら、間違いなくいじけて、拗ねて、戦うことから逃げただろう。

14歳のシンジでさえそうなのに、アスカは小学生になる前から、逃げずに試練に立ち向かってきたのだ。

また、シンジはアスカが何故負けたくないのか、逃げないのか、少しだけ分かったような気がした。

傭兵にとって負けることは死ぬことであり、逃げることは仲間を見捨てることだからだ。

アスカは、人の命を犠牲にしてまで自分が助かるうとは思わなかったのだろうか。

自分のことしか考えないシンジにとっては、信じられないことだったが。

（僕は、自分だけのことしか考えていなかった。

アスカやみんなのことなんかちつとも考えずに、何度も逃げたのに。

それなのに、アスカはもつと酷い目に遭って来たのに、決して逃げずに戦ってきたんだ。

それも、自分のことをいじめてきたような人達のために、アスカはっ！）

シンジは、自分が何度も何度も逃げ出したことを悔やんだ。

そして、自分が逃げたとき、アスカの式号機が敵に首を切られた事を思い出した。

自分が逃げたら、誰かが犠牲になるかもしれないことに、シンジは気付かなかったのだ。

それなのに、アスカはシンジが気付くよりもずっと以前からその事に気付き、しかも、敵からは決して逃げないということを実践してきたのだ。

シンジは、アスカと比べたら自分が何て器の小さい人間なんだろうと、思い知らされた。

（そうか。こんな僕だったから、アスカに好かれなかったんだね。こんな仲間なんて、アスカがいた世界ではクスも同然だったんだね。アスカが加持さんのことを好きだった理由が今になってようやく分かったよ。

加持さんは、絶対に仲間を見捨てなかった。

こんな子供の僕のことだって、聞いてくれた。

マナの時だって、ミサトさんにマナを助けてやれって食ってかかってくれたっけ。）

シンジは、加持の人間としての器の大きさに憧れていた。

だが、アスカも同じか、それ以上の器を持った人間だと分かって、急に不安になった。

果たして、自分はアスカに釣り合う男なのだろうか。

何でアスカは自分と婚約してくれたのかと。

（僕はそんな男になれるのか。

アスカに釣り合うほどの男になれるのか。

やっぱり無理なのかもしれない。

でも、僕がアスカを好きな気持ちは本当だから。

いつかは、きっとアスカや加持さんみたいになってみせる。

そうだ、希望を捨てたら駄目なんだね。

僕は、いつかきつと、アスカにふさわしい男になってみせる。

そうだ、僕も負けない、くじけない、力の限りに戦うしかない。

そして、必ずいつかはアスカの心を掴んでみせる。）

シンジは、いつかきつとアスカと対等に渡り合えるだけの器を持った男になってみせる、そう決意を新たにし、アスカに振られるかもしれないという不安を振り切った。

そんなシンジの心が伝わったのだろうか。

アスカは最後の歌を終えると、笑って振り向いて言った。

「シンジ、あんたの友達を助けに行くわよ。良いわねっ！」

シンジにとって、アスカの笑顔は、とても眩しかった。

「うん、アスカ、大好きだよ。」

ついつい言ってしまった。

こうして、シンジは敵陣へと突き進んで行った。

戦場を大きく迂回して背後から敵部隊に近付くと、茂みの向こうに人影が見えた。
銃を構えて、何かを撃とうとしていた。

「カヲル君！」

シンジは思わず叫んでいた。

すると、その人影は、こっちの方を振り向いた。

シンジは咄嗟に隠れた。

気がつくときアスカの姿が見えなかったため、辺りを見渡した。
するとしばらくして、アスカの声がした。

「シンジ、ちょっと手伝ってよ。」

アスカは、背中に血まみれのハウレーンを背負っていたのだ。

アスカは、怪我人を助けるのが先だと主張したため、カヲルは後回しにして、彼女を助けることにした。

シンジは、アスカと二人で肩に担いで運んで行った。

運んだ先は中学校だ。保健室に寝かせて、後のことは電話でマックスやミリアに任せた。

そして、運ぶ途中でカヲルを助けるための作戦を、アスカから色々聞かされた。

戦場に向かってしばらく進むと、運の良いことにヘリが見えたので、近寄って行った。

電話でヘリを呼び出すと、そのヘリがたった今ラブリーエンジェルを運んできたばかりだと

ということが分かったため、彼女の運搬を、ヘリに頼むことにした。

こうしてシンジ達は、ラブリーエンジェルやジャッジマンと合流することになったのだ。

「お久しぶり！みんなしぶといねっ。まだくたばってなかったのかい。」

レッドことアスカは、唇に笑みを浮かべていた。

「はん、アタシ達が簡単にくたばるものかい。ゴキブリよりも生命力は強いのださっ。」

「やっぱり、レッドなんだね。」

「やっぱり、あんたがいなきゃ、ラブリーエンジェルじゃないよ。」

「あんたがいれば、百人力さ。」

「良く言うよ。レッドが来るって聞くまでは、遺書を書くなんて言っただ奴がよ。」

「ちょっと、それは言わない約束よ。」

「だれが約束したのださっ。」

急にその場が賑やかになった。

「おっと、お喋りはどこまでっ！」

アタシが来たからには、敵に好き勝手はさせないよっ！いいねっ！」

「おい、ちょっと待て。お前は誰だ。」

それまで黙っていたジャツジマンが、割り込んできた。

声は荒く、どうやら怒っているようだ。

ジャツジマンはアスカを睨み付けた。

目と口しか出していないマスクのせいで、アスカだとは分からないようだ。

もちろん、アスカがわざと声色を変えているせいもあるが。

「アタシは、ワイルドウルフの紅い狼さ。これから、黒竜部隊と戦うのさ。」

アンタは、こいつを守ってるんだ。分かったかい？」

「何だ、こいつは……」

「そいつは、碇シンジさ。質問は無し！これから10分後に作戦開始！良いねっ！」

「何だとっ……」

「はん！こっちは、アタシらに任せるんだよ！あんな奴ら、直ぐに蹴散らしてやるぞ。」

アスカはそう言って、ブルー達を引き連れて行った。

（僕も行かなくちゃ。）

シンジも駆け出したため、止むなくジャッジマンも後を追う破目になった。

「おい、レッドウルフ！あと2分で撤収だぞ！」

「ああ、分かっている。でも、このまま逃げるのは、しゃくじやないか。」

レッドウルフ達レッドアタッカーズは、必死に黒竜部隊の足止めをしていた。

だが、敵にはどのような武器も通じなかったため、大した足止めにはならなかった。

「しかし、一体誰がくい止めるんだ。」

レッドウルフが呟いた時、ラブリーエンジェルが到着した。

この時レッドウルフは、9人の兵士達がやって来るのが見えた。

そのうちの一人が、立ち去るようと身振りで合図を送ってきたため、

レッドウルフは止むなく撤収した。

「おい、どこに行くんだ。」

後ろを走るジャツジマンが聞いてきた。

「友達を助けに行くんです。」

シンジは律儀に答えた。シンジは、アスカに言われたルートをたどっている。

今進んでいるルートが最もカヲルと出会う可能性が高いらしいのだ。

「居たっ！」

10分ほど走ると、目の紅い少年が立っていた。

その少年は、シンジめがけて自動小銃を乱射してきた。

「危ない！」

ジャツジマンがシンジを咄嗟に突き飛ばす。

と、それまでシンジが居た空間に銃弾が雨あられと撃ち込まれる。

「カヲル君！僕だよ！碇シンジだよ！思い出してっ！」

その瞬間、カヲルの動きが止まった。

「イカリシンジ…。ナツカシイナマエノヨウナキガスル。」

カヲルは呟いた。

（良かった。僕のことを覚えていてくれたんだ。）

「カヲル君！僕だよ！碇シンジだよ！お願いだよ、もう、戦わない

でっ！」

「イカリシンジ…。」

「カヲル君！僕だよ！碇シンジだよ！

綾波から聞いたよ！カヲル君が記憶を失っているかもしれないって！」

「アヤナミ…。イカリシンジ…。ウツ！」

カヲルは頭を抱えて、苦しそうな顔をした。

「カヲル君！大丈夫！」

シンジは、カヲルの側に駆け寄った。

「カヲル君！カヲル君！カヲル君！」

シンジは、カヲルの顔を覗き込んだ。そして、カヲルの手を掴んだ。すると、カヲルの顔が徐々に穏やかなものに変わっていった。

「君は、シンジ君…。僕は、一体…。」

「良かった！記憶が戻ったんだね！」

シンジは、泣きながらカヲルを抱きしめた。

「シンジ君…。そうか、僕は帰ってきたのか…。」

こうして、カヲルは正気を取り戻した。

「おい、もう大丈夫なのか？」

しばらくしたら、ジャッジマンが恐る恐る近付いてきた。

「ええ、もう大丈夫です。おそらく、ゼーレに洗脳されていただけですから。」

「まあ、いいけどな。他の奴らはどうなっているんだ。」

「ラブリーエンジェルが倒すそうです。」

「だが、どうやって倒すんだ。」

「ええ、何でも、アンチATフィールド発生装置があるという話です。」

それで、相手に攻撃が伝わるようにするんです。あ、でも、これは秘密にしてくださいね。」

「ああ、分かったよ。そうか、うまくいくといいな。」

だが、お前も勇気があるな。見直したぜ。」

ジャッジマンの言葉に、シンジは笑顔で応えた。

（アスカ、僕はやったよ。アスカも頑張ってる。絶対に死なないでっ！）

シンジは、アスカの無事を祈った。

第32話 決戦！第壹中学校（中編3）（後書き）

あとがき

今までのシンジは、逃げてばかりで、自分から進んで何かをしようとはしませんでした。

例外は、エッチなこととアスカの気を引くことだけ。

そんな自分の欠点をシンジは今日を機会に徐々に気付くようになります。

でも、やっぱりシンジはまだ中学生。

思ったことを実行に移せるかというと、必ずしもそうではありません。

しばらくは、3歩歩いて2歩下がるような状況が続くでしょう。

第32話補完 決戦！第壱中学校（中編3・5）

シンジがアスカの心配をしていた頃、アスカは戦いのさなかにいた。

（いたっ！）

アスカの目は、一人目の獲物を捉えていた。

（頼むから、効いてよね。）

アスカは、試作品のアンチATフィールド発生装置のスイッチを入れると、

茂みを利用して敵の真横に音も無く忍び寄り、敵の腹に思いっきり体重の乗ったパンチを叩き込んだ。

「ぐっっっ！」

敵が腹を抱えると、側頭部に強烈な回し蹴りを炸裂させた。

「うっっっ。」

敵は地にはいつくばった。

しかし、他のメンバーがうまく他の敵の気をそらしているため、他の敵には気付かれなかったようだ。

（よし。こいつに麻酔を打ち込んでと。）

アスカは、巨象でも一発で眠らせるほどの強力な麻酔を打ち込んだ。

そうして、次の獲物を探して辺りを見回した。

同じ頃、アスカ以外のラブリーエンジェルのメンバーも戦っていた。

（行くよっ！ジェットストリームアタックだよっ！）

ブルーは、身振りでブラウンとグリーンに作戦を伝えた。
直ぐに二人はブルーの後に付く。

ブルーは、なるべく音を立てないように敵に近付くと、一気に攻撃を加えた。

「はっ！」

最初に、ブルーが敵の前で地面を蹴ってジャンプする。
そうして、敵の目を頭上に引きつけて、銃を連射する。
すると、オレンジ色の壁がそれを防ぐべく展開される。
その際にブラウンが左からパンチを繰り出す。
グリーンは右からキックだ。

相手が倒れた所を、ブルーが首筋に体重と重力が加わった手刀を叩き込む。

「ぐぶっ。」

敵は、ひとたまりもなく倒れた。

「やった。命懸けだけど、一人倒したよ。」

「ああ、やったね。」

3人とも、にこりと笑った。

だが、この技は、そう何度も使える技ではなかった。

タイミングを合わせるのに非常に気を使うため、体力の消費も激しいからだ。

「レッド、何と言っても、あんたが頼りなんだよ。」

ブルーは呟いた。

アスカの次の獲物は、直ぐに見つかった。

アスカは、再び音もなく近寄ると、敵の顎に強烈なアッパーを打ち込もうとした。

だが、オレンジ色の光が遮った。

（こんちくしょおおおおおおおおおおお！）

アスカは、渾身の力を込めて敵のボディにパンチをぶち込んだ。だが、またもやオレンジ色の光に阻まれ、敵はニヤリと笑った。

（ちくしょうっ！通じないなんてっ！本当にやばいつ！）

アスカは唇を噛んだ。

やはり試作品のためか、頼みの綱のアンチATフィールド発生装置

が通用しなかったのだ。

だが、絶望的な状況に陥っても、アスカの闘志は衰えなかった。

（ふん、やるじゃないの。だけど、アタシは逃げないよっ！）

アスカは、どんな絶望的な状況でも決して逃げない、負けない、くじけないのだ。

そう、アスカは、誇り高き戦士なのだから。

今アスカが逃げ出せば、仲間達が皆殺しにされることが分かっているから、

アスカは僅かな勝利の可能性に賭けるのである。

（シンジに、絶対に生きてもう一度、会ってみせる。絶対に…。そのためにも、アタシは必ず勝ってみせる。）

アスカの脳裏には、シンジの優しそうな顔が浮かんでいた。

（あんな弱虫でも、使徒と戦って勝ったんだ。アタシは、シンジよりもずっと強いんだ。

そのアタシが、絶対に負ける訳にはいかないのよっ！）

誇り高き狼のように、どんな強い敵に対しても、決して怯まない。

それがアスカなのだ。

どんなに絶望的な状況であろうとも、アスカの目は、まだ輝きを失っていないかった。

第32話補完 決戦！第壹中学校（中編3・5）（後書き）

あとがき

アスカがエヴァにこだわったのは、それが生きる支えだったから。負けず嫌いだっただのは、負けが死に直結する傭兵だったから。シンジのことを嫌っていたのは、シンジが逃げてばかりいたので、決して仲間を見捨てない主義のアスカにすれば、許せなかったから。これまでの他のSSでのアスカとは、違った解釈にしました。その分、シンジがへっぴこになってしまいました。それはアスカと比べるから。

普通の中学生と比べると、知力・体力・勇気など殆どの点で、シンジ能力は抜きんでいます。

第33話 決戦！第壹中学校（後編）

「パターン青の反応が、一つ消えましたっ！」

「何っ！」

発令所では、加持が叫んでいた。

「一体、どういうことだ。確認しろ。」

「はい、ついさきほどラプリーエンジェルが到着し、作戦行動を開始したそうです。」

「では、黒竜部隊のうちの1人を倒したということか？」

「いえ、確認出来ません。」

付近からはラプリーエンジェル以外の部隊は全て撤収していますので、情報が得られません。」

「そこを何とかならないか。」

「すみません。あっ！」

「何っ、どうした。」

「パターン青の反応が、また一つ消えましたっ！残りは8つです。」

加持は、少し迷った後ジャッジマンに電話をかけたが、ジャッジマンは出なかった。

「ちっ！」

舌打ちすると、止むなく加持はレッドウルフに電話をした。

「おい、そちらの様子はどうなんだ。」

「レッドアタッカーズとジャッジマンの部隊は撤収した。今は、黒竜部隊とラプリーエンジェルが戦っている。」

散発的に銃声があるが、お互いの動きは良く分からないよ。」

「じゃあ、銃声は近くなっているのか。それとも遠ざかっているか。どうなんだ。」

「そうだね。あまり動いていないようだね。足止めには成功しているようだね。」

「分かった。何か動きがあったら、教えてくれ。」

加持が電話を切るのを待っていたオペレーターが報告をした。

「パターン青の反応は、後3つになりました。」

「えっ！」

加持は本当に驚いた。電話をしていたのは、せいぜい5分ほどだ。その短い間に反応が5つも消えたことになる。

加持が考え込んでいると、今度は驚きの報告があった。

「こちら、ラブリーエンジェルの隊長、ブルーです。黒竜部隊を殲滅しました。」

その瞬間、発令所のあちこちから歓声が上がった。

なにしろ、ついさっきまで敵の快進撃の足止めさえも出来ずにいたのだから、無理も無かった。

加持は、聞きたいことがたくさんあったが、アスカに関わることがあるとまずいと思い、

この場では聞かないことにした。

だが、ホツとしたひとときも長くは続かなかった。オペレーターの一人が叫んだからだ。

「大変です。黒竜部隊の後ろから、2個中隊、約400人の部隊が侵攻してきます。」

加持は、すぐに応戦を命じようと思ったが、ブルーが先に口を開いた。

「加持部長代行、彼らは我々が引き受けます。良いですね。」

「おい、本気か。おそらく奴らは白龍部隊だぞ。無茶はよせ。」

「大丈夫です。2時間以内にカタを付けます。」

「分かった。だが、危なくなったら、直ぐに言え。」

「了解しました。」

ブルーは敬礼して、通信を切った。だが…。

「加持！アンタ、彼女達を見殺しにするつもりなの！」

それまで黙っていたミサトが加持を睨んだ。

「悪い、俺はアスカに約束したんだ。

ブルーの言うことを聞くとな。

なあに、アスカのことだ。何か策があるんだろうよ。

黒竜部隊を倒したのも、アスカの協力無しには出来ないしな。」

加持はそう言っつて、ミサトをなだめた。

だが、さすがの加持もアスカが戦っているとは思っていなかったのだ。

先日の公園の一件にしても、アスカがワイルドウルフの力を借りたものと思っていた。

実際に、公園の一件の後にはアスカはワイルドウルフの力を借りており、

加持の所にも諜報部から報告が来ていたため、

公園の一件もワイルドウルフの力を借りたものと加持は判断していたのだ。

だが、実際は、アスカはカイザーナックルを握りしめて、白龍部隊と死闘を繰り広げていたのだ。

ゼーレの精鋭中の精鋭部隊と言われる白龍部隊。

全員が青い目をした白人であることが部隊名の由来らしい。

その白龍部隊は、全員がグリーンベレーやスペツナズの特特殊部隊上がりと言われており、

世界のどの傭兵部隊も一目置く存在だったのだ。
ジャツジマンやレッドウルフですら正面切って戦いたくない相手だったのだ。

だが、ラブリーエンジェルの9人の少女達は果敢にも、他人の目から見ると無謀としか写らないが、白龍部隊に挑んで行った。

「おい、二人とも急いでこっちに来い！」

ジャツジマンはシンジ達に小声で言った。

「はい。分かりました。」

シンジは、カヲルの手を掴んだ。

「さあ、行こうよ、カヲル君。」

カヲルは、返事の代わりに微笑んだ。

ジャツジマンは、シンジ達が自分の方へ向かって走り出したのを確認すると、

頭を下げて小走りに駆け出した。

「いいか。俺の後を付いて来るんだ。分かったな。」

「はい。」

シンジは返事をする、ジャツジマンの背中を見ながら走り出した。だが、少し走ったところでジャツジマンに尋ねた。

「すみません、敵がどうなったのか、教えてください。」

「ああ、ちょっと待ってくれ。え〜と、何っ！馬鹿なっ！」

「えっ、どうしたんですか。」

「あ、いや、すまない。敵の部隊は、僅か10分で全滅したそうだが、俺達が30分近くかけて、満身に足止めすら出来なかった敵をな。」

「そうですか。敵を倒したんですね。」

（良かった。けど、アスカは無事なのかな。心配だなあ。）
ほっとしたシンジだったが、アスカの無事が確認出来るまでは安心出来ない。

「いや、また新たな敵が現れたらしい。だから、俺達も急いで逃げるぞ。いいなっ！」

ジャツジマンの言葉に、シンジは頷いた。だが、シンジの頭の中に疑問が湧いて出た。

「ジャツジマンさん。ラブリーエンジェルって、強いんですか。」

「ああ、俺達傭兵の世界の中でも、5本の指に入る部隊だろう。」

「じゃあ、新たな部隊にも勝てますよね。」

「どうした。何でそんなことを気にするんだ。彼女達の中に、知り合いでもいるのか？」

シンジはジャッジマンに対して、アスカに指図された通りに答えた。

「ラブリーエンジェルが負けると、中学校にいる友人達に危害が及ぶんです。」

それに、アスカも学校の中でMAGIをコントロールして、戦闘のサポートをしている筈なんです。」

「そうか。あの可愛い婚約者か。それじゃあ心配だな。」

シンジは、嘘をつくことに少しだけためらいがあったが、運良く態度には現れなかったようだ。

こうして、ジャッジマンをまんまと騙すことに成功したのである。敵を騙すには味方からと言うが、シンジはちょっぴり罪悪感を感じていた。

「やったあ、映画は大成功だ。」

ケンスケは喜色を満面に浮かべていた。

結局、体育館は開場前に長蛇の列が出来て、9時頃には整理券が無くなってしまっていた。

このため、あぶれた人達は屋外に回されたのである。

屋外なので正確な人数は把握出来なかったが、おおよそ1万人以上の観客を動員したことになる。

その余波で、飲食関係の出店を行った部はかなりの大儲けだったという。

店にもよるが、昨年の上の倍以上の売り上げがあったらしい。

「良かったですね、成功したうえに、無事に終わって。」

ユキも笑って言う。

「おう、ケンスケはよう頑張った。」

「でも、アスカと碓君はどうしたのかしら。」

ヒカリは二人のことが心配のようだ。

それもそのはず。もうじき文化祭の最後を飾るイベント、フォーケダンスが始まるからだ。

このアイデアは、男と女を仲良くさせてあげようと考えるミサト以外には思いつかないであろう。

4人がアスカ達の心配をしていると、話題の主が二人で現れた。

「アスカ、もうすぐ始まるわよ。何やってたのよ。」

「ヒカリ、ごめん。ちょっと散歩したくなっちゃって。シンジも付き合わせていたの。」

「なんや、惣流は、人の気も知らんで。」

「まあ、いいじゃないの。ねっ、ヒカリ。」

「ええ、まあね。」

「あのなあ、わいは、ケンスケが頑張っているのに、お前が香気にぶらぶらしているのはおかしいと言ってるんや。ヒカリは関係あらへん。」

「なんだ、そう言うことね。相田なら問題ないじゃん。ねえ、アンタ、問題無いでしょ。」

アスカはケンスケに問いかけた。

「ああ、もちろんだよ。」

トウジは知らないだろうけど、惣流は、昨日まで、陰で色々と手伝ってくれてたんだ。

トウジよりも、よっぽど助かったのだ。「」

「なんや、お前も友達甲斐の無いこと言うなあ。」

「そういう問題じゃないだろう。」

少なくとも、惣流のことをあれこれ言う資格はトウジには無いぞ。「」

「ちえっ。じゃあ、シンジはどつや。散歩なんかにつき合わされて迷惑やったるう。」

「ごめん、本当は、僕が行こうって言ったんだ。だから、アスカに文句は言わないですよ。」

「あっちゃあ、まあええわ。そういうことにしといてやるわ。」

トウジは、自分が不利と知ると、強引に話を終わらせた。

「じゃあ、皆、いくやろ。」

トウジの言葉に、皆頷いた。

こうして、アスカ達の中学2年の文化祭は終わりを告げた。
アスカの友人達は、この日繰り広げられた激しい戦いのことを、今は知らない。

「ねえ、シンジ。ちょっと公園に寄ろうよ。」

文化祭が終わり、アスカとシンジはネルフに用があると言って、皆と別れた。

渚カヲルに会いにネルフに行くためだ。

その途中の公園で、アスカは休もうと言ったのだ。

「で、なあに。」

シンジが聞くと、アスカはリボンをかけた小さな包みを取り出した。

「はい、シンジ。バレンタインのチョコレートよ。」

「えっ、あ、ありがとう。本当に嬉しいよ。」

「大したものは買えなかったの。その代わりに、ちょっと耳貸して。」

「
シンジがアスカの顔に耳を寄せると、アスカはシンジの顔を正面に向けて、いきなりキスをした。」

「んっ。」

「何かシンジの口の中に入って来た。シンジは少し驚いたが、すぐに真っ赤になった。」

「大した物じゃなかったから、ちょっとインパクトを与えたのよ。」

「そう、アスカはチョコを口移ししたのだ。これにはさすがにシンジも驚いた。」

「もっとも、それ以上に喜びの方が大きかったが。」

「ありがとう、アスカ。」

「初めてもらうチョコがこんなに良いものだなんて。本当に嬉しいよ。」

「良いのよ、さっきもアタシのことを庇ってくれたし。」

「でも、トウジも、いくら知らなかったとはいえ、酷いよ。」

「アスカは命懸けで戦っていたんだから。それなのに、あんな事を言うなんて。」

「でも、シンジだって知らなかったら、鈴原と同じことを考えたでしょ。」

「だから、しょうがないのよ。」

「でも…。」

「良いのよ。アタシは慣れてるもの。」

「えっ。」

「うっん、気にしないで。」

アスカは、そう言うとシンジを軽く抱きしめた。シンジも、そんなアスカを抱きしめた。

（そうか、そうだね。アスカは辛い思いをしてきたんだよね。それなのに、そんなことが言えるなんて、やっぱりアスカは凄いよ。僕は、まだまだ敵わないや。）

シンジは、アスカに惚れ直していた。

（そうだ、今なら聞いても大丈夫かも。）

「ねえ、アスカ。何で僕と婚約してくれたの。」

僕は、アスカと違って、いつも逃げてばかりだった。

今思うと、本当に情けないと思う。

そんな僕と何で婚約してくれたの。」

「アタシ、シンジのことを知らなかった。

だから、弱虫だと思っていたの。

でも、アタシは気付いたの。」

シンジはアタシと違って、戦場を知らない普通の中学生なんだって。だから、逃げてもしかたがないんだって。」

「そんなことないよ。」

アスカは、僕には想像も出来ないほど辛い思いをしてきたんだよね。それなのに、他人のために戦っている。

僕には、そんな真似は絶対に出来ないよ。やっぱり、僕はアスカに敵わないよ。」

「そう。敵わないならどうするの。」

「今からでは遅いかも知れないけど、アスカと同じように頑張りたい。」

そして、いつかはアスカに追いつきたいと思っている。

僕はもう、逃げたりしない。」

「そう。じゃあ、他人のために、エヴァに乗って戦えるの?」

「今はまだ無理だと思う。」

けど、今でもアスカのためなら戦える。

僕は、アスカのことが大好きだから。」

「アタシは、傭兵だった女よ。それに、アタシの手は、血まみれなのよ。」

そんな女でも良いの?後悔しない?普通の女が良いと思わないの?」

「アスカは、誤解している。」

僕は、アスカが望むなら、傭兵になってもいい。手が血まみれになってもいい。

僕は、アスカじゃなきゃ駄目なんだ。」

そう、それが今のシンジの、偽らざる本心なのだ。

「ふん、アタシに振られたらどうするのよ。」

「そんなことは考えないよ。僕は振られても振られてもアスカにアタックするよ。」

「まあ、良いわ。今は婚約中ですよ。

振るも振らないもないわよね。

アタシは、シンジの優しい所は好きなんだけどね。」

「えっ。」

(ア、アスカが僕の事、好きって言うてくれた。)

好きと言われて、シンジは真っ赤になった。

それを見たアスカも真っ赤になる。

そうして、しばらく時間が止まったように、二人は固まっていた。

第33話 決戦！第壹中学校（後編）（後書き）

あとがき

ネルフの傭兵部隊約2、200人対ゼーレの部隊約900人の戦いは、ネルフの勝利に終わりました。

ネルフの損害は、ヴァンテアンの約200人+約100人の重軽傷者です。

ゼーレの被害は、900人の死傷者です。ネルフの大勝利に終わりました。

戦闘の大まかな経過

アスカ・シンジ

ネルフ

ゼ

ーレ・カヲル

11:30

ゼーレ発見

侵攻

12:00

ヒカリ達と昼食

傭兵応戦

交戦開始

12:30

食事終了

北と西に増援部隊派遣

交戦

13:00

アスカとシンジ出撃

増援到着

黒竜部隊反攻開始

レッドアタッカーズ移動

1 3 : 3 0 ハウレーン救出
ハウレーンに銃を向ける

レッドウルフが応戦
他の応援部隊到着

1 4 : 0 0 ハウレーンを学校に ジャッジマンも応戦

1 4 : 2 5 ブルー達と合流 応戦

1 4 : 3 5 作戦開始

1 4 : 4 5 黒竜部隊殲滅
白龍部隊侵攻開始

1 5 : 4 5 白龍部隊殲滅
白龍部隊全滅

1 6 3 : 0 フォークダンス

第33話補完 取引

ゲンドウは、司令室で座りながら加持と連絡を取っていた。

「どうだった？碓よ。」

加持との連絡が終わると、冬月はゲンドウに尋ねてきた。

「我が方の損害は大きいが、思ったよりは少なかった。

死者1人、瀕死の重傷者が3人、1月以上の入院が見込まれる重傷者が約200人、その他負傷者が150人ほどだ。」

ゲンドウは静かに答えたが、冬月は驚きを露にした。

「おい、碓よ。死者の数が2桁は違うだろう。」

どう見ても、100人以上の死者が出てもおかしくない状況だった筈だ。」

だが、ゲンドウは落ち着いて答えた。

「アスカ君の功績だ。」

MAGIを用いて的確な情報を味方に伝えたこと、
第壱中学校付近に有線の監視網を設置してあったこと、
加持一尉の命令に先んじて部隊を動かしたこと、
黒竜部隊に対して的確な対処法を用意していたこと、
これら全ての結果が、少ない死者数に現れている。」

「黒竜部隊が現れた時には、私も驚いたよ。」

これで終わりかと思っただ位だ。

「一体、どんなマジックを使っただんだ？」

「ワイルドウルフの最精鋭部隊を投入したのは知っているな。その部隊に対処法を予め伝えておいたそうだ。」

「対処法なんて、あるのか？」

「複数人による、同時攻撃だそうだ。」

「要は、誰かが囮になって敵の目を引いて、残る者達が攻撃を加えるのだらう。」

「皮肉なものだ。使徒が相手の時は、そのような戦法は通じなかったというのに。」

「そうだな。」

「まあ、そのような状況に持ち込めなかったということか。」

冬月は、アスカが来てからの使徒を思い出していた。

第6使徒の時は、エヴァが式号機一体しかなかった。

第7使徒の時は、敵が海を背にしていたため前面からしか攻撃出来なかった。

第8使徒の時は、エヴァを一体しか投入出来なかった。

第9使徒の時は、敵の真下からしか攻撃出来なかった。

第10使徒の時は、空から敵が落ちてきた。

第11使徒の時は、エヴァは戦うことすら出来なかった。

第12使徒の時は、敵の本体が分かった時には初号機が取り込まれていた。

第13使徒の時は、ミサトがいなかったため、ろくな指揮が出来なかった。

第14使徒の時は、シンジが逃げ出し、零号機も片腕だった。

第15使徒の時は、空から敵が降りて来なかった。

第16使徒の時は、式号機は起動せず、初号機も凍結中だった。

第17使徒の時は、動けたのは初号機だけだった。

今さらながら、いかに不利な状況下での戦いを強いられてきたのか、思い知らされる。

「まあ、これでS計画の前半は終わったようなものだ。

まさか、ここまでうまくいくとは思わなかったよ。そうは思わないか、碓よ。」

「ああ、そうだな。」

今回の作戦においては、傭兵部隊に死傷者が出たものの、ネルフ職員には一切人的被害は出ていない。

物的被害も同様だ。それに対して、ゼーレの被害は甚大である。何せ、精鋭部隊である、黒竜部隊と白龍部隊を失ったのだから。

「しかし、敵の手筈がここまで揃っているとは思わなかったな。この分だと、こちらから仕掛けるのが遅かったら、手痛いダメージを受けていただろう。」

「アスカ君の作戦に乗って、大正解だな。」

「ああ……。だが、勝負はこれからだ。」

「それはそうと、アスカ君達はどうしている。」

「例の渚という少年の見舞いをしてから、家に帰った。」

「そうか、あの少年はどうする、碇よ。」

「アスカ君の話だと、エヴァに乗れる可能性があるそうだ。」

「まさか、そんなことをして、シンジ君がウンと言うと思うのか。」

「アスカ君に頼んである。問題無い。」

「確かに今のシンジ君なら、アスカ君が頼めば渋々ながらもウンと言いかもしれないな。」

「だが、アスカ君は引き受けてくれたんだろうな。」

「条件を幾つか出してきた。それで手を打った。」

「そうか。これでエヴァが3体揃うわけか。守りも磐石なものになるな。」

「戦略自衛隊の方も大方押さえてあるし、安心だな。」

「まさか、他国の軍隊は来ないだろう。」

「過信だな。十分あり得る。」

「何、そんな話は聞いてないぞ。そんな動きがあるのか？」

「ああ、残念だがな。」

「対策は考えてあるのか。」

「ああ、もう手は打ってある。」

「早いな。」

「ある組織からの打診でな。我々に協力してくれるそうさ。」

「ほう、お前が簡単に信じるとはな。」

「レッドアタッカーズの真の雇い主からだ。疑う理由はあるまい。」

「そうか。だが、相手は何を要求してきた？」

「必要に応じて、エヴァを貸し出して欲しいそうさ。」

「ほう、それで、何て答えたんだ。」

「パイロットが了解すれば構わないと答えておいた。」

「おい、それはまずいぞ。」

鈴原君では大した事は出来まいし、シンジ君がウンと言つとは思えんが、それでも危険だぞ。」

「どうも、相手はエヴァを楯として利用するだけで、攻撃に使ったもりは無いらしい。」
とすれば、断る訳にはいくまい。

彼らの組織の人間の多くが、ネルフを命がけで守っている今は特にな。」

「そうか。止むをえんか。」

そう言いながら、冬月は苦々しい顔をした。

その様子を見て、ゲンドウが何かを言おうとしたが、冬月は気付かずに続けて言った。

「それはそうと、碇よ。これでアスカ君のスパイ嫌疑は晴れたと思っ
って良いな。」

「ああ。」

「だが、開発者コードの件といい、鮮やか過ぎる作戦の手並みとい
い、何か引つかかるものがあるな。何か隠しているような気がするのだ
が。」

「今調査中だが、何らかの組織と繋がっている可能性がある。」

「やはりそうか。」

「だが、アスカ君はその組織を逆に取り込んでいる節がある。」

ワイルドウルフといい、レッドアタッカーズといい、結果的にネルフのために働いている。」

「シンジ君のおかげか。」

「ああ、そうかもしれない。だが、アスカ君は、周りの人間を守ろうとしているらしい。」

「では、当面は心配無いな。」

「ああ、私が一番危なかったがな。」

「とうとう。」

「アスカ君に信用出来ないと、一度はつきりと言われただろう。あの時、嘘を言わなくて、良かったと思っている。」

もし、あの時に違う答を言っていたら、今頃アスカ君は、シンジと一緒に敵に回っていたかもしれない。」

それは考え過ぎだと言おうとおもったが、ゲンドウの表情が真剣だったため、冬月は沈黙した。

同じ頃、盟主に対して、大佐と呼ばれる男が通信を行っていた。

「盟主様、例のものは、碇シンジの手に渡りました。」

「おお、良くやった。良い結果を期待しているぞ。」

「はっ。ですが、盟主様に質問があります。」

「何だ。」

「惣流アスカは、エヴァのパイロットから降ろされたと聞いています。」

それに、碓司令との取引も成功しました。それなのに、何で惣流アスカにこだわるのですか。」

「彼女を押さえなければ、エヴァのパイロットを押さえたと同然なのだ。」

それが分からぬのか。」

「いいえ、分かりますが状況が大きく変わりましたので、一応盟主様に確認したまでです。」

今後とも、惣流アスカのガードに全力を尽くします。」

「うむ、頼むぞ。」

それを最後に通信は途切れた。大佐は、首をひねりながら部屋を出て行った。

第33話補完 取引（後書き）

キャラ設定：盟主

謎の組織のトップ。その正体・目的は不明だが、影に隠れて、チルドレン達のガードをするよう部下に指示している。

キャラ設定：大佐

謎の組織の幹部。日本における責任者。ジャッジマンの上司でもある。

第34話 戦いの後

（うわあ、一杯怖そうな顔をした人達がいるなあ。アスカは何ともないようだけど、ちょっと怖いな。トウジはどうかな。）

シンジは横にいるトウジを見た。
すると、トウジもおっかなそうな顔をして、小さくなっていた。

（何だ、トウジが怖がっているんじゃない、僕が怖がっても当然じゃないか。良かった。）

などと、シンジはちよつとずれた感想を抱いていた。

実は今、ネルフ内の会議室に、
加持やジャツジマン、レッドウルフを始めとする傭兵部隊の代表が集まっていた。

情報交換のためと言えば聞こえは良いが、要は自分の部隊の被害状況を言うのと同時に、戦果を競うのだ。

ここには、アスカやシンジ達も参加していたのだ。

「では、始めよう。まず、最初に紹介したい人物がいる。
皆も顔は知っているだろうが、惣流・アスカ・ラングレーだ。」

アスカは、加持の声に合わせて立ち、一礼した。

「彼女は、表向きは広報部所属になっているが、作戦部の通信情報分析も担当している。」

今回の戦いでも、彼女の手腕で、戦いがかなり有利になったと思う。

だから、彼女から何かを頼まれたら、手伝って欲しい。
もちろん美人だからって、変なちょっかいは絶対にかけないように
な。」

加持の言葉に、部屋の中を笑い声が響いた。

「次は、アスカの婚約者であり、エヴァンゲリオンのチーフパイロ
ット、碓シンジだ。」

シンジもアスカと同様に立ち上がって、一礼した。

「次の戦いでは、かなり頼もしい戦力になると思う。
彼の言うことも、しっかり聞いてやって欲しい。」

最後に、鈴原トウジだ。」

トウジも同様に立ち上がって、一礼した。

「彼もエヴァンゲリオンのパイロットで、鈴原トウジだ。
彼のことも、よろしく頼む。」

今後彼らも、作戦の打ち合わせには出てもらうことになる。
これからは、お互いに連携を取って戦う場面が多くなると思うから、
お互いに顔も知らないなんて事態だけは避けて欲しい。

では、エドモン中尉から、被害状況などを報告して欲しい。」

加持が報告を促した。

最初はエドモン中尉、北の守りを担当していた。

「エドモン中尉だ。」

我々は、死者2人。重傷者10人、軽傷者30人だ。
カルロス中尉の力を借りて、敵部隊100人を撃退。

敵の死者は30人、捕虜は70人だ。」

北の部隊は、敵と混戦状態になったのと、増援部隊の到着が少し遅れたことから、2人の死亡者が出ていた。

「カルロス中尉だ。

我々は、死者無し。重傷者2人、軽傷者15人だ。」

カルロス中尉の部隊は、増援部隊であったこともあり、被害は軽微だ。

次は、西の守りを担当していたリッツ大尉だ。

「リッツ大尉だ。

我々は、死者1人。重傷者5人、軽傷者20人だ。
グエン中尉の力を借りて、敵部隊150人を撃退。
敵の死者は20人、捕虜は130人だ。」

西の部隊も少し苦戦していたため、これも死亡者1人を出していた。

「グエン中尉だ。

我々は、死者無し。重傷者無し、軽傷者5人だ。」

グエン中尉の部隊は、増援部隊であったこともあり、被害は軽微だ。

次は、東の守りを担当していたヴァンテアンのバレスだ。今回の被害が最も大きかった。

「バレスだ。

最初に、ワイルドウルフと惣流アスカさん、碇シンジ君に礼を言う。

君たちのお蔭で、我が部隊の多くの命と娘の命が助かった。本当にありがとう。」

バレスはそう言いながら、頭を深々と下げた。

実は、アスカの指示でワイルドウルフの1部隊が、ヴァンティアン部隊の救出を行っていたのだ。

このため、奇跡的に死亡者が出なかったのだ。

シンジに礼を言ったのは、シンジがハウレーンを助けたと聞いていたからである。

「我々は、死者無し。重傷者180人、軽傷者50人だ。

敵部隊140人を撃退。

敵の死者は30人、捕虜は110人だ。」

次は、レインボースターだ。

「エリック大尉だ。

我々は今回は戦闘に参加しなかった。以上だ。」

次は、レッドアタッカーズの番だ。

「レッドウルフだ。

我々は、死者無し。重傷者無し、軽傷者5人だ。

敵部隊10人と戦い、1時間ほど足止めをした。以上だ。」

レッドウルフは苦々しい顔をした。今回の戦闘では、何の戦果もあげなかったからだ。

しかも、400人も大部隊でたった10人の部隊と戦って何の戦果も無いなど、

普通では考えられないからだ。

次はワイルドウルフだ。

「ウォルフだ。」

我々は、死者無し。重傷者1人、軽傷者10人だ。

敵部隊100人を撃退。

敵の死者は10人、捕虜は90人だ。」

次は、特別に参加していたラプリーエンジェルの番だった。

「ブルーだ。」

我々は、死者無し。負傷者無しだ。

敵黒竜部隊10人と白龍部隊400人を撃退。

敵の死者は350人、捕虜は60人だ。」

それを聞いて、その場の全員が顔色を変えた。

普通は、傭兵同士の戦いでは半分以上の死者は出ない。

死ぬまで頑張って戦う者がいないからだ。

だから、この死者の数は異常だったのだ。

だが、ジャツジマンは気にせず続けた。

「ジャツジマンだ。」

我々は、死者無し。重傷者無し、軽傷者2人だ。

敵部隊10人と戦い、30分ほど足止めをした。以上だ。」

最後に加持が締めくくった。

「みんな、良く頑張ってくれた。」

敵は死者440人、捕虜が460人だ。

それに対して、我が方の損害は、死者が3人、重傷者198人、軽

傷者137人となった。

今回は、我々の大勝利だ。

今回の功績の第一は、ラブリーエンジェルだ。良くやってくれた。」

「ありがとうございます。」

加持の言葉にブルーは頭を下げた。

「功績の第二は、レッドアタッカーズだ。

黒竜部隊を良く足止めしてくれた。

あれが無ければ、大変なことになっていただろう。良くやってくれた。」

「え、ほんと？あ、どうもありがとうございます。」

レッドウルフは意外そうな顔をしていた。

それは、レッドウルフだけではない。

他の隊長達も、『何であいつらが？』という顔をしていた。

その雰囲気を感じた加持は、皆にありのままを知ってもらった方が
良いと思い、

黒竜部隊の実態を知らせることにした。

「ちょっと、この映像を見て欲しい。」

加持は、壁際の大きな液晶画面に、黒竜部隊とレッドアタッカーズ
の攻防を映したのだ。

それを見た他の隊長達は、顔色を変えていった。

「これを見てもらえば分かるが、黒竜部隊は普通の部隊では相手に
ならない。」

足止めさえも難しいのだ。

他の部隊で、レッドアタッカーズよりもうまく戦えるという者がいたら、教えて欲しい。

ヴァンテアンでさえ、手ひどい目に遭っているのだから。」

加持の言葉に皆黙ってしまった。だが、バレスが質問を投げかけた。

「わしは文句を言うつもりは無いが、一体どうやってあいつらをやっつけたんだ。

教えて欲しい。」

バレスは、加持を見た後、ブルーを見つめた。それに、ブルーは応えた。

「特殊な装備を付けて、特殊な訓練を受けた者が対処したのです。」

「では、我々も同じ装備をして、同じ訓練を受ければ、あいつらと戦えるのか？」

「いえ、難しいでしょう。」

装備は同じでも、それを扱うには特殊な訓練が必要になるからです。

「

「では、どんな訓練をしたのだ。教えてくれ。」

ブルーはちらりとウォルフを見た。

ウォルフは、目で構わないという合図を送った。

「そうですね。まず、格闘技の腕を磨きます。」

バレスは首を傾げて、問いかけてきた。

「そんなことをやって、何の意味があるのだ。」

「銃が通じないからです。従って、肉弾戦で敵を倒す必要があります。」

それを聞いたバレスは、口を開けたまま、何も言えなかった。だが、ブルーは続けた。

「それから、素養も大切です。特殊装備には相性がありますから。」

「と、言うこと。」

「効き目には個人差があります。」

ですから、下手をすると全く効かない可能性もあります。」

その時に、素早く逃げられるだけの身のこなしも必要になります。」

「それでは、恐ろしくて、誰も敵に近づけないな…。」

バレスは肩を落した。

「ですが、安心してください。黒竜部隊は、あれで最後です。」

おそらく、もうあのような部隊は出て来ないでしょう。」

それを聞いた他の隊長達は、心の中で安堵した。

「では、その話はこれでおしまいだ。戦いは、これで終わった訳じゃない。」

今回は、ヴァンテアンの被害が大きかったため、今までの守備計画

を見直す必要がある。」

加持はそう言うと、第3東京市の地図を壁に貼った。

「今までは、

東はヴァンテアン2個中隊、400人。

西はリッツ大尉200人、グエン中尉100人、カルロス中尉100人。

南はワイルドウルフ2個中隊、400人。

北はレッドアタッカーズ1個中隊、200人とエドモン中尉100人。

市内中心部にレインボースター1個中隊、200人とジャツジマンの部隊200人。

予備としてレッドアタッカーズ1個中隊、200人。

ガード役が昼は主に第壱中学校付近に100人。

という配置だったが。」

「これをこう変えたい。

東はワイルドウルフ1個中隊、200人とカルロス中尉100人。

西はレインボースター1個中隊、200人とリッツ大尉200人。

南はワイルドウルフ1個中隊、200人とグエン中尉100人。

北はレッドアタッカーズ1個中隊、200人とエドモン中尉100人。

市内中心部にレッドアタッカーズ1個中隊、200人とジャツジマ
ンの部隊200人。

予備としてヴァンテアン1個中隊、200人。

ガード役が昼は主に第壱中学校付近に100人。

特に質問はあるか？」

加持の声に特に反応は無かった。

「では、これで決まりだ。

おそらく、1か月以内に本格的な攻撃が開始されるだろう。

みんな、気を引き締めて頑張つて欲しい。」

そう言つて、加持は会議を締めくくつた。

会議の後、シンジとアスカは、バレスと会っていた。頼みごとがあつたからである。

「すみません、バレスさん。お呼び立てして。」
シンジはそう言って頭を下げた。

「ああ、構わんよ。で、一体何の用かね。」

「実は、黒竜部隊の中に、僕の友達がいたんです。」

「えっ！何だつて！」

「それで、本当に勝手なお願いで申し訳ないのですが、彼のことを許してあげて欲しいんです。」

彼は、洗脳されていて、最近の記憶を失っているんです。」

「アタシからもお願いします。シンジの友達を許してあげてください。」

アスカも懇願した。

（バレスさん、お願いします。カヲル君のことを許してあげてください。）

シンジは、心の中で強く祈った。

その願いがバレスに届いたのか、バレスは、腕を組んでしばらく考えていたが、穏やかな顔をして言った。

「分かった。」

普通なら、話も聞かないで断る所だが、他でもない、君たちの頼みとあらば、断る訳にはいかな。

「良いだろう。君の友人を許してあげよう。」

「本当ですかっ！ありがとうございます。」
（良かった。ありがとう、バレスさん。）

「ありがとうございます。」

シンジとアスカは、礼を言いながら、深々と頭を下げた。

「カヲル君、調子はどうかな？」

「うん、まあまあだよ、シンジ君。特に体には支障がないみたいだ。」

「良かった。じゃあ、もうすぐ退院出来そうだね。」

シンジとアスカは、カヲルを見舞いにネルフの病院に来ていた。昨日の夕方、カヲルはここに運び込まれ、色々な精密検査を受けていたのだ。

「シンジ、それはまだ分からないわよ。」

洗脳されていたかもしれないけど、敵として戦ったんだもの。簡単に出させてもらえないんじゃないかしら。」

それを聞いたカヲルの顔が沈んだ色に変わる。

「でも、きっとそのうちに出してもらえるよ。僕、父さんに頼んでみる。」

シンジがそう言った時のことだった。マコトが病室に入って来た。

「アスカちゃん、僕のことを呼んでいるって聞いたけど、なんだい。」

「ちょっと、相談したいことがあるのよ。」

「良いよ。言ってみよう。」

「2つあるんだけど、一つは、ミサトの記憶がまだ戻らないでしょ。だから、作戦部とシンジ達パイロットとの連携が今ひとつになると思うのよ。」

「今まではそれでも良かったけど、今後はまずいと思うのよ。だから、日向さんに、アタシ達のすぐ近くに引っ越して来て欲しいのよ。」

「すぐ近くって言うこと？」

「具体的には、アタシ達が住んでいる部屋の隣が良いわ。それに、出来れば食事なんか一緒にしたいのよ。」

「今は、作戦部の実質的な責任者は、日向さんでしょ。」

「だから、日向さんとの連絡を密にしたいのよ。」

「葛城さんと赤木さんは、どう思うかな？」

「一応、本人には、日向さんとこれから一緒に朝晩食事を共にすることについては、

了解をもらっているわ。」

「だから、その点の問題はないわ。」

まあ、日向さんが、リツコが嫌いって言うのならあきらめるけどね。あ、そうそう。料理はこちらで用意するから、その点の心配はないわ。

日向さんは、出てきた物を食べて、必要に応じて仕事の話をするだけよ。「

「そう言われると、断れないなあ。

良いよ、僕もコンビニの弁当や外食ばかりだったから、その方が良いよ。「

その返答を聞いて、アスカは少しだけニヤリとしたが、直ぐに真剣な顔に戻った。

「で、次のお願いなんだけど、当分の間、この渚カヲルっていう子と一緒に暮らして欲しいの。「

「日向さん、僕からもお願いします。「

アスカの意図を察したシンジも一緒になって頼んだ。

おそらく、マコトと一緒になら、ネルフの外で暮らすのも許可されるだろうとの考えなのだ。

「うーん、どうしようかな。僕は家を空けることが多いけど、それでも良いのなら。「

「やったね！シンジ、日向さんはOKよ。「

アスカはニコニコ顔である。

「ありがとうございます、日向さん。「

シンジも胸をなでおろした。

（さすがはアスカだ。こんな手を打っていたなんて、僕には考えもつかなかったよ。

しかも、カヲル君と毎日食事出来るなんて、嬉しいや。）

こうして、アスカがうまく手を回して、関係者の了解を素早く得たため、

次の土曜日にマコトはシンジ達の住むマンションに越してくる事になった。

それに合わせて、カヲルも退院することになったのである。

第34話 戦いの後（後書き）

あとがき

いつの間にか、コンフォート17マンションは、チルドレン達の宿舎になってしまったようです。

コンフォート17マンション居住者

- ・アスカ、シンジ、ミサト、リツコ
- ・加持
- ・トウジと妹
- ・ヒカリと姉妹
- ・ケンスケ

2月20日から

- ・マコト、カヲル

朝食・夕食

今まで

- ・アスカ、シンジ、ミサト、リツコ、ユキ、ケンスケ（時々、加持）
- ・トウジと妹、ヒカリと妹、ユキの弟妹（時々、コダマ）

2月20日から

- ・アスカ、シンジ、ミサト、リツコ、ユキ、加持、ケンスケ、マコト、カヲル
- ・トウジと妹、ヒカリと妹、ユキの弟妹（時々、コダマ）

第34話補完 赤い死神の正体？

ネルフ内の会議室に、加持、ジャツジマン、レッドウルフが集まっていた。

最初に口を開いたのは、レッドウルフだった。

「正直言って、ラブリーエンジェルがあれほど強いとは思わなかったよ。」

加持さん、彼女達のことを何か知らないかなあ？」

「さっぱり分からん。」

そう、加持は本当に知らないのだから、答えようが無かった。

「惣流アスカは、ラブリーエンジェルの一員だと思ったけど、勘が外れちゃったね。」

彼らは、アスカがMAGIを駆使して戦闘の支援を行っていたと、思わされていたのだ。

敵を騙すにはまず味方からという訳であるが、

アスカを良く知る加持が騙されているのだから、無理も無かった。

アスカは、第壱中学校においてMAGIを駆使していたことになっており、

事実を知るのは、シンジを除けばリツコただ一人であった。

リツコはマヤに対しても、アスカの支援を行うと説明し、

途中でアスカが抜けたことを言っていなかったのだ。

もちろん、リツコの口は固かったため、秘密は漏れていない。

加持とレッドウルフの会話に、ジャッジマンが加わってきた。

「俺は、赤い死神は、惣流アスカのお姉さんか従姉妹だと思っている。」

そうすると、大抵のことが説明が付く。

もしかすると、パイロットリーダーと同一人物かもしれんな。」

「でも、そうになると、あの紅い瞳の説明が付かないよ。

僕は、パイロットリーダーは、綾波レイだと思っているし。

そうになると、彼女が赤い死神なのかなあ。

綾波レイは、過去の記録が無いって言うし。」

「レイちゃんが赤い死神とは思えないな。

パイロットリーダーは、関係ないかもしれない。

そうすると、アスカの姉か従姉妹というのが可能性としては高いかもな。」

そう言いながら、加持はタバコに火をつけ、続けて言った。

「パイロットリーダーのことは、俺も知らない。

存在するかどうかも含めてだ。

だが、式号機に乗れるということは、アスカの可能性が一番高い。

次にアスカに近い者の可能性が高いのも事実だ。」

「だが、惣流アスカは、戦自が攻め込む前日まで意識不明の重体だったことは、

複数の筋から確認している。

その時の写真も入手してある。

いくら何でも、その翌日にあれだけの動きは出来ないだろう。」

ジャッジマンが呟く。

「そうなるよ、やっぱり綾波レイという可能性が高いね。だが、ラブリーエンジェルが戦闘を行っていた日に、学校の授業を受けていたことが分かっている。」

だから、赤い死神ではない。

そうなるよ、赤い死神がパイロットリーダーだとすると、彼女は、綾波レイと惣流アスカの両方に近いっていうことになるね。

案外、3人の父親が一緒だったりね。」

レッドウルフの言葉に、加持もジャッジマンも否定する材料は無かった。

「そうか。」

そうなるよ、エヴァンゲリオンのパイロットは、

鈴原トウジ以外は、碓司令の子供だって可能性も有る訳だ。」

ジャッジマンは拳を握りしめた。

「俺は違つと思つけどな。」

加持が呟いたが、既にジャッジマンもレッドウルフも、聞いていなかった。

こうして、味方でさえも分からないほど、秘密は徹底された。

実は、戦自が攻め込んだ時にアスカが式号機に乗っていたのを覚えているのは、シンジだけだったのだ。

だから、シンジはレイが式号機に乗っていたらしいと皆には説明していた。

そこで、ゲンドウと冬月は、アスカをパイロットリーダーに仕立てようと考え付いたのである。

アスカがパイロットリーダーに仕立てられたことを知っているのは、シンジ、ゲンドウ、冬月、マヤ、マコト、シゲル、トウジのみであるし、加持にもその事は秘密だったのだ。アスカが戦自と戦ったのは、いわば二重の秘密だったのだ。

そして、アスカが赤い死神であることを知っている者はネルフ本部内にはいない。

本来は、加持が調べても良さそうなのであるが、加持はアスカにドイツ時代の女性関係を全て把握されており、かつワイルドウルフを調べると昔の女性関係が漏れるかもしれないと釘を刺されているため、赤い死神の正体が漏れることは無かった。

全てを知るのは、アスカだけであった

「やったあゝ、完成したぞ〜。」

「ええ、やったわね。でも、ごめんね。プログラムはもう一つあるの。」

「なっ、なに〜っ。」

ネルフエジプト支部では、サーシャがザナドのぬか喜びを打ち砕いていた。

「ザナド、本当にごめんね。最初に言っていたら、引き受けてくれないと思っただ。」

「はあ〜っ。まあ、いいけどさ。今度はなんだい。」

「ウイルスソフトよ。」

「おい、それって犯罪に使うんじゃないだろうな。」

「多分違うと思うけど。」

「え〜っ、けど嫌だなあ。」

「へへっ。いいものがあるんだけどな。」

「うん、何だよ。」

「『救世主アスカ』のスペシャル版ディスクがあるの。」

「えっ、あれって3月中に発売されるんだよな。」

「で、今は予告編がネットで流れているっていう話だったと思うけど。」

「それが、今回の仕事を受ける謝礼として、ソルトから送られて来たのよ。」

「どう、欲しいかしら。」

「う、うん。是非欲しい。」

「じゃあ、これで決まりね。」

「トホホ。これでまた睡眠時間が削られるのか。」

「いいじゃないの。」

「でも、スペシャル版って、何処が違うんだよ。通常版もまだ出ていないしさあ。」

「何でも、主な出演者の写真データがあるらしいの。それに、水着の写真もね。」

「何でも、スペシャル版は、夏に売り出されるみたいだし。」

「ええっ。アスカの水着の写真もあるのか。」

「ええ、もちろんよ。」

それを聞いて、ザナドは俄然やる気が出るのだった。もちろん、プリントアウトして、友人に高く売りつけようとの、セコイ根性であった。

第34話補完 赤い死神の正体？（後書き）

キャラ設定：サーシャ

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、エジプト支部に所属している。蒼い瞳、長い金髪、長身、スリム、白い肌が特徴の美少女。

目が大きいのが、大人しい感じがする、14歳のロシア系イスラエル人。

MAGIへのハッキングに成功した、伝説のハッカーグループ『ミラクル5』の一員。
ザナドとは親戚。

キャラ設定：ザナド

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、エジプト支部に所属している。黒い瞳、黒い縮れた短髪、長身、スリム、褐色の肌が特徴の、精悍な顔つきをしている14歳の少年。

正義と愛を重んじる、勇敢なイスラームの戦士でもある。
サーシャとは親戚。

あとがき

ちなみに、水着の写真は、ケンスケが撮影しています。アスカの下僕となった時の約束で、ユキとリツコの写真を撮った時に、アスカの分も撮影していたのです。これらの写真に加えて、ヒカリや他のクラスメートの写真もあります。

第35話 ヒカリの誕生日

「ヒカリ、誕生日おめでとうー!」

「おめでとう!」

「おめでとう!」

「おめでとう!」

「おめでとう!」

アスカの合図で、みんなは一斉に大きな声でヒカリの誕生日を祝った。

クラッカーがポン、ポンと良い音を立てながら飛び散り、まさに誕生日会と言った雰囲気をかもし出している。

今日は2月18日の木曜日。

前の日からユキとケンスケが中心となって準備をして、学校が終わると、皆一目散に帰ってきて、ヒカリの誕生日会に突入したのだ。

ヒカリとアスカ以外の参加メンバーは、ノゾミとコダマの姉妹に、ユキとその弟妹、トウジと妹、シンジにケンスケにカヲル、それにリツコとミサト、さらには転校生のマリア、ミリア、キャシー、マックスとアリオス、それにB組の転校生アールコートがエヴァのパイロット候補であることから呼ばれて、総勢20人だった。

残念ながら、ハウレーンは入院しているため、来ることが出来なかった。

その代わりにアールコートが急遽呼ばれたのだ。

もつとも、ヒカリが心配しないように、適当な理由で誤魔化しておいたが。

それにしても、大人数になった。

アスカは、この日のために、日曜日から火曜日までの3日間、ミサトの家を大規模に改造し、大勢の人間が入っても大丈夫なように、リビングを大きく広げていたのだ。

アスカ曰く、シンジに太陽の当たる部屋を用意したかったのも大きな理由のことだったが、この改造によって一番得をしたのがアスカであるため、説得力は今一つであったが、それでも大勢の人間が一同に会せるようになったのは好ましいことと言えるだろう。

その広くなった部屋には、テーブルが5つ繋げて並べられ、その上にはジュースや料理が山のように並んでいた。

ジュースは、オレンジ、アップル、グレープの3種類に、炭酸飲料も3種類ほど。

料理はユキが作った料理に加えて、かつばえびせんやポテトチップ、チョコレート菓子などが並んでいた。

「さあ、みんなでヒカリにプレゼントよ！」

アスカの合図によって、次々とヒカリにプレゼントが渡された。

「ありがとう。みんな、ありがとう。」

ヒカリはプレゼントを受け取るたびに笑顔で礼を言う。

たちまちヒカリの腕の中は、プレゼントで一杯になった。

「さて、最初のメインイベントは終わったわ。」

次のイベントが来るまで、お腹一杯にしましょう!」

その声を合図に、特にトウジが目の色を変えて食べ始めた。それを見たアリオスらも負けじと食べ始め、ミサトも負けずにビールを飲み出した。

さて、今この場では、5つのグループが出来ていた。

シンジ、トウジ、ケンスケ、カヲル、アリオス、マックスの男の子グループ、

ミサト、リツコ、コダマの年長者グループ、

アスカ、ヒカリ、ユキ、マリアのグループ、

ミア、キャシー、アールコートのグループ、

そしておちびちゃん達のグループである。

「シンジ、俺達は空きっ腹を先になんとかしようせ。

トウジもしばらくは休まず食べ続けるだろうしな。」

「ああ、良いよ。僕もお腹が空いているし。カヲル君もそれでいいかな。」

「ああ、シンジ君の言う通りにするよ。美味しそうないもするしね。」

こうして、シンジ達は最初は料理をたらふく食べることに専念した。

最初にお腹が膨れたのは、ケンスケとシンジだった。

「ふうっ。もう腹一杯だ。トウジの奴は、良くあんなに食べられ

るよな。

そう思わないか、シンジ。」

「そうだね。本当に良く食べるよね。」

トウジはと見ると、まだ食べ続けている。

「本当にトウジは良く食べるね。」

シンジは感心した。

「この料理は美味しいからね。そう思わないかい、シンジ君。」

「そうだね、カヲル君。僕もそう思うよ。」

森川さんて、料理が得意だね。ケンスケもそう思うよね。」

「ああ、そうだね。」

森川は小さい頃に母親を亡くしてから、ずっと料理をしていたらしいから。」

「ケンスケって、良く森川さんのことを知っているね。もしかして、付き合っているの?」

「残念ながら、まださ。お前達と違って、アツアツっていう訳にはいかないのさ。」

だが、ケンスケの言葉に対して、シンジは声を落して言った。

「残念ながら、僕はまだアスカの心を掴んではないんだ。」

婚約していると言っても、僕が強くお願いしたから、しょうがなく

って言うような感じなんだよ。

アスカは、僕が以前アスカのピンチを救ったから、邪険に出来ないだけかもしれないんだ。

もしかしたら、僕のことなんて、何とも思っていないかもしれない。からかいがいのある同居人なのかも。」

それを聞いたケンスケは、目を丸くした。

「シンジ、そんな有り様じゃ、惣流にそのうち愛想を尽かされるぞ。いくら何でも、鈍過ぎるよ。」

「どういう意味だよ。いくらケンスケでも、そこまで言うことないじゃないか。」

「だって、それじゃあ惣流が可哀相だよ。」

ここだけの話だけど、先日お前は高校生にリンチされた時、お前を呼び出した女の子のこと、覚えているか。」

「うん、確か隣のクラスだったよね。」

「その子は森川と仲が良いんだけど、実はリンチの翌日、その子は惣流に呼び出されたんだ。」

「えっ。そんな話、初めて聞くよ。アスカは僕には何も言わないし。」

「そりゃあ、言えないさ。」

惣流はその子を呼び出して、『腕の一本も、もらおうかしら。』って、言っていたらしい。」

「ア、アスカが？なんでさ、おかしいじゃないか。アスカが襲われた訳じゃないのに。」

「シンジ、お前は鈍い。鈍過ぎるぞ。」

惣流がお前に好意を持っているからに決まっているじゃないか。しかも、惣流は、怒りで我を忘れている状態だったらしいぞ。」

「アスカが…。信じられない。」

「森川が必死に止めたんだけど、その時の惣流の顔は、鬼みたいたったって言うていたんだ。」

森川も、あまりの怖さに小便ちびったらしい。それ位、惣流は怒っていたんだぞ。」

「いいよな、シンジは。」

俺なんか、ボコボコに殴られても、それだけ怒ってくれる女の子なんかいやしない。」

本当に羨ましいよ。」

「そうか…。」

「考えてもみるよ。」

惣流がリンチに遭って、ボコボコに殴られたら、シンジはどうするんだよ。」

「相手を許せるか。」

「ゆ、許せないよ。絶対に。」

「理由は？」

「そ、そりゃあ、アスカが好きだから…。あつ…。」

「やっと気付いたか。そうだよ、惣流もおそらく同じなんだよ。それなのに、シンジがそんな気持ちじゃ、お互いの心は離れていくぞ。良いのか？」

「い、嫌だよ。」

「いいか、これだけは言える。惣流は、他のどの男よりも、シンジのことが好きだ。」

シンジを傷つける者がいたら、怒り狂うほどにはな。

お前は、どれだけ惣流に想われているのか、気付くべきだ。

もしかしたら、一人前の男として好きという訳じゃないかもしれない。

でも、シンジが大きなへまをしない限り、遠くないうちに、きっとそうなるさ。

もっと、惣流のことを信じてやれよ。」

「そうか…。教えてくれてありがとう。ケンスケ、恩に着るよ。」

「シンジ君、僕もケンスケ君の言う通りだと思う。」

彼女が僕のことを助けてくれたのも、シンジ君、君のためなんじゃないかな。」

それまで黙っていたカヲルが口を開いた。

「カヲル君もそう思うのか。そうか、そうなんだ。」

そんな話をしていると、アスカが急に立ち上がったため、

シンジは話しを聞かれたと思い、ドキッとしたが、そうではなかつ

た。

「はーい、皆聞いて。これから、相田と鈴原の漫才が始まるわよ。皆はくしゅーっ。」

それを聞いて、みなヤンヤヤンヤと拍手する。

それを合図にケンスケとトウジが腰を上げた。

今回は、ヒカリの誕生日とあって、トウジも気合が入っており、練習もしている。

二人は、部屋のはしの臨時ステージ・と言ってもビニールシートが敷いてあるだけだが、の上に立った。

「これから、似^{えせ}非関西人、鈴原トウジと。」

「相方の相田ケンスケの。」

「「漫才のはじまり、はじまりーっ。」」

こうして、二人は得意の？漫才を始めた。

トウジらしいどつき漫才で、ボケ役のケンスケとの絶妙なコンビネーションが、

皆の拍手喝采を浴びるのだった。

「さーて、お次は転校生による、踊りと歌よーっ。」

次は、マリア、ミリア、キャシー、アールコートの4人組による、歌と踊りだった。

4人とも、ミニスカートにフレンチシャツという出で立ちで、

英語のヒット曲をメドレーで歌いながら、プロ顔負けの素晴らしい

踊りをみせたのである。

特にミリアは、キツイ顔とは対照的に、ブラジル出身らしい情熱的な踊りだったので、男の子達は大喜びだった。

女の子達も、ミリアの踊りが情熱的ではあるが、いやらしさをあまり感じさせないものだったため、十分に楽しめたのである。

「はーい、お次は寸劇よつ。」

次は、桃太郎をアレンジした寸劇だった。

「むかーし、むかーし、おじいさんが山に芝刈りに、おばあさんが川に洗濯しに行ったところ、

川の上流から、大きな大きなタマゴが流れてきました。

おじいさんがそのタマゴを家に持ち帰って割ると、

中から出てきたのは、美少女戦士、セーラーユキでした。」

その声と同時に、張りぼてのタマゴを割って、セーラー服を着たユキが現れた。

何故か、額には黄金色に輝く長いハチマキが巻かれている。

顔は何故か真っ赤だ。おそらく恥ずかしいのだろう。

まあ、こんなことを人前で恥ずかし気なく出来る方が珍しいかもしれない。

なお、語り部はケンスケだ。

「おじいさんとおばあさんは、セーラーユキに、悪の鬼退治をするように頼みました。」

そして、旅の途中で、きび団子と引き換えに、エヴァ初号機、エヴァ式号機、エヴァ参号機を家来にしました。」

それぞれ、シンジ、アスカ、トウジがプラグスーツを着て、顔にエヴァの仮面を被っただけの姿で現れた。ただそれだけだったが、皆には大受けした。

「こうして、鬼ヶ島の鬼退治に出かけたのです。

鬼ヶ島には、赤鬼と青鬼がいましたが、セーラーユキとエヴァは、鬼を相手に勇敢に戦いました。」

赤鬼は、酒を飲んで真っ赤になったミサトが、青鬼は仮面を被ったリッコが扮した。

そして、ちゃんちゃんばらばらと、戦う真似事をして、エヴァにやられてしまった。

それを見ていた子供達には大受けで、大笑いしていた。

「こうして、セーラーユキとエヴァによって、鬼は退治されました。」

その声に合わせて、アスカがミサトの尻を踏んづけた。

「こうして、鬼退治に成功したセーラーユキは、次のもつと悪い敵、ゼーレを倒しに旅に出ました。」

最後は、何故かアスカが先頭に立ち、全員で右手を握りしめ、拳を高く掲げて

『ゼーレを倒すぞっ。えいえいおっ！』と揃って叫んで終わった。

こんな調子で、代わる代わるステージに立って、漫才をしたり、歌を披露したり、かくし芸を披露したりして、盛り上がっていったのである。

さらに、途中からはワインが出されたこともあり、異様な盛り上がりを見せたのである。

夜の8時頃になると、おちびちゃん達は家に帰された。

そうになると、今度は大カラオケ大会となった。

歌の得意な者は一人で、不得意な者はアスカやヒカリと一緒に歌ったり、

デュエットをしたりして、必ず歌わされた。

もちろん、ヒカリとトウジのデュエットが行われたのはお約束であるが、

アスカとシンジというペアはもちろんのこと、ユキとケンスケ、ミアとマックスも歌わされ、

嫌がるリツコはアスカと一緒に歌い、その他の者もアスカが強引にペアを指名して歌わせたのである。

こうして、カラオケ大会は夜中まで続けられた。

なお、10時を過ぎた頃には、加持やマコトも参加し、

それぞれミサトやリツコとデュエットをアスカに強制されたのは言うまでもない。

11時を過ぎると、さすがにカラオケを歌う者はいなくなり、幾つかのグループに別れてワイワイとおしゃべりをするようになった。

そんな中、アスカは女子転校生達を集めた。

「皆にお願いがあるの。実はね…。」

そうしてアスカは、皆の耳の傍でヒソヒソ話しをした。

それから30分後、急にアスカが立ち上がった。

「さて、これからヒカリに最後のプレゼントを上げたいと思います。

渡すのは、鈴原君です。立ってください。」

それを聞いたトウジは、げんそうな顔をしながら立ち上がった。

「はい、ヒカリの傍に行つて。」

トウジはアスカによって、ヒカリの傍へと連れて来られた。

「さて、皆さん。鈴原君からヒカリに渡すプレゼントは、何が良いと思いますか。」

アスカが問いかけると同時に、転校生達が次々と声を発した。

「キスがいいです。」

「そうです。」

「さんせうい。」

それを聞いたトウジは真っ赤になる。

「さて、それじゃあ、リクエストもあつたことだし、皆で鈴原君にお願いしよう。」

せ〜の、キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！

アスカの合図により、皆も声を合わせて言い出した。

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

徐々にヒカリは真っ赤になり、トウジも同じように真っ赤になった。

「おい、すずはら〜。アンタ、男でしょ。」

早くしないと、ヒカリの誕生日が終わっちゃうじゃない。

男らしく、さっさとやりなさいよ。」

皆に責められて、心を決めたのか、トウジはヒカリを見る。

「ヒカリ、ええんか。」

その問いにヒカリは答えず、首を縦に振った。

「ヒカリ、ワイはお前のことが好きや。だから、…。」

トウジはヒカリにキスをした。

ヒカリの顔は一瞬驚いたような顔になったが、直ぐに恍惚の表情へと変わっていった。

1分位キスをしてから、二人の口は離れた。それを見ていたアスカは、祝福の声を上げた。

「ヒカリ、良かったね〜っ。お誕生日おめでとう。
良かったでしょう。アタシに感謝しなさいよっ。」

それを聞いたヒカリとトウジは、真っ赤になってしまった。

宴は果てし無く続くかと思われたが、さすがに12時を過ぎる頃にはお開きとなり、

このマンションに住んでいない男性陣は、マコトの部屋に移って行った。

女性陣、ユキにミリアにアールコートにマリアはリッコの部屋である。

もちろん、綺麗だからという理由だが。

リッコは嫌々ミサトの部屋に寝る破目になった。

アスカは、疲れたからというのと部屋が狭いからという理由で、ユキ達の誘いを断って、自室へと向かった。

そのおかげで、残った4人の女の子達の話題は、共通の友人であるアスカの話しに終始し、大いに盛り上がったのである。

第35話補完 見舞い

「具合はどうだ、ハウレーン。」

「まだ、傷が痛む。」

「そうか…。ゆっくり休んで、早く直すんだ。」

「父さん、すまない…。私がふがないばかりに。」

「良いんだ。お前は、『逃げる時は、常に最後尾に付け。』という言い付けを守った。立派だったぞ。」

「だが、負けてしまった。一体、何人の部下を死なせてしまったことか。」

「不幸中の幸いだが、惣流アスカ君のお蔭で、我々の部隊に死者は出なかった。」

「父さん、本当か？」

「ああ、そうだとも。そして、お前を助けてくれたのが、碇シンジ君だ。」

「彼が…。」

「ああ、そうだ。その彼に頼まれて、カヲル君という子供を許すことにした。」

ハウレーン、お前が戦った部隊の指揮官だが、洗脳されていたらしい。

碇シンジ君の友人だそうだ。もちろん、異論は無いな。」

「ああ、彼の頼みなら、しょうがない。何と言っても、妹の命の恩人だからな。」

そう、ハウレーンの妹は、シンジによって、命を救われたのだ。

妹は、病に倒れ、余命いくばくも無い状態だったのだ。

だが、その時起こったサードインパクトによって、病気は完治したのだ。

妹は、優しい顔をした男の子の顔を見たと言い、後にそれがシンジであることが分かったのだ。

それがハウレーン親子、ひいてはヴァンテアンがネルフに味方した理由なのだ。

「では、また来るぞ。早く良くなれよ。」

「ああ、分かっている。」

ハウレーンは父が病室を出た後、静かに頭を下げた。

第36話 ニブチン

(アスカに何て言っただけ切り出そうか。)

シンジは迷っていた。ケンスケの言葉が気になっていたらだ。アスカが自分のことを本当に好きなのか、違うのか、どうしても知りたくなってしまったのだ。

ケンスケは、アスカとシンジの間に何があつたのかは知らない。だから、勘違いしている可能性もある。

だが、ケンスケの言うことが本当なら、望みはある。いくらなんでも、嫌いな男のために、怒り狂って同級生を叩きのめそうとする筈が無いこと位は、シンジにも分かつたからだ。

そんな迷いを持つシンジの気持ちを知らずに、アスカから声をかけてきた。

「さあて、シンジ。私達も寝ましょう。」

ヒカリの誕生会の後、アスカは、シンジの部屋に来ていた。実は、アスカの部屋とシンジの部屋は、奥の方で繋がっていて、ドアを開けると自由に行き来が出来るのである。アスカとシンジの部屋に鍵をかけておけば、二人が夜一緒に寝ていることが誰にも分からないという訳である。

「うん、でもちょっと話したいことがあるんだ。」

シンジは迷いながらも、心を決めて言ってみた。

「うん、いいけど、横になってからでもいいでしょ。」

「うん、いいよ。」

こうして二人は横になって向かい合った。

「で、何よ、話って。」

「うん、実は、アスカにどうしても聞きたいことがあったんだ。」

「ふうん、なあに。」

「僕の誤解だったらごめん。」

実は、アスカは以前は僕のことを嫌いだったんじゃないかって思っ
んだ。

それが何でこうなったのか、疑問に思うと、いても立ってもいられ
ないんだ。

だから、その辺の話しを聞きたくて…。」

「なによ、今更。そんなこと話してもしょうがないじゃない。」

少しアスカの顔が不機嫌になったが、シンジは続けて言った。

「うん、でも凄く気になるんだ。」

僕はアスカが好きだけど、アスカが僕のことを嫌いになったらどう
しようって、不安になるんだ。

もし、理由があるなら、それを直したいんだ。」

「そう…。でも、直らなかつたらどうするの。」

「ううん、絶対に直してみせる。」

シンジは拳を強く握りしめた。

「そう、じゃあ話すわ。」

まあ、アタシももやもやとした気持ちだったから、間違いないとは言えないけど、

『多分こういう理由でシンジに対してイラついていた。』なんて位のこととは言えると思うわ。」

「やっぱり。じゃあ、ズバリ言つてよ。」

「そうね、シンジは鈍いから…。それが理由だと思うわ。」

「アスカ…。それじゃあ抽象的で、良く分からないよ。」

「そう…。はっきりと言われたいのね。じゃあ、ちょっと長くなるけどいいわね。」

「うん。」

「シンジもアタシに父親がいないことは知っているわね。」

「うん。」

「アタシ、小さい頃は良くいじめられていたの。父親がいないからって。」

そんな時、あるテレビで、アタシみたいな父親の顔を知らない主人公が活躍する番組があって、

「アタシはそれを気に入って、良く見ていたのよ。」

「うん、それで。」

「でね、その主人公の父親は、人類全体のための戦いに身を投じていたの。」

「だから、幼い主人公と妻を捨てて、敵の組織に潜入したのよ。」

「主人公はそんなことは知らないから、小さい頃はいじめられても、何も言い返せなかったの。」

「お前の父親はお前を捨てたんだって言われても……。」

「ひどい話だね。」

「その父親は、戦闘機のパイロットで、自分が父親であることを隠して何度も主人公を助けるのよ。」

「格好良かったわ。その父親は、いつも赤い戦闘機に乗って、赤い服を着ていたの。」

「アタシが赤が好きなのは、それが理由かもしれないわね。」

「そうなんだ。」

「その父親は、最後は主人公の命を助ける為に、大勢の人命を救うために、自分の身を犠牲にするのよ。」

「だから、幼いアタシは思ったわ。アタシの父親も同じだったらいいなって。」

「シンジ、ここまで聞いて、何か思うことは無いかしら。」

「ううん、なんだろう。」

「アタシの父親は、外見は悪いけど、それこそ人類のために戦って

いるわよね。

もし、アタシだったら、碇司令が父親って分かったら、涙を流して喜ぶと思うのよ。

だって、そうでしょ。自分の父親が、人類を守る為の組織のトップだなんて、

少なくともアタシにとっては、こんなに嬉しいことは無いわ。

自慢出来るとまでは言えないかもしれないけど、あの人が父親だって、胸を張って言えるじゃない。

なのに、アンタはどうだった。『あんな父親』呼ばわりして。

組織のトップに立つ者の苦勞を知らないで、言いたい放題だったじゃない。」

「でも、それがどう関係するの。」

「まだ分からないの、アンタは。

そうねえ、他人が食べたくても食べられないごちそうを目の前にして、

『こんな不味いもの食べられないよっ。』って言っているようなものなのよ。

分かる、そんな不味いものですら、食べられない人が大勢いるのよ。それを聞いたたら、食べたくても食べられない人は惨めに思うしかないじゃない。

アンタは、アタシが欲しくて欲しくてたまらなかったものを易々と手に入れながら、

『こんなの要らないよっ。』って言っていたのよ。今となっては、シンジの気持ちも分かる。

けどね、理屈じゃ割り切れないことなのよ。」

「そ、そんなあ。」

「こう考えて。」

格好良い男がいて、アタシがその男のことが好きで虜になったとするじゃない。

シンジがアタシのことを心底愛しているのに、アタシはシンジじゃない男を選ぶの。

アタシが身も心もその男に捧げたと思っただけ。

その男が、『あの女は、うざって〜からいらね〜よ。』って言っているのを聞いたらどう思うの。」「

「そ、それは…。」

(そ、そんなこと、考えるだけでも嫌だ…。)
シンジの顔は青ざめた。

「ねっ、嫌でしょ。その男が悪いんじゃないって分かっているけど、嫌でしょ。」

だったら、アタシの気持ちも少しは分かってよ。」「

「で、でも…。」

「じゃあ、もつと別の言い方にするわ。」

シンジはテストで90点を取ったのに、

『90点しか取れなかった。僕って馬鹿だ、最低だ。』って言うてるのよ。

アタシは自分のことしか言っていないと思うかも知れないけど、そうじゃないわ。

そのテストで50点や30点しか取れなかった人は、

アタシの言うことを聞いて、どう受け止めると思うの？

アタシは、自分のことだけを責めていると思っているようだけど、実際は他の人を思いつきり馬鹿にしているのよ。

他の人を思いつきり傷つけているのよ。

それが分からないの？

しかも、悪気がないから、始末が悪いわ。」

「アスカ…。」

「アタシは何度も注意したわよね。

自分を責める癖を直すようにって。

本当は人を馬鹿にするのもいい加減にしろって言いたかったのよ。でも、アンタは分かってくれなかった。

そして自分を責めたわ。

でも、同時にアタシや他人のことを思いっきり責めて、思いっきり馬鹿にしていたのよ。」

「そうか…。僕は、そんなに酷いことを言っていたのか。」

「シンジ、体の傷は見えるから、普通の人ならやり過ぎて大怪我をさせることは無いわ。

でもね、心の傷は見えないから、いくらでも傷つけてしまうのよ。

婚約披露パーティーの時もそうだったかもしれないのよ。

もし、あの時アタシが大きな指輪をしていたら、

ミサトは恥ずかしくて、指輪を人に見せられなかったわ。

シンジはそんなことも分からなかったでしょ。」

「そうだね…。アスカの言う通りだ。」

「まあ、それは置いといて、前の話しをすると、

アタシだって、シンジが弱いけど優しい奴だって分かっていたわ。

だから、我慢していたの。

シンジは弱いから、守ってあげないとしょうがないんだって、自分に言い聞かせていたのよ。」

まあ、言ってみれば、目下の者に対しては寛大な気持ちになるって
ていう奴ね。

良いか悪いかは別にして、最初のうちはそうやってシンジに対する
怒りを抑えていたのよ。」

「そうか。でも、僕のシンクロ率がアスカを抜いてしまった。」

「そう。それからは、シンジに対する怒りを抑える術が無くなって
しまったの。」

せめて、シンジが人類のために、自分の身を捨てて戦うような奴だ
ったら我慢出来たと思うの。」

でも、シンジは戦えるのに逃げ出したじゃない。」

「そうだね…。あれは…、反省している。」

「それに、シンジは『何故戦わない。』とか『お前が死ぬぞ。』つ
て言われても、

『人を殺すよりは良い。』って言ったでしょ。

あれって、アタシの人生を思いつきり否定する言葉だったのよ。」

そう言いながら、アスカの目にはいつしか涙がたまっていた。

だが、アスカは気付かないのか、続けて言った。

「アタシは、エヴァに乗って戦うために、大勢の人の命を奪ってき
たわ。

ママの願いをかなえるため、人類の未来を切り開くために、血の涙
を流して戦ってきたわ。

それをアンタは否定したのよ、思いつきりね。

自分の信じてきたものを否定された時の気持ちって分かる？

まるで、魂をごっそりと抉り取られるような気がしたわ。

アタシにとって、この身を切り裂かれるよりも、ずっとずっと辛いことだったのよ。」

アスカの両目からは涙が止めどなく流れていった。

「シンジが嫌な奴だったら良かったのに。

そうすれば、心の底から憎めたのに。

でもね、多分その時既に、アタシはシンジのことを仲間だと認め始めていたのよ。

敵に罵られるならまだ分かるわ。

でも、味方に、アンタみたいに優しい奴に責められるなんて、アタシは一体どうしたら良いのよ。」

敵に罵られるよりも、味方に罵られる方が辛いよ。

分かってるわ、シンジがアタシを責める気持ちが無かったっていうことは。

でも、シンジの言葉は、確実にアタシのことを責めていたのよ。

そして、アタシの心を何度も何度も切り裂いていったのよ。」

アスカは、いったん言葉を止め、少しの間沈黙したが、再び続けて話し出した。

「アタシも、シンジに自分の過去を話していなかったから、

しょうがないと言えばしょうがないんだけど、でも、

アタシは自分の過去を誰にも知られたくなかった。

思い出したくもなかった。思い出すのもおぞましい過去だもの。だから、話すことが出来なかったのよ。

それは何となく分かってくれるわよね。」

「アスカ……。本当にごめん。謝って済むことじゃないとは思っ

ても、今の僕には謝る以外、どうしたら分からないんだ。」

シンジは、アスカの歌を思い出していた。
歌に込められていたアスカの想いは生半可なものではないことは、
鈍いシンジでも分かるほどだった。

「じゃあ、約束して。意味も無く自分を責めないで。

どうしても責めたいと思っても、決して口には出さないで。

それを言ったら、誰かが傷つくかもしれないっていうことを良く考
えてから言っ

それにアタシの言うことは絶対に守って。

こう言つと生意気かもしれないけど、こういう点に関しては、アタ
シの方がシンジよりも分かると思うの。

だから、アタシの言うことは絶対に聞いて。

例え理由を言わなくてもね。

アタシだって、理由を言えない時もあるの。あの指輪の時がそう。
シンジに言えなくて、嘘ついちゃったけどね。」

「そうか。アスカには気を使わせてばかりだったんだね。

ごめん、僕って本当にバカだね。

鈍くて、思いやりが無くて、どうしようも無い男だ。」

「ほら、言ってるそばから、そんなことを言っ

」

「あ…。」

「でも、良くなるうと思っ心があるうちは良いわ。

そういう心を失った人はもう駄目なのよ。

シンジはそうじゃないでしょ。」

「うん、良く分かったよ。これからも迷惑をかけると思うけど、僕を見捨てないでね。」

「アタシを裏切らなければね。アタシは、裏切りは絶対に許さないから。」

「うん、分かったよ。でも、アスカは僕のことをいつになったら許してくれるの。」

「もう、シンジったら、本当に鈍いのね。」

アタシはシンジのことが嫌いなんじゃないの。許さないんじゃないの。

ただ、理屈じゃ割り切れない、もやもやとした気持ちがあるっていうことなのよ。

だから、これ以上アタシのことを責めないで欲しいの。今までは何も知らなかったからしょうがなかったけれど、これからはもう違うでしょ。

アタシの心の中の想いを全て打ち明けたんだから。それが何を意味するのか、よく考えてよ。」

「え〜っ、分からないよ。」

「も〜っ、信じらんない。この、ニブチン！」

アスカはシンジに背を向けた。

「分かったよ。とにかく、アスカの言うことを聞くよ。今はそれで勘弁してよ。」

「そうね、アンタみたいなニブチンには、それが限界のようね。そ

れで勘弁してあげる。」

「そうか、ありがとうアスカ。こんな僕だけど、見捨てないでね。アスカのことを思う気持ちだけは、誰にも負けないから。それだけは信じて欲しいんだ。アスカ、大好きだよ。」

シンジはそう言って、アスカを背中から抱きしめた。

「シンジ、今日は変なことはしないでね。」

今日は、何か変なことをしたら、裏切り行為とみなすから。

胸を揉むのも駄目。下着の中に手を入れるのも駄目。分かったわね。」

「う、うん、分かったよ。」

シンジは冷や汗をかいた。

いつも自分が何をやっているのか、見透かされているような気持ちになったのだ。

「じゃあ、お休み。」

「うん、お休みなさい。」

こうして、シンジはアスカは胸の内のつかえを聞き出した。

（そうか……。僕は、知らないうちに他人を、アスカを、強く傷つけていたんだ。

何てことだ。人を傷つけないようにと思っていたのに、僕は全然分かっていなかったなんて。

アスカの機嫌が悪かったのは、僕に原因があったのか。

でも、今までそんなこと、誰も教えてくれなかった。）

シンジは暗い気持ちになった。

（でも、アスカは僕のが嫌いじゃないって言うてくれた。何度も何度もアスカを傷つけた僕のことを。

だから、今はアスカの言うことを信じてみよう。

それでも駄目だったら、その時はその時さ。）

シンジは、自分が前向きな考えをしていることに気付き、驚いた。

（これも、アスカのお蔭なのか。

やっぱり、アスカと一緒にいると元気が出る。勇気も湧いて来る。

アスカは、やっぱりそういう力がある人間なんだ。本当に凄いや。

でも、そんなアスカに、僕は必要とされているんだ。やっぱり、それも凄いことだよな。

ようし、これからはもっと頑張つて、少しでも前向きに考えて、

いつかきつとお情けじゃなくて、本当にアスカの気持ちをゲットしてみせる。）

シンジはそう固く誓った。

（でも、今日は変なことはしちやいけないんだよな。

でも、手を握る位なら、許してくれるよね、きっと。）

そう考えて、シンジはアスカの手を握り、指と指を絡めた。

これに対して、アスカからの反応は特に無かった。

このためシンジは安心したが、ふと疑問が浮かんできた為、アスカに尋ねてみた。

「アスカ、もう一つ聞きたいことがあるんだけど、いいかな。」

「うん、なによ。」

「アスカは、行方不明になったり、心を壊したりしたよね。あれって、やっぱり僕のせいなのかな。」

「何でそんなことを聞くの？」

「前にある人から聞いたんだけど、アスカのシンクロ率が落ちたのは、自分の敗北を僕に負けたと受けとめているからなんだって。それが原因で、後で心を壊したんだって。」

でも、僕はそれだけでアスカの心が壊れるなんて信じられないんだ。」

アスカはしばらく沈黙していたが、ゆっくりと口を開いた。

「そう…。今のシンジなら信じてくれそうね。」

シンクロ率が落ちたのは、さっきも言ったように、鈴原の事件の時に、

シンジが『人を殺すよりは良い。』って言ったことも原因の一つだ
と思う。

でも、心を壊したのは、おそらく使徒の精神攻撃のせいね。

アタシの心は、そんなにヤワじゃないわ。」

「そうか。僕のせいじゃないって知って、安心したよ。」

実は、僕はそのせいでアスカに嫌われているって思い込んでいたから。」

「はん、このアタシがシンクロ率を抜かれた位で嫌う訳がないでし

よ。

バツカじゃない、常識で考えなさいよ。

確かに、面白くなかったのも事実だけどね。

誰に吹き込まれたのか知らないけど、そんなこと忘れなさいよ。絶対に嘘だから。」

「うん、分かったよ。良かった、このことは、僕の心の中でずっと引っかかっていたんだ。

だから、アスカが『シンジの恋人になってもいいわよ。』って言った時、

直ぐに信じる事が出来なかったんだ。」

「そう…。アタシはシンジに嫌われているのかと思っていたしね。お互い様だったのね。でも、良かったじゃない。

お互いに相手のことが嫌いじゃなかったって分かったんだからねっ、そうでしょ。」

「うん、そうだね。」

「じゃあ、今度こそお休み。」

「うん、アスカ、お休み。」

こうして、シンジの心の引っ掛かりが取れたため、シンジは良く眠ることが出来た。

第36話 ニブチン（後書き）

あとがき

とうとう、アスカはシンジに自分の胸の内を明かします。シンジもいつの日か、アスカの想い分かる日が来るでしょう。その時こそ、二人が真に心から結ばれることでしょう。

第36話補完 暗闇の中で

「ねえねえ、皆起きてる?」

暗闇の中で声がした。マリアである。

「ええ、起きてます。」

「私も。」

「ああ、起きている。」

それぞれ、ユキ、アールコート、ミリアである。

「ユキちゃん。さっきの話の続きをしない?」

もちろん、アスカの話である。

「へへっ。やっぱり気になります?」

と笑顔のユキ。

「ふん、くだらん。」

と仏頂面のミリア。アールコートは無言である。

「あら、ミリア。駄目じゃない。あなたはアスカの護衛でしょ。アスカに関する情報は、どんなに小さいことでも集めなくちゃ。」

マリアに言われて反論出来ないミリアであった。

「じゃあ、皆で知っていることを教え合いましたよね。じゃあ、ユキちゃんからね。」

「えっ、私からですか。」

そう言いながらも、アスカとシンジの仲が良いことを嬉しそうにユキは話していく。

さすがに秘密だと念押しされたことは話さなかったが、

アスカが転校して来て直ぐにシンジと同居したこと、

二人で歩いているのを良く目撃されていたこと、

しょっちゅう痴話喧嘩をしていたこと、

途中でマナという邪魔虫が出現したがすぐに消えたこと、

それ以来アスカが授業中にシンジのことを見つめることが増えたこと、

アスカが退院した後急速に仲良くなったこと、

シンジがアスカに強引にキスして付き合うように言ったこと、

自分の間近でシンジがアスカにプロポーズしたこと、

シンジが不良に襲われた後物凄く怒っていたこと、

それらのことを、色々なエピソードを絡めながら、延々と話していた。

「へえ、あのアスカが。男には興味無しっていうオーラを体から発していたのにねえ。」

ドイツ時代のことを知っているマリアは、感慨深げに言う。

マリアは、アスカの初恋の人を知っていた。

そして、『ある事件』以来、アスカが当分男を好きになるのを辞めようと決めていたことも。

だが、この場では話すことは出来ないため、適当に誤魔化したのだ。

「で、今はどうなんだ。」

最初とうって変わって積極的に聞いてきたミリアであった。おそらく、マックスのことが頭にあるのだろう。

こうして、この夜をきっかけに、アスカとシンジの仲睦まじさが尾ひれを付けて広まっていくのであった。

アスカの話で大いに盛り上がった4人であったが、さすがに4時過ぎになると、眠りに付きだした。

そして、皆が寝静まった頃、マリアは『ある事件』の後にアスカが悲しそうに口ずさんでいた歌を思い出していた。

仲間が地雷を踏んだのさ　　とつても良い奴だったのに

散らばるかけらをかき集め　　明日は我が身と　　泣いたのさ

あゝあ　アタシの人生真つ暗ね　　淡い初恋だったのに

尽きずに流れる血の涙　　いつかは枯れると　　信じたい

マリアは、アスカが本当に悲しそうに、涙を流し声を枯らしながら歌うのを見て、

声をかけられなかったことだけは覚えていた。

（アスカ……。今度こそ、うまくいくと良いね。

あの時は、好きと言うことも出来なかったものね。もちろん、手を握ることすら……。）

マリアはそう心の中で願うと、次第に睡魔に襲われ、意識を失なっていた。

それはいかなる偶然か、マリアの父達が暗闇を利用して、ネルフの中にとある荷物を運び終えたのと同じ頃だった。

第36話補完 暗闇の中で（後書き）

キャラ設定：アールコート・マリウス

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、アメリカ支部に所属している。
ジャッジマンの部下。

市立第壱中学2年B組に在籍する。割ときゃしゃな感じで、蒼い瞳、
紫色の髪をした白人の少女。

あとがき

アスカの初恋は、ワイルドウルフの仲間で、次はシンジということ
にしました。

加持は恋では無く、あこがれということだ。

第37話 引っ越し…そして婚約解消

「おはよう、カヲル君！」

シンジは、大きな声でカヲルを呼んだ。

「やあ、シンジ君。おはよう。」

カヲルも笑顔で返事を返す。

待ちに待ったカヲルとマコトの引っ越しの日がやって来たのだ。シンジはとても嬉しそうな顔をしていた。

「さあ、ポケッとしてないで、始めるわよっ！」

何故か仕切ることになったアスカの号令で、皆が動き出した。

結局マコトとカヲルの家は、ミサトの家の2つ隣になったのだが、そこには色々な怪しげな機械装置が取り付けられていた。もちろん、カヲルに気付かれないようにである。

その準備に時間が必要であったため、引っ越し決定から引っ越しまで、少し時間が開いたのである。

さて、今日の引っ越しの布陣であるが、加持が車を出してマコトとトウジと共にマコトの家から荷物を運び出す役である。

シンジ、ケンスケ、カヲルの3人は、

新しく買った冷蔵庫、テレビ、ビデオなどの電気機器の設置を担当

する。

これにミサトとリッコも加わる。

アスカとヒカリとユキの3人は、ミサトの家で昼御飯と歓迎会の準備である。

といっても、アスカはしょっちゅう抜け出して、号令役をしている。もちろん、冷たい麦茶も忘れない。

「おおい、着いたぞ。」

そうこうしている内に加持の声がした。

それを聞いて、シンジ達はエレベータに向かった。

下で荷物に乗せ、上で受け取るのだ。エレベータが何回か往復した後、加持達が上に上がって来る。

こうなると引っ越しも終盤である。

「はい、そのダンボールはそこに置いて。それはこっちよ。」

マコトの荷物が入ったダンボールには、行き先を記した大きなシールを貼って、どの部屋に置くのか、予め分かるようにしてある。

その行き先の部屋にはアスカとミサトとリッコが居て、次々にやって来るダンボールの置き場所を指示するのだ。

もちろん、マコトとは打ち合わせ済みである。

動き回っているのは、もちろん男性陣となる。

だが、所詮は独り暮らしのマコトのこと、大した荷物が無いため、大勢で運ぶとさほど時間がかからずに運び終えてしまう。

「よし、一休みするか。」

加持の一声を待ちわびたかのように、一斉に男性陣は作業を止める。後はマコトのプライベートな物がダンボール3箱分だけが残っているだけだ。

「みんな、おつかれさま。まずは冷たい麦茶を召し上げね。」

アスカが麦茶の入った紙コップを皆に配る。

「はあ。今日はこんなに早く終わるとは思わなかったわ。おお、惣流サンキュ。」

「アスカ、ありがとう。」

「惣流さん、ありがとう。」

「惣流、サンキュ。」

まあ、分かると思うが、トウジ、シンジ、カヲル、ケンスケである。無論、加持にはミサトが、マコトにはあぶれたリッコが麦茶を渡している。

「さあ、一息ついたから、お昼ご飯にしましょう。」

それから直ぐに、日向さんと渚の歓迎会を始めるわよ。良いわねっ
「！」

アスカの号令に従って、皆動き始めた。

「ははっ。凄いごちそうだね。」

山盛りとなった数々の料理を見て、ちよつとだけマコトの頬が引きつる。

「嬉しいね。洞木さん、森川さん、感謝するよ。」

ニコリと笑うカヲルに、ケンスケが少し警戒感を顔に出した。

「みんな、揃ったわねえ。最初は、大人はビール、アタシ達はジューズで乾杯よっ！」

日向さんと、渚君の引越しを歓迎して、かんぱい！」

「かんぱい！」

「かんぱい！」

「かんぱい！」

「かんぱい！」

「かんぱい！」

「かんぱい！」

「かんぱい！」

「かんぱい！」

「かんぱい！」

こうして、昼食兼歓迎会が始まった。

「ごんにちわっ。」

「おじゃまします。」

歓迎会が始まって1時間ほど経った頃、ガヤガヤとした一団がやって来た。

マリア、ミリア、キャシー、アールコート、アリオスにマックスの転校生グループである。

「どうぞ、いらっしやい。良く来てくれたわね。」

アスカが笑顔で迎える。

「じゃあ、女の子は渚を囲んでね。今日の主賓なんだから。」

アスカの指図によって、それまでカヲルと仲良く話していたシンジやユキがその場を離れる。

そうして、カヲルの左右にマリアとキャシーが座り、正面にアールコート、その右にミリアが座る。

その横にマックス、キャシーの隣にアリオスが座る。

こうして新たなメンバーを迎えて、カヲルの歓迎会は盛り上がりつついくのだった。

ちなみに、ユキはヒカリ、トウジ、ケンスケのグループに混ざっていく。

その瞬間にケンスケは笑顔を見せたが、シンジは気付かなかった。

「シンジ、ちょっとこっちに来てよ。」

アスカはシンジの腕を引いて、ミサトの部屋に向かった。

そこにはいつの間にか移動していた大人達が酒盛りをしていた。一体なんだろうと、シンジは不思議に思った。

「おつまたせ。これからはお仕事の時間よ。いいわね、シンジ。」

「う、うん。」

「さして。何から始めようか。」

アスカは、今後の計画について、静かに話し始めた。敵の再侵攻が1月以内に行われる見込みであること、大規模な侵攻が行われる可能性が高いこと、そのため、エヴァ全機の稼働が望ましいこと。それらのことをかいつまんで話していった。

「分かったよ。カヲル君をエヴァに乗せたいんだね。」

シンジはアスカの話が終わると呟いた。さすがに鈍いシンジでも、それ位のことは分かる。

「正確に言つと、この家にいる転校生達もエヴァのパイロット候補生なの。」

「ええつ。」

シンジは驚いた。無理も無い。今日初めて話を聞いたのだから。

「シンジはどう思う。賛成？それとも反対？」

その問いにシンジは考え込んだが、しばらくして問いかけてきた。

「僕が反対するかどうかになるの。」

「アタシがエヴァに乗るわ。」

「えっ、アスカは乗ることが出来るの？」

「ええ、命と引き換えにね。」

(えっ。アスカが死ぬ。そ、そんなことって…。)

それを聞いた瞬間、シンジの表情が凍りついた。

アスカの真剣な表情から、嘘ではないと感じたからだ。

「そうか…。なら、僕は反対出来ない。それどころか…。」

も、もしかして、僕にカヲル君を説得しろって言っんじゃ。」

シンジは呆然とした。

「そ、そんな…。う、嘘だよ。ねえ、アスカ、何か言ってよ。」

「それじゃあ言うつわ。アタシはエヴァに乗りたくない。死にたくないから。」

でも、アタシが乗ることしか皆の命が助からないなら、ためらわずに乗るわ。」

「そ、そんな…。」

「シンジが何をすべきか、それはシンジが考えて。」

渚を説得出来るのは、シンジしかないと思う。

でも、シンジが嫌と言うなら、アタシが説得するわ。」

「僕が頑張るだけじゃあ、駄目なのか…。」

シンジは俯いて、拳を握りしめた。

「ええ、そうよ。それに、もし渚が…。」

「アスカっ！それ以上は言わなくて良いよっ！」

シンジは急に顔を上げた。アスカが何を言おうとしたのか、何となく分かったからだ。

もしかしたら、見当違いかもしれないが、それでもその先にアスカが何を言うのか怖くて遮ってしまった。

「僕が言うよ…。僕はやっと分かったよ。」

ミサトさんがどんな気持ちで僕達にエヴァに乗るように頼んだのか。そうだよ。そう言わなくちゃ、皆死んじゃうかもしれないんだよね。言うしかないんだよね。」

シンジは、とても嫌な気持ちになった。

あのエヴァに乗ってくれだなんて、本当は言いたくない。

でも、そうしないと失われる命があるなら、頼んでみるしかない。

シンジは、以前少しだけ顔をゆがめた表情で、ミサトがエヴァに乗るように頼んだことが思い出された。

おそらく、その時のミサトは、とても嫌な思いをしていたのだろう。

「シンジ…。」

アスカが呟く。そう、シンジは誓ったのだ。

この命よりも大切な少女のためなら何でもすると。

シンジの心は既に決まっていた。

「分かったよ。僕がカヲル君に頼んでみる。」

アスカのためなら、土下座してでも頼んでみるよ。
僕にはそれ位しか出来ないから。」

「それに、他にも話しがあるのよ。日向さん、良い？」

「ああ。シンジ君には辛い思いをさせてすまない。

うまくいくと9機のエヴァが稼働するが、烏合の衆になってはしょうがない。

だから、3機ずつの隊を3つ作ろうと思う。

その3隊の隊長になって欲しいんだ。」

「な、何故ですか。」

「今度の敵は、一体じゃない。

だから、こちらの体制も組織だったものにする必要があるんだ。
僕の考えでは、シンジ隊、トウジ隊、カヲル隊の3隊を束ねる役目をシンジ君に頼みたいんだ。」

「ぼ、僕みたいな素人に、そんなこと出来るんでしょうか。」
シンジは不安になった。

「アタシなら出来るけど。代わって欲しい？」
アスカがすかさず答える。

「だ、駄目だ。」

「じゃあ、良いのね。」

「う、うん。」

シンジは澁々了解するしかなかった。この少女をエヴァに乗せる訳

にはいかないのだから。

「という訳で、現場の隊長はシンジに決まりね。

アタシはミサトの代わりにエヴァ軍団を指揮するわ。それは良いわね。」

「そうだね。アスカなら文句は無いよ。」

「で、ちょっと問題があるのよ。何か分かる？」

「ううん。分からないけど。」

そこでようやくミサトが口を出した。

「指揮官は、常に公平でなくてはならないのよ、シンちゃん。だから、アスカとの個人的なつながりはマイナスになるの。」

「ええっ。な、何でなの。」

「指揮官は、最悪部下に死地に向かえと言わなくてはならないの。だから、部下との信頼関係が必要になるのよ。」

そうねえ、例えばアスカが渚君と婚約していたとすると、あなたはアスカの指揮を信じられるかしら。」

渚君をひいきして安全な所に置いて、自分は危険な所に送り込むじゃないかって疑わないかしら。」

「そ、そんなこと…。」

「絶対に無いって言えるかしら。」

「そ、それは…。」

シンジはカヲルとアスカが仲良くしている場面を想像してしまった。嫌だ、絶対に嫌だ。

そんなことになったら、自分はおそらくエヴァに乗ることすら出来なくなるかもしれない、そう思ってしまった。

「今、否定するのをためらったわね。でも、しょうがないのよ。人間は疑い深い生き物だから、小さなきっかけで疑念を抱くようになるわ。」

そして、それはどんどん大きくなるの。

そういう事態を招くから、特定の部下と仲が良い人は、指揮官失格なの。

それはシンちゃんも分かるわよね。」

「え、ええ。」

「他の部下は、そんな人には、従わないのは当然なのよ。優秀な兵士ほどそうなるのよ。」

だってそうでしょう。仲の良い部下をひいきするかもしれないって、普通は思うわよね。

そして、いくら頑張っても評価されない、自分の方が危険な目に遭わされるかもしれないと思ったら、指揮官の言うことなんか馬鹿馬鹿しくて聞かないわよね。

それどころか、あえて命令と違う行動をとるかもしれないわ。

愚かな指揮官でなければ、それで過ちに気付いて改めるけどね。

出来れば最初からそんな疑念を抱かれないのがベストなの。」

「そ、それってどういうことなんですか。」

シンジは涙目になっていた。シンジも中学生だから、ミサトの言わんとするところは分かる。これは命を賭けた戦争になるのだ。だから、生半可な気持ちで戦ったら死ぬことになるかもしれない。そこまでは理解していた。

だが、シンジは皆の前でべたべたしななければ良いだろう程度にしか思っていないかったのだ。

大人だったら許されない甘い考えだが、中学生であることや人見知りをするシンジの性格を考えたら、止むを得ないだろう。そのシンジにトドメとも言える一言が突き刺さった。

「婚約解消っていうことだよ、シンジ君。」

加持は静かに言った。

（そ、そんなあ。せつかくアスカと婚約出来たのに。それを解消するなんて…。）

シンジは呆然としてへなへたと座り込んだ。かなり強いショックだったのだ。

シンジの様子を見たアスカはミサトに目配せした。ミサトも頷き、シンジに優しく話しかけようとしたが、加持が手をかざしてそれを押し止め、ゆっくりと口を開いた。

「シンジ君が辛いのは良く分かる。でも、人の上に立つためには、その辛さを克服しなければならないんだ。」

「で、でも、そこまでしなくてもいいじゃないですか。」

「そうだな、皆の心が一つに繋がっていて、小さな疑念すら生じないほどの信頼関係があれば、その通りかもしれない。」

でも、今はそうじゃないだろう。

だから、強い信頼関係を作らなければならないんだ。

そのためには、アスカは指揮官として、けじめを付けなければならない。

婚約を解消してでも部下達との信頼関係を深めたいという姿勢をみせる必要があるんだよ。」

「そ、そんなこと、分からないですよ。」

「良いか、シンジ君。エヴァに乗る以上は、常に死と隣り合わせだつて事は分かるな。」

だから、戦うのは誰でも怖い。

そんな時、信頼出来る人の言葉を聞けば、僅かといえども、勇気が出るんじゃないか。

シンジ君にとって、葛城がそうだったんじゃないかと思う。

もし、シンジ君が葛城のことを信頼していなかったら、

シンジ君は安心して戦えなかっただろう。違うか。」

「ええ、加持さんの言う通りだと思います。」

僕は、ずぼらだけと優しいミサトさんのことが好きでした。

ミサトさんに頑張つてと言われると、何となく頑張れるような気になったのも確かです。」

「じゃあ、俺がシンジ君と同じエヴァのパイロットで、

葛城の婚約者か恋人だったら、どうだったと思う。同じように戦え

るか。」

「そ、それは…。」

シンジは唇を噛みしめた。

「それは無理だな。もし頑張って戦っても、

葛城が自分の方を見ないことが分かってしまうからな。

おそらく葛城は、皆に公平に接するだろう。」

だが、俺以外の者は絶対にそうは思わない。

それが人間の心理っていうものさ。」

「で、でも…。」

「シンジ君。人の上に立つ以上、甘えは許されない。

常に公平でなければいけないし、それを疑われるようなこととしてはいけないだ。

身近に良い例がいるだろう。碓司令だ。」

「と、父さんですか。」

「碓司令が、シンジ君に必要な以上に冷たく当たったのは、組織の頂点に立つ人間だからだ。

もし、司令がシンジ君に優しくしていたらどうなると思う。」

おそらく、レイちゃんやアスカは口では何も言わなくても、ひいきされていると思うだろう。」

そして、その疑念が邪魔をして、全力で戦うことなど出来なかっただろう。」

絶対そうとは言い切れないが、そうなる可能性は高かったはずだ。」

「父さん…。」

（本当にそうなのかな。僕には分からないや。）

「それだけじゃない。他の職員にも示しがつかないし、尊敬もされない。

何だかんだ言っても、碇司令が公平な人だから、ネルフはうまく機能している。

酷な言い方になるが、碇司令は、シンジ君とアスカのどちらかが必ず死ぬと分かったとしたら、

必ずアスカの方を先に助けるだろう。それが組織の長というものなんだ。

そういう人でなければ、誰も信頼しないし、付いていかない。

シンジ君を助けてアスカを見捨てるような人なら、

俺は付いていかないし、心ある大人は去っていくだろう。

自分の子供を見捨てるのには、我が身を裂く程の覚悟と強い信念が必要だが、

他人の子供を見捨てるのには、ちっぽけな悪意があれば事足りるからだ。」

「つまり、アスカは、他人に対して僕を捨てる位の覚悟を示す必要がある、

そういうことなんです。でも、そんなのって、そんなのって…。」

（そんなのってないよ。僕が一体何をしたっていうんだよ。）

シンジは次第に涙声になった。それを見た加持は、ミサトに目を向けた。

その合図を受けて、ミサトが話した。

「でもね、シンジ君。それは一時的なものなの。
この家から一步外に出たらっていうことだと理解してくれてもいい
わ。」

これははじめみたいなものだから、皆の前では最低限公平な態度を
取れば良いのよ。

もちろん、本当に縁を切る方が良いのだけれど、そうはいかないで
しょう。」

(えっ。)

シンジはその言葉に光を見た。

「じ、じゃあ、戦いが終わったら元通りになるんですか。」

シンジの目に、僅かに希望の光が灯った。それにはアスカが応えた。

「家の外では赤の他人。シンジにはこれからは必要以上に冷淡にす
るわ。」

立场上、シンジに一番辛く当たることになるわ。

他人が『何もそこまでしなくても。』って思う位にやらないと駄目
なのよ。

それ位しないと、アタシは皆に信頼されないわ。

でも、その代わり、家の中では外で冷たくする分、優しくしてあげ
るわ。

戦いが終わったら、もちろん元通りよ。それじゃ駄目かしら?」

「えっ。もっと優しくしてくれるの。」

「家の中だけだけどね。」

それに、家の外では冷たくするといっても、心は強くつながってい

るって思ってたね。」

その言葉には、大人達も驚いた。シンジのことが好きっていうことと同じことだからだ。

アスカは大人達の反応から、自分の失言に気がつき、真っ赤になった。

だが、それに気付かないまま、シンジは言った。

「分かったよ、アスカ。僕はアスカに相応しい男になるって決めたから。」

これもアスカの心を掴むための試練だと思えば、耐えられる。いや、耐えてみせる。」

（そうだ。ここでくじけちゃいけないんだ。

アスカはもっと、もっと苦しい目に遭って、耐えて来たんだ。

これくらい乗り越えなくちゃ、アスカに相応しい男になんかなれやしないんだ。）

シンジは、強い決意を持って、きっぱりと言った。

こうして、翌日に二人の婚約解消が発表された。

第37話 引っ越し…そして婚約解消（後書き）

キャラ設定：渚 カヲル

エヴァンゲリオン操縦者。フィフスチルドレン。しかし、その実体は、第17使徒タブリス。最後の使徒。シンジのことを気に入り、シンジを生かすため、あえてシンジの手にかかる。エヴァンゲリオン新四号機専属操縦者になる予定。

あとがき

戦いに勝つため、心を鬼にして戦う決意をするアスカ。そのために、シンジとの婚約を解消することを決意したのです。それに対して、強い決意をもって応えたシンジですが、果たしてどうなることでしょうか。

第37話補完 噂話

「何だつてっ！碇シンジと惣流アスカの婚約が解消されたって、本当かよっ！」

「ああ、本当らしいぜ。」

惣流と碇は最近全然口を聞かないそうだし、惣流は婚約指輪も外しているみたいだ。」

「でも、何が原因なんだ。結構仲が良かったっていう話だったのに。」

「さあな。聞いても答えないらしい。」

「でも、これはチャンスだな。よし、惣流に告ろうかな。」

「同じ考えの奴が何十人も居て、皆撃墜されたって話しだぜ。止めとけよ。」

「ちえっ、残念だな。でも、希望が出てきたな。」

「お前じゃ無理だよ。」

第壱中学校では、この手の噂話が校内を席卷していた。

「えっ、碇君がフリーになったって、本当なの。」

「うん、もっぱらの噂よ。惣流さんに振られたらしいって。」

「ふうん、それじゃあ、A組の雰囲気は最悪じゃない。」

「それが、そうでもないらしいのよ。二人とも、何食わぬ顔をして
いるらしいの。」

「へっつ、そんなこともあるんだ。」

「でも、碇君は転校生の女の子達と仲良く話すことが多くなったら
しいわよ。」

「あら、乗り換えちゃったのかしら。」

「惣流さんも転校生の男の子達と仲良くしているらしいわ。」

「ええつ。惣流さんが相手じゃ勝ち目が無いわよねえ。」

「いずれにしても、惣流さんは早く誰かとくっついて欲しいわよね
え。」

「ええつ、そんなことないわよ。」

惣流さんは私の憧れだもの。男とはくっつかないで欲しいわ。」

「げっ。あんた、ズーレー。」

「ち、違っつわよ。惣流さんだけは特別なの。」

「ふうん、怪しいなあ。」

「う、うんさいわね。」

女子生徒の間では、さらに噂が飛び交っていた。

第38話 猛特訓（前編）

アスカとシンジの婚約解消が発表されてしばらくの間は、アスカはラブレター攻勢と男どものアタックに悩まされていたが、1週間も経つとさすがに鎮静化してきた。

最初のうちは二人の様子をこわごわと見ていたクラスメート達も、アスカとシンジの様子が険悪なムードからはほど遠かったこともあり、気にしなくなっていた。

注意深く見れば、アスカが全くと言っていいほどシンジと会話をせず、視線も交わさなくなったことや

時折トウジがアスカのことを睨んでいることが分かったはずだが、気付く者は少なかった。

最初のうちは、ヒカリがアスカやシンジに何度も問い詰めてみたが、二人とも『ノーコメント』と繰り返すばかりだったので、さすがに諦めた。

アスカは、4月にならないと状況は変わらないとヒカリに伝えたので、ヒカリは何か話せない事情があることを察したことも理由の一つだ。

ただ、お昼のお弁当の時間は、アスカは転校生達と過ごすようになってしまった。

そのため、いつものメンバーからアスカが抜けて、何故かその代わりにマリアが入っていた。

こうして、学校生活は、表面上は何事も無く過ぎていった。

「何やってんのよっ！アンタ、真面目にやる気あんの！」

「遅いつ！もつと早くっ！」

「そうじゃないでしょっ！何考えてんのよっ！」

ネルフにおいては、シンジは毎日のように、アスカの怒声を浴びていた。

学校が終わり、ネルフに着くと、エヴァのパイロット達には過酷な訓練が待ち受けていた。

体力を付ける訓練、格闘技の訓練、エヴァの戦闘シミュレーション、ハーモニクステストなど、盛り沢山のメニューである。

訓練のメニューはアスカが作成し、その進行管理の責任者もアスカである。

ここでは、シンジがアスカに目の仇のように怒鳴られまくっていた。

シンジは、ネルフに入ってから訓練で、普通の中学生よりは体力が付いているが、本格的な軍事訓練を受けてきた他のパイロット候補生と比べると、かなり見劣りしていた。

もちろん、トウジですら、パイロット候補生で最も体力の劣ると見られていたアールコートに負けていたので、トウジよりもさらに体力の劣るシンジにとっては、皆の訓練に付いていくのがやっと、いや、それすらも苦しかった。

特にアスカは3人組での訓練を多用したため、シンジが他の二人の足を引っ張ることも多く、その度にアスカの雷が落ちるのだった。トウジが何度か文句を言ったが、アスカが全く聞き入れなかったの

で、アスカとトウジの仲は次第に険悪なムードになっていった。

トウジは何度かシンジに『惣流に文句言ったれ。』と言ったが、シンジは力なく笑うばかりであったし、カヲルにしても『僕の口出しするようなことではないよ。』と取り合ってもらえなかったため、イライラだけが募っていった。

特に実戦に則した戦闘シミュレーションで失敗した者に対しては、アスカは容赦なく雷を落した。

しかも罰則付きである。ここでも最も雷を落されるのはシンジであった。

もっとも、シンジの隊の誰かがミスをすれば本人と隊長が怒られ、他の隊の者がミスした時も、シンジのサポートが適切で無い場合はシンジに雷が落ちていたのだから、無理からぬことであった。

しかも、隊が全滅するような場合には、鉄拳制裁が待っていた。

無論、制裁を受けるのは、隊長であるシンジ一人である。

他のパイロット達は、殴られて吹っ飛んでいくシンジを見て、心の中で謝るしかなかった。

何故なら、最初の鉄拳制裁を受けた時に、トウジが抗議したのだが、それを理由にシンジがさらに殴られたからだ。

アスカが、『碇を殴って欲しければ、いつでも文句を言ってもいいわよ。』と言い放ったため、トウジ達は我慢するしかなかったのである。

そう、アスカはシンジの名前を呼ぶことすら止めていたのである。

「くそっつ。これじゃあ、シンジが可哀相や。何でこんなことになったんや。」

トウジは唇を噛みしめた。

時は1週間ほど遡って、カラルの引越しと歓迎会が終わった翌日、アスカ、シンジ、トウジ、カラル、そして転校生達が司令室に呼び出された。

そこには、碓司令と冬月副司令が待ち構えていた。

そして、冬月はその場にいる全員にエヴァに乗って欲しいと頭を下げた。

続けて冬月は、ゼーレがネルフへの再侵攻を企てていること、その戦力が予想を遥かに超えて強大であること、迎え撃つ戦力に乏しいこと、勝つためにはエヴァ全機の稼働が不可欠であることを丁寧に説明した。

それを聞いて、その場の全員が理解した。転校生達にエヴァに乗れと言っているのだ。

急な話に転校生達は顔を見合わせたが、もともと彼らはエヴァのパイロット候補生だったこともあり、異を唱える者はいなかった。

続けて、冬月はアスカをエヴァ軍団の指揮官に任命した。

実はアスカの階級は、表向きはアスカが予備役になった後、一曹に降格となっていたのだが、冬月は階級とは関係なくアスカの指揮に従うようにと厳命した。

そして、アスカは冬月の横に歩み出ると皆の方を向いてこう言った。

「皆さん、ゼーレの戦力は予想を遥かに超えて強大です。

ですから、勝敗は我々の働き如何に関わっています。

ですから、アタシはこれから皆さんをビシビシしごきます。

泣き言も許しません。それは覚悟してください。」

それを聞いた皆の間に僅かに緊張感が漂った。

「それから、アタシは実力主義でいきます。

それ以外の要素は全て排除します。

そうしなければ、決して勝てないのです。」

そう言いながら、アスカは皆の顔をゆっくりと眺めた。

「この中には、アタシと個人的に仲が良い人もいますが、ゼーレとの戦いが終わるまでは、そのことは全て忘れてください。アタシはこれから皆さんを平等に扱います。えこひいきは一切しません。その証しとして、アタシは碓二尉との婚約を解消します。」

「え〜っ！」

「そ、そんなあつ！」

「嘘でしょっ！」

皆の間から驚きの声があがった。

「嘘ではありません。それに、碓二尉には家を出てもらいます。

ですから、アタシと碓二尉は全くの赤の他人、そう思ってください。ですから、誰かが碓二尉にアタックしても、アタシは文句は言えませんし、言いません。

なお、パイロット間の恋愛は、自由ですが、訓練や実践に影響が出ない範囲にしてください。

ただし、アタシに対して恋愛感情を示すことは、一切禁じます。以上です。」

皆は呆然とした。

そして、おそろおそろシンジの方を見たが、シンジの表情は特に変わったところは無かった。

注意深く見れば、シンジの拳が強く握りしめられていることに気付いたことだろうが、

慌てていた皆は、そのことに気付くことはなかった。

騒ぎが収まった頃合いを見計らって、アスカは続けた。

「訓練は、早速今日から始めます。

基礎体力向上訓練、格闘技訓練、ハーモニクステスト、戦闘シミュレーション、以上4つが主な内容です。

それから、暫定的な隊編成をします。

碓、マックス、ミリアの3名が第1隊、

鈴原、アリオス、アールコートの3名が第2隊、

渚、キャシー、マリアの3名が第3隊とします。

各隊の隊長は、暫定的に碓、鈴原、渚とします。

3隊の隊長、分隊長はこれも暫定的な措置として、碓とします。

以上、何か質問はありますか？」

アスカは周りを見渡した。

特に質問は無いようだ。

というより、啞然としていると言った方が良いだろう。

なお、この編成になった理由の一つに、各隊に必ずアスカとつながりが深い人物を入れるというものがあつた。

3人ともアスカとのつながりが浅い場合、その隊の者達が、自分は切り捨てられるかもしれないという恐れを抱く可能性があるからだ。トウジはアスカの親友の恋人、マリアはドイツ時代からの友人とい

うことで、アスカとのつながりは深い。

また、マックスはシンジのガード役であることからシンジと同じ隊に、アリオスはトウジのガード役であることから、トウジと同じ隊に。同じ支部出身のマックスとミリア、アリオスとアールコートを同じ隊にした。

こうして、実力とは無関係に隊を組まざるを得ないところにアスカの苦悩があった。だがアスカはそんな苦悩を頭の片隅に追いやって、皆に指示を与えた。

「では、15分後に第2格技場に集合し、そこにいる教官の指示に従って訓練してください。以上です。」

アスカは皆に敬礼し、ゲンドウらとともに退出して行った。

「よろしくお願ひしますっ！」

シンジ達パイロット達は、時間通りに集合し、教官達にあいさつをしていた。

すると教官の中から、体格の良い白人が前に進み出た。

「俺の名はジャッジマンだ。今日からお前達の教官をすることになった。」

俺のことを知っている者もいると思うが、忘れてくれ。今から俺は鬼になる。

以前の優しい俺のことは、綺麗さっぱり忘れて欲しい。」

そのあいさつを聞いて、真っ青になった者が4人ほどいた。ジャツジマンの部下達である。

『もっと厳しくなるなんて…。』と目の前が真っ暗になったのである。

続けて、髪の毛を青く染めた凛々しい美女が前に進み出た。

「私のことは、ブルーと呼んでくれ。ドイツの傭兵部隊に所属している。」

私も厳しく鍛えるつもりだから、覚悟してほしい。」

こうして、転校生達はキャシーを除いて、逃げ場を無くしたのだ。そんな彼らに向かって、続けてジャツジマンが声をあげた。

「マックス、ミリア、アリオス、アールコートはこっちに来い。碇、鈴原、渚、キャシー、マリアはブルーの指示に従ってくれ。」

こうして、訓練は開始された。

シンジ達は、最初はランニングをやらされた。

と言っても、かなりのハイペースだったため、10分もすると息切れを始めた。

「じらっ！しっかりしろっ！」

ちょっとでもペースを落とすと、容赦なくブルーの雷が落ちた。

特にシンジは体力面で一番劣っていたため、怒鳴られっぱなしだった

た。

ランニングの次は筋トレである。

トウジとマリア、カヲルとキャシーが組み、シンジはブルーと組みされた。

（げっ。この人って、ラブリーエンジェルの隊長さんだったよね。こんなに美人だったんだ。

でも、傭兵部隊の人だから、物凄く強いんだろうなあ。ちょっと怖いや。）

そんなことを思っていると、ブルーに怒鳴られた。

「なに、ボーツとしているんだ！さっさと始めるぞ！」

シンジは、ブルーを背中の上に乗せたまま腕立て伏せをやらされ、あえなくダウンした。

腹筋も50回が限界だった。背筋も30回も続かなかった。

「お前は、根本的に鍛え直す必要があるな。覚悟してもらおう。」

ブルーに睨まれ、真っ青になるシンジだった。

後で聞いた話では、マックス達は教官を肩車して走らされ、筋トレも大きな負荷を与えられながらやっていた。

（とてもじゃないけど、追いつけないよ。）

シンジは、泣き出したくなる衝動に襲われた。

格闘技の訓練は、いきなり実戦形式だった。シンジとトウジは、二人一組で一人の教官と戦い、見事なまでに簡単に叩きのめされた。他の3人が教官と互角とまではいかないが、対等に近く渡り合っているのと対照的だった。

「おい、今度はマリアとやってみろ。」

その言葉に、シンジとトウジは最初はためらいを感じたが、実際に戦ってみると全く相手にならなかった。無論、マリアの方が段違いに強かったのだ。正に赤子の手を捻るが如く完膚なまでに叩きのめされたのだ。

(マ、マリアさんって、何て強いんだ。)

シンジもトウジも顔を見合わせて驚いたが、次の瞬間もつと驚いた。

「マリアっ！手を抜きすぎだっ！真面目にやれっ！」

あまりのレベルの違いに、二人は呆然とした。

「ふっつ。腹が減ったわい。」

トウジは食堂で3人前位の量を注文し、ガツガツと食べた。

「良く食べられるな、トウジは。僕なんか、食欲が無いよ。」

シンジは体力を使い果たして体が重く、あまり食べる気がしなかった。

「大丈夫かい、シンジ君。」

カヲルは心配そうだ。

「うん、何とかなると思う。でも、情けないな。マリアさんにも歯が立たないなんて。」

「そんなこと言わないで。私は小さい頃から訓練を続けてきたからよ。」

碓君は、そうじゃ無かったんでしょ。素人にしては上出来よ。ねえ、キャシーもそう思うでしょ。」

「そうね、マリアの言う通りよ。」

いきなり素人に抜かれたら、私達がみつともないわよ。だから、気にしないで。」

自分のペースを掴んで、着実に力を付ければ良いのよ。」

「でも、あまりにレベルが違いすぎて、嫌になるなあ。」

シンジは落ち込んだ。だが、ふと他のメンバーのことが気になった。

「マックス君達も強いのかなあ。」

この問いには、キャシーが答えた。

「そうねえ。マックスは、アールコートとマリアの2人を相手にしても勝てる位強いわね。」

アリオスは、マックスとアールコートの二人を同時に相手に出来るわ。

ミリアはマックスと同じ位強いわ。アールコートは鈴原君と一緒にならミリアに勝てそう。

まあ、大体そんなところかしら。」

要は、強い順に

アリオス

マックス

ミリア

マリア

アールコート

トウジ

シンジ

というところである。

「でも、渚君は掴み所が無いっていうか、良く分からないわ。」

「そういうキャシーさんはどうなんや。惣流と同じ位強いって、言っただやないか。」

「じよ、冗談でしょ。惣流さんは、私達とレベルが違うわよ。ねえ、マリア。」

「うーん、私はキャシーの強さが分からないから、何とも言えないけど。」

レベルが違うっていうのは本当ね。」

「ま、まさか、惣流の奴、マリアさんよりも強いんか。」

「私が10人いても勝てないわね。」

本当は100人と言おうとして、考え直したマリアだったが、トウジとシンジを唾然とさせるには十分だった。

「アイツとは、ケンカするのは止めといた方が良いつてことやな。やっぱりアイツは天才なんか。」

トウジの眩きに、マリアはちょっとムツとした表情でこう言った。

「積み上げた努力の違いよ。」

それを聞いたトウジは、沈黙するしかなかった。

第38話 猛特訓（前編）（後書き）

あとがき

今回は、ちょっと情けないシンジでした。

当面は、ネルフでアスカに怒鳴られて、シンジは落ち込むことですよ。

第38話補完 親友

「ねえ、ユキ。あなたはと思う。」

ヒカリはユキに尋ねた。もちろん、アスカとシンジのことである。

「あの二人は、お互いに惹かれ合っていると思います。特に碓君は、惣流さんのことが大好きなんです。だから、何か事情があると思うんです。」

「そう、あなたもそう思うの。」

でも、鈴原がアスカのことを怒っているのよ。どうしたら良いと思う。」

「もちろん、鈴原君を説得してください。我慢するようにと。もし鈴原君が惣流さんに食ってかかったら、悲しむのは碓君なんです。」

惣流さんも同じだと思いますが。」

「そうよねえ。うん、私はアスカを信じる。だって、親友ですもの。」

「そうですね。惣流さんのやることに間違いはありませんから。」

「うん。」

でも、ユキはアスカの信者みたいなものだから、いま一つ説得力が無いのよねえ。」

「あ〜っ。それはちょっと酷いですよ。」

「あつ、ごめんね。ちょっと言い過ぎたわ。」

「いずれにせよ、私達は惣流さん達のことを見守っていきましょう。きつと近いうちに、元通りになりますよ。」

そうしたら、洞木さんもダブルデートが出来ますよ。」

「そうよねえ。…って、何言わせるのよ。」

「あれ、それが狙いじゃなかったんですか。」

アツアツの二人と一緒にデートすれば、それが移るといいなあ、なんて普通は思うじゃないですか。」

「な、何を言うのよ。」

顔を少しだけ引きつらすヒカリだった。どうも凶星だったらしい。

だが、後にヒカリが鈴原を説得し、トウジがアスカと対決するような事態は免れるのであった。

第39話 猛特訓（後編）

「待たせたな。」

会議室に入るなり、ゲンドウは声を発した。

そして、長いテーブルの端にゆっくりと座る。

冬月とアスカも続いて座った。

シンジ達がジャッジマンと初顔会わせをしていた頃、アスカ達は作戦会議を開いていたのだ。

今この場には、加持、ミサト、リツコ、マコト、ケンスケが待っていた。

これから対ゼーレ戦略を練る会議を始めるのだ。口火を切るのはアスカだ。

「では、これからゼーレの動きを説明します。

アメリカ、ヨーロッパの各国の国連部隊の一部が、巧妙に隠されていますが、動きをみせています。

いずれも目的はこの第3新東京市だと思われれます。」

アスカは、ホワイトボードに予想される戦力を書いていった。

「原子力潜水艦が10艦、通常型潜水艦が30艦、空母が10隻、各種艦艇が100隻、以上が現状で予想される敵の海上、海中兵力です。

また、予想される敵の航空兵力は、戦闘機500機以上、爆撃機50機以上になります。

なお、これらの情報は、相田一曹が持つ、軍事マニア独自の情報網によるものであることを付け加えさせていただきます。」

アスカはそこまで言うと、加持に合図をした。すると、加持はゆっくりと口を開いた。

「今、我々の手で確認を行っているところです。

正直言って、我々が入手していた情報よりも、遥かに敵戦力は大きいです。

ケンスケ君の情報が無かったら、我々は敵戦力を半分以下に見積もっていたでしょう。

危ないところでした。」

そう、敵の戦力を小さく見積もると、手痛い目に遭うのだ。

この点で、ケンスケの貢献度は非常に高い。

専門の諜報機関でも気付かないような動きでも、軍事マニアは掴んでいるのだ。

「次に作戦部の所見を述べます。」

次はマコトだ。

「おそらく、敵は総力戦で来るでしょう。

これだけの戦力だと、小細工は必要無いからです。

四方八方からミサイルを大量に打ち込み、我々の戦力を無力化したうえで、

戦闘機や爆撃機でトドメを刺すという戦法が最も確率が高いと思われます。

その場合、我々の防御手段は乏しく、太刀打ち出来ません。

頼りは、エヴァのATフィールドだけです。」

それを聞いた冬月は、頭を抱えた。

「何とかならんのかね。いくらエヴァでも万能ではない。戦闘機で足止めを食らっている間に本部を落される可能性も高いぞ。それに、ATフィールドも長時間展開できまい。時間差攻撃をされた場合、パイロットの体も持たないだろう。赤木君、技術部の方では、何か良い方法は無いのかね。」

「時間が無いので、対抗策はあまりありません。ポジトロンライフルを改良し、発射回数や発射間隔を改善するのがやっとです。」

「すると、頼りはエヴァ軍団ということか。アスカ君、彼らは使えそうかね。」

「今は何とも言えません。ですが、使徒と異なり目標数が多く、機動性が高いので、今は対応出来る者はいません。現状では、エヴァの効率的な使い方は、ATフィールドで防御のみを行うことでしょう。ですが、例えばミサイルを1分間隔で何時間も連続して撃ち込まれたら、防ぐことは不可能です。」

「そうか…。敵にしてやられる訳か。だが、敵の陸上兵力を少しでも削れたことは、幸いだったと言えるのかな。」

「ええ、ですが今回の敵陸戦兵力は、10万人から最大数十万人と推定されます。」

これを傭兵部隊だけで防ぎきるのは不可能です。エヴァの支援があっても危ないかと…。」

加持は声を落して言った。このため、冬月は落胆の色を隠せなかった。

「戦略的には、我々の完敗だな。それを戦術でひっくり返すしか無い訳か。」

だが、その戦術も圧倒的に不利という訳か。」

「副司令、戦略の敗北は、戦術の勝利ではひっくり返せないのが軍事の常識です。」

戦略的に劣勢を跳ね返す方法を考えませんか。」

ケンスケは申し訳なさそうに言う。その場の皆も肩を落した。だが、それを見たアスカは笑い出した。

「軍事の常識は、エヴァには通用しないわよ。」

使徒との戦いがそうだったでしょう。

使徒との戦いは、戦略で勝利したとしても、戦術の失敗でひっくり返るのよ。」

エヴァを常識の物差しで図るのは間違いね。」

「うむ、アスカ君の言う通りかもしれん。」

だが、このままではどう考えても勝ち目が見えないのも事実だ。」

戦術的に見ても、相手の方が圧倒的に有利ではないか。」

「現時点ではそうです。」

ですが、相手と同じ土俵で考えるからいけないのです。もっと違った視点から見ないと。」

おそらく、これらの大量の兵力の動員は、本当の目的を隠すためと考えられます。」

そう、例えば中性子爆弾の使用とか、細菌兵器の使用などが想定されます。」

「何っ、まさかっ。」

「相手を常識で判断してはいけません。必ず裏があります。おそらく、ゼーレは二重、三重の罠を用意しているものと思われる。」

目先の敵だけを見るのではなく、敵の真の狙いを突き止めないといけません。」

「だが、どうやって突き止めるのだ。」

「そのための諜報部であり、そのためのネルフ支部でしょう。なりふり構わず組織を活用して、敵の情報を掴むようにしてください。全てはそれからです。」

「ははっ。アスカは手厳しいな。」

加持は渋い顔をした。

こうして会議は続き、最終的にアスカの意見が採用された。

ゲンドウはネルフ各支部に協力を要請し、諜報部と共に敵の情報を可能な限り集める。」

ケンスケも引き続き軍事マニアのネットワークを通してゼーレの動きを探る。

技術部はエヴァの武器を改良する。

作戦部は兵器の購入と整備を進める。

アスカはエヴァ部隊の指揮官としてパイロットを養成する。

かくして会議は終了した。

会議の後、ケンスケがアスカに声をかけてきた。

「惣流、ちょっと聞いていいかな。」

「うん、何よ。」

「正直言つて、あれだけの大兵力を相手に戦うのは、絶望的だと思う。」

さらに、あれ以外の兵力が隠されているかもしれないとなると、こちらが勝つのは奇跡を待つしかないと思うんだ。

惣流は何か良い手があるのか、それとも軍事のことをあまり知らないのか、

どちらなのか知りたいと思つてね。」

「あのねえ、アタシはアンタよりも兵器に関しては詳しいのよ。使徒は空から来るのか、海から来るのか、分からなかったから、兵器に関してはみっちり頭に叩き込まれたわよ。」

だって、エヴァと連携して戦う可能性が高いじゃない。

パイロットにしてみれば、命に関わるから、自分なりに一所懸命

覚えたわよ。」

「じゃあ、何か良い手があると考えていいんだね。」

「ご想像にお任せするわ。」

そう言つてアスカは去つて行つた。

「うーん、良い手があるのか、シンジのためなのか、今の様子だと分からないなあ。」

ケンスケは首を捻つた。

その日の午後3時からハーモニクステストが行われたが、結果は思わしくなかった。

パイロットのシンク口率が良くなかつたからだ。

シンジ	60%
マックス	8%
ミリア	6%
トウジ	30%
アリオス	9%
アールコート	6%
カヲル	35%
キャシー	0%
マリア	15%

「このままだとまずいわね。何とかしないと。」

アスカは、頭を抱えていた。

その後、パイロット達は、シンクロ率を反映した戦闘シミュレーションを行い、厳しくしごかれた。

この訓練の教官はアスカだったが、特にシンジには厳しかった。初日からシンジは鉄拳制裁を何度も受けたのである。

だが、これにはアスカなりの考えがあった。

アスカが思うにシンジはすこぶる鈍い。

口でいくら言った所であまり感じないのだ。

恋愛ことならまだ良いが、戦場で隊長がこの調子では、部下の命が危ういのだ。

だからやむを得ず体に覚えさせるため、身を切るような思いでシンジを殴りつけたのだ。

しかも闇雲にはなく、部下達の命を危うくさせるような行動をとった時だけに限定した。

アスカにとっては、これでも十分抑えているつもりだった。

「あゝっ、疲れたあ。」

シンジは家に帰るなり、ベッドに横になった。

体のあちこちが悲鳴をあげているようだ。

体が思うように動かない。

「それにしても、アスカは厳しかったなあ。」

シンジは訓練を思い出して、悲しくなった。

シンジは、アスカが厳しいことは覚悟していたつもりだったが、シンジの想像以上にアスカは厳しかったのだ。

その上、シンジと呼ばれずに、碇と呼ばれたことが、シンジの心に重くのしかかっていた。

これなら、バカシンジと言われた方がマシである。

「僕って、こんなに情けなかったのかなあ。」

シンジは悲しくなった。

アスカのためにも訓練に立ち向かうと大見得を切っていたながら、たった1日でこのザマである。

これではアスカに呆れられてしまうかもしれない。

「しかも、みんなとレベルが違うし。」

シンジは、転校生の中で最も弱そうだったアールコートとも戦ったのだが、マリアの時と同様に、完膚なまでに叩きのめされたのだ。

「こんなはずじゃなかった。こんな…。」

シンジはしばらくの間、物思いに耽っていたが、思い出すのは無様な自分の姿ばかりだった。

転校生達とは鍛え方が違うことは、頭では分かっていたつもりだったが、実際に相対してみると、想像を絶する差があったのだ。

「そうか。僕が情けないから、アスカは愛想を尽かして、厳しくしたんだ。」

そう思うと、段々悲しくなってきた。

「今日のアスカは鬼みたいに怖かったなあ。あれが本当のアスカなのかなあ。」

でも、もしかしたら、嫌われちゃったから敵しかったのかなあ。」

シンジは段々と内向きの考えに陥っていった。

アスカに嫌われたらどうしようかと考えているうちに、もしかしたら嫌われたかも、いや嫌われたに違いないと、どんどん自分を追い詰めていったのだ。

そして、ついには我慢出来ずに泣き出してしまった。

「うううう。アスカは僕のが嫌いになっちゃったのかなあ。」

どうしよう、どうしよう。うううう。アスカに嫌われたらどうしよう。

誰か助けてよ。誰でもいいから助けてよ。うううう。」

シンジは、顔をくしゃくしゃにして泣いた。

だが、その時、誰かがシンジの上に乗ってきた。

(えっ、誰だろう。)

シンジは驚いたが、すぐに誰か分かった。

「な〜によおっ。元気出なさいよっ。」

「えっ、ア、アスカなの。」

シンジは驚き、そして嬉しくなった。

シンジは何だかんだ言っても、やっぱりアスカのことが大好きなのだ。

だから、アスカがいるだけで幸せな気分になるのだ。

「そ〜よっ。愛しのフィアンセよっ。アタシの前ではちったあ元気にしなさいよっ。」

「えっ、アスカは僕のことを嫌いになつたんじゃないの。」

そう言った瞬間、シンジは『しまった。』と思い、青くなった。

せっかくアスカが来てくれたのに、憎まれ口を叩くなんて。

アスカは怒って帰ってしまうかもしれない、いやそうに違いない。

シンジは自分の体温が急低下するのがはつきり分かるほど寒けがした。

「ム〜ッ。誰がそんなことを言ったのよ。」

だが、アスカは怒った割りには刺々しい感じの口調ではなかった。

「いや、誰でもないけど。」

シンジは必死に言い訳しようと思ったが、思うように口が動かない。

『もう駄目かも。』そんな考えが頭に浮かんだが、アスカの口からは思いがけない言葉が出た。

「今日は疲れたでしょ。早く寝ましょう。」

(えっ、本当なの？アスカは一緒に寝てくれるの。)
シンジは気が緩み、また墓穴を掘ってしまった。

「あつ、でもお風呂に入っていないんだ。だから、汗臭いんだ。」
言った瞬間、『ああ、もうこれでおしまいだ。』と頭の中が真っ白になった。
だが、何故かアスカは怒らなかった。

「良いのよ。シンジの匂いなら、アタシは構わないわよ。
明日の朝にシャワーを浴びればいいじゃない。」

「でも…。」

「またもや自爆するシンジ。『僕は何て馬鹿なんだ。』とシンジは本気で思った。」

「あつ、そう。アタシのことが嫌いになったのね。」

だが、アスカはあまり怒っていないようだった。ネルフでのアスカとは別人のようだ。

「ち、違うよ。」

今度はさすがに失敗しようがない問いかけだったので、無難に答えられた。

「じゃあ、決まりね。お休みっ。」

アスカはそう言いながら、シンジの横に寝転がった。

「もう、アスカったら強引なんだから。」

そう言いながらも、シンジの顔は緩んでいた。

さっきまでのいじけて泣いていたシンジの面影は無い。

アスカの力、恐るべしである。いや、シンジが現金なのか。

（良かった。いつものアスカだ。いや、いつもよりも優しいや。

良かった。まだアスカには嫌われていなかったんだ。

そうだよ、アスカはこの戦いが終わったら元通りだって言うてくれだし、

家の中では優しくしてくれるって言うてたよね。）

アスカが来たおかげで、シンジは心の平穏を取り戻した。

そして、いつも通りにアスカを背中から抱きしめた。

（ごめんねアスカ。アスカを疑ったりして、僕が悪かったよ。

でも、よく分かったよ。僕はやっぱりアスカが大好きなんだ。

時には鬼よりも怖くて、時には天使よりも優しいアスカのことが。

よし、少し元気が出てきたぞ。明日も頑張ろう。大好きなアスカの

ために。）

こうして、再びシンジはアスカのために頑張ろうと決心した。

だから、猛特訓に対しても、歯を食いしばって耐えることが出来たのである。

こんな事情があったので、トウジが何度かシンジに『惣流に文句言つたれ。』と言ったが、シンジは力なく笑うばかりであったのだ。

第39話 猛特訓（後編）（後書き）

あとがき

たとえどんなに辛いことがあっても、アスカさえいればシンジは
幸せな気分になれるのです。純粹なのか、単純なのか、どちらでし
ょう？

第39話補完 マヤの怒り

「もっつ、何でこんなに忙しくなるのよっ!」

マヤは機嫌が悪かった。

最近リッコがアスカにべったりとくっついていて、これも機嫌が悪い理由の一つだ。

なにしろ、最近のリッコはマヤの相手をしてくれないことが多い、しかもアスカにべったりなのだ。

一緒に暮らしているのもちろんのこと、

学校からネルフにはアスカと来ることが多く、帰りも一緒なのである。

特にアスカが婚約解消してからは、リッコとアスカが一緒に行動することが非常に多くなったのだ。

しかもリッコの技術部長室とアスカの技術部副部長室は、

隣にあるつえ繋がっており、同じ部屋にいてと言っても良い。

その中で二人きりで何かをしているのだ。

マヤからすれば面白くないことこのうえない。

アスカが婚約する前は、アスカの体調が本調子でなかったこともあり、

アスカは自分の部屋から動かなかったため、リッコが部屋を出たところを捕まえて話す機会も多かった。

婚約してからは、アスカはシンジと一緒にいることが多く、これまでリッコと話す機会が多かった。

だが、アスカが婚約解消してからは、シンジと共にいた時間は、全

てリツコと一緒に時間になっている。

マヤとしては、一刻も早く二人の仲が戻るのを願っていた。

しかも、アスカはリツコとおそろいの白衣を着ることが多く、それを見ると何だか無性に悔しくなるのだ。

「もっつ、何で婚約解消なんてするのよっ!」

そう、全てはそれが原因なのだ。

マヤは本当に困ってリツコの力を借りたい時や、どうしてもリツコの顔を見たくなくなった時には、

シンジにお願いして助けてもらっていたのだ。

アスカとは、キスシーン大公開事件以来冷たい関係が続いているのだが、

シンジは人が良いのか、謝ったらあっさりと許してくれたのだ。

それ以来、アスカ絡みで困った事があると、全てシンジにお願いしていたのである。

だから、二人が婚約を解消し、口もきかなくなったと聞いた時は、物凄いショックだった。

成功率が100%近い頼みの綱が切れたのだから、無理もない。

だが、細いながらも、最後に残った綱がシゲルだった。

シンジの頼みは滅多に断らないアスカだが、他の人間の頼みは割合あっさりと断ることが多い。

その中で、シゲルはかなり高い確率 - と言っても半分を少し超える位だが - で、

アスカに頼みを聞いてもらっている。思ったよりも頼りになるのだ。

もっとも、アスカの友人のユキちゃん経由で聞いた話では、

シゲルはアスカのかなり無理な注文を引き受けているらしいが、シゲルはそんなことは一切言わない。
マヤはそんなシゲルに対して、申し訳ないという気持ちで徐々に大きくなっていった。

そのため、いつしかシゲルに誘われたら必ず一緒に飲みに行くようになったのだが、
最近ではそれが逆転して、マヤの方から誘うこともあったのだ。

「もう、くやし〜いっ！青葉さんっ！今日はトコトン飲みましょうねっ！」

「あ、ああ。」

一見、シゲルはマヤの剣幕に押されたように見えるが、実はそうではなかった。

アスカに頭を下げて、マヤとリッコを引き離すように頼んでいたのだ。

その効果が目に見える形で現れたので、シゲルは内心では飛び上がらんばかりに喜んでいった。

第39話補完 マヤの怒り（後書き）

あとがき

最近出番の少ないマヤです。シゲルがアスカと組んで、リッコをマヤから遠ざけているのを知らず、イライラしています。シゲルはマヤとの仲の進展が目当てで、アスカはリッコに女の幸せを掴んでもらうのが目的なのですが、二人の利害は一致しているようです。

第40話 近付く心

「は〜い、みんな聞いてねえ〜。

喜べ〜、男子。美人の転校生が来たわよ〜。

そして女子も喜べ〜。美男子の転校生も来たわよ〜っ。」

2月29日の月曜日、シンジ達のクラスに、また転校生がやって来た。

女の子2人にカラルだ。女の子は2人とも他支部のチルドレン候補生であった。

アスカが呼び寄せたのだ。

「は〜い、じゃあ、皆さん、順番にあいさつしてね〜。」

ミサトに促されて、3人の転校生は次々とあいさつした。

「初めまして。中国から来ましたリン・ミンメイです。

歌を歌うことが大好きです。皆さん、よろしくお願いします。」

ミンメイは、ぺこりと頭を下げた。紺色に近い長い髪が印象的な美少女だ。

「初めまして。イスラエルから来ましたサーシャです。生まれはロシアです。」

サーシャも頭を下げた。蒼い瞳、長い金髪、長身、スリム、白い肌が特徴の美少女だった。

目が大きい、大人しい感じがする、

それを見ていたトウジが、ケンスケに声をかけた。

「おい、サーシャさんって、森川に似てへんか。

肌の色や髪や目の色は違うけど、他はかなり似ているんじゃないか？」

「ああ、そうだね。確かに雰囲気は似ているね。案外親戚だったりな。」

「ははっ。まさか、そんなことあらへんな。」

だが、かなり似ている2人だった。

もともと、2人とも血のつながりは無いのだが、いわゆる他人の空似と言われるものである。

こうして、パイロット候補生が新たに2人加わった。

今回は特に美男美女ばかりだったので、教室内は沸きに沸いた。

「ねえ、あなたが惣流さん？」

休み時間にサーシャがアスカに声をかけてきた。

「ええ、そうだけど。」

「お願いがあるんだけど…。」

「はあ？」

「惣流さんの写真が欲しいの。」

「あ、アタシはそっちの方の趣味は無いから。」

アスカは危険を感じて、サーシャから体を離そうとした。

「ち、違うのよ。私の友人に惣流さんのファンが多いのよ。だからなの。」

例の映画を見て惣流さんのことを気に入った人が私の周りには大勢いるのよ。」

「ああ、そういうことね。」

アスカはほっとした。

「で、どうかしら。」

「そういうことなら、相田に頼むといいわ。」

あいつなら、アタシの写真を一杯持っていると思うから。」

アタタの写真を撮らせてあげるって言えば、きっと無料でくれる筈よ。」

そう言いながら、アスカはケンスケを指した。

「そう、ありがとう。良かったわ。友人との約束が果たせそうです。正直言って、簡単に手に入れられるかどうか不安だったのよ。」

サーシャは今度はケンスケの方へと向かって行った。

「ああ、びつくりした。」
アスカはため息をついた。

「そうね。私も驚いちゃったものね。」
ヒカリも肩をすくめながら言った。

「でも、あの映画はインターネットで予告編で流しているし、色々な国の言葉の翻訳版も出しているから、他国の人が大勢見ているもおかしくないわね。」

「でも、あの映画って、日本以外でも見ている人が結構いるのね。驚いたわ。えっ。でもそういうことだったら、私と鈴原のキスシーンも全世界に流れている訳？」

「まあ、いずれはそういうことになるかしら。」
でも、予告編ではその部分はカットされているから、安心していいわ。」

「でも、いずれはあの映画は全世界で発売されるんでしょう？ちょっと恥ずかしいわ。」

「まあね。予約も結構入っているらしいわ。」
最後に聞いた話では、200万枚分の予約が入っているらしいわ。」

「ええっ！そんなにっ！」

ヒカリは思わず声をあげた。

「何よ、ヒカリ。売り上げ目標は、1000万枚よ。まだまだね。」

だが、アスカはあえて言わなかった。
200万枚というのが予約開始日当日の数字であることを。

「でも、凄いいじゃない。何でそんなに予約が入っているのよ。」

「実はね、かなりインチキしてるのよ。」

「えっ、インチキって?」

「あの映画に何曲か歌が入っていたでしょ。」

その歌手のうち、何人かの歌手のニューアルバムが入っているのよ。」

「ええっ、それって?。」

「そう。ニューアルバムを买买つもりの人は、こっちを買った方がお得な訳よ。」

それに、その歌手の写真も入っているしね。」

「で、でも、何でそんなことが可能なのよ。」

その歌手のニューアルバムの売り上げが落ちるし、採算が合わないんじゃない。」

「ふふふっ。そう思うでしょ。」

でも、ネルフから広告費が出ているし、歌手にしても色々な手段で協力をお願いしたら、印税なんか払わなくても良くなったし。

だから、2千円なんて低価格で売れる訳よ。」

これなら音楽ディスク買うよりも安いもの。絶対に売れるわ。」

「アスカったら、すっかりしてるわね。」

「そうよ。だって、これでも広報部のチーフだもの。これ位はお茶の子サイサイよ。」

「でも、それだけ売れたら、大儲けじゃない。儲かったお金はどうするの?」

その時、ヒカリの目が少しだけ光った。

「うん、実は良い考えがあるの。」

今回の戦いで親を無くした子供のための住まいを作ろうと思っ
ているよ。」

「えっ、また何でそんなことを思い立ったの。」

「今のアタシの仕事には、お亡くなりになったネルフ職員の遺族に、仕事を斡旋することも含まれているのよ。」

それで知ったんだけど、小さい子供を残してお亡くなりになった方も結構いるのよ。」

親のいない辛さはよく分かるから、少しでも助けになりたいの。」

「そう…。アスカは偉いわね。戦うだけじゃなくて、そんなことまで考えているなんて。」

私なんか、そんなこと、考えもしなかったわ。」

ヒカリはアスカに尊敬のまなざしを向けていた。

「まあ、ヒカリが大人になったら、色々手伝ってもらうかもしれないけどね。」

「私で良かったら、幾らでも手伝うわよ。でも、大変そうね。」

「そうね。人集めが大変なのよ。」

「施設の職員のこと？」

「うん、まあね。何と言っても親代わりになる人だし。」

「でも、そういう施設で働く人って、長続きしないっていう話も聞くし、泊まり勤務もあるんでしょ。大変よねえ。」

「えっ、ヒカリって、何か勘違いしてるでしょ。」

アタシの考えているのは、10人家族でも住めるような大きな間取りのマンションを作って、そこに里親みたいな職員に住んでもらって、親を亡くした子供4〜6人位と一緒に住んでもらうっていう考えなのよ。

子供を施設という名の牢獄に入れるようなことは考えていないわ。」

「えっ、そうなの。」

私ったら、親のいない子供のための住まいって言うから、てっきり児童養護施設だと思ってたわ。

私の知っている人が、保育士として勤めているんだけど、大変だって言っていたから。」

「そうね。日本はそういう所は遅れているものね。」

施設に入れればいいっていうもんじゃないのにな。

でも、探せばあるのよ。ファミリーグループホームとか。

言ってみれば、施設と里親の中間の形態ね。」

そう、アスカが考えていたのは、定員20人前後の一時的に保護を必要とする子供のための児童養護施設に、その施設の分園としての

位置付けのファミリーグループホーム、施設分園型ファミリーグループホームというものであった。

簡単に言うと、親を亡くした子はファミリーグループホームに入り、保護者の大人と一緒に暮らす。

それ以外の事情がある子は施設で一時的に預かるのだ。

これの経営主体として、アスカは社会福祉法人を考えていた。税金がかからない等のメリットがあるからだ。

手順としては、映画の収益金を元手に社会福祉法人を設立し、併せて児童養護施設と、大きな間取りのマンションを幾つか作る。ついでに保育園も幾つか作り、共働きのネルフ職員が仕事に専念出来る環境作りの整備も考えていた。

保育園なら将来自分も使う可能性が高いし、自分の息がかかっているなら、最優先で子供を預けられるとの読みがあった。さすがにアスカは抜け目が無かったが、それはこの場では言わなかった。

「でも、ごめんね。」

私は自分の手元に幾らかでも来ればなんて思っていたのに、恥ずかしいわね。」

「あつ、その手があったね。気付かなかったわ。」

「ア、アスカ。あのねえっつ。それって、本気なの？」

「嘘よ、嘘。」

しかし、ジト目でアスカを見るヒカリであった。

だが、そこにトウジが首を突っ込んできた。

「何や、惣流は孤児院でも作る気なんか。」

だが、返ってきたのは冷たい眼差しだった。

「アンタって、馬鹿ね。」

「そ、惣流。な、いきなり何てこと言うんや。」

「本当に、こいつって馬鹿ね。ヒカリ、教えてあげなよ。」

「うん。あのね、鈴原、良く聞いて。」

児童養護施設が孤児院と呼ばれていたのは、半世紀以上も前のことなの。

今は、孤児院というものは、日本からは姿を消しているのよ。だから、孤児院っていうのは死語なのよ。」

「な、なんやて。知らんかった。」

慌てるトウジにアスカが続けて言った。

「だから、その言葉を使うのは、無知な人間か、親を亡くした子供に偏見や悪意を持っている人だけなのよ。」

だから、もうその言葉を使うのは止めなさいよ。」

「お、おう、分かったわ。」

哀れトウジは、ヒカリの前で教養の無さを晒してしまった。

だが、落ち込むトウジを見て、さすがにアスカは可哀相に思っ

助け船を出した。

「悪気が無かったみたいだから良いわよ。
アタシやヒカリみたいに、その方面の勉強をしていない人には分
らないのが当たり前かもね。」

でもね、偏見や悪意を持っている人が使うことが多いのも事実なの
よ。

だから、これからは気を付けなさいよ。」

アスカの言葉に黙って頷くトウジであった。

「みんな！新しい仲間を紹介する。」

中国支部から来たリン・ミンメイ、エジプト支部から来たサーシャ、
そして同じ中学の相田ケンスケだ。」

ジャツジマンが声を張り上げた。

午後からのネルフの訓練に、新たに3人が加わった。

シンジとトウジは困惑した表情だったが、残りの者は歓迎していた。
少しでも戦力が増えれば、自分達が生き残る可能性が多少なりとも
上がるからだ。

皆、3人に注目した。

格闘技の訓練の時は、ミンメイとサーシャの格闘技の腕がミアアと
並ぶことが明らかになった。

一方、ケンスケがシンジと大して変わらない腕であることも。

ハーモニクステストの時は、逆にケンスケのシンク口率の高さが目

を引いた。

シンジ	7	5	%
マックス	9	9	%
ミリア	7	7	%
トウジ	3	5	%
アリオス	1	0	%
アールコート	7	7	%
カヲル	3	5	%
キャシー	0	0	%
マリア	1	6	%
ケンスケ	3	5	%
ミンメイ	1	3	%
サーシャ	1	7	%

これで、エヴァを起動出来るパイロットが、1週間前の4人から8人に倍増したのだ。

ネルフの幹部は、明るい兆しを見ることが出来たのである。アスカにしても、作戦の幅が大きく広がるのだった。

「碇君に話があるの。」

シンジは、訓練の合間の休憩時間に、マリアに話しかけられた。

「僕のことは気にしないで。大丈夫だから。」

シンジはマリアが自分のことを心配して話しかけたと勘違いしたよ
うだ。

無理も無い。パイロット達は何らかの形でシンジのことを励まして
いたからだ。

「違うの。アスカのことをお願いしたいの。」

アスカは泣きたいのを我慢して頑張っているわ。

でも、可哀相で見えていられないの。だからお願い。

たった一言でいいの。

『アスカが僕よりも辛い思いをしているのは分かっているよ。』っ
て言っただけなの。

それだけで、アスカの心は救われるの。」

それを聞いたシンジは、真っ青になって呟いた。

「そうか。僕はまだまだニブチンなんだね。」

「ううん、そんなことないわ。アスカは自分の心を隠すのがうまい
から。」

だから気付かなくてもしょうがないと思うの。

でも、碓君が分かってくれるだけで、アスカの心は随分と軽くなる
わ。だからお願い。」

「うん、アスカのためになることだったら、何でもやるよ。」

「じゃあ、ちよつと聞いて良い？」

ちよつと極端な例えだけど、もしアスカを殴らないとアスカが死ぬ
とするわね。

その場合、碓君はアスカを殴れる。」

「そりゃあ、他に選択肢が無ければ、やるしかないと思う。死んだらおしまいだもの。」

「アスカに嫌われても良いの？」

「そりゃあ嫌だよ。」

「もし、アスカが殴られて痛いって言って泣いたらどう思う。それも、殴った理由は言えないとしたら。」

「それは…。悲しいと思うよ。」

「そんな時、アスカに何て言って欲しい？
痛いから殴らないでって言って欲しい？違うわよね。」

「うん、許して欲しいし、分かってもらいたい。」

「じゃあ、分かるわね。アスカの気持ちが。今の話しと現実とは逆だけだね。」

「あつ、そうか。そういうことなんだ。」

「そうよ。アスカは碓君に嫌われたくない。でも、厳しくしないといけない。」

「でもね、やっぱり碓君に分かって欲しいのよ。」

「マリアさん、ありがとう。僕は自分のことしか考えていなかった。アスカは、自分を犠牲にしても他人を助けるような、とても優しい女の子なんだよね。」

そんなアスカが、辛い思いをしていること位、分かってあげなきゃいけないのに。

でも、お蔭で分かったよ。ありがと。本当にありがと。」

シンジは、マリアに心の底から礼を言うのだった。

「ねえ、アスカ。ちょっといいかな。」

「何よ、シンジ。」

アスカがそろそろ寝そうな雰囲気だったため、シンジはアスカに話しかけた。

「アスカに言いたいことがあるんだけど、いいかな。」

「うん、何よ。」

アスカは少し身構えたようだった。

（あれ、警戒させちゃったかな。）

「アスカ。辛い思いをさせてごめんね。僕が不甲斐ないばかりにでも、僕はアスカを理解しているから。」

アスカが涙を堪えて僕に厳しくしているって分かっているから。だから、アスカは僕を信じて、自分の思ったことをして欲しい。言いたいのはそれだけなんだ。」

「何馬鹿なことやってんのよ。アタシが泣くのを堪えているですっ

て。

ハン！アタシはそんなにヤワな人間じゃないわよ。

アンタが言わなくても、勝手に思ったことをやるからね。

そんなことも分からないの、アンタは？」

（あれっ、強気だな。でも、まあいいや。マリアさんの言うことを信じてみよう。）

「ああ、分からないさ。だけど、これだけは言わせて欲しい。

僕はアスカが何をしようとして、アスカのことが大好きだ。

アスカの悲しい心が分かるから。それだけは信じて欲しい。」

「ハン！何を言うのかと思ったら。全く、アンタって奴は、アンタって…。」

だが、アスカの声はそこで小さくなっていった。

アスカは、その青く綺麗な瞳に大粒の涙を浮かべていたのだ。

それを見たシンジは驚いた。アスカが涙を浮かべるなんて、思いもしなかったからだ。

「この、バカ！」

アスカはそう言うと、シンジにしがみついた。

「アンタは、アンタは、鈍いくせに嬉しいこと言ってくれちゃってさ。」

「ア、アスカ…。絶対にアスカを守るから。絶対に守るから。僕はアスカのことを心の底から愛しているから。」

「シンジったら…。格好つけちゃってさ。」

「悪かったかな。」

シンジは恐る恐る聞いてみた。だが、アスカの声は暗くはなかった。

「ううん、嬉しい。ありがとう。お礼にいいこと教えてあげるわ。」

「えっ、なあに。」

「アタシ、2021年の6月6日に大人の女になるつもりなの。」

「えっ。そ、それって…。」

（僕の20歳の誕生日じゃないか。も、もしかして。）

「誰かさんの誕生日にお望みのものをプレゼントしてあげるつもりなの。」

そう言えば分かるわよね。結婚前でも構わないわ。

分かったら、頑張んなさいよ!」

「う、うん。」

（や、やった。嘘じゃないよね。聞き違いじゃないよね。よし、頑張るぞ。）

その瞬間、シンジの顔に極上の笑顔が浮かんだ。

「でも、その代わり今はキスだけよ。」

「うん、分かったよ。」

（さすがに、今は無理か。）

「シンジ……。大好き……。」

「えっ、もう1回言って。」

（ア、アスカが僕のことを好きって言うてくれた……。）

「バカ……。」

アスカがシンジの口を塞いだため、その言葉は聞くことが出来なかった。

こうして、ゼーレとの厳しい戦いを前にして、アスカとシンジの心はさらに近付いていった。

二人の心がより強く結ばれるのも、そう遠い日のことではないだろう。

第40話 近づく心（後書き）

キャラ設定：リン・ミンメイ

エヴァンゲリオン操縦者候補生で、中国支部に所属している。

歌が好きで、紺色に近い長い髪が印象的な美少女。ミラクル5の
員。

最近来日し、市立第吉中学2年A組に在籍する。

あとがき

これで第2部終了です。

第1部では、冬月。第2部ではマリアの助言のお蔭で、シンジはアスカの心に近付いていきます。

そして、とうとうシンジはアスカの心をつちりと、とまではいかないまでも、かなり強く掴むことができました。

第3部は、ゼーレとの本格的な戦いが始まります。果たして、シンジとアスカの運命は？

第40話補完 - その1 - キャラクター一覧（40話終了時点）

1 エヴァンゲリオンパイロット（チルドレン）

・碓 シンジ（いかり しんじ）

主人公。エヴァンゲリオン初号機（新初号機）専属操縦者。サ・ドチルドレン。

ネルフ総司令碓ゲンドウの子供。母親碓ユイとは死別している？2001年6月6日生まれ。

市立第壱中学2年A組に在籍する。内気な性格で、最初はEvaに乗ることを嫌がる。

サ・ドインパクトの時に、アスカのことを心から愛していることに気付いたため、

アスカに告白し、彼女いない歴14年に終止符を打った。

その後、ドイツへ帰還指令が下されたアスカから離れたくないため、アスカにプロポーズし、引き止めようとした。

色々とドタバタしたが、アスカのフィアンセになったため、幸せ一杯である。

もつとも、相変わらずアスカに頭があがらない。

アスカがエヴァンゲリオン部隊の指揮官となるに当たり、一時的に婚約解消をしたため、

一時は落ち込んだが、朝のキスが2回になったため、持ち直した。

・惣流・アスカ・ラングレー

エヴァンゲリオン式号機元専属操縦者。元セカンドチルドレン（

現在は予備役パイロット）。

2001年12月4日生まれ。ドイツ支部から転属。市立第壱中学2年A組に在籍する。

明朗快活、スポ-ツ万能、容姿端麗、頭脳明晰で資産家。

本来は常人よりも遙かに強靱な精神力を持っているが、第15使徒の強力な精神攻撃を受けて

心を蝕まれ、壊されて、肉体にも変調をきたして入院する。

退院後も、悪夢に悩まされたが、シンジの添い寝によって、解決しつつある。

シンジのことを好きなのかどうかは、自分でも分かっていないが、シンジの優しさに徐々に惹かれつつあり、以前よりもシンジに対して、優しい笑顔を向けるようになった。

プロポーズされ、現在は、シンジのフィアンセである。

だが、エヴァンゲリオン部隊の指揮官となるに当たり、けじめをつけるため、

一時的にシンジとの婚約を解消している。

・綾波 レイ（あやなみ れい）

エヴァンゲリオン零号機専属操縦者。ファーストチルドレン。

彼女に関するデータは全て抹消済。市立第壱中学2年A組に在籍する。

アルビノといわれる色素異常のため、肌の色は真っ白。肉が嫌い。

現在、火星にいるらしい。

・鈴原 トウジ（すずはら とうじ）

エヴァンゲリオン新参号機専属操縦者。フォースチルドレン。20

01年12月26日生まれ。

いつもジャ-ジ姿。シンジとケンスケの3人でよくつるんでいる。

市立第壱中学に在籍する。アスカの策略に乗り、現在、洞木ヒカリと恋人同士になっている。

・渚 カヲル（なぎさ かをる）

エヴァンゲリオン操縦者。フィフスチルドレン。しかし、その実体は、第17使徒タブリス。

最後の使徒。シンジのことを気に入り、シンジを生かすため、あえてシンジの手にかかる。

レイと一緒に火星にいたらしいが、こちらに戻って来た。エヴァンゲリオン新四号機専属操縦者になる予定。

・パイロットリィダ

アスカが紅いコンタクトで変装した姿。

量産型のエヴァンゲリオン9体をすさまじい勢いで倒したことが公になっているため、人気がある。

正体を知っているのは、ネルフの一部職員のみ。今後の出番は無い？

2 アスカやシンジの友人

・洞木 ヒカリ（ほらき ひかり）

アスカの親友。2002年2月18日生まれ。市立第壱中学に在籍する。

クラスの委員長で、割合真面目な性格である。

アスカの協力によって、かねてから想いを寄せていたトウジと恋人同士になった。

・相田 ケンスケ（あいだ けんすけ）

2001年9月12日生まれ。シンジとトウジの3人でよくつるんでいる。

市立第壹中学2年A組に在籍する。エヴァのパイロットを希望している軍事オタク。

また、写真関係にも強く、アスカを始めとする、美人女子生徒の写真を男子生徒に売りさばいて儲けている。

現在は、アスカの下僕になることを条件に、ネルフの新兵器のパイロット候補生となっている。

その後ユキヤリツコの水着写真を撮ったり、転校生達の写真を撮ったりと、

アスカの下僕の役得を満喫している。

ゼーレとの戦いを前に、軍事マニアのネットワークから有用な情報を集めたり、

エヴァンゲリオン操縦者候補生になったりと、最近では大活躍している。

・森川 雪 もりかわ ゆき

オリジナルキャラ。ゼーレのエージェント。

アスカを監視しているが、アスカのことは大好きで、憧れている。

ゼーレから貰う生活費が収入の全てで、妹と弟を養っている。

最近、アスカ達と仲良くなり、アスカの家の家政婦代わりとなって炊事、掃除、洗濯などの家事一切を担っている。

ケンスケとは、ちょっと良い雰囲気になっている。

中学3年からはアスカと同じクラスになる。

・霧島 マナ（きりしま まな）

戦略自衛隊のスパイだが、事実上はゼーレのエージェント。シンジを監視したうえ、Evaの秘密も探ろうとしていたため、アスカには嫌われている。

戦略自衛隊の新兵器『トライデント』もろとも殺されかけたが、運良く助かる。

だが、戦略自衛隊から逃れるため、新たな町で新たな名前で生きていくことになった。

現在は所在不明。

3 ネルフ本部職員

・葛城 ミサト（かつらぎ みさと）

ネルフ作戦部長。階級は三佐。1985年12月8日生まれ。アスカとシンジの保護者。

エヴァンゲリオンの戦闘指揮を担当している。使徒の為父親を失ったので、その仕返しをしたいとネルフに就職する。

サードインパクト後、記憶喪失になるが、帰還した加持にプロポーズされ、

喜んで受けるとともに、記憶が一部戻る。2月から、シンジ達の中学校の担任になった。

・赤木 リツコ（あかぎ りつこ）

ネルフ技術部長。階級は一尉。1985年11月21日生まれ。エヴァンゲリオンの開発責任者。

ゲンドウと浅からぬ仲だったが、サードインパクト後、記憶喪失になり、

ゲンドウのことは、ただのおじさんだと思うようになっている。

今は、アスカ達と一緒に暮らしており、アスカとは仲良しになっている。
なお、本人は気付いていないが、アスカが誰かとかくつつけようと画策している。

2月から、シンジ達の中学校の教師になった。

・伊吹 マヤ（いぶき まや）

ネルフ技術部所属。階級は一尉。

サードインパクト後は、技術部部长代行となる。赤木リツコにあらがれている。

シンジがアスカに告白したシーンを誤って公開したため、アスカに恨まれる。

そのため、アスカに頭が上がらず、本来はアスカの上司なのであるが、立場が逆転し、アスカの下僕となりつつある。

・加持 リョウジ（かじ りょうじ）

ネルフ諜報部所属。階級は一尉。1985年6月17日生まれ。

隠密行動をとっていたが、アスカに謀られ、急遽ネルフに戻り、ミサトにプロポーズすることになる。

戻った後は、諜報部部长代行となる。

アスカとシンジの良き理解者であり、アスカとシンジから慕われている。

一方で、ドイツ時代の女性関係をアスカに握られているため、アスカに対しては頭が上がらない。

・碓 ゲンドウ（いかり げんどう）

ネルフ司令。1967年4月29日生まれ。碇シンジの父親。
シンジのことは気にかけているが、妻のユイに会ったため、他の全てを切り捨ててきた。
アスカ曰く、髭親父。

・冬月 コウゾウ（ふゆつき こうぞう）

ネルフ副司令。1958年8月15日生まれ。
大学助教授時代に碇ユイとめぐり合い、それが縁で碇ゲンドウと知り合う。

南極にセカンドインパクトの調査に出たとき、同行したゲンドウからユイと結婚したと知らされ驚く。
アスカやシンジのことを常に気にかけており、アスカとシンジが恋人になるきっかけを作った。
アスカとシンジの両方から信頼されている。

・日向 マコト（ひゅうが まこと）

ネルフ本部のオペレーター。サードインパクト後は、作戦部長代行をしている。
葛城ミサトにあこがれていたが、ミサトが加持と婚約したため、かなり落ち込んでいる。

・青葉 シゲル（あおば しげる）

ネルフ本部のオペレーター。
皆に気付かれないように、密かにマヤにアタックしていたが、全く相手にされなかった。
だが、シンジの恋の悩みをマヤと一緒に聞くことにより、マヤとの仲は親しくなりつつある。

アスカがそうなるよう仕組んでいることを知っており、アスカには頭が上がらない。

二人の仲の障害である（と思い込んでいる）リツコを誰かと無理やりくっつけようと密かに画策している。

最近、そのことで、アスカと良からぬ相談をしているらしい。

・碓 ユイ（いかり ゆい）

シンジの母。ゲンドウの妻。シンジが幼い頃、初号機に取り込まれる。

4 その他ネルフ職員

・惣流・キョウコ・ツエツペリン

アスカの母。

ドイツ支部（旧ゲヒルン）にてエヴァのシンクロの研究をしていたが、

精神汚染を受け、アスカが幼い頃自殺したとされているが、真相は不明。

・サーシャ

オリジナルキャラ エヴァンゲリオン操縦者候補生で、エジプト支部に所属している。

蒼い瞳、長い金髪、長身、スリム、白い肌が特徴の美少女。

目が大きい、大人しい感じがする、14歳のロシア系イスラエル人。

MAGIへのハッキングに成功した、伝説のハッカーグループ『ミラクル5』の一員。

ザナドとは親戚。最近来日し、市立第壱中学2年A組に在籍する。

・ザナド

オリジナルキャラ エヴァンゲリオン操縦者候補生で、エジプト支部に所属している。

黒い瞳、黒い縮れた短髪、長身、スリム、褐色の肌が特徴の、精悍な顔つきをしている14歳の少年。

正義と愛を重んじる、勇敢なイスラームの戦士でもある。サーシャとは親戚。

・ハウレーン・プロヴァンス

オリジナルキャラ エヴァンゲリオン操縦者候補生で、フランス支部に所属している。

市立第壱中学2年A組に在籍する。蒼い瞳にピンクの髪、長身でスリムな白人の少女。

フランスの傭兵部隊、ヴァンテアンに所属。

・アリオス・テオマン

オリジナルキャラ。エヴァンゲリオン操縦者候補生で、アメリカ支部に所属している。

市立第壱中学2年A組に在籍する。蒼い瞳で茶髪、長身だが体格のがっちりとした白人の少年。

ハキハキとした感じで、好感が持てる。ジャツジマンの部下でトウジのガード役。

・キャシー

オリジナルキャラ エヴァンゲリオン操縦者候補生で、アメリカ第3支部に所属している。

市立第壱中学2年A組に在籍する。ドイツ系アメリカ人で、蒼い瞳、短い金髪、スリムな白人の少女。

活発な感じで、大きなメガネをかけており、美人とは言えないが、スタイルの良さと優しい感じの笑顔がそれをカバーして余りある。

ジャツジマンと同じ組織に属している。謎の組織とアスカとの連絡員でもある。

・ミリア

オリジナルキャラ エヴァンゲリオン操縦者候補生で、ブラジル支部に所属している。

市立第壱中学2年A組に在籍する。戦闘機乗り。

標準よりもやや大きめの体格で、蒼い瞳に緑の髪で、白い肌をしている。

ややキツイ目付き。ジャツジマンの部下でアスカのガード役。ミラクル5の一員でもある。

孤児で親の顔は知らない。

・マックス（マクシミリアン・ジーナス）

オリジナルキャラ エヴァンゲリオン操縦者候補生で、ブラジル支部に所属している。

市立第壱中学2年A組に在籍する。戦闘機乗り。線の細い優男で、メガネをかけている。

黒い瞳に青い髪。母は日本人、父は白人のハーフ。ジャツジマンの部下でシンジのガード役。

・アールコート・マリウス

オリジナルキャラ エヴァンゲリオン操縦者候補生で、アメリカ支部に所属している。

市立第壱中学2年B組に在籍する。割ときゃしゃな感じで、蒼い瞳、紫色の髪をした白人の少女。
ジャツジマンの部下。

・リン・ミンメイ

オリジナルキャラ エヴァンゲリオン操縦者候補生で、中国支部に所属している。

歌が好きで、紺色に近い長い髪が印象的な美少女。ミラクル5の一員。

最近来日し、市立第壱中学2年A組に在籍する。

5 その他

・ペンペン（ぺんぺん）

温泉ペンギン。アスカ、シンジ、ミサトと同居している。

・キール・ロレンツ

人類補完委員会のメンバー

・ジャツジマン

オリジナルキャラ。謎の組織のエージェント。凄腕の傭兵でもある。加持とは面識がある。第3新東京市のガードとゼーレ調査の責任者。後に、第3新東京市のガードは、アメリカの傭兵部隊、レッドアタ

ツカーズに任せることになる。

・盟主^{めいしゅ}

オリジナルキャラ。謎の組織のトップ。

その正体・目的は不明だが、影に隠れて、チルドレン達のガードをするよう、部下に指示している。

・大佐^{たいさ}

オリジナルキャラ。謎の組織の幹部。日本における責任者。ジャツジマンの上司でもある。

・レッドウルフ

オリジナルキャラ。アメリカの傭兵部隊、レッドアタッカーズの一員。

格闘技、兵器、爆弾、変装、諜報戦など、あらゆる分野のエキスパートであり、唯一、ジャツジマンに勝ったことがあるほどの凄腕。謎の組織に雇われて、アスカ達の身辺警護のために近付いてくるが、その年齢、性別など正体は一切不明。

・ラブリーエンジェル

ブルー（ウルフ） ラブリーエンジェルの隊長。青い髪の少女。体格のがっちりした、もう大人に近い19歳。

ブラウン（ウルフ） 茶色い髪の少女。ワイルドな16歳。

グリーン（ウルフ） 緑の髪の少女。気が強く、自信満々の15歳。

イエロー（ウルフ） 黄色がかった髪の少女。無口で性格のキツイ

18歳。

ブラック（ウルフ） 黒髪の少女。明るく元気な17歳。

ピンク（ウルフ） ピンクの髪の少女。明るく元気な15歳。

オレンジ（ウルフ） オレンジ色の髪の少女。底抜けに明るい17歳。

パープル（ウルフ） 紫色の髪の少女。人形みたいに大人しい17歳。

レッド（ウルフ） 赤い色が好きな少女。明るく元気な14歳。赤い死神とも呼ばれる。その正体は…。

第40話補完 - その2 - 年表（40話終了時点）

蒼い瞳のフィアンセの年表を作りました。エヴァは、TVと映画の設定が違っていたり、

つじつまが合わなかったりすることが多いので、整理したものです。つじつまが合わない

ところや分らないところには、私が独自に設定しています。

なお、話の展開の都合上、この年表が変更される場合もあり得ます。

1999 冬月コウゾウ（京都大学教員）、研究室で碓ユイと出会う。

冬月コウゾウ、六分儀ゲンドウの指名で身元引受人として警察署出頭。

秋 碓ユイ、冬月にゲンドウと付き合っていることを告白。

2000

9・12（火） ゲンドウ、資料と共に南極より引き上げ、日本へ向かう。

9・13（水） セカンドインパクト発生。南極大陸融解。地軸のずれにより生態系激変。

9・15（金） インド・パキスタン国境で難民同士の軍事衝突。世界各地で内戦。

9・20（水） 東京に新型爆弾投下。以後東京は閉鎖区域に。

2001

2・14（水） バレンタイン休戦臨時条約締結。各地の内戦状態閉塞。

6・6（水） ゲンドウ・ユイの間に、シンジ誕生。

第2新東京市（長野県松本市）に遷都。

9・12（水） 相田ケンスケ誕生。

12・4（火） 惣流・アスカ・ラングレ - 誕生。

1226（水） 鈴原トウジ誕生。

2002 ゲンドウ・冬月等セカンド・インパクト正式調査の為、南極へ。

船中でゲンドウはユイと結婚していることを冬月に報告。国連、セカンドインパクトの原因を「大質量隕石落下」と発表。

2003 冬月、人工進化研究所所長碇ゲンドウに、セカンドインパクト事実公表を迫る。

ゲンドウ、冬月を「ゲヒルン」に誘う。

- 2004 箱根地下第2研究所実験中、碇ユイ消失。碇ゲンドウ一時失踪。
- 帰還後「人類補完計画」・「アダム計画」推奨を提言。
シンジ、ゲンドウとの別居生活開始。
- 2005 葛城ミサト、第2東京大学で赤木リツコ、加持リョウジと知り合う。
- 惣流・アスカ・ラングレー、セカンドチルドレンに選出。
(映画は2008年。)
- 同日、惣流・キョウコ・ツエッペリン自殺。(映画は2008年。)
- 第2次遷都計画。第3新東京市着工。
- 2007 葛城ミサト、加持リョウジと別離。
- 2008 赤木ナオコ、AGI基礎理論完成。赤木リツコ、ゲヒルン入所。E計画勤務を拝命。
- 2009 葛城ミサト、ゲヒルンドイツ第3支部入所。
- 2010 綾波レイ、ゲンドウに連れられ、ゲヒルン来所。
赤木ナオコ博士、MAGIシステム完成。同日夜、綾波レイを絞殺し、自殺。
- ゲヒルン解体。同日特務機関ネルフ発足。同組織に移行。
- 2012 碇ユイ8度目の命日。
- 2014 綾波レイ、第3東京市第壱中学校に転入。
- 2015

第3使徒、サキエル、第3新東京市に襲来。
汎用人型決戦兵器エヴァンゲリオン稼働開始。
暴走した初号機によって使徒殲滅。

06 碓シンジ、第3東京市第壱中学校に転入。

06 第4使徒シャムシエル、シンジにより殲滅（第3使徒
出現の3週間後）。

07 第5使徒ラミエル、シンジにより殲滅。

07 J A暴走。

07 第6使徒ガギエル、アスカとシンジにより殲滅。

0721（火） アスカ転校（ TVでは9月21日でした。）

0804（火） 第7使徒イスラフェル登場。

0811（火） 第7使徒アスカとシンジにより殲滅。

0815（土） 第8使徒サングルフォン、アスカにより殲滅。

08 第9使徒マトリエル、アスカ達により殲滅。

09 第10使徒サハクイエル、アスカ達により殲滅。

マナ登場

09 第11使徒イロウル、リツコとMAGIにより殲滅。

09 第12使徒レリエル、暴走した初号機によって殲滅。

09 米国ネルフ第2支部、エヴァ4号機へのS2機関搭載
実験中に消滅。

機によって殲滅。
第13使徒バルディエル、ダミ-プラグに操られた初号

10 第14使徒ゼルエル、暴走した初号機によって殲滅。

初号機、使徒の捕食によりS2機関獲得。

1 1 シンジ、初号機からサルベージされる（使徒出現の3日後）。

1 1 第15使徒アラエル、レイによって殲滅。

1 2 第16使徒アルミサエル、レイの自爆によって殲滅。

エヴァンゲリオン零号機自爆により、第3新東京市壊滅。

1 2 第17使徒タブリス（カヲル）、シンジにより殲滅。

2 0 1 6

1 0 2（土） A - 8 0 1 発令により、ネルフ超法規的保護破棄、戦略自衛隊による軍事介入。

1 0 3（日） 人類補完計画、ゼーレにより発動。サードインパクト発生。

（第1部）婚約に至る道

1 0 6（水） アスカ目覚める。

1 0 8（金） 記者会見。

1 0 9（土） マヤの仕事を仕上げる。アスカとシンジが恋人になる。

1 1 0（日） ユキと友人になる。マヤに再度仕事を頼まれる。

1 1 1（月） アスカ、ミニスカートを買う。

1 1 3（水） ヒカリとトウジをくつつける。

1 1 4（木） アスカがS計画の最高責任者となるがドイツから帰還指令。映画のシナリオ決定。

1 1 5（金） 加持帰還。加持とミサトが婚約。アスカとシンジも婚約。

(第2部) ゼーレとの戦い

- 1・16(土) 紅いドレスを買う。
1・23(土) 婚約披露パーティー
1・24(日) 加持にアスカから荷物が届く。シンジが手料理を作る。
1・28(木) シンクロテスト。アスカ、チルドレン資格抹消。
予備役となる。

- 2・01(月) 中学校再開。エヴァ起動テスト。
2・02(火) エヴァ起動テスト(トウジ)。
2・04(木) シンジ襲われる。アスカ撃退。
2・07(日) 傭兵達集合。
2・11(木) 映画試写会。
2・12(金) マリア達が転校生して来る。
2・13(土) 文化祭。S計画始動。ゼーレの工作員が学校に侵入。マコトの誕生日。
2・14(日) バレンタインデー。ゼーレ侵攻。カヲル登場。
2・15(月) カヲルのお見舞い。
2・18(木) ヒカリの誕生日。
2・20(土) カヲルとマコトの引越。越し。
2・21(日) アスカとシンジの婚約解消を発表。猛特訓開始。
2・29(月) サイシャとミンメイが来る。カヲルと共にアスカのクラスに転入する。

総司令官：碇ゲンドウ

副司令：冬月コウゾウ

各国支部 (支部長は、副司令相当職)

アジア方面 : 中国支部 (北京、Eva配備予定)、インド支部、インドネシア支部

ヨーロッパ方面 : ドイツ支部 (ベルリン、Eva配備予定)、ドイツ第2支部 ハンブルグ

イギリス支部、フランス支部、ロシア支部

北アメリカ方面 : アメリカ支部 (Eva配備予定)、アメリカ第3支部 マサチューセッツ

南アメリカ方面 : ブラジル支部 (Eva配備予定)

アフリカ方面 : エジプト支部 (Eva配備予定)

オーストラリア : オーストラリア支部

注) ベルリン、ハンブルグ、ペキン、マサチューセッツには、マグニタイプのコМПユータが設置されている。

(映画の設定より)

本部組織図

総務部 (総務人事財政・施設管理)

総務部長 : 冬月コウゾウ (副司令兼務)

Jチム (殉職者遺族の支援) チーフ : 惣流アスカ

特命部長

E計画 (EVANGELION開発計画) 責任者 : 赤木リツコ

S計画（ゼ・レ殲滅・掃討計画）責任者：惣流アスカ（極秘、対外的には冬月）

NR計画（NERV再生計画）責任者：惣流アスカ（極秘、対外的には冬月）

ER計画（EVANGELION再生計画）責任者：惣流アスカ（極秘、対外的には冬月）

作戦部（戦闘時の作戦指揮、武器弾薬の管理、パイロットの管理）

作戦部長：葛城ミサト（但し、市立第壱中学校へ出向）

部長代行：日向マコト

Sチーム（作戦立案、戦況分析）チーフ：日向マコト、サブ

：碓シンジ（部外秘）

Tチーム（通信、情報分析担当）チーフ：青葉シゲル、サブ

：惣流アスカ（部外秘）

Evaパイロット（チルドレン）チーフ：碓シンジ、サブ

：鈴原トウジ

初号機パイロット：碓シンジ

式号機パイロット：未定（惣流アスカ）

参号機パイロット：鈴原トウジ

四号機パイロット：渚カヲル

予備役パイロット：惣流アスカ（極秘）、ミアア、マリア、

ミンメイ、サーシャ

パイロット候補生：マックス、アリオス、アールコート、キ

ヤシー、ケンスケ、ハウレーン

技術部（技術開発研究、EVA・MAGIの運用管理）

技術部長：赤木リツコ（但し、市立第壱中学校へ出向）

部長代行：伊吹マヤ

副部长：惣流アスカ（部外秘）

Aチーム(MAGI運用管理) チーフ:赤木リツコ(事実上は
アスカ)サブ:伊吹マヤ
Bチーム(EVAの運用管理) チーフ:惣流アスカ(部外秘)
サブ:伊吹マヤ
Cチーム(兵器開発) チーフ:伊吹マヤ(事実上はア
スカ)
Dチーム(使徒の研究) チーフ:伊吹マヤ、
サブ:惣流アスカ(部外秘)
Xチーム(新兵器パイロット) チーフ:惣流アスカ(部外秘)
サブ:相田ケンスケ(部外秘)

広報部(隠蔽工作、宣伝工作、ネルフのPR)
広報部長:マリス・アマリリス

Aチーム(使徒隠蔽工作) チーフ:マリス・アマリリス
Bチーム(ネルフのPR) チーフ:惣流アスカ
Sチーム(対ゼーレ戦略) チーフ:マリス・アマリリス(事実上はアスカ)

保安部(本部施設内の保安)
保安部長:真田ヒロシ

諜報部(諜報謀略、本部施設外の身辺警護等)
諜報部長:空席
部長代行:加持リョウジ
副部長:碓シンジ(アスカの身辺警護専任)
副部長:惣流アスカ(対ゼーレ諜報戦専任)
Nチーム(ネットを利用した諜報・謀略活動)チーフ:碓シンジ(事実上はアスカ)

注1) 諜報部の存在自体が、部外秘となっている。

注2) 極秘：幹部以外には秘密、部外秘：関係者以外には秘密

・各登場人物の階級

一佐：惣流・アスカ・ラングレー

(T I後に三尉から二佐に、ゼーレ撃退後一佐に昇進。但し表向きは一曹) 公式情報では、広報部のチーフ

三佐：葛城ミサト(T V 1 2話で一尉から昇進)

一尉：赤木リツコ、伊吹マヤ、日向マコト、加持リョウジ

二尉：青葉シゲル、碓シンジ

三尉：鈴原トウジ、綾波レイ、渚カヲル

一曹：ケンスケ、ミアア、マリア、ミンメイ、サーシャ、マックス、アリオス、アールコート、キャシー、ハウレーン

第3部 ゼーレとの戦い - 激闘編 - 第41話 反撃開始

「シンジ、おはよう。」

アスカはそう言うつや否や、シンジに優しくキスをした。

「はい、次は昨日は良く頑張ったから、ご褒美のキスよ。」

今度も優しいキスだった。

婚約を解消した翌日の朝からは、アスカはお目覚めのキスに加えて、特訓に頑張ったご褒美のキスをしてくれるようになったのだ。このため、シンジは辛い特訓にも耐えることが出来たのだ。

（アスカ…。大好きだよ…。）

シンジはアスカを優しく抱きしめた。

アスカはシンジに抱かれるに任せて、抵抗する気配は無い。最近のアスカはシンジが飽きるまでキスをさせてくれる。そのため、シンジが止めるまでは、キスは終わらないのだ。こうして、今朝もシンジは束の間の幸せに浸っていた。

（こうしていると、アスカと心が繋がっているような感じがする。

アスカは僕のことをどう思っているんだろう。

僕のことを好きになってくれたんだろうか。知りたい。

今は聞く時期じゃないけど、いつかは聞いてみよう。

そう、ゼーレとの戦いが終わったら…。）

シンジは、そんなことを考えていたが、徐々にアスカとのディープキスに酔いしれていった。

「はいはい、押さないで下さ〜い。一列に並んで下さ〜い。」

今日は3月1日の火曜日。

平日なのだが、第3新東京市で一番大きな書店の前には朝早くから長蛇の列が出来ていた。

このため、書店の店員が声を枯らして客達の列を整理していたのだ。

原因は、『救世主アスカ』だった。

文化祭で上映した映画『救世主アスカ』の評判は高く、映画を見た者はネットの中で絶賛したのだ。

そうなると思ってみたいと思うのが人情である。

ネットで流した予告編の出来が良かったこともあり、『救世主アスカ』の人気は否応なく上がっていったのである。

その『救世主アスカ』のDISKが全世界で同時発売される日が今日だったのだ。

無論、ゼーレの妨害があり、通常ルートでは流通しなかった。

それを見越したアスカが考え出した方法が、書店での発売だったのだ。

書店で売るために『救世主アスカ』という本を売り出したのだが、そこに付録としてDISKを2枚付けたのだ。

1枚が映画のDISK。もう1枚が映画の主題歌、歌手のニューアルバム、映画出演者の写真集、映画の各種設定集などを満載したDISKだ。

これだけの内容なのに、価格は2千円と低価格であり、しかも発売

当日の購入者には出演者の生写真付きという特典があったのだ。

しかも、ネルフの公式ホームページに、生写真の内訳が載っていた。生写真は2枚入で、100枚の内5枚がアスカの水着写真、20枚がアスカの写真、

30枚が出演者女性の水着写真、35枚が出演者女性の写真、10枚が出演者男性の写真というものだった。

そこに、アスカの水着写真100枚の内1枚は下着姿であるという噂が流れたのだ。

但し後ろ向きで、胸は全く写っていないということだったが、それでも千分の1の確率を信じて並ぶ男共が後を絶たなかったのだ。

噂を流したのはアスカであり、無論これはシンジには内緒だ。

アスカも本当は嫌だったのだが、作戦の成功のためにと涙を飲んで下着姿の写真を入れることを決断し、噂を流したのだ。

セミヌードという話もあったのだが、水着姿も下着姿も隠す面積は大して変わらないという結論に達し、下着姿を選択したのである。ちなみに水着写真を撮ったのはケンスケであり、下着姿の写真だけはユキの撮影である。

なお、同じような行列は全世界で見られた。

こうして、この日だけで1億冊という驚異的な売り上げが記録されたのである。

もちろん、ネット経由で予約されて宅配されたものは別勘定である。

「おい、お前どうだった？」

「へっへっへっ。惣流さんの水着写真をゲットしたぜ。もう一枚はミサト先生の写真だったぜ。ラッキー！」

「良いなあ。俺なんか、碓の写真と洞木の写真だぜ。洞木でもせめて水着写真だったら良かったのになあ。」

「でも、良いじゃないか。碓の写真だったら、女の子に言えば交換してくれると思うぜ。誰かに言ってみなよ。」

「えっ、本当か。良いこと聞いたぜ。」

「そういえば、惣流さんの下着姿の写真が当たるっていう噂を聞いたんだけど、」

「当てた奴の話なんて聞かないなあ。あれってガセネタなのかなあ。」

「そうだな。噂の出所もはっきりしないしな。」

この日アスカの中学校では、この手の話題が本人のいない所で公然と囁かれていた。

実は、第3新東京市に出荷した分からは、アスカの下着姿の写真は除かれていたのだ。

とはいっても、いずれネット上で流通するのは間違いないのだが、それでもアスカの心情としては知り合いの目に触れるのは少しでも遅い方が良かったのである。

また、別の場所では…。

「あゝあ、碓君の写真、当たらなかつたわ。がっかり。」

「で、何が当たったの？」

「ミサト先生の水着写真と惣流さんの写真よ。」

「それなら、男子に聞いてみなさいよ。」

惣流さんの写真だったら、碇君の写真と交換してもらえるわよ。」

「でも、惣流さんのこの写真も捨て難いのよね。」

何て言うか、明るく輝いて凛々しいと言うか、とにかく良いのよね。誰かミサト先生の写真と交換してくれないかしら。」

「水着写真でしょ。だったら大丈夫よ。」

ミサト先生なら男子に大人気だから。数も少ないみたいだしね。」

アスカの中学校は、どこもかしこもこの話題で持ちきりだった。

一方、教室内ではアスカとヒカリがおしゃべりをしていた。

「ねえ、アスカ。聞いた？」

『救世主アスカ』のDISK、男子生徒の半分以上が買ったらしいわよ。」

お蔭で今日は遅刻者が異様に多かったらしいわ。」

「ふうん。このクラスはそうでも無かったのに。」

アスカは意外だった。このクラスの人間が買わなかったことではない。

他のクラスの男子の半分以上が『救世主アスカ』を買いに行ったことがだ。

文化祭の時に映画は見ているはずだし、今日買いに行くとしたら、目的は生写真以外には考えられないが、まさかそれにこれほどの効果があるとは思わなかったからだ。

これならば、日本中、いや世界中でも同じような効果が期待出来る。実は色々と事情があつて、早く売れることにこしたことはないのだ。同じ枚数を売るにしても、今日と1カ月後では全然意味が違うのだ。そんな事情を知らないヒカリは続けて言った。

「やっぱり本人がいるし、相田君から写真も手に入るしね。そこまでして今日は是非買おうという人はいないんじゃない。」

「そうかもね。でも、良く考えると恥ずかしいわね。自分の写真をそこら中の人が持っているなんて。ちょっと失敗したかしら。」

「なによ。私だって恥ずかしいんだから。アスカが是非にと言うから協力したのに。」

「はははっ。ヒカリごめんね。アタシが悪かった。」

「まあ、分かればよろしい。」

こうして二人は大笑いした。

そんな会話に聞き耳を立てている者がいた。言わずと知れたシンジとトウジである。

「おい、センス。惣流の写真が全世界にばら蒔かれているっちゅう

「うんせ。

どう思うんや。キリキリと白状せい。」

「どつって言われても。僕は婚約を解消した身だし、何も言うことは無いよ。」

「心の中のため込むのは良くないっちゅうんや。ワシには正直に言うんや。」

「そついつトウジこそ、洞木さんの写真も全世界にばら蒔かれてい
るんだよ。」

「どう思うのや。」

「うっ、と詰まって何も言えないトウジであった。」

「まったく、トウジは素直じゃないんだから。」

「本当は洞木さんの写真のことが気になるくせに。」

シンジは慌てふためくトウジを見て、思わず笑みをこぼした。

とある大学では、学生同士がアスカの噂をしていた。

「おい、例の『救世主アスカ』のDISK、見たか？」

「ああ、良かったよなあ。凄い迫力だったぜ。あの使徒って、本当にいたのかなあ。」

「おい、それよりもあのアスカって娘、物凄く可愛いよなあ。」

あんなに可愛い女の子なんて、周りにいないよな。俺、ファンになつちやつたよ。」

「俺もだ。」

あの蒼く大きな瞳、キリリとした細い眉、明るい笑顔、どれをとっても良いよなあ。

あんな女の子が彼女だったら、本当に幸せだよなあ。」

「なあ、アスカちゃんのアドレスが分からないから、ネルフに直接メールを送ろうぜ。」

駄目で元々だしさ。」

「そうだな。おっと、それよりももう一枚のDISKを見たか？ネルフのホームページから、秘密のページに行けるらしいぜ。」

そこには、アスカちゃんや他の出演者の画像がたくさんあるっていうことだったぜ。」

それも、一部は日替わりらしいんだ。こりゃあ、毎日見るしかないぜ。」

「本当かよ。ちょっと見てみようぜ。」

二人は大学のコンピュータを使ってネルフのホームページにアクセスした。

すると、その中に『救世主アスカの部屋』というのがあり、そこに入っていくとパスワードを要求された。

パスワードは、『救世主アスカ』のDISKに記されているという表示も一緒に出た。

二人は『救世主アスカ』のDISKをドライブに入れて、

そこに記されていたパスワードを入力し、秘密の部屋へと辿り着いた。
その表示を見ると、各出演者毎に10枚の画像データがあり、アクセス数の多い出演者は定期的に画像データが更新されることが記されていた。

「おい、アスカちゃんの画像を見ようぜ。」

「ああ、任せとけ。」

返事をした男は、アスカのアイコンをクリックした。
すると、さらに10個のアイコンが現れた。
適当なアイコンをクリックすると、アスカの画像が現れた。

「おっ、こりゃあ可愛いや。」

そこには赤いワンピースを着てあふれんばかりの笑顔を浮かべたアスカの画像があった。

「他のも見てみようぜ。」

他の画像には、違ったアスカが写っていた。
寂しげなアスカ、自信満々なアスカ、怒ったアスカなど、様々な表情のアスカが写っていたのだ。
服装も清楚なもの、活発そうなもの、ちょっと色気のあるものなど、多種多様であった。

「おおおっ！かわいいなあっ。」

「やっぱり、アスカちゃんは可愛いや。とてもじゃないけど、14

歳とは思えないや。」

「よし、ネルフにファンレターを出そうぜ。」

日本全国でこれと同様な光景が展開された。

元々アスカは超美少女であることに加え、薄くではあるが化粧をして、

お洒落な服で身を包めば、大抵の男は虜になってしまうほどの美しさを発揮するのだ。

色気こそ抑え目であるが、却って清楚さが際立つというものだ。

アスカは単に美しいだけでなく、知性によって磨きをかけられ、さらに太陽の様な明るい輝きが加わるのだ。

並のアイドルなど霞んでしまうほどの輝きをアスカは持っていた。

ニブチンであるシンジでさえも気づき、惹かれたアスカの輝きに、日本中の、世界中の男どもが引きつけられた。

そして、さらなるアスカの情報を求め、ネルフのホームページに大挙してアクセスし、

同様に大量のメールがネルフに送り込まれたのだ。

こうして、アスカは一日にして、押しも押されぬトップアイドルになった。

それも、世界規模のアイドルである。

さすがにこの事態はアスカの予想を遥かに超えていた。

「駄目です！もうすぐパンクしそうです。」

「早く技術部の人を呼んで！」

その頃、ネルフの広報部は大変な事態に陥っていた。

DISKを買った者が、ネルフの公式ホームページに大挙してアクセスしていたからだ。

一応こんな事態を想定し、サーバーの容量を大幅に増強していたのだが、

想像を遥かに超えるアクセスがあったのだ。

それだけならまだしも、大量のファンレターも送られて来て、徐々にサーバーの負荷が大きくなっていった。

このため、マヤが呼び出されて応急処理をしたが、

それでもあと1時間持つかどうかというところだった。

このままでは、MAGIの動作にも悪影響を及ぼす恐れがある。マヤは迷わずリツコに助けを求めた。

「先輩、助けて下さい。」

予想を遥かに超えるアクセスがあって、サーバーがパンクしそうなんです。

しかも、アクセスはどんどん増えているんです。

あと1時間もすれば、本当にパンクしてしまいます。

お願いします、助けて下さい。」

「分かったわ、マヤ。とにかくそっちに行ってみるわ。

アスカも連れて行くから、それまで何とか持ちこたえてね。」

「は、はいっ。」

マヤはリッコが来ると知って、満面の笑顔を浮かべた。

「タタタン タ タタンタタン タンタンタータン…」

ミサトの授業中に、いきなり携帯電話が鳴った。

「あれっ、ちよっちごめんねっ。」

そう言つと、授業中にも関わらず、ミサトは電話に出た。

「えっ、リッコ？今授業中なのよ。一体どうしたのよ。

えっ、緊急事態？アスカを連れて来い？

もっっ、しょうがないわねえ。」

ミサトは電話を切ると、両手を合わせて頬にくっつけた。

「みんな〜、ゴミン。ちよっち緊急事態だから、これから自習にするわよ〜ん。

それと、アスカ！急いで来て！」

こうして、ミサトはアスカを連れて風のように教室を去って行った。

「一体どないしたんや。」

トウジは首を捻る。他の転校生達も同じように不思議そうな顔をしている。

もし、ゼーレからの攻撃ならば、全員に集合がかかる筈なので、アスカにだけ声がかかる理由が見当たらないからだ。

ただ一人、シンジだけが事態をほぼ正確に把握していた。というものの無理はない。

アスカがMAGIの運用管理の責任者であることを知っている者は数少ないからだ。

また、昨日の晩に作戦の概要を聞いており、

作戦がうまくいけばマヤに呼び出されてネルフ本部に行くであろうことも聞いていたのだ。

（作戦はうまくいっているようだね。アスカ、頑張れ。）

シンジは心の底からアスカのことを応援していた。

第3部 ゼーレとの戦い - 激闘編 - 第41話 反撃開始（後書き）

あとがき

圧倒的に不利な状況ですが、アスカはゼーレに立ち向かいます。
その反撃の第一歩が開始されたのです。

第41話補完 ナンバー2

「大佐っ！それは本当ですか？」

「ああ、事実だ。私は盟主様から直接聞いたのだからな。」

「我がSAGのナンバー2が入れ代わるなんて…。」

「ああ、私も信じられんよ。だが、ジャッジマンよ。事実だ。受け止めるしかない。」

「で、新しいナンバー2の出した条件とは何ですか。」

「碓シンジの命だ。」

「えっ！」

「誤解するなよ。碓シンジの命の火が消えた時、盟約は破られると
のことだ。」

「ああ、なるほど。それなら分かります。」

「だから、分かっているとは思うが。」

「ええ。碓シンジのガードをさらに強固なものにします。」

「頼んだぞ。アメリカやヨーロッパの仲間も、頑張っていることだしな。」

「はっ。全力を尽くします。」

「これがうまくいけば、我が組織は飛躍的な発展を遂げるだろう。それが君の双肩にかかっている。頑張ってくれよ。」

「はい。必ずやご期待に沿えるようにいたします。」

ジャッジマンは一礼すると、部屋を出た。

第42話 ミラクル5

「シンジ、そろそろネルフに行こうぜ。」

ケンスケが声をかけてきた。隣にはトウジやカヲルも立っている。

「うん、行こう。」

シンジは4人でネルフへと向かった。

「なあ、シンジ。綾波の行方はまだ分からないのか。」

ケンスケが尋ねてきたが、シンジは悲しそうに首を振った。

「そうか。いやな、惣流が最近口癖のように言うんだ。『レイが居たら。』って。」

「えっ。本当なの。」

「ああ。惣流が言うには、指揮官になって、綾波の重要性が良く分かったって言うんだ。」

綾波は、シンジほどの力量は無いけど、命令を着実に遂行するらしいんだ。

要は、確実に計算出来る戦力ってということだ。」

「その何処がいいのさ。」

「だって、考えても見ろよ。」

球は早いけどノーコンのピッチャーと、程々の球だけど、コントロール抜群のピッチャーと、どっちがいいと思う？」

「そ、そうか。でも、僕はノーコンのピッチャーなんだね。」

「お、おい。そうことじゃないけどな。」

綾波のレベルだと、S2機関とやらが使えて、エヴァの行動範囲が物凄く広がるらしいんだ。

指揮官の言う通りに着実に作戦を遂行出来て、行動範囲も広い。喉から手が出るほど欲しいらしいんだ。」

「そうか。僕達の生き残る可能性もそれだけ高くなるね。」

「ああ、その通りさ。」

でも、もう一つ理由があるんだ。綾波は写真写りが凄く良いんだ。

惣流も認めていたけど、写真なら惣流でさえ、綾波に敵わないんだ。ほら、惣流は行動的だから、動く絵は凄く様になるけど、止まっていると、動いている時ほどの魅力はないだろう。」

「そう、かもしれない。」

「でな、今はネルフのホームページにたくさんの人にアクセスして欲しいらしいんだけど、

綾波の写真があれば、倍は固いと思うんだ。」

「ええつ。それはいくらなんでも多いよ。」

「惣流が言うには、綾波はそれなりの格好をすれば、物凄く綺麗になるらしいぜ。」

それに、胸も惣流よりも大きいっていう話だ。
1回でいいから、ちゃんと綾波を撮ってみたかったよ。本当に残念だ。」

ケンスケが本当に残念そうな顔をしたので、シンジは苦笑した。

実は、レイについては、以前シンジの夢の中に出てきたことがある。その時に、カヲルと一所に火星に居ること、カヲルが近い内に記憶喪失になって戻ることなどを言っていたのだ。カヲルの件については、現実に当たっていた。

だから、シンジはレイが火星に居るかもしれないと思っていた。本来は火星でなんか生きていけるわけがないが、もしかしたら初号機の中にもいるかもしれないと思っていた。それならば、生き延びている可能性がある。

(レイ、生きているの？生きていたら、僕達を助けに来てよ。)

シンジはそう願わずにはいらなかった。

「みんな、ごめん。ちょっと用があるんだ。」

ネルフの中に入ると、シンジは皆と別れた。これはアスカの指示だった。

そして、第2技術部副部長室に入って行った。部屋の中には液晶モニタがあり、そこにはエヴァのパイロット達の姿が映っていた。

シンジは画面をじっと見つめ、スピーカーの音量を上げた。

「あれっ、サーシャさん。どうしてこんな所にいるの？」

「そっついマリアさんこそ。」

ネルフ内のある場所で、サーシャとマリアがばったりと出会っていた。

だが、そこにミリアとミンメイまでもがやって来た。

「あれっ、ミリアにミンメイさん。一体どうしてここに来たの？」

「それはこちらのセリフだ。マリアこそ何でここにいる。」

4人はお互いを見渡して黙ってしまった。だが、そこにアスカがひよこっつと現れた。

「あら、全員集合ね。じゃあ、皆来てよ。」

それを聞いた4人も驚いた。

「お、おい。私はソルトに会いに来たんだぞ。」

ミリアがつい口に出す。その時、液晶モニタに

『ソルトというのは、ミラクル5というハッカー集団のリーダーの名前です。』という表示が映った。

「えっ、あなたも。」

とマリア。

「ええつ。もしかして、皆ソルトさんに会いに来たんですか。」

サーシャも驚いたようだ。ミンメイも驚いたような顔をしている。

「まあ、いいから来なさいよ。ソルトに呼ばれた人は、アタシに付いてきてよ。」

そう言うなり、アスカはさっさと歩き出した。

4人は顔を見合わせたが、仕方なくアスカの後を付いて行った。動くアスカ達に合わせて、次々とカメラが切り替わっていった。

アスカはエレベータを乗り継いで、人気の無い階にやって来た。そして、ゆっくりと歩いていく。

「あれつ、諜報部部长代行室ってプレートがかかっているわ、あの部屋。」

「あれは、作戦部部长室よ。」

「あつちは技術部部长室よ。」

「向こうは技術部副部长室ってあるわよ。」

「さらに向こうは、諜報部副部长室になってるわよ。こんな所に来ても良いのかしら。」

「きと、ソルトって、諜報部の人間なのよ。諜報部副部长じゃない

かしら。」

マリア達はやや小さな声で囁いていた。と、その時、アスカが急に立ち止まった。

技術部副部長室というプレートのかかっている部屋だ。

「さあ、入って。遠慮しないで。」

アスカはドアを開けて4人を中に入れた。

「うわあ、結構広いのね。」

「あれっ、もしかして、今まで見ていた部屋って繋がっていたのかしら。」

などと言いながら、4人は周りを見渡していた。

その4人にアスカはコーヒーを振る舞った。

そして、4人が落ち着いた頃を見計らって声をかけた。

「さあて、いきなり本題に行くわよ。」

ゼーレに勝つには、アンタ達の力がどうしても必要なのよ。だから是非協力して欲しいのよ。」

「でも、アスカ。私達はこうしてネルフに協力しているじゃない。」

マリアは不思議そうな顔をした。

「違うのよ。アタシが言っているのは、ミラクル5として協力して欲しいってということなのよ。」

「アスカ…。」

マリアは黙ってしまったが、ミリアが口を開いた。

「私は協力出来ない。もうあれは過去のことだ。仮にソルトに頼まれたとしても断る。」

「そう。サーシャは？」

「そうねえ。ソルトに頼まれたら考えるわ。」

「ミンメイはどうなの。」

「私もそう。悪いけど、あなたとは知り合ったばかりだし、そんなこと頼まれてもねえ。」

ソルトなら話は別だけど。」

「そうよね。じゃあ、アタシも正直に言うわ。アタシが『ソルト』よ。」

「「「「ええっ！」「」「」」

残る4人は驚きの声をあげた。

「サーシャ、アンタに頼んだプログラムは今回の作戦のためだったのよ。」

お礼に『パイロットリーダー』の写真を上げたわよね。」

『救世主アスカ』のスペシャル版ディスクもね。」

「それを知っているっていうことは、アスカさんがソルトなの。」

「じゃあ、他の皆もプログラムの仕事を頼まれたの？」

「サーシャは大きな瞳をさらに大きく開いて皆を見た。」

「私も頼まれたわ。」

「私も。」

「私もだ。」

「マリア、ミンメイ、ミリアの3人も頷いた。」

「分かったかしら。じゃあ、『ソルト』として頼むわ。是非、ミラクル5として協力して欲しいのよ。」

「ええ、分かったわ。私は良いわよ。」

「真っ先にマリアが同意した。」

「私も乗るわ。その代わりに、アスカさんの写真をよろしくね。」

「サーシャも同意した。」

「じゃあ、私も。」

「ミンメイも同意した。だが、ミリアは首を横に振った。」

「私は嫌だ。あのプログラムが最後の手伝いだ。」

「まあ、良いわ。また明日返事を聞くから、考えておいてね。今日は紹介したい人もいるし、色々と話もあるしね。じゃあ、ちょっと座って待っててね。」

アスカはそう言うなり電話をかけた。

「ああ、リツコ。こっちに来て。えっ、後5分ね、良いわよ。ミサトも一緒にね。」

「ああ、加持さん。直ぐにこっちに来て。えっ、忙しい？駄目よ。アタシの方を優先してよ。良いわね、後5分で来てよ。」

電話が終わると、アスカはニコリと笑った。

かくして5分後にリツコ達がやって来た。

「どうしたのよ、アスカ。急に呼び出したりして。あら、あなたはマリアさんね。それにミリアさんも。」

「あ、こんにちわ。リツコさん。」

そう言って、マリアとミリアは頭を下げた。

ヒカリの誕生会の時に顔合わせはしていたからだろう。

「え、マリアちゃんにミリアちゃん。一体こんな所でどうしたの？」

「あ、ミサトさん。こんにちわ。」

今度もマリアとミリアは頭を下げた。

そこに加持がやって来た。

「おいおい、アスカ。俺は出前じゃないんだから、気安く呼ぶなよ。おっと、どうしたんだ。この部屋がこんなに賑やかになるなんて、初めてだな。」

「あつ、加持さん、こんにちわ。」

マリアとミリアは三度目の頭を下げた。

若い女性陣にニヤニヤする加持だったが、ミサトが一睨みすると、素知らぬ顔をして誤魔化した。

「さあて、役者は揃ったわね。じゃあ、ネルフの幹部を紹介するわ。最初は諜報部部长代行の加持リョウジ一尉。」

「言っても諜報部部长は空席だから、事実上の諜報部部长ね。」

「今、ご紹介に預かった加持だ。よろしくな。」

だが、マリア達は驚きのためか声も出ない。

サーシャとミンメイにとっては、本部の事実上の諜報部部长と言えば雲の上の人である。

その人に会えるなどとは思っておらず、びっくり仰天という訳なのだろう。

マリアとミリアにしても、加持とは顔を会わせたことはあるが、まさかそんな重要な役職の人間だとは思っていなかったのだろうとシンジは推測出来た。

「何、驚いているのよ。次は加持さんの婚約者で、作戦部長の葛城ミサト三佐。」

「ミサトよ〜ん。よろしくね。」

「え〜っ!」

マリア達はまたもや驚いてしまった。

ミサトと言えば学校の担任の先生である。それがよもや作戦部長とは思わないだろう。

だが、今回はミリアだけは驚かなかった。救世主アスカのDISKを見て、知っていたのだろうか。

「次は技術部長の赤木リツコ一尉。」

「赤木リツコです。よろしくね。硬くならなくてもいいわよ。」

「は、はいっ。」

ミリアだけがようやく返事を返すことが出来た。マリア達は呆然としている。

「で、最後はアタシ。ソルトこと、惣流・アスカ・ラングレー。ネルフの技術部副部長よ。」

今は、実質的に技術部長みたいなものね。」

「~~~~え〜っ!」

今度こそ、ミリアも驚いた。それもそうだ。

サーシャとミンメイは、アスカの裏の顔が作戦部のオペレーターであると教えられていたし、

ミリアにしても、アスカが元エヴァンゲリオンのパイロットであることを知っていたにすぎない。

それがいきなり技術部の副部長で実質的に技術部長だと言うのだ。驚かない方がどうかしている。

シンジは驚く皆を見ながら、おかしくて笑いそうだった。

「ねえ、アスカ。技術部長本人の前で、そんなこと言っているの？」

マリアが心配そうに言ったが、それにはリツコが応えた。

「あら、本当よ。ここだけの話だけど、今は実質的な技術部長はアスカなの。」

私はそのお手伝いっていう訳。」

「そ、そうなんですか。」

マリアの顔が引きつる。だが、ようやく信じたようだった。

「じゃあ、次はマリア達の紹介を始めるわ。」

彼女達は、昨日正式にエヴァンゲリオンのパイロット候補生から正規の予備役パイロットに格上げされたわ。

最初は、そうね、マリアからね。ドイツ支部から来たマリア・カスタード。」

ワイルドウルフのウオルフの娘よ。そして、アタシの友人よ。」

「マリア・カスタードです、よろしくお願いします。えっ、アスカ。今、何て言ったの。」

「聞こえなかった？」

あなた達は、正式にエヴァンゲリオンのパイロット候補生から正規の予備役パイロットに格上げされたのよ。」

「ど、どつしてなの？」

「アタシの独断と偏見よ。アタシはエヴァンゲリオン部隊の指揮官よ。」

部下を選ぶ権限があるわ。それとも、不服かしら。」

「ううん、そんなことはないわ。でも、良いのかしら。」

「もちろん、良いに決まっているでしょ。そんなことは、マリアは気にしないで良いのよ。」

言っておくけど、アタシは私情を挟んでいる訳じゃあ無いからね。そこは誤解しないで。」

「う、うん。分かったわ、アスカ。」

「じゃあ、次はミリアね。ブラジル支部から来た、ミリア。」

「ミリアです。よろしく。」

ミリアはリッコ達に向かって頭を下げた。

「次はサーシャ。エジプト支部から来たわ。」

「サーシャです。よろしくお願いします。」

サーシャもミリアに倣い、頭を下げた。

「最後は、リン・ミンメイ。中国支部から来たわ。」

「リン・ミンメイです。よろしく願いします。」

「これで一通り紹介が終わったわね。じゃあ、紹介の続きね。アタシ達5人は、ミラクル5というハッカーのグループだったの。もちろん、プログラムを作るのなんか、朝飯前ね。」

今回の作戦のためのプログラム作りにも、彼女達には協力してもらっていたのよ。」

「おいおい、アスカ。」

ミラクル5って言ったなら、MAGIをハックしたことがあるという、伝説のハッカー集団のことか。」

加持は目を丸くしていた。

「良く知っていたわね。さすがは加持さんね。」

「その実力をゼーレに対して発揮しようって訳か。」

「そういうこと。特に今回の戦いは、通常戦力で言ったら勝ち目は無いわ。」

だから、サイバーネット戦で勝利を収めるしか勝利の道は無いのよ。」

アスカの言うサイバーネット戦とは、インターネットを利用した戦いのことだ。

「そうか。じゃあ、俺からもお願いする。」

アスカに協力してやってくれ。俺もまだ死にたくないんでな。」

それを聞いたマリア達は強く頷く。ミリアを除いて。」

「ミリアは、もうちょっと時間が欲しいみたいなの。だから、今日は何も言わないで。」

アスカがすかさずフォローした。

こうして、アスカは今後の見通しと作戦について、1時間ほど説明した。

敵の戦力が思っていたよりも遥かに強大であること、3月中には総攻撃を受ける可能性が高いこと、敵がやって来る前に何らかの方法で叩く必要があること、等々である。

さすがに軍事訓練も受けたことがあるメンバーであることもあり、問題の深刻さを理解するのも早かった。

「ねえ、アスカ。こんなんでも本当に勝てるの？」

映画のDISKなんて売っている余裕なんかないわよ。」

マリアの問いにアスカは少し呆れて答えた。

「あのねえ、あれは重要な作戦なの。そんなことも分からないの？」

「えっ、作戦って。」

「サイバーネット戦と情報戦を同時に仕掛ける布石なのよ。」

どれだけうまくいくか見当がつかないけど、アタシ達には他に有効な方法が無いわ。」

「じゃあ、どうするのか教えてよ。」

「いいわ。そのために集まってもらったんだもの。」

こうして、アスカはその場の全員に作戦の詳細を説明した。

そして、各部の協力を要請した。各部の責任者が快く頷いたのは言うまでもない。

シンジは、アスカが何をシンジに伝えたかったのか、いま一つ分からなかったが、作戦が着実に進行していることが分かって、ほんの少しではあるが、安心することが出来た。

第42話 ミラクル5（後書き）

あとがき

徐々にアスカの作戦の輪郭が見えてきました。ゼーレとの戦力差を一体どうするつもりなのか、今後のアスカの活躍に期待してください。なお、レイを出す、美味しい所を全てかつさらっていく可能性が高いので、現時点では第3部には出さないつもりです。もしかしたら、最後まで出ないかもしれません。

第42話補完 ミリアの決意

「今日は、お前達に重要な指令がある。」

そう言つて、ジャツジマンは部下達を見渡した。

ジャツジマンの部下は、傭兵部隊だけではなく、第3新東京市で各種スパイ活動をしている者、

組織がアスカに与えた企業で働いている者、様々だったが、今ここには隊長格の者、20人が集まっていた。

「今日、盟主様からの直々の指令が下った。一度しか言わないから、良く聞くんのだ。」

ジャツジマンは大きく息を吸い込み、空気を震わせて言った。

「碓シンジのために、死ぬ！」

その瞬間、部下達は固まった。

「お前ら、ちよつと来い。」

そう言われて、マックス、ミリア、アリオス、アールコート、キャシーの5人は、

特訓が終わつた後にジャツジマンに呼び出された。

無論、全員がジャツジマンと同じ『サグ』という組織のメンバーだ。

「今回の戦いで、我々の組織はネルフに全てを賭けた。」

おそらく、3月中に決着するだろう。そこでだ。
惣流アスカが碇シンジから何か頼まれたら、決して断るな。
もし、このうちの誰か一人でも断ったら、連帯責任としてこの場の
全員に罰が与えられる。
良いな、この命令は絶対だ。」

それを聞いたミリアの顔が歪んだ。ここにいるメンバーは、何かし
ら訳ありであった。

例えばミリアの場合は、自分を育ててくれた義理の親のためだった。
ミリアの養親は、ミリアのような、親を亡くした子供達を大勢引き
取って育てていたが、
事業に失敗して、膨大な借金を抱えてしまっていたのだ。

そんな時に手を差し伸べてくれたのが『サグ』という組織だった。
ミリアの何処が気に入ったのか、ミリアの体をいかようにしても良
いという条件で、

『サグ』はミリアの養親を援助しており、今もそのお蔭で、
ミリアのきょうだい達が生き長らえているのだ。

ミリアの予想に反して、性的な命令は皆無だったが、激しい軍事教
練によって、ミリアの肉体は酷使された。

だが、体を壊すほどの度を過ぎた訓練は要求されず、無茶な命令も
受けることは無かった。

ただし、毎日のように、組織の命令には絶対に従うことを誓約させ
られていた。

『死ぬ。』と言われたら、ためらわずに死ぬようにとも。

もし、命令に反したら、今まで援助を受けてきた金を養親は組織に
返さなくてはならない。

それは、ミリアのきょうだい達の不幸を意味するのだ。

『死ぬ。』と言われることに比べたら、今回の命令はかなり穏当なものだろう。

何故なら、惣流アスカは、付き合いの短いミリアから見ても公明正大であるし、尊大で我が儘なようであり、実は面倒見の良い姐御肌であることが分かってきたからだ。

それ故か、アスカの周りには不思議と男女を問わず、アスカを慕う者が寄って来ているのだ。

一方の碓シンジは、心の底には熱いものを持っているようだが、普段はとても優しい。

訓練の時に、周りの者のミスでシンジが殴られても、シンジは決して責めない。

それどころか、励ましてくれるほどだ。

それ故、パイロット候補生達は、例外なく二人のことを気に入っているし、その点から言えば、誰も命令違反などしないだろう。

かえって、二人の手助けをしたいと思っているくらいだからだ。

自分の我が儘のために、周りの者に迷惑をかける訳にはいかない。

ミリアはこの時、心を決めた。ミラクル5として、アスカに協力すること。

x o p e r a t i o n」(フェニックス作戦)が始動したのだ。

ネルフ本部に海外の10支部を交えた本格的なゼーレ攻略作戦、それがフェニックス作戦なのだ。

ネルフが不死鳥のように甦ってゼーレを倒すようにとの、アスカの願いが込められているのである。

この日を選んだのは、金曜日の夜であり平日と比較してMAGIの負荷が軽いこと、日本は夜になるがヨーロッパはこれから1日の動きが始まること、等々の理由があった。

日本が18時の時には、イギリスが9時、アメリカ東部が4時、アメリカ西部が1時となり、金曜日の経済活動がこれから始まるのだ。発令所では、ゲンドウや冬月はもちろんのこと、ミサト、加持、リツコ、マヤ、マコト、シゲル、といったネルフ幹部の面々が揃っていた。

今回の作戦の総指揮官は、冬月とされていたため、冬月は基本的には発令所からは動かない。

ゲンドウは、ネルフ司令として必要に応じて立ち会うこととされていた。

だが、実際の指揮はアスカが採っているため、冬月はアスカと事前に打ち合わせた通りに命令を下すだけである。

ゲンドウの役目は、冬月が休憩している時の代行である。

「日向君、あとよろしくね〜ん。」

ミサトは作戦開始を見届けると、発令所を去って行った。

この作戦の最初の内は、技術部が行い、作戦部の出番は無いからで

ある。

加持も同様であるため、ミサトと共に去って行った。

「あゝあ、お前も可哀相だな。」

「元気出して下さいね。」

シゲルとマヤがマコトを気遣うが、マコトは笑っていた。もう、ミサトのことは吹っ切れたようだ。そんな清々しい顔をしていた。

だが、無論ミサトは休む訳ではない。

皆には秘密であるが、アスカの補助をするという、地味だが重要な役割があるのである。

作戦が開始された頃、シンジ達エヴァのパイロット達は、ケージに集合していた。

「…というわけで、これから少なくとも48時間は、我々パイロットは交代で即時出撃体制のまま待機ということになります。何か質問はありますか。」

シンジはそう言いながら周りを見渡した。すると、マックスが手を挙げた。

「はい、質問をどうぞ。」

シンジに促され、マックスはおずおずと聞いた。

「他のパイロットはどうしたんですか。」

マックスが不思議に思つのも、止むを得ないだろう。

今この場には、シンジ、マックス、トウジ、アリオス、カラル、ケンスケの6人、つまり半分しかいなかったからだ。

この質問は予想の範囲内であったため、シンジはすらすらと答えることが出来た。

「ミリアさん、マリアさん、ミンメイさん、サーシャさんは、別の極秘任務に就いています。」

状況によつてはこちらの方に合流することも有り得ますが、可能性はかなり低いでしょう。

キャシーさんとアールコートさんは、惣流指揮官が戦力外と判断したため、別の任務に就いています。」

「分かりました。では、続きをどうぞ。」

マックスは、納得した訳では無かったが、これ以上シンジに聞いても無駄だと判断したようだ。

実際は、シンジはアスカに次いでこの作戦のことを知っていたのだが。

「交代は、3時間毎とします。」

第1班の渚三尉とアリオス一曹は、これから3時間の待機をお願いします。

第2班の鈴原三尉と相田一曹はその後3時間、第3班の私とマックス一曹はその後3時間。

以後はその順番で待機します。但し、私と相田一曹以外の者は、この場から離れることを禁じます。

仮設の休憩室と仮眠室をあつらえましたので、その場からは離れないで下さい。以上です。」

要は、最低2日間はここで待機しなければならないということだ。シンジは皆を見渡したが、特に質問もなさそうだ。

「では、解散！渚三尉とアリオス一曹は、直ちに任務に就いてください。」

シンジの言葉が終わると同時に、カヲルとアリオスはエントリープラグへと乗り込んだ。

二人が乗り込むと同時にLCLがプラグ内を満たしていく。

「アリオス君、僕は映画でも見ているよ。君もそうしたらどうかい。」

カヲルはアリオスに声をかけたが、アリオスは驚いた。

「そんなことをしちゃあ、まずいんじゃないか。」

戦闘待機中に映画を見るなんて、彼には考えられなかったのだ。

「大丈夫さ。惣流指揮官の許可は取ってあるよ。」

それに、彼女も今回はあまり固くならないようにと言っていたしね。逆に積極的に映画を見るようにと勧められたよ。」

「そ、そうかい。」

「但し、条件があったよ。『救世主アスカ』を見ていないなら、必ず最初に見ること、ってね。君はもう見ているかい。」

「ああ、DISKをもらったその日に見たよ。」

「じゃあ、映画の見方を教えるよ。ネルフには最新の映画もストックされているからね。
じゃあ、いいかい。」

こうして、カヲルとアリオスは映画を見ながら、のんびりとした時間を過ごすのだった。

一方、トウジとマックスは休憩室へと向かった。

そこには液晶テレビが24台あり、うち12台がテレビ・映画等の娯楽用、残り12台が連絡・通信用だった。

そこでトウジはテレビを、マックスは映画を見ることにした。

ケンスケは、仮設の通信室へと向かった。

そこにはMAGIと繋がる端末が何台か設置してあった。

ここでのケンスケの役目は、ゼーレの軍事力の動向を探ることだった。

もちろん、MAGIも様々な手段を講じてゼーレの動向を探っているが、

ケンスケの軍事マニア間のネットワークも重要である。

この人的なネットワークを使いこなせるのは、ケンスケしかいないため、

ケンスケの重要性はかなり高いものになっていた。

ケンスケは、M A G Iの助けも借りながら、世界中の軍事施設の監視も行っていた。

1発のN N爆弾が全てを決する可能性があるのだ。ケンスケの目は真剣だった。

ケンスケが得た情報は、瞬時にしてアスカの元へ伝わる手筈になっていた。

仮にゼーレが一発で勝負を決めようとして、I C B Mを撃ち込んできたとしても、

エヴァが即時出撃し、この第3新東京市を守ることが出来る筈だった。

いくらゼーレでも、30万市民が暮らしているこの都市にそんな無謀な攻撃を仕掛けることは、常識的に考えても有り得ないが、可能性は零ではない。

その万一の時のためにエヴァのパイロット達は交代でいつでも出撃出来るように待機しているのだ。

「シンジにはっかかり負担をかけられない。俺も頑張らなくちゃ。

それに、好きな女の子位、守れないとな。」

いつになく、ケンスケの目は真剣だった。

残るシンジは、仮設分隊長室へと向かった。

このモニタには、アスカ達の居る部屋の状況が映し出されていた。うち、1台のモニタは、自動追尾カメラと連動したもので、常にアスカを映し出していた。

もちろん、音声も聞こえるようになっていた。アスカを見ると、自然とシンジの心は落ち着いていく。

さらに、発令所のメインスクリーンに連動したモニターやアスカルームのプラズマディスプレイに連動したモニターもあり、シンジはここにいながらにして、全体の動向を把握出来るようになっていた。

シンジが戦局を多角的に把握出来るようになることを願う、アスカの配慮である。

それに、アスカの頭の中では、シンジはアスカに次いで、ネルフのナンバー4である。

今回に限らず、重要な情報は全てシンジに渡るようになっていた。もつとも、シンジはアスカの意図を100%理解しているとは言い難かったが、

アスカから受け取る情報について、自分なりの判断を加えて、エヴァの戦闘に役立てようとしていた。

「僕が出撃するような事態にならなければいいけどな。」

シンジの願望が、独り言となって現れていた。

それを言うと同時に、シンジの目の前のモニターには、ミサトの姿が映っていた。

「はい、アスカ。調子はどうよ？」

ミサトは、通称アスカルーム、即ち技術部副部長室へとやって来た。無論、加持も一緒である。

「今は、リッコやマヤにお任せだから、のんびりしているけど、後2〜3時間位したらここも忙しくなるわ。」

皆には、その時まで仮眠してもらっているのよ。」

アスカの視線を追うと、シンジの部屋との境目がパーテーションで区切っているのが分かる。

そこでマリアを始めとするミラクル5の面々が仮眠しているのだ。

「あっそう。アスカも休んだら。」

「大丈夫よこの位。それよりも、加持さんのお手伝いをして欲しいのよ。」

「まっかせなさい。という訳で、加持、始めるわよ。」

「ああ、頼む。」

加持は、市内各所に散らばる傭兵部隊との連絡が主な役目だ。

この作戦を妨害しようとしてゼーレが動くかもしれないし、予想外の戦力が急に攻めて来る可能性も捨てきれないからだ。

その場合、可能な限りここで支援して、発令所には計画遂行に全力を注いでもらうつもりなのだ。

加持はミサトの助けを借りながら、傭兵の各部隊と連絡を取り、作戦が18:00をもって開始されたことと、

ゼーレの攻撃がいつあってもおかしくない状況であることを説明していった。

そして、30分毎の定時連絡も義務づけた。

「アスカ、今の所は異状は無い。どんな小さな異状でも報告するよ
うにと伝えてある。」

「加持さん、ありがと。さあてと、お次は敵戦力の状況ね。悪いけ
ど、手伝ってね。」

アスカはMAGIを駆使して、
正面に据えつけられた100インチのプラズマディスプレイに世界
地図と敵戦力の配置を映す。

「あゝあ。何か、前よりも戦力が増えているじゃない。」

画面の下の方に、敵戦力の合計が表示されている。

原子力潜水艦が20艦、通常型潜水艦が50艦、空母が20隻、各
種艦艇が300隻、以上が敵の海上、海中兵力だ。

航空兵力は、戦闘機1000機以上、爆撃機50機以上だった。

3週間近く前の予想では、原子力潜水艦が10艦、通常型潜水艦が
30艦、空母が10隻、各種艦艇が100隻、
戦闘機500機以上、爆撃機50機以上だったのだから、概ね敵の
予想戦力は倍増していた。

さすがにミサトや加持の顔面も蒼白になる。

以前の敵予想戦力でもかなり厳しいのに、それが倍増したとなると、
はつきり言って勝ち目はさらに薄くなる。

だが、それを察したアスカが二人を励ました。

「大丈夫よ。アタシが付いているもの。」

その代わり、アタシが手を貸すんだから、二人の結婚式には必ず呼
んでよね。」

「ああ、そうするよ。」

加持は知っていた。アスカはここで戦う義務は無いのだ。

大人と違ってしがらみも無く、金銭的にも困ることが無いアスカは、友人達を引き連れてどこかに雲隠れするという選択肢もあるのだ。

アスカの母親の魂が眠る式号機はここになく、もうアスカを縛るようなものは何もないからだ。

そのアスカが何故ここで戦うのか。その原因はミサトとシンジに他ならない。

幼い頃、母親に見捨てられたアスカは、家族の絆を心の底から欲していた。

だから、ミサトが家族ゲームと言ったような仮初めの家族でも、アスカは失いたくなかったのだらうと加持は考えていた。

おそらく、シンジだけならば、アスカは首根っこを捕まえて連れ去って行っただらう。

だが、ミサトにはそんなことは出来ない。ミサトが加持を見捨てて逃げる訳は無いからだ。

そうなると、結果的に加持がアスカを危険な目に遭わせていることになる。

加持は、アスカに対して、すまないという気持ちと、感謝の念で一杯だった。

第43話 the phoenix operation (後書き)

あとがき

S計画の第3弾が開始されました。果たしてアスカの作戦は成功するのでしょうか。

そして、シンジに活躍の場があるのでしょうか

第43話補完 Sleeping Thief

「大佐、アメリカ班です。さきほど準備が完了しました。」

「こちら、カナダ班です。準備が完了しました。」

「こちらは、ロシア班です。準備が完了しました。」

「こちらは、イタリア班です。準備が完了しました。」

「こちらは、スイス班です。準備が完了しました。」

「こちらは、スペイン班です。準備が完了しました。」

「こちらは、インド班です。準備が完了しました。」

「こちらは、インドネシア班です。準備が完了しました。」

大佐と呼ばれる人物の元へ、世界中の主要国家に派遣していた組織の者から、次々と作戦の準備が整った旨の報告が入ってきた。

「よろしい。いいか、各自、現地時間08:00をもって行動を開始せよ。作戦名は、Sleeping Thiefだ。」

大佐は作戦開始の指示を下した。指示を受けた者達は、各国で入念に準備した作戦を実行するのだ。

「さて、この作戦が吉と出るか、凶と出るか。どうだろうな。」

大佐は、少しだけ苦々しい顔をしたが、直ぐに気を取り直した。

「この作戦で、組織の命運が決まるのだ。皆、頑張ってくれよ。」

祈るような声だった。

第43話補完 Sleeping Thief (後書き)

あとがき

the phoenix operation と同時に、the sleeping thief operation も開始されます。

この作戦は、サグ、ワイルドウルフ、ヴァンテアン、レインボースターの4者によって実行されます。

その結果は、近い内に明らかになるでしょう。

第44話 ウイルス、アタック（前編）

「アスカは、やっぱり何かを一所懸命にやっている時が、一番良い顔をしているね。」

シンジは、懸命に作業をしているアスカを見て呟いた。今のアスカは、キーボードを一心不乱に叩いている。シンジにはそれがとても良い顔をしているように見えるのだ。

「そうだよ、これはアスカの立てた作戦なんだから。頑張ったり前だよ。」

僕もアスカのために頑張らなくちゃ。今は、せめて作戦の進み具合でも見ておかないと。」

シンジは、そう言いながら、発令所が映っている画面を見た。

現在の作戦の進行状況を見るためである。

「ホームページへのアクセスが、18：00から、3億アクセスを超えましたっ！」

「メールも、1億通を超えていますっ！」

19：00になった頃、発令所の新入りのオペレーター達が驚きの声を上げる。

それを見ていたリツコは、頃合いと見て、マヤに指示を下した。

「マヤ、19：30になったら、例のウイルスAをばら蒔くわよ。」

「はい、先輩。準備は出来ています。」

そう、今回の作戦の第一段階は、特殊なウイルスをばら蒔くことだった。

実は、これには伏線があった。

3月2日からネルフのホームページにお知らせが載った。

それは、アスカの水着姿の写真データ10枚分と、

アスカの下着姿の写真データ1枚分が3月11日から期間限定で提供されるというものだった。

詳細は、当日の18：00から公開されるというのだ。

映画発売後、アスカは何回かテレビに出演し、本人の意に沿わない清楚で可愛い娘を演じた。

だが、これが大当たりだった。アスカの可愛らしさに、全世界の男共が夢中になったのだ。

写真のアスカも十分綺麗で可愛いのだが、やはりアスカの魅力はその明るさにある。

静かに微笑みながらも明るく輝いているアスカ、時折地が出そうになり誤魔化そうとして舌を出す可愛いアスカ、

質問にテキパキと答えていく利発そうなアスカと、くるくる変わっていく表情も、アスカの魅力を増していく。

清楚さ、明るさ、可愛らしさを併せ持ち、しかも誰が見ても美しい素顔にほんのりと化粧をしたアスカは、

さらに美しく可憐であった。このため、アスカの人気は止まること

を知らず、
それに伴いネルフのホームページへのアクセスは、天文学的な数字
となっていた。

無論、アスカへのメールも凄まじい数になったのである。

そのアスカの水着姿の写真データと、あるうことか下着姿の写真デ
ータが手に入るということで、

世の男共は、こぞってネルフのホームページに殺到したのである。

もちろん、男だけではない。

友人や恋人に頼まれて止むなくアスカの写真データを得ようとする
女性や、

アスカに憧れる女性も少なからずいたのである。

こうして、ネルフのホームページに対するアクセスは、物凄い数に
なっていたが、

アスカの写真データを手に入れるのは楽ではなかった。

アクセスが多いことから、速度制限をしたため、写真データのダウ
ンロードに1時間近くもかかるのだ。

だが、大多数の者は、それにも係わらず根気よくネットに接続して
ダウンロードに挑戦した。

だが、それが罷だったのだ。

1時間もかけてダウンロードすると、次に

『他の写真データもあります。ダウンロードしますか？いいえを選
ばなければ、自動的にダウンロードされます。』

という表示が出るのだ。無論、誰もが何もせずに、さらにダウンロ
ードを続けていく。

こうして、結局は長時間ネットに接続する破目になるのだ。

これだけ長いと、普通の人はパソコンから離れて何かしたり、又はパソコンゲームをやったりして、時間をつぶすだけでは足りなくなる。そこで、一晩パソコンを放置しておけば自動的にダウンロードされるので、そのままにしておこうと思うのが普通であろう。

そこが今回の作戦の狙いだった。

後で分かったことだが、最大で10億台を超えるパソコンが同時にネルフのホームページにアクセスしていたのだが、それらのパソコンを実質的に乗っ取って使ってしまうというのが、今回の作戦のポイントだったのだ。

そのために、19:30をもって特殊なウイルスがばら蒔かれ、アクセスしてきたパソコンに巣くっていく。そうして、世界中のパソコンが次々とMAGIの支配下に入っていくのだ。

なお、アスカは念には念を入れていた。写真データに透かし番号をランダムに入れて、後で抽選し、当たった者には生写真をプレゼントすることにしたのだ。

このため、アスカの写真データをコピーして手に入れようとする者は大幅に減り、ネットに接続する者が増えたのだった。

おそらく、1人で何台かのパソコンを駆使した者も多かっただろう。

また、日本国内においては、政府や関係企業に依頼して、なるべく多くのパソコンの電源を入れておくように手配したのだ。無論、ネットに接続しているものであるが。

そして、20:00には、第2段階に入ろうとしていた。

「あれっ、何かおかしいぞ。」

「おい、どうしたんだ。」

「うん、何故か、コンピュータの調子がいつもと違うんだ。」

「と言いつつ？」

「何となく、いつもよりも処理速度が落ちているようなんだ。」

「なんだ、そんなことでいちいち騒ぐなよ。」

「うん、でも気になるんだが。」

「そんな下らないことで考え込んでいると、ボスにどやされるぞ。」

「げっ、そりゃあまずい。」

「だろ。いいから、仕事、仕事。」

スイス銀行のとあるオフィスで、このような会話が交わされていたが、実はこのような会話は、世界各地で行われていたのである。

処理速度が遅くなったのは、ウイルスの侵入を許してしまい、ウイルスの活動にコンピュータの処理能力が一部振り分けられたためであったのだ。

20:00になった頃、発令所は急に慌ただしくなった。

「スーパーコンピュータ『ランス』、ネットに接続します。」

「ネットへの接続を確認しました。」

「あと10秒で、ウイルスBをばら時計ます。

カウントテン…、nine…、eight…、seven…、six…、five…、four…、three…、two…、one…、zero…、GO！」

「ウイルスBをネット内に放ちました。」

「ウイルスBがネット中のパソコンに食い込んでいきます。」

「MAGIからランスへと支配権を移行します。」

「攻撃目標は約100万か所。約5%の目標を落しました。」

「攻撃目標から、データ送信が始まりました。」

「ランスにデータが集まります。MAGIへデータ処理の20%を移します。」

オペレーター達がせわしなくキーボードを叩きながら状況を逐一報告していく。

事情を知らない者を見ると、何が起きているのか全く分からないが、こういうことである。

最初に救世主アスカのディスクにウイルスXを密かに入れておき、パソコンがディスクを読み取った時にパソコン内に侵入するようにしておく。

それも、誰も気付かないように、ひっそりと。

それをウイルスAによって、ウイルスXのプログラムを改変し、パソコンをリモートコントロール可能な状態にする。

そして、ウイルスBにより、さらにウイルスXのプログラムを改変し、

ランスの命令に従って、狙ったコンピュータをハッキングするのだ。今回の作戦は、目標数が非常に多い。だから、MAGI単体又はランス単体ではあまりに荷が重かった。いくら優秀なコンピュータでも、同時に100万か所をハッキングするのは、あまりに困難だったのだ。

そこで、アスカが考え出したのが、今回の作戦である。

ちやっかりと世界中のパソコンを利用して、目標のコンピュータをハッキングしていくのだ。

しかも、ハッキングルートが膨大な数で攻撃者が多いため、ハッキングを受ける側にしても、防御が困難なのだ。

また、運の良いことに、救世主アスカを職場や学校のパソコンを使って見た者が結構多かったらしい。

今回の攻撃に先立って、ウイルスXは気付かれないように、密かに目標のコンピュータのうち、

5割以上に事前に潜入することが出来たらしいのだ。

ウイルスXが事前に潜入していると、ハッキングを受けていることが分かりにくくなるのだ。

その上、そのようなハッキングしやすいコンピュータを優先的に攻撃していくのだ。

目標を簡単にハッキング出来ると、攻撃目標は徐々に減っていき、残りの目標に対して、より多くの攻撃が集中出来る。

攻撃が集中すると、落すのが楽になる。

そうして、次々と攻撃目標を落していくのだ。

本当なら、こんな面倒なことをしたくはなかった。

ネルフのホームページからウイルスをばら蒔けば済む話なのだが、仮にそのような手段を取ると、後で全世界からどのような反感を買うか分からない。

そこで考え出されたのが、ウイルスA、B、Xである。

ウイルスA、Bは、共に簡単なプログラムで、それ自体に攻撃性は無く、一見ウイルスとは分からない単なる写真データに見せかけてある。

だから、これをネルフのホームページからばら蒔いても、後で問題になる可能性は少ないのだ。

その一見ウイルスらしからぬ、ウイルスA、Bは、ウイルスXにキーワードを与え、それによってウイルスXは、それまでの眠りから目を覚まし、他のコンピュータへのハッキングを開始するのだ。

この方法ならば、ネルフの仕業と怪しまれる心配は少ないし、短時間で多くのパソコンを自由に操る事が出来るのだ。

ウイルスXが仕込んでいないパソコンであっても、ウイルスXの自動増殖機能によって、ちよつと時間はかかるが、徐々にウイルスXに感染していくのだ。

こうして、作戦開始より短時間で約1億台のパソコンがネルフの支配下に入り、その後も徐々にそれは増えていくのだ。そして、ハッキングを開始していく。

ハッキングに成功すると、中のデータを根こそぎ頂いて、ランスとMAGIがそのデータを解析する。

そして、攻撃目標を増やしたり、ハッキングしにくいコンピュータを攻撃する材料として利用するのだ。

場合によっては、中のデータを改ざんしたりもする。

今回の作戦の第一目標は、ゼーレに関する情報の収集であった。とにかく、敵の情報が無くては不利である。

得られる情報によっては、敵を社会的に葬り去ることや、寝返らせることも不可能ではないだろう。

次の目標は、世界の著名な人物の個人情報収集であった。

ゼーレに対して協力する人物は星の数ほどいるだろうが、誰が協力者なのか、はつきりとした情報は無かった。

それでは誰が味方なのか分からない。それに白黒を付けるための情報収集なのだ。

だが、これ以外に、アスカしか知らない目標があった。

それは、ゼーレ及びその関連企業の金融資産の情報である。

この金融資産を何らかの手段で凍結したりして、相手に使えないようにすれば、

敵は遠からず干上がるはずなのだ。アスカは、ゼーレを兵糧攻めにしようと考えたのである。

「どう、リッコ。状況は？」

21:00になると、アスカは発令所のリッコに状況を尋ねた。

「予想よりも早いわね。攻撃目標の30%が落ちているわ。」

「そう、ゼーレには気付かれていないわよね。」

「ええ、そんな兆候は無いわ。」

「こちらもそうよ。」

さっきまで、敵の軍事力を分析していたんだけど、特に目立った動きは無かったわ。

まだ気付かれていないようね。」

「ミサトは何してるの？」

「加持さんと一緒に、敵が市内に潜入して来ないかどうか見張っているわ。」

「一応、真面目に働いているのね？」

「まあね。でも、気は抜けないわ。」

ゼーレのことだから、何を仕掛けて来るのか分からないものね。」

「エヴァの方はどうなの？」

「今し方、待機要員が変わった所よ。もともと、今回は出番が無いでしょうね。」

「そう願いたいわね。」

「じゃあ、攻撃目標が10%を切ったら教えてね。アタシは少し仮眠するから。」

「ええ、良いわ。でも、あと2〜3時間位よ。」

「それ位で十分よ。アタシは若いもの。」

「あつ、そう。良かったわね。」

その瞬間、リッコのこめかみが、少しでもヒクヒクしたのをアスカは見逃さなかった。

だが、ちよつと、まずかったわねとアスカが後悔しても、もう手遅れだった。

「シンジ君、今交代したよ。」

仮設分隊長室にカヲルがやって来た。トウジとケンスケの班と交代したのだ。

「おつかれさま、カヲル君。」

「シンジ君は、何をしているんだい。」

「ああ、作戦の進行状況を見ているんだよ。」

「そうかい、うまくいつてるかい？」

「うん、さっきリツコさんが話しているのを聞いたよ。予想以上にうまくいつているらしいよ。」

「そうかい、良かったね。」

「そうだ、カヲル君に聞きたいことがあったんだ。綾波のことなんだけど、何か知らないかなあ。もし、知っていたら教えて欲しいんだけど。」

「悪いけど、あまり覚えていないんだ。ただ、何かを伝えるように頼まれたような気がするんだけどね。」

「そうか。やっぱりそうだよな。綾波も夢の中で言っていた。カヲル君は記憶を失っているかもしれないって。」

「でも、綾波さんはまだ戻って来ないような気がする。」

「えっ、どうしてなの、カヲル君。」

「もし、こちらに来れるんなら、僕と一緒に来るはずじゃあないか。そうは思わないかい、シンジ君。」

そう言ってカヲルは笑みを浮かべた。

（そうだね。でも、残念だ。綾波が来てくれると、もう少し楽になるんだけどな。）

シンジは、内心で盛大にため息をついた。だが、続くカヲルの言葉に青ざめた。

「シンジ君。あまり綾波さんのことを言うと、愛しの姫君がむくれるんじゃないかい。」

果たして、シンジがモニタを見ると、頬を膨らませたアスカの顔が映っていた。

（うっ、まずい。アスカを怒らせちゃったかな。）

シンジは、今にも泣きそうな顔をしながら、カヲルを見た。

（カヲル君、助けてよ。）

だが、口には出せなかった。

さすがのニブチンシンジも、言ったらアスカの怒りに火を注ぐことが分かっていたからである。

（ああ、僕はどうしたら良いの？）

とうに作戦のことは、すっかり頭の中から消え去っていたシンジであった。

第44話 ウイルス、アタック（前編）（後書き）

あとがき

第14話から着々と進んできたS作戦も、大詰めを迎えました。気付いてみれば、作戦の立案から実行までに30話もかかっていたんですね。

第44話補完 将棋

「おーい、ケンスケ。将棋でもやらへんか。」

「ああ、いいよ。暇つぶしにはもってこいだもんな。」

少し時間は遡り、作戦が始まる少し前のことである。
ケンスケとトウジは将棋を打つことにした。

「よし、いくで〜。」

「ああ、来いよ。」

「待ったは無しやで〜。」

「ああ、望むところさ。」

こうして、二人はしばらく将棋を打っていたが、やがてケンスケから話しかけた。

「なあ、トウジ。今回の戦いんだけど、洞木はどこかに避難しないのか。」

「ああ、惣流が言うには、まだ大丈夫なんやと。」

「でも、敵の戦力は圧倒的なんだぜ。いくら何でも勝ち目があるのかよ。」

「勝ち目か。そついや、惣流が変なことを言っておつたな。」

「えっ、何だよ。」

「わいが将棋を打つてたら、いきなし惣流が近付いてきてな、『これはいける。』なんて言うんや。」

でな、『どないしたんや。』って言ったらな、『アンタのお蔭で勝つ見込みが出来た。』なんて言うんや。
あいつも、全く分からんやっちゃな。」

「ふ〜ん、確かに変だな。でも…。」

「なっ、そつ思うやろ。」

「あっ、そつか。分かったよ。そつか、惣流は将棋を見るのは初めてだったんだな。」

「まあ、そつやるな。」

「分かったよ、惣流が言いたかったことは。」

「えっ、じゃあ、教えるんや。」

「ああ、いいぜ。多分だけどな…。」

ケンスケは、小声でトウジに言った。だが、トウジはまだ分からないようだった。

第44話補完 将棋(後書き)

the phoenix operation
タイムスケジュール

発令所 アスカ達 加持・ミサト
シンジ達

3月11日(金)

18:00 作戦開始 ゼーレの戦力分析 傭兵達との連
絡 カヲルとアリオスが

市内の警戒 待機

19:30 ウイルスAを時く

20:00 ウイルスBを時く

ハッキング開始

21:00 攻撃目標の30% アスカ仮眠

トウジとケンスケが 市内の警戒
が落ちる

待機

第45話 ウイルス、アタック（中編）

「さあて、もうすぐ交代の時間か。」

シンジは一人呟いた。そう、もうすぐ24時。
トウジやケンスケと、待機任務交代の時間が迫っている。

（行く前に、アスカの様子をしてみようっと。）

シンジは、技術部副部長室、いわゆるアスカルームをモニタに映した。
そこにはすやすやと仮眠しているアスカの姿が映っていた。

（やっぱり、アスカの寝顔は綺麗だな。）

シンジは、アスカの寝顔を微笑みながら見ていた。
だが、そのアスカの寝顔も、そう長い時間見ることは出来なかった。
リツコがアスカルームにやって来たからである。

「アスカっ！起きて！」

「うっん、なによっつ。良い気持ちで寝てるのに、シンジったら。」

（げっ、アスカったら、何てこと言っんだ。）

シンジは焦った。ミサトがいるのに、何て不用心なことを言っのかと。

シンジは、もう1台のモニタの電源を入れ、ミサト達の姿も映すようにした。

「あら、愛しのシンジ君じゃなくて残念ね。」

「えっ。あっ、リ、リッコ。」

アスカは慌てて飛び起きた。近くで加持とミサトがニヤニヤと笑っている。

アスカの顔は、瞬間に真っ赤になった。

「どうしたのよ、アスカ。まだ寝ていなさいよ。」

さっきみたいに、『シンジ、キスしてくれなきゃ起きないわよっ！』
って言えば。」

ミサトはからかうような口調で言う。

「ア、アタシがそんなこと言う訳ないでしょ。」

アスカが反論したが、ミサトはまだ笑っている。

（まったく、ミサトさんたら、酷いよ。）

それに、とばっちりがこっちに来るんだから、勘弁して欲しいな。
少し釘を刺さないと駄目かな。）

シンジは、マイクのスイッチを入れて、アスカルームに音声が入る
ようにした。

同時に、モニタにシンジの顔が映るようにも。

「ミサトさん！そんな嘘を言うなら、僕にも考えがありますよっ！」

アスカルームのモニタの一つにシンジの顔が映った。

「あつ、じゅめくん、シンちゃん。ちょっとアスカをからかっただけなのよん。」

「じゃあ、僕と関係無い話題にして下さい。

今度やったら、エビチュは全部捨てますからねっ。

これは冗談じゃないですよっ!」

言うだけ言っと、シンジは電源を全て落した。

おそらく、シンジの姿は、モニタから消えているだろう。

(こつ言っておけば、ミサトさんもしばらくは大丈夫だろう。)

ため息をつきながらも、シンジは待機任務に就こうと席を立った。

「マリア、ミリア、ミンメイ、サーシャ。皆準備は良いわね。」

「ええ。」

「ああ。」

「はい。」

「はい。」

時は24:00。いわゆる深夜0時だ。

結局、アスカの体調を心配したりリッコが少し起こすのを遅らせた為、既に攻撃目標の95%が落ちていた。

「質問は何かあるかしら?」

アスカは皆を見渡したが、特に無いようだ。

「良い？じゃあ、久々に行くわよっ！ミラクル5の力を見せてやるのよっ！」

「「「「おおっ！」「」」」」

威勢が良いが、可愛らしい雄叫びが響いた。そして、皆自分の目の前にあるモニタを見つめる。

「良い？アタシが指示する攻撃目標から、一切合切データを引き出して、

うまくばれないように書き換えるのよ。

良いわね？マリアはフランスより西のヨーロッパ方面をお願い。」

「ええ、任せて。」

「ミンメイはアジア方面をお願いするわ。」

「ええ、分かったわ。」

「ミリアはアメリカ方面をお願い。」

「ああ、分かった。」

「サーシャはフランスより東のヨーロッパ方面をお願い。」

「はい。」

「アタシはスイス銀行を攻めるわ。 the sleeping t

h i e f o p e r a t i o n s e c o n d s t a g e s t
a r t !

「『『『Ok、Boss!』』』」

こうして、アスカの合図によつて、5人の少女達は世界各地の攻撃
目標へのハッキングを開始した。

「あつ、アスカ達の作戦が始まったみたいだ。それじゃあ、僕も始
めなきゃ。」

シンジは現在エヴァの中で待機しているが、回線をつないで、ゼー
レの動きを監視することになっている。

と言っても、ケンスケが主にゼーレ側と見られる軍隊の動きを監視
しているので、

シンジはケンスケ、加持、ミサトから得られる情報を整理するだけ
である。

加持は引き続き市内各所の傭兵部隊のまとめ役をしている。

何か起きたら、直ぐに知らせが来ることになっている。

ミサトは加持の手伝いをしたり、リツコの端末から情報を回しても
らつて、作戦の進行状況の確認をしている。

また、ネットを通じてゼーレからの反撃がないかどうかも、一応可
能な限り監視はしている。

シンジはそれらの情報を絶えず受け取っており、自分なりに整理す
るのだ。

場合によっては、何か怪しい兆候を見付けた時点で出撃することも

あり得る。
ゼーレからの攻撃を受けてから出撃しても、手遅れになる可能性があるからだ。

だが、今のところは特に変わった気配は無い。

「このまま、攻撃が無ければ良いんだけどね。」

シンジはポツリと呟いた。

「でも、アスカは一体何をするつもりなんだろう。」

そう、アスカは、この作戦、『the sleeping thief operation』の概要だけはシンジに教えてくれなかった。

というのも、この作戦は、ネルフで知っているのはアスカただ一人であった。

要は、ゲンドウや冬月にも報告していない、秘密作戦だったのだ。シンジにだけは、『司令達に内緒の作戦がある。』とおぼろげに教えてくれたのだが。

「でもいいや。そのうち教えてくれるよね。」

そう。アスカは、作戦が成功したら教えてくれると約束してくれていたのだ。

「今は、作戦の成功を祈るしかないのかな。」

シンジは寂しげに言った。

01:00になっても、発令所はまだ慌ただしかった。落ちていない攻撃目標は1%を切り、約千か所になった。

だが、これからが大変である。

残りの攻撃目標数こそ減ったが、難度の高い攻撃目標ばかりであるからだ。

だが、その時、マヤが驚きの声を上げた。

「先輩、攻撃目標のうち、いくつかは既に第三者の攻撃を受けています。」

「えっ、どれどれ。」

リッコはモニタを覗き込むが、安堵の声をあげた。

「ああ、これはアス力達の仕業よ。大丈夫、話は聞いているわ。」

「えっ、でも勝手にそんなことをして良いんですか。」

リッコはどう答えようか迷った。

まさか、アス力が今回の作戦の責任者とは言えない。

それを知っているのは、ゲンドウ、冬月、リッコ、シンジの4人だけだからだ。

加持やミサトにまで秘密にしているのに、マヤに言えるわけがない。

「アス力は、副司令から特命を受けているの。だから、詮索しないで。」

結局嘘をつくしかなかったが、マヤはそれ以上尋ねるようなことはしなかった。

だが、当のリッコも『the sleeping thief operation』のことは知らなかったのである。

05:30になると、4時間の休憩が宣言された。

作戦はまだまだ続くし、全くの休憩無しでは体が持たないからだ。

依然、ネット内ではウイルスが飛び交っているが、攻撃目標へのハッキングは一休みである。

これは、トウジとケンスケの待機時間と密接に絡んでいた。

実戦経験の無い二人が待機している時に敵の攻撃を受けると非常に都合が悪い。

そのため、二人の待機時間の前後30分を挟んで、計4時間は休憩タイムとなったのだ。

仮眠室へ行く者、その場で眠る者、様々であったが、発令所はその動きを止めた。

その間は、冬月やゲンドウも仮眠を取っている。

アスカ達も例外では無い。

5人とも、さつさと臨時仮眠スペース、即ち諜報部副部長室へとなだれ込み、短い睡眠タイムとなった。

入れ替わりに、それまで仮眠していた加持が起きて、ミサトと交代する。

こうして、ネルフ本部は束の間の休みに入った。

09:30になると、再び攻撃開始である。発令所もにわか慌ただしくなった。

「マヤ、そろそろ起きて。」

「ふあゝい、せんぱゝい。」

マヤは目をこすりながら起き上がった。他の女性陣と同じく、仮眠室でマヤは寝ていた。

「先に行くわよ。来る前に涎を拭いた方が良いわね。」

「は、はい。」

慌てて口の周りを拭いて、恥ずかしさのあまり、一気に目が覚めるマヤであった。

その後、顔を洗って発令所に向かったが、その途中でシゲルと出くわした。

むろん、シゲルが待ち伏せていたのだが、マヤはそんなことには気付かない。

「やあ、おはよう、マヤちゃん。」

「おはようございます、シゲルさん。」

「どうだい、調子は？」

「先輩が一緒なので、ばつちりですよ。」

そう言つて、マヤは微笑んだ。

久々にリツコとべったりできたので、物凄く嬉しいのだろう。

お邪魔虫のアスカもいなくて、『もう、さいこ〜っ!』と言いたくなるような気分であろう。

「そうかい、良かったね。」

「いえ、シゲルさんのお蔭です。」

そう言つてマヤはシゲルの手を握った。

実は、マヤも加わつた作戦会議では、リツコはアスカと一緒にハツキングをする予定だった。

そこで、マヤは会議の席で猛反対したのだ。

だが、アスカには相手にされず、リツコもアスカの言いなりだったので、一旦はあきらめた。

だが、あきらめきれないマヤは、会議の後でアスカに頭を下げたが、全然相手にされなかった。

それでもあきらめられないマヤは、その後シゲルに頼み込んでもう一度アスカをお願いすることにしたのである。

シゲルは、『一応お願いするけど、あまり当てにしないで欲しいな。』と言っていたので、

半ばあきらめかけていたのだが、結果はOKだった。

マヤはそれを聞いて、思わずシゲルに抱きついてしまった。それほどマヤは嬉しかったのである。

「本当にありがとうございました。あの時のお礼は必ずしますから。」

「
マヤはそう言うなり辺りを見渡して、誰もいないことを確認すると、シゲルの頬に『チュツ。』とした。

「あつ。」

驚くシゲルにマヤは笑って言った。

「今はこれで勘弁してくださいね〜っ。」

去っていくマヤを見ながら、シゲルは呆然とした。

「マ、マヤちゃんがキスしてくれた。」

シゲルは、嬉しさのあまり、涎をたらしそうになった。

「アスカ、僕だよ、シンジだよ。おはようのキスをしてよ。」

「う〜ん、しょうがないわねえ。」

アスカは目を瞑ったままキスをしたが、これが大失敗だった。何故かいつもと感触が違うのだ。

驚いてアスカが目を開けると、目の前にはサーシャの顔があった。

「な、な、な、何なのよっ!」

アスカはうるたえた。

「何言っているんですか。いきなりキスしてきたのは、惣流さんですよ。」

周りでは、皆が口を押さえ、腹を抱えている。

「あんたらはっつ。」

アスカは睨み付けたが、あまり効果は無かったようだ。

「アスカったら、可愛いっつ。」

マリアがついに笑い出した。

「むっつ。アンタね。声色を真似たのは。」

アスカはようやく何が起きたのか理解した。

おそらくマリアがシンジの声色を真似て、サーシャがアスカの顔の前に顔を近付けたのだろう。

そこで、アスカはサーシャだと気付かなくて、いつもと同じようにキスをしてしまったという訳だ。

「『アスカ、おはようのキスをしてよ。』」

「『うん、良いわよ。いつも通り、たっぷりとね。』」

今度はミリアとミンメイがシンジとアスカの声色を真似てふざけた。そして、キスの真似事も。

「あっ、そう。そういうことをするのね、アンタ達は。」

アスカは眉をつり上げた。そして、いきなり端末を叩き出した。すると、モニタにミリアとマックスが仲良く手をつないでいる画像が大写しになった。

「あっ、こっ、これはっ！」

ミリアの顔は蒼白になった。

「他にも一杯あるから、皆で見ましようか。後で、他の人にも見てもらおうかしら。」

「こ、ごめんなさい。許してっ！」

ミリアはさっきまで別人のように、アスカにぺこぺここと謝りだした。ミリアとマックスはまだ恋人同士ではなく、その一歩手前の微妙な関係だったのだ。

だから、ミリアがマックスに好意を抱いていることは、皆には秘密にしていたし、
変に第三者にからかわれて、マックスとの関係が悪化するの嫌だったのだ。

「じゃあ、今度は誰にしようかしら。」

アスカが周りを見渡すと、皆一様に怯えた顔をしている。皆、他人には知られたくないことが、一つや二つあるのだろう。

「アスカ、私達、友達よねっ。だから許してねっ。」

マリアは真っ先に深々と頭を下げた。

「ごめんなさい。ちょっとした出来心なんです。」

サーシャも怯えた顔で頭を下げる。ミンメイも同様だ。

「今度、こんなことをしたら許さないからね。」

もちろん、今の出来事は誰にも言わないこと。良いわねっ！」

アスカのキツイ目に、逆らえる者はいなかった。

「マヤ、作戦は次の段階へ移るわよ。」

「はい、先輩。」

リツコは次の段階への移行を宣言した。

今回の作戦の第1目標である、ゼーレに関する情報の収集は一区切りついたため、

仮眠している間に情報の分析を行ったのだ。

その結果、ゼーレの構成員に関するデータベースが作成された。

これで、ゼーレの全貌とまではいかなくとも、尻尾を掴むことは出来た。

ゼーレの構成員の一覧には、信じられないような有名人や、某国の首相や政府高官の名前も載っていた。

次の段階は、このデータベースを基に、彼らの悪事の数々を証拠とともに暴き出すのだ。

最終的には、ゼーレ幹部の一覧と、その悪事の内容・証拠などをメ

ールで全世界にばら蒔く予定だ。

その前に、ゲンドウ及び諜報部の幹部達が切り崩し工作を行う。今回は、ゼーレを叩きのめす必要は無い。

ネルフに対する攻撃を回避出来さえすれば良いのだから、少しでも多くのゼーレ幹部や構成員を味方に引き込むことは、非常に有益なことだった。

特に、作戦を立案したアスカの基本的なスタンスは、戦いさえ回避出来ればゼーレが存続しても一向に構わない、ゼーレ幹部の責任を問う必要は無い、ということだったため、そのスタンスに沿った切り崩し工作はかなりの効果があった。

特に効果があり、かつ、最も力を注いだのは、軍関係者の切り崩しだった。

彼らは、多かれ少なかれ、すねに傷持つ者が多かった。

このため、過去の出来事を全て全世界に公開するか、ネルフへの敵対行為を即刻止めるか、

二者択一をするようにとの脅しに、多くの者が屈したのだった。

こうして、某国の艦船は、重大な事故が発生したため、最寄りの港に向かうことになったし、

某国の潜水艦も、機器に異状が発見されたため、本国へと急遽戻ることになった。

こうして、様々な理由を付けて日本へ向かっていた艦船が、進路を日本から外したのだった。

むろん、一部の者は脅しに屈しなかったが、そのような者を中心に、さらなる情報収集が続けられた。

第46話 ウイルス、アタック（後編）

「おい、シンジ。そろそろ飯にしようや。」

時は、12:00を少し過ぎた頃。

カヲルとアリオスがトウジとケンスケの代わりに待機任務に就いた後のことだ。

「うん、僕もそろそろお腹が空いちゃったんだ。」

シンジは直ぐに同意する。

「そうだな、早く食べようぜ。」

ケンスケもお腹が空いているようだ。

「僕もご一緒していいかな。」

マックスがやや遠慮がちに言うが、トウジは笑って言った。

「ああ、かまへん。こういうのは、人数が多い方がいいんや。」

こうして、4人での昼食となった。

「いったただきま〜すっ。」

当然の如く、トウジが先に食べ始める。

それを他の3人が苦笑しながらも、続けて食べていく。昼食は、ヒカリの差し入れだ。

トウジ用に大量の焼きそばと、他の皆も食べられるようにと、ピレ
フとハンバーグがある。

「うん、うまいっ。」

トウジはニコニコしながら、焼きそばを頬張った。

「the sleeping thief operation
finished!」

「Ok、Boss!」

アスカの合図によって、マリア、ミンメイ、ミア、サーシャら5
人の少女達は、

世界各地の攻撃目標へのハッキングを一旦終了した。

3月12日の15:00のことだ。

「みんな、ご苦労さま。ちょっと遅いけど、食事にしましょう。」

アスカは食事タイムを宣言した。

「良かった。お腹がペコペコだったのよ。」
とマリア。

「私も。」

「私もです。」

とサーシャとミンメイ。やはり、皆お腹が空いていたみたいである。

9時半過ぎからずっと働き通しだったのだから、無理も無い。

「あーら、もういいかしら。」

ユキちゃんが作ってくれたサンドイッチにスパゲッティがあるわよーん。

皆さん、こちらにいらっしやーい。」

ミサトが手招きをするので、みんなニコニコしながらミサトの元へ向かった。

ユキが作ったのなら味は保証されている。

そして、やっぱりと言うか、スパゲッティが5種類位ある。

皆、女の子から人気があるものだった。

こういう点は、流石にシンジでは真似が出来ない所だ。

こうして、1時間かけてゆっくりと食事とお茶をしてから、次の作戦に取りかかるのだ。

次の作戦は、ゲンドウ達には3月12日の午前0時から行くと説明していたのだが、

実際には、ゲンドウ達には秘密の作戦、『the sleepin
g thief operation』を行っていた。

だから、これからがアスカ達の本来の作戦行動なのである。

一方、ゲンドウや諜報部の切り崩し工作は軍関係者から政治家へと比重が移っていた。

特に、軍への影響力が強い政治家を先に切り崩しにかかった。というのも、軍関係者の切り崩しは、概ね5割が成功したが、それではゼロレとの戦力差を埋めるには全然足りないからだ。

だが、政治家をうまく利用すれば、軍本部から作戦中止命令や転進命令を出すことも不可能ではない。

このあたりからは、ゲンドウの得意分野である。

ゲンドウは、切り崩したい人物に影響力がある人物を先に味方に付けてから切り崩すなど、

外堀から埋めていく手法を採った。

これは、思った以上に効果をあげ、7割近い成功率だった。

また、予想外に効果があったのがアスカの生写真であった。

何人目かの切り崩し工作を行っている時に、相手からアスカの生写真が欲しいと言ってきたのだ。

それならば応じると。

流石のゲンドウもこれには驚いたが、それ以後試しにアスカの生写真を餌にすると、

渋っていた相手が簡単に翻意したり、態度を軟化させたりすることが、結構あったのである。

不思議に思っただけ聞いてみると、子供や孫からねだられて困っていたと言っただけである。

開いた口が塞がらなかったが、ネルフにとっては悪いことではないので、

ゲンドウは笑いを堪えて切り崩し工作を行った。

15:30になると、リッコがお茶をしにやって来た。人数分のケーキも一緒だ。

「リッコったら、気が利いてるじゃない。」

丁度遅い昼食を終えたアスカはニコニコである。無論、他の女性陣もだ。

「みんな、コーヒーで良いかしら？」

そう言いながら、リツコはコーヒーを淹れる。

そのコーヒーを、皆ニコニコしながら受け取っていく。

「アスカ、作戦は順調かしら。」

「任せてよ、リツコ。今の所は特に遅れは無いわ。」

リツコの問いに、アスカは胸を張って言ったが、大嘘である。

まだ、本来の作戦は始まっていないのだから。

「そう、こちらも順調よ。まあ、もう分かっていると思うけど。」

「ええ、分かっているわ。予定よりも若干早いようね。

で、切り崩し工作はうまくいってるの？」

「ええ、成功率は50%を超えているわ。」

「そう。それだけあれば、御の字ね。」

「それで、アスカの方は、どれ位かかるのかしら。」

「そうねえ。予定通り明日の18:00前後に終了というのは変わりなさそうだわ。」

「あまり無理しないでね。」

「大丈夫よ。まっかせなさい。」

アスカはそっぴいながら胸を叩いた。

16:00から、アスカ達の本来の仕事が始められた。

ゼーレのものと思われるコンピュータをハッキングし、その中のデータを頂き、

場合によっては改ざんするのだが、待機任務に就いているのがトウジとケンスケであるため、

ハッキング自体は18:30から始める。それまでは、目標の絞り込みとなる。

「ねえ、リツコ。攻撃目標は、あとどれくらい残っているの？」

「そうね、200か所を切ったかしら。」

だが、その一つ一つがかなり攻略が困難な目標なのだ。

だが、アスカは攻略する自信があった。

アスカの母であるキョウコが設計し、その死後も仲間によって細々と製作が続けられ、

つい最近完成したスーパーコンピュータ、『ランス』。

MAGIと同等の処理能力を誇り、基本性能もMAGIと肩を並べるうえに、

ハッキングに特化した能力を持っている。正に、今回の作戦のために作られたようなものだ。

アスカは、母の形見とも言える、この『ランス』に全てを賭けていた。

「いいわ、リッコ。後のハッキングは、こちらに任せなさい。そっちはデータ処理に比重を移していいわ。」

「そう言ってもらえると助かるわ。適宜休憩しているとはいえ、こちらのメンバーの疲労はかなりのものだわ。」

元気なのは、私とマヤ位ね。」

「じゃあ、18:00までにデータをちようだい。18:30からハッキングを開始するわね。」

「ええ、頼むわね。頼りにしてるわ、アスカ。」

リッコは、そう言うと立ち上がり、発令所へと向かった。

こうして、18:30から、作戦が開始された。同じ事は発令所でもやっていたが、アスカ達はより難度の高い目標のハッキングを行うのだ。

「マリア、ミリア、ミンメイ、サーシャ。皆準備は良いわね。」

「ええ。」

「ああ。」

「はい。」

「はい。」

「質問は何かあるかしら？」

アスカは皆を見渡したが、特に無いようだ。

「良い？じゃあ行くわよっ！ミラクル5の力を見せてやるのよっ！」

「「「「「おおっ！」「」「」

再び、威勢が良いが、可愛らしい雄叫びが響いた。そして、皆自分の目の前にあるモニタを見つめる。

「良い？アタシが指示する攻撃目標から、一切合切データを引き出すのよ。」

良いわね？目標によっては、データの書き換えやウイルスの仕込みもするからね。

マリアはフランスより西のヨーロッパ方面をお願い。

ドイツ支部、ドイツ第2支部、イギリス支部のサポートを受けて。」

「ええ、任せて。」

「ミンメイはアジア方面をお願いするわ。中国支部、インド支部のサポートを受けて。」

「ええ、分かったわ。」

「ミリアはアメリカ方面をお願い。アメリカ支部、アメリカ第3支部、ブラジル支部のサポートを受けて。」

「ああ、分かった。」

「サーシャはフランスより東のヨーロッパ方面をお願い。フランス支部、エジプト支部のサポートを受けて。」

「はい。」

「アタシは重要目標を攻めるわ。the phoenix operation miracles stage start!」

「『OK、Boss!』」

こうして、ゼーレ関係のコンピュータの中でも、攻略が困難と判断された目標に対するハッキングが開始された。

少し時間は遡る。

「あゝあ、暇だなあ。」

18:00になり、シンジは待機任務に就いたが、エヴァの中で暇そうに呟いていた。

作戦は順調に進んでいるみたいだし、敵が侵入した形跡も無い。とにかく、やることが無かった。

「映画でも見ようかな。」

シンジは考えた末に、『救世主アスカ』を見ることにした。だが、途中までは楽しく見る事が出来たが、アスカとのキスシーンになると、顔が真っ赤になってしまった。

「こ、これが全世界に流れているんだね。は、恥ずかしいや。」

だが、プロポーズのシーンは、もっと恥ずかしかった。加持のシーンは大笑いしながら見る事が出来たのだが、自分の事となると、話は別なのである。

「試写会の時も恥ずかしかったけど、こうやって見ると、物凄く恥ずかしいや。」

でも、アスカはどう思っているのかな。」

シンジは、初めて疑問を持った。

自分も恥ずかしいが、アスカも同じ位恥ずかしいに違いない。それなのに、どうして全世界に公開したのかと。

「もしかして、アスカは本当に僕のが好きなのかもしれない。そうだよ、そうじゃなければ、こんな映画を他人に見せようとはしないよね。」

そう思うと、シンジは嬉しくなった。

『アスカは、行動で自分の意思を表現する。』それは短いながらもアスカと同居してから理解するようになった、シンジなりのアスカ像である。

「アスカも、僕の事が好きなんだ。きっとそうに違いない。だから、僕はアスカを信じて頑張らなくちゃ。」

シンジは、固く拳を握りしめた。

「あゝあつ、つつかれた〜っ。」

マリアは大きな声で言った。時間は23:30。これからは休憩タイムである。

「はい、みんな。これからは休憩よ。」

でも、その前に口頭で状況を報告して。じゃあ、最初はマリアからお願い。」

「はい、攻撃目標のうち、30%を攻略しました。」

「次は、ミンメイね。」

「はい、同じく40%を攻略しました。」

「次は、ミリア。」

「はい、同じく25%を攻略しました。」

「う〜ん、もうちょっと頑張つてね。じゃあ、最後はサーシャ。」

「はい、50%を攻略しました。」

それを聞いた皆は、驚きの声をあげた。

「サーシャには、エジプト支部のお友達が付いているのよ。そうでしょう?」

アスカは、さも当然といったような顔をして言った。

「へっへっへっ。実はそうなの。でも、友達と言っよりも、親戚の仲の良い子かな。」

サーシャはネタばらしをされたせいも、苦笑いを浮かべる。

「まあ、とつとと終わらせちゃいなさいよ。そしたら、他の人の手助けも出来るでしょ。」

アスカの言葉に、皆頷くのであった。

第46話補完 新たな敵

「どうだ、ネルフの様子は？」

「はっ。ゼーレに対して、着々と攻撃の準備を進めているようです。詳細は分かりませんが。」

薄暗い部屋の中で、二人の男が会話をしていた。

「そうか。で、惣流キョウコの娘はどうなっている。」

「そ、それが、ガードが固く、近寄ることすら叶いません。」

「ネルフのガード位、いかようにもなるだろうに。」

「そ、それが、複数の組織がガードしております。」

「何っ。どこの組織だ。」

「ワイルドウルフ、レッドアタッカーズ、それにサグとかいう組織です。」

「ワイルドウルフはドイツの傭兵部隊だったな。レッドアタッカーズはアメリカか。」

「だが、サグとは何だ？初めて聞くぞ。」

「そ、それが、未だに正体が掴めません。」

「ふうむ、では、迂闊に手を出すのはまずいかもしれんな。」

「その通りです。それに、組織の者は、市内に入ることすら出来ません。」

仕方なく、私立探偵や何でも屋を使っているような状況です。」

「まあ良い。だが、惣流の娘は、何としても消すんだ。良いな。」

「ですが、隙がありません。」

ネルフの中になると、手を出せませんし、ネルフの外では常に10人を超える護衛に守られています。」

新たな刺客を送り込んでも、市内に入るのは難しく、金で雇えるような連中では、成功は見込めません。」

かえって、我々の存在を相手に知らせるだけかと。」

「だが、あの娘は何としても消さないはず。」

おそらく、母親から何らかの方法で我々の事を伝えられている筈だ。」

「

「ですが、そのような兆候はありません。」

母親から聞いていないか、記憶を失っているのでしょうか。」

「確か、あの娘は、使徒と戦った時に、精神攻撃を受けたそうだな。その時の後遺症が残っているせいかもしれん。」

「その使徒の精神攻撃ですが、簡単に回復するようなものなのではないでしょうか。」

「一時期は、かなり酷い状態だったと聞きます。」

もしかすると、本物はまだ寝たきりで、今は替え玉ということも考えられるのではないのでしょうか。」

「ふん、そう都合よく替え玉などいるのか。」

「ええ。今までは片方が影に隠れていて、使徒にもう片方が寝たきりにされたのを機会に入れ代わったのではないかと。」

私は、惣流キョウコの娘は双子だと思っています。パイロットリーダーがおそらくその片割れかと。さもなければ、クローンの可能性もあります。」

「だが、それはあるまい。いつも碇の息子が一緒だろう。好きな女が入れ代われれば、いくら何でも気付くだろう。」

「では、やはり同一人物とお思いですか。」

「ああ、もちろんだ。だから、何としても消すんだ。それに、一体何回失敗すれば気が済むんだ。失敗は、100回は超えている筈だぞ。」

「ですが、あの娘は普通じゃありません。飛行機から突き落としても、死にませんでしたし。しかも、その後、1個中隊の敵陣の中でも生き延びました。とてもじゃないですが、信じられません。一体、どんなマジックを使ったのか。」

「うまく、木のクッションにでも当たったんだろう。それに、1個中隊の敵と言っても、隠れてやり過ぎたんだろう。運の良い娘だ。」

「そうでしょうか。ですが、せめてヨーロッパにいる内に何とかするべきでした。」

「そうだな。日本だと、何かと行動が制約されるしな。だが、それは言い訳だ。何としても、あの娘を消すんだ。」

「ですが…。」

「うまく、ネルフとゼーレの争いを利用するんだ。」

「そうだな、例えばSLBMをネルフ本部に撃ち込むというのはどうだ。」

「うまくいけばよし、失敗してもゼーレの仕業にするんだ。」

「タイミングさえ良ければ、成功するだろう。」

「はっ、分かりました。」

「どうせ、ネルフやゼーレなど、大日本帝国と第三帝国の夢を再び見ようというのだろう。」

「そんな奴らに世界を渡す訳にはいかん。」

「世界を手にするのは、人類初の世界帝国を打ち立てたあの方の血を継いでいる、我々こそが相応しいのだ。」

「はっ、その通りです。」

「ネルフとゼーレが、くだらん内輪もめをしている間に準備を進めるのだ。」

「期限は1年以内だ。しかも、絶対に外部にもれないようにしなくてはならん。分かったな。」

「ははっ。」

こうして、二人の男達の会話は終わった。

第47話 乙女の涙

作戦は順調に進み、3月13日の12:00になっていた。
シンジとマックスは、またもや待機任務に就いた。

(後30分で、アスカの姿がテレビに映るんだね。
それまでは、アスカの準備中の姿でも見ていようかな。)

シンジは、アスカのいる部屋の室内監視カメラが映るようにして、
アスカの姿を追うことにした。

「どう、準備は良い？」

12:30になると、アスカはリッコに尋ねた。

「ええ、良いわ。じゃあ、あと5分で開始ね。」

リッコは直ぐに答える。

「他の皆も良いかしら。」

「ええ、OKです。」

今、アスカは特別に準備した部屋にいた。

アスカの背中には、液晶画面を幾つも繋げて作った、幅10mはある巨大な画面があった。

そして、アスカの前には演台が置いてあり、アスカの腰から下を隠

していた。

アスカは、その演台に手をかけていた。演台の上には、伸縮式の指示棒が置いてある。

「アスカ、落ち着いてね。」

リッコが優しく声をかける。

「まっかせなさ〜い！この天才、惣流・アスカ・ラングレー様に不可能は無いのよ！」

「それだけ言えれば大丈夫ね。」

リッコは安堵した。

これから行うのは、今回の作戦の締めくくりとなる、重要な放送なのだ。

これによって、ネルフの今後が左右されると言っても過言ではない。それほど重要な放送だが、ネルフの出演者はアスカ一人なのだ。だから、アスカに失敗は許されない。

このため、通常人では耐えられない位のプレッシャーが、14歳の少女の心にかかっているはずなのだ。

当然、誰もが心配でたまらない。

だが、アスカにとっては、これ位はお茶の子サイサイのようだ。幾多の戦場を渡り歩き、幾多の使徒との戦いを経てきたアスカにとっては、

これ位の事は些細な事にすぎないのだろう。

アスカはリッコに背を向けると、携帯電話を取り出した。そして、ミサトへ電話をかける。

「ああ、ミサト。こちらは後5分で放送が始まるわ。だから、エヴァの指揮を頼むわね。」

最悪の場合、放送開始直後に何らかの反応が出る可能性があるから、気を付けてね。」

ミサトの元気の良い了承の返事を聞くと、アスカは携帯電話を懐にしまった。

そして深呼吸をすると、厳しい顔つきから、明るく温和な顔つきへと変わっていった。

「後3分よ。みんな、用意は良い？」

臨時にアスカの代理となったマリアが、呼びかけた。

「アジア方面はOKよ。」

とミンメイ。

「アメリカ方面も大丈夫だ。」

とミリア。

「ヨーロッパ方面も大丈夫です。」

とサーシャ。

「ようし、じゃあ始めるわよー！」

こうして、ミラクル5による電波ジャックが行われた。
全世界のテレビ放送に介入し、ネルフの放送を流すのだ。

「あれっ、どうしたんだろう。」

男は呟いた。今まで見ていたテレビの画面が急に真っ暗になったのだ。

「故障かな？」

男はテレビに近寄ろうとしたが、唐突に動きを止めた。

「こ、これは…。」

テレビには、惣流アスカの姿が映っていた。

そう、このような出来事は、世界各地で起きていた。

アメリカやヨーロッパは、深夜であったため、見ている者は少なかったが、

アジアを中心に大勢の者がテレビに釘付けになったのである。

「皆さん、私は国連の特務機関であるネルフ広報部の惣流・アスカ・ラングレーです。」

先日発売された『救世主アスカ』を大勢の人に買っていただき、ありがとうございます。

実はこれから重大なお知らせがあります。
ですから、なるべく大勢の人に話を聞いて欲しいのです。
ご家族や友人、知人にこの放送のことを知らせて下さい。
また、この放送を録画して、知り合いの方に見せてあげてください。
お願いします。」

アスカはそう言うと頭を下げた。

「『救世主アスカ』の物語は、フィクションではありません。
悪の組織ゼーレとネルフの戦いは、今も現実に続いているのです。
碓シンジ、鈴原トウジらエヴァンゲリオンのパイロット達は、今も
戦い続けているのです。
人類の平和と未来のために。」

ここでアスカは指示棒を掴み、巨大な液晶画面を指し示した。
そこには、日本を中心とする世界地図があった。
そして、日本から離れた所に多数の光点があった。

「皆さん、これを見て下さい。これが何か分かりますか。
この光点の一つ一つは、悪の組織ゼーレの手先の軍隊なのです。
その推定戦力は、原子力潜水艦が20艦以上、通常型潜水艦が50
艦以上、空母が20隻以上、
各種艦艇が300隻以上、戦闘機1000機以上、爆撃機50機以
上です。

一つの国どころか、一つの大陸さえ滅ぼすことが出来るほどの恐ろ
しいまでの戦力が、
私達に襲いかかろうとしているのです。」

アスカは、そこで手を合わせた。

「皆さん、お願いします。私はまだ死にたくありません。助けてください。」

私はもつと色々な映画に出たいのです。世界の平和を祈って歌いたいのです。

世界を守る為の仕事が続けたいのです。もつと長生きして、皆さんのお役に立ちたいのです。」

そこまで言うと、アスカの目に涙が浮かんだ。

「ですが、このままでは、私はネルフの仲間と共に、ゼーレの手先に殺されてしまいます。」

戦闘機の放つミサイルによって、私の体はバラバラにされてしまうでしょう。

そんなのは嫌です。私はこの若さで死にたくありません。

この私が哀れと思うなら、どうか皆さん、私達ネルフにご協力をお願いします。」

その瞬間、アスカの目から涙が流れ落ちた。

「皆さん、行動してください。」

今行動しなければ、私達は悪の組織ゼーレによって、皆殺しにされてしまいます。

そうしたら、悪の組織ゼーレは、フォースインプクトを起こそうとするでしょう。

そうしたら、皆さんの人生は終わりを告げるのです。

ですから、皆さん戦いましょう。人類の平和と未来を勝ち取る為に一人一人の力は小さくても、皆が力を合わせればきつと巨悪にだって勝つことが出来るでしょう。」

うつすらと涙を流すアスカの姿は、言い様も無く美しかった。

「おい、ケンジ。テレビを見たか。」

「ああ、見たとも。」

「どうする？」

「もちろん、アスカちゃんのために全力を尽くすさ。」

おそらく、日本中、いや、世界中で似たような会話が行われたことだろう。

アスカの涙は、老若男女を問わず、人々の心を打った。

そして、人々はアスカの涙ながらの頼みに、精一杯応えようとしたのだ。

ある者は、ネルフのホームページを見て、電子メールでゼーレ関係者に苦情を訴えた。

ある者は、自分の家族がネルフを攻撃しようとしている軍隊にいることを知って、

思いなおすように電子メールを送った。

ある者は徒党を組んで、デモを行った。

こうして、世界各地で反ゼーレの動きが起こったのだ。

「大変です。太平洋方面からSLBMが飛んできます！」

若い女性のオペレーターが、急に金切り声をあげた。

SLBMとは、潜水艦発射弾道ミサイルのことだ。

核弾頭かNN爆弾が搭載されているのだろう。

「先輩、どうしましょう。」

慌てるマヤにリッコ微笑みながら言った。リッコは既に発令所に戻っていたのだ。

「大丈夫よ。シンジ君を信じましょう。」

リッコは、既にミサトに対してミサイル襲来を伝えていた。

「皆さん、見て下さい。これが、私達の現実です。」

アスカは声を振り絞った。液晶画面には、ネルフに迫り来るSLBMが映っていた。

「このミサイルで、ゼーレは私達を皆殺しにしようとしています。ですが、私達は戦います。

見てください、私達ネルフの希望であり、人類の希望であるエヴァンゲリオンをつ！

そして、称えてください。

死をもおそれず戦いに赴く、エヴァンゲリオンのパイロット達を。」

その声と同時に、画面にエヴァンゲリオン新初号機が映った。

そして、SLBMに向かって空を飛んでいき、オレンジ色の壁を展開して、SLBMを爆破した。

「皆さん、紹介します。エヴァンゲリオンのエースパイロット、碓

シンジですっ！」

アスカの声と同時に、画面にシンジの横顔が映った。

「皆さん、悪の組織ゼーレは、私達のような子供でさえ、容赦なく殺そうとします。

そのような悪党に世界を自由にさせてはいけません。正義は、私達にあります！」

どうか、皆さん、ネルフへの支援をお願いします。」

アスカはまたもや頭を下げた。頭を上げると、アスカの目には、未だに涙が流れていた。

少し時間は遡る。

「シンジ君、敵のミサイルがやって来たわ。

悪いけど、ちよちよいのちよいつて、やっつけて来て。」

「はい、分かりました。」

既にエヴァンゲリオンは起動しているのです、

ミサトの号令と共にシンジの乗る新初号機とマックスの乗るエヴァが地上に射出された。

「シンジ君、なるべくここから離れた所で迎撃して。

マックス君は、バックアップよ。万一の時のために、そこで待機して。」

「分かりました。」

シンジは返事をする、背中から羽を出して、走り出した。少し走ってから、勢い良くジャンプしたかと思うと、空を飛んだ。

「さて、ミサイルはあれか。」

暫くすると、前方にSLBMが現れた。シンジはそれを睨み付けた。

「よくもアスカを殺そうとしたな。許せない、絶対に許せない。」

シンジは、怒りをATフィールドの形にして、SLBMにぶつけた。その瞬間、SLBMは大爆発を起こして飛び散った。

丁度、湖の上だったので、人的被害はなさそうだ。

「ミサトさん、任務は終了しました。」

「おつかれさま。早く戻って来なさい。」

「はい、分かりました。」

（良かった。アスカを守る事が出来て。）

シンジは心の底から安堵していた。

タイムスケジュール

発令所

アスカ達

加持・ミサト

シンジ達

3月11日(金)

18:00 作戦開始

ゼーレの戦力分析 傭兵達との連

絡 カヲルとアリオスが

市内の警戒

待機

19:30 ウィルスAを蒔く

20:00 ウィルスBを蒔く

ハッキング開始

21:00 攻撃目標の30% アスカ仮眠

市内の警戒

トウジとケンスケが

が落ちる

待機

24:00 アスカ起床

3月12日(土)

00:00 攻撃目標の95% sleeping thief

市内の警戒 シンジとマックスが

が落ちる 作戦開始

待機

03:00 市内の警戒

カヲルとアリオスが

待機

05:30 休憩・仮眠

休憩・仮眠

06:00

市内の警戒

トウジとケンスケが

待機

09:00

市内の警戒

シンジとマックスが

待機

09:30 休憩・仮眠終了

休憩・仮眠終了

切り崩し工作開始

12:00

市内の警戒

カヲルとアリオスが

待機

14:30 休憩

休憩

15:00

sleeping thief

市内の警戒

トウジとケンスケが

作戦終了・食事

待機

15:30

リツコとお茶

16:00

作戦の準備

18:00

市内の警戒

シンジとマックスが

待機

18:30 休憩終了

miracle stage

開始

21:00

カヲルとアリオスが

市内の警戒

待機

23:30 休憩・仮眠

休憩・仮眠

3月13日(日)

00:00

トウジとケンスケが

市内の警戒

待機

03:00

シンジとマックスが

市内の警戒

待機

03:30 休憩・仮眠終了

休憩・仮眠終了

06:00

カヲルとアリオスが

市内の警戒

待機

08:30 休憩・仮眠

休憩・仮眠

09:00

トウジとケンスケが

市内の警戒

待機

12:00 休憩・仮眠終了

休憩・仮眠終了

シンジとマックスが

市内の警戒

待機

12:30

世界中継の開始

SLBMの迎撃

15:00

市内の警戒

カヲルとアリオスが

待機

18:00

第47話補完 シンジの人気

「ねえ、昨日のテレビ、見た？」

「うん、見た、見た。怖いわよねえ、危うく私達は死ぬ所だったんですよ。」

「そうそう、碓君のおかげで助かったみたいだけど。」

「そういえば、碓君は格好良かったわよね。そう思わない？」

「うん、思う、思う。あの、いつもは冴えない碓君だとは思えないわ。」

シンジ達の通う中学校では、このような会話をする女生徒が多かった。

昨日のテレビでシンジの活躍が放映されたため、シンジの人気は急上昇したのである。

「おい、昨日のテレビを見たか？」

「ああ、見た見た。」

「惣流さんて、綺麗だったよなあ。」

「ああ、それに惚げで美しかったよなあ。」

「あの涙が、何て言うか、守ってあげたいっていう気を起こすんだ

よなあ。」

「そうそう、惣流さんは、やっぱり良いよなあ。」

男子生徒は、こっちの話題の方が多かった。

アスカの人気はさらに上がったが、元々人気が高かった為、今までと大差は無かった。

無論、全世界で同じような現象が起きていたのである。

一方、ヨーロッパのとある国では、怪しげな男二人が会話をしていた。

「作戦は失敗だったな。」

「はっ。まさか、エヴァンゲリオンの力があれほどとは、思いませんでした。」

「まあ、良い。だが、これで惣流の娘に手を出すのは難しくなったな。」

「は、はあ。」

「やむを得ん。我々の存在を隠すことを最優先とする。今後は、下手な手出しは控えよ。いいな。」

「はっ。」

こうして、男達の会話は終わった。

第48話 臨時ボーナス

「何か、僕を見る目がいつもと違うなあ。」

シンジはお昼ご飯を食べながら呟いた。

「うん、そうだな。確かにいつもと違うよ。」

ケンスケも同意した。

今は、いつものメンバーであるシンジ、トウジ、ケンスケ、カヲル、ヒカリ、ユキ、マリアの7人がお昼のお弁当を食べているところだ。

一方、アスカは、婚約解消を発表してからは、転校生達と一緒に食べている。

マックス、ミリア、アリオス、アールコート、キャシー、ミンメイ、サーシャ達である。

このため、シンジはお昼には少し元気が無くなるのだ。

「シンジはテレビには अच्छり映ったからな。」

しかも、ここに向かっていているSLBMを破壊するところもな。

あのお蔭で皆の命が救われたんだから、皆感謝しているんだよ。」

ケンスケはにこにこ笑っている。

「そうですね。それに、

『皆さん、紹介します。エヴァンゲリオンのエースパイロット、碓シンジですっ!』

って言われていましたし。」

ユキもここにしている。

「でも、恥ずかしいな。

それに、エヴァに乗っているのは僕だけじゃないし、敵のミサイルを撃ち落としたのも、たまたま僕が待機していたからだし。」

「なんや、シンジ。お前は良く頑張っているんや。胸を張っていいんや。

恥ずかしがる事なんて、あらへん。」

「でもなあ。」

落ち着かないシンジであった。だが、ケンスケが話を変える。

「まあ、それより、良いニュースがあるんだぜ。

何と、俺達パイロットに、臨時ボーナスが出るらしいんだ。」

「何っ、それはほんまか。」

「ああ、惣流から聞いたから間違いないよ。なあ、シンジ。」

確かに、その話なら聞いていた。しかし…。

「うん、でもネルフの職員全員に出るっていう話だったよ。」

「おい、シンジ。ばらすなよ。俺の口から言おうと思っていたのに。」

そう言いながらも、ケンスケは笑っていた。

「も、もしかして、私や洞木さんにも出るんですか。」

ユキが恐る恐る聞いてきた。

そう、ユキとヒカリは、ネルフの臨時職員として雇われていることになっているのだ。

ヒカリは『パイロット不在時における、パイロットの妹の保護』つまりトウジの妹の世話が仕事になっている。

一方のユキは、ミサト家の家事全般が仕事である。

もともと、ヒカリもユキもやっていることは同じであったけれど。

「ああ、そうだよ。惣流に感謝するんだな。」

良いニュースを聞いて、皆の表情、特にトウジの表情は明るくなった。

昼食が終わると、シンジは一人でネルフへと向かった。目指すはゲンドウの所だ。

司令室に入ると、そこにはゲンドウと冬月が待っていた。

「やあ、シンジ君。昨日はご苦労さま。」

やはり、声をかけるのは冬月である。

「いえ、殆ど待っているだけの仕事でしたから。」

「それでも、君が失敗していたら大変なことになっていたんだよ。」

ありがとう、シンジ君。
だが、ゼーレの攻撃は今後も続くだろう。これからも頼むよ、シンジ君。」

「はい、頑張ります。」

そんなことをきっかけに、5分ほどシンジと冬月が話し合っていた頃、アスカがやって来た。
急いで来たのか、少し息が乱れている。

「惣流一佐、参りました。遅れてすみません。」

アスカはピシッと敬礼した。

「ああ、構わんよ。アスカ君も、今回は良くやってくれた。礼を言うよ。」

「では、よろしいですか。早速、ご報告します。」

「まあ、その前に座りたまえ。」

冬月は、ゲンドウの机の前に置いてある椅子を指して、アスカに着席を促した。

（げっ、僕なんか、言われる前に座っているよ。）

内心、ちょっと慌てたシンジであったが、誰にも気付かれなかったようだ。

「はい、ではお言葉に甘えて、座らせて頂きます。」

こうして、4人とも座った状態で、久々に秘密会議が行われた。最初はアスカの報告だ。

「まず、今回の作戦における被害ですが、人的被害はゼロでした。物的被害も殆どありません。

心配された敵の反撃も、SLBM（潜水艦発射弾道ミサイル）のみでした。

弾頭は核兵器ではありませんでしたし、残骸は湖に落ちたため、これによる被害はありません。

ただし、一部の機械が衝撃波で故障しており、被害額はおおよそ数億円です。」

「そうか、それ位で済んで良かった。」

「ああ、問題無い。」

「次に作戦の成果ですが、敵と思われる部隊の進撃が、殆ど止まりました。

そのうち、約8割の戦力が日本から離れていくのが確認されています。

残る2割についても、足止め状態です。」

「アスカ君、その残る2割は、どこの国のものかね。」

「アメリカ、ロシア、ドイツ、イタリア、オーストリアの一部です。」

「そうか。数は少なくとも精鋭か。」

「はい。ですが、まだ望みはあります。実は、鈴原三尉にヒントをもらって、今回の作戦において、敵のコンピュータに細工をしているのです。」

「細工と言つと、どんなものかね。」

「はい、実は鈴原三尉が将棋をしているのを見て、敵の兵器をこちらで利用することを思いついたのです。」

未だに残っている戦力の兵器の約2割は、こちらの方である程度コントロール出来る状態にあります。」

うまくいけば、同士討ちさせることも可能でしょう。」

今、それについて、MAGIでシミュレーションを行っています。」

「そうか、それは何とも頼もしいな。だが、敵はこのまま帰るかもしれないな。」

「いえ、それは無いでしょう。」

「ほう、どうしてだね。」

「実は、お二人に内緒で、並行して別の作戦を行っていました。」

『Sleeping Thief』という作戦です。」

その作戦が成功したので、おそらくゼーレは近い内に攻撃して来る筈です。」

「ほう、どんな作戦かね。」

「簡単に言つと、敵の資産をこっそり頂きました。それも半端な額ではありません。」

「どれ位かね？」

「そうですね、おおよそ300兆円のゼーレの資産をかすめ取りました。」

これで、ゼーレの力はかなり落ちた筈です。

おそらく、これを取り戻す為に、全力でここを攻めて来るでしょう。」

「さ、300兆円かね。」

冬月は絶句した。ゲンドウも、驚きのあまり、口を開いたままである。

これが本当ならば、ネルフは資金的には、後100年は持つだろう。

「はい、敵の資金を奪うことによって、敵の弱体化を狙いました。これは、かなりの打撃になる筈です。」

S計画（ゼーレ殲滅・掃討計画）の要とも言って良いでしょう。

また、敵から得た資金によって、

NR計画（NERV再生計画）、ER計画（EVANGELION再生計画）が格段に前進します。」

まさに、一石二鳥の作戦なのです。」

「ほ、本当に300兆円もの資金が手に入ったのかね。」

「ええ、本当です。約1万の口座に分けてあり、1口座当たり、300億円になります。」

ただし、日本円はそのうち約2割、残りはドルとユーロが半々です。ネルフとは直接関係のないルートでマネーロンダリングをしていますし、

ゼーレさえ倒せば、取り返される心配はありません。」

ですが、ネルフ以外のルートを多用したため、必要経費がかなりかさみました。

それについて、是非ご了承頂きたいのですが。」

「ふむ、一体幾らかね。」

「そうですね、約5兆円になります。」

「まあ、良からう。」

それまで黙っていたゲンドウが口を開いた。

「そうだな、300兆円のうちの5兆円なら、止むを得ないだろう。」

冬月も頷く。

「ありがとうございます。これで、the phoenix operationに関する報告は終了しました。何かご質問はありますか。」

「敵の再侵攻は、あとどれ位かかると思つかね。」

「おそらく、1週間前後かと。」

それを過ぎると、ゼーレの資金力が落ちたことが知れ渡ります。そうなる前に勝負をかけてくるでしょう。

それに、今度はゼーレの直轄部隊も出てくるでしょう。」

「そうか、分かった。今日はもう帰っても良いよ。」

明日からは、また臨戦体制になるようだかね。」

「はい、では失礼します。」

こうして、アスカの報告は終わった。

「ねえ、アスカ。どうだった？」

アスカルームに向かったアスカとシンジを、ミサト達が待ち構えていた。

「もち、OKよ。」

「やったあ、アスカ恩に着るわ。」

ミサトは大喜びである。加持とリツコも嬉しそうだが、シンジは事態が飲み込めなかった。

「ねえ、アスカ。どうということなの？」

「ああ、シンジには詳しく話していなかったわね。」

皆に臨時ボーナスが出るかもしれないっていう話は言ったわよね。」

「うん、昨日聞いたよ。でも、それがさっきの話と、どう関係するのさ。」

「あのねえ、あの二人に正面切って言ったとして、OKが出ると思う？絶対無理よ。」

だから、言い方を変えたのよ。」

『必要経費がかなりかさみました。』って言って、了承してもらったでしょ。

総額も言ってるし、後は必要経費に臨時ボーナスが入っていれば良い訳よ。

アンタも、もう少し頭を働かせなさいよ。」

「そ、それって詐欺じゃあ。」

だが、その呟きをミサトは聞き逃さなかった。

「シンちゃん。間違っても、司令に本当のことを言っちゃ駄目よ。もし言ったら、ネルフの職員全員を敵に回すわよ、良いわね。」

臨時ボーナスのことは、知れ渡っているし、今更無しですとは言えないのよ。

みんな、アスカには感謝しているんだから。」

「そうね、どこかの作戦部長さんが、早まって言いふらすんだもの。まあ、アタシはどっちでもいいけどね。」

「へへへへっ。やっぱ、まずかったわね。でも、良いわ。」

シンちゃんは私達の味方だから、黙っててくれるわよねえ。ねっ、お願い。」

「は、はい…。」

(トホホ…。トウジ達も喜んでいたし、しょうがないか。)

こうして、一人当たり百万円という、大盤振る舞いの臨時ボーナスは、その日のうちに職員の口座に振り込まれた。

「ねえ、アスカ。300兆円の話って、本当なの？」

その日の夜、布団に入ってから、シンジはアスカに尋ねた。

「もちろん、本当よ。でも、実際は500兆円位あったかしら。」

「ええつ。300兆円じゃなかったの？」

「多い分にはいいじゃない。良く考えなさいよ。」

あの時、5兆円の必要経費が駄目だって言われたら、後で195兆円増えましてって言えば済むじゃない。」

「それって、嘘だよ。」

シンジは絶句した。何ていい加減なのかと。

「失礼ね、交渉テクニクって言って欲しいわよね。」

そんなこと言うと、もう二度と背中なんて流してあげないからね。」

「えつ、そ、それは…。」

「何よ、手が痛くて背中を洗えないですって。アンタこそ大嘘じゃない。」

最初に嫌だつて言ったら、『エヴァに乗っても、悪い事しか起きないんだ。』

なんていじけたフリなんかしちゃってさ。

アンタがお昼時に背中を搔いているのを見た人がいるんだからね。」

「あははははっ。」

シンジは乾いた笑いを浮かべた。

（やっぱり、アスカにはお見通しか。）

結構、似たようなことをしている二人であった。

「でも、5兆円なんて、一体どうしてそんなにかかったのさ。」

「ああ、簡単よ。アタシへの報酬が5兆円なのよ。」

その他の経費は3000億円以下に収まったけどね。」

「そ、それって…。」

さすがに、開いた口が塞がらないシンジであった。

やはり、アスカの嘘はスケールが違うらしい。

（僕にも少しくれないかな。）

最近、普通の考えをするようになったシンジであった。

第48話補完 臨時ボーナスその2

話はお昼に遡る。

「昨日はみんなご苦労さま。お蔭でゼーレの戦力が半分以下になつたわ。」

アスカは、昼ご飯を食べながら皆に礼を言った。

ちなみに、婚約解消を発表してからは、アスカは転校生達と一緒にお昼を食べている。

アスカは、皆に気付かれないようにシンジの方をチラリと見た後、言葉を続けた。

「そこで、まだ未確定だけど、ネルフ本部職員全員に臨時ボーナスを支給しようと思っているのよ。」

一人当たり一律百万円にするつもりよ。

命懸けだったにしているはちょっと安いけど、我慢してちょうだいね。」

それを聞いて、ミリアを除く全員の目が輝いた。

「でも、まだ安心しないでね。上の許可が出ていないから。」

おそらく今日中に結論が出るとは思っけどね。」

それを聞いて、マックスとアリオスがやや肩を落す。

「まあ、そんなにがっかりしないでよ。それより、明日からはまた臨戦体制になるわよ。」

ゼーレの攻撃も、後1週間前後であるとおもっから。だから、気をひきしめて欲しいのよ。」

今度こそは、エヴァンゲリオン部隊の活躍が頼りなんだから。」

アスカの真剣な表情に、全員が力強く頷くのであった。

昼食が終わると、アスカは一人でネルフへと向かった。

目指すはゲンドウの所だが、一度アスカルームに寄ることにした。ゲンドウへの報告に必要な資料一式を持っていくためである。すると、そこにはミサトが待ち構えていた。

「あれ？一体どうしたのよ、ミサト。こんなところで。」

「えつとね、アスカに聞きたい事があってね。昨日の話なんだけど。」

「ああ、臨時ボーナスの話ね。」

「そうよ。あれって、确实よね？」

「なあに言ってるのよ。昨日も言ったでしょ。まだ司令に話していないって。」

「えつ、それじゃあ駄目になるかもしれないの？」

「まあ、そういう可能性もあるわね。」

その瞬間、ミサトの顔が青くなった。

「お願い、アスカ。そのお金を当てにして、一杯エビチユを買っち

やったのよ。

だから、何とかしてちょうだい。」

ミサトはそう言うなり、両手を合わせて頭を下げた。

「ああ、エビチュ位だったら、アタシが奢ってあげるから心配しないでいいわ。」

「それがね、ちょっと、口をすべらしちゃって…。」

「ま、まさか…。」

「そうなのよ。本部中に知れ渡っちゃったのよ。アスカ、お願い。この通り。」

そう言いながら、ミサトは再度両手を合わせて頭を下げた。

「もう、しょうがないわねえ。」

アスカは呆れて、何も言えなかったが、ミサトのため一肌脱ぐことにした。

ゲンドウへの報告内容を当初予定より変えるのだ。

だが、これによって、後でシンジに嘘つき呼ばわりされてしまうのだが。

第48話補完 臨時ボーナスその2（後書き）

ミサトが口を滑らした為に、ゲンドウに嘘をつくことになったアスカ。

でも、ミサトを見捨てるという選択肢もあつたはずですが…。アスカにとっては、ミサトは出来の悪いお姉さんという感じなんじゃないか。

第49話 告白

「ねえ、アスカ。ちょっと目をつむってよ。」

「どっして?」

「いいから、お願い。」

「これで良いの?」

シンジは、アスカが目を閉じると、その可愛らしい唇にキスをした。ちよつとだけ、アスカの体が強張ったが、特に嫌がる様子は無い。

(よし、いいぞ。アスカは喜んでくれるかな?)

そして、キスをしながら、アスカの口の中に何かを入れようとした。

「んっ、一体何よ?」

「バレンタインのチョココレートのお返しのクッキーだよ。」

シンジは、アスカが驚いたかなあなどと思っていたが、アスカの反応は苛烈なものだった。

「シンジのバカッ!」

「バシッーン!」

哀れ、シンジの頬には、真っ赤な紅葉が出来ていた。

「ど、どつして…。」

いきなりではなくて、事前に了解を得ていれば、良かったかもしれない。

或いは、最初は手で口に入れて上げて、それからだったら喜んだかもしれない。

だが、ムード作りの下手なシンジのなせる技、クッキーの口移しを唐突に行ってしまったことから、

アスカにデリカシー無しと判断されてしまったようである。

(ええっ、どうして駄目なのさ?)

鈍いシンジに乙女心が分かる筈も無く、シンジはがっくりと肩を落した。

「あれっ、碓君、どうしたんですか？顔が赤いようですが。」

翌日の3月15日、火曜日の朝。皆で食事をしている時、ユキがシンジの顔が赤いことに気がついた。

「うっん、何でも無いよ。」

シンジは笑って誤魔化そうとする。

「惣流さんは何故だか知っていますか。」

ユキは、これ以上シンジに聞いても無駄だと判断し、矛先をアスカ

に変えた。

「言っているのかしら…。」

アスカの呟きに、シンジは珍しく即答した。

「止めて欲しい。」

シンジは俯いていた。

昨日のことを人に知られたら、本当に顔から火が出るほど恥ずかしいからだ。

「と、言う訳よ。残念だけど、教えられないわ。」

「ええっ、そんなのずるいです…。」

だが、アスカの眉が少しだけつり上がったのを見て、ユキは追及を諦めた。

「…やっぱり、いいです。」

少し落ち込んだようなユキに苦笑しながら、アスカは皆に話しかけた。

「みんな、食べながら聞いてね。」

おそらく、今度の週末かその前後に、ゼーレの連中が攻めて来るわ。今度の戦いが最後の大きな戦いになるわ。

アタシは必ず勝つつもりだけど、勝負は時の運だから、何が起るのか分からないわ。

もしかしたら、ここにいる全員が死ぬかもしれないし、何人かが生

き残るかもしれない。

全員が無事という可能性は限りなく低いわ。だから、思い残すことは無いようにしておいてね。」

「おいおい、アスカ。あんまり驚かすなよ。そのユキちゃんの顔が引きつっているぞ。」

加持は苦笑している。

「そうよ、アスカ。あなたが頼りなんだから。そんなことを言わないで。」

ミサトはちよつとくだけた口調だ。暗くなった雰囲気明るくしようというのだろう。

「うん、ごめんね。ちよつと暗い話題だったわね。でも、アタシは楽観論者じゃないから。

今行動しないと、手遅れになることがあるかもしれないから、だからあえて言うのよ。」

アスカの言葉に、その場はシンとなった。

だが、一人だけ雰囲気を理解していない者がいた。ほかならぬシンジである。

「だ、大丈夫だよ。ゼーレだって、使徒よりも弱いんだから。

その使徒に勝った僕達が負ける訳ないよ。ねえ、カヲル君もそう思うでしょ。」

「そうだね、シンジ君。

でも、今回の勝敗は、僕達エヴァンゲリオン部隊の働きいかに掛

かっているのさ。

特に、シンジ君の働きにね。」

(えっ、そうなの?)

「そ、そうなの。ちょっと心配になっちゃったな。」

それを聞いて、皆、吹き出してしまった。

「森川、僕は君のことが好きだ。付き合って欲しい。」

その日の昼休み、意を決したケンスケは、ユキに告白していた。

朝のアスカの言葉に後押しされたのだろう。だが…。

「ごめんなさい、相田君。」

でも、相田君のことが嫌いな訳じゃないんです。

私は妹達の面倒をみなくてはならないの。

だから、男の人と付き合うことは出来ないんです。

本当にごめんなさい。」

ユキは頭を下げると、ケンスケに背を向けて去って行った。

「ちえっ、やっぱり駄目だったか。」

ケンスケは肩を落す。そして、とぼとぼと重い足どりでその場を去った。

「あゝあ、やっぱり駄目だったよ。」

ケンスケは、シンジとトウジを前にして、気落ちした様子で言った。

「まあ、元気出せや。女なんて、他にもいるさかいな。」

「そつだよ。元気出してよ。」

だが、彼女がいる男に言われても、何の慰めにもならない。

「あれっ、電話や。誰からかいな。」

トウジは携帯電話を手にした。

「ん、なんや、惣流か。お前とは話すことはないんや。

えっ、何っ。うゝん、そう言うことならワイも協力せなあかな。」

トウジは、電話を切るとケンスケに向き直った。

「おい、ケンスケ。もう一回、森川に告白する気はないんか。」

「えっ、どついうことなんだよ。」

「惣流がな、森川と話をつけるって言うてんのか。駄目で元々で、試してみいや。」

「それは良い考えだね。そつしなよ。」

二人の後押しを受けて、ケンスケは再びユキにアタックすることに

した。

「ユキ！ちょっと話があるんだけど、良いかしら。」

アスカはユキを追いかけ、頃合いを見計らって話しかけた。

「ええ、良いですよ。」

ユキはにっこりした。

ユキはアスカに強く憧れているため、アスカと話をするのは大歓迎なのだ。

「実はね、朝の話を覚えている？」

「ええ。」

「あれはね、実は男共に言ったのよ。好きな女の子がいたら、アタツクしろってね。」

「そ、そうですね。」

心なしか、ユキの声は震えていた。

「そこでね、ユキにお願いがあるんだけど。」

まあ、万が一の話だけど、相田がユキに告白したら、断らないで欲しいのよ。」

「えっ、どういことですか。」

ついでさきほど、既に断ってしまっているユキの顔は、少し青ざめていた。

「実はね、今度の戦いで、相田はエヴァンゲリオンのパイロットとして戦う予定なのよ。」

あつ、これは軍事機密だから、絶対に誰にも言っては駄目よ。もちろん、ヒカリにもね。

朝にも言っただけど、今度の戦いは半端じゃないのよ。

だから、エヴァンゲリオンのパイロットには何の迷いも無く戦って欲しいのよ。

それが、女の子に振られて落ち込んで、

それが原因で負けましたなんていうことになったら、シャレにならないでしょ。

負けなくても、味方の死亡者がケタ違いに増える可能性もあるのよ。

だから、お願いね。」

「でも、私は嘘はつけません。」

ユキの声は少し震えていた。

死亡者がケタ違いに増えるという、アスカの言葉に驚いたためだろうか。

「嘘をつかなきゃいいのよ。」

アタシも、もしシンジに告白されたら、こう言っつもりなの。

『20歳になったら、アタシの全てを捧げるわ。それまで待ってね。』ってね。

もちろん、嘘にするつもりは無いわ。だって、そうじゃない。

エヴァンゲリオンのパイロットは、アタシ達のために、命懸けで戦

うのよ。

それくらいのことをしてあげても、バチは当たらないと思うのよ。」

アスカは、大まじめに大嘘をついたが、ユキにそんなことが分かる筈も無い。

ユキはハツとしたような顔をした。

「惣流さん……。ごめんなさい。私は、自分のことばかり考えていました。」

「でもね、相田のことが嫌いだったらいいのよ。

そんなことをする位だったら死ぬなんて言われても嫌だから。

でね、ユキの本音を聞きたいのよ。

ユキは、相田のことをどう思っているのよ。」

「まだ、自分でも良く分からないんです。

相田君は仲の良い友人で、嫌いじゃないですし、どちらかと言うと好きな方に入ると思います。

でも、私は妹達の生活の面倒も見なくてはならないんです。

だから、恋愛なんてまだ早いつて思っているんです。」

「そう。でも、妹さん達のことがあるなら、断らない方が良いわね。もし断ったために、相田が敵にやられて、妹さん達が巻き添えを食って死んだらどうするの？」

「一生後悔することになるわよ。」

「そ、そんな……。」

「それに、嫌いじゃないなら付き合いなさいよ。

あいつはネルフから給料をもらう身だから、生活に関しては心配す

る必要はないわ。

仮に今、相田と婚約すれば、アタシと同じマンションと一緒に住むことも出来るし、

金銭的にも何の問題もないわ。ユキの妹達の生活費や学費について心配する必要は全く無いのよ。

それに、もし相田と別れた場合は、アタシが生活費については責任持つから、心配しないでいいのよ。」

「そ、そんなことをしてもらわなくても良いです。」

「いえ、アタシがそうしたいの。」

それに、そこまでする必要があるのよ。敵に勝つためにはね。」

「…分かりました。相田君に告白されたら、断るのはやめます。」

それに、惣流さんの言う通り、相田君とおつきあいを試みることにします。

でも、もし別れることになったら、惣流さんにご迷惑がかかるんじゃないでしょうか。」

「ううん、そんなこと無いわよ。」

でもね、アイツは思った以上に良い奴よ。軍事オタクだから少し嫌だなあ、なんて思っていたけどね。

ここだけの話、ネルフは、相田に協力してもらって、敵の動向を掴んだのよ。

もし、相田にがいなかったら、ネルフは負けていたかもしれないのよ。

でも、アイツだったら、そんなこと一言も言わないでしょう。少し見直したのよねえ。」

「へえ、そうなんですか。」

「まっ、とにかくお願いね。
今月中だけでも相田にいい顔をしてもらえばいいからさ。お願いね、
ユキ。」

「はい、分かりました。」

こうして、二人は別れた。

「うまくいったわね、アスカ。」

物陰から、ヒカリが出てきた。一部始終を見ていたのである。

「まあ、このアタシにかかれば、これ位ちよろいわよ。」

「でも、あの相田君がエヴァンゲリオンのパイロットだなんて、知らなかったわ。」

「ごめんね、ヒカリ。一応、軍事機密だったから。」

「でも、良いの？そんなことを話しちゃって、アスカが罰を受けた
りしないの？」

「ばれなきゃいいのよ。」

「そりゃそうね。でも、軍事機密か。鈴原も教えてくれなかったわ。
そんなに大切な秘密なのかしら。」

「そうね。友情や愛情とは別物なのよ。例えば、ミサトと加持さんがそうよ。」

お互いに仕事上の機密を持っているけど、絶対に話したりしないわ。おそろく、結婚しても同じよ。」

機密というのは、それ位重要なことなのよ。」

「そうかあ。でも、ちょっと残念だわ。」

アスカと碓君が最近口をきかないのも、そういう秘密が関係しているのかしら。」

「ええ、そうよ。アイツも結構我慢しているわ。可哀相な位にね。でもね、人の命がかかっているからしょうがないのよ。」

「そうか、アスカも大変なのね。良く分からないけど、頑張ってるね。鈴原がアスカのことをとやかく言わないように、釘は打っておいたから。」

「うん、ありがと、ヒカリ。」

ゼーレとの戦いに決着がつけば、シンジとも元通りになると思うわ。それまでのことだから。」

アスカはそう言って、にっこり笑った。

一方、ネルフにおいても、マコトがリツコに告白していた。

「赤木さん。僕は、赤木さんのことが好きになってしまいました。どうか、おつきあいしてください。」

「こんなおばさんじゃなくて、もっと若い子の方が良いわよ。」

「そんなことは無いです。でも、それは、お断りの言葉と受け取った方がいんでしょうか。」

「違うわ。忠告よ。でも、少し考えさせて欲しいわね。」

あなたが良い人だっというのは分かっているわ。

アスカもシンジ君も、皆、あなたのことを誉めているしね。

でもね、私があなたに相応しいかどうか、分からないの。だから、もう少し時間が欲しいの。」

「ええ、良いですよ。僕は、いつまでも待ちます。」

「悪いわね。」

リツコはそう言うと、マコトに背を向けて歩き出した。

マコトは、しばらくリツコの背中を見ていたが、リツコの姿が見えなくなると、携帯電話をかけた。

「ああ、アスカちゃんかい。今、告白したけど、OKはもらえなかったよ。」

えっ、断られなければOKと同じだった？そうかなあ。

えっ、落ち込む必要は無いって？ああ、分かったよ。僕も男だ。少し位待たせよ。」

えっ、協力してくれるって。いつもありがとう。うん、じゃあまたね。」

マコトは電話が終わると、シゲルの所へ向かった。

「森川。ついさっき断られたばかりなのに、ずうずうしいって思っ
かもしれないけど、

僕はやっぱり森川のことが好きなんだ。だから、もう一度言いたい。
僕と付き合って欲しい。頼む。」

ケンスケは、放課後になって、再びユキに告白した。

「私のどこが良いんですか？」

「笑顔が可愛いところと、きょうだいの面倒見が良い所かな。」

「そうですか。私は、妹達の面倒を見なくてはならないんです。

だから、もし私と付き合っても、それが全てに優先されますけど、
それでも良いんですか。」

「ああ、もちろんさ。僕も一緒に手伝うよ。」

「そこまで言うのなら、分かりました。

こんな私で良かったら、お付き合いさせていただきます。」

「えっ、本当に良いの？」

ケンスケの顔が、目に見えて綻ぶ。

「ええ、でも、条件がもう一つあります。

私とのお付き合いが、惣流さんに迷惑がかからないようにして欲し
いんです。

例えば、惣流さんに何か頼まれたとして、私との約束を優先して、
惣流さんの頼みを断ったりするようなことはしないで、惣流さんに

協力して欲しいんです。」

「ああ、分かった。約束するよ。」

「それでは、これからよろしくお願いします。」

「ああ、よろしく。」

かくして、ついにケンスケに春が来たのである。

第49話 告白（後書き）

アスカとシンジ、ヒカリとトウジ、さてケンスケの相手はと考えると、レイやマナでは、ちょっと……。結果的にユキになりました。

えっ、山岸さん？私は彼女のことを良く知らないので、止めました。

さて、大人の方もリツコとマコトの組み合わせになりそうです。

リツコとゲンドウという組み合わせをしないために、リツコには記憶喪失になってもらったようなものなのです。

あと、ご都合主義で、この話の中では、リツコは綺麗な体ということになります。だって、そういうシーンは、ミサトと違って無かったので、ゲンドウとの仲は精神的なものだったということにしました。これで、マコトも少しは救われるでしょう。

第49話補完 余波

「マヤ、ちょっといいかしら。」

ネルフ内において、珍しくリツコがマヤを呼び出した。

「はい、先輩。なんででしょうか。」

「これから、かなり忙しくなるわよ。覚悟して。」

「えっ、どうしたんですか。」

「急に予算が認められたのよ。」

新型エントリープラグに、新型兵器、その他諸々の開発についての予算がね。」

「ええっ、それって、物凄い金額になるんじゃない。」

「ええ、そうよ。でも、認められたからには、やるしかないわね。」

「そ、そうですね。頑張ります。」

「そこで相談なんだけど、アスカには新型エントリープラグの開発をやってもらおうと思っているの。」

何と言っても、元パイロットだしね。そこで、マヤには新型兵器の開発をして欲しいのよ。」

「へ、兵器の開発ですか。」

「ええ、そうよ。でも、これには作戦部と共同で開発する方が良いわ。」

作戦部が使えない兵器を作ってもしょうがないしね。

そこで、青葉君と組んで、兵器の開発をして欲しいのよ。良いわね、マヤ。期待してるわよ。」

「はい、先輩。」

これがシゲルに頼まれたアスカの差し金とも知らず、リッコの期待に沿うべく、マヤは張り切った。

こうして、マヤは巧妙に、シゲルと急接近させられることになるのである。

「ええっ、奨学金を受けられるんですか？」

中学校では、ユキがミサトに職員室に呼び出され、

大学を卒業するまで奨学金を受けられるという話を聞かされて、大喜びだった。

対象者は、使徒が現れてから孤児となった子供全員だそうだ。

学費と学業に要する費用全額と、生活費及び家賃の補助が受けられるのだ。

申請すれば、住居のあっせんまでしてくれるというのだ。まさに至れり尽くせりの制度だった。

ユキは、住居は既に確保しているため、学費等と生活費が支給される。

それも、3人分であるため、一気に家計が楽になるのだ。

支給される金額を念のため確認してみたが、中流家庭並みの生活が出来る位の十分な額だった。

もう、家計を必要以上に切り詰めなくて良いのだ。

これで大学を卒業するまでは、生活費の心配をする必要もない。お洒落も人並みに出来るだろう。ユキにとっては、それが一番嬉しかった。

「ミサト先生。私は働いているんですが、大丈夫なんでしょうか。」

ユキは、ふと心配になって尋ねたが、ミサトは首を縦に振った。

「もち、大丈夫よ。働いた分を減額されることはないわよん。

全部自分のために使いなさい。お洒落に使っても良いわよん。」

「でも、一体どうして急に。」

ユキは疑問に思ったが、ミサトからは答は返って来なかった。

実は、これもアスカの発案なのだが、ミサトは言わないことにしていた。

ユキが負担に思つかもしいれないと考えたからである。

アスカは、後々のことも考えて、新たな財団を設立した。

そこにネルフ職員の殉職者の遺族に働いてもらうことにした。

そして、この第3新東京市で親を亡くした子供が、奨学金を受け取れるようにしたのである。

こうしておけば、仮に将来ネルフが解体されたりしても、奨学金制度自体は存続するし、遺族の職場も安泰なのだ。資金はネルフから支出した。

その資金を運用して、その運用益で事業を継続するのだ。

セカンドインパクト以前と違い、今の世界の利息は割合高い。
このため、20億円の基金でも、年間1億円の運用益を生み出すこ
とが可能だった。

それだけあれば、職員数人分の人件費と、

一人当たり年間200万円の奨学金が40人分確保出来るのである。
もし、それで足りなかったら、基金を増額すれば良い。

遺族の職場には、他にも株式会社や社会福祉法人を充てる予定もあ
った。

これらの出来事は、全て『the sleeping thief
operation』成功の余波だった。

ネルフが巨額の資金を確保したことによって、大きな歯車が回り始
めたのだった。

第49話補完 余波（後書き）

アスカは、ユキが素直にお金を受け取るために、奨学金制度を創設しました。これで、ユキはケンスケとのデートに着ていく服が増えるでしょう。

第50話 作戦会議

（うわあ、凄いメンバーだな。）

シンジはため息をつきそうになった。

ちよつと広いこの会議室には、ネルフの幹部や中心メンバーが揃っていた。

碓ゲンドウ司令、冬月副司令、葛城作戦部長、赤木技術部長、マリス広報部長、真田保安部長、日向作戦部長代行、伊吹技術部長代行、加持諜報部長代行である。

これに加えて、ジャツジマン、ウォルフ、ブルー、バレス、レッドウルフ、エリック大尉、エドモン中尉、カルロス中尉、リッツ大尉、グエン中尉ら傭兵部隊の代表者が集まっている。

ちなみに、ウォルフはドイツの傭兵部隊であるワイルドウルフの隊長で、マリアの父。

ブルーはウォルフの部下でラブリーエンジェルの隊長。

バレスはフランスの傭兵部隊ヴァンティアンの隊長でハウレーンの父。レッドウルフはアメリカの傭兵部隊レッドアタッカーズの隊長である。

さらに、エヴァンゲリオン部隊の正規パイロットであるトウジとカヲルに加えて、予備役パイロットであるミリア、マリア、ミンメイ、サーシャら、さらにはケンスケもオブザーバーとして参加していた。オブザーバーと言っても、ミリア達はお茶汲み要員の色彩が濃かったが。

なお、シンジは、作戦部Sチーム（作戦立案、戦況分析）のサブチ

ーフとして、アスカは作戦部Tチ・ム（通信、情報分析担当）のサブチーフとしての参加である。

「さあて、みなさん揃ったようですね。」

全員が揃うと、おもむろにアスカは周りを見渡しながら言った。

「では、みなさんにお集まりいただいたようなので、早速ですが、作戦会議を開きます。

司会は、作戦部Tチ・ムのサブチーフである、わたくし、惣流・アスカ・ラングレーがいたします。

最初に現在の状況を簡単にご説明いたします。」

アスカは軽く咳払いをすると、言葉が続けた。

「先日の『the phoenix operation』と『the sleeping thief operation』にご協力頂き、ありがとうございました。作戦は無事終了し、多大なる成果を上げる事が出来ました。

『the phoenix operation』の成功によって、ゼーレ幹部の情報収集と、ゼーレの実態解明が大幅に進み、ゼーレ関係者の切り崩し工作が順調に進みました。この結果、事実を知らないまま参戦しようとしていた国の部隊を中心に、撤退や足止めが相次ぎました。

その結果、敵と思われる戦力の半分以上の撤退、若しくは足止めに成功しました。

作戦開始当初に把握していた敵戦力は、原子力潜水艦が20艦、通常型潜水艦が50艦、空母が20隻、各種艦艇が300隻、戦闘機

1000機以上、爆撃機50機以上でした。

ですが、現在もこの日本に向かっていている戦力、及び向かって来ると予想される敵戦力は、原子力潜水艦が10艦、通常型潜水艦が10艦、空母が5隻、各種艦艇が100隻、戦闘機300機以上、爆撃機20機以上です。概ね、作戦開始前の半分以下になりました。」

そこまで言うと、アスカは再び辺りを見回した。実は、この数字はやや多めの数字なのである。

このため、予想通り、各傭兵部隊の代表者達は厳しい顔をしている。ジャツジマンとレッドウルフは例外であったが、おそらく、エヴァの力量を知っているためであろう。

サグという組織は、他の傭兵部隊と違って、エヴァンゲリオンには詳しいようである。

「次に、『the sleeping thief operation』の成功によって、

巧妙に隠されていた敵の資産の多くを凍結せしめました。

また、その一部を接収することにも成功しました。

これによって、ゼーレの資金力は大幅に低下した筈です。

逆に、我々の資金力は大幅に強化されました。

先日、皆さんにお渡しした資金は、この中から出ています。

特に、傭兵部隊の皆様方には、成功報酬ということで、

手付金すらお渡ししていなかった所もありましたが、

これで我々も雇い主としての義務を果たす事が出来ました。」

この話を聞いて、ネルフ側がほぼ例外無く全員驚きを露にしていた。ネルフ側にしても、ゲンドウですらその事実を知らなかったのだから無理もない。

ゲンドウと冬月は、アスカの個人資産から報酬を払っていると思っ

込んでいたし、

それ以外の幹部は、それすらも知らなかったのである。

特に、加持などはぶったまげていた。

金を払わぬ雇い主ほど危険なものは無いと知っていたからである。

傭兵部隊の方も、手付金すらもらっていないかった

ジャツジマン、ウォルフ、バレス、レッドウルフ以外の者達が、顔を見合わせていた。

ネルフの資金力が乏しい事を知らなかったのであろう。

だが、アスカは、みんなの反応が収まると、素知らぬ顔をして話を続けた。

思った通り、ゲンドウと冬月は驚いた様子を皆に気付かせるようなことは無かったからだ。

こういう時は、ポーカークフェイスが出来る上司ありがたい。

「両作戦の成功によって、我がネルフはゼーレに対して、大きなアドバンテージを得ることが出来ました。

特に、一般市民の多くを味方に付けたことは、今後の作戦にとって、大きなプラスとなることでしょう。

ですが、これからが正念場になります。

おそらく、焦ったゼーレは、近い内に総力を挙げて攻めて来るでしょう。

これを撃退出来れば、我々の勝利となる訳です。

その作戦を練るために、皆様方にお集まり頂きました。

作戦の素案は出来上がっていますが、疑問点や問題点がありましたら、ご意見を言って頂ければと思います。

それでは、葛城作戦部長、お願いします。」

アスカはそう言いつつ、ミサトの方を見た。
ミサトは、アスカの言葉を受けて、説明を始めた。

「作戦部長の葛城です。お手許の資料に目を通して下さい……。」
それを皮切りに、ミサトは作戦案の説明をした。

「まず、基本的な戦略について説明します。

エヴァンゲリオン9機は、3部隊に分けて、ここを中心とする三角
形の頂点に配置します。

真北、東南東、西南西です。

以前、空から落ちてきた使徒を迎え撃った時に3機のエヴァを配置
したことがありますが、
基本的には、その位置の近辺に配置します。

そして、1機は砲手として、ポジトロンライフルなどによって、空
からの敵を狙撃します。

主な任務は戦闘機及び爆撃機の撃墜となります。必要に応じてミサ
イルの迎撃も行います。

そして、1機は地上戦を担当します。

地上部隊の侵攻を防ぐため、ライフルなどの弾数の多い武器で応戦
します。

想定される敵は、戦車部隊と降下兵、海兵隊などです。
必要に応じて、戦闘機の迎撃なども行います。

最後の1機は、防御を担当します。

ATフィールドを張って、敵の放ったミサイルを迎撃します。

先日もSLBMを迎撃したところであり、成果は十分期待出来る

考えます。

なお、戦況に応じて、役割分担は随時変更します。
ここまでで、何か質問はありますか。」

ミサトが周囲を見渡したが、特に質問は出なかった。

「では、次にエヴァンゲリオンの支援体制を説明します。

先の戦自の侵攻からあまり時間が経っていないため、

各種支援兵器や兵装ビルの稼働状況は、殆どゼロだと思って下さい。
ですが、様々なルートから各種兵器を手に入れることが出来ました。

攻撃用ヘリが30機、戦車が30両、特殊装甲車が90両、携帯式
ミサイルが900基、

他にも各種兵器を購入していますが、それは後のお楽しみというこ
とで。

傭兵部隊の皆さんは、基本的にはエヴァの後方で待機して頂き、

エヴァが敵の航空戦力を無力化した後で、エヴァと協力して敵の陸
上兵力を叩きます。」

ミサトは、そこまで言うとなスカをチラリと見た。アスカは、それ
を見て口を開いた。

「以上が基本的な戦略です。

全体の指揮は、葛城作戦部長が執りますが、重要なパートには、そ
れぞれ指揮官が置かれます。

エヴァンゲリオンの現場指揮は碓二尉が、

エヴァンゲリオン部隊全体の指揮はわたくしが、

エヴァンゲリオンと連携するための兵器の運用は、日向作戦部長代
行が行います。」

傭兵部隊の皆さんの現場指揮はジャッジマン大尉、傭兵部隊全体の指揮は、加持一尉が行います。

それでは、皆さんの配置については、加持一尉から説明します。」

アスカは加持に目で合図をし、加持は続けて説明した。

「諜報部長代行の加持一尉だ。今回も傭兵部隊の指揮を執らせてもらおう。

前回のゼーレの特殊部隊侵攻時には、傭兵部隊を市内4方面に配置したが、

今回はエヴァンゲリオンの配置に合わせることになる。

最初に敵の主力が押し寄せて来ると思われる東南東方面だが、ワイルドウルフ2個中隊とカルロス中尉ら100人をお願いしたい。

次に、西南西だが、

レッドアタッカーズ1個中隊とリッツ大尉ら200人、エドモン中尉ら100人をお願いしたい。

北はレインボースター1個中隊、ヴァンテアン1個中隊、グエン中尉ら100人とをお願いしたい。

市内中心部にレッドアタッカーズ1個中隊、ジャッジマンの部隊1個中隊が待機する。

以上の通りだ。何か質問があれば、聞いて欲しい。」

すると、フランスの傭兵部隊、ヴァンテアンの隊長であるバレスが手を挙げた。

「エヴァンゲリオン部隊の配置を教えてください。」

すかさず、アスカがこれに答えた。

「それには、わたくしが答えます。

敵主力が来る可能性が高い東南東には、碓二尉、ミンメイ一曹、マリヤー曹の3名。

西南西には、渚三尉、ミリアー曹、アリオス一曹の3名、

北には鈴原三尉、相田一曹、サーシャ一曹の3名が配置される予定です。」

「そうか。実は、是非お願いしたいことがあってな。

ハウレーンをエヴァンゲリオン部隊に加えて欲しいのだ。

怪我については、もう治っている。

無理にとは言わないが、是非検討していただきたい。

出来れば北が良いのだが。」

「分かりました。ハウレーンさんの回復状況などを調べてから検討します。」

これもアスカは即答した。この話はアスカにとっては願ってもないことであった。

北の方には敵が来ない可能性が高いとはいえ、万ーのことを考える
と、

トウジ、ケンスケ、サーシャの3人組では心もとないのだ。

その後、各傭兵隊長から様々な質問や要望が飛び出した。

兵器についての要望が多かったが、この作戦自体の変更を求める声は無かった。

これによって、今回の作戦が、幾多の実戦をくぐり抜けてきた傭兵部隊から、

一応及第点をもらえたと言えよう。

こうして、この日の作戦会議は、長い時間をかけて終わった。

「ハウレーン、落ち着いてね。」

作戦会議の後、早速技術部はハウレーンのシンクロ率を計測した。いくら怪我が回復しても、シンクロ率が低くては、話にならないからだ。

だが、結果は良好だった。30%近いシンクロ率だったのだ。

これは、マリア達よりも少し高く、ケンスケらに並ぼうというものだったからだ。

「碓二尉、ハウレーンの代わりに誰を予備に回した方が良いと思う？」

アスカは、シンジの意見を求めてきた。シンジは少し考えた後、こう答えた。

「そうだね、ヴァンテアンとの連携を考えて、

サーシャさんの代わりにハウレーンさんに入ってもらって、

サーシャさんはアリオス君と交代して、

アリオス君が予備に回れば良いと思うよ。」

「そうね、それで行きましようか。」

アスカは同意した。

そう、アリオスのシンクロ率は、起動指数をやや上回った程度で、

サーシャよりも低いのだ。

一応、シンジは皆のシンクロ率を覚えていたのだ。

こうして、ネルフの迎撃体制は着々と進んでいった。後には、兵器の購入や搬入のスピード次第であった。

第50話補完 余波その2

「碇よ、アスカ君にはしてやられたな。」

「ああ。」

「しかし、ワイルドウルフの隊長は知り合いだからともかくとして、レッドアタッカーズ、ヴァンテアンの大きな傭兵部隊に一銭も金を払っていないかったとは、恐れ入ったよ。

てつきりアスカ君の個人資産から払っていると思っていたのだがな。加持君の予想も外れていたということか。」

実は、以前ネルフから傭兵部隊に金が渡っていないことが話題に上った時があつて、

その時、加持がアスカの個人資産から払っているのではないかと言っていたのだ。

「怪しい動きをしていたが、それもこれもゼーレの資金をかすめ取るためだったとはな。」

しかし、我々にも秘密にするとはい、徹底しているな。」

「だが、シンジはある程度聞いていたようですよ。」

「シンジ君がかね。そんな素振りは見せていなかったがな。」

だが、それはともかく、計画が成功しなかったらどうするつもりだったのかな。」

「おそらく、その時は負けた時だと思つていたんでしょう。」

「失敗したら、命は無いということか。アスカ君らしいと言えばそれまでだが。」

しかし、300兆円もの資金をゼーレからかすめ取るとは、並大抵の事ではない。良く成功したな。

それに、これだけの資金が無くなったとすると、ゼーレの力もかなり落ちたと見て良いだろう。

この勝負、勝ったな。」

「そうですね。」

「日本政府の方は、今回は敵に回らないように手を打った。

アスカ君がかすめ取ったお金も使わせてもらったよ。」

ワイロになるとまずいので、戦自の兵器を買い上げるといふ形で金を渡したよ。」

その兵器の中には、例のアレもある。」

「ふっ、アレですか。」

「ああ、使い物になるのかどうか分からんが、アスカ君がもらえるものはもらってくれと言うのでな。」

まあ、政府に金を渡すのが目的だったから、使えなくても構わんと思うが。」

かなり金額は張ったが、その余波ともいうべきか、北の方は戦自である程度カバーしてもらえることになったよ。」

「ほう、戦自も良くその気になりましたね。」

ゲンドウは顔に僅かに喜びを現していた。

北方面は、トウジ達が担当するのだが、結果として守りが最も弱かったのだ。

だから、ある程度戦いでカバーしてもらうのは、非常にありがたいのだ。

「何でも、あの映画も一役買っているらしい。」

あの映画の中に、一部若手幹部がネルフ侵攻に反対し、サボタージュをした場面があったが、

おかげで、戦いの面目が立ったということらしい。

それに、アスカ君を守ろうという意見を持つ者が多かったということもあるらしいがな。」

「あの映画には、幾つもの意味があったということか。」

「ああ、アスカ君には頭が下がるよ。」

彼女をエヴァのパイロットとして使えなくなったのは痛い、それ以外の分野での彼女の活躍には目を見張るものがある。

もし、彼女がエヴァに乗れたとしても、パイロットとして使うかどうかは分からんな。

それにしても、これだけの作戦を彼女一人で考えついたというのは、考えられないな。

やはり、ユイ君の素案がベースというのは本当らしいな。」

「ええ、そうですね。」

「だが、唯一引つかかるのが、開発者コードか。あれだけは疑わしいな。」

アスカ君は、まだ我々に秘密を持っているのか。それとも、我々の想像を超える何かがあるということか。

いずれ分かることとは思うが。」

「今はそれでいいでしょう。」

こうして、ゲンドウと冬月は話に一区切りつけて、次の話題へと移っていった。

「マナちゃん、元気かい。」

「あつ、加持さん。お久しぶりです。その節はありがとうございました。」

マナは、急な電話に驚きながらも、礼を言つのを忘れない。

「どうだい、調子は。」

「ええ、もうこの町にも慣れてきました。お友達もたくさん出来ましたし。」

「そうか、ならいい。先日のテレビは見たかい。」

「ええ、見ました。そちらも大変ですね。シンジ君は大丈夫なんでしょうか。」

「ああ、大丈夫だ。」

「惣流さんとも仲が良いんでしょうか。」

「ああ、そうだ。」

「もう一度でいいから、シンジ君に会いたいんですが、駄目なんですか。」

「その件と関連があるんだが、重要な話がある。」

戦自と話がついて、君とケイタ君の安全は保証されることになった。遠くない内に、晴れてマナちゃんは、ご家族と一緒に住むことが出来るようになる。」

「本当ですかっ！」

「ああ、本当だ。だが、ネルフがゼーレに勝ってからという前提があるがね。」

「ケイタとも会えるんですか。今すぐにも会いたいです。」

「残念ながら、ケイタ君は訳があつて、自由の身にはならない。」

「な、何故なんですか。」

「今は言えない。だが、ゼーレとの戦いが終われば会えるようになる。約束するよ。」

「間違い無いですね。」

「ああ、そうだ。」

「シンジ君とも会えるんでしょうか。」

「本音を言うと、会ってほしくない。アスカが焼き餅を焼くからな。」

それに、シンジ君はアスカ以外の女の子は眼中にない。

マナちゃんも、シンジ君に会っても傷つくだけかもしれない。

それでもいいという覚悟があるのなら、昔の知り合いとして会うだけだというのがなら会えば良い。

俺にそれを止める権利はない。いずれにせよ、今月中は無理だ。ゆっくりと考えてくれ。」

「はい、分かりました。」

「では、準備が出来たら連絡するよ。それじゃあな。」

「はい、よろしくお願いします。」

そこで電話は途切れた。マナは、少しだけ笑顔を綻ばせた。

これも、アスカがかすめ取ったお金が、周り回って与えた余波だった。

第50話補完 余波その2（後書き）

マナちゃんがやっと登場しました。でも、これだけで終わるかも。少なくとも、第3部では、もう出て来ないと思います。

第51話 決戦！第3新東京市

「おい、ケンスケ。森川とはどうなってるんや。」

トウジは、ケンスケを問い質した。

今日は3月18日の金曜日で、つい先程卒業式が終わり、シンジ達は教室に戻ったところである。

ちなみに、アスカ達の姿はまだ見えない。

「そ、そんなこと言われたって、まだ付き合っつのをOKされてから、4日しか経っていないんだぜ。それに、学校の後は訓練三昧だし、メールの交換をする位しか出来ないさ。」

「そう言われりゃ、そうやなあ。」

トウジも、勢い込んで聞いてみたものの、よくよく考えてみれば、最近のケンスケはトウジやシンジと朝から晩まで一緒にいるのだ。ユキとゆっくり会っている時間など無い事は、よく考えれば分かる筈なのだ。

もつとも、朝はユキとケンスケとで朝食を作っているし、話す時間が全く無い訳ではないのだが、シンジやケンスケらは、夕食は以前と違ってネルフの食堂で食べるのが常となっており、一緒に過ごす時間は減っているのも事実である。

トウジも状況は似ており、ヒカリとは朝食を共にするけれども、学校で別れたら翌朝まで会えない状況が続いている。

したがって、ネルフに入れないヒカリとユキは、一緒に夕食を摂っているのだ。

ケンスケは苦笑しながらも、言葉が続けた。

「全ては、戦いに勝ってからさ。だから、俺は全力を尽くすよ。俺が手を抜いたせいで、森川が死んだり、大怪我をしたりしたら、一生後悔するものな。」

でも、シンジは凄いよ。

今までは、エヴァのパイロットって、格好良いもんだと思っていたけれど、とんでもない。

自分の肩にかかる責任の重さっていうのが、痛いほど感じられて、格好良いなんて気持ちなんてどっかに行っちゃったよ。

シンジは敵と戦っただけでなく、こんな責任まで背負いこんでいたんだな。」

それでいて、そんなことは微塵も感じさせなかった。

俺とシンジは根本的に違うって、良く分かったよ。」

「ケンスケ、それは僕のことを買いかぶりすぎだよ。」

「いや、そうじゃない。」

お前は自分でも分かっているように、とても強い心を持っているんだ。」

「なに言ってるのさ。僕はとても弱いんだよ。」

何かあると直ぐに逃げ出すような人間なんだよ。」

だが、トウジが反論した。

「いや、そんなことはあらへん。」

シンジが弱い奴やったら、ワイらは生きていないんや。

ワイには分かる。最初にエヴァに乗った時、ワイはごっつう怖かつ

たんや。

多分、小便どころか、大きい方もちびつたかもしれへん。同じエヴァに攻撃されて、生命が縮まる思いやった。でも、思ったんや。

シンジは、いつももつと訳の分からん、エヴァよりももつと怖い敵と戦って来たやないか。

こりゃあ、ワイには真似が出来へんてな。

シンジが逃げへんで、踏みとどまって戦ってきたから、ワイらが無事だったって、分かったんや。」

「ト、トウジも何だよ。」

「どうやら、トウジも同じ意見みたいだな。

でもな、シンジ。こういうことは、素直に認めた方がいいぞ。

そうじゃないと、俺達が腰抜けみたいじゃないか。」

「あつ。ご、ごめん。」

(そうか、アスカが前に言っていたっけ。

『意味も無く自分を責めないで。』とか

『誰かが傷つくかもしれないっていうことを良く考えてから言っ
』って。

僕はまだまだアスカには及ばないのか。(

シンジは少し俯いた。

「おいおい、何で謝るんだよ。」

「ごめん、僕は何て言っているのか、分からなくて。」

それを聞いて、ケンスケは呆れたように言った。

「近くに良いお手本があるじゃないか。
惣流みたいに、『アタシにまっかせなさい。』
なんていう風に、陽気に言ってくれば良いんだよ。」

「そ、そういうものかな。」

「そういうもんだ。」

「分かったよ。じゃあ、言うよ。アタシにまっかせなさい！」

「ぷっ。お前、天然だったんだな。」

「あははははっ。シンジには、まだ無理か。」

「な、なんだよ。言えって言ったのはそっちじゃないか。
それなのに笑うなんて酷いよ、もう。」

そう言っでむくれるシンジをよそに、ケンスケとトウジは暫くの間、
笑い続けた。

「ねえ、シンジ君。今日は一緒に行きましょう。たまには良いでしょっ。」

いつもと同じように、ケンスケやトウジと一緒にネルフへ行こうと
していたシンジを、
ミサトが呼び止めた。

「ええ、良いですよ。」

シンジはトウジやケンスケも一緒だと思っていたが、そうではなかった。

ミサトの話によると、リッコも一緒だと言っただ。

それでは一人が余るので、トウジとケンスケはそこで別れた。

「さあ、行くわよ。」

ミサトが言った瞬間、携帯電話が鳴った。

「ちっ、緊急事態ね。飛ばすわよ。」

それを聞いて、自分の不幸を呪うシンジであったが、悪い事ばかりでは無かった。

「あっ、アスカがいたわ。一緒に乗っけて行くわよ。」

ミサトの声に、シンジの顔が一瞬綻んだ。

こうして、ミサトはアスカも乗せて、ネルフへと向かった。

「リッコ、状況はどうなっているの?」

「分からないわ。今調べているところよ。」

アスカは、ルノーに乗るなり、リッコに状況を聞いてきたが、

リッコも何ら情報を掴んでいないので答えようが無かった。だが、リッコは懸命に携帯端末を叩いて、少しでも情報を得ようとしていた。

「あつ、分かったわ。どうやら敵の先陣がやって来たみたいね。」

「数はどれ位なの？方角は？距離は？」

「そうね、今の所は大した数ではないわ。空母が2にその他の艦艇が30といったところかしら。」

でも、どんどん数が増えてきているみたいね。方角は、東と南よ。距離はまだかなり離れているわ。

アスカの言う通り、有人索敵網を張りめぐらしておいて、大正解だったわね。

レーダーでは、まだ敵を把握出来ていないわよ。

敵さんは、かなりステルス性能の高い装置を持っているようね。」

実は、アスカの発案で、敵がステルス性の高い兵器で攻撃してきたも見逃さないように、

有人索敵網を構築していたのだ。

それが、今回は大当たりだったという訳だ。

もし、敵の発見が遅ければ、奇襲を受けてしまう。

最初の攻撃で最大火力を投入されたら、それだけで全滅ということがあり得るのだ。

無論、エヴァが発進する前に攻撃を受けたら、ひとたまりもないだろう。

「そう、やっぱりね。そうになると、違う方角から、陽動部隊が出てくるわね。」

「そうね。間違いないでしょうね。戦自には注意を呼びかけておくわ。」

「ええ、お願いね。今日は長い1日になりそうね。そうだ、シンジ。ネルフに着いたら、速攻でエヴァに乗る準備をするのよ。早ければ早いほどいいわ。」

そこまで言うと、アスカはシンジの耳に口を近づけた。そして、小声でこう言った。

「シンジ、絶対に攻撃をためらったら駄目よ。」

もし、攻撃するかどうか迷ったら、アタシの死体を思い浮かべて。アンタが敵への攻撃をためらったら、それが現実になるのよ。

良いわね。敵の死体とアタシの死体、選ぶのはシンジよ。これだけは忘れないでね。」

「そ、そんな……。」

シンジは絶句した。だが、アスカは諭すように言った。

「良い、シンジ？これは殺し合いなのよ。」

いくらこちらが白旗を掲げても、アタシ達が生かされることは無いわ。

非情だけど、これは生きるか死ぬかの戦いのよ。

もし、シンジが口先だけでなく、本当にアタシのことを好きなら、アタシを守るために力のかぎり戦ってよ。

悔しいけど、今のアタシはシンジに頼るしかないの。

それに、アタシは意気地なしは嫌いだから、そうじゃないことを証明して。

出来る事なら、アタシがシンジの代わりに戦って敵を倒したい。でもね、そうするとアタシの命は間違いなく失われるわ。アタシはまだ死にたくないの。だから、シンジ、お願い。世界のために戦ってとか、みんなのために戦ってなんて言わない。アタシのために、アタシの命を救うために戦って……。」

アスカはそこまで言うと、シンジの手を固く握り、シンジの目を見た。シンジもアスカの目を見つめ返した。

「分かったよ。僕は、命懸けで戦う。アスカを守るために……。」シンジは既に、何でアスカがエヴァに乗れないのか、何で乗ったら死ぬのかを聞いていたのだ。だから、その言葉は本心から出たものだった。

シンジもアスカの手を固く握った。アスカは、そんなシンジをちよっぴりだけど、頼もしく思うのだった。と同時に、女の子として、嬉しくも思っていたのだが、シンジがそれに気付くことはなかった。

ネルフに着くと、一行はそれぞれ別れた。アスカはアスカルームに、シンジは更衣室に、ミサトとリツコは発令所である。シンジは更衣室の中で手早く着替え、着替え終わると、ケージへとすっ飛んで行った。

シンジがケージに到着して5分経って、パイロットが全員集合した。と言っても、ケージで集合する訳ではなく、エントリープラグに全員搭乗している。

シンジは、無線で全員に作戦についての基本的事項を再度説明した。

これには、いつ出撃するか分からないパイロット達の精神的疲労を防ぐ目的もあった。

とりあえずシンジの話を聞いていれば、余計な事を考えないだろうとのアスカの発案だったのだ。

無論、それ以外にも、現在の敵の動向を伝え、それに沿った作戦を実行するためでもあったのだが。

そして、パイロット達は、出撃の時間を前に特に緊張することなくシンジの話を聞いていたのである。

そこへ、アスカから全機緊急発進の命令があった。

「みんな、いくよっ！」

シンジの掛け声と共に、エヴァンゲリオン全機が発進した。

シンジが更衣室に着いた頃、アスカはアスカルームに到着した。

「お待たせ！」

アスカルームには先客がいた。アールコートである。

彼女はシンクロ率が起動指数に達しないため、パイロットからは外されていたのだ。

マックス、アリオス、キャシーらは別の任務に就くことになった。
特に得意なものがないアールコートは、アスカの手伝いをする事
になったのだ。

「こんにちは、惣流さん。」

「どう、状況は？」

「はい、今スクリーンに映します。」

アールコートの声と共に、正面に据えつけられた100インチのプ
ラズマディスプレイに、
日本地図と敵戦力の配置が映った。

敵戦力は、3方面からやって来ている。
北東から空母2にその他25隻の艦隊、
東からは空母1にその他15隻の艦隊、
南西からは空母2にその他20隻の艦隊だ。

「ふうん、思ったよりも多いじゃない。」

アスカは唇を噛んだ。それは、空母の数が多いからだ。た。
事実上、空母以外の戦力は、ネルフにとって脅威ではない。
近寄ってくる前に叩いてしまえば良いからだ。
だが、空母はそうはいかない。こちらの射程外から航空兵力を発進
させて来るからだ。

一応、空母に対する備えはあるが、相手に通じるかどうかは分ら
ないのだ。

しかも、まだ発見出来ない潜水艦の脅威も残っているし、爆撃機からの攻撃もあり得るのだ。

「まあ、いいわ。やってやるうじゃないの。」

アスカは不敵に微笑んだ。

「日本海側から、SLBMが発射されましたっ！」

「数は20っ！高速で接近してきますっ！」

発令所は、喧騒に包まれていた。予想外の攻撃が北側からあったからだ。

ミサトはすぐにアスカと連絡を取った。

「アスカ！日本海側から、SLBMが発射されたわっ！これから戦自に迎撃を要請するわねっ！」

だが、アスカの答はNOだった。

「待つて。戦自には、やり過ごすように要請して。」

「な、何ですって。」

「いいから、お願い。戦自には、戦力を温存してもらわないといけないのよ。」

その代わり、エヴァを全機発進させるわ。」

「分かったわ。任せたからねっ。」

こうして、最初の敵の攻撃は、その殆どが無傷で第3新東京市へと向かってきた。

だが、ミサトも言葉と裏腹に、全てを任せてはいなかった。

万一のことを想定し、マコトに迎撃準備を命令した。

この命令は結局無駄になるのだが、責任者としては、当然の処置であった。

地上に出たエヴァは、3機1組となって、それぞれの配置場所へ集まった。

いずれも小高い丘や山の上である。

第1小队ミンメイ、第2小队サーシャ、第3小队ケンスケがそれぞれポジトロンライフルを持って、砲手となった。

各小队にポジトロンライフルは2丁配備されているが、1丁は遠距離狙撃用、もう1丁が近距離攻撃用だった。

遠距離攻撃用のは砲手が担当し、近距離攻撃用のは、地上戦担当の者が使うのだ。

「みんな、落ちついて撃ってほしい。

難しい事は、コンピュータが全部やってくれるから、心配しなくても良いよ。」

僕だって、最初の1発目こそ外したけど、2発目は命中したものだから、きつと大丈夫だよ。」

「おい、シンジ。1発目は外したのか。」

ケンスケは心配そうな声で尋ねたが、シンジは笑って言った。

「だって、しょうがないよ。相手から攻撃してきたんだもん。でも、今回はそういうことは無いから、心配しなくて良いよ。」

「な、何だ。それを早く言ってくれよ。」

ケンスケのため息に、他のパイロット達から笑いが漏れる。だが、その笑いも長くは続かない。

アスカから、攻撃開始命令があったからだ。

「本当かよっ。ミサイルなんて、影も形も見えないぜ。」

ケンスケの呟きに、ミンメイが応えた。

「見えてからじゃあ、遅いんですよ。大丈夫です。コンピュータを信じましょう。」

「ああ、分かったよ。」

ケンスケは苦笑しながら答えた。

本来は、高速で動く物体を撃つというのは至難の技なのだが、そこはMAGIの力をもってサポートすれば、決して難しいことではなかった。

だが、ミンメイやサーシャと違って、ケンスケはそこまでの信頼をコンピュータに期待していなかったのだ。

「サーシャ、撃ちます。」

ケンスケとミンメイが会話をしていた僅かな間に、サーシャが第一撃をSLBM（潜水艦発射弾道ミサイル）に放っていた。

元々、ポジトロンライフルは、衛星軌道上の敵を狙撃出来るほど射程距離が長い。

従って、遙か遠くでSLBMの爆発するのが見えた。

「よし、俺もやるぞ。」

ケンスケとミンメイもサーシャに倣い、次々とライフルを撃った。こうして、ゼーレの攻撃第1陣は、あっけなく防ぐことが出来たのである。

第51話 決戦！第3新東京市（後書き）

ネルフの迎撃体制について

発令所

- ・ゲンドウ、冬月、リツコ、マヤ、シゲル
- ・ミサト：全体の指揮（名目）
- ・マコト：兵器の運用
- ・加持：傭兵部隊の指揮

アスカルーム

- ・アスカ：エヴァンゲリオン部隊の指揮、全体の指揮（実質）
- ・アールコート

エヴァンゲリオン部隊

- ・シンジ：現場指揮官、第1小隊長
- ・ミンメイ、マリア：第1小隊
- ・カヲル、ミリア、サーシャ：第2小隊
- ・トウジ、ケンスケ、ハウレーン：第3小隊

第52話 決戦！第3新東京市その2

「全ミサイルを撃ち落としましたっ！」

「おおっ！」

「やったあっ！」

発令所は、喜びと安堵で満ちあふれた。

ゼーレの攻撃の第一弾である、SLBM（潜水艦発射弾道ミサイル）をエヴァだけで迎撃に成功したのだから、無理もない。

これで、エヴァの迎撃性能の高さが実証されたのだ。

高速で飛来するSLBMの迎撃については、20世紀においては困難なこととされていた。

それだからこそ、核兵器を搭載したSLBMを保有することにより、アメリカはロシア（当時はソ連）の核兵器の先制攻撃に対する抑止力とした位であった。

その20世紀の常識を、エヴァとMAGIのコンビは、いともたやすくひっくり返してしまったのである。

従って、軍人や年配者にとっては、喜びは一層大きいものになっていた。

裏を返せば、ネルフに対する軍事的な抑止力が無くなったことを意味していた。

これで、どのような兵器もエヴァには通用しないばかりか、ネルフ自体も軍事攻略が困難なものになっていたのである。

「碇、やったな。」

「ああ、パイロット達は良くやってくれた。だが、……。」

「全てはこれからだな。」

だが、ゲンドウも冬月も、浮かれてはいなかった。

「さて、敵の様子はどうかしら。」

アスカは、有線索敵網を駆使して、敵の動向を探った。すると、アスカが事前に予想していた通り、大島の南方沖を目指して集結しつつあることが分かった。

「やったわね、予想通りの動きで助かるわ。」

アスカはニヤリと笑った。

アスカは、敵の艦艇の集結場所を、大島の南方と睨んでおり、そのための下準備も色々としていたのだから無理も無い。

だが、笑ってばかりはいられない。

場合によっては、全部隊が集結する前に空母から艦載機が攻撃してくる可能性があるからだ。

第3新東京市から大島南端までの距離は、おおよそ80kmであるが、

亜音速で艦載機が向かってくるとなると、時間にしてわずか4〜5分で着いてしまうのだ。集結前といっても、発進から10分以内の距離からやって来る可能性は高い。

しかも、燃料消費を度外視・音速を超えると燃料消費がケタ違いに増えるのを無視・して、音速を超えてやって来る可能性も皆無では無い。そうになると、敵機発進を知ってから、僅か2〜3分で攻撃を受ける破目になってしまうのだ。

そうになると、3機のエヴァで迎撃するのは非常に困難だ。空母1隻当たり、多くて100機前後の艦載機を搭載しているのだが、空母が5隻として、最大500機である。それらが同時に攻撃してくると、かなり辛いものがあるのだ。

しかも、アスカが敵の出方を掴みかねていた部分がある。それは、いつ艦載機が発進するかだ。

アスカはなかなか考えがまとまらず、頭を悩ませていた。

「やったな、葛城。」

「ええ、良かったわ。」

アスカが戦自の助けがいらないうって言った時には、どうしようか迷ったもの。

でも、結果は見ての通りね。」

発令所では、加持とミサトも安堵していた。

やはり、この二人にしても、エヴァでSLBMを迎撃するというのは、100%信用出来るものではなかったのだ。

「だが、次はどうする？」

「うーん、そうね。アスカに聞いちゃおうっと。」

ミサトは笑いながらアスカへと通信を入れた。

「アスカ、これからどうするの？」

「今は敵の出方を見ているのよ。」

「と、言つと？」

「敵の攻撃が、艦載機がメインなのか、地上部隊がメインなのか、それともそれ以外がメインなのか、未だに分からないのよ。」

「だから、どのようになでも対応出来るようにしておかなくてはならないのよ。」

「どつという事なの？」

「艦載機がメインだったら、比較的簡単ね。」

「やって来る艦載機を片っ端から落としていけばいいものね。」

「後は、丸裸になった敵の艦艇を、ゆっくりと料理すれば良いものでも、流石にそんなに楽じゃないでしょうね。」

「そつよねえ。」

「次に考えられるのが、艦載機と敵の艦艇との同時攻撃ね。艦載機の支援を受けた敵の陸戦兵力が海から上陸して来るの。こっちは、二正面作戦を強いられるわ。」

「むむつ。それは嫌な作戦ね。」

「さらに考えられるのは、高高度爆撃機との複合攻撃ね。上に気を取られているうちに、敵の艦載機がやって来て、ポジトロニライフルを破壊するの。」

そうになると、艦載機を撃ち落とすのが難しくなるから、手間取るわよね。

その際に敵の陸戦兵力がやって来て、ネルフ本部を攻撃するというのはどうかしら。」

「うつつ。誰よ、そんな意地悪なことを考えるのは。」

「まあ、そこまでは予想していて、対策も立ててあるんだけど、問題はその後なのよ。」

「どづいづいと?」

「こんな、誰でも考えつくような作戦では攻めて来ないっていうことよ。」

だから、あつと驚くような仕掛けが最低でも3つはあると思うのよ。要は、それがどれだけ有効で、どのくらい防げるのかっていうことなのよ。」

「どづいなによ?」

「それが分かったら、苦勞しないわよ。」

アスカは肩をすくめていた。ミサトは止むなく敵の出方を待つことにした。

だが、それほど長い時間待つことにはならなかった。

「日本海側から、再度SLBMが発射されましたっ！」

「数は20っ！高速で接近してきますっ！」

発令所は、再び喧騒に包まれた。ミサトはすぐにアスカと連絡を取ろうとした。

だが、別のオペレーター達が叫んだ。

「駿河湾から、SLBMが発射されましたっ！数は10ですっ！」

「相模湾から、SLBMが発射されましたっ！数は10ですっ！」

「アスカッ！敵の攻撃よっ！聞いてるっ！」

ミサトが問いかけたが、アスカは応えなかった。事態が切迫しているからである。

「相田とミンメイは、相模湾から発射されたSLBMを迎撃してっ！サーシャは、駿河湾からの奴よっ！良いわねっ！」

「分かったっ！」「はいっ！」「はいっ！」

3人は、元気よく返事をした。

そして、今度は先程よりもやや落ち着いてミサイルを狙撃する事が

出来た。

アスカの指示通りにSLBMを迎撃し、
ケンスケは、相模湾から発射されたSLBMを4発、
ミンメイも同様に6発撃ち落とした。

サーシャはというと、駿河湾から発射されたSLBMを10発とも
撃ち落としていた。

だが、一息つく暇も無い。北からさらに20発のSLBMが迫って
いるからである。

「相田とサーシャは、北からのSLBMを迎撃してっ！ミンメイは、
潜水艦の狙撃よっ！

MAGIの誘導に従ってやるのよっ！」

このアスカの命令に対しても、3人とも即座に従った。

相模湾からは、大きな火柱が立ち上がり、北からやって来たSLB
Mは、全弾撃ち落とされたのだ。

「ミサト、やったわよっ！見てたわよねっ！」

「ええ、見ていたわ。さすがにアスカね。」

「安心するのは早いわ。今のは探りだから、同じような攻撃がまだ
続くわよっ！」

「でも、今の潜水艦が原子力潜水艦だったらどうするのよ？
相模湾が汚染されるんじゃないかしら。」

「そう言う事を考えるのは、生き延びた後よ。あつたり前でしょ。」

「ははっ。やっぱり。」

ミサトの顔は引きつった。これでは生き延びた後も大変な事になるなど。

「一応、原子炉は狙いから外したけどね。運が良かったら、原子炉は無傷よ。」

このアスカの言葉は、ミサトの耳には届かなかったが、それに気付かぬアスカは、さらに続けて言った。

「ミサト、戦自に対潜哨戒機の発進を要請して。日本海側と、駿河湾の両方にね。」

「ええ、分かったわ。」

アスカの頼みに、ミサトは元気良く返事をして通信を切った。

「さてと、次はみんなに連絡しないと。」

アスカはエヴァンゲリオン全機への通信回線を開いた。

そして、全機のパイロットの姿を正面のディスプレイに映し出した。

「ケンスケ、ようやった。」

一息ついた頃合いを見計らって、トウジはケンスケを労った。

「ああ、思ったよりも簡単だったよ。」

ケンスケも、トウジの言葉に緊張が少しほぐれたようだった。

「しっかし、ケンスケも水くさいやないか。あんなに凄い腕前だなんて黙っとって。」

「あのなあ、トウジ。凄いのは、コンピュータなんだぜ。俺は、その指示に従って引金を引いただけなんだ。」

「なんや、そうなんか。」

「ああ、だから、トウジでも簡単に出来るようになるぜ。」

「おっしゃあ！腕がなるやないか。」

だが、張り切るトウジにシンジが水を差した。

「トウジ、張り切るのも良いけど、役割分担があるんだから、守ってくれないと。」

「そんな、堅い事言いつこなしや。」

だが、その言い方に、流石のシンジもカチンと来たようだ。

「今は戦争なんだよ。ふざけていると、洞木さんに言いつけるよっ！」

「ま、待ていつ、シンジ！」

トウジの顔は、真っ青になっていた。

「みんな、聞こえてる？聞こえる人は手を挙げて。」

そこに、急にアスカの声が入り、全員の手が挙がる。

「これから、簡単に状況を説明するわ。だから、良く聞いてね。」

アスカの言葉に皆頷く。

「SLBMの攻撃は陽動よ。アタシ達の防衛能力を試すために仕掛けて来たのよ。」

あと2〜3回陽動が来る可能性があるけれど、次回の攻撃からは、気を抜けないからね。」

良く、肝に命じてね。」

その言葉に、みな嫌そうな顔をする。それもそうだ。

敵の攻撃がまだ序の口だということは、戦いが長引くということだからだ。

「今、戦自に要請して、潜水艦を片付けてもらうことにしたわ。」

と言っても、まだ潜水艦は一杯隠れているから安心出来ないけどね。」

それでも、少しでも敵が減るのは良いでしょ。」

今見える敵の主力は、大島の南方沖に集結中よ。」

あと、1時間位で集結する見込みね。」

集結したら、おそらく直ぐに作戦行動が始まるわ。」

それからが正念場だから、気を引き締めてね。」

問題は、敵がどうやって攻めてくるかなんだけど、おそらく一斉に攻めてくると思うのよ。

考えられる方法は、SLBMに加えて、高高度爆撃機、空母の艦載機、秘密裏に上陸した地上部隊、とまあそんな程度かしら。これらが同時に攻めてくると思うのよ。

だから、事前に説明した通り、役割分担を守りつつ、現場の判断で臨機応変に戦って構わないわ。

けれど、傭兵部隊との連携も考えてね。

その点は、ハウレーン、マリア、ミリアの3人に任せたわよ。

そう言う訳で、あと1時間は敵の攻撃が来るかどうか分からない、あやふやな状態が続くから、その間に栄養を摂って欲しいのよ。

LLLに浸かっているから、普通の食事は出来ないの。だから、流動食で我慢してね。」

アスカが言い終わると、何処から現れたのか、エントリープラグの中から流動食が出てきて、パイロット達の手に渡った。

「じゃあ、急に命令するかもしれないけど、それまでの間はゆっくりと食事を済ませてね。

じゃあ、またね。」

アスカは、言うべきことを全て言うと、通信を切った。

「おい、トウジどっする?。」

ケンスケはトウジに聞いたが、答は決まっていた。

「食えるうちに食うんや。それが常識や。」

「良いかっ！第3新東京市まで、もうすぐだっ！急げっ！」

山の中を進む、4個中隊、約800人ほどの部隊があった。その部隊の隊長は、敵陣に近いことを兵士に告げ、臨戦体制を取るように命じた。

兵士達は、各々の手に自動小銃を持ち、手榴弾や各種の武器を身に纏っていた。

いわゆる、完全武装というものなのだろう。

この部隊の兵士達は、様々なルートで日本に上陸し、昨日になって第3新東京市の近くの町に集結したのだ。

集結地には、どうやって調達したのか、各種武器弾薬が山のように用意されていた。

だから、兵士達はその場所で装備一式を整えることが出来たのだ。しかも、ネルフに一切関知されことなく。

もっとも、同じような部隊は他にもいくつがあるのだが。

「ようし、止まれっ！」

隊長は、エヴァの姿を確認すると、部隊の進行を中断し、兵士達に休息を命じた。

もうすぐ訪れる、作戦開始までの間の、東の間の休息を。

第52話 決戦！第3新東京市その2（後書き）

ネルフの迎撃体制について

発令所

- ・ゲンドウ、冬月、リツコ、マヤ、シゲル
- ・ミサト：全体の指揮（名目）
- ・マコト：兵器の運用
- ・加持：傭兵部隊の指揮

アスカルーム

- ・アスカ：エヴァンゲリオン部隊の指揮、全体の指揮（実質）
- ・アールコート：アスカのお手伝い

地上部隊

- ・東南東 エヴァ第1小隊：シンジ（現場指揮官、小隊長）、ミンメイ（砲手）、マリア

ワイルドウルフ2個中隊とカルロス中尉ら

- ・西南西 エヴァ第2小隊：カヲル（小隊長）、サーシャ（砲手）、ミリア

レッドアタッカーズ1個中隊とリッツ大尉、エドモン中

尉ら

- ・真北 エヴァ第3小隊：トウジ（小隊長）、ケンスケ（砲手）、ハウレーン

ヴァンテアン1個中隊、レインボースター1個中隊等

第53話 決戦！第3新東京市その3

「なあ、シンジ。ちょっといいかな？」

「なんだよ、ケンスケ。」

「今は、ちょっと時間があるから、お前と二人きりで話したいと思
ってな。」

「ああ、いいよ。」

シンジはそう言って、回線を守秘回線に切り換えた。

「ああ、有り難う。実は、話と言つのは、碇司令のことなんだ。」

「えっ、父さんの？」

「シンジ、お前は碇司令との間にかなりのわだかまりがあるらしい
な。」

「だって、しょうがないよ。父さんは、僕に何も言ってくれないし。
でも、アスカが前に言ってたよ。組織のトップに立つ者の苦勞も知
らないでとか、

子供には話せないようなことが、一杯あるんだろうって。」

「ああ、そうだろうな。で、シンジから見て、どんな事がわだかま
りになっているんだ。」

「そうだね、大きなものは5つかな。」

「と、言つと。」

「第1に、使徒が来るまで僕を放っておいた事。

第2に、何の訓練も無しに急に僕をエヴァに乗せた事。

第3に、エヴァだけで僕を戦わせて、軍の援護が碌に無かった事。

第4に、トウジを殺そうとした事。第5にアスカのピンチに助けに行かせてもらえなかった事。

他にも小さなことは一杯あるけど。」

シンジは、あえてレイの件については言わなかった。

レイがクローンであることを言う事になってしまつて考えたためである。

「そうか。でもな、シンジ。やっぱり、誤解が多いぞ。」

「どうしてぞ。」

「そうだな、まず1番目から言つけど、司令がお前と一緒に暮らしていたとして、お前の事を構ってやれるか。

考えても見る。司令は、使徒を撃退し、人類を救つという大きな目的のためにネルフを作り、エヴァを作つたんだろ？

生半可な忙しさでは無かつた筈だ。」

「でも、全然会えないなんておかしいじゃないか。」

「会えると思う方がおかしいよ。」

シンジは、ネルフの司令のことを、どこかの社長と同列に考えているんじゃないか。

ネルフの職員の中には、碌に親と会えない奴も多いんだぜ。

トウジを見るよ。同居しているっていつても、親御さんは妹さんが怪我をしても休めないんだぜ。

そんなに職員が忙しいのに、司令が普通の家族と同じように息子と毎日会っていたら、他の職員が不満を持つよ。

だから、司令としてはそういう選択は出来なかったと思うぜ。

他人の家族の犠牲を見て見ぬ振りをして、自分の家族を大事にする奴は、誰からも信用されないぜ。

組織の長って、そういうもんだろ。」

ケンスケの言葉には、説得力があった。

確かに、職員の家族から見たら、そういう事になるのだろう。

だが、分かっているが、分かりたく無かったというのがシンジの心境だった。

「じゃあ、何の訓練も無しに急に僕をエヴァに乗せたのは何でだと思っ？」

「これは推測だけど、その方が上手くいくような理由があったんじゃないか。

結果的に、小さい頃から訓練してきた惣流よりも、シンジの方が戦績は良いんだろう。

何か言えない秘密があって、その理由があるから、訓練をしなかったんじゃないか。」

確かに、ケンスケの言うように、アスカよりもシンジの方が戦績は良かったので、シンジは反論出来なかった。

だが、次はシンジにも自信があった。誰に聞いてもおかしいと言っていた事だからだ。

「でも、僕達が戦っている時に、軍隊の支援が無かったんだよ。エヴァだけで戦うよりも、軍隊と一緒に協力して戦う方が良いじゃないか。素人でも分かる理屈だよ。

「ただ、父さんはそうしなかった。おかしいじゃないか。ケンスケは軍事マニアだろう。」

「シンジ、お前は惣流に、その事を聞いた事はあるのか？」

「えっ、無いけど。」

「そうだろうな。実はな、シンジ。」

「ドイツ支部では、エヴァと軍との連携も訓練に組み込まれていたそうなんだ。」

「ええっ！でも、僕はそんな訓練を受けた事は無いよ。」

「ああ。惣流も、軍隊との共同作戦が何で無いのか、ずっと不思議だったらしいんだ。」

「でもな、ある時、やっと理由らしきものに気付いたそうなんだ。」

「理由なんてあるの？」

「理由は、幾つもあるけど、一番大きそうなのはお前だよ、シンジ。」

「ど、どつしてぞ。」

「惣流が気付いたのは、トウジが大怪我をした時のことだそうさ。シンジ、お前は人が傷付くのは嫌だと言ったそうじゃないか。」

でもな、軍隊と共同作戦をとったら、必ず死人が出るんだ。お前はそれでも良いのか？」

「そ、そんなの、誰も死なないように気を付ければいいじゃないか。」

「そんなのは、理想論さ。いいか、シンジ。軍隊では、訓練だって人は死ぬ。」

実戦なら、確実に死人が出るんだ。お前はそれに耐えられるのか。惣流が乗ってきた艦隊では、実際に訓練なんかで、両手じゃ足りない位の人間が死んでいるんだぜ。」

「そ、そんなあ。」

シンジは真っ青になった。そんな話は誰からも聞いたことは無かったからだ。

「それに、連携が少しでも崩れると、エヴァが誤って誰かを殺してしまうかもしれない。」

だから、エヴァが戦っている時は、周りは無入である方が都合が良いんだ。

だけど、シンジ。お前は味方の人が死ぬのは嫌だろう？

使徒の攻撃で死ぬかもしれないし、エヴァの攻撃が勢い余って殺すかもしれない。

もつとも、人間が消耗品で、少しくらい死んでもしょうがないって考える者にとっては、そうじゃないんだろうな。

でもな、1回の戦いで、遺族が百人単位で増えるんだぜ。それが現

実なんだ。

その遺族に、いつクラスメイトや同級生がなるか分からないんだ。お前はそれでも良いって言うのか。」

「よ、良くないよ。」

シンジの顔はさらに青くなった。

「良いか。俺は軍事マニアだが、軍人じゃない。

だから、使徒を倒すためには、人が死ぬのはやむを得ないとは思わない。シンジもその点は同じだろう。

だから、トウジが怪我をした時、凄く怒ったんだろう?」

「うん、そうだよ。」

「それが、惣流や綾波とお前やトウジとの違いさ。

惣流は、言っちゃ悪いが、敵を倒すためには人が死ぬ事は、やむを得ないと思っている。

おそらく、綾波もそうだったと思う。

でもな、お前やトウジは違うだろう。その違いは分かるか。」

「ううん、分からないや。なんだろう。」

「それは、覚悟の違いさ。大勢の人の生命を守るには、多少の犠牲はしょうがないっていうな。

だがな、シンジ。覚悟があれば良いってもんじゃないぞ。

惣流や綾波は違うと思うが、その覚悟って奴は、時として変な方向に行くことがあるんだ。

それも、他人に苦痛を押しつけることがな。

20世紀の半ばに、日本は世界を相手に戦争した事は知ってるよな。その時、軍人達は、敵に降伏したら拷問されて殺されるだろうって言って、
その考えを民間人にまで押しつけて、敗戦間際に大勢の人を殺したらしいんだ。」

「そ、そんな酷いことがあったなんて。」

「まあ、軍人が全員酷い事をするとは思わないが、覚悟っていうのは、
自分を犠牲にする時にはおそらく正しいものなんだろうけど、他人を犠牲にする時も使われることがある。」

「ただ、それは自己満足にすぎない。」

惣流や綾波みたいに、自分の犠牲をも厭わないっていう前提があつて、初めてその覚悟は正しいと言えるかもしれない。

でも、他人だけを犠牲にするのには、覚悟はいらない。小さな悪意があれば十分なんだ。

前にテレビでやっていたけど、こんなことがあつたんだ。

自分の全財産を奪われて、犯人に返して欲しければ他人の息子を殺すようにと脅された男がいたんだ。

その男は、犯人に言われた通り、他人の息子を殺したんだけど、その男が言うには、他人の息子を殺すのには、物凄い覚悟をしたって言うんだ。

俺はそれを聞いて笑ったよ。バカじゃないかって。

本人はそのつもりかもしれないけど、第三者から見ると、滑稽に見えるよ。

そいつは、家族の生活を守るためだって言ってたんだけど、

そんなの、金が欲しいから強盗して人を殺す奴と同じ理屈じゃないか。

そんなの、覚悟なんて言わないよな。狂ってるとしか思えないよ。」

「そ、そうだね。犯人も酷いけど、その人も酷いよ。

残された家族がどうなるのか、考えなかったのかな。

特に、子供を犠牲にするなんて、人間のする事じゃないよ。

それに、全財産を取られる方もうっかりしてるよ。」

シンジは、ふと加持の言葉を思い出した。加持は、

『碓司令は、シンジ君とアスカのどちらかが必ず死ぬと分かっていたら、必ずアスカの方を先に助けるだろう。』
と言った。

その時は嫌な感じがしたが、今、やっとその意味が分かった。

他人を切り捨てるのは、誰でも出来る、安直な方法なのだ。

言わば幼稚園児でさえ出来る、簡単な事なのだ。

だが、身内を先に切り捨てることは、誰しも嫌がるだろう。

だとしたら、どうするか。そういう事態にならないように、先手を打つべきなのだ。

他人の息子を殺した男も、全財産を取られないように、用心すべきだったのだ。

それを怠ったツケを他人に回すなど、言語道断なのだ。

ゲンドウは、他人を切り捨てる安直な方法はとらずに、

必死にそうならないような方法を見付けるような人間だと加持は言
いたかったのだろう。

そのことが、ようやく分かってきたのだ。

「おっと、話が脱線しちゃったな。」

惣流や綾波もそうだけど、軍人になると、やっぱり、人の死に対して、一般人と感覚が違ってくるのは間違いない。

そりゃあ、そうだ。人が死んだからって言って泣いていたら、次は自分が殺されるんだ。

だから、必然的に人の死に対して、一般人とは感覚がずれるし、多少の犠牲はやむを得ないと考えがちだ。

それ自体はしょうがないと思う。

だがな、一旦ずれた感覚は中々元に戻らないし、場合によっては、さっき言ったように、敵以外の人間にも牙を剥くこともあるんだ。エヴァンゲリオンのパイロットがそうになったら恐ろしいよな。

特に心の弱い人間ほど、危ないらしい。

過剰防衛って言うのが良いのかどうか、わからないけど、敵に攻撃されるかもしれないって思って、

必要以上に他人を攻撃しかねないんだそうだ。

だから、シンジが軍人と一緒に戦っていたら、そうなる危険性があったと思う。

大丈夫だろうと思う人もいるかもしれないが、司令の考えは違ったっていうことだ。

もし、ネルフの幹部連中に軍事マニアがいたら、強力な軍隊とエヴァとで共同作戦を行っていたはずだ。

そして、シンジはもっと楽に戦えたと思う。

だが、その見返りに、大勢の軍人が死んでいたことだろう。

中には、シンジのヘマで死ぬ人も出たと思う。その方が良かったのか？」

「よ、良くないよ。」

「それでこそシンジだよ。」

おそらく、シンジがそういう奴じゃなかったら、司令は軍隊との共同作戦を行ったと思う。

そして、大勢の人間が死んでいたはずだ。

百歩譲って、彼らはしようがないと思ってくれるかもしれないが、その家族はどう思う？

使徒に殺されるならしょうがないと思ってくれるだろうけど、トウジみたいな奴がいるかもしれないんだぜ。

でも、良かったよ、シンジが軍事マニアじゃなくて。

俺が言うのも変だが、マニアって、どうしても戦闘機や空母やらの格好良さに目が行って、影の部分には目が行かないんだ。

もし、俺がシンジだったら、少しでも楽に戦いたいから、強力な軍隊を作りましようって、言っていたと思う。

そして、色々と新兵器を作りましようって言って、戦闘の度にそれを試して喜ぶんだ。

その行動が、無数の死体の上に成り立っているっていうことを知らずにね。

でも、いつかは気付くんだ。そして、罪悪感に襲われるんだ。だって、そうじゃないか。

自分が少しでも楽に戦いたいからっていう理由で大勢の人を殺すんだぜ。普通の神経じゃ耐えられないよ。

それに、良く考えたら、自分がへマをやったら誰かが死ぬかもしれないって思ったら、

自由に動けないじゃないか。そしたら、本末転倒だよ。

あの惣流だって、誰も死なないようになんて考えて戦うなんて、絶対に無理だって言ってたんだぜ。

もし、そんな事を考えて戦ったら、自分が死んでしまっつてな。

惣流は、多少の犠牲はしょうがないって思っていたそうだけど、親のいない子を作りたくなかったから、

あえて軍隊との共同作戦を行うという進言はしなかったって言うし、ミサトさんにその手の相談を受けた時も、否定的な答をしたそうだ。

「

「そうか……。」

シンジは、アスカが良く素直に言ったなと思った。

以前のアスカなら、『軍隊なんて、邪魔よ。使徒なんて、アタシ一人で十分よっ！』なんて言いそうだからだ。

「俺の誤解かもしれないが、シンジのお父さんは、他人を犠牲にすることを良しとは考えていないんじゃないか。

もしそうだったら、人海戦術で軍隊をぶつけるぜ。

そうしなかったのは、シンジと同じで気が弱いのか、それとも立派な人だからか、

他に理由があるからなのかは分からないけれどな。

それに、シンジのことは、大切に思っているんじゃないかな。

仮に、使徒に勝ったとしても、シンジのせいで死人が大勢出れば、シンジの心には傷が付くだろう。

それを考えたんじゃないかな。それでも、司令のことが信用出来ないのか？」

「いや……。何となく分かって来たよ。あははっ、僕って本当にしょうがないよね。」

人を傷つけないなんて言いながら、一方で、大勢の人が死ぬようなことをして欲しいなんて思うんだもの。」

「そりゃあ、しょうがないさ。だって、俺だってそんな事に気付かなかったんだぜ。」

シンジに分かるはずが無いよ。だが、問題は気付いた後だよ。

さっきの話と今回の作戦は矛盾しているかもしれないけど、本質的に違っつてわかるよな。」

「うん、何となくわかるよ。使徒との戦いでは、あえて軍隊と共同作戦を行う必要は無かったけど、

今回の相手は人間だから、そうは言っていられないんですよ。」

「そうだ。相手が人間だって言うことが大きいな。

でも、確実に言えるのは、使徒との戦いでは、人間を死なせる必要は無かったが、

今回は、同じ事を言っていると大切な人が死んでしまう可能性があるっていうことだ。」

「ああ、何となく分かるよ。誰の差し金かもね。」

おそらく、ケンスケはアスカに言われてこんな話をしたのだろう。

「あのなあ。お前を心配しているんじゃないか。」

「うん、分かっているよ。」

シンジは、アスカの心遣いが嬉しかった。そして、アスカの言いたい事も何となく分かっていた。

戦争には死が付きまとうものだという事。

だからと言って、簡単に人間を殺したり、切り捨てたりして良いものではないという事。

でも、やらなければならぬ時があり、今がその時だと言う事

「ケンスケ、有り難う。気を遣わせちゃって。お蔭で、胸のつかえが取れたような気がするよ。」

「良いさ、友達だろう。」

ケンスケはニコリと笑った。

第54話 決戦！第3新東京市その4

「戦自から連絡っ！正体不明の潜水艦を撃沈したそうですっ！」

シゲルが叫ぶような口調で報告した。

「で、どっちなの？」

ミサトの問いかけにシゲルはにっこりした。

「両方ですよ。日本海側と、駿河湾と。」

「やっ！」

ミサトは、満面の笑顔を浮かべた。

「直ぐに、アスカに知らせてねっ！」

ミサトは、順調な戦いぶりに、機嫌を良くしていた。

「みんな、ちょっと良いかしら。」

シンジとケンスケの話が終わって間もなく、エヴァのパイロット全員に、アスカからの通信が入った。

「これから、簡単に敵戦力のレクチャーを行うから、よっく聞いてね。じゃあ、相田、お願いね。」

アスカに指名されたケンスケは、長々と話し始めた。無論、アスカと事前に調整済の話である。

「みんな、良いかな。現在分かっている敵戦力について話すから、良く聞いて欲しい。

北東からロシア軍のものと思われる空母2にその他25隻の艦隊が向かっている。

空母は、2隻ともアメリカ軍の古い空母である、キティーホーク級という空母だ。

艦載機は、推定80〜100機だ。

東からはアメリカ軍のものと思われる空母1にその他15隻の艦隊が向かっている。

空母は、ニミッツ級という原子力空母だ。艦載機は、推定110機前後だ。

南西からはドイツなど、ヨーロッパ諸国の軍のものと思われる空母2にその他20隻の艦隊が向かっている。

空母は、2隻ともロシア軍と同じものだ。これも、艦載機は推定80〜100機だ。

この敵戦力のうち、最も気をつけるのは戦闘機だ。

ロシア軍の戦闘機はスホイ33という、とても機動性が高いのが主力だと思う。

それ以外の性能は低いが、搭載する武器によっては脅威になり得るんだ。

アメリカ軍の主力戦闘機は、F-22ラプターという世界最高水準の高性能機だと思う。

ステルスといつて、レーダーなんかでは中々見付けられないという特徴がある。

それに、機動性もピカ一だ。こいつには、十分注意してくれ。おそろしく、簡単には撃ち落とせないと思う。

ちなみに、こいつは1機200億円以上するといわれているんだ。

EU軍の主力は、F-35という、F-22の廉価版の戦闘機だろう。

だが、廉価版と言っても、ステルス性能も高いし、機動性も高い。

こいつにも十分注意が必要だ。それに、こいつはロシア軍にも配備されている。

こいつは、1機50億円と言われるが、値段の割に性能は良いんだ。

他にも地上攻撃機や、戦闘ヘリなんかがあると思うけど、気を付けるのは戦闘機だけで良い。

さっき言った3機とも機動性が高いから、撃ち落とすのは至難の技なんだ。

特に、近寄られたら、ポジトロンライフルでは当たらないだろう。

だから、なるべく遠い所で撃墜したい所んだけど、3機とも、数分でこっちに来る事が出来るんだ。

特に、F-22ラプターは他の戦闘機と違って、音速を超えて飛んでも、

燃料消費量はあまり増えないから、音速以上で来る可能性が高い。

そうなると、凄く厄介なんだ。

だから、近寄って来たらATフィールドを張って、ポジトロンライフルを壊されないように気をつけて欲しい。」

そこまで言うと、ケンスケは皆の反応を伺った。だが、特に質問も出なかったので、続けて話すことにした。

「敵の最終目標は、おそらくMAGIの接收だ。

実は、先日の作戦において、ゼーレの資産の半分以上を分捕ったんだ。

そのデータはMAGIにあるから、奴らは必死になってMAGIを接收しようとするだろう。

そのためには、地上部隊が必要だ。

だから、この周辺には、推定で2千人から10万人の地上部隊がこちらの際を伺っている筈だ。

そんな馬鹿なと思うかもしれないが、空母5隻の乗組員だけで推定3万人いるんだ。

艦隊全部では10万人以上、20万人近い乗組員がいるはずだ。

だから、同じ位の規模の地上部隊があってもおかしくはないんだ。

これに対して、我々の地上部隊は、たかだか2千人位しかない。普通に戦ったら、勝負にならないんだ。

それを互角の勝負に持ち込むには、エヴァと各種の兵器を最大限に活用するしかないんだ。

だけど、敵はそれ位お見通しだから、最初にエヴァの動きを止めようとするだろう。

エヴァの動きを止める方法は、実は何通りかが考えられる。今は言えないけどな。

で、敵がそのような方法でエヴァの動きを止めようとする場合、特殊な弾頭を積んだミサイルをエヴァにぶつけようと思う。

戦闘機から、潜水艦から、高高度爆撃機から、地上部隊から、或いは想像も出来ない方法で、攻めてくるだろう。

だけど、裏をかえせば、そういうことをさせなければいいんだ。

そのためには、遠距離の敵は、砲手担当が落として欲しい。

近距離まで敵が来たら、シンジ、トウジ、渚の3人で防いで欲しい。マリアさん、ミリアさん、ハウレーンさんは、傭兵部隊と上手く連携して、地上部隊の侵攻を防いで欲しい。

明日みんなで戦勝パーティーを開いて、たらふく美味しいものを食べられるように、全力を尽くして欲しい。

俺の話は、以上だ。」

ケンスケが言い終わっても、誰も何も言わなかった。

特にマリア達、軍事知識のある者ほど険しい顔をしていた。シンジでさえ、険しい顔をしていたのだ。

（この生命を捨ててでも、アスカは守って見せる。）

さきほどのケンスケとの会話の中で、ゲンドウに対するわだかまりが殆ど消え、

今回の戦いに対する迷いを断ち切ったシンジは、いつの間にか戦士の顔つきになっていた。

「大変です、惣流さん。空母の艦載機が、発進準備を始めました。」

突然、アールコートが悲鳴を上げるように言った。

「ふん、大丈夫よ。」

アスカは素早く端末を操作した。

「よし、照準はOKね。行っけーっ！」

アスカはにやりと笑った。実は、大島の周辺には、無人ミサイル群を配備していたのだ。

おそらくこの島の周辺に艦隊が集結するだろうという、アスカの予想によるものだった。

MAGIと連動した、有線誘導式の地对地ミサイル。

それを金に糸目をつけずに短期間で集め、500基ほど配備したのだ。

1基当たり1億円としても、これだけでも、数百億円もかかったのである。

これは、アスカがゼーレから膨大な資金をかすめ取ったからこそ出来た芸当である。

武器はタダでは買えないのだからしょうがないのだが。

「頼むから、アメリカ軍の空母は落ちてね。」

アスカの呟きを聞いて、アメリカ人のアールコートはちょっと頬を膨らましていた。

「やりましたっ！敵空母が撃沈しましたっ！」

シゲルは、ついつい大声で叫んでいた。
発令所正面のメインスクリーンに、アメリカ軍の空母が炎上している様子が映っている。
今回の最重要目標のうちの一つだから、喜びも大きい。

ミサイルが次々と敵空母に、敵艦艇にへと飛んでいき、激突して大爆発を起こしている。
無論、迎撃されるミサイルも数多いが、3割から5割位のミサイルが命中しているらしい。

「あつ、また空母が炎上しましたっ！これで2隻目ですっ！」

数発のミサイルの直撃を受けて、ロシア軍のものとされる空母が炎上していく。

空母の弱点の一つに、高速で接近するミサイルに弱いということが挙げられる。

このため、空母の周りを各種艦艇が取り囲んで、敵の攻撃を防ぐつもりだったらしい。

だが、MAGIと連動したミサイル攻撃は、最初に周りの艦艇のうち、

数隻を狙って炎上させ、その合間を縫ってミサイルを叩き込んでいた。

このため、炎上する艦艇が邪魔で、他の艦艇がうまく壁になることが出来なかったのだ。

そこを狙って、1隻当たり20発のミサイルが空母に襲いかかったのである。

敵の艦艇も懸命に防戦したが、不意を衝かれたのは大きく、

数発のミサイル攻撃を受けて、次々と撃沈していったのである。

こうして、ミサイル攻撃が終わる頃には、空母が4隻撃沈、艦艇も30隻が撃沈、16隻が大破、残る14隻も無傷なものは無いという有り様であった。

「加持、やったわね。アンタの出番は無いかもよ。」

「ああ、こつちも鮮やかに決まるとはな。アスカが敵じゃなくて良かったよ。」

「まあね。でも意外よねえ。映画じゃないけど、アスカこそが作戦部長に相応しいなんて、本気で思ったわ。」

「そんな事はないさ。少なくとも、使徒戦では葛城の作戦があったからこそ、俺達は生き延びたのさ。」

アスカは、軍事についての知識は豊富かもしれないが、未知の敵に対しては逆にそれが足かせになる。実際にそうだったじゃないか。」

そう、使徒戦の時のアスカは、軍事に詳しいが為に判断を誤ることが多かった。

何も知らないシンジの方が、失敗が少なかったのだ。

「そうねえ。でも、今はアスカの本領発揮って言う訳ね。」

「ああ。こつちに来る時も、アスカは空母の艦載機について、良くパイロット達に質問していたよ。」

奴らも、可愛い女の子が聞くもんだから、うっかり機密事項までしゃべっていたりもしたな。」

「そう、そんな事があったの。」

「ああ。その時のアスカは、軍隊との共同作戦も視野に入っていたしな。」

そうなる、人の命がかかってくるから、アスカも必死だったよ。でも、アスカはそんな事は、人前では微塵も感じさせないんだ。凄い娘だよ。

それを見て、俺はこの子は違うなと思ったね。少なくとも、恋愛の対象にはならなかったな。」

「何よ〜っ。それって、嫌味？」

「おいおい。お前とは、そうなる前に出会っていただろう。だから、条件が違うのさ。」

加持は、頬を膨らますミサトを説得するのに骨を折る破目になった。

「シンジ君、聞いてっ！良いニュースよっ！」

急にミサトからの通信が入った。

「ど、どうしたんですか。」

「敵の空母が、4隻も沈んだのよ。」

「ほ、本当ですか。」

「ええ、それもアメリカの空母を沈められたのよ。残る1隻も小破していて、直ぐには戦闘機を発進出来ないようよ。」

「そうですね、良かったあ。」

それを聞いて、ケンスケが割り込んでくる。

「本当ですか、ミサトさん。」

「ええ、本当よ。」

「これで、随分楽になります。」

正直言つて、300機以上の戦闘機相手じゃ、とてもじゃ無いですが勝ち目はないですから。

これで、戦闘機は100機以下、うまくすると、50機以下ということも有り得ます。」

「そういう事。じゃあ、頑張つてちょうだいね〜ん。」

ミサトは笑いながら通信を切った。

「シンジ、これは勝てる、きっと勝てるぞ。惣流は本当に凄いや。」

ここまで凄いとは思わなかったよ。お前には分かるか？」

「何だよ、いきなり。」

「惣流は、敵の金を分捕つてネルフのものにしただろう。」

それって、武器を購入するのに必要だったし、敵も金を取り戻したから、荒っぽい手段が取れない。」

そういう状況にしたのが凄いだよ。」

「そ、そうだね。」

(ふうん、そうなのか。)

同意したものの、軍事には疎いシンジに分かるわけもない。

「本当に凄いやな、惣流って。尊敬しちゃうよ。」

だが、ケンスケは知らなかったが、アスカは敵の艦艇の一部のコンピュータを操って、同士討ちまでさせていたのである。

第54話 決戦！第3新東京市その4（後書き）

今のところ、アスカの作戦が上手くいって、ネルフが有利です。果たして、シンジの出番はあるのでしょうか。

第55話 決戦！第3新東京市その5

「先輩、この分だと、楽勝ですね。」

「あら、まだ安心するのは早いわよ、マヤ。気を抜いたら駄目よ。今は、私達の順番は無いけれど、いつどのような事態が起きるのか、分からないわよ。」

発令所では、緊迫感が薄れてきたマヤに、リッコが苦言を呈していた。

「は、はい。すみません、先輩。」

マヤは、相手がリッコであるため、素直に謝った。

「分かれば良いのよ。」

リッコは、そんなマヤに、にっこりと微笑んだ。

「は、はいっ。」

マヤは、リッコの笑顔を見ると、途端に笑顔を取り戻した。

「でも、これで済む訳はないわね。きっと、何か起きるわね。」

リッコの顔は、少しだけ険しくなった。

「おい、レッドウルフ。お前はこれで終わりだと思うか？」

「こんなに簡単に終わる訳はないよ。ふっ。そんな事、百も承知のくせに。」

リッコが険しい顔をしている頃の事。ジャツジマンの問いかけに、レッドウルフは笑った。

2人の部隊は、市内中心部で待機中であるため、時間的には余裕があったのだ。

それで、先程から戦況についての意見交換、或いは世間話をしていった。

「やはり、お前もそう思うか。」

ジャツジマンは腕を組んだ。

「ゼーレには、まだあいつがいるはずだ。お前は知らないかもしれがないがな。」

「知っているさ。元青竜部隊の隊長だろ。」

「なっ、何でお前がそれを知っている？」

「彼とは、少しばかり因縁があつてね。」

「ほう、どういう因縁なんだ。」

「言いたくない。」

「ふん、何かやましい事なのか。」

「まあ、そうかもしれないな。」

「気になるじゃないか。言えよ。」

「いずれ話すぞ。いずれな。」

さすがのレッドウルフも言えなかった。彼が自分の母の命の恩人だとは。

それを言ったら、自分はゼーレのスパイだと疑われてしまうだろう。

「ちっ。嫌な奴。」

「僕達が勝てば、教えてあげるよ。」

レッドウルフは、フンと鼻を鳴らした。

「まあいい。で、我々の出番がいつ出るかなんだが、お前はどっ思っているんだ。」

「そうだね。敵の地上部隊が出て来ないと、僕らの出番は無いよ。彼らも馬鹿じゃない。」

エヴァンゲリオンの前に、地上部隊を晒す訳が無いさ。」

「さあ、それは分からないぞ。」

エヴァンゲリオンの動きを止めるような兵器があるかもしれないぞ。」

「ああ、あるかもしれないね。」

「おいおい、お前も見当が付いているんだろう。特殊な爆弾を使うとか、色々と方法があるだろう。」

エヴァンゲリオンは、電子機器で制御されている可能性が高いし、中には人間が乗っている。

だから、電磁パルス爆弾みたいに、電子機器を一瞬で破壊するような爆弾を使うか、

中のパイロットを直接攻撃するような兵器が有効だろう。」

「中のパイロットを直接攻撃出来る兵器なんて、あるのかい。」

「ああ、あるさ。中性子爆弾なら、人間だけが死ぬ。他にも、俺達が知らない兵器あるかもしれない。」

「だけど、そんな兵器を使うと思うかい？」

「さあな。だが、使われたら、我々も一緒にやられるのは確かだ。」

「そうだね。だけど、敵にそのつもりがあるのなら、とっくに使っているさ。」

おそらく、敵は奪われた資産を取り戻そうとしているに違いない。」

「ほう、お前もそう思うか。」

「ああ。作戦会議の席上では、敵の資産の多くを凍結せしめたと言っていたが、あれは控えめな表現だったんだろう。」

ゼーレの活動を止める位の資産を凍結、或いは分捕ったんだろう。」

「となると、敵さんはどうしてもそれに関する情報を集めなくてはならなくなる。」

そうしないと、戦いに勝っても自滅するしかない。」

「だから、我々を皆殺しには出来ない。よって、中性子爆弾は使えないはずさ。」

「しかし、あの作戦が、そこまで重要だったとはな。

敵の空母を沈めたミサイルも、あの作戦でせしめた金で買ったっていうし、敵の攻撃に制限を加えてもいる。

まったく、誰が立てたか知らないが、凄い作戦だぜ。」

「誰が立てたのかは、想像がつくよ。おそらく、惣流アスカだろうね。」

「どうしてそう思う。」

「簡単な事さ。

作戦会議の席上で、ネルフの幹部は『the sleeping thief operation』の話聞いて驚いていたじゃないか。

あの加持だって、顔面蒼白状態だったよ。

加持って、てつきりネルフのナンバー3だと思っていたけど、違ってたようだね。

で、顔色を変えなかったのは、碓司令、冬月副司令、それに碓シンジだけだった。

もっとも、碓シンジは単に鈍くて、何を言っているのか分からなかった可能性の方が高いけどね。

ということは、顔色を変えた人間は、作戦の立案に関与していないということになるね。

そうなるよ、消去法で、作戦の立案者が惣流アスカだって分かるじ

やないか。

あの作戦は、軍事にも詳しくて、技術にも詳しい人間じゃなくちゃ、立案出来ないよ。

発想自体は誰でも出来るかもしれないけど、それを実行に移すためには、

葛城ミサト、赤木リツコ、加持リョウジの3人と同等のレベルの知識と経験を結集しないと難しいよ。

それだけの能力は、今の司令と副司令には無いよ。

でも、いま言った3人は、作戦には関わっていないのは確かだ。

彼ら3人に匹敵するだけの能力を持っている人間というと、惣流アスカしかないじゃないか。」

「ふん、ずいぶん惣流アスカのことを高く評価するんだな。

まあ、反論出来る材料は無いが、それほどまでの能力が本当にあるのか？

彼女の戦闘能力が高いのは知っているが、それ以外の能力も天才的だとは思えないがな。」

「僕も証明出来るようなものは無い。

だが、いいかい。惣流アスカは、ネルフの要となる所を押さえている。

広報部では、実質的に広報部長代理と言ってもいい位だと言うし。作戦部長と同居し、部長代行も同じマンションに呼び寄せている。技術部長とも同居し、ネルフ内では一緒にいる時が多いと言う。諜報部も、部長代行の加持と仲が良い。

総務部にも出入りして、チーフを勤めているっていうし。

エヴァンゲリオン部隊の指揮官でもあるし。司令や副司令とも仲が良いって話だし。

保安部を除く、全ての部署を押さえていると言ってもいい位だ。彼女を崩せば、ネルフは

簡単に崩れるかもしれない。それほど重要な位置にいるんだよ、彼女は。」

「そうか。言われてみればその通りだな。

子供だと思っていたが、確かに良く考えれば、ネルフの要所を押さえているな。」

「それだけじゃない。ジャツジマンは、人間関係のことを知っているかい。」

「ああ、大まかなことはな。部下達から情報はある程度は入っている。」

葛城ミサトは、惣流アスカを妹みたいなものと言ってはばからない。赤木リツコは、口にくそ出さないが、惣流アスカと仲が良い。

加持リョウジも、惣流アスカを妹みたいなものと言ってはばからない。い。

そして、3人とも、惣流アスカの言うことは大抵聞くらいしい。

この3人の部下達も、上司が言いなりになっている手前、惣流アスカに逆らえない。」

「へえ、良く知っているね。」

「まあな。それにエヴァンゲリオンのパイロット達も同じような状況だ。」

碓シンジは惣流アスカにべた惚れだ。彼女の頼みは絶対に断らない。鈴原トウジの恋人が惣流アスカの親友だから、彼も惣流アスカには逆らえない。

渚カヲルは碓シンジと仲が良いから惣流アスカには逆らわない。

マリアはドイツ時代からの友人だし、彼女の良き理解者だ。

ハウレーンも前回の戦闘での借りがあつた。

相田ケンスケに至つては彼女の下僕だと言つし。

あと、お前だから言つが、彼女は『ミラクル5』のリーダーだそう
だ。」

「何つ。それは本当か？」

「ああ、そうだ。その線から、パイロットのうち3人ほどが、彼女の言いなりだそうだ。」

つまり、現在エヴァンゲリオンに搭乗しているパイロット9人のうち、9人とも彼女の言いなりなんだそうだ。」

「それは凄いな。まるで、エヴァンゲリオン部隊は、彼女の私兵みたいじゃないか。」

「そうではない。そういうことをするような人間じゃないから、言う通りにしているんだ。」

単に我が儘なことを言つ人間だったら、誰も言つことなど聞かないさ。」

「そうか。そうかもしれないな。」

だが、これではつきりした。『ミラクル5』のリーダーなら、サイバー戦もお手の物だ。

『the sleeping thief operation』
は、彼女が立案したに違いないよ。おそらく、全体の作戦も。」

「そうかもしれないな。」

だが、そうでなかったとしても、惣流アスカの作戦で戦うことについては、俺としては文句はない。

この前、敵が攻めてきた時も、おそらく惣流アスカの作戦だったろうし、お蔭で死傷者は思った以上に少なかった。

彼女は作戦に私情をはさまないし、婚約者だった碓シンジでさえも、必要と判断したらためらい無く戦場へと送っている。

そのお蔭で、黒竜部隊のリーダーだった渚カヲルの洗脳が解けたっていうし、

俺達が足止めすらかなわなかった奴らを殲滅させることが出来た。

彼女自身も安全な所ではなく、前線に近い中学校で作戦の指揮を行っていたって言うじゃないか。

指揮官としての資質、行動力、人望ともに超一級品だ。特に、作戦に私情をはさまないのが良い。

今回の婚約解消といい、普通の人間にはなかなか出来ないことだ。ましてや、あの年齢でな。

彼女が我々の部隊の指揮官だったら、部下達は安心して戦えるのにな。」

「でも、一つひっかかるんだけど、彼女は碓シンジのことが本当に好きなのかな。

好きなら、何であんな素人を戦場に送るんだろう。それに、あいつ

のどろが良いんだろう。」

「それは、俺にも分かん。だが、碓シンジは、結構見どころのある奴だぞ。」

確かに戦闘能力は低いが、肝は座っている。

戦場に丸腰で行くなんて、俺だって出来ないような芸当を平気でするんだ。

それに、お前も知っているだろう。

碓シンジが不良高校生に襲われた時、惣流アスカは鬼のような顔をしていただろう。

あれは、ただ単に好きと言うより、碓シンジを心の底から愛しているっていう感じだったじゃないか。」

「そういや、あの時のことを、みんなには加持が助けてくれたって言っているんだよ。」

それを聞いた時、吹き出しそうになったよ。」

「加持は加持で、ワイルドウルフがやったって思っているらしいしな。」

「おそらく、碓シンジには、本当のことを知られたくないんだと思うよ。」

「それが、女心っていうやつなのかな。」

「そつだよな。」

でも、婚約を解消したっていうことは、惣流アスカにとっても堪えているっていう訳か。」

「まあ、そついうことだ。」

ジャツジマンがそう言うのと、レッドウルフは口を閉ざした。そして、遠くに見える山々を眺めたのだった。

「どうだ、戦況は？」

「はつ。我が方の空母が4隻沈められ、その他の艦艇も多大な被害を受けたそうです。」

薄暗い森の中で、迷彩服を着た2人の軍人が、険しい顔をして話していた。

そのうちの1人は、同じ頃に別の場所で自分が噂されていることなどは、知るはずが無かった。

「そうか。やはり海からの支援は期待出来んな。」

「残念ながら。将軍は、この事を予測していたのでしょうか？」

「ああ、最悪の事態としてな。だが、現実には起きるとは思いたくなかったがな。」

「原因は何でしょうか？」

「分らん。日本とネルフのレーダー網は、確実にすり抜けたはずだし、

集結地点もわざわざネルフから見えないようにと、島の影にしたというのにな。」

「我々の知らない索敵網があつたのでしょうか。」

「おそろくな。だが、我々はもう引けない。お前には話したが、この戦いは食つか食われるかだ。」

「奴らに横取りされた我々の資産を取り返さなければ、我々に明日は無いのだ。」

「はっ。分かっています。」

「後は、あいつが俺の言う通りにやっていたれば、勝機が見えるんだがな。」

「あいつと言いますと?。」

「あの艦隊の司令官だよ。ちょっと、入れ知恵しておいたのさ。」

そう言つて、將軍と呼ばれた男は、フツと笑つた。

「一体、どうしたんだろう。敵の攻撃が止まつたみたいだ。」

シンジは、さきほどから敵の攻撃が止んでいたため、落ち着かない気分だつた。

「そうだ、アスカに聞いてみよう。」

シンジは、嬉しそうな表情で、守秘回線のスイッチを入れた。

「え〜と、惣流指揮官。現時点での敵の動きを教えてください。」

「えっ、何よ〜っ。さっきミサトから聞いたでしょ。ほんの10分位前じゃない。」

「えっ、そうだっけ。」

シンジは、思った以上に時間の進みが遅いことに驚いていた。感覚的には、1時間位前の出来事に思えたからだ。

「今は、特に動きは無し。静かなものよ。」

「もしかして、これで終わりってことかな。」

「有り得ないわね。」

「ずいぶんはつきりと言うね。」

「あつたり前でしょう。それくらいのこと、分からなくてどうすんのよ。」

「そ、そんなに怒らなくてもいいのに。」

「うっさいわねえ。じゃあ、切るわよ。」

「あっ、待つてよ。敵の次の攻撃予想を聞きたいんだけど。」

「それが分かれば苦労しないわよ。」

「確実な予想っていうんじゃないんだ。」

どういふ攻撃が可能性が高いとか、そういう事を知りたいんだ。
どんな攻撃が来るのか全く予想しないよりも、2〜3通りの攻撃を
予想しておいて、

それに対する反撃方法を考えていた方が良いかなあって思ったんだ。

「

「うん、それもそうね。でも、予想が大外れだったらどうするの
？」

「外れても、何も予想しないのとあまり変わらないと思うけど。」

「分かったわ。アタシの予想では、次も陽動が来るわ。おそらく、
何回かに分けてね。」

その次に、何かを仕掛けてきて、その後に地上部隊の投入っていう
のが可能性が高いわね。」

陽動は、またミサイルの可能性が高いわ。次に航空機っていうとか
しら。」

「分かったよ。それを信じるよ。」

「でも、外れても文句言わないでよね。」

「うん、分かったよ。ありがとう、アスカ。」

こうして、シンジはアスカとの通信を切った。

そして、エヴァンゲリオン各機に対して、アスカの予想とそれに対
する心の準備をするように伝えたのだった。

第55話 決戦！第3新東京市その5（後書き）

ネルフの迎撃体制について

発令所

- ・ゲンドウ、冬月、リツコ、マヤ、シゲル
- ・ミサト：全体の指揮（名目）
- ・マコト：兵器の運用
- ・加持：傭兵部隊の指揮

アスカルーム

- ・アスカ：エヴァンゲリオン部隊の指揮、全体の指揮（実質）
- ・アールコート：アスカのお手伝い

地上部隊

・市中心 レッドアタッカーズ1個中隊、ジャッジマンの部隊1個中隊

・東南東 エヴァ第1小隊：シンジ（現場指揮官、小隊長）、ミンメイ（砲手）、マリア

ワイルドウルフ2個中隊とカルロス中尉ら

・西南西 エヴァ第2小隊：カヲル（小隊長）、サーシャ（砲手）、ミリア

レッドアタッカーズ1個中隊とリッツ大尉、エドモン中

尉ら

・真北 エヴァ第3小隊：トウジ（小隊長）、ケンスケ（砲手）、ハウレーン

エ
ン
中
尉
ウ
ァ
ン
テ
ア
ン
1
個
中
隊
、
レ
イ
ン
ボ
ー
ス
タ
ー
1
個
中
隊
、
グ

第56話 決戦！第3新東京市その6

「將軍、我が艦隊との連絡が取れません。一体、どうしましょうか。」

「やはり、駄目か。」

「はい、ネルフから妨害電波が出ているようです。」

「ふうむ、仕方ないな。潜水艦との連絡はどうだ？」

「駄目です。」

「本部との連絡はどうなっている？」

「駄目です、連絡が取れません。」

「そうか。そうになると、我々独自の判断で動かないといかんな。」

「はい、やむを得ないでしょう。」

「地上部隊間の連絡はどうなっている？」

「はっ。有線方式と、レーザー方式などを併用していますので、何とか連絡は取れます。」

「そうか、では、試したいことがある。」

將軍は、そう言うとニヤリと笑った。

「ミサイル、3方向から来ますっ！」

シゲルの声に、発令所は騒然となった。

それも、そのはず。内陸部から、突然敵のミサイル攻撃があったのだから、無理もない。

「シンジ君、トウジ君、カヲル君、ともにATフィールドを張りましたっ！」

ミサイルは、全てATフィールドに阻まれて爆発、エヴァンゲリオンに被害はありませんっ！」

その声に、発令所の面々は胸をなでおろす。

「マリア、ハウレーン、ミアアの3名が、パレットガンで攻撃を加えましたっ！」

敵の攻撃は、沈黙しましたっ！」

各々の正体の判断で、ミサイルを防御し、アスカの指示で、ミサイル発射地点に攻撃を加えたのだ。

着弾地点からは、それぞれ派手な火の手が上がった。

「偵察へり、出しますっ！」

今度は、ミサトの指示で偵察へりを出すことになった。

普通に考えれば、今頃偵察へりを出すのは遅すぎるのだが、

今のネルフには無人のへりをあまり保有していないという事情があ

ったのだ。

最初からヘリを飛ばしていると、必ず最初の攻撃で撃ち落とされる
ことが分かっているから、
少しでも無人偵察ヘリの被害を減らそうとすることである。

有人ヘリを出せば良いとの意見もあったが、ヘリが撃墜されて、
乗員が楯に取られる危険性があつたため、有人ヘリの投入は見送ら
れたのである。

この無人ヘリからの情報で、敵の攻撃が無人兵器によるものと分か
った。

つまり、敵兵が近くに忍び込んでいるか、それともかなり前から準
備を行っていたか、どちらかだということだ。

念のため、辺りを搜索してみたが、敵兵の姿も形も無かつた。
姿の見えない敵の地上軍に、ミサトや加持は唇を噛んだ。

薄暗い森の中で、迷彩服を着た2人の軍人が、話をしていた。

「將軍、我が方のミサイル攻撃は不発に終わりました。

エヴァンゲリオンのATフィールドに阻まれて、全弾エヴァンゲリ
オンに着弾する前に爆発しました。

そのうえ、即座に敵の反撃があり、ミサイル発射装置は全滅です。」

「そうか。即座に反撃されたか。」

「はい、それが何か？」

「いや、敵のパイロット達が子供だということを聞いてな、反撃にためらいがでるのかどうか、試してみたのだが、やはり無駄だったか。」

「ええ、何のためらいもなく撃ってきたそうです。それも、正確に発射地点を狙ったそうです。」

「まあいい、もう2、3回試してみるか。だが、思った以上にやるなあ。敵の指揮官の名は、なんと言っただけ。」

「はっ、作戦部長の葛城ミサト三佐です。」

「ふうむ。使徒戦を勝ち抜いたのは、伊達ではないってことか。」

「はあ。ですが、葛城三佐は、記憶喪失だったという噂があり、別の人物が実質的な指揮を執っているとの情報もあります。」

「ほう、それは誰だ？」

「はあ、何人か候補がいるのですが。」

諜報部部长代行の加持リョウジ、
作戦部部长代行の日向マコト、
同じく作戦部の青葉シゲル、
サイドチルドレンの碓シンジ、
そして、元セカンドチルドレンの惣流・アスカ・ラングレーです。」

「ほう、子供が指揮を執っている可能性があるって？」

「はあ、何せセルフは人材が乏しいと言われてますので。」

「碓シンジの名が上がった理由は？」

彼は、エヴァンゲリオンに乗るまでは、普通の中学生だったという話を聞いたことがあるが。」

「それにしては、長年訓練を重ねてきた元セカンドチルドレンよりも、使徒戦での戦績が良いのは腑に落ちません。

あの、ゲンドウの息子ですから、普通の中学生だったというのも嘘の情報である可能性が高いと思われます。」

「元セカンドチルドレンというのは？」

「彼女は、エヴァンゲリオンに乗れなくなったこと、それにドイツで軍事面でも英才教育を受けたことがあげられます。」

「ふっ、俺達は、子供の立てた作戦に翻弄されている可能性があるっていうことか。」

「残念ながら……。」

「惣流・アスカ・ラングレーか。さぞ、大きくなっただろうな。まさか、敵同士になるとはな。」

「」存じでしたか。」

「ああ、昔の話だ。可愛くて気の強い娘だったが、今もそうなのかな。」

「はい。可愛いのは間違いありませんが、気が強そうには見えません。」

ですが、エヴァンゲリオンのパイロットでしたから、気が弱くてはやっていけないでしょう。」

「そうだな。だが、あの娘は死なせたくはないな。

一応、全軍に伝えておけ。いつも通り、投降した者と女子供は殺すとな。チルドレンも同様だ。」

「良いのですか。チルドレンには、上から抹殺指令が出ていますが。」

「我々は、狂った野獣ではないっ！」

兵士である前に、誇り高い人間なのだっ！」

子供を傷付けたり殺すのは、人間のクズがやることだっ！」

いざとなったら、俺の命に代えてでも子供達は守るっ！」

お前も、人の親だろう？他人の子供だからといって、見捨てるつもりかっ！」

人間としての誇りを忘れたのかっ！」

「はっ、申し訳ありませんっ！承知しましたっ！」

將軍の部下は、直立不動で敬礼した。

「ミサイルが来たよっ！マリアさん、反撃の準備をっ！ミンメイさん、気を付けてっ！」

先程のミサイル攻撃から、5分も経たないうちに、再度敵のミサイルが襲ってきた。

シンジは小隊長として、訓練通りに部下達に指示を与える。

「くそっっ!」

シンジは、急いでATフィールドを張って、ミサイル攻撃を防いだ。

「ドツカーン!」

ATフィールドを張って間もなく、ミサイルが壁に当たって爆発した。今回も被害無しだ。

「マリアさん、頼むよっ!」

「任せてっ!」

マリアは、アスカからのデータを受信すると、即座にパレットガンを打ち放った。

「バン!バン!バン!」

パレットガンから打ち出された弾は、直ぐに目標地点に着弾し、勢い良く爆発した。

「ふうっ。今度もうまくいったわね。」

マリアは、肩をなでおろした。そんなマリアに、シンジは声をかけた。

「マリアさん、お疲れさま。」

「うっん、碇君こそ大変でしょう。」

「僕なら大丈夫だよ。相手が人間なのは嫌だけど、使徒と比べたら、恐ろしさが違うもの。」

それに、指揮官が優秀だから。」

「あら、惚気話なら聞かないわよ。」

「そ、そんなんじゃないよっ!」

「あゝら、どうかしらね。ミンメイもそう思わない?」

「思う、思う。」

「まったく、もうっっ。」

(やんなっちゃうよな。)

頬を膨らませながらも、有効な反論が出来ないシンジであった。

「さて、お次は何が来るかしら。」

シンジ達が和やかな会話をしている頃、アスカは軽い口調とは裏腹に、目付きは真剣だった。

いくら調べても、敵の地上部隊の概要がさっぱりと掴めないからだ。

現時点では、敵の海上戦力についてはかなりの打撃を与えているし、潜水艦についても、戦自に要請して圧力をかけている。

残る気かりな戦力は、地上部隊と航空機なのだ。

航空機に関しては、戦自に要請して早期警戒管制機 E-3A を2機出してもらい、警戒態勢をとってもらっている。だから、確実とは言えないが、急に戦闘機部隊が現れる可能性は低いはずだ。

そうすると、厄介なのが地上部隊だ。

まとまって動いていれば、所在は掴めるはずなのだが、未だに兵士の一人として所在が掴めない。

しかも、攻撃だけは仕掛けてくる。

多分、見つかりにくいように、少人数に分散して行動しているのだろうが、それにしても手がかりが無さ過ぎる。

夜になると、特に見付けにくくなるはずだ。

だから、今のうちに敵の規模位は掴みたいのだ。

そうしないと、夜陰に乗じて近付かれて、一斉にミサイル攻撃を受ける破目になってしまう。

シンジとカヲルならば、全く心配する必要は無いが、

トウジ達の小隊は、全員がアンビリカブルケーブルの電源供給を受けているため、

電源周りを攻撃されたらひとたまりもないのだ。

北方面を手薄にしたのは、海からの上陸の可能性が低かったからだが、

地上部隊が既に上陸し、作戦行動をとっているととなると、あまり意味が無かったように思える。

「ちっ、しくじったかしら。」

アスカは唇を噛みしめる。

「森を焼き払おうかしら。」

そんな考えが浮かんだが、直ぐに思いなおした。

大火事になって、混乱を招きかねないからだ。

だが、そんなアスカの悩みが吹き飛ぶ出来事が起きた。

敵の大規模な攻撃が始まったのである。

「南方から、戦闘機の大編隊が来ますっ！数は、およそ300機ですっ！」

「何っ！」

シゲルの声に、発令所は大騒ぎになった。

「アスカっ！敵の大編隊よっ！」

ミサトは、我を忘れて怒鳴った。だが、アスカに最優先で情報を回すだけは忘れない。

「大丈夫よ、落ち着いて。今、各小隊に情報を送ったわ。」

ミサトが正面パネルを見ると、3機のエヴァがポジトロンライフルで戦闘機を撃つのが見えた。

だが、敵の編隊は、最初の1機が撃ち落とされるのを見ると、分散して回避行動をとるようになった。

途端に命中率が下がる。

「くっ。アスカっ！何とかならないのっ！」

「やってるわよっ！でも、敵の動きが早すぎて、エヴァの反応が追いつかないのよっ！」

「日向君、そっちはどう？」

「まだ、射程内に入っていません。ですが、射程内に入っても撃ち落とせるかどうか、分かりません。」

「うん。」

ミサトは少し唸った後、アスカの指示を仰いだ。

「アスカ、どうしようか？」

「戦闘機は、エヴァに任せて。」

おそらく、アタシ達の兵器では、戦闘機を撃ち落とすのは難しいわ。日向さんには、加持さんと連携して、敵の地上部隊の攻撃に備えるように指示してよ。」

「ええ、分かったわ。でも、どうしてこんな大編隊が現れたのかしら。」

「おそらく、さっきやつつけた艦隊の空母の艦載機ね。」

どこかに滑走路を確保しておいて、そこに戦闘機を避難させておいたのね。

敵も、勘の良い指揮官がいるっていつことよ。」

「私達の攻撃を読んでいたと言うの？」

「多分ね。」

敵からすると、航空兵力を分散しておいても特に支障は無いし、万一空母がやられた時の保険をかけるのは、当然よ。

でも、これだけ近くに滑走路の代わりを用意しておくなんて思わなかったわ。」

「そうね、やられたわね。」

「でも、これだけならまだ大丈夫よ。」

それよりも、他にも仕掛けて来るだろうから、警戒は怠らないようにしてね。」

「わかったわよ、アスカ。」

「加持さんにも言うておいて。地上部隊の侵攻は近いって。傭兵部隊にも、臨戦体制をとらせてね。」

「ええ、分かったわ。」

だが、この時、すぐ近くにステルス爆撃機が迫っていたのを、アスカ達は気付くはずも無かった。

第56話 決戦！第3新東京市その6（後書き）

ネルフの迎撃体制について

発令所

- ・ゲンドウ、冬月、リツコ、マヤ、シゲル
- ・ミサト：全体の指揮（名目）
- ・マコト：兵器の運用
- ・加持：傭兵部隊の指揮

アスカルーム

- ・アスカ：エヴァンゲリオン部隊の指揮、全体の指揮（実質）
- ・アールコート：アスカのお手伝い

地上部隊

・市中心 レッドアタッカーズ1個中隊、ジャッジマンの部隊1個中隊

・東南東 エヴァ第1小隊：シンジ（現場指揮官、小隊長）、ミンメイ（砲手）、マリア

ワイルドウルフ2個中隊とカルロス中尉ら

・西南西 エヴァ第2小隊：カヲル（小隊長）、サーシャ（砲手）、ミリア

レッドアタッカーズ1個中隊とリッツ大尉、エドモン中

尉ら

・真北 エヴァ第3小隊：トウジ（小隊長）、ケンスケ（砲手）、ハウレーン

エ
ン
中
尉
ウ
ァ
ン
テ
ア
ン
1
個
中
隊
、
レ
イ
ン
ポ
ー
ス
タ
ー
1
個
中
隊
、
グ

第57話 決戦！第3新東京市その7

「將軍、もうすぐ我方の爆撃機、F-117A NIGHT HAWKが到着する時間です。」

F-117A NIGHT HAWKとは、20世紀後半に起きた湾岸戦争でも活躍した、ステルス爆撃機である。

流石に最新鋭とは言えないが、その性能はかなり高い。

これを凌ぐ機体は、量産機としては未だに開発されていない。

「そうか。全軍、所定の位置に展開したか。」

「はっ。將軍の指示通りにしています。」

「そうか。我方の艦隊とは、まだ連絡が取れないか？」

「はい、残念ながら。」

そこに、1人の兵士が息を荒くしながらやって来た。

「將軍！至急お知らせしたいことがあります、やって参りましたっ！」

「何だ？」

「現在、我方の戦闘機が多数第3新東京市に向かっておりまして、
ですが、現在、エヴァンゲリオン部隊の砲撃に晒されているもよう
です。」

それを聞いた將軍の顔がぱっと明るくなった。

「そうか、ご苦労。あいつめ、俺の言うことをしっかりと実行してくれたようだな。」

同じく、明るい顔になった部下も言う。

「これで勝てますかな。」

「ああ、大丈夫だろう。」

將軍は、ニヤリと笑った。

「ちつくしょう！全然当たらないよっ！惣流、何とかならないのかっ！」

ケンスケは、急速に向かってくる戦闘機の大群を前に、慌てふためいていた。

「駄目よっ！敵の動きが早すぎるわよっ！自分で何とかしなさいよっ！」

「そ、そんなこと言ったって。」

「冗談よっ！今考えているから、何とか切り抜けてっ！」

アスカは、ケンスケとの通信を終えると、加持と連絡をとった。

「加持さん、傭兵部隊の出番が来そうよ。」

「ああ、任せておけ。」

「準備はどうかしら。」

「既に臨戦体制にしてある。」

「分かったわ。こっちの方も、うまくフォローするわね。」

アスカは、加持と事前に綿密な打ち合わせをしていた。

このような事態になることが想定出来たため、対策も一応は練られているのだ。

「ああ、頼む。」

そこで、加持との通信は切れた。

アスカは、すぐさま端末を猛烈な勢いで叩くと、戦闘機に対する防衛システムを起動させた。

起動が確認されると、アスカはマリア、ミア、ハウレーンの3人に通信を入れた。

「どう？状況を教えて。最初は、マリアからお願い。」

「中々ポジットロンドライフルが当たらないわ。それでも、30機は撃墜しているわ。」

私もパレットガンを撃っているけど、命中率は良くないわ。」

「ミアは、どう？」

「こちらも、サーシャが痙攣を起こしそうなくらい、命中率は悪い。」

撃墜したのは、20機ほどだ。」

「ハウレーンはどう?」

「まったく、当たらない。せいぜい5機だ。

おそらく、相田は戦闘機を撃つのにためらいがあるのだろう。」

「そう、分かったわ。撃墜したのは、50機位ね。そうすると、残り250機。

これを傭兵部隊に叩いてもらうわ。あと10分後に、指揮系統を変更するわね。

それを境目に、傭兵部隊の一部は、あなた達の指揮下に移るわ。それと同時に、砲手は攻撃を停止。

敵の奇襲に備えて、臨戦体制のまま待機。以上、質問はあるかしら。

「

「ないわ。」

「無い。」

「同じく。」

「じゃあ、お願いね。健闘を祈るわね。」

アスカは、死なないでという言葉を読み込んで、通信を切った。

「うわあああっ!」

シンジは叫び声をあげた。戦闘機が急接近し、雨あられとミサイルを放ったからだ。

「隊長！落ち着いてくださいっ！」

マリアが一喝すると、我に返り、すぐにATフィールドを張った。間一髪、ミサイル群はATフィールドに当たって、爆発する。

「ふう、間に合った。」

シンジは、胸をなでおろした。だが、内心ではかなりあせっていた。

（うつつ、まずいよ〜っ。こんな時にミスしたら、アスカに会わせる顔が無いよ。）

それでも、ミサイルの爆発が収まると、段々と落ち着いてきた。

「ありがとう、マリアさん。ごめんね、取り乱しちゃって。」

「うつつ、いいのよ。それよりも、ATフィールドを暫くの間、張れるかしら？」

「ああ、大丈夫だと思うよ。」

シンジは、ATフィールドを維持するために精神を集中した。

戦闘機からは、散発的にミサイルが放たれるが、ATフィールドを打ち破ることは出来なかった。

シンジは、ミンメイと連携してATフィールドを張った。

そして、敵の攻撃の合間を衝いて、ミンメイのポジットロライフルが閃光を発し、

簡単にはいかないが、徐々に戦闘機を撃ち落としていく。

また、マリアの指揮の元、傭兵部隊の特殊装甲車から発射される地对空ミサイルも、次々と戦闘機に襲いかかる。

マリアは、敵戦闘機の攻撃が特殊装甲車に及ばないように、けん制を行う。

シンジは、ミンメイとマリアが攻撃を受けないように、上手くATフィールドを張った。

このため、エヴァンゲリオンに対するミサイルの直撃はなく、有利な展開が続いた。

この均衡を破ったのは、ステルス爆撃機だった。

エヴァンゲリオンの頭上に到達したこの爆撃機は、多数の爆弾を投下したのである。

さすがに、爆弾を投下するためには、投下口を開かねばならず、この時にネルフにその存在を察知されたのである。

だが、気付いた時にはもう遅く、エヴァンゲリオン部隊の直上で、NN爆弾が爆発した。

このため、パイロット達の注意は頭上に向けられて、横への警戒がおろそかになってしまったのである。

この僅かな隙を衝いて、戦闘機はエヴァンゲリオンに向かって、ミサイルをありったけ発射した。

この時、エヴァンゲリオンのボディ自体は無傷だったが、アンビリカブルケープルを破壊されてしまったのである。

「しまったっ！」

シンジは悔しがったが、後の祭りである。止むなく、シンジ達の小隊は、手近なアンビリカブルケーブルに向かって移動せざるを得なかった。

だが、それを見逃す敵ではなかった。

エヴァンゲリオンの移動先に対して、戦闘機はミサイル攻撃を行った。

このため、あと少しというところで、ケーブルは破壊されてしまったのである。

ちょうどその時、マリアとミンメイの乗機の電源がゼロになった。このため、2機とも動きが止まってしまった。

「マリアさんっ！ミンメイさんっ！」

電源の落ちたエヴァに呼びかけても、返事は帰ってこなかった。

「シンジっ！エヴァを抱えて、移動するのよっ！」

丁度その時、アスカの怒鳴り声が聞こえてきたため、シンジ我に返ることができた。

「わ、分かったよっ！」

シンジは、次なるケーブルを目指して移動した。

一方、他の小隊も同じような状況だったが、トウジの小隊は既に撤退していた。

シンジやカヲルと違って、S2機関を起動出来る者がいないため、ケーブルの破壊とともに、即座に撤退を開始したのだ。

無論、傭兵部隊も同様に撤退した。エヴァの援護無しに戦うのは、自殺行為だからだ。

こうして、北の守りに大きな穴が空いてしまったのである。

それを見逃すゼーレではなく、どこから現れたのか、北部方面から大規模な地上部隊が忽然と姿を見せ、進撃を開始したのである。

その地上部隊は、オートバイを主体とする部隊で、オートバイの数はおよそ2千。

それ以外の歩兵部隊がおよそ3千、合わせて5千人の大部隊だった。

しかも、同じ頃、海からも大兵力が上陸していた。

この部隊は、大島に艦隊が集結する前に、密かに艦隊から離れていた兵士達だった。

20人乗りのゴムボートに分乗し、潜水艦などに曳航してもらって、

かなり早いスピードで第3新東京市の東の海岸に辿り着いたのだ。

ゴムボートの数は、およそ300。約6千人の兵士達が次々と上陸し、第3新東京市を目指したのである。

この状況の中で、踏ん張ったのがカヲルの部隊だ。

カヲルは、アンビリカブルケーブルへの攻撃を見事にかわして、小队としての機能は失っていなかった。

このため、ミリアが近くの戦闘機を追い払い、サーシャが東方面の戦闘機のけん制を行ったため、ワイルドウルフの部隊は敵戦闘機に対する攻撃を継続することが出来たのだった。

だが、カルロス中尉の部隊も含めても2個中隊半のワイルドウルフに対して、

30個中隊、10倍を超える敵は荷が重すぎる。

敵の地上部隊が攻めてくれば、あっけなく蹴散らされるのは火を見るよりも明らかだった。

「シンジ！マリア達を地下に戻してっ！」

「わ、分かったよ、アスカ。」

アスカの指示に従い、シンジはエヴァンゲリオンの射出口にマリアとミンメイの機体を運んだ。

そして、下降していく機体の上でATフィールドを張り、2人の乗る機体をで守りながら、シンジは周りを伺った。

敵の攻撃は休み無く続いたが、ATフィールドに阻まれて、マリア達に危害が及ぶことはなかった。

シンジは気を取り直すと、ポジットロンライフルで戦闘機を狙い撃った。

「落ちてくれっっ！」

シンジは必死になって撃ちまくったが、戦闘機には中々命中せず、シンジは次第に焦りの色を濃くしていった。

(ここで、僕が頑張らなくちゃ。)

シンジは気負ったが、気持ちだけが先に立ち、うまくいかなかった。そこに、アスカから敵のオートバイ部隊を撃つよつにとの指示があった。

「シンジ、北の部隊を攻撃してっ！」

「でも、でもっ。生きている人間を撃つの？」

「しょうがないでしょ。戦争なんだから。」

「でも、他に方法はないの？」

「あつたら、アタシが教えて欲しいわよ。いいから撃ちなさいよ。」

「でも、生身の人間を撃つなんて。」

(そんなこと、僕には出来ないよ。)

さすがにシンジはためらった。

いくら何でも、生身の人間をポジットロンライフルで撃つなんて、恐ろしくて出来なかったのだ。

「良いわっ！もう、頼まないからっ！」

アスカは、怒って通信を切った。

「ア、アスカ！」

シンジは叫んだが、答は返って来なかった。シンジは呆然とした。

（まずいつ。またアスカを怒らせちゃったよ。）

だが、この時シンジは致命的な隙を見せてしまった。それを見逃す
ゼーレではなかった。

爆撃機から、何発もの特殊爆弾が投下されたのである。

それは、ステルス爆撃機秘蔵の、電磁パルス爆弾だったのである。

「エヴァ初号機、沈黙っ！」

シゲルの声に、発令所のメンバーは顔色を失った。

何と言っても、シンジは最後の頼みの綱なのである。

そのシンジが動けなくなるという事態に、誰もが敗北の2文字が頭
の中をよぎっていた。

だが、幸運なことに、カヲルの部隊が残っていたため、

サーシャがシンジの初号機に近づく戦闘機をけん制することができ
た。

だが、カヲルの部隊も自分達を守るのに精一杯である。

このため、北から向かって来るオートバイ部隊と、

東から向かって来る地上部隊を迎え撃つ戦力が無かった。このまま
では、ジリ貧である。

「加持っ！何とかならないのっ！傭兵部隊を突っ込ませてよっ！」

「おいおい、無茶を言うなよ。戦闘機が頭上に群がっているんだぜ。エヴァの援護無しに立ち向かうなんて、自殺行為だ。5分もしないうちに、全滅するのは間違いない。」

「でも、このままだと、内部に侵入されちゃうじゃない。」

「分かるが、今のままだと、打っ手は無いぞ。」

「じゃあ、どうしたら良いのよ。せつかく勝てると思っていたのに。何とか、エヴァを動かすことは出来ないの？」

「今は無理だ。渚君の部隊に接近してもらって、エントリープラグを抜いてもらうしかない。」

それから、他の機体に移ってもらうしかないだろう。」

「そんなの無理よ。渚君達は、自分達の身を守るだけで精一杯なのに。」

ミサトは、青ざめた顔で、正面スクリーンを見つめた。だが、最後の希望を思い出した。

「そうだ、私達には、アスカがいたわ。」

ミサトはすぐさまアスカを呼び出した。

「アスカ！シンジ君のエヴァが動かないの。何とか動かせないかしら。」

「それは無理よ。」

「そ、そんなあ……。」

ミサトは、最後の頼みの綱であるアスカに否定され、がっくりと肩を落とした。

「でも、エヴァが動かなくても、手が無い訳じゃないわ。」

「えっ、ホント？」

「アタシを誰だと思っているのよ。天才美少女、惣流・アスカ・ラングレーよ。」

アスカは、そう言ってニヤリと笑った。

第57話 決戦！第3新東京市その7（後書き）

ネルフの迎撃体制について

発令所

- ・ゲンドウ、冬月、リツコ、マヤ、シゲル
- ・ミサト：全体の指揮（名目）
- ・マコト：兵器の運用
- ・加持：傭兵部隊の指揮

アスカルーム

- ・アスカ：エヴァンゲリオン部隊の指揮、全体の指揮（実質）
- ・アールコート：アスカのお手伝い

地上部隊

・市中心 レッドアタッカーズ1個中隊、ジャッジマンの部隊1個中隊

・東南東 エヴァ第1小隊：シンジ（現場指揮官、小隊長）→起動不能

ミンメイ（砲手）、マリア→撤退
ワイルドウルフ2個中隊とカルロス中尉ら

・西南西 エヴァ第2小隊：カヲル（小隊長）、サーシャ（砲手）、ミリア

レッドアタッカーズ1個中隊とリッツ大尉、エドモン中尉ら

・真北 エヴァ第3小隊：トウジ（小隊長）、ケンスケ（砲手）、

ハウレーンへ撤退

ヴァンテアン1個中隊、レインボースター1個中隊、
グ
エン中尉へ撤退

第58話 決戦！第3新東京市その8

「動け、動け、動け、動け！動いてよっ！」

エヴァンゲリオンの中で、シンジは一所懸命にエヴァを再起動しようと試みていた。

だが、インダクションレバーを何度動かしてみても、何の反応もない。

「どうして動かないんだよっ！」

シンジは、悲しさのあまり、涙を流した。

「お前が動かなくちゃ、アスカが死んじやうんだよっ！」

シンジは、アスカの言葉を思い出した。

『シンジ、絶対に攻撃をためらったら駄目よ。

もし、攻撃するかどうか迷ったら、アタシの死体を思い浮かべて。アタシが敵への攻撃をためらったら、それが現実になるのよ。

良いわね。敵の死体とアタシの死体、選ぶのはシンジよ。

これだけは忘れないでね。』

「ちくしょうっ！僕は、アスカを守るって誓ったのにつ！」

シンジは、敵への攻撃をためらったことを、強く後悔していた。

「僕が、ためらったからっ！」

シンジは、アスカの死体をイメージした。

「アスカが死んじゃうよっ！」

シンジは、アスカの言葉を、さらに思い浮かべた。

『出来る事なら、アタシがシンジの代わりに戦って敵を倒したい。でもね、そうするとアタシの命は間違いなく失われるわ。アタシはまだ死にたくないの。だから、シンジ、お願い。世界のために戦ってとか、みんなのために戦ってなんて言わない。アタシのために、アタシの命を救うために戦って・・・』

「僕が、意気地なしだからっ！僕はバカだっ！大バカだっ！」

シンジは、悲痛な叫びをあげていた。

「アスカは、死にたくないって言っていたのにつ！僕が、大バカだからっ！」

シンジの顔は、苦痛に歪んでいた。

「アスカが、エヴァに乗っちゃうよっ！」

そう、今のエヴァのコアには、アスカのデジタルデータがインストールされている。

このため、アスカがエヴァに乗ると、取り込まれてしまう危険性が高いのだ。

そうになると、もうサルベージを出来る人間がいなくなってしまう。

MAGIの試算では、アスカがエヴァの中に取り込まれる可能性が

80%、
脳を破壊される可能性が20%であった。いずれにせよ、アスカは死んでしまうのだ。

「頼むから、動いてよっ!」

シンジは、狂ったように叫んだ。
だが、エントリープラグ内の電気回路が焼き切れていたため、いくら操作しても無駄だったのだ。
だが、そんなこととは知らないシンジは、いつまでも狂ったように叫びながら、無駄に体力を消耗していったのである。

「カール將軍、初号機の動きが止まりましたっ!」

「そうか、良くやった。」

「はい、しかも、東部方面に我が艦隊の海兵隊が上陸しました。」

「敵の動きはどうなっている?」

「エヴァンゲリオン9機のうち、5機が撤退、1機が起動不能、残る3機が抵抗していますが、
我が戦闘機部隊の攻撃により、防戦する一方です。」

「戦闘機の燃料は、あとどれくらい持つんだ?」

「おそらく、あと4時間ほどかと。」

「それだけあれば、ネルフの中に侵入出来るな。」

「はい。そして、一度侵入すれば、後は我等の勝利です。」

「だが、まだ油断するなよ。いいな。」

「はっ。」

「ようし、駄目で元々だ。ネルフに降伏勧告をしよう。」

カールは、ネルフへの通信回路を開いた。

「ネルフの諸君、私の名はカール。ゼーレの將軍だ。現在の戦況は、君たちにとって極めて不利だ。

どうだろう、無駄に血を流す必要はない。降伏してほしい。そうすれば、みんなの命は保証しよう。」

それに対して、ミサトが噛みついた。

「ふん、ふざけんじゃないわよっ！」

あんた達の言うことなんか、誰が信用するもんですか。

私達は、降伏なんかしないわよっ！」

「ほう、勇ましいな。では、この戦況をどうひっくり返すんだ。

それに、我々にはNN爆弾の用意もある。

君たちがあくまで抵抗するなら、初号機にNN爆弾を投下するだけだ。

それでもいいのかね。」

「うっ。」

ミサトは、言葉に詰まってしまった。

ここで、「ウン」と言えば、シンジは殺されてしまうだろう。それだけは避けたかった。

だが、この回線に割り込んだ者がいた。アスカである。

アスカは、割り込むと同時に他の回線を遮断し、カールとサシで話すことにした。

「お久しぶりね、おじ様。お元気そうで、何よりだね。」

「ほう、アスカか。暫く見ないうちに、綺麗になったな。」

「おじ様には、言葉では言い表せないほどお世話になりました。

それについては、感謝しています。でも、アタシ達は降伏しません、絶対に。」

「良いのか。初号機のパイロットは、アスカにとって、大切な人だろう。」

「ええ、そうです。」

「彼が死んでもいいのかな。」

カールの問いに、アスカは即答した。

「構いません。ですが、その時はアタシも一人で生き延びるつもりはありません。」

アスカは、カールを静かに見つめた。アスカの瞳は、蒼くそして澄んでいた。

「そうか、残念だよ。」

カールはため息をついた。それを見たアスカは、カールを説得しようとして試みた。

「おじ様は、騙されています。ゼーレは、人類を滅亡させるつもりなんですっ!」

「それは違うよ。そうか、アスカはお母さんから何も聞いていないんだね。」

「それは、どういうことですか?」

「ゼーレの目的は、人類の滅亡ではない。もっと別の所にあるんだよ。」

「そんなの、嘘です。」

「嘘じゃないよ。むしろ、人類を滅亡に導こうとする者達と戦おうとしているんだ。」

私は、そのために長い間戦ってきたんだよ。君のお母さんも一緒にね。」

「そ、そんなこと……。」

「信じられないのも、無理は無い。」

だが、人類を滅ぼそうとする者達は、アスカが戦ってきた使徒以外

にもいるんだよ。

そして、想像を絶する力を持っている。今のままでは、人類は滅亡するしかないんだよ。」

「おじ様、何でそんな嘘をつくんですか。」

「私のことも信じてくれないのかね。そうか、残念だよ。

だが、やむを得まい。アスカ、君は自分の信じるもののために戦うんだ。

私も、私の信じるもののために戦う。

アスカ、君は本当に綺麗になったよ。君と戦う破目になったのは、非常に悲しい。

だが、戦うからには、私は全力で戦う。

では、さらばだ。」

「あっ、おじ様！待って！」

アスカの目には、涙が光っていた。

通信を終えると、カールの元に部下がやって来た。

「將軍、NN爆弾の投下準備は出来ています。初号機へは、いつでも攻撃可能です。」

だが、カールは、しばらく考えた後、作戦の変更を伝えた。

「初号機は、もう動かないだろう。そんなものにNN爆弾を使うのはもったいない。

初号機への攻撃は中止。但し、監視は怠るな。」

「はっ！」

部下は、敬礼すると足早に去って行った。

「あのちっちゃな赤ん坊が、大きくなつたなあ。出来れば、死なせたくはないな。」

カールは、アスカのことを思って、シンジに対する攻撃を取り止めた。

カールは、アスカの表情から、シンジを殺せばアスカも後を追って死ぬだろうと考えたのだ。

このため、シンジは命拾いをするのだった。

「ちっ、もう駄目か。」

ドイツの傭兵部隊、ワイルドウルフの隊長ウオルフは、唇を噛んだ。戦闘機の攻撃が激しくなり、エヴァンゲリオンの手助けも期待できない今、

撤退をするかどうかの決断を迫られていた。

だがその時、周りの空間で、急に爆発音が相次いだ。

「な、なんだ、あれは？」

ウオルフが見上げた方向には、大きなロボットらしき機体が浮かんでいた。

トライデント級陸上軽巡洋艦と呼ばれる、戦自の秘密兵器である。

「お父さん、大丈夫？加勢に来たわっ。」

無線から、娘のマリアの声が聞こえてきた。

「マリア、大丈夫なのか？」

「ええ、私が来たからには、安心よ。任せといて。ミサイル、発射
！」

その言葉と同時に、100発のミサイルが同時に発射された。
このため、ゼーレの戦闘機は次々に被弾し、墜落していく。
たちまち、周囲から戦闘機が消えてなくなった。

「す、凄い……。」

あまりの凄まじい戦闘能力に、ウォルフは目を剥いた。

そして、この時から、戦局は大きく変わった。

「トライデント級陸上軽巡洋艦が現れましたっ！」

シゲルの声に、発令所のみんなは、何かと正面スクリーンを食い
入るように見つめた。

そこには、大きなロボットから次々に銃弾とミサイルが発射され、
戦闘機が被弾していく光景が映し出されていた。

このロボットは、つい最近、戦自から大枚はたいて購入したもので、

全部で3隻あった。

『天竜』にはマリアとケイタが、『海竜』にはマックスとミンメイが、『地竜』にはハウレーンとムサシが乗っていた。

天竜は東方面へ赴き、ワイルドウルフを支援した。

海竜は西方面に向かい、カヨル達を支援した。

地竜は北方面に向かい、ヴァンテアンを支援したのである。

その上、上手いタイミングで、市中心部で待機していたレッドアタッカーズ1個中隊と、

ジャツジマンの部隊1個中隊が北部に現れて、ヴァンテアンと共に反撃を始めたのだ。

天竜と地竜には、それぞれ15機の戦闘ヘリ部隊が付き従い、敵に向かつて猛攻撃を加え始めた。

戦闘機は、天竜、地竜、海竜が押さえ、地上部隊は戦闘ヘリ部隊が蹴散らすという

コンビネーションがうまくいき、敵の地上部隊は総崩れになった。

「な、何て威力なの。」

発令所で、ミサトは呆然としていた。

さきほどまで、あれほど苦しめられてきた戦闘機が、一瞬で全機撃墜されたのだから、無理もない。

しかも、ミサトは一度は天竜と同じものを見たはずなのだが、戦闘力がこれほどとは、思いも寄らなかったのだ。

「加持、アンタ知ってたわね。」

我に返ったミサトは、加持を睨み付けた。

「おいおい、何でそんなことを言っただよ。」

「決まってるでしょ。パイロットのことを知っているのは、アンタぐらいでしょ。」

「だから、アレのことも知っていたはずよ。」

「おい、葛城。お前、記憶が戻ったのか。」

「えっ！」

「戻ったんだな。そうだな、そうなんだな。」

「あ、わたし……。」

「良かった、本当に良かった。」

加持は、ミサトを抱きしめた。

「なっ、何すんのよ。恥ずかしいでしょ。」

だが、加持が喜ぶのも無理はない。

ミサトの記憶は、使徒戦以前のものは概ね戻って来ていたのだが、使徒戦の記憶は、殆どが空白だったからだ。

「良かった、本当に良かった……。」

加持に抱きしめられ、息が苦しくなったが、場の雰囲気壊すために言えなくて困ってしまったミサトであった。

「何だ、あれはっ!」

カールは、いつの間にか大声をあげていた。

「そ、それが、正体不明です。」

「ネルフは、あんなものを持っていたのか?」

「そ、そのようです。」

「あいつに、NN爆弾は通じると思つか?」

「はい、通じると思いますが、機動性が高く、命中させるのは困難でしょう。」

それに、我が軍の地上部隊を巻き添えにしてしまいます。」

「そうだろうな。まあいい、あいつの正体について調べるんだ。」

「はい、分かりましたっ!」

「それから、我が軍の被害状況を知らせよ。」

「は、はい。戦闘機は、全機撃墜されました。」

ネルフの北より攻め込んでいた地上部隊ですが、オートバイ部隊は、敵のヘリ部隊の攻撃を受けて後退しています。歩兵部隊も同様に撤退中です。

ネルフの東より攻め込んでいた海兵隊も、同じくヘリ部隊の攻撃を受けて後退中です。」

「まずいな。これでは、打つ手無しだぞ。」

「作戦を中止しますか？」

「そうしたいが、そうもいかないだろう。」

「では、どういたしましょうか？」

「部隊を分散させる。数では、こちらの方が有利だ。

迂回してもなんでもいいから、とにかくネルフへ侵入しろっ！
後退は許すな、いいなっ！」

「はっ！」

部下は敬礼して下がった。だが、部下が去ると、途端にカールの顔は暗くなった。

「ふう、これが俺の最後の戦いになりそうだな。

あんなバケモンみたいな兵器に、どうやって立ち向かえというんだ。」

カールは、降伏すべきかどうか、真剣に悩んだ。だが、カールにも譲れない理由があった。

「アスカは、ゼウスのことを知らないのだろうか。」

さきほどの通信内容から、アスカはゼウスという言葉自体を知らないらしい。

「このままでは、我ら人類は遠からず滅亡してしまう。
アス力達、子供に人類の未来を委ねるか、それとも、やはり俺達が
戦うか。」

カールは、深く悩むのだった。

第58話 決戦！第3新東京市その8（後書き）

ネルフの迎撃体制について

発令所

- ・ゲンドウ、冬月、リツコ、マヤ、シゲル
- ・ミサト：全体の指揮（名目）
 - ・マコト：兵器の運用
 - ・加持：傭兵部隊の指揮

アスカルーム

- ・アスカ：エヴァンゲリオン部隊の指揮、全体の指揮（実質）
- ・アールコート：アスカのお手伝い

地上部隊

- ・東南東 エヴァ第1小隊：シンジ（現場指揮官、小隊長）→起動不能

ミンメイ（砲手）、マリア→撤退

ワイルドウルフ2個中隊とカルロス中尉ら

天竜：マリア、ムサシ

- ・西南西 エヴァ第2小隊：カヲル（小隊長）、サーシャ（砲手）、ミリア

レッドアタッカーズ1個中隊とリッツ大尉、エドモン中

尉ら

海竜：マックス、ミンメイ

- ・真北 エヴァ第3小隊：トウジ（小隊長）、ケンスケ（砲手）、ハウレーン→撤退

エン中尉ら

ヴァンテアン1個中隊、レインボースター1個中隊、グ

中隊

レッドアタッカーズ1個中隊、ジャツジマンの部隊1個

地竜：ハウレーンとムサシ

第59話 決戦！第3新東京市その9

第59話 決戦！第3新東京市その9

「動け、動け、動け、動け！動いてよっ！」

エヴァンゲリオンの中で、シンジはなおもエヴァを再起動しようとして試みていた。

だが、未だに何の反応もない。

「頼むから、動いてよっ！」

シンジは、涙を流し続けていた。

シンジには知る術が無かったが、戦局は一気にネルフに傾いていた。トライデント級陸上軽巡洋艦は、そもそもが敵の航空戦力や地上部隊と戦うことを想定して作られていたようで、武装・機動力ともに敵を圧倒していた。

このため、参戦してから5分と経たないうちに、敵の戦闘機を殆ど撃墜し、爆撃機を追い払い、地上部隊を蹴散らしたたのである。

東部では、マリアとムサシの乗る天竜が、敵戦闘機を蹴散らした後、傭兵部隊と連携して地上部隊を追い払っていた。

北部では、ハウレーンとムサシが乗る地竜が、同様に地上部隊を追い払っていた。

西部では、マックスとミンメイが乗る海竜が、必要に応じて東部と北部の敵に攻撃を加えていた。

だが、ゼーレも持てる最後の力を振り絞って戦いを挑んできた。地上戦力を分散し、退却すると見せかけて転進し、少なからぬ部隊がネルフ本部に接近しつつあったのである。

傭兵部隊の反撃によつて、かなりの部隊が撃退されたが、それでも戦力の差は大きかった。

ただか2千人程度のネルフ傭兵部隊に対して、ゼーレの地上部隊は北から5千人、東から6千人、合計で1万人を超えていたからである。

だが、ゼーレの部隊も、山間部を移動する間は隠れる場所が多く、うまく攻撃をかわすことが出来たが、山間部を出たら隠れる場所もなく、攻めあぐねていた。

「カール將軍！駄目ですっ！これ以上接近出来ません！」

部下が悲鳴をあげた。山間部を出た途端に、戦闘ヘリの銃撃が待っている。

それを切り抜けても、傭兵部隊が満を持して待ち構えているのだ。各部隊からも、ひっきりなしに悲鳴が寄せられる。

「もう、駄目か…。」

カールは肩を落とした。ネルフの勝利は動かないかのように思えた。

「今だ、撃てっ！」

命令と同時に、地対空ミサイルがネルフの戦闘ヘリへと向かっていく。

しかし、戦闘ヘリには当たらず、虚しく空中で爆発した。

逆に、戦闘ヘリからの銃撃に追い立てられ、後退せざるを得なくなった。

「やむを得ん。退けっ！」

小隊長が叫ぶと、兵士達は安心したような表情で後退していく。市郊外の各所で、同じような光景が起きていた。

ゼーレの部隊は、傭兵部隊や戦闘ヘリに阻まれて、どうしても市内に侵入出来なかった。

「ちくしょう！あいつのせいだっ！」

ゼーレの兵士は、空中に浮かぶ大きなロボットを睨み付けた。

そいつのせいで、戦闘機は全て撃墜され、そのため制空権はネルフの手に渡ってしまったのだ。

制空権を敵に握られた地上部隊ほど、惨めなものはない。それが戦力に勝るゼーレが攻め込めない理由だった。

だが、その時、爆発音がして、そのロボットが墜落していった。

「何っ！一体何が起きたんだ！」

兵士はその時おぼろげながら見た。世界最高の戦闘機と言われる、F-22 RAPTORの雄姿を。

「な、何が起きたのよっ！」

ミサトは、呆然とした。

やっとひっくり返した戦局を、50機ほどの戦闘機にひっくり返されたからだ。

「制空権は、敵に奪われたっ！傭兵部隊は、撤退しろっ！急げっ！」

すぐ近くで加持が叫んでいた。

傭兵部隊は、手筈通りに、特殊車両や戦車を手近な建物の中に隠して撤退する。

戦闘ヘリも同様に、ビルの間間に隠れて、敵に分からないように兵装ビルの中に逃げ込んだ。

本来なら敵の戦闘機に狙われるのだが、

そこはカヲル達のエヴァンゲリオン小隊が上手く戦闘機をけん制して、傭兵達のサポートをした。

アスカも、MAGIを駆使して、傭兵達に適切な情報を送り、エヴァンゲリオン部隊に適切な指示を送っていた。

このため、傭兵部隊には特に被害が出なかった。

「ふう、何とか逃げられたか。」

加持はため息をついた。

「だが、一体何が起きたんだ。」

「F-22 R A P T O R が来たのよ。そして、電磁パルス爆弾をお見舞いされたのよ。」

ミサトがげんなりとした顔で答える。それで加持は全てを悟った。世界最強の戦闘機と言われるF-22 R A P T O R は、ステルス性能が高く、スピードもピカ一なので、気付いた時にはやられているという、とんでもない戦闘機なのだ。

アメリカの空母が沈んだため、もうやって来ないと油断していた隙を衝かれた格好になっていた。

「それはまずいな。で、パイロット達はどうしている?」

「それは大丈夫。アスカが万ーのことを考えて、良い脱出装置を装備していたの。」

「そうか、それは良かった。」

加持は胸をなでおろしていた。

もし、ケイタとムサシに何かあったら、マナに顔向け出来ないからだ。

「だが、葛城。一体どうする?」

「今、アスカに対策を考えてもらっているわ。」

ミサトの顔は、焦りを浮かべていた。

「惣流さん、全部隊、耐毒ガス装備完了しました。」

アールコートとの報告と同時に、アスカはミサイル発射ボタンを押した。

「頼むわよっ！」

アスカが叫ぶと同時に、数十発のミサイルが敵陣めがけて飛んで行った。

ミサイルは、敵部隊の上空で爆発し、猛毒ガスが次々と敵兵士に襲いかかる。

そして、バタバタと敵兵士は倒れていく。

だが、一部の部隊は、耐毒ガス装備をしているらしく、侵攻ペースを落としながらも接近してくる。
その数は、およそ3千人だった。

「ちっ、思ったよりもかなり多いわね。」

アスカは舌打ちした。

実は、この毒ガス攻撃が最後の手段だったのだ。もう、これ以上の策は無い。

だから、この攻撃で敵の数を1、000人以下にしたかったのだ。このままだと、敵の方が数に勝っていることや、制空権を奪われているため、敵の侵攻を防げないのだ。

「大変ですっ！エヴァンゲリオン部隊がやられましたっ！」

アールコートが悲鳴をあげる。僅かな隙を衝いて、敵の電磁パルス爆弾がエヴァンゲリオン部隊の至近で爆発したのだ。これによって、最後の頼みの綱のエヴァンゲリオン部隊は戦力外になってしまった。

「くっ、ここまでのようね。」

アスカは唇を噛みしめた。

「どうして、どうして動かないんだよ。」

シンジは、なおも涙を流し続けていた。

「このままじゃ、アスカが死んじゃうよっ！」

だが、インダクションレバーを引いても、何をしても、エヴァは動く気配を見せなかった。

「こんなことなら、アスカを無理やりにも…。」

実は先日のこと、シンジは最後の一线を越えたいと、強く懇願したのだ。

これに対して、アスカは『20歳までは駄目よ。』と言って断わられたのだ。

だが、シンジもこの時ばかりは

『生き延びられるかどうか分からないじゃないか。だから、お願いだよ、アスカ。』
と、簡単に引き下がらなかったのだ。

これに対し、

『駄目よ。そんなことしたら、アンタは思い残すことが無くなっちゃうじゃない。』

今回は必ず生き延びて、さらにあと5年以上生きるのよ。これは、命令よ。

命令を守ったら、ご褒美をあげるわよ。そうすれば、一所懸命戦うでしょ。』
と一蹴されたのだ。

その時、シンジは悩んだ。このまま押し倒してしまおうかと。

だが、そんなことをして、アスカに万一嫌われたりしたらと思うと、恐ろしくて出来なかった。

もっとも、悲しいことだが、アスカには腕力では敵わないという思いもあった。

だから、シンジに出来たことは、恨めしそうな、情けないような顔をして、

アスカの同情を引くことだけだったのだが、その作戦も効果が無かった。

「あゝあ、僕って情けないや。アスカが言う通り、バカでスケベなのかな。」

だが、シンジは違うと思っていた。

シンジは、アスカとの確かな絆が欲しかったのだ。
単に男の欲望から言い出しただけでは無いのだ。

「あゝあ、でも失敗だったかな。」

シンジは大きく後悔した。

もうちよつと良い雰囲気を持ち込めたら、

何かアスカが喜ぶようなプレゼントでも送ってから頼んでいたら、

『愛している』というセリフを恥ずかしがらずに言うことが出来たら、

もしかしたら結果は違っていたかもしれないと考えたのだ。

「でも、アスカは確かに言った。『命令を守ったら、ご褒美をあげるわよ。』って。

それなのに、僕はアスカの命令に従わなかったんだ。僕って本当にバカだな。

アスカは、僕が約束を守らないって分かっていたから、断ったんだろうか。」

だが、もしあの時、アスカと最後の一線を越えていたら、自分はアスカの命令を忠実に守り、敵に対して隙を作らず、今も戦い続けていた可能性が高いとの思いもあった。

確かにアスカのことを愛してはいるが、アスカが自分のことを同じように思っているのか、自信が無かった。

それが、迷いに繋がっていると考えたのだ。

シンジは、自分に自信というものが無かった。

だから、婚約までしたのに、アスカが自分のことを好きかどうか、自信が持てなかったのだ。

それは、アスカが婚約のことを仮初めだと言ったせいもある。

少し考えれば、それがアスカの照れによるものだと分かりそうなものだが、
女心が全く分からないシンジには、理解することが出来なかったのだ。

だが、シンジは急に首を振った。

「駄目だ、こんなことを考えていちゃあ。

今は、エヴァを動かすことだけを考えなくちゃ。

そうしないと、本当にアスカは死んでしまう。それだけは、絶対に嫌だっ！」

シンジは、徒労に終わることが分かってはいたが、なおもエヴァを再起動すべく努力を続けた。

今諦めたら、一生後悔することが分かっていたからだ。

「アスカ、頼むから死なないで。」

シンジは悲壮な顔をしていた。

第59話 決戦！第3新東京市その9（後書き）

ネルフの迎撃体制について

発令所

- ・ゲンドウ、冬月、リツコ、マヤ、シゲル
- ・ミサト：全体の指揮（名目）
 - ・マコト：兵器の運用
 - ・加持：傭兵部隊の指揮

アスカルーム

- ・アスカ：エヴァンゲリオン部隊の指揮、全体の指揮（実質）
- ・アールコート：アスカのお手伝い

地上部隊

- ・東南東 エヴァ第1小隊：シンジ（現場指揮官、小隊長） 起動
不能

ミンメイ（砲手）、マリア 撤退

ワイルドウルフ2個中隊とカルロス中尉ら 撤退

天竜：マリア、ムサシ 撤退

- ・西南西 エヴァ第2小隊：カヲル（小隊長）、サーシャ（砲手）、
ミリア 起動不能

レッドアタッカーズ1個中隊とリッツ大尉、エドモン中

尉ら 撤退

海竜：マックス、ミンメイ 撤退

- ・真北 エヴァ第3小隊：トウジ（小隊長）、ケンスケ（砲手）、
ハウレーン 撤退

ヴァンテアン1個中隊、レインボースター1個中隊、グ
エン中尉ら 撤退

レッドアタッカーズ1個中隊、ジャツジマンの部隊1個
中隊 撤退

地竜：ハウレーンとムサシ 撤退

第59話補完 奇跡の女神

「あゝあ、アタシは結構頑張ったのにな。」

アスカは、ケージへと向かっていた。

今は、何体かのエヴァンゲリオンが収容されている。

アスカは、そのうちの1体に乗って、出撃するつもりだった。

だが、アスカはエヴァには乗りたくなかった。

現在のエヴァのコアは、アスカの人格を使用しているため、アスカがエヴァに乗り込むと、

良くてエヴァに取り込まれ、悪くすると脳が破壊されてしまうのだ。いずれにせよ、もう生きては戻れないのだ。

だから、MAGIEに細工をして、アスカのシンクロ率をわざと低く表示させて、

エヴァのパイロットから引退したのだ。だが、その努力も無駄になつてしまった。

「あゝあ、本当にアタシの人生真つ暗ね。」

アスカは自分でも知らないうちに、涙を流しながら歌っていた。

「ママには首を絞められて、大人に陰口叩かれて、

子供はいじめの雨嵐、殴られ蹴られて、つねられた、

あゝあ アタシの人生真つ暗ね、生きるの辛い毎日よ、

必ずいつかは見返すと、唇かみしめ、耐えたのよ、

エリート少女になつたけど、その日にママが首吊つて、
厳しい訓練休み無し、心も体も、ボロボロよ、
あゝあ アタシの人生真つ暗ね、ただど涙は見せないよ、
皆の前では強がつて、いつも心で、泣いていた、

大きくなつたら人類の、未来を賭けて、戦つて、
ママの願いを知つてから、生きる支えが、出来たのよ、
あゝあ アタシの人生真つ暗ね、寝る間も惜しんで頑張つて、
地獄をもたらず使徒どもと、この身を捨てても、戦うよ、

いきなり空から落されて、気付けば周りは敵だらけ、
鉛の弾が雨あられ、死ぬのは嫌よと、戦つた、
あゝあ アタシの人生真つ暗ね、どんどん湧き出る敵兵士、
気付けば体は血まみれよ、これは夢よと、嘆いたの、

幾多の戦場渡るうち、傭兵稼業が板に付き、
精鋭部隊に入れられて、最前線で、戦つた、
あゝあ アタシの人生真つ暗ね、ただど負けないくじけない、
力の限りに戦つて、この手で勝利を、掴むのよ、

あゝあ アタシの人生真つ暗よ、ただどアタシは逃げないよ、
誰かがアタシの身代わりに、地獄に落ちて、しまうから、

ちっちゃな頃から生き地獄、12で悪魔と呼ばれたよ、
敵の中に突っ込んで、近寄る者皆、切り裂いた、
あゝあ アタシの人生真つ暗ね、心は荒んでいくばかり、
良い子になろうとしたのに、どこで歯車、狂つたの、

仲間が地雷を踏んだのさ、とつても良い奴だったのに、

散らばるかけらをかき集め　　明日は我が身と　　泣いたのさ
あ　あ　アタシの人生真つ暗ね　　淡い初恋だったのに
尽きずに流れる血の涙　　いつかは枯れると　　信じたい

仲良いあの娘と二人して　　旅に出ようと決めたのさ
敵の組織に見付かって　　血ヘドが出るまで　　殴られた
あ　あ　アタシの人生真つ暗ね　　何処に行っても敵だらけ
果てなく続く戦いに　　早く終わりが　　来ないかな

熱い心は命取り　　夢は捨てると教えられ
死ねば地獄と言っけれど　　ここよりましよと　　言いたいわ
あ　あ　アタシの人生真つ暗ね　　悲しい未来が見えてくる
体が朽ちても戦って　　拳げ句の果ては　　野垂れ死に

たとえこの身を裂かれても　　地獄の業火に焼かれても
決して逃げずに戦うよ　　それがアタシの　　生きざまよ
あ　あ　アタシの人生真つ暗ね　　いっつも損な役だけど
仲間を守るためならば　　命を捨てても　　惜しくない

あ　あ　アタシの人生真つ暗よ　　だけどアタシは逃げないよ
誰かがアタシの身代わりに　　地獄に落ちて　　しまっから

勇んで日本に來たけれど　　戦う相手は天使だと
そのうえアタシは2番手で　　アタシのプライド　　ずたずたよ
あ　あ　アタシの人生真つ暗ね　　だけどアタシはくじけない
必ずトップになってやる　　それを励みに　　頑張るよ

今度の仲間は頼り無く　　だからアタシが頑張って
敵に向かって行ったけど　　物の見事に　　返り討ち

あゝあ アタシの人生真つ暗ねゝ 見事に踊って見せたのにゝ
下手な仲間に合わせてゝ 逆にアタシがゝ 怒られたゝ

バケモノ相手に戦つてゝ 心は日ごとにすり減つてゝ
やることなすこと裏目つてゝ 最後は心をゝ 壊されたゝ
あゝあ アタシの人生真つ暗ねゝ だけどアタシは強いんだゝ
いつかは必ず甦りゝ 見事に復活ゝ してみせるゝ

最後に一花咲かせよゝ バケモノ相手に大暴れゝ
ラストの一匹倒したがゝ いきなり目玉をゝ 射抜かれたゝ
あゝあ アタシの人生真つ暗ねゝ バケモノどもが起きてきてゝ
この身を割かれて食われたよゝ おまけに最後はゝ くし刺しよゝ

気になる男に告られてゝ 恋人同士になつたけどゝ
男は爆弾モロに受けゝ 今にも死にそうゝ 危ないわゝ
あゝあ アタシの人生真つ暗ねゝ 男のために死ぬなんてゝ
アタシらしくはないけれどゝ 他に手段はゝ ないのよねゝ

あゝあ アタシの人生真つ暗よゝ だけどアタシは逃げないよゝ
誰かがアタシの身代わりにゝ 地獄に落ちてゝ しまつからゝ」

アスカは、歌いながら、今までの人生を振り返っていた。
確かに、死にたくはない。でも、今戦わなければ、ネルフのみんな
が死んでしまう。

敵の司令官がカール將軍であることが分かったため、おそらく旧知
の自分は、抵抗しなければ助かるのは分かっていた。

だが、大人達は無傷では済まないだろう。

それに仲間達も抵抗すれば殺されてしまうし、エヴァンゲリオン

パイロットはただでは済まないだろう。

助かるとしても、自分だけかもしれない。ならば、自分一人の被害で済むならば、やむを得ない。

シンジは怒るかもしれないが、自分が一人生き残るのは、死ぬよりも辛いのだ。

「シンジ、アンタだけは何としても助けてみせる。」

アスカは、シンジを救うため、命を捨てる覚悟をしていた。

「はっ！」

それまで眠っていたレイは、急に目を覚ました。

「そんなことをしたら、ダメ。碇君が悲しむ。」

レイは唐突に呟いた。

「どうしたんだ、レイ。君には休息が必要だ。もう少し休んでいるんだ。」

近くで声がした。だが、レイは首を振った。

「駄目だよ、レイ。今、力を使ったら、君は死ぬかもしれない。運が良くても、長い間、眠り続ける破目になるだろう。」

だが、再度レイは首を振った。レイの本質は、誰にでも慈愛を捧げる女神である。

自分の身可愛さに、大切な人を見捨てることは出来ないのだ。
アスカもシンジも、レイにとってはかけがえのない大切な仲間であ
ったから、尚更だ。

「ダメ。今を逃したら、碓君が死んじゃう。」

だが、シンジに対する気持ちの方がやや強かったようだ。
レイの側にいた少年は、軽く首を振ったが、諦めたようだ。

「分かったよ。それなら、僕も力を貸すよ。それで良いね。」

無論、レイは頷いた。そして、手を合わせ、精神を集中させた。
側にいた少年も、同様に精神を集中させた。

2人の気は徐々に大きくなり、ついには膨大なエネルギーの塊とな
った。

「碓君、私の力を受け取って！」

レイが声を発したその瞬間、火星の大地の割れ目から、まばゆいば
かりの光が地球に向けて放たれた。

「碓君、どうか、生き延びて……。」

レイはそこまで呟くと、意識を失った。

第59話補完 奇跡の女神（後書き）

やっぱり、レイ抜きのエヴァンゲリオンは味気ないですね。

この話では、アスカと張り合うような世俗的なレイではなく、もっと上の、女神的な存在にすることにしました。

でも、当分出て来ないかも。と言うより、これが最後の登場になるかもしれない。

第60話 決戦！第3新東京市その10

火星から放たれた光は、動かない初号機へ浴びせられた。

「大変ですっ！初号機に正体不明の光がつっ！」

「何ですってっ！もっと詳しく報告してっ！」

ミサトは目を剥いた。

「は、はい。第15使徒の攻撃に酷似しています。

ですが、エヴァンゲリオンとの連絡が取れないため、内部で何が起きているのか、全く分かりません。」

恐々報告するシゲルだった。

「光線の分析は？」

「可視波長のエネルギー波です。ATフィールドに近いものですが、詳細は不明です。」

第15使徒の攻撃のパターンと比較しましたが、相違は発見出来ませんでした。」

「最悪ね。こんな時に、使徒の攻撃があるなんて。」

使徒は滅んだ訳じゃあ無かったのね。

シンジ君の様子はどうなの？」

「駄目です。全くモニター出来ません。」

「ちっ！アスカッ！聞こえてるっ！」

ミサトは、アスカを呼び出したが、返事は返って来なかった。

「ど、どうしたのよ。」

ミサトは、目の前が真っ暗になった。

「な、何だあれは？」

初号機に降り注ぐ1条の光を見て、ゼーレの兵士達は侵攻を停止した。

だが、一部の兵士は、事前に第3新東京市に潜入していたことがあったため、

それが第15使徒の攻撃と似ていることに気付いてしまった。

「あ、あれは、使徒の攻撃と同じだっ！」

「何だっ。使徒はもう来ないんだろう？あの話は嘘だったのか？」

「まずいぞ。今使徒に攻められたら、対抗出来るのはエヴァンゲリオンしかない。

だが、俺達が倒してしまった。」

ゼーレの兵士達は、恐怖に駆られた。

もう二度と使徒は来ないと教え込まれて来たのに、目の前で使徒らしき攻撃を見たのだから、無理も無かった。

「て、撤退だっ！撤退するぞっ！」

ゼーレの地上軍は、総崩れとなった。

ゼーレの一般兵の中には、使徒のことを知らない者もいたが、中隊長以上は殆どが知っていた。

その中隊長らが真つ青な顔をして逃げ出すものだから、部下達が平気でいられるわけがなかった。

「なっ、一体どうして？」

カール將軍の目にも、その光は見えていた。だが、その驚きも、部下の報告で中断された。

「將軍。わが軍はあの光を見て、使徒の攻撃が近いものと考え、総崩れになりました。」

「うっむ、そうか。だが、あれが使徒の攻撃だしたら、俺達も危ういな。」

だが、撤退したとしても、我々に待っているのは死しかない。」

「ですが、万一使徒が攻めてきたら、ネルフを倒しても我々はお終いです。」

「ここは、一旦引くべきではないでしょうか。」

「確かにそうだが、しかし……。」

カールは少しだけ考えたが、覚悟を決めた。

「総員に伝えよ。全員、武器を捨てて撤退、又は投降せよ。私の命を差し出して、極力兵士達の助命を乞うことにしよう。それでいいな。」

「そ、そんな…。」

「指揮官が投降すれば、ネルフも使徒との戦いに専念出来よう。今となつては、他に方法は無い。いいな。」

「はい。しかし、私もお供させていただきます。」

「ふん、お前も思ったよりも馬鹿な奴だな。」

「そりゃそうですよ。上官に似てしまいましたから。」

その瞬間、2人は大笑いした。

「葛城作戦部長！敵からの通信です。」

シゲルの声と同時に、正面パネルにカールの顔が映った。

「ネルフの諸君、私の名はカール。ゼーレの將軍だ。どうやら、使徒はまだ生き残っているらしい。」

我々の側でも確認したが、初号機を攻撃している光線は、大気圏外から来ている。

おそらく、使徒の攻撃に間違いないだろう。

このような状況で、人間同士が争うのは愚かなことだ。

どうだろう、無駄に血を流す必要はない。

私の命を差し出すから、降伏を認めて欲しい。
そして、一般兵士達の命の保証をして欲しい。」

「では、そちらの部隊の即時武装解除を要求します。」

「ああ、分かった。戦闘機に対しては、郊外の道路への着陸を命じてある。」

地上部隊に対しても、武装解除を命令した。だが、爆撃機と潜水艦には連絡が取れないのだ。」

「分かりました。良いでしょう。そちらの停戦を受け入れましょう。」

ミサトがゲンドウの方をちらりと見たら、ゲンドウは頷いた。

「では、我々がこれから指示する場所に速やかに移動してください。」

「分かった。だが、一つだけ質問がある。あの毒ガスに侵された者は助からないのか？」

「ええ、48時間以内に解毒剤を注射しなければ、助かりません。」

それを聞いたカールの顔が、僅かに明るくなった。

「では、その解毒剤の注射をお願い出来るだろうか。」

「ええ、良いでしょう。」

そのためには、速やかに武装解除し、我々の捕虜となっていたことが条件になります。」

「分かりました。感謝します。」

こうして、ネルフとゼーレの戦いは、予想外の結末を迎えた。

「良かった。これで、戦いは終わりか。」

発令所内に喜びが満たされようとした時、ミサトが叫んだ。

「まだよっ！シンジ君を助けないとっ！」

ミサトは、未だに未知の光線に晒されている初号機を、見つめていた。

「な、何だよっ、これはっ？」

シンジの体の周りは、不思議な光に包まれていた。

「なっ、何が起きているんだよっ。」

シンジは叫んだが、誰からも、何処からも返事は無かった。

「あっ、こ、これは、綾波の感じがする。」

シンジは、光の中に、レイを感じていた。

「あれっ、何か、変な感じがする。」

シンジは、遙か遠くの爆撃機の気配を感じ取った。
その爆撃機は、今にもNN爆弾を投下しようとしていた。

「動け、動け、動け、動け！動いてよっ！」

シンジはエヴァを再起動しようと試みた。すると、今回は今までと勝手が違った。

機械的な反応は無かったが、何故かエヴァを体で感じられるような気がしたのだ。

シンジは目を閉じると、周りの景色が頭の中に浮かんでいた。

「こ、これならいけるかもっ！頼むから、動いてよっ！」

シンジが願うと、エヴァンゲリオンは動きだした。

「アスカは、僕が守るんだっ！」

シンジは、爆撃機の方を睨み付けた。

「落ちろっ！」

叫びと共に、その爆撃機は大爆発を起こした。爆発の後には、十字型の光が輝いていた。

この後、シンジは同様に敵の潜水艦を全て破壊したのだった。そして、なんとか発令所と連絡をとることに成功した時、シンジは、涙声のミサトに驚くことになる。

「勝ったな、碇。」

「ええ、先生。」

「やったわね、加持っ！」

「ああ、やったな、葛城。」

「先輩、私達、勝ったんですね。」

「ええ、勝ったわ。運良くね。」

「シゲル、やったな。」

「ああ、マコトも良く頑張った。」

「マヤちゃん、やったね。」

「ええ、シゲルさんもご苦労さま。」

「リッコさん、勝ちましたね。」

「ええ、お互い無事で良かったわね。」

発令所は、歓喜に包まれていた。みんな、抱き合って喜びを分かち合った。

流石にゲンドウと冬月は抱き合ったりしていないが、シゲルはマヤと、マコトはリッコと、マヤはリッコと、どさくさに紛れて抱き合ったりしていた。

発令所の外では、傭兵部隊がゼーレの兵士達を拘束していった。戦闘機についても、最新鋭のF-22 RAPTORGが50機、無傷で手に入った。

武器弾薬も、かなりの量が押収された。

エヴァンゲリオンのパイロットやムサシ・ケイタも軽傷であり、直ぐに収容された。

シンジも、マリアがエヴァを起動して回収し、ケイジにてエントリープラグを抜き出した。

エントリープラグを開いたのは、アスカだった。アスカがエヴァに搭乗する寸前に、ミサトからの連絡が間に合い、危ういところでエヴァに乗らずに済んだのだ。

「い、碓二尉。良く頑張りました。ご苦労さま。」

それを聞いた周りのパイロット達は、苦笑いしたが、マリアが優しく言った。

「良いのよ、アスカ。もう、あなたは指揮官としての役目は終わったのよ。」

だから、遠慮しないで良いのよ。」

「そうだよ、惣流さん。もう、戦いは終わったんだ。」

僕達のことには気にしないで。今から惣流さんは指揮官じゃない。やりたいようにやって良いんだよ。」

「そうや、そうや。我慢せんでいいんや。」

みな、口々にアスカに声をかけた。

「みんな、有り難う。分かったわ。アタシ素直になる。」

アスカは、シンジに涙を流しながら近付いていった。そして、アスカとシンジの顔が近付いた時…

「シンジのバカッ！心配したんだからっ！」

「バシッ！」

シンジの顔には、季節外れの紅葉が真っ赤に咲いていた。

「はははっ。やっぱりね。こうなるんじゃないかと思っていたんだ。」

苦笑いするシンジの首に、アスカは思いつきりしがみついた。そして、わあわあ声をあげて泣いたのだった。

シンジは、そんなアスカの頭を、いつまでも撫でていた。

「結婚、おめでとう！」

「ミサトさん、綺麗やで。」

「加持さん、カッコいいわよ。」

ゼーレとの戦いから約1週間後のこと、ミサトと加持の結婚式が盛大に行われた。

ミサトは純白のウエディングドレスだった。

それは、アスカがプレゼントした高価な品で、普段のミサトの美しさに、さらに磨きをかけていた。

普段のミサトを知る人でも、まるで天使のように美しかったと感想を述べる者も多かった。

シンジも、ミサトの美しさに目を奪われてしまい、アスカに思いつきり尻をつねられたほどだ。

2人は、戦火の跡が残る第3新東京市を避けて、第2新東京市郊外にある教会で式を挙げ、

第2新東京市内で最も高級なホテルで披露宴を行った。

ネルフ幹部の殆どが最初から最後まで出席したが、ゼーレとの戦いから間がなかったため、

一部幹部は結婚式又は披露宴の片方に出席することとなった。

ゲンドウ、シゲル、マヤは、結婚式だけに出席した。

冬月、マコトは、披露宴のみの出席である。

エヴァのパイロットは、カヲルが居残りで、他のパイロットは全員出席である。

無論、ケンスケとユキは2人でビデオや写真を撮りまくっていた。

その日の披露宴は、昼過ぎに始まったにもかかわらず、終わったのは真夜中になってしまった。

最後は、ほぼ全員がへべれけになってしまっていた。

さて、戦後処理についてだが、敵の総司令官のカール將軍は、副官ともども国連が開く裁判にかけられることになった。

一般兵達は、それぞれの母国に強制送還され、母国で裁判を受けることになったが、

一定以上の地位の者は、カールと同様の扱いである。

捕虜の数は、最終的に30万人を超えた。

地上部隊でも、連絡が上手く取れずに待機していた部隊がかなり多く、

また、壊滅した艦隊から救助された兵士も20万以上いたからだ。

戦死者だが、あれだけの戦いの割りには少なかったと言える。

戦闘機は殆どが無人機であり、壊滅した艦隊にしても、狙いが正確だったため、ミサイルは動力部に命中していた。このため、死傷者は僅かだったのである。

地上部隊にしても、毒ガスに倒れた者は解毒剤を注射されて命を取り止めていた。

また、早くから制空権を奪われていたためと、司令官であるカールが無茶な攻撃を命じたため、被害は思ったよりも軽微だった。

ネルフの側も、死傷者は殆ど出なかった。アスカの立てた作戦が上手くいったのと、加持の指揮が適切だったのが理由と考えられる。

それに、初号機を襲った光については、使徒からの攻撃の可能性が濃厚との見解が発表されたため、恐れをなした各国は、ネルフへの全面支持を打ち出した。

そして、ゼーレは徹底的に叩かれて、キール・ロレンツ議長を始めとする委員会のメンバーは、全員が逮捕され、裁判にかけられたのである。

こうして、ネルフは対使徒機関として当分の間存続することが決定し、エヴァンゲリオンは、1年後を目処に、各支部へ分散配置されることや、

本部においてパイロットの選出及び訓練を行うことが決定された。

「ねえ、シンジ。夜風に当たろうよ。」

披露宴の最中、アスカはシンジをバルコニーへと誘った。そして、2人きりになると、言いにくそうに切り出した。

「あのさあ、もうちょっとこのままでも良いかしら。」

「へっ、どういふこと。」

「アタシさあ、世界中で人気者になったから、婚約者がいるっていうのはまずいらしいのよ。」

だから、しばらくこのままでもいいよつか。」

「そ、そんなあ。」

シンジは涙目になった。

「なあんてね、嘘よ、嘘。」

「脅かさないでよ。心臓が止まるかと思っちゃったよ。」

「なっ、なんて小心者なのよ。」

「ちっ、違うよ。それだけアスカのことが好きなんだよ。」

「ふうん、じゃあ証拠を見せてよ。」

アスカは笑いながら目を閉じた。

（アスカ、綺麗だよ。愛している、誰よりも。）

シンジは、アスカを優しく抱きしめて、キスをした。
そのまま、2人の時間は暫くの間、止まっていた。

第三部 ゼーレとの戦い - 激闘編 - 完

第60話 決戦！第3新東京市その10（後書き）

ようやく第3部が終了しました。最後はかなり強引な終わり方にしてしまいました。ゼーレの指揮官がまともな人物であること、レイが火星にいたことを匂わせていたことから、こういう終わり方もありかなと、納得していただけたのではないかと思います。

えっ、何でレイが火星にいたのかって？全ては、この戦いの勝利の伏線なのです。月だと光が届かないかもしれませんが、金星だと厚い雲があります。消去法で火星になった訳です。地球外からの光というのは、ネルフの存続に一役買いますしね。まあ、他にも理由はありますが、ネタバレになるので、伏せておきます。

最後はレイに美味しい所を全部持って行かれましたが、シンジやアスカもそれなりに活躍したので、アスカファンやシンジファンの方、お許し下さい。

で、第4部ですが、ゼーレとの戦いは終止符を打つたため、学園ものになるかもしれません。

第4部 ネルフ再生

第61話 波乱の研修生

「あゝあ、眠いわねえ。」

アスカは眠そうな顔をしている。

「何言ってるのさ。最近のアスカは、一杯寝ているくせに。」
(さっさと寝ちゃっくせにさ。)

「シンジのくせに、うっさいわねえ。」

アスカは頬を膨らませた。

「なんだよ、怒らないでよ。」

(でも、アスカはいつ見ても可愛いや。)

「ふん、良いでしょ。さあて、朝御飯でも食べましょうよ。」

そう言いながら、アスカは自分の部屋へと戻って行った。

「おはようございます、惣流さん。」

「惣流、おはよう。」

アスカが朝食を食べようとダイニングに入ると、ユキとケンスケが声をかけてきた。

「ああ、おはよう。ユキに相田。あれ、待ってたの?」

「そうですね。惣流さんと一緒に食べたかったから。」
とユキ。

「悪いわね。シンジも、もうすぐ来るから、そしたら食べましょう。」

「ええ、いいですよ。」

「じゃあ、アタシはリツコを起こすから、相田は日向さんと渚を連れてきなさいよ。」

「ああ、分かったよ。」

こうして、いつもの朝食風景が始まる。ミサト達は新婚旅行に行っているため、アスカ、シンジ、ユキ、ケンスケ、リツコ、マコト、カヲルの7人で食事をするのだ。

ちなみに、トウジとヒカリは小さい子供達と一緒に食べている。

「ねえ、リツコ。ミサトはいつ新婚旅行から戻ってくるんだっけ。」

「そうね、5日かしら。結婚休暇は10日間のはずだから。」

「始業式まで、日が余り無いけど、大丈夫かしら。」

「大丈夫よ、ミサトのことだから。」

「まあ、リツコが言うなら間違いないでしょうけど。」

そこに、シンジが口をはさんだ。

「それより、アスカ。今日研修生が来るんでしょ。ちょっと緊張しちゃうよね。」

「えっ、なんでよ。」

「だって、きつとみんな、僕よりも凄い人ばかりなんだろうと思うと、緊張しちゃうよ。みんな、エリート中のエリートなんですよ。」

「（そうか、アスカはエリートだから、緊張しないんだ。いいなあ。）

「なあに、心配してんのよ。シンジは、このアタシにすら勝ったんだから、心配なんて、しなくても良いのよ。」

「そうは言ってもなあ。」

（アスカと僕は、出来が違うんだけど。）

シンジは、結構心配だったのである。

「初めまして、研修生の皆さん。技術部の部長代行の伊吹マヤです。」

「作戦部の部長代行の日向マコトです。」

「作戦部の青葉シゲルです。」

「作戦部の、エヴァンゲリオン、チーフパイロット、碓シンジです。」

「作戦部の、エヴァンゲリオン、サブチーフパイロット、鈴原トウジです。」

「作戦部のパイロット、渚カヲルです。」

「広報部のチーフ兼総務部のパイロット担当チーフ、惣流・アスカ・ラングレーです。」

研修生の受け入れは2段階で行われた。最初は儀礼的なもので、ネルフ最高幹部のゲンドウ、冬月、リツコの3人で、各支部から送られてきた研修生、即ちパイロット候補生達に訓示を行った。時間にして30分ほどだった。

その次は、ゲンドウや冬月と別れ、リツコに連れられて、実際に研修に携わるメンバーとの顔合わせである。本来は、パイロットは作戦部所属のだが、戦闘時以外は技術部との結びつきが強いいため、研修生は技術部所属とされたのだ。そこで、今こうしてネルフの研修生担当者が研修生達に自己紹介をしているのである。

「それでは、次にあなた達の先輩を紹介します。」

リツコの合図で、ケンスケ達が入って来た。

「では、各自自己紹介をして下さい。」

リツコの目配せにより、ケンスケが最初に口火を開いた。

「本部所属の相田ケンスケです。皆さんよりも少しだけ先輩ですの
で、分からないことがあったら、何でも聞いてください。」

「アメリカ支部所属のアリオス・テオマンです。よろしく。」
「アメリカ支部所属のアルコート・マリウスです。よろしくね。」
「アメリカ第3支部所属のキャシーです。よろしくね。」
「エジプト支部所属のサーシャです。よろしくね。」
「中国支部所属のリン・ミンメイです。よろしくね。」
「ドイツ支部所属のマリア・カスタードです。よろしくね。」
「ブラジル支部所属のマックスです。よろしく。」
「ブラジル支部所属のミリアだ。よろしく。」
「フランス支部所属のハウレーン・プロヴァンスだ。よろしく。」

最後の自己紹介が終わると、リッコはマヤに目配せして、一歩前に進ませた。

「これからの研修については、この伊吹マヤ部長代行が責任者となります。これからも顔を合わせる事が多くなることと思われれますので、覚えておいてください。」

リッコの言葉を受けて、マヤは軽く一礼した。

「今、ご紹介に預かりました伊吹マヤです。今回の研修は、半年から1年を予定しています。長い間皆さんと一緒すると思いますが、困ったことがありましたら、遠慮なくご相談下さい。では、皆さんこちらへどうぞ。」

マヤに案内されて、研修生は別の部屋へと移動した。学校の教室と同じような広さのその部屋には、学校と同じような感じで、横6縦8の机が48と、同数の椅子が配置されていた。

「皆さん、名札のある位置にご着席下さい。」

マヤに言われた通り、研修生達は自分の名札がある席に座る。ケンスケ達も同様である。そして、教室の教壇に当たる位置に椅子が並べてあり、そこにマヤとシゲルが座る。そして、研修生の後ろにはアスカ、シンジ、トウジ、カヲルが座った。

「では、最初に他己紹介をします。隣の席の人と向き合ってください。」

マヤの言葉に従い、即席のペアが出来上がる。男同士、女同士のペアである。

「普通なら、自己紹介というところなのですが、今回はちょっと捻って、お互いのペアの紹介をしてもらいます。今、皆さんの目の前にいる人とは、1カ月間はペアを組んでもらいます。従って、お互いのことを良く知ってもらうためにも、他人に紹介出来る位になってほしいのです。今から、20分間時間をあげます。その間に、お互いのペアのことを一通り紹介出来るようにしてください。では、始めて下さい。」

マヤの合図に、一部研修生は青くなったが、さすがに優秀な子供が多いようで、少しの驚きの後に、お互いのペアのことを聞き始めた。その後、順番にお互いのペアの紹介をしていった。

こうして、午前中は顔合わせだけで終わったのである。

「むづっ、一体何なのよっ!」

「どうして怒るんだよ。」

(はあつ。アスカは本当に良く怒るよなあ。)

アスカは何故か怒っていた。今は食堂で昼食を食べ終わって、コーヒータムである。ここにいるメンバーは、アスカ、シンジ、トウジ、ケンスケ、カヲルそしてマリアであった。

シンジがなだめるが、効果は無い。実は研修生達は、異口同音に、男子は『アスカさんのファンです。』と言ったのだ。それだけならまだしも、女子も同様に『碓さんのファンです。』と言ったのだ。だから、アスカは面白くなく、鈍いシンジは怒るアスカの気持ちが分からなかったのだ。

「まあまあ、惣流。怒るんやない。シンジかて、他の女に目が移る訳ないやないか。」
とトウジ。

「そうだよ。シンジは惣流一筋だし。」
とケンスケ。

それを聞いたアスカは、少しだけ機嫌が良くなったようだ。険しい顔が元に戻っていく。それを見たトウジは、話をそらそうと、別の話題を持ち出した。アスカが食いつきそうな話題を。

「でも、なんや、あの、タコ紹介ちゅう奴は？食べるタコかいな？」

「あのねえ、他人が己を紹介するっていう意味で、他己紹介って言うのよ。自己紹介なら、小学生だって出来るでしょ。大学生や社会人になると、他人の紹介も当たり前のように出来なきゃいけないのよ。一般人に出来ることなら、当然研修生達も当然のよう出来るな

きやいけないのよ。」

アスカは少し呆れたが、トウジが不思議に思うのも無理はない。常に、社会人というより、軍人の大人達と接して来たアスカと、同じような理解をしろと言う方が無理なのだ。

「それが分からへんのや。」

「良い？あれば、人の話から情報を読み取る情報分析能力を見ると、情報をいかに端的に、正確に伝えられるかという能力を見るために行うのよ。それも、基礎中の基礎ね。それが、戦闘中にいかに情報を分析して勝利に結びつけられるかっていうことに繋がるのよ。簡単に言うと、相手の攻撃を見切って、相手に効果的な攻撃を加えるって言うことね。」

「ふうん、そういうもんかいな。」

トウジは、さっぱり分からなかった。むしろ、シンジも同様である。

「でも、アスカ。話は変わるけど、研修生達って、1年も本部にいるの？」

(難しく、良く分からない話だから、話を変えちゃえ。)

「そうねえ。長い人で、それ位ね。」

そう言いながら、アスカは何故研修生が来たのかということをも最初から説明した。

ゼーレを倒した後、国連内部でネルフをどうするのかを話し合ったのだが、使徒の脅威が去っていないことから、今後も当分の間存続

することが決まったのだ。だが、ネルフが抱える軍事力が強大であるため、国連は軍事力の提供を要望したのだ。

ゼーレという巨大な力が崩れさつたため、当面はゼーレが押さえ込んできた争いが再発し、今後は様々な紛争が起きる可能性がある、と国連事務総長らは考えたのだ。20世紀の終わり頃にソ連が崩壊した後、民族紛争が多発したように、今後各地で紛争が起きると予想したのだ。

当然、紛争を静めるには、平和的な解決方法が望ましいが、軍事力を行使する必要性も否定出来ない。それに、軍事力の裏付けが無いと、平和的な解決さえ難しいのが現実なのだ。だが、国連には、軍事力を支えるだけの組織や装備が無く、一から築くだけの金も無い。

それに、今まではゼーレに頼っていたため、各国に対して軍事面の協力を得られる可能性は低かった。したがって、一定の予算は出すから、ネルフの軍事力を借りたいというものだった。

ネルフの協力が得られると、各国へも睨みが効く。エヴァンゲリオンという協力無比の兵器の後ろ楯があるということは、想像を絶する効果を持つからだ。

例えば、軍事協力のある国に要請した場合、エヴァンゲリオンが無いと、冷たくあしらわれること間違いないが、エヴァンゲリオンがあると、下手に因縁をつけられて攻めこまれては大変と、相手が勝手に思い込み、要請以上の協力を得られる可能性があるのだ。

この話は、国連にとって、膨大な資金を節約出来、各国に対する影響力が増大するという、とてつもなく大きなメリットがある。

だが、ネルフにとっても、組織を存続させるための名目が増えるし、平和維持活動を行うことが、職員の士気高揚やネルフのイメージアップに役立つと考えられるのだ。

こうして、国連の要請に応じて、ネルフは引き続き国連の一組織として留まることを選択し、平和維持活動軍の中核の役割を担うことになったのだ。

但し、ネルフとしては、人的被害は極力少なくしたいという思いがある。それは、ゲンドウや冬月も同じで、ネルフとしては、あくまでも対使徒迎撃機関としての活動が最優先なのだ。それなのに、人間相手の戦いで人材を失いたくはないのだ。

そのためには、エヴァを使うのが最もネルフにとって人的被害が少なくなる可能性が高い。だが、パイロットがシンジやトウジでは、人間相手に戦うのは困難だろう。ATフィールドで味方の軍を守る位のことしか出来ないだろう。

そこで、各国支部に協力を要請し、軍事作戦に参加出来るパイロット候補生を選抜するように依頼したのだ。

また、平和維持活動軍の大枠だが、基本的な戦力は、半年後から1年後に各支部に配備予定のエヴァンゲリオンと支部の機動部隊、本部の機動部隊、それに各国に要請して派遣してもらおう地上部隊である。

支部の主な機動部隊だが、エヴァンゲリオンを配置してある支部には、戦闘機10機、戦闘ヘリ20機、戦車20両、特殊装甲車30

両、地上部隊2個中隊が標準配備される予定である。ちなみに、ドイツ支部には、ワイルドウルフ2個中隊が配備されている。

これに加えて、イギリス支部のレインボースター、フランス支部のヴァンテアン、アメリカ第3支部のレッドアタッカーズなどが予備兵力として各1個中隊配備されている。

本部の機動部隊は、ジャツジマンの部隊1個中隊、レッドアタッカーズ2個中隊、ワイルドウルフ1個中隊、ヴァンテアン1個中隊の、計5個中隊である。これに、戦闘機300機、各種輸送機30機、空中給油機50機という陣容である。

このうち、戦闘機の大半は、ゼーレのものであり、現在修理中の状況であるため、今すぐ使えるのは50機ほどだが、半年以内には全て稼働出来るようになる予定だ。これ以外に、エヴァンゲリオンが4機に、天竜ら3機という状況である。

もつとも、これ以外にも、撃沈した空母5隻と艦艇60隻ほどを修理して、再使用する目論見もある。おそらくその多くは転売もしくは各国支部に配備するだろう。何故なら、空母1隻に数千人規模の乗組員が必要であるため、基本的に少数精鋭の方針である本部の要員を、大幅に増やす結果になることと、非常に金食い虫にもかかわらず、それに見合った効果が期待出来ないからだ。

ちなみに、1人当たり年間500万円の人件費がかかるとして、空母1隻で、250億円の人件費になるのだ。むろん、人件費以外の費用もかかるし、人件費にしても、実際はもつと多いだろう。それに、空母1隻で行動することは無いため、艦隊全体では数万の人員と、年間数千億円の人件費がかかるのだ。

さて、話は研修生に戻るが、エヴァンゲリオン1機当たり2人の正規パイロット - 正1人、副1人 - と2人の予備役パイロットを選出する予定である。

これは、作戦行動の継続を考えると、最小限の人員であるが、5機のエヴァンゲリオンに対して、20人のパイロットを選出することになる。

現在、中国支部、インド支部、インドネシア支部、ドイツ支部、ドイツ第2支部、フランス支部、ロシア支部、イギリス支部、アメリカ支部、アメリカ第3支部、ブラジル支部、エジプト支部、オーストラリア支部、の13支部から各3人、計39人の研修生が来ているので、単純計算で、このうち半分が振るい落とされる計算だが、事はそう簡単ではない。

グループ分けの問題があるからである。

例えば、中国支部のエヴァンゲリオンは、中国支部、インド支部、インドネシア支部の3支部の研修生9人の間での争いになるが、ドイツ支部のエヴァンゲリオンは、ドイツ支部、ドイツ第2支部、フランス支部、ロシア支部の12人の間での争いになるからである。

逆に、エジプト支部とブラジル支部は、エヴァンゲリオンを自分の支部の3人だけで運用することになる。

これでは、いくら何でもまずいので、支部間でパイロットを融通する必要が生じるのだが、その調整が上手くいっていないのである。これは、支部のメンツも絡むため、なかなか調整が難しく、アスカも頭を痛めている。

アスカの腹案は、次の通りであった。

中国支部のエヴァ　　：中国支部、インド支部、インドネシア支部のパイロットで運用。

ドイツ支部のエヴァ　　：ドイツ支部、ドイツ第2支部、フランス支部のパイロットで運用。

アメリカ支部のエヴァ　：アメリカ支部、アメリカ第3支部、イギリス支部のパイロットで運用。

ブラジル支部のエヴァ　：ブラジル支部、オーストラリア支部のパイロットで運用。

エジプト支部のエヴァ　：エジプト支部、ロシア支部のパイロットで運用。

これ以外にも、マリア達9人をどうするのかという問題もある。本部に残すのか、支部に戻ってもらうのか、どちらにするかで、状況は大きく変わるのだ。

そこまでアスカが話すと、マリアも唸った。

「うーん、ドイツ支部に戻ろうかしら。迷う話ね。」

「アタシとしては、マリアから離れたくないけど、信用出来る人間にまとめ役をやって欲しいという気持ちもあるのよね。」

そこに、知らない女性の声が聞こえてきた。

「あつ、碓シンジさん。初めまして。私、イギリス支部のイライザって言います。私、碓さんの大ファンなんです。仲良くして下さいね。」

「う、うん。」

アスカは、何か言ってやろうと思ったが、マリアに目で合図されて我慢した。だが、それは無駄に終わった。イライザは、アスカにこう言ったのである。

「あーら、誰かと思えば、碇シンジさんにまつわりつく、ゴミじゃない。私が正規のパイロットに選ばれたら、階級は三尉になるわ。そうしたら、せいぜいこき使ってさしあげるわ。」

「何ですって!」

(何っ!今、何て言ったんだ。)

アスカは、真っ赤になって怒った。さすがに、ここまで言われて黙っているほど、アスカは人間が出来てはいなかった。だが、次の瞬間…。

「パシッ!」

シンジの平手打ちが、イライザの頬を赤く染めた。

「僕のことは、何を言われても構わない。でも、アスカのことを悪く言うのは、絶対に許せない。」

(僕の大好きなアスカの悪口を言うなんて、許せないよ。)

イライザは、しばしの間、放心状態だったが、シンジに睨まれているのに気付いて、泣きながら去って行った。

だが、研修生によってもたらされる波乱は、まだ序の口であった。

第4部 ネルフ再生

第61話 波乱の研修生（後書き）

今後、ネルフを舞台にするのか、学校を舞台にするのか、迷っています。両方という手もあるんですが、どっちつかずになりそうな気がします。

それで、ゼーレ壊滅後の世界ですが、ゼーレという重しが無くなったため、紛争の芽があちこちで発生するでしょう。それを見越した平和維持軍なのです。事実上、エヴァンゲリオンに勝る兵器が無い以上、国対国の大規模な戦争でも無い限り、ネルフの速やかな行動によって、地域紛争が拡大する前に防いでしまおうという考えなのです。

特定の支部が暴走しないよう、必ず本部と複数の国のパイロットが参加する仕組みにしました。また、傭兵部隊も各所に配置して、本部の意向を無視出来ないようにしたのです。

第61話補完 クラス分け

「ねえ、リッコ。ちょっといいかしら。」

「どうしたの、アスカ。」

「3年生のクラス分けの件だけど、やっぱり最初の案でいくわね。」

「ええ、研修生をまとめるのね。でも、それって私情が入っていないかしら。」

リッコは、暗に私情で研修生をシンジから遠ざけたいのかと聞いているのだ。だが、アスカはさも当然というように答えた。

「アタシはいいんだけど、トラブルが増えるわよ。今日も、シンジが研修生に怒って平手打ちをかましたのよ。」

「嘘…。あの、シンジ君が…。」

リッコの顔が、一瞬で青くなった。

「シンジがおかしくなれば、鈴原や渚もおかしくなるわ。それは分かっているでしょ。」

「ええ、そうね。分かったわ。」

「でも、悪いかなと思って、新しいクラス分けの一覧、作っておいだからね。」

もちろん、それは仲良しグループが同じクラスになっていた。ユキも同じクラスであるし、海外支部の人間のうち、アールコートを除く全員が同じクラスだった。

アールコートが新しい研修生と同じクラスになったのは、サグの盟主から、1クラスに必ず1人はサグの要員を入れるようにという指令が出ていたためである。

また、ドイツ支部の研修生に、ラブリーエンジェルの人間を1名入れる事にも成功していた。

「分かったわ。それ、使わせてもらっわね。」

リッコも事情は分かっているため、苦笑いするだけである。

こうして、3年生のクラス分けは決まったのである。

第61話補完 クラス分け（後書き）

新しいクラスは、A組に関しては、殆ど変わりません。ユキが加わり、数名が入れ代わる程度です。研修生は、全員同じクラスになります。とは言っても、38人いますから、正確には2クラスに分かれます。一応、各クラスは、30人前後という設定です。ですから、2クラスとも、研修生+外国人+帰国子女ということになるでしょう。

なお、60話で研修生は39人となりましたが、アメリカ支部のみ既に2人の人員を派遣していることから、今回は2人の研修生となりました。このため、38人となったのです。

第62話 再会のマナ

「さて、今日から中学3年生ね。」

今日は始業式だったが、いつもは長い校長の話も短時間で終わり、アスカとシンジ達は教室に戻る途中である。だがその時、シンジに声をかける者がいた。

「シンジ！お久しぶり！」

「マ、マナッ！」

（一体、どうしてマナがいるんだ？）

シンジは驚いた。遠くの街で、名前を変えて暮らしているはずのマナが、急に現れたのだ。心臓が止まりそうだった。

「アタシ、先に行くから。」

アスカは、そんなシンジを見て、冷やかな声をかけて、去って行く。シンジは、何かイヤな予感がした。

「マナ、ごめん。また今度ね。」

（まずい。アスカ、怒ったかな？）

シンジは、マナに軽く手を振って、アスカの元へと走って行く。

「シンジ…。」

残されたマナは、呆然としていた。

「良かったわね、みんな一緒のクラスになれて。」

アスカは、席に座って言った。ちなみに、アスカの右がマリア、左がユキ、前がヒカリの席である。席が近いものだから、自然と椅子を寄せ合って、おしゃべりをしている。

「そうよね、アスカ。このクラスは、殆ど変わらなくて良かったわ。」
「ヒカリは、アスカ達と同じクラスになれて、嬉しそうな顔をしている。」

「私も、惣流さん達と同じクラスになれて、嬉しいです。」
ユキもニコニコ顔である。

そして、4人で取り留めの無い話をしていた。

(ようし、みんないるから、今のうちが良いかな。)
シンジは、聞き耳を立てていたが、ここぞとばかりに話しかけた。

「あのお、ちょっとお願いがあるんだけど。」

「何よ、シンジ。」

「うん、実はさっき会ったマナのことなんだけど、これから、お昼を時々一緒に食べたかどうかあって思ったんだけど。誘っても良いかなあ?」

「私は、お断りします。」

意外にも、反対したのはユキだった。

「森川さん、どうして？」

「私、あの人は好きになれないんです。だから、どうしても言うんなら、私は抜けます。そして、一人で食べます。」

だが、これにはヒカリでさえも慌てた。

「ま、待ってよ、ユキ。どうしたって言うの？」

「私は、霧島さんとは一緒にいたくないんです。ただ、それだけです。」

ユキがマナと一緒に食べることを拒否したため、ケンスケもユキと一緒に食べると言い出し、トウジとヒカリも結局ケンスケと一緒に食べることになった。当然、アスカとマリアも同調した。残るはシンジとカヲルだけであったため、シンジは止むなく断念した。

「さて、シンジ。今日は真っ直ぐ帰ろうか。」

「それが、アスカにお願いがあるんだ。」

「うん、何よ。」

「実は、マナに会って欲しいんだ。」

「へえ、どういふ風の吹き回し？」

「マナとは、ああいう別れ方になっちゃったから、僕とアスカが婚約したことをちゃんと伝えていないよね。だから、僕の婚約者として、アスカをマナに紹介したいんだ。」

「あのねえ、何であんなのに、そこまでする訳？」

「そうか、やっぱり駄目か。」

シンジは肩を落とした。

「まあ、駄目とは言わないけど、今日はネルフに行くから駄目よ。それに、これで貸しが一つよ。それで良い？」

「うん、良いよ。」

（ほっ。良かった。）

シンジはにっこり笑った。

お昼は結局家で食べることになった。ヒカリとユキが作り、ケンスケが手伝う。トウジ、カヲル、マリア、ノゾミ、トウジの妹、ユキの弟妹、一応教師であるミサトにリッコも一緒である。総勢、14人であった。

これだけ人数が多いと、作る方も大変だ。ヒカリとユキは、汗を流しながら料理をしている。シンジやアスカも手伝ったのだが、研修生に関する仕事が山のようにあるため、今もせつせと仕事をし

ている。

「ご飯が出来ましたよ。」

その声を聞くと、急いで仕事を切り上げた。

今日のお昼は、エビピラフにカニピラフ。それに加えて、たまにはスパゲッティ以外の麺が食べたいというトウジの希望を採り入れて、ポリユームたっぷり肉野菜入りの焼きそばである。それに、ポテトサラダがつくのだ。

小学生達4人は、リビングで座って食べ、食べ終わるとテレビを見る。中学生以上は、テーブルで集まって食べるのだ。話題は、最近では研修生絡みのことが多い。

ヒカリやユキにとっては、知らない人の話でつまらなそうかと思いきや、そうではない。結構熱心に聞いている。ましてや、学校が始まったので、これから顔を合わせることも増えるだろう。そのうち、聞くだけでなく、話題に加わりそうである。

「まったく、男はアタシに色目を使うし、女はシンジにアタックしようとするし、大変なんだから。」

アスカは、頬をプリプリしながら言う。その仕草が可愛いと、ユキは目を細める。ヒカリはというと、トウジに虫がつかないかどうか心配なので、研修生の話には聞き耳を立てるのだ。既にアスカからは、研修生全員の顔写真入りのリストすら手に入れている。

「あら、アスカ。焼き餅なの？」

ミサトのからかいも、アスカには通じない。

「違うわよ。地球の平和を守るうっていうパイロットなのに、不真面目じゃない。ヒカリやユキもそう思わない？」

「ええ、思います。真面目にやってほしいですね。」

と語気を強めて言うユキ。ユキは、アスカの意見は、必ず真っ先に肯定する。

「そうねえ。でも、先輩のパイロットが婚約しているんだもの。あの程度はしょうがないとは思っけど。」

ユキとは違い、中立の意見を言うヒカリ。

「ふうん。でもね、鈴原狙いの女の子もいるのよ。」

「えっ！だ、駄目よ。やっぱり、研修中のパイロットは、研修を最優先しないと。」

トウジが絡むと、極端に意見が変わるヒカリだった。

「アスカ、もうちょっと真面目な話をしようよ。」

（何で、僕の話題が中心になるんだよ〜。）

「あ〜ら、良いんじゃない。そういう話って、興味あるわねえ。」
話をそらそうとするシンジの努力も、ミサトの一言で水泡に帰す。

こうして、研修生をネタに、話は続く。

ネルフへ着くと、それぞれ別れることになる。

アスカは、リッコやミサトと一緒にアスカルームへ行く。

アスカとリッコは、MAGIやEVAの運用管理についての仕事をこなすが、研修のためのプログラムも考える。一応マヤが責任者であるが、大枠はこの2人で決め、研修の進み具合によって、適宜修正を加えるのだ。

だが、現在の最優先課題は、ゼーレとの戦いで明らかになったエヴァンゲリオンの弱点の克服である。このため、電磁パルスに強く、自爆してもパイロットの生命を守れるような新型エントリープラグを開発中である。

ミサトは平和維持活動軍について、整理しなければならないことが山ほどあるが、技術的なことやエヴァに関わることが多く、アスカ抜きでは話が進まない。本来は、技術的なことはリッコやマヤに相談すべきなのだが、マヤは自分の手に余るとリッコに相談するし、リッコは重要なことはアスカに必ず相談する。

エヴァに関わることはシンジに相談すべきなのだが、シンジに相談しても、アスカの意見を聞いてから答えるのが分かっている。そうになると、最初からアスカと相談した方が早く、間違いないのである。

結局、この3人が忙しいのは、平和維持活動軍のことがあるからである。だが、それも基本的な枠組みを決めるまでのこと。それが決まれば、後は部下に任せて、進行管理に気を付ければ良いのである。

シンジ、トウジ、カヲルの3人は、研修生とは別メニューの訓練が

ある。

シンジにとって幸いだったのが、自分達本部のパイロットが、原則として対使徒戦のみに従事することになったことである。アスカが配慮したこともあるが、シンジとトウジは、他の研修生達と一緒に訓練しなくてすむようになったのだ。

特に、格闘技の訓練が別になったのには、シンジは涙を流して喜んだものである。これからは、無様な姿を見せなくて済むのだ。着実に体力を付けて、確実に格闘技の腕を磨いていけば良い。

ただ、訓練の教官が、ジャツジマンに加えて、ブルーを始めとするラブリーエンジェルの面々、それに傭兵部隊の隊長クラスであるため、肉体的には辛いものではあったが、精神的にはかなり楽になっていた。

ケンスケとマリアは、研修生と一緒にメニューの訓練である。

ケンスケにとっては、格闘技の訓練がさらに辛いものになった。同じような実力のシンジとトウジが抜けたため、ケンスケの実力が飛び抜けて低いことがかなり目立つようになったからだ。お蔭で、研修生の一部からは馬鹿にされていた。

だが、表面的には馬鹿にされることは全く無かった。ケンスケが本部付のパイロットであることが決定していたためだ。最終的にパイロットを決める時に、本部のパイロット達の意見も尊重するということが明らかにされていたから、ケンスケは別格だったのである。これはアスカの配慮であり、ケンスケは深く感謝していた。

もつとも、研修生同士の足の引つ張り合いに巻き込まれなかったこともある。支部に配備されるエヴァとパイロットとの関係が決定されていないため、特にヨーロッパの支部に属するパイロット間での足の引つ張り合いが、既に目立ち始めていた。

エヴァを配備予定の支部では、必ず正パイロットの座を射止めるようにとの厳命が下されており、一部の研修生達は、まさに必死だったのだ。特に、ドイツ、フランス、イギリス、ロシア間では、民族間の恩讐もあつて、研修生同士が殺気立っていた。

フランス、イギリス、ロシアのパイロット達の中には、過去にナチスドイツに殺された親族を持つ者も多く、ドイツのベルリン出身者の中には、ロシア兵に殺されたり、子供を孕まされて自殺した親族を持つ者が多かったのである。

アスカがイギリス支部のイライザにけなされたのも、イライザの曾祖父がドイツ空軍の空襲で死んだことと無関係ではなかった。

かといつて、ドイツ支部の研修生が四面楚歌の状態かと思えば、そうでもない。エジプト支部のパイロットの中には、イスラエルやアメリカに反感を持つ者がいて、過去にドイツがユダヤ人を迫害したことを褒めたたえ、ドイツ人に肩入れしていたし、同じイスラム教国のインドネシアのパイロットもこれに同調していたのである。

そうかと思えば、中国とインドの対立も根深いものがあった。特に、中国にエヴァを配備するというのは、暫定的な決定であつたため、両国とも正パイロットの座を射止めることに必死だったのである。

これ以外にも、複雑な問題も多く、さらには同じ支部のパイロット間でも、足の引つ張り合いが行われていた。

それらが特に表面化するのには、格闘技の訓練の時である。研修生同士で、目を血走らせて戦う場面も結構多かった。ケンスケは、そんな研修生達の様子を見て、背筋が寒くなるような思いだった。

比較的のほほんとしているのは、ブラジル支部とオーストラリア支部のパイロットぐらいであった。

ミリア、マリア、ミンメイ、サーシャ、マックス、アリオス、アールコート、キャシー、ハウレーンらは、最初は距離を置いて見ていたが、次第に自国支部に取り込まれつつあった。例外はサーシャで、ロシア系のイスラエル人という特殊な生い立ちによって、ロシア支部のパイロット達からも取り込まれようとしていた。

こうして、徐々に次のような大まかな構図が出来つつあった。

ドイツ派：ドイツ2支部、エジプト支部、インドネシア支部、
中国支部

反ドイツ派：イギリス支部、フランス支部、ロシア支部、アメリカ
2支部、インド支部

中立派：ブラジル支部、オーストラリア支部

このため、マリアとミンメイはドイツ派に、アリオス、アールコート、キャシー、ハウレーンは反ドイツ派に、自分の意思とは無関係に、それぞれの派の中心人物に担ぎ上げられそうになっていた。

サーシャ、ミリア、マックスは、そんな状況を憂いていた。

翌日、シンジは考えた末に、近くの喫茶店にマナを呼び出した。アスカが一緒であることも伝えているから、変な勘違いはしないはずだ。シンジとアスカが頼んだ飲み物が来た頃、マナは待ち合わせ場所にやって来た。

「お待たせ、シンジ、惣流さん。」

マナは、得意のスマイルを浮かべていた。

「マナ、お久しぶり。どうぞ、座ってよ。」

「ええ、それじゃあ失礼します。」

マナは素早く座ると、店員を呼んで、アイスコーヒーを注文した。

「で、シンジ。何の用なの？」

「うん、実は、もう知っているかもしれないけど、僕はアスカと婚約したんだ。マナには、まだ僕の口から伝えていなかったから、一応知らせておこうと思って。」

「そう、シンジ。おめでとう。やっぱり、惣流さんと恋人になったんだ。そうだよね、私はシンジの側にいられなかったし、縁が無かったんだよね。」

「マナ…。ごめん…。僕は、アスカが世界で一番大好きなんだ。だから、もう他の人は好きになれないと思う。」

「そう、分かったわ。惣流さん、おめでとう。羨ましいわ。こんなにシンジに思われるなんて。」

アスカは、一瞬何て言おうか迷った。

「そ、そうね。ありがとう。まあ、シンジのことは諦めて、他の、もっと良い男を探しなさいよ。」

「あら、シンジよりも良い男なんているかなあ。」

「星の数ほど居るわよ。」

(えっ、アスカ。やっぱりそうか。)

シンジは少し落ち込む。

「じゃあ、惣流さんにとっても、もっと良い男はいるってこと?」

「それがねえ、残念ながらいないのよ。アタシにとって、良い男の条件は、アタシよりもエヴァの操縦が上手い事、アタシよりも使徒を数多く倒している事、アタシがピンチになった時に自分の命を省みずに助けてくれる事、これが最低条件なのよ。その最低条件にかかるのが、残念ながら、シンジしかないのよ。」

(あれっ。前と言っていることが違うなあ。何でかな?)

言外に、シンジは渡さないとアスカは言っているのだが、鈍いシンジは気付かない。

「ふふっ、そうですね。分かりました。今は、おめでとつを言わせてもらいます。でも、アスカさんをお願いします。」

「何よ。」

「シンジよりも良い男が見つかって、シンジと別れることになったら、真っ先に私に知らせて下さい。」

マナも、言外にシンジを諦めないと言っている。

「まあ、そんなことは無いと思うけどね。」

アスカとマナの視線は、激しくぶつかり合った。こうして、マナは事実上の挑戦状をアスカに叩きつけたのだった。そう、いつかシンジを自分のものにする。シンジだけが、訳が分からずオロオロしていた。

「ねえ、アスカ。」

「うん、何よ。」

喫茶店からの帰り道、シンジはアスカに問いかけた。

「あの、さっき言っていたことって、本当なの？」

「えっ、何のこと。あっ！わ、忘れなさいよっ！あれはね、物の弾みって言うやつなのよ。」

だから、綺麗さっぱり忘れなさい。」

（何だ、やっぱりね。ちょっとがっかりしたな。）

「えっっ。じゃあ、マナに嘘を言ったの？」

「うっさいわねえ。男なんだから、ウジウジ言わないの。」

そう言って、アスカは急に走り出した。

「あっ、待ってよ！」

（でも、いいか。今は物の弾みでも、いつか本心から言ってもらえ
ば。）

シンジもアスカの後を追った。だが、二人の顔には、笑顔が浮かんでいたのである。

第62話 再会のマナ（後書き）

今回は、研修生絡みのエピソードは無しです。シリアス中心に行くか、ラブコメ中心に行くか、未だに迷っています。ですが、マナ絡みはシリアスにはならないでしょう。

あと、マナファンには一応謝っておきます。アスカとマナのどちらが勝つのか、既に予想が付いているとは思いますが、そういうこととです。

第62話補完 正パイロット争奪戦

「あんだ、馬鹿ねえ。シンジ様を敵に回してどうすんのよ。」

イライザと同じイギリス支部のアーは、イライザのことを責めた。
てた。

「だって、しょうがないでしょう。あんなに怒るなんて、思わなかったんですもの。」

イライザは、僅かに顔をゆがめた。エヴァンゲリオンの正パイロットになりたくて、シンジとお近づきになるうと思っただが、逆効果になってしまったからだ。

「でも、このままではまずいわね。私が調べたところによると、シンジ様と仲が良いのは、幹部では、作戦部長の葛城ミサトさんと、諜報部長の葛城リョウジさんだけど、二人ともドイツ支部出身だったわ。」

「ええっ、何ですって。」

イライザは驚く。

「それに、シンジ様といつもお昼を食べているメンバーの中に、ドイツ支部のマリアが入っているらしいのよ。」

「マリアが…。それって、本当なの？」

「ええ。お昼をいつも一緒に食べているのが、シンジ様に、トウジさん、カヲルさん、ケンスケ君、アスカ、マリアに、トウジさんの

恋人でアスカの親友のヒカリって子、それにケンスケ君の恋人でアスカの友人のユキっていう子の8人らしいわ。」

「なによ、パイロットとその恋人が固まっている訳？その中に、うまくマリアが入り込んでいるのね。」

「ええ、残念ながらそうみたいよ。」

「そう、ドイツ支部の連中が有利って言う訳ね。」

「何とかしないと、ドイツ支部に正副パイロットを持っていかれるかもしれないわ。」

「それは、非常にまずいわね。何か良い方法はないかしら。」

「でも、アスカの悪口を言っただけは駄目。シンジ様に、本当に嫌われてしまうわ。」

「アニーは釘を刺す。」

「しょうがないわ。仲間を集めて、作戦会議よ。」

こうして、反ドイツ派の作戦会議が開かれたのである。

反ドイツ派の作戦会議には、イギリス支部全員とフランス支部、ロシア支部、アメリカ支部、アメリカ第3支部、インド支部の各支部から1〜3人、合計で十数人が集まった。

もちろん、ハウレーン、アリオス、アールコート、キャシーらにも

声をかけたが、あっさりと断られていた。

その会議に各自が持ち寄った情報によって、研修生達にとって予想外の事実が明らかになっていった。

第一に、シンジがアスカ一筋であるにもかかわらず、アスカにはそのような気配が見えないことだ。学校の生徒やネルフの職員から得られた情報によると、シンジがアスカにまわりついていることが分かったが、アスカにはそのような気配は無いのだ。

第二に、アスカはシンジに対して、世界を救った英雄だとか、エヴァンゲリオンのエースパイロットとして尊敬するとか、憧れているとかいう感情があまり無いらしいという事実が判明したことだ。それどころか、アスカはシンジのことをこき使っているらしい。

第三に、アスカはネルフの幹部と仲が良いことだ。技術部長と同居し、作戦部長とはついこの間まで同居していたし、諜報部長ともドイツ支部時代からの知り合いで仲が良いらしい。特に衝撃を受けたのは、技術部長と作戦部長を呼び捨てに出来るのは、アスカだけということだった。

第四に、アスカはトウジの恋人のヒカリと親友で、トウジもアスカに頭が上がらないということだった。カヲルもシンジ経由でアスカの言うことは何でも聞くと言うし、ケンスケに至っては、アスカの下僕であることを本人も認めているらしい。

第五に、アスカは先輩の研修生達とも仲が良いということだ。ドイツ支部のマリアは当然としても、ミンメイ、ハウレーン、アリオス、アールコート、キャシーらとも仲が良く、イスラエル人のサーシャとも信じがたいが仲が良いらしいのだ。

結局、アスカはネルフの幹部と親しく、本部のパイロット達と仲が良いというか、従えているような感じらしい。先輩の研修生達もアスカと仲が良いらしい。

そうになると、絶対に敵に回してはならないし、アスカを味方に付ければ、シンジも味方になったも同然になるだろう。

反ドイツ派としては、エヴァンゲリオン5体のうち、確実に正パイロットを取れそうなのが、アメリカ支部のエヴァしかなく、何とかドイツ支部のエヴァの正パイロットをイギリス支部、フランス支部ロシア支部で得たいし、中国支部のエヴァの正パイロットをインド支部かロシア支部で得たいのだ。

そのためには、どんな手段を用いることも辞さないのだ。もっとも、非合法な手段を用いて、身の破滅をもたらすのは当然避けたい。そうになると、選択の幅は狭まって来る。

そこで、色々と議論を重ねた結果、次のことが決まった。

- ・アスカを何とか味方に付けるようにするか、少なくとも敵対しないようにすること。
- ・シンジの機嫌を損ねないように、男達はアスカにアタックしないこと。
- ・イライザはアスカに非礼を詫びること。
- ・マリアをアスカから遠ざけるように画策すること。
- ・シンジの目を、少しでもアスカから遠ざけるように画策すること。

こうして、反ドイツ派による正パイロット争奪戦が始動したのである。

第62話補完 正パイロット争奪戦（後書き）

研修生対立の構図

ドイツ派：ドイツ2支部、エジプト支部、インドネシア支部、
中国支部

反ドイツ派：イギリス支部、フランス支部、ロシア支部、アメリカ
2支部、インド支部

中立派：ブラジル支部、オーストラリア支部

第63話 みんなでテニス

「ねえ、シンジ。何かスポーツで得意なものはないかしら。」

日曜日の朝、アスカが急に聞いてきた。

(うつ、何か嫌な予感がする。)

シンジは何となく身の危険を感じたが、それをアスカに悟られぬよう、気をつけて答えた。

「ええつ、スポーツで？特にないよ。」

「じゃあさ、テニス部に入ろうよ。実はね、ユキがテニス部なのよ。今までは休部していたんだけど、またやるって言っつよ。それでね、一緒に入りませんかっつて、誘われているのよ。」

「ええつ、急にそんなこと言われても…。」

シンジは戸惑った。スポーツが得意ではないシンジにとって、スポーツ系の部活は避けたかったのだ。

「ふうん、アタシと一緒にテニスをしたくないんだ。」
アスカの眉が僅かにつり上がる。

(げっ、まずいつ。アスカの機嫌が悪くなっちゃうよ。)

「そ、そうじゃないよ。でもさ、ネルフの訓練があるでしょ。テニ

スなんてやってる暇は無いんじゃないのかな。」
シンジはびくびくしている。

「アタシが良いって言ったら良いのよ。それに、毎日じゃないし、良い気晴らしになるじゃない。そうねえ、週に2回位かしら。ヒカリも入るし、相田や鈴原達も入るんだけど。」
さらにアスカの眉がつり上がる。

(ま、まずいつ。でも、一応反対しとこう。)

「でも、やっぱりイヤだな。」

「じゃあ、こうしましょうよ。アタシを嫌いになったんなら入らない。まだ好きなら入る。さして、どっちかしら。」

(そ、そんなあ〜。ひどいよ〜。)

もちろん、答は一つだった。こうして、シンジは半ば脅されてテニス部に入る事になったのである。

「惣流さん、例の件のお返事はどうでしょうか。」

「ああ、OKよ。シンジも喜んでOKしたわ。」

いつもの朝食の時間、ユキの問いかけにアスカはにこやかに答えた。シンジは苦笑するのみである。

「そうか、シンジ。持つべきものは友達だな。ありがとう。」

ケンスケは、何故かシンジに向かって礼を言った。シンジが不審に思って聞こうとしたら、邪魔が入った。

「えっ、なによあ〜っ。お姉さんにも教えてよあ〜っ。」

結婚しても、何故か料理もせずに、朝食をタカリに来ているミサトが聞いてきた。横では、加持姓から葛城姓に変わったリョウジが笑っている。

「ええ、いいですよ。惣流さんと碓君が、テニス部に入ることになったんですよ。洞木さん、鈴原君、相田君も一緒です。そうだ、渚君も入部しませんか。」

「ああ、いいねえ。シンジ君達が入るなら、僕も一緒にさせてもらうよ。」

「じゃあ、これからみんなでテニスラケットやテニスウェアを買いに行きましょうよ。」
とユキ。

「良いわねえ。そうしましょうよ、シンジ。ヒカリ達も誘ってさあ。もちろん、喜んで行くわよねえ。」
と、目は笑ってないアスカ。

こうして、みんなで買い物に行くこととなった。だが…。

「私は仕事があるから。」

リツコを誘ったが、仕事を理由に断られた。結局、ミサトを代わり

に誘うことになり、ならば俺も行くと、リョウジも付いて来ることになった。

「ねえ、シンジ！これなんかどうかしら？」

テニスウェアを選ぶ段になって、アスカは色々と手に取って、いちいちシンジに聞いていた。これにどう応えるかで、今日のアスカの機嫌が左右されるのだから、シンジも内心では呆れて疲れ果てながらも、顔はニコニコしながら律儀に応える。

「アスカって、青い色も良く似合うんだね。」

（色々着たって、）

「白いのを着ると、より一層清楚な感じになるね。」

（あれこれ言ってたって、）

「黄色はちょっと派手な感じもするけど、明るい感じがして良いね。」

（結局は、）

「明るい緑も良いね。清楚で可愛らしく感じるよ。」

（アスカが気に入るのは、）

「ピンクは、これぞ女の子っていう感じがするね。良く似合うよ。」

（赤に決まっているのに、）

「やっぱり、アスカには赤が一番似合うよ。」

（ほーら、やっぱりね。）

どうやら、リヨウジに頼んで教えてもらったセリフが役に立ったようで、アスカの機嫌はすこぶる良好であった。だが、心の中を読まれたら、間違いなく死刑であろう。

「じゃあ、これ全部買おうと。加持さん、支払いよろしくね。」
と、ニコニコ顔のアスカである。

(あれっ、そんなに買うの?)

スカートのをすっかり忘れていたシンジであった。色別に10着のスカートを買ったアスカが、赤いのを1着で満足する訳がないのである。シンジは、まだまだ修行が足りない。

「ああ、良いよ。」

一方、アスカは慣れないせいか、未だに加持と呼んでしまいが、リヨウジは気にした様子はない。

「あの〜、本当に良いんですか?」

今度は、ヒカリが恐る恐る聞いてきた。今日の支払いはリヨウジが全て持つと聞いたのだが、流石に気が引けるのだろう。だが、アスカが6着のテニスウェアを買ったのを見て、ヒカリは3着ほどを選んだ。

「おいおい、それじゃあ少ないぞ。遠慮しないでアスカと同じだけ買う事。良いね。そっちの森川さんも同じだ。最低6着は買ってくれよ。」

「は、はい。」

「そんなあ、申し訳ないです。」

ヒカリとユキは、恐れ入るといった感じだ。内心では、飛び上がった喜んでいるのであるが、そんな様子は微塵も感じられない。大した役者である。

「大丈夫よ。ミサトも加持さんも大活躍したんで、ボーナスを弾んでもらったのよ。アタシは、もう6着買うからね。アンタ達が遠慮すると、アタシが困るじゃない。だから、もっと買いなさいよ。」

これは大嘘である。今回の支払いは、全てアスカ持ちなのだ。だが、本当のことを言うと二人が、特にユキが遠慮すると思って、リヨウジを引つ張り出したのだ。

むろん、5兆円という途方もない資金を手にしたアスカにとって、こんなものは、はした金にもならない。

「じゃあ、遠慮なく。」

「すみません。お言葉に甘えさせていただきます。」

ヒカリとユキはそう言って頭を下げると、アスカとキャアキャア言いながらテニスウエアを選んでいった。もちろん、男共はネルフから給料をもらっている身なので、自腹である。

「鈴原っ！早くこっちに来なさいよっ！ヒカリのテニスウエア姿を見てあげなさいよ！」

「相田も来なさい！ユキに似合うかどうか、言ってあげるのよ！」

むろん、二人とも鼻の下を伸ばして来たが、ヒカリは嬉しそうである。ユキは少し戸惑っているようだが、ケンスケには水着姿を何度も見られているので、恥ずかしさはそれほどない。

アスカは、ヒカリとユキにトウジとケンスケをあてがうと、自分の分は選り終わったため、シンジのテニスウエアを選び始めた。あぶれたカヲルは、ミサトに選んでもらっている。

こんな調子で、テニスウエアやラケット、シューズなどを買って、午前中は瞬く間に過ぎていった。

「お昼も、加持さんの奢りね。よろしくね。」

「ああ、良いとも。好きなものを食べてくれ。」

と言うやり取りがあって、近くのレストランへと一行は入っていった。女性陣の好みにより、イタリアンレストランである。

「このスパゲッティって、美味しいって評判なのよねえ。」

「何種類か頼んで、女の子だけで分け合おうか。」

そんな訳で、席は女性陣と男共は別れてしまった。

「ふう、一杯買ったね。」

シンジはため息をつく。

「ああ、そうやな。でも、テニスやなんて、ワイがやるなんて、想

像出来へんな。」

「悪いなあ、トウジ。付き合わせちゃって。」
とケンスケ。

「そんなこと、かまへんが。ワイとケンスケの仲やないか。」

そう、今回の件は、ケンスケがユキと仲良くしたいがために、トウジを引っ張り込み、ヒカ리를道連れにして、アスカを巻き込んだのである。

トウジを落とすと、ヒカ리를攻略しやすくなる。ヒカ리를攻略すれば、アスカをその気にさせるのは簡単である。アスカがその気になれば、シンジとユキは逆らわない。だから、ケンスケは最初にトウジを泣き落としに近い方法で説得して、みんなでテニス部に入るように仕向けたのである。

アスカの下僕であるケンスケにとって、アスカの意向は絶対であるため、考えに考え抜いたのが、この方法だったのだ。本来、ケンスケは研修生に混ざって色々な訓練をしなければならないのだが、アスカの協力を得られたおかげで、何とか週2回は部活に出る事が可能になったのだ。

ユキと同じ部活に入れば、一緒にいる機会も増えるし、共通の話題も増える。そうになると、自然に話せるようになるだろうし、心の距離も縮まるだろう。今はとてもじゃないが、ユキを恋人だと公言出来るような状態ではないが、いずれはそうなりたいと考えるケンスケにとっては、同じ部活に入ることは、かなり重要な意味を持つのである。

「ありがとう。持つべきものは、友達だよ。」

ケンスケは、トウジの手を強く握りしめた。

「青春してるなあ。」

自分のことを棚において、言いたいことを言うシンジであった。その罰なのか、アスカが急に嫌な提案をしてきた。これからテニスをしようと言うのである。

「え〜っ！午後からテニスをやるって?!」

シンジは思わず叫んでいた。シンジは、ろくにラケットを握ったことすらない。無様な姿を晒すのが目に見えている。

「いいから、やるのよっ！もう、決まったからねっ！」

だが、アスカのこの一言で黙ってしまった。

「大丈夫だよ、シンジ君。何事も、チャレンジさ。」

リョウジが励ます。

「でも、僕って運動神経悪いんです。」

涙がこぼれそうになるシンジを見て、リョウジは苦笑した。

結局、近くのテニスコートを2面、3時間借りることになり、マリアを呼んで10人でテニスをする事になった。

最初は軽くボールを打ち合ったが、シンジはなかなか思うようにボールが打てずに苦労していた。どうしても真っ直ぐに打てないのだが、そのうちにペアを組んで試合をすることになってしまった。ペアを組むのは、アスカとシンジ、ヒカリとトウジ、ユキとケンスケ、マリアとカラルの4組で、ミサトとリョウジは審判だ。最初はアスカとシンジペア対ユキとケンスケペアで試合をすることになった。むろん、もう一つのコートでは、残る2組の試合である。

「いくわよっ！シンジ！」

アスカに、気合の入った激励を受けたシンジだったが、結果は6-2で負けてしまった。ユキのサービスを、シンジは相手コートに返すことすら出来なかった。ケンスケのサービスも、3回に1回は返し損なったのである。

これでは、いかにアスカが上手だとしても、対処のしようがない。アスカのサービスの時だけなんとかキープしたが、それ以外ではシンジが思いつきり足を引っ張ったのだ。

他の試合も、結果は散々だった。マリア達にも見事に負けてしまったし、ヒカリ達には接戦で勝ったが、それもトウジがヒカリの足を引っ張ったからである。

「もっつ！負けたのは、シンジのせいよっ！」

アスカは、頬を膨らませて怒った。それを見て、シンジはがっくりと肩を落としたのである。

「落ち込むくらいなら、特訓しなさいよっ！」

情け容赦のないアスカの言葉に、ユキとヒカリが必死になだめて、その場はなんとか収まった。

「ねえ、シンジ。テニスのこと、気にしてる？」

その日の夜、寝る頃になって、アスカはシンジに声をかけてきた。ちなみに、悪夢を見るのが嫌で、未だにアスカはシンジに添い寝をしてもらっている。

「あ、ああ。ごめんね、僕のせいで負けちゃって。」

「ううん、良いのよ。正直言つとね、アタシは手を抜いていたのよ。」

「ええっ、ほんと？」

「相田がね、ユキの前で勝ちたいって言うのよ。だから、しょうがないから負けてあげたのよ。シンジに怒ったフリをしたのは、照れ隠しだから、気にしなくていいわよ。」

「な、なんだあ。てつきり、アスカが猛烈に怒っているんじゃないかと思っていたよ。」
「ふうっと、息を吐くシンジ。」

「ふうん、シンジ、本気でそう思った？だったら、みんなも騙せたかしら。」

「うん、多分間違いないよ。」

「ユキと相田はね、今は結構微妙な感じなのよ。一応付き合っていることになっているけど、やっぱり距離があるのよね。相田は、ユキの心を掴もうと、必死なのよ。アンタも友達なら、協力するなりしなさいよね。」

「うん、分かったよ。アスカって優しいんだね。」

「何よ、今頃気付いたの？」

「ううん、分かってはいたけどね。でも、僕以外の男に優しくするなんて、ちよっと妬けるな。」

「何よっ。ナマ言っちゃってさ。」

「あ、ごめん。」

（あっ、やばっ！）

シンジは、少し青くなった。アスカの機嫌を損ねたと感じたからである。

「ほら、すぐ謝る癖が出る。」

「あっ。」

（しまったっ！）

続けてポカをするシンジであった。

「まあ、いいわ。シンジ、おやすみなさい。それから、今日は買い物に付き合ってくれてありがとう。」

だが幸いにも、アスカの口調にはトゲは無かった。

「うん、アスカ。おやすみなさい。」
（ふう、怒っていないみたいだ。良かった〜。えっ、アスカがお礼を言うなんて、珍しいや。でも、お礼を言われるなんて嬉しいな。）

こうして、アスカが怒っていないことを知ったシンジは、落ち着いた気分で眠ることが出来たのだった。明日の朝の目覚めは、徐々に良さそうだなとシンジは思いつつ、いつの間にか眠りについた。

第63話 みんなでテニス（後書き）

どうしても、愛するアスカの言葉に振り回されてしまう、可哀相なシンジです。でも、今のアスカにはシンジを気遣う余裕があるため、2人の仲は良好と言えるでしょう。

第63話補完 ヤケ酒

「あつ！あれは、先輩と日向さんっ！なっ、何で二人で歩いているのっ！」

マヤの顔は、蒼白になった。憧れのリツコが、よりによって同僚のマコトと、二人で仲良さそうに歩いているのを見付けたからだ。

時は少し遡って、金曜日の夜のことであった。

「青葉さんっ！日向さんから聞いていなかったんですかっ！」

「あ、ああ。あいつは、そういう話は嫌がるからなあ。」

何故かマヤと一緒に歩いているシゲルであったが、マヤの剣幕に夕ジタジである。

「もおっっ、悔しいっっ！青葉さん、今日はトコトン飲みましょっねっ！いいですねっ！」

「あっ、ああ。」

こうして、二人は居酒屋をはしごすることになった。

「うっうっ、先輩ったら、最近私に冷たいなあって思っていたんですけど、男が出来たなんて。それも、葛城さんに振られたばかりの、

日向さんなんて。」

マヤは、完全に酔っぱらっていた。

「おいおい、マヤちゃん。もう、帰ろうよ。ここからだ、電車で帰らなきゃならないのに、もうこんな時間だよ。早くくしないと、電車が無くなっちゃうよ。」

「いいんですっ！青葉さん、今日は朝まで付き合ってもらいますよっ！」

「そりゃあ、まずいよ。」

「いいんですっ！それとも、青葉さんて薄情な人だったんですかっ！」

「いや、違うけどさ。」

「じゃあ、飲んでくださいっ！」

完全に目がすわっており、少し眉がつり上がっているマヤであった。

「わ、分かったよ。」

シゲルは観念したのか、首を縦に振った。

「わっい、青葉さんて優しいんですね。」

マヤは、今度は涙を流して喜んでいる。泣き上戸のようだ。

「ああ、マヤちゃんだけには優しいんだよ。」

「嬉しいー！」

マヤは、シゲルに抱きついてキスをした。

この後、何があったのか知る由も無いが、シゲルもマヤも帰宅したのは翌日の夕方であり、この日を境に二人の仲はかなり親密になっていった。

リツコとマコトのデートコースを設定したのがアスカであり、シゲルはアスカからの情報で、うまくマヤに二人がデートしているところを見せることができたことなど、マヤが知りようがなかった。

その日の夜に、シゲルが弾んだ声でアスカにお礼の電話をしたことも、アスカとシゲルの二人だけの秘密であった……はずなのだが、アスカはシンジには話してしまっていた。

だが、お子さまのシンジは、何が起こったのか全く分からなかったようだ。

『マヤさんのことだから、仕事の話まで夜明けまでしていたんだよ。』
などと書いていたらしい。

第63話補完 ヤケ酒（後書き）

シゲルとマヤの仲が、急速に接近していきます。アスカは、マヤとシゲル、リッコとマコト、ユキとケンスケの3組のカップルをつくるのに尽力しています。リッコとマコトは、あともう少しといったところでしょうか。

第64話 嵐の前

「惣流さんっ！ごめんなさいっ！」

月曜日の朝、シンジ達と登校していたアスカの前に、急にイライザが現れて、大きく頭を下げた。イライザは、イギリス支部の研修生であり、先日アスカに対して暴言を吐いたのだが、シンジに引っぱたかれて泣きながら去って行ったのである。

「本当にごめんなさい。私、シンジ様のファンだったので、惣流さんのことが羨ましくなって、つい、あんなことを言ってしまったんです。私、物凄く深く反省しているんです。ですから、許してくださいっ！」

（そうか、そうだったのか。）

シンジは、涙を流さんばかりのイライザに、少しばかり同情した。こういふ方面には疎いシンジであるため、イライザが内心では舌を出していることに気づかない。

「まあ、良いわ。許してあげるわ。シンジもそれで良いわね。」
と、アスカ。

「ああ、良いよ。僕こそ、引っぱたいてごめんね。」
シンジも同意する。

「そんな、いいんです。私が悪かったんですから。」
イライザは、更に深々と頭を下げる。

「でも、許すには条件があるわ。これから1カ月の間、アタシ達に

近付かないこと。良いわね？」

「は、はい。分かりました。」

だが、アスカにはお見通しだったようだ。イライザは少しだけ青ざめた。こうして、シンジにうまく取り入ろうとしたイライザの作戦は、失敗に終わった。

イライザは、アスカにもう一度深々と頭を下げた後、足早にその場を去った。目指すは、同じイギリス支部のアニーである。イライザは、アニーを見つけると、疲れたような声を出した。

「はあ……。アニー、あなたの言う通り、謝ってきたわよ。でも、アスカにはお見通しだったみたい。1カ月間、シンジ様に近付くなんて言われちゃったわ。」

「1カ月ね。でも、それでも許してもらえれば良いわよ。良くやったわね。」

「でしょ。私が他人に謝るなんて、明日は雪が降るかもしれないわよ。」

「あはははっ。それも良いかもしれないわね。あっ、そうそう。新しい情報が入ったわ。」

シンジ様達が、テニス部に入るらしいのよ。」

「えっ、何ですって。でも、訓練はどうするの？」

「良く分からないんだけど、結構確かな情報よ。シンジ様に、トウジさん、カヲルさん、ケンスケ君、アスカ、マリアに、ヒカリって子が入るらしいのよ。」

「ユキっていう子は？」

「元からテニス部らしいの。だから、お昼を食べるメンバーがそのままテニス部に入るみたいね。」

「じゃあ、私達も入りましょうよ。」

「それが、駄目なのよ。訓練に支障があるから、多分入れないわ。」

「じゃあ、シンジ様やケンスケ君はともかく、マリアが何で大丈夫なのよ？」

「どうも、訓練のスケジュールとかが私たちと少し違うらしくて、それで入部が認められるらしいのよ。」

「悔しいっ！マリアに、二歩も三歩も遅れをとったじゃない。」

「でも、巻き返すのは容易じゃないわ。かと言って、手をこまねいている訳にはいかないしね。なんとと言っても、私たちには、イギリス支部の名誉がかかっているんだから。」

「何か、良い方法は無いのかしら。」

「いい、イライザ。今は時期が悪いわ。だから、じっと我慢するしかないわ。とにかく、情報をなるべく多く集めることが必要よ。そして、勝負をかける時期が来るまで、力を蓄えておくのよ。分かる

わね？先走ったら駄目よ。」

「わ、分かったわ。」

イライザは頷いた。だが、自分の失言によって、ドイツ支部のマリア達との差がかなり開いてしまったことについて、強いあせりを感じていた。

一方、教室へと向かうシンジ達を見つめる目があった。マナである。その目は、獲物を狩る猛禽類の目のような輝きを放っていた。

「ふっふっふっ。アスカなんかには負けないわ。」

マナは、シンジ達が来ると、突然前に立ちはだかった。

「ねえ、シンジ。ちょっと話があるんだけど、いいかしら。」

むろん、アスカが黙っているはずはない。

「残念ね。シンジはね、忙しくてアンタの相手をする時間は無いのよ。」

言っが早いか、シンジとマナの間に立ちふさがる。

「惣流さん、あなたには関係ないでしょ。」

「ぬわんですって！」

怒ったアスカが詰め寄ると、マナは後ずさる。

「あっ！」

ところが、運悪く転んでしまっ、ように見せかけてわざと転んだ。ここまででは、マナの計画通りである。

「シンジ。足を捻った。保健室までおんぶして。」

甘い声でシンジにねだる。シンジの性格なら、断れないだろうと踏んでのことであるが、そうはうまくいかなかった。

「あーら、霧島さん、ごめんなさい。相田っ！保健室まで運びなさい。」

「はっ、はいっ！」

ケンスケは、アスカの命令に忠実に従って、マナを抱き抱えて保健室へと去って行く。

「こんちくしょうっ！覚えてなさいよっ！」

マナの遠吠えが聞こえたが、アスカの顔は勝ち誇っている。ケンスケがアスカの下僕であることを知らなかったマナの作戦ミスだ。

「どうしてこうなるんだよっ。」

シンジの呟き、いや心の底からの叫びを聞く者はいなかった。

だが、今後も同じような光景が、シンジの目の前で繰り返されるとは、鈍いシンジには予想出来なかった。

「カタカタカタツ…。」

授業中、アスカは端末に向かつて、一心不乱に何かを入力し続ける。一見、まじめに授業を受けているように見えるが、実はネルフの仕事をしている。それを知っているのはシンジと教師だけである。

(アスカって、やっぱり綺麗で可愛いや。)

シンジは、アスカの方をチラチラと盗み見ることが多くなった。夢中で端末を叩いているアスカは、真剣な表情をしており、いつものアスカと違った魅力―凛々しさともいうのだろうか―があった。

アスカは、誰が見ても綺麗で可愛いのがから、惚れた男が見れば、さらに最低5割増しに見えるであろう。だが…。

「おい、碇。次の問いに答える。」

「は、はいっ?」

急な指名に、シンジは慌てふためいた。それを見た教師は、大きなため息をつく。

「先生！碇君は、惣流さんを見ていたんですよっ!」

誰かの声に、教室内では笑いが渦巻く。シンジは冷や汗を流しながらアスカの方を見るが、アスカは気づかずに端末を叩いている。だが、ホツとしたのも束の間。

「碓君は、また惣流さんを見ていますっ！」

シンジの顔は、ゆでダコのように真っ赤になった。

「まったく、シンジったら恥ずかしいわねえ。」

お昼時になって、外でお弁当を食べたのだが、先程の話題がメインになってしまった。そのため、シンジはアスカに小言を言われるハメになる。

「アスカ、ごめん。これから気をつけるよ。」

シンジはすまなさそうに頭を下げた。だが、プリプリしている割りには、アスカの声にトゲはなく、あまり怒ってはいないようだ。

「でも、本当にアタシの方を見ていたの？」

「うん。」

「アタシの顔なんて、いつでも見れるでしょうに。」

「そうだけどさ、まじめな顔をしているアスカって、凜々しくて綺麗だなあって思ったなら、目を離せなくなってたんだ。」

それを聞いて、アスカの顔は真っ赤になった。ケンスケとトウジはあきれたような顔になり、ヒカリ、ユキ、マリアにカヲルは、微笑ましいという顔つきである。

トウジは、何か言おうと思ったのだが、ヒカリに怒られそうなのがしたため、やめることにした。トウジもやっと思慮な判断が出来るようになったようだ。だが、ちよつとずれた者もいた。

「いいねえ、シンジ君は今、恋をしているんだね。」

今更そんなことを言うカヲルに、みなずっこけそうになった。

「えっ、どうして分かったの？」

続くシンジの言葉に、今度こそみんなずっこけてしまった。

そんな穏やかな？話をしていたシンジ達を見つめる目がいくつもあった。

「きっ！悔しいっ！アスカッ！覚えてなさいよっ！」

マナは、遠く離れた場所からアスカを睨む。それを見ていたムサシが、ケイタに目配せすると、ケイタは嫌そうに声を出す。

「碓君のことは、もうあきらめたら。」

「何ですって！」

「だって、惣流さんは世界的なアイドルだし、碓君も惣流さんにぞっこんだってという話だし、マナが入り込む隙間なんて無いよ。」

「そんなの、分からないじゃない。」

「それに、僕達の恩人の加持さん、いや、今は葛城さんか。葛城さんだって、惣流さんを怒らせるような真似はしないでくれって言っていたじゃないか。葛城さんに迷惑かけちゃ悪いよ。」

「むづづつ。」

それを聞いたマナは唸った。そう、マナ、ケイタ、ムサシの3人はリョウジの取り計らいでこの第3新東京市に住んでいた。ケイタとムサシは、リョウジの手配で身を隠すようにして暮らしていたのだが、先日、リョウジに頼まれてネルフに所属するパイロットとなっていた。

そして、ゼーレとの最終決戦後は、今までと違って変わってリョウジの手配した高級マンションに住むことになり、パイロットの給料や臨時ボーナスも支給されて、怯えながら貧しく暮らす生活からおさらばしていたのである。

マナも、リョウジの手配で第3新東京市に来ることが出来、両親を呼び寄せて一緒に暮らしている。住まいも親の仕事も、リョウジの世話になっていたので。ちなみに住まいは、ケイタやムサシと同じマンションである。

つまり、3人はリョウジに対して、返し切れぬほどの恩があったのだ。

「ねっ、だから葛城さんの迷惑になるようなことはやめようよ。」

「でっ、でもっ！アスカさんは、いずれシンジに飽きるわよ。」

マナは唇を噛んだ。マナとて、まともに戦っては勝ち目が薄いことは分かっている。アスカと比べると、自分が誇れるものはあまりない。だが、アスカが世界的なアイドルになったことで、付け入る隙が出来たと思ったのだ。

マナの読みでは、いずれアスカがシンジよりも素敵な男性に心を奪われる。その時が逆転のチャンスなのだ。

「そうかもしれないけど、碇君は他のパイロット候補生にも物凄い人気があるよ。惣流さんが他の男の方に行ったら、物凄い争奪戦になると思っけど。」

「ええっ！そんなあっ！」

マナは、がっくりと肩を落としたが、すぐに持ち直した。

「恋はねえ、障害があればあるほど燃えるのよっ！」

それを聞いて、ムサシは心の中で滝のような涙を流した。

さて、シンジ達を見つめる目は、他にも多数あった。パイロット候補生達のうち、男は例外なくアスカのファンであったから、一部の例外を除いて、アスカにいつかはアタックしようと思っていたのだ。

この点で、男と女で大きな差があった。女は、最初からアスカと張り合つのをあきらめている者が多かったのだ。エヴァンゲリオンのパイロットだからといって、それが女の魅力になると思う者がいなかったせいだ。

身の程知らずは、イギリス支部のイライザだけだったと言えよう。とはいえ、アスカとシンジが別れたら、真つ先にシンジの恋人に立候補しようと考えていたのだが。

一方、男の方は、シンジをライバル視し、いつかは超えてやると思う者が多かったせいもあり、アスカはシンジよりも自分にこそがふさわしいと思う者が多かった。

だが、いきなりアスカにアタックしては、失敗するのが目に見えていたため、現在は特に動きが無いだけであった。それでも、情報収集には余念がなく、今も遠くから観察している者が多い。

いずれは、誰かがアスカにアタックし、大きな騒動が起きるのは間違いないだろうが、今は何事もない。いわば、嵐の前の静けさであった。

第64話 嵐の前（後書き）

アスカもシンジも、パイロットに対してだけでなく、世界的な人気者です。でも、アスカを押し退けてシンジにアタックする勇気を持つ女は、殆どいません。ですが、シンジを押し退けてアスカをモノにしようとする男は多いようです。それが、これから大きな騒動を呼び起こすかもしれません。

第64話補完 定例中隊長会議

「ねえ、マリア。ちょっとお願いがあるんだけど。」

「どうしたの、アスカ？」

「何かさあ、研修生達って、なんて言うかこう、ギスギスしてない？」

「うーん、やっぱりアスカもそう思う？」

「そうよねえ。ねえ、マリア。今日はの夕方に、定例の中隊長会議があるわよね。その後でいいんだけど、みんなで何か良い方法がなにかどうか、話し合っって欲しいのよ。」

「ええ、良いわよ。でも、あんまり期待しないでね。」

「まあ、どっちかっていうと、中隊長クラスが争いに加わると大事になるから、そうならないようにっていう布石よ。」

「なあんだ、そういうことね。なら、了解したわ。でも、ハウレーンは付き合いが悪いから、ウンとは言わないかもよ。」

「そうねえ。でも、アタシがシンジの頼みだっって言えば、OKするかもよ。」

「そうねえ、やってみるわ。」

こうして、アスカに頼まれ事をしたマリアは、ネルフへと向かった。

月曜日の夕方、ジャツジマンは、各傭兵部隊の中隊長を招集していた。

本部の機動部隊は、ジャツジマンの部隊1個中隊、レッドアタッカーズ2個中隊、ワイルドウルフ1個中隊、ヴァンテアン1個中隊の、計5個中隊である。

それぞれの責任者は、ジャツジマン、レッドウルフ、マリア、ハウレーンが務めている。だが、レッドウルフは特殊任務を行っているため、滅多にこのような打ち合わせには出てこないため、代わりに、アリオスとマックスが出席していた。

2人ともジャツジマンの部下であり、『サグ』のメンバーであるが、レッドアタッカーズの代表者がレッドブルという男に代わり、そのレッドブルが『サグ』の傘下に入ることを決めたため、2人はレッドアタッカーズのネルフ駐留部隊の中隊長になったのである。

「さて、各自、部隊の状況を報告してくれ。最初はアリオスだ。」

「はい。では、私から報告します。我が部隊は北部を守っています。が、不法侵入者をこの1週間で597人発見、拘束しました。その大半が惣流アスカ目当てであり、説教したうえで釈放しました。」

「ふうむ、多いな。次、マックス。」

「はい。私の部隊は、西部を守っていますが、不法侵入者をこの1週間で367人発見、拘束しました。こちらも、その大半が惣流ア

ス力目当てでした。」

「次、マリア。」

「はい。私の部隊は南部を守っていますが、不法侵入者をこの1週間で256人発見、拘束しました。こちらも、その大半が惣流アスカ目当てでしたが、一部他国の諜報員がいたため、尋問中です。」

「次、ハウレーン。」

「はい。私の部隊は東部を守っていますが、不法侵入者をこの1週間ですら296人発見、拘束しました。こちらは全員厳しく尋問中です。」

それを聞いた全員が苦笑する。ハウレーンは、まじめで融通がきかないため、少々注意して釈放しても良いような者まで厳しく尋問してしまうのである。

「分かった。では、特に大きな問題は無いということでもいいな。」

「……はい。」

こうして、定例中隊長会議は、特に問題なく終わった。

「ねえねえ、少しお茶しない。」

会議の後で、マリアがみんなに声をかけたが、やっぱりと言っか、ハウレーンが反対した。

「そんなことをしている暇があったら、訓練すべきだろう。」

だが、今日はマリアも食い下がった。

「でもね、アスカから頼まれ事があるのよ。だから、作戦会議っていうことをお願いできないかしら。」

「ううむ、そういうことならしょうがないか。」

アスカの言う通り、ハウレーンはアスカの名前を出したら、渋々ながらも参加することになった。

「ねえ、新しい研修生のことなんだけど、何かギスギスしていないかしら。」

マリアの問いかけに、ハウレーンを除いて頷いた。

「何か、みんなが仲良くなるような方法はないかしら。」

次のマリアの問いかけには、みんな、首を捻るばかりである。

結局、1時間ほど話したが、妙案は浮かばなかった。そこで、何か問題が起きそうな兆候があったら、直ぐに互いに連絡を取り合おうということとなった。

後は、第3新東京市に、ゼーレの残党が入り込まないようにするにはどうしたら良いか、テロを防ぐにはどうしたら良いのかという話に終始した。

一応、現在の第3新東京市は、テロ対策を理由にして、他都市からの流入を制限しており、市内に正規ルートで入るには、身分の明らか者でもかなり厳しい制限がある。事実上、ネルフ関係者以外は入り込めないようになっていた。

これは、エヴァンゲリオンのパイロットの保護を名目に行っているが、実際には、アスカやシンジ目当てでやってくる観光客やファンの締め出しが主目的である。

おかげで、不法侵入者は後を絶たないが、それを理由にして、さらに警戒を厳重に出来たりもしている。

だが、その反動で、なんとなく閉塞感があり、息苦しい感じがするのだ。そのため、研修生達もカリカリしだしているのだ。

「何も起きなきゃいいんだけど。」

マリアは呟いたが、平穩無事な状態は、そう長続きはしないのであった。

第65話 テニス部初練習

「えいつ！」

「おっと！」

「それっ！」

「たあっ！」

「あれっ！」

今日は、火曜日。アスカやシンジ達にとって、初めてのテニスの日だ。

シンジは2年生に混じって練習をしていた。アスカと一緒に打とうと誘ったのだが、基本的なことをしっかり練習したいと言って断ったのだ。

そこで、カヲルやケンスケと一緒に、3年男子の打ち出した球を5球交代で打ち返す練習をしていた。

5球とも渾身の力を込めて打ち返すシンジだったが、うち2球はコートの外に出てしまった。いわゆる、『アウト』である。

「あゝあ、うまくいかないなあ。」

シンジは、ちらりとアスカの方を見た。今日のアスカは、白を基調

にしたウェアを着ていた。だが、真っ白ではなく、上下ともに何本かの赤いラインが縦に入っており、それが良いアクセントとなっていた。

（やっぱり、アスカは赤が似合うよね。）

シンジは、ぼうつとしながらアスカの方を見た。スコートからは、アスカの白くて細長くて綺麗な足が伸びていた。心なしか、誰もがアスカの足を見つめているような気がして、最初は面白くなかったが、ちらちらと見ているうちに、何となく良い気分になっていった。

（アスカの足って、あんなにスラリとして綺麗だったんだ。それに、スタイルも抜群じゃないか。何で今まで気付かなかったんだろう。）

こうやって、改めて見てみると、アスカは顔は綺麗だし、スタイルも抜群だから、どんなものを着ても良く似合う。同じ年の女の子と一緒にだと、その差が際立って見える。

（あつ、アスカがニコニコ笑っている。アスカって、あんな風に笑うんだ。）

それに、笑顔がとっても可愛いのだ。アスカの笑顔を見ているだけで、シンジは何となく良い気分になれるのだ。

胸も綾波よりは少し小さい感じがするが、平均よりかなり大きく、他の女子と比べると、その差は歴然としていた。それに、頭が物凄く良くて、スポーツも万能だし、まさに完璧とも言える女の子だ。

（アスカって、男からは凄い人気があるよね。でも、何で僕はアス

カと婚約出来たんだろう？エヴァのパイロットだったから？もしそうでなかったら、見向きもされなかったんじゃないか？)

シンジは、少し暗い気分になった。

(今はいいけど、何の取り柄もない僕に愛想を尽かして、他の男のところに行ったらどうしよう。アスカを誰かに奪われたらどうしよう。嫌だ、絶対に嫌だ。)

シンジは、アスカのことがいとおしいと思うのと同時に、誰かに奪われてしまうのではないかという恐れも少なからず抱いていた。婚約を解消した時にかなりがっくりきたのは、記憶に新しいが、おそらくそれが大きな理由だったのだろう。

だから、シンジはアスカの足といえども、他の男子に見られるのは面白くなかったのだ。アスカを見た者が、みんなアスカの虜になってしまう、そしていつか誰かがアスカを奪ってってしまう、そんな風に考えてしまっていたのだ。

その一方で、シンジはアスカの足を誰にも触らせない、自分だけのものにしたいとの独占欲が生じてきたことに気付き、我ながら驚きを感じていた。

一方、アスカはというと。

「そりゃあっ、スマツシユ！」

「うわあっ！惣流さん、もっと手加減してくださいよっ。」

アスカは、思いつきり体を動かせるので、ニコニコ顔である。だが、たまらないのは、アスカの練習相手だ。

テニスラケットを握るのが今日で2回目だというアスカに対して、最初は2年生の女子が練習相手を務めたのだが、スポーツ万能のアスカはすぐに2年生では手に負えなくなり、3年で一番上手い女子でも、もうアスカの球を返すのが辛いようだ。

「そつ、惣流さん。頼みますから男子とやってください。私ではもう無理です。」

今まで練習相手を務めていた、田中ミナという3年で一番上手い女子は、肩で息をしながらそう言った。かなり辛そうな感じだった。

「はははっ。ちょっと調子に乗ったちゃったかしらね。」

頭をかくアスカに、ユキが近寄ってきた。

「すみません、惣流さん。男子と一緒に練習してくれませんか。女子は、惣流さんと打ち合えるだけの人がもういないんです。」

だが、アスカはユキの耳元に口を近づけ、小声で言った。

「アタシはいいけどさ、シンジが機嫌悪くなるのよね。どうしようか。」

ユキは、ちらりとシンジを盗み見た。すると、やっぱりというか、シンジはアスカのことをちらちらと見ていた。ユキも、シンジが結構嫉妬深いことを薄々ながら知っていたので、ため息をついた。

「はあつ、分かりました。私と打ちましょう。でも、手加減してくださいね。」

ユキは、アスカが左手でラケットを握っているのに気づかなかつたようだ。かなり手加減したつもりのアスカにとっては、少々無理な注文であったが、アスカもせっかくの楽しい気分をぶち壊したくはなかつた。

「分かつてるって。」

アスカは苦笑いしながら、ラケットケースから腕に付ける重りを取り出すことにした。むろん、誰にも気づかれないようにと気を配りながら。

一方、アスカのことで頭が一杯のシンジのところへ、トウジがニコニコしながら声を掛けてきた。

「どうしたんや、シンジ。誰かさんの足に見とれたか。」

「そつ、そんなことないよっ！ア、アスカの足なんか、別に、普通じゃないかっ！」

（ど、どうして分かったの？）

「ほう、ワイは惣流の足やなんて、一言もいうてへんで。」
トウジはニヤリと笑う。

「あつ。ひ、ひどいな、トウジ。意地悪なこと言って。」
シンジはちょっとむっとした。

「まあまあ、怒りなさんなって。好きなおなごの足を見ることは、ちいとも変やない。年頃の男の子にとっては、普通の反応や。」
さらにトウジの笑みは増していく。

「ふうん、じゃあトウジは洞木さんの足を見ているんだ。」
さすがにカチンときたシンジは、逆襲に出た。今度はトウジが慌てる番だ。

「そ、そないなこと、あらへん。ヒカリの足は、太くて見られたもんじゃあらへんで。」

だが、トウジの言葉を聞いていたのは、シンジだけではなかった。

「ふうん、太くて悪かったわね。」

気がついた時には、目をつり上げたヒカリが2人の後ろに立っていた。

「ヒ、ヒカリ、すまん。いまのは、ワイの本心じゃないんや。ご、誤解や。」

「あつそ！フンだっ！」

ヒカリは、足をドスドスと強く踏みながら去って行った。きっと、物凄く怒っているのだろう。

「シンジ、頼む。惣流に言って、誤解を解いてくれや。」

手を合わせて頭を下げるトウジに、シンジはあきれた。

(でも、明日は我が身かもしれないし、お互いさまか。)

そう思いなおして、首を縦に振った。

「ねえ、アスカ。ちょっとお願いがあるんだけど。」

練習が終わって、アスカが部屋に向かおうとしていたところで、シンジは声をかけた。

「何よ、後にしてよ。」

早くシャワーを浴びたいだろうアスカは、思いつきりしかめっ面をした。

「頼む。今聞いて欲しいんだ。」

だが、普段ならすぐに引つ込むはずのシンジだが、今回は引かなかった。いつもと様子が違うシンジに、アスカはしょうがないなという顔をした。

「分かったわ。じゃあ、貸しが一つよ。早く言いなさいよ。」

(良かった。アスカに話を聞いてもらえて。)
シンジは胸をなで下ろした。

「うん、実はトウジがね…。」

アスカは、シンジの話を聞いて吹き出しそうになったが、急ぐ理

由も分かってくれたようだ。下手をすると、トウジは明朝、あるいはそれ以降もメシ抜きになる可能性がある。

「分かったわ。ヒカリには、上手く言っておくわ。でも、シンジを悪者にするからね。それでも良いわよね。」

「うん、頼むよ。」

「じゃあ、行くわね。今ならまだ間に合うから。」

アスカは、急ぎ女子テニス部の部室へと走って行った。シンジは、その後ろ姿を微笑みながら見つめていた。

「ねえ、ヒカリ。ちょっといいかしら。」

「なによ、アスカ。」

「さっき、鈴原と何かあったでしょ。」

「なっ、何も無いわよ。」

「嘘。シンジから聞いたわよ。」

「それで、何よ。」

「うん、シンジから伝言ね。ヒカリにごめんなさいって謝って欲しいって。」

「どうして、碓君が謝るの?」

「鈴原がね、ヒカリの足を見ていたから、シンジがからかったらしいのよ。それで、鈴原が照れ隠しに『ヒカリの足が太い。』って言うっちゃったらしいのよ。」

「そ、そうだったの。」

ヒカリの頬が少し赤くなった。『ヒカリの足を見ていたから。』という部分だけが強く耳に残ったようだ。ヒカリの怒りのボルテージが一気に下がっていく。

「鈴原も、悪気があった訳じゃないみたいだし、許してあげなさいよ。」

「分かったわ。でも、アスカが碓君に同じことを言われたらどうする?」

「もちろん、許さないわよ。だって、力関係が、ヒカリ達と違うもの。」

「ア、アスカ。そこまで言う?」
ヒカリは、少し冷や汗をかいたようだ。

「惣流さん、それはちょっと言い過ぎじゃあ。」
ユキも、珍しくアスカに意見した。

「.....」

マリアは、何と saying しているのか、迷って言えないようだ。

「良いのよっ！アイツは、心底アタシに惚れているんだからっ！」

アスカが腰に両手を添えて、胸を張るのを見て、ヒカリも毒気を抜かれてしまい、トウジのことは、一件落着となった。

「シンジ、お待たせっ！」

「うん、それじゃあ行こうよ。」

いつも帰るときは、アスカ、ヒカリ、ユキ、マリアの4人が先頭に立って歩き、その後をシンジ、トウジ、ケンスケ、カヲルが歩いていく。

今日は、いったん家に戻って荷物を置き、夕食を済ませてから、ネルフへと向かうのだ。だから、夕食は温めればすぐ食べられるものになっている。

最初は、シンジやトウジ達はネルフの食堂で食べると言い、ユキは早く帰って食事の支度をするからみんなと一緒に食べたいと言いつたのだが、みんなで一緒に帰りたいというアスカの意見が最終的に通り、このような形になったのである。

みんなで帰ろうとしたその時、さっそうとマナが現れた。

「シンジ、ちょっと話があるんだけど。少しでいいから、時間くれないかな。」

「ご、ごめん。今日はこれからネルフへ行くんだ。だから、また今度にしてよ。」

「ええ〜っ。本当なの、シンジ？どっかの怖い人に脅されているんじゃないの？」

「へっ？」

（誰だろう、怖い人って？）

シンジは、間の抜けたような顔をした。アスカのことを言っているとは分からなかったのだ。

「ううん、なんでもない。じゃあ、またね。頑張ってるね、シンジ。」

マナは首を傾げ、シンジに微笑みかけると、回れ右をして去って行った。残された8人も、呆気のとられていたが、最初にカヲルが口を開いた。

「シンジ君、今の人は誰だい？」

「ああ、カヲル君は初めて会ったんだよね。彼女は、霧島マナさんといって、2年生の時に僕達と同じクラスに転校して来たんだ。でも、直ぐに他の学校へ転校して行ったんだよ。それが、またこちらに来たんだ。」

「彼女は、シンジ君のことが好きなのうだね。」

「そ、そうかな。」

「シンジ君は、彼女のことを好きかい？」

カヲルのストレートな問いかけに、周りの人間は身を固くしたが、シンジは鈍感なためか、気付かなかった。

「うん、好きだよ。」

そう答えてしまった。それを聞いたアスカの顔は、真っ赤になっていった。恥ずかしがっているのではなく、怒りに顔を赤くしているのだ。さきほど、『アイツは、心底アタシに惚れているんだからっ！』と言ったのに、シンジにこんなことを言われたのでは、アスカの顔は丸潰れである。

そんなアスカの様子を見て、シンジとカヲルを除いた5人、特に女性陣の顔が真っ青になる。

(シ、シンジの奴、惣流の前で、なんてこと言うんだよ。絶対まずいよ。)

(シンジのド阿呆。ワイかて、ヒカリの前ではそんなこと言うわへんで。こいつは、本当に鈍感なやつちゃ。)

(碓君、アスカの前なんだから、もう少し気を遣って。はあっ、自分、アスカの機嫌が悪くなるわね。)

(碓君、惣流さんの前でなんてことを。許せないわ。)

(まつ、まずい。アスカが怒ってる。こんなに怒ったアスカは、ドイツでも見たことないわ。は、早く逃げないと。)

だが、続くカヲルの問いに、雰囲気は一変した。

「シンジ君、冷たいねえ。僕よりも、あの、マナっていう娘の方が好きなのかい。」

「そ、そんなことないよ。カヲル君の方が好きだよ。」

(当たり前のこと、言わないですよ。)

「良かった、シンジ君。じゃあ、僕よりも好きな女の子はいないんだね。」

「ちょ、ちょっと、そんなこと言ってないよ。」

(なっ、何を言うのさ。アスカがいるじゃないか。)

「シンジ君、まさか、僕よりも好きな女の子がいるんじゃないだろうね。」

「カ、カヲル君。知っているくせに、そんなこと言わないですよ。」

(カ、カヲル君、どうしたのさ。変なことを聞いて。)

「おや、僕には分からないよ、シンジ君。はっきり言ってくれないと。」

「い、いやだよ。だって、みんなが聞いているのに。」

(言ったら、アスカに怒られるじゃないか。嫌だよ、そんなの。)

だが、こぞとばかりにマリアが口を出した。

「碓君、言わなくては駄目よ。碓君には、貸しがあったわよね。だから、絶対に言っ。」

(えっ、ど、どうしたんだよ。)

「そうですよ、言わなくちゃ駄目ですよ。」
ユキもキツイ目をしてマリアに加勢する。

(も、森川さん、目が怖いよ。一体、どうしちゃったのさ。)

「碓君、言いなさいよっ。」
なんと、ヒカリまでもが敵に回ってしまった。

(ほ、洞木さんまで。そ、そんなあ。)

「シンジ、言えよ。」

「そうや、そうや。」

男の友情も、あてにならなかった。

(うっ、トウジもケンスケもひどいよ。みんな僕をいじめて、何が楽しいのさ。良いよ、どうせアスカに怒られるのは僕なんだから知らないよ、アスカの雷が落ちてても。)

「もう、みんな知ってるくせに。分かった、言うよっ！僕は、カヲル君よりも、ずっと、ずっと、アスカのことが好きだよっ！」

シンジは、大きな声で叫ぶと、顔を真っ赤にしていた。

(い、言っちゃった。うっっ、アスカに怒られるよっっ。『恥ずかしいこと、言わないでよっ！』なんて、ぶっ飛ばされるよっっ。)

身構えたシンジだったが、アスカはぶっ飛ばすどころか、何も言わなかった。そこに、マリアが急に聞いてきた。

「じゃあ、霧島さんとアスカはどっちが好き？」

マリアの問いかけに、不意をつかれたシンジは、何も考えずに即答した。

「アスカに決まってるよっ！もうっ、みんな意地悪なんだからっ！」

（うわあっ、間違いないよっ。アスカに怒られるよっ。もうっ！それもこれも、みんなのせいだよっ。）

頬を膨らますシンジを横目に、急に顔に明るさが戻り、殺気が薄れていくアスカを見て、周りの者は一様にほっとしていた。シンジだけが、場の雰囲気気付いていなかった。

こうして、テニス部の練習初日は、波瀾含みで終わったのである。

第65話 テニス部初練習（後書き）

あくまでも、アスカ一筋のシンジでした。でも、マナがこのままあっさり諦めるとは思えませんし、研修生達の動向も気になります。もしかしたら、卑劣な罠が待っているかもしれない。

第65話補完 怪しい動き

「おい、今を見たか？」

「ああ、見たとも。あの、マナっていう女の子は、碓のことが好きらしいな。」

「アスカちゃんのライバル登場、っていう訳か。」

「しかしよお、俺達研修生の中でも、碓のことが好きな女の子が多いよな。全く、ムカつくよ、何が英雄だ。司令の息子だからって、たまたまエヴァンゲリオンに乗れただけなのによ。それが、アスカちゃんと婚約なんかしやがって。」

「そうさ、あんな奴、俺達と比べたら、クズみたいなもんさ。あいつつたら、ろくな訓練もしないでエヴァに乗れたっていうけどよ、きつと何かインチキしてるんだぜ。そうに違いななさ。」

「あんな奴、ボコボコにしちまおうぜ。」

「おいおい、それは、やめた方が良さぞ。」

「何だよ、怖じ気づいたのかよ。」

「いや、そうじゃねえよ。奴の側にはアスカちゃんがいつもいるしよ、隣に住んでて、食事はいつも一緒なんだろう？ボコボコにしちまったら、一発でアスカちゃんに分かつちまうじゃねえか。」

「構わねえさ。アスカちゃんも、奴が情けねえ奴だつて知ったら、愛想を尽かすに違いないさ。」

「それがよお、そうでもねえらしいんだ。奴は、以前はもつと情けなかつたらしいんだ。俺の情報だと、奴は相田よりも弱かつたらしい。むろん、アスカちゃんよりも数段な。それによ、ドイツ支部の連中からの情報なんだが、奴は以前、不良高校生にボコボコにされたことがあつたらしいんだが、やった奴らがどうなつたと思う？」

「さあ、どうなつたんだ？」

「全員、半年以上入院するほどの重傷だよ。そのうえ、高校生に脅されて手引きした女の子も、1カ月入院したらしい。」

「おいおい、どういうことだよ。」

「どうやら、ネルフの諜報部がワイルドウルフが動いたらしい。」

「おいおい、マジかよ?」

「ああ、だから碇には下手に手出ししない方がよいぜ。奴は、葛城さん夫妻と物凄く仲がいいんだと。それもよ、葛城作戦部長はつい最近まで一緒に住んでいて、奴のことを『シンちゃん』とか呼んで、可愛がつているらしい。奴がボコられた後、しばらくの間怒りまくっていたらしいしな。」

「そうか、それで怒つた葛城作戦部長が、諜報部長に言つて、諜報部がワイルドウルフを動かした、きつとそうに違いない。」

「作戦部長と諜報部長が味方じゃあ、ネルフの中では怖いもの無し

だな。もつとも、奴は司令の息子だったか。」

「だが、あの司令はあまりみんなに好かれていないからいいが、葛城作戦部長は凄く人気があるぞ。美人で、明るいし、親切だし。気分が変わり易いのが欠点だが、根は優しいってみんな言うしな。あの人を敵に回したら、本部にはいらなくなるぞ。」

「ちきしょう、アスカちゃんは奴にとられちゃうのかよ。」

「悔しいよな。いや、まてよ、良い考えがあるぞ。」

「何だよ?」

「あの、マナっていう娘を利用するんだよ。碇とあの子をくっつけちゃおうぜ。碇に危害を加えるのは絶対にヤバイけどよ、女の子をけしかけるくらいだったら、構わねえだろう。」

「そうだな。駄目で元々だしな。」

「そうと決まったら、他の連中にも声を掛けようぜ。但し、女子に知られたら大変なことになるから、絶対に秘密だぜ。」

そして、二人はマナへと近付いて行った。

「君が、霧島マナさんだね。」

その声にマナが振り向くと、二人の少年が立っていた。

「驚かせてごめん。僕達は、怪しい者じゃないよ。ネルフの研修生なんだ。僕の名前は、テリー。こいつは、ニールっていうんだ。」

テリーは、ちよつと髪の毛の長い、野性的な感じのするハンサムな少年だった。ニールは、さっぱりとした髪をしてテリーと好対照だったが、上品な感じのする、これまたハンサムな少年だった。

「それで、私に何の用ですか。」

「悪いけど、君が碇君に話しかけているところを、偶然見かけてしまったね。もし霧島さんが良ければ、力になりたいと思ったんだよ。」

「ふうん、お生憎さま。私は、知らない人の手は借りないわ。」

「ごめん、いきなりで警戒させちゃったようだね。正直に言うとな、僕達はアスカちゃんのファンなんだ。だから、君が碇君と上手くいくことは、僕達にとっても喜ばしいことなんだよ。」

「あっそ！良かったわね。」

「はははっ。手厳しいね。でもね、僕達は男だし、ネルフの中にも入れるから、味方に付けると色々と便利だと思うよ。そうだねえ、例えば、アスカちゃんはネルフの中では、リッコ先生と一緒にいることが多くて、碇君とは別行動のことが多いんだよ。そんなこと、知っていたかい？」

「えっ！それって、本当なの？」

マナは驚きの声をあげた。マナは、学校での様子から見て、当然ネ

ルフの中でも二人が一緒だと思っていたのだ。

「だって、考えてもみてごらん。アスカちゃんは広報部のチーフなのに対して、碓君はパイロットのチーフだよ。全然役割が違うし、やることも違うんだよ。一緒にいる訳がないじゃないか。」

「そりゃあ、そうかもしれないけど。」

「でも、君はそのことに気付かなかった。それに、情報を収集しようとする努力を怠った。違うかい？」

「そんなことない。私だって、色々調べたけど、ネルフ内でのことは秘密だって言っつて、誰も教えてくれなかったもん。」

「そうかい。それじゃあ、僕達が提供する情報は、結構貴重なんだね。それとも、碓君のことは、そこまでするほど好きじゃないとか。」

「そ、そんなことないもん。私だって、惣流さん以上に、シンジのことが好きだもん。」

「じゃあ、情報提供だけでもいいから、協力させてもらえないかな。もちろん、それ以上のことで構わない。例えば、ネルフの中で碓君に手紙を渡すとか、アスカちゃんを碓君から一時的に離すようにする手伝いをするとか、色々手伝えることはあると思うよ。」

「うっん。」

マナが迷っていると、テリーは紙切れを一枚マナに手渡した。

「これが、僕の携帯の番号と、メルアドだよ。気が変わったら連絡して欲しい。まあ、気長に待っているよ。」

テリーはそう言うと、二人でマナにじゃあねと言って、去って行った。

こうして、アスカやシンジの知らないところで、怪しい動きが始まったのだった。

第66話 マナ・アタック

「ねえ、マナ。碇君のことは、もうあきらめなよ。」

「何よお、ケイタ。私が誰を好きになっただって良いでしょ。それにシンジはまだ私に脈があるよ。アスカだって、シンジが世界を救った英雄だから、自分の男にしたいだけなんだから。それじゃあ、シンジが可哀相そう。」

そう言いながら、マナはオレンジジュースを飲み干した。ここは、マナの家のリビングで、今はケイタとマナの二人きりである。先程からマナとケイタは、シンジとアスカのことで、口論を交わしていた。

「何でそう思うのさ。」

「だって、私がシンジと最初に会った頃は、シンジとアスカの仲は悪かったよ。アスカは、シンジのことを下僕扱いしていたし、シンジには冷たかった。そうじゃなきゃ、シンジがデートの誘いに簡単に来るわけないよ。」

「確かにそうかもしれないけど、それは昔の話でしょ？それに、惣流さんだって、その頃はたまたま機嫌が悪い時期だったかもしれないよ。」

「そんなことないよ。絶対にアスカはシンジのことを好きじゃなかったし、シンジのことを男として認めてもいなかったもん。それくらい、付き合いの短い私でも分かったもん。」

「でもさ、僕やムサシやマナも、最初に出会った頃は、結構ギスギスしていたよね。それがさ、今みたいに仲良くなるのに、時間がかかったよ。碓君と惣流さんも、同じじゃないかな。」

「あれっ？でも、シンジはエヴァのパイロットでしょ？でも、アスカは広報部のチーフに過ぎない訳でしょ。何で、シンジと対等なんだろう？」

「マナが監視していたのは、サードチルドレンの碓君だったっけ。それで、ファーストチルドレンの綾波さんとセカンドチルドレンを監視する人間がいたはずだよな。でも、セカンドチルドレンって、一体誰？」

「うーん、それがさあ、思い出せないの。確か、同じクラスにいたはずだし、資料とかも見たはずなのに、思い出せないの。サードインパクトの影響かなあ。」

「惣流さんじゃあないんだよね。」

「うーん、自信は無いけど、多分違うと思う。」

「じゃあ、何で一緒に暮らしていたのさ。パイロット同士だったら分かるけど、そうじゃなかったら、一緒に暮らす理由は一つしか考えられないよ。」

「むっつ、何よっ。」

「二人が親の決めた許嫁だったとか。」

「スパーン！」

哀れ、ケイタは、マナに思いっきり頬を引っぱたかれてしまった。だが、二人が愛し合っているからなどと言えば、もっと凄いことになっていただろう。

「くっつ、ケイタったら。」

マナは、一人頬を膨らませていた。マナは、ケイタに協力してもらって、シンジと会う時間を作りたかった。だが、そのケイタに反対されては、マナに打つ手は無い。

シンジとアスカは、一緒に暮らしているのも同然だから、朝から学校に来るまでは、付け入る隙がない。学校の中でも同じクラスのうち、シンジとアスカは一緒にいることが多く、クラスが離れているマナには、アスカの目を盗んでシンジに声をかけられない。

部活にしても、テニス部に入部を申し込んだのだが、きっぱりと断られてしまった。女子の部長は、最初ははっきりと断らず、考えますと言っていたのだが、副部長の森川さんがキツイ目をしながら断ってきたのだ。

もちろん、ネルフの中には入れないから、シンジがネルフに行く日は全く打つ手が無い。いつ帰るか分からないうえに、おそらく帰る時はアスカも一緒だろうからだ。

休日をもっと悲惨で、仲良しグループで楽しく出かけるのを指をくわえて見ているしかない。

そうになると、下校時を狙うか、トイレに行く時を狙うしかないのだが、これまたアスカかアスカの下僕と言われている相田が一緒のことが多く、なかなかシンジに声を掛けられないのだ。

「しょうがない、アイツ達の手を借りるしかないか。」

マナは、昨日出会った二人組のことを思い出した。

「このままじゃあ、シンジはアスカにとられちゃう。シンジとアスカが両思いだったら、ううん、シンジがアスカのことを本当に好きだったら、私は身を引くしかない。でも、今のままでは話も出来ないし、シンジの気持ちが分からない。シンジの気持ちが分からないのに、シンジを諦めるなんて、それだけは、絶対に嫌。」

マナは、ごみ箱の中を漁ると、1枚の紙切れを探し出した。

「え〜と、確かここに連絡先が書いてあったっけ。」

マナは、藁にもすがる気持ちであった。

「ごめんね、シンジ。あなたのことを試させてもらっ。もし、シンジが少しでも私のことを想っていてくれるなら、きつと来てくれるはず。その時は、私はシンジに自分の気持ちを伝えよう…。」

マナは、知らないうちに拳を強く握りしめていた。

「ねえ、碓君。ちょっといいかな？」

シンジが、ネルフでの訓練を終えて、更衣室で着替えていたところに、二人の少年がやってきた。ケンスケとトウジはまだ来ていない。実は、他の研修生に話しかけられて、足止めを食らっていたのだが、シンジに知る由がない。

「えっと、君たちは、テリー君にニール君だよ。僕に一体、何の用なの？」

「いやあ、君の耳に入れるようなことがどうか悩んだんだけど、一応伝えておいた方が良さそうと思ってね。」

「なあに、言ってみてよ。」

「うん、実はね、昨日駅前のファミレスで偶然聞いてしまったんだけど、数人の高校生がある女子生徒を襲う計画を立てているらしいんだ。」

「そ、それが僕とどういう関係があるの？」

「それがね、その高校生は、碓君のことを凄く恨んでいるんだけど、碓君には手が出せないから、碓君の友人を襲うって言うていたんだ。」

「だ、誰を？」

「それが、そこまでは分からなかったんだよ。」

「ま、まさか、アスカじゃ？」

シンジの顔は青くなった。

「いや、その高校生達は、惣流さんのファンらしい。だから、惣流さんを襲うっていうことはないと思うよ。」

「じゃあ、誰を襲うのさ?」

「もし、知りたいって言うなら、調べてみるけど、どうしようか。」

(一体、誰だろう。アスカじゃなければ、洞木さん?それとも森川さんかな?)

少し迷ったが、結局シンジはテリーに頼むことにした。

「じゃあ、悪いけど調べてくれるかな。」

「ああ、良いよ。じゃあ、分かったら直ぐに連絡するよ。携帯に連絡すればいいかな?」

「うん、お願いするよ。」

この後、シンジは少し暗い気持ちで家路に着いたのだった。

翌日、4月14日の木曜日の出来事だった。

「あつ、テリー君からのメールだ。」

この日は、2回目のテニス部の日だった。練習が終わって、着替え

ようとしていた時に、テリーからのメールが携帯に入ったのだ。

その内容は、こうだった。『襲われようとしているのは、霧島マナさん。場所は、体育用具置場。淀君の名前で呼び出されたい。呼び出されたのは、5分前。急いで。』

（なっ、なんだって！マナが、僕の名前で呼び出されたって！）

シンジは、血相を変えて速攻で着替え、ケンスケやトウジに一言も声をかけずにすっ飛んで行った。

（マナ、どうか無事でいて。）

シンジは、祈るような気持ちで懸命に走った。

（あっ、あそこかな。）

シンジは、数分で目的の体育用具置場にたどり着いた。そして、鉄扉を勢い良く開けると、顔に黒いマスクを被っている男二人が、マナの服を引き裂いているところだった。

「シンジ！助けてえ！」

マナの叫びに、シンジの血が逆流した。

「お前らっ！マナから離れろっ！」

シンジは中に飛び込んで、片方の男に殴り掛かった。

「うわあっ!」

その男は、シンジに殴られて床に転がった。

「なんで、マナを襲うんだよっ! 僕が憎ければ、僕を襲えばいいじゃないかっ!」

シンジは、残る一人の男を睨みつけた。

「ごめんなさい、許してください。」

その男は、言うやいなや、急に土下座をした。

「なっ!」

あまりのあっけなさに、さすがにシンジも驚いたが、特訓の成果かなあ、などとちよっぴり良い気分になった。その隙を衝いて、二人の男は逃げ出してしまった。

「あっ、待てっ!」

だが、追いかけるシンジの目の前で、鉄扉が閉じてしまった。

「ちくしょうっ!」

犯人達を取り逃がしたシンジは、真っ赤になって怒った。だが、その時後ろから声がした。

「嬉しいよ、シンジ。助けに来てくれたんだ。」

「マナ！そ、そ、その、無事だったかい？」

「うん、シンジのおかげで、危機一髪、助かつちゃった。ありがとう。でも、服が破れちゃったの。シンジ、悪いけど、何か着るものないかなあ。」

「えっ、着るもの？ごめん、何も持ってないんだ。」

「もうっ、シンジったら。こういう時はねえ、男は自分の着ているものを脱いで、女の子に着せてあげるんだよ。」

「あっ、そ、そうだよ。ちょっと待ってて。」

シンジは、何の疑いも無しにYシャツを脱いで、後ろ向きにマナの方へと渡した。

「こっ、これでいいかな。」

「うん、ありがとう。でも、下の方がスースーするけど。」

「あっ、じゃあ、どうしよう。」

「シンジのスボンを履きたいけど、駄目だよ。」

「ううん、いいよ。僕は、何か適当なものを見つけて羽織るから。」

優しいシンジは、スボンを脱ごうとした。だが、その時、後ろから手が伸びてきて、全部足元まで下ろされてしまった。

「なっ、何するんだよ、マナ！」

だが、マナは答えず、シンジのシャツまでも、手際良く脱がしてしまっただ。

「マ、マナ！止めてよっ！」

「シンジ、来てくれて嬉しい。」

マナは、後ろからシンジに抱きついた。

「マ、マナ、どうしてっ！」

「ごめん、シンジ。しばらくこうさせて。」

「だ、駄目だよっ！」

シンジはマナを振りほどこうとして体をねじったが、バランスを崩してしまい、マナに覆いかぶさるようになり、倒れてしまった。

「あんっ！シンジったら、だいたくん！」

「そっ、そんなんじゃないよっ！」

慌てたシンジは、あろうことがマナの胸に手を置いてしまっただ。

「シンジ、嬉しいっ！」

シンジがその気になったと大いなる誤解をしたマナは、シンジを抱きしめた。

「ま、まずいよ、マナ！」

「うっん、良いの。シンジが望むなら、全てをあげる。ちょっと怖いけど、シンジだったら良いよ。」

「そ、そんなあっ！やめてよっ！」

シンジは慌ててマナの胸から手をどけたが、二人の間を隔てていた手がなくなったためと、床に着いた手が滑ったためとで、かえって体を密着させる結果となった。それが、さらにマナの誤解を大きくする。

「シンジ、大好き！」

マナは、シンジを思いっきり抱きしめた。

(ま、まずいよっ！こんなこと、アスカに知られたらっ！)

シンジは、床に手を着いて顔を上げたが、ちょうどその時マナと目が合ってしまった。

(うんっ！)

シンジは、後頭部をマナに押さえられ、マナとキスをする体勢になる。

(うっうっ、は、離してよっ！)

シンジがマナの手をつかんだその時、物凄い音がした。

「ドツカーンッ！」

大きな音がして鉄扉の鍵が壊れ、鉄扉自身も大きく歪んだ。

「シンジ！いるのっ！」

シンジの愛しい美少女の声が聞こえてきた。

その時、シンジは見た。不安そうな顔をした美少女の顔が、みるみるうちに般若のような恐ろしい顔に変化していくところを。

（ぼ、僕の人生、これで終わりかなあ。）

シンジは、あまりの恐怖に、既に思考がぶっ飛んでしまっていた。

第66話 マナ・アタック(後書き)

またもや、簡単に引っかかってしまうシンジでした。以前、痛い目に遭ったのに、まったく懲りていません。さて、これからどのよ
うな修羅場が待っているのでしょうか。それとも…。

第66話補完 アスカの怒り

「あれっ、シンジは一体、どこへ行ったのよ？」

練習が終わって、アスカ達は校門へと向かったのだが、トウジ、ケンスケ、カヲルの3人がいて、なぜかシンジだけがいなかったのだ。

「あれっ、おかしいな。シンジだったら真っ先に着替えて、出て行ったぞ。てつきり、惣流と会うのかと思っていただけだな。」

「うるさい、相田っ！一言多いつ！」

アスカが睨むと、ケンスケは小さくなってしまった。

「でも、アスカと会うためじゃないとしたら、一体何の用かしら。」
ヒカリが首を捻る。

(うーん、待てよ。これと同じようなことが、前にあったわよね。
あっ、まずいつ！)

「ねえ、みんな。手分けして、シンジを探そうよ。多分、学校からは出ていないと思うから。」

「なんや、惣流。血相変えおって。」

「アンタ達、覚えているでしょ。以前、シンジは不良高校生に、袋叩きに合っているのよ。何か、いやあな予感がするのよ。」

「そっ、そっやなっ。じゃあ、手分けして探そうやないか。」

学校生活の長いトウジの指図によって、各自が携帯片手に校内を探すことになった。そして、シンジを見つけたら、直ぐに位置を全員に知らせることにしたのだ。

「みんなっ！悪いけど、急いで探してねっ！」

アスカの声を合図に、7人が校内に散らばった。

「はあっ、はあっ。一体、シンジの奴、どこに行ったのよ。」

10分ほど探しても、シンジの影も形も見えない。携帯で連絡しても、電源が切っているらしく、全く応答も無い。

（まさかと思うけど、また変な奴らに襲われているんじゃないでしょうね。）

アスカの脳裏に、2カ月前の忌まわしい事件が甦る。命に別状がなかったから良かったものの、シンジは大怪我をしたし、下手をするに命に関わる可能性もあったのだ。

（嫌だ、もうあんな嫌な思いをするのは嫌だ。シンジ、無事でいて。）

アスカの目には、光るものがあつた。本人は絶対に否定するだろうが、それはまさしく涙だった。

（お願い、シンジ。無事でいて。）

そこに、ちょうど同じクラスの子が通りかかった。

「あっ、惣流さんまで、一体どうしたんですか。そんなに急いで。」

（惣流さんまで？）

無視してやり過ぎそうとしたアスカだったが、ちょっと引っかかることがあった。

「何よ、惣流さんまでって？」

「ええ、さっきも碇君が急いで走って行ったので、どうしたのかなあと思って。」

「えっ、シンジ？シンジはどこへ行ったの？」

「えっ、ええ。あっちの方で見たんですけど。」

「ありがとねっ！」

アスカは、その女子生徒が指す方向へと、走って行った。

（うん、何なのよ？）

アスカは、走っている最中に、研修生二人とすれ違ったのだが、何か拳動がおかしかったのだ。

「ちっ、何か怪しいわね。でも、今はシンジのを見つけるのが先ね。」

アスカが向かう先には、物置小屋があった。体育用具置場として使われているものだ。

「うん？何か声がするような。」

アスカは、入り口を確かめたが、鍵がかかっていた。

「どうしよう、ここじゃあないのかな。でも、念のため。」

「ねえ、シンジ！そこにいるの？いたら返事してよっ！」

だが、返事はなかった。アスカは、諦めて立ち去ろうとしたが、その時に僅かな物音がしたのを聞き逃さなかった。

「まさかっ！無事でいてっ、シンジ！」

アスカは、スポーツバッグからカイザーナックルを取り出すと、右手に装着した。そして、渾身の力を込めて入口の鉄扉を殴りつけた。

「ドッカーンッ！」

大きな音がして鉄扉の鍵が壊れ、鉄扉自身も大きく歪んだ。

「シンジ！いるのっ！」

アスカが中を覗き込むと、マットの上で1組の男女が抱き合い、キスをしていた。

「なっ！」

アスカは、先程までのシンジを心配する気持ちだが、急速に冷え込んでいた。そう、マットの上で抱き合ってキスをしていたのは、シンジとマナだったのだ。

(ゆ、許せないっ！)

アスカは、強く拳を握りしめていた。

第66話補完 アスカの怒り（後書き）

シンジを心配して探し回ったアスカの目に入ったのは、マナと抱き合ってキスするシンジの姿でした。アスカが怒るもの、無理ないでしょう。

果たして、シンジは許してもらえるのでしょうか？

第67話 泣き虫シンジ

「シンジ……。一体アンタ、何してんのよ……。」

底冷えのするような冷たい声でアスカは訊いてきた。おそらく今のアスカは、シンジに裏切られたとの思いから、頭に血が上り沸騰寸前なのだろう。それを、理性でブレーキをかけているのだろうが、爆発を防ぐのがやっとの状態のようだった。

アスカは、無理に感情を押さえ込んでいるため、声は無機質で抑揚が少なくなり、聞くものにとっては冷たい声となっていたのである。

（まずいっ！何か言わないとっ！）

アスカのただならぬ様子を感じ取ったシンジは、とにかく何か言い訳をしようとした。

「あ、あの、ご、誤解なんだ……。」

だが、おそろおそろ言ったシンジの言葉に、アスカは切れた。

「何が誤解だっけって言うのよっ！アンタなんか、もう知らないっ！」

アスカは、大声で怒鳴るとシンジに背を向けた。

（ま、まずいよっ！何でこうなっちゃうのさ。せつかく最近はアスカとはうまくいったのに。）

シンジは、顔から血の気が引いた。だが、そんなシンジにお構いな

しに、アスカはゆっくりと歩きだした。

(どうしよう、一体どうすればいいんだよっ。)

シンジは激しく動揺した。そして、自分でも思いもよらない手段に訴えた。

「嫌だっ！アスカ、お願いだから行かないでよっ！」

シンジは大声で叫び、後ろからアスカにしがみついた。

(今誤解を解いておかないと、アスカは二度としゃべってくれなくなるかもしれない。それからじゃあ遅いんだ。何としても、アスカに話を聞いてもらわなきゃ。)

自然と、シンジの腕に力がこもった。だが、黙っているアスカではない。

「止めなさいよ。アタシはねえ、今、猛烈に怒ってるのよ。見逃してあげるから、直ぐに手を離なさいよ。それとも、痛い目に遭いたいの？」

アスカはまたもや冷たい声で言った。だが、シンジはこの手を離すことは出来なかった。今この手を離せば、アスカとは二度と元通りにはならない、そんな予感があったのだ。

「い、嫌だよっ！誤解だつて分かってくれるまで、この手は離さないよっ！」

シンジの顔は悲しみに歪んだ。アスカとの約束を破って、アスカに

無断でマナのところに行つた馬鹿な自分が悪いのは承知しているが、自分だつて今までアスカのためにと頑張つてきたのに、こんなことで全部帳消しになるのはあまりにも悲しかったのだ。

それに、シンジはやっぱりアスカが好きなのだ。アスカに嫌われるかもしれないと思つただけで、深い悲しみと絶望が襲ってくるのだ。だから、アスカにはどうしても誤解を解いてもらつて、どうしても許して欲しい。

だが、そんなシンジの想いを、頭に血が上つた様子のアスカが分かるはずも無い。

「あんだねえ、いい加減にしないと、首の骨をへシ折るわよ。」

あまりと言えばあまりにも酷い言いようだった。だが、シンジは必死だった。ここでアスカに去られたら、二度と言ひ訳を言える機会はないかもしれないのだ。だから、シンジは負けずに言い返した。

「良いよっ！アスカに嫌われるくらいなら、死んだ方がましだよっ！」

「なっ！」

アスカの声が、少し震えたようだった。死んだ方がましだなど言つて、アスカを更に怒らせたかもしれないが、感情が高ぶつていたシンジは、もう止まることが出来ない。

「僕は、アスカが好きなんだ。大好きなんだ。だから、アスカに嫌われるなんて耐えられないよっ！」

そう言いながら、シンジは大声で泣きだした。泣くなんて、みつともないことは分かっているし、アスカに情けない奴と思われるのも分かっていた。だが、アスカに嫌われるというのは、シンジにとつてあまりにも悲しいことなのだ。だから、一度流れ出た涙は止まらなかつた。

（アスカ、僕のことを嫌いにならないでよっ！お願いだよっ！）

顔をくしゃくしゃにして、シンジは大泣きした。そんなシンジに、アスカは情け容赦なく言い放つ。

「じゃあ聞くけど、なんでマナと抱き合ってキスなんかしてたのよ？それも、こんなところで、鍵まで掛けてさ。」

それを聞いて、シンジは胸が痛んだ。確かに、自分はマナと抱き合つてキスしていたのだ。アスカから見れば、それは十分裏切りに見えるだろう。

理由を言いたいが、果たしてアスカが信じてくれるだろうか。いや、自分だつて信じられないのだから、アスカが信じてくれるはずがないだろう。そう考えたシンジは、反論することが出来なかつた。

アスカは、問いかけた後は黙ってしまった。シンジの返事を待っているのだろうか。だが、悲しいかな、シンジにはアスカを納得させるだけのものがなかつた。

（ちくしょう！僕はなんて馬鹿だつたんだ。リョウジさんから、気をつけるように言われていたのにっ！）

シンジは先日のリョウジとの会話を思い出した。

「あのお、ちょっと相談したいことがあるんですけど。」

「なんだい、シンジ君。」

シンジは、スイカ畑でリョウジと密かに会っていた。

「実は、アスカのことなんです。」

「ほう、どうした。」

「実は、僕とアスカは、夜は一緒に寝ているんです。」

「ほう、ほんとかい？いやあ、驚いたなあ。」

「ええ、アスカは、未だに悪夢を見るかもしれないから、独りでは寝たくないって言ってるんです。」

「で、それが相談と何か関係があるのかい？」

「あのお、僕って変態なんでしょうが。アスカと一緒に寝ていると、なんかこう、ムラムラっとして、アスカの体を触りたくなるんです。アスカにキスしたり、胸を触ったり、もっといやらしいことをしたいと思うことがあるんです。」

「いや、そんなことないぞ。シンジ君くらいの年齢だったら、女の子の体に興味があつたり、エッチな想像をするのが普通だ。だが、想像するだけで変な行動はとらないのも普通だがな。変な行動をす

ると嫌われるし、最悪警察に捕まってしまつ。」

「じゃあ、僕はアスカに変なことをしちゃあいけないんでしょうか？」

「うん、そつだな。我慢しておいた方がいいぞ。アスカに嫌われたらどうする？」

「絶対に嫌です。」

「じゃあ、我慢するしかないぞ。アスカは、シンジ君のことを信頼しているから、何もしないと信じているから一緒に寝ているんだろつ。その信頼を裏切つた場合は、大変なことになるぞ。」

「でも、僕はとつても不安なんです。アスカは美人だし、頭もいいし、僕とは釣り合わないじゃないですか。だから、いつかは僕に愛想を尽かして、誰か他の男に取られるんじゃないかと思つて、不安で夜も眠れないんです。だったら、いつそのこと今のうちにアスカを自分のものにしたいなあつて、思ふこともあるんです。」

「おいおい、シンジ君。それは考えすぎだぞ。君は、仮にもアスカの婚約者じゃないか。アスカは、人を裏切るような真似を人一倍嫌う。だから、今のままなら、シンジ君が裏切らない限り、アスカはシンジ君と結婚すると思つぞ。それに、アスカはものじゃないんだ。そついう言い方は良くないとおもつぞ。」

「でも、人の心つて、変わり易いじゃないですか。それに、アスカは僕が二十歳になるまでは、その、我慢するようにつて言つんです。でも、その前に他の男とどうにかなつちやうかもしれないじゃないですか。それが、不安で不安でしょうがないんです。」

「おや、俺が聞いている話とは少し違うな。」

「何が違うんですか。」

「うーん、絶対に誰にも言うなよ。ミサトの話だと、アスカが一番最初はシンジ君にするって決めていて、シンジ君にもそれは伝えてあるということだったんだがなあ。」

「えっ、本当ですか？」

「ああ、アスカはミサトとリツちゃんにそう言ったそうさ。二十歳うんぬんという話はなかったけどなあ。」

「じゃ、じゃあ、僕の誤解なんですか？」

「そうだな、誤解と言うよりも、アスカはシンジ君には分かりにくい言い回しで言ったんじゃないかな。だが、ここで一番重要なのは、何を言ったかではなくて、アスカの本心だろう。仮にアスカが言っていないとしても、アスカがそのつもりなら何の問題もない。」

「も、もしかして、アスカは僕のことを好きになってくれたんでしようか。」

「うーん、まだそこまでの気持ちではないらしい。アスカも、自分の気持ちが分からないと言っていたそうさ。だが、ミサトやリツちゃんに言わせれば、アスカはシンジ君のことが好きだが、その気持ちに気付いていないだけだそうさ。」

「それじゃあ……。」

「今は待つんだ。5年も待てば、アスカの心はシンジ君のものになるぞ、間違いなくな。但し、シンジ君がアスカのことを裏切らないことが大前提だがな。」

「僕が、アスカを裏切るわけないじゃないですか。」

「いや、安心しない方が良い。裏の世界じゃ良くあることだが、畏にかけて、男が浮気をしたと見せかけるのは簡単なことなんだ。シンジ君は、一度呼び出しに応じて痛い目に遭ったことがあっただろう。今後は二度と変な呼び出しには応じないことだ。誰かがシンジ君を呼び出して、既成事実とやらをでっち上げる可能性もあるんだ。」

「大丈夫ですよ、リョウジさん。そんな畏には引っこかりませんから。」

その時のシンジは、まさかこのような事態になるうとは、予想だにしていなかった。

（あれっ、アスカは黙ったままだけど、どうしたんだらっ？）

シンジは、アスカがシンジを振りほどいて立ち去ると思っていたのだが、なぜかアスカは立ったまま動かない。

（あれっ、何か考え事でもしているのかなあ？）

シンジがそう思った瞬間だった。

「シンジ！アンタみたいな泣き虫は、だいっきらいよっ！許して欲しかったら、貸しが干よっ！良いわねっ！」

永遠とも思える静寂を破ったのはアスカだった。だが、シンジはアスカの言葉を聞いて、我が耳を疑った。

（えっ、『許して欲しかったら、』って言うことは、許してくれるっていうことなの？）

シンジは、たまらず聞き返す。

「えっ！許してくれるの？」

「ふん、許して欲しくないんだ？」

（あれっ。アスカは、あんまり怒っていないのかなあ。）
そう思いつつも、このチャンスは逃すまじとシンジは即答した。

「い、いえっ、分かりましたっ！借りが干でも良いですっ！」

そして、シンジの涙は止まりかけていた。地獄のどん底に突き落とされた気分だったのに、天国へたどり着ける糸を見つけたからだ。

「あゝっ、シンジ。良く見たら素っ裸じゃないのよっ！早く何か着なさいよっ！」

「で、でもっ。」

気付いてみたらマナはいなくなっているし、服も全て消えている。

「もっつ、しょうがないわねっ!」

アスカは、自分のバッグの中から、テニスウェアを取り出した。

「これでも着なさいよっ!」

「えっつ、恥ずかしいよ。」

上はノースリーブだし、下はスコートで、着ると物凄く変な格好になるのが目に見えていたからだ。

「ふっん、裸でいたいんだ?」

「うっ…。わ、分かったよ。」

シンジは仕方なくアスカのテニスウェアを着ることにした。

(今はアスカの機嫌を損ねちゃいけない。我慢だ、我慢するしかない。)

そんあシンジの気持ちを、知ってか知らずか、アスカは大声で笑いだした。

「あはははっ。シンジったら、良く似合ってるじゃない。写真撮ろうっつと。」

すかさずアスカはカメラを構えて、パチパチ撮りだした。」

「や、やめてよっ!」

シンジの言葉に、アスカは耳を貸さない。それどころか、シンジを脅かした。だが、シンジは嫌そうな顔をしながらも、心の中では笑っていた。どうしてなのかは大きな謎だが、どうやら、アスカの機嫌が直ったみたいだからだ。

（泣いたのが良かったのかな。だったら、これからも何かあったら泣けばいいのかな。）

などと、シンジが考えていると、アスカから少しキツイ言葉が発せられた。

「アタシに嫌われなくなかったら、おとなしくポーズをとってなさいよっ！」

哀れシンジは、スコート姿の写真を何十枚と撮られ続けたのだったが、不思議なことにアスカに許してもらえたようだったので、シンジの心は晴々としていたのである。

第67話 泣き虫シンジ（後書き）

シンジは、運良くアスカの制裁をうけずにすみました。でも、こんな幸運は二度とないかも。シンジは、もう少し罫に気を付けた方が良さそうです。

第67話補完 雨降って、地固まる

とある喫茶店で、ミサトとリョウジが仲良くコーヒーを飲んでいた。

「ミサト、話は聞いたか？俺はシンジ君からあらかた聞いたが。」

「ええ、こつちもアスカから聞いたわ。まったく、危ないところだったわね。アンタも、もうちょっと、霧島さんのことをしっかり管理しなさいよ。」

「ああ、面目無い。アスカを怒らせないようにって、言っておいたんだがな。」

そう言いつつ、リョウジはタバコに火を点けた。

「それじゃあ、甘いのよ。まあ、引つかかるシンちゃんもシンちゃんだけど、ゼーレの残党が後ろで糸を引いていたら大変なことになっていたのよ。それくらい分かるでしょ？」

「それは大丈夫だ。学校の周囲は固めてあるし、今回は研修生が手助けしたっていう特殊事情があったからだ。次は無いさ。」

「だったらいいけどね。」

「で、シンジ君とアスカの仲はどうだ？」

「まあ、雨降って地固まるっていうか、仲良くやってるわよ。シン

ちゃんたら、アスカの言いなりでさ、アスカがテレビを見るとときも、座椅子代わりになってるわ。」

「ほう、シンジ君も災難だな。」

「そうじゃないのよ。シンちゃんも嬉しそうに顔しちゃってさ。アスカの髪の毛の匂いを嗅いだり、アスカの太股やお腹に手を置いたりしてるのよ。そりゃあもう、幸せ一杯っていう感じだね。」

「よくアスカが黙って許しているな。」

「うーん、それが不思議なのよね。でも、シンちゃんが『テニスで疲れているだろうから、僕がマッサージするよ。』って言って、太股を念入りにマッサージしたりしても、『ああ、気が利くわね。』なんて言ってるし。『お腹が冷えるよ。』って言って、アスカのお腹に手を当てても、『あつたかい。』なんて言ったりもしてるし。」

「二人は、もう男女の仲になったのか？」

「ううん、そういう感じでもないのよね。さっぱり分からないわ。」

「でも、仲が良いのは悪くない。二人の仲が悪くなると、ネルフにとっても影響が甚大だからな。俺の頼みを聞いてくれて、助かったよ。」

そう、リョウジはマナがシンジにアプローチすることを見越して、万一のことを考えて、ミサトに何らかの手を打つように頼んでおいたのだ。

そこで、ミサトはリッコと一緒にあって、『シンジ君は他の女の子の誘いに乗るかもしれないわよ。でも、それはアスカにも原因があるのを忘れないで。』と言って、万一の時に決定的な破局が訪れるのを防ぐようにしたのだ。

数日前のこと、アスカはミサトとリッコにシンジのことで相談をもちかけていた時のことだった。当分の間、シンジと一緒に寝たいが、襲われるのも嫌だと言うアスカに、ミサトはこう言ったのだ。

「でも、アスカ。今のままの方がシンジ君は傷つくわよ。きっと、シンジ君は今日こそはアスカがOKしてくれるんじゃないかって期待しているわよ。それなのにいつまでも駄目だって言ったら、シンジ君のことだからその場では笑っていると思うけど、アスカに嫌われているんじゃないかって思うんじゃない？そんな状態で可愛い女の子からアプローチされたら、シンジ君だってふらついちゃうわよ。」

「何よ、リッコ。シンジに限ってそんなこと無いって。アイツは、アタシ以外の女の子には目を向けないんだから。」

アスカは自身満々に胸を張った。

「でもねえ、アスカ。シンちゃんは、毎晩目の前にごちそうを置かれて、食べたいのに食べないで我慢しろって言われているのよ。精神的にかなりキツイと思うけど。」

「うっ。そう言われると、返す言葉も無いわ。」

「でしょう？目の前にごちそうを置くのをやめるか、それとも一口でもいいから食べさせるか、どちらかにしなさいよ。」

「うーん、そう言われても困っちゃうわよ。」

「でも、アスカ。今の状態は良くないわ。本当にシンジ君は他の女の子の誘いに乗るかもしれないわよ。でも、それはアスカにも原因があるのを忘れないで。」

「はーい、分かりましたよーっと。」

アスカは、そう良いながらも、シンジが他の女の子の誘いに乗るなどとは、露程も思っていなかったのである。

そして、シンジとマナが抱き合っているところを見た時に話は遡る。

シンジとマナが抱き合っているのを見て怒り心頭だったアスカだったが、この時のことを思い出して、急に怒りが静まっていったのだ。アスカがシンジに背を向けた時、アスカの心は揺れ動いていた。

（シンジがマナに走ったのは、アタシが悪いつていうの？もう、アタシだったらなんてドジなの。ミサトやリツコにあれだけ言われたのに、何もしなかったなんて甘かったわ。でも、本当にアタシが悪いの？分からない。シンジのことを思いっきりぶっ飛ばしたいけど、もしアタシが悪いのなら、そんなこと出来ないし。うーっ、何かあったまくるわね。）

アスカは、シンジに背を向けながらそんなことを考えていた。ミサトやリツコとのやりとりを思い出したことによって、沸騰寸前だった頭もそれなりに冷えてきた。そして、シンジだけを攻められないなどという気持ちも強くなってきた。

だが、やはり割り切れるような問題ではないし、実際に物凄く頭にきている。このままここにいたら、シンジに大怪我をさせるほど殴りつけるか、シンジが立ち直れないほどの罵詈雑言を浴びせそうだった。

（駄目だ、今は考えがまとまらない。こんな状態でシンジとやり合ったら、もう二度とシンジとはやり直しが出来なくなる。そうしたら、二度と一緒に寝ることは出来なくなるし、また悪夢を見るかもしれない。嫌、それだけは、絶対に嫌！）

悪夢を見たくないために、アスカはシンジに制裁を加えるのはやめることにした。ここでシンジをぶっ飛ばせば、自分の気持ちがすっきりするのは分かっていたのだが、その後のことを考えると恐ろしくて出来なかった。

せめて、シンジが反論の余地が無いくらいの悪事を働いていれば良かったのだが、アスカ自身が婚約を仮のものだと言ったり、シンジの意に反して1回婚約を破棄しているのだ。とてもじゃないが、シンジをなじることに無理があることは、アスカ自身も自覚していた。

（今は、黙って立ち去ろう。こんな状態でシンジと話したら、どう考えても悪い結果になりそうなもの。マナにシンジをとられるかもしれないのは悔しいけど、シンジを苦しめるような真似だけは避けよう。結局、自分に跳ね返ってくるもの。）

アスカは、考えがまとまると、ゆっくりと歩きだした。だが、その時…。

「嫌だっ！アスカ、お願いだから行かないでよっ！」

シンジは叫び、後ろからシンジにしがみついた。

「止めなさいよ。アタシはねえ、今、猛烈に怒ってるのよ。見逃してあげるから、直ぐに手を離なさいよ。それとも、痛い目に遭いたいの？」

アスカはまたもや冷たい声で言った。だが、……。

「い、嫌だよっ！誤解だつて分かってくれるまで、この手は離さないよっ！」

「あんたねえ、いい加減にしないと、首の骨をへし折るわよ。」

「良いよっ！アスカに嫌われるくらいなら、死んだ方がましだよっ！」

「なっ！」

「僕は、アスカが好きなんだ。大好きなんだ。だから、アスカに嫌われるなんて耐えられないよっ！」

そう言いながら、シンジは大声で泣きだした。

「じゃあ聞くけど、なんでマナと抱き合ってキスなんかしてたのよ

「?それも、こんなところで、鍵まで掛けてさ。」

「そこまで言っつて、アスカは何か心が引つかかった。」

（あれっ?何か変よね。あつ、そうだ。あの鍵は、外から閉まっていたわ。とすると、鍵を掛けたのはシンジじゃないわね。じゃあ、誰が?）

その時、アスカの脳裏に2人の研修生の顔が浮かんだ。ここに来るときに、拳動がおかしかった2人だ。

（まさか、あの研修生達の罠?でも、そうだとしたら、何の目的で?はっ、もしかしたら、アタシとシンジを仲違いさせて、エヴァンゲリオンの戦力ダウンを狙っているんじゃない?）

急にアスカの顔は真剣になった。まだ、ゼーレの残党がネルフを倒さんとしている可能性は否定出来ないし、その場合、シンジが大きな障害になる。だが、何らかの理由でシンジをあからさまに狙うことが出来ない場合、シンジに心理的な打撃を与えるのは有効な手段だろう。

そう考えると、シンジにとって最も大きな心理的打撃はアスカに嫌われることだから、何者かがシンジを罠にはめてた可能性は十分にある。

（そうだとしたら、アタシは敵の罠に引つかかってしまったっていう訳ね。フン、アタシとしたことが、しくじったわね。それに、仮に敵の罠ではないにしても、シンジに心理的な打撃を与えるのは、非常にまずいわね。アタシはネルフの幹部なんだから、シンジがだらしない分しつかりしなくちゃいけないのに、一体何をやっていた

のかしら。そうよ、アスカ。あなたはネルフのナンバー3なんだから、しつかりなさい。」

優秀なアスカは、一瞬とも言える短時間で考えをまとめた。そう、敵の謀略というのは、さすがにアスカの思い過ごしであったが、実際にゼーレの残党やそれ以外の組織の攻撃があつた場合のことを考えると。アスカの思考は的を得たものだった。

だが、そうは言ってもアスカである。簡単には許さない。

「シンジ！アンタみたいな泣き虫は、だいつきらいよっ！許して欲しかったら、貸しが干よっ！良いわねっ！」

と叫んでいたのだった。

このように、実際には、リョウジが想像した以上の事態になつてしまつたが、奇跡的にアスカの感情が爆発するのを防げたのである。

「なあに、良いって事よ。その代わり、今日の支払いは任せだから。」

ミサトはにつこりと笑つた。今日はこの後、リョウジの奢りで酒を飲みに行くからであった。リョウジは、懐の財布を握りしめながら、苦虫を噛み潰したような顔になつた。

第67話補完 雨降って、地固まる（後書き）

アスカとシンジの破局を防いだのは、実はリョウジでした。もし、リョウジが手をこまねいていたら、もしかしたらアスカとシンジは、決定的な破局を迎えていたかもしれません。

第68話 みんなでキャンプ 前編

「ねえ見てよ、このシンジの写真。良く撮れているわよ。飾っておこうか。」

金曜日の夕食後のコーヒータイムに、アスカはシンジの写真をみんなに見せようとしたが、シンジは必死になって防ごうとした。その写真は、シンジのスコート姿の写真だったからだ。

(げっ、まずいよっ！)

シンジは当然のごとく、慌てふためいた。

「ちょ、ちょっと待ってよ、アスカ。勘弁してよ。」

シンジは強引にアスカから写真を取り上げた。

「ちえっ、似合うのにねえ。」

アスカは不満そうだ。

「ふう、危ない、危ない。」

シンジは、安心して胸をなでおろした。だが、アスカはニヤリと笑う。

「シンジ、写真はいくらでも焼き増し出来るのよ。安心するのは早いわよ。」

「アスカ、頼むよ。もう許してよ。」

シンジは涙目になっている。

「でもねえ、喉が渴いちゃって気分が良くないのよねえ。」
アスカはぼそりと呟く。

（うつ、そうきたか。しょうがないなあ。素直に頼めばいいのに。）
「あつ、アスカ。コーヒーお代わりしようか。」

「あら、シンジったら、珍しく気が利くわね。じゃあ、お願いしようかしら。」

シンジは、テキパキとコーヒーをお代わりしてアスカに差し出した。
もちろん、インスタントではない。

「うーん、おいしいわねえ。シンジにしちゃあ、上出来じゃない。」

アスカは上機嫌だが、シンジはおどおどしている。

「ねえ、アスカ。もう許してあげなさいよ。あれからもう1週間も経つのよ。」

おどおどしているシンジを可哀相に思ったのか、ミサトが横から口を出した。

「許すって、どういうことよ。アタシはもうとっくに許してるわよ。シンジも、みんなの前で謝ったしね。」
アスカは、そう言いながら少し頬を膨らませた。

そう、あの後シンジは勝手にみんなの前から姿を消してみんなに心配させたことを詫びて、みんなから許しを得ていたのだ。ゼーレの脅威がほぼ無くなったとはいえ、エヴァのパイロットは常に所在を明らかにして、有事の際は直ぐに本部に直行して、待機している必要があるからだ。

そのパイロットのチーフであるシンジが勝手な行動をすることは、他の研修生に対しても示しがつかない。このため、シンジは心配をかけた仲間と、リョウジやミサトに頭を下げて謝っていたのだ。

その後のリョウジやミサトの調べで今回の事件の全容を掴み、単なる色恋沙汰と分かったため、大事には至らず、この件は内々に処理されたが、本来シンジの行動は許されないものだったのだ。

一方、マナはリョウジから説教され、一応リョウジの前では反省した様子を見せた。おそらく心の中では舌を出していたのだろうが。

マナに協力した研修生達は、全員お咎め無しとなった。これは、研修生達を処罰するならば、シンジも処罰する必要があったことから、アスカが事件を揉み消すように工作した結果でもある。

アスカとシンジの仲も、元通りになった。人の良いシンジが研修生に騙されてマナと二人きりにされ、シンジがアスカを騙してマナと密会していたのではないと分かったことから、アスカの怒りは一応収まったのである。

だが、シンジの身勝手な行動に怒っている者がいるため、アスカはシンジと二人きりの時以外は、ちくちくとシンジに嫌味なことをしていた。そのことはミサトも知っているはずなのにと、アスカは頬を膨らませたのである。

「あつ、そう。良かったわね、シンちゃん。アスカは許してくれてるってよ。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

（良かった。ありがとう、ミサトさん。）

シンジは、安堵の表情を浮かべた。それを見たアスカは、ちょっとやりすぎたかなと思ったのか、話を変えてきた。

「ねえねえ、もうすぐ連休だからさあ、みんなであればあつと遊びに行きましようよ。ユキ、悪いけどヒカリ達を呼んで来てよ。」

「あつ、はいっ。分かりました。」

直ぐにユキはヒカリのところへすっ飛んで行き、ヒカリとトウジを連れてきた。

「どうしたの、アスカ。」

「実はね、今度の連休にどこかへ遊びに行きたいなあ、なんて思ったのよ。どうかしら。」

「ええ、いいわね。で、どこまで声をかけるのかしら。」

ヒカリの問いかけに、その場の全員が耳を澄ました。アスカの言葉によって、せっかくの連休が良くも悪くもなるからだ。仮にアスカが、『女の子だけで…』などと言おうものなら、シンジ達は心の中で滝のような涙を流すだろうし、来るメンバーによって、楽しさ

はずいぶん変わるからだ。

今、この場には、大人はミサトとリツコだけだった。リョウジとマコトはまだ仕事である。子供は、アスカ、シンジ、ヒカリ、ユキ、トウジ、ケンスケ、カヲル、マリアの8人だ。

「そうねえ、子供は丁度男女4人ずつでいいんだけど、もっと声をかけるかどうかね。ヒカリはどう思う？」

「同じクラスの人ならいいかもしれないわね。」

「でも、線引きが難しいわね。ネルフのメンバー中心でいくか、仲良しグループでいくかね。」

それを聞いていたシンジは少し心配になった。シンジは休みがちであったため、いつものメンバー以外とはあまり話したことがないのだ。だから、本音ではネルフ中心のメンバーの方がありがたいのだが、それではヒカリやユキにとって、ちょっと違和感があるかもしれない。それに、ミンメイら同じクラスの研修生は、2月に転校して来たばかりで、ヒカリやユキとはそれほど仲が良いとは言えない。

シンジがそんなことを考えていると、ユキが申し訳なさそうに言った。

「あのお、惣流さん。私はお留守番します。妹達の世話をしなければなりませんから。」

「何よ、アタシと一緒に遊びには行けないって言うの？」

「そ、そんなことないですけど。」

「じゃあ、小さい子も一緒に連れて行きましょよ。それなら良いでしょ。」

「えっ、でも…。」

「いいの、アスカ？私はその方が嬉しいけど。」
「ヒカリも、ノゾミのことが気になっていたようだ。」

「ワイも、その方がいいんやけどなあ。」
「トウジも乗り気である。」

「じゃあ、決まりね。アタシ達8人に、オチビちゃん達4人の計12人ね。それに、場合によっては保護者としてミサトカリツコということで。大人は色んな都合があるでしょうから、後は任せるとして、それでシンジは良いわよね？」

「う、うん。」

「他に意見のある人は？」

むろん、アスカに意見を言える人など、ヒカリ以外にはいない。

こんな調子で、アスカとヒカリを中心に話がまとまり、結局山梨県にある本栖湖の湖畔で2泊3日のキャンプを行うことになった。日程は、4月の29日から5月1日までである。そして、一緒に付いていく保護者は、結局リツコとマコトになった。

要は運転手をするのと、小さい子供達の面倒を見るのに必要だったため、アスカからの強い要請を受けてのことである。

29日の日は、良く晴れて青空が広がっていた。まさにキャンプ日和である。天気予報によると、この天気は1週間は続くようだ。

「アタシの日頃の行いが良いから、天気になったのよっ!」

と、アスカは得意気になっていた。

さて、朝5時にマンションを出発した一行は、車2台に分乗した。1台はリッコが運転し、アスカ、シンジ、ヒカリ、カヲル、トウジの計6人が乗った。6人乗りのカローラスパシオである。

もう1台はマコトが運転し、ユキ、ケンスケ、マリア、オチビちゃん達の計8人が乗った。8人乗りのスピードワゴンである。

リッコの隣には、行きはアスカが座ることになった。真ん中の列にはヒカリとトウジが座り、後列にはシンジとカヲルが座る。

最初のうちは、アスカとヒカリが二人で話して盛り上がり、男3人が細々と会話を続けるような状況だったが、本栖湖が見えた時からアスカがはしゃぎだした。

「ねえ、ヒカリ、見てよ。あれが本栖湖ね。結構水が綺麗じゃない。

」

「そうね。ここの湖は、かなり透明度が高いつて聞いたことがある

わ。」

「おおっ、綺麗ななあ。」

「うん、綺麗な水はいいねえ。」

「うわあ、芦ノ湖の水よりも綺麗だね。」

それぞれの感想を言い合い、その後はみんなで和気あいあいという雰囲気となった。

そんなこんなで、7時前には目的地に到着した。

「どう？ネルフの管理しているキャンプ場よ。最近オープンしたから、超穴場なの。泊まるのは古くさい建物に見えるけど、中は新しいわよ。ホテル並の設備が揃っているわ。」

そう言って、アスカは胸を張った。確かに嘘は言っていないが、突貫工事で昨日完成したことは言っていない。そう、このキャンプ場は、今回のキャンプのために作られたものだったのだ。

宿泊施設は、完成品である建物を MARIA がエヴァでここまで運んだものであり、それを1週間ほどかけて外観を周囲の景色に合わせ、なおかつ古い感じのものにしたのだった。むろん、食材も新鮮なものが冷蔵庫に満載してあった。

これは、テントを張って本格的にキャンプをしたいと言うケンスケら男性陣の意見に対して、女性陣全員がシャワーと風呂やトイレはホテル並のものが良いという意見で一致した結果でもあった。

「さあて、宿泊場所は確認したから、もうちょっと奥の方に行くわよ。」

「えっ、ここでキャンプをするんじゃないの？」

ヒカリは驚いた顔をしたが、アスカは笑って言った。

「ここでも出来るんだけど、もっと穴場があるのよ。」

こうして、一行はトンネルをくぐり抜けて、さらに奥の方へと向かって行った。

「ヒカリ、どう、ここは。結構穴場でしょ？」

「ええ、自然そのままっていう感じね。」

狭い道をひた走って着いた場所は、まさに超穴場だった。人家は近くに無く、川は澄み、魚が泳いでいた。

「今日は、この辺で1日遊ぶわ。男達は、車の外で待つように。」

アスカの指示で、男達は車の外に出た。

「おい、シンジ。一体どうしたんや。こんなところで何をするんや。何か惣流から聞いてへんか。」

「ううん、アスカからは何も聞いていないけど。」
シンジも首を傾げた。

「俺も聞いていないけどな。一体何をするんだろつ。明日はテニスをするって聞いたから、ラケットなんかは持って来たけどな。」

男連中は、ただ首をひねるのみである。

「お待たせっ！」

だが、アスカの声に振り向いたシンジ達は、心臓が止まるほど驚いたのであった。

第68話 みんなでキャンプ 前編（後書き）

コンフォート17マンション居住者

- ・アスカ、リツコ、（シンジ）
- ・シンジ（夜に寝るだけの部屋）
- ・ミサト、リョウジ
- ・トウジと妹
- ・ヒカリとコダマ、ノゾミ
- ・ケンスケ
- ・マコト、カヲル

朝食・夕食

2月20日から

・アスカ、シンジ、ミサト、リツコ、ユキ、リョウジ、ケンスケ、マコト、カヲルが一緒に食べる。

・トウジと妹、ヒカリと妹、ユキの弟妹（時々コダマ）は、ヒカリの家で食べる。

夕食は、仕事の関係で遅れる者も多いが、日によって異なる。
最近ではマリアが加わるが多い。

第68話補完 警備訓練

「ふうっ。疲れたあ〜。」

「何よ、もう少しでしょ。頑張りなさいよ。」

リン・ミンメイとサーシャは、グチを言いながらエヴァに乗って作業を行っていた。海底から戦闘機や空母、戦艦などを引き揚げる作業だった。この連休中に全ての作業を終える予定なのだ。

ネルフはこれらを引き揚げて、修理出来るものは修理して、ネルフで使ったり解体して部品として売り払ったりする予定だったのだ。むしろ、作業はエヴァを使わなくても済むのだが、かかる時間が全然違うし、費用的にも有利だったのだ。

「いいなあ、アスカとマリアは遊びに行けてさあ。私達なんか、こんな場所で土木作業よ。何なのよ、この差は？アスカはしようがないとしても、マリアはずるいわよ。そう思わない、サーシャ？」

「だって、しょうがないでしょ。作戦行動だって言うんだから。」

そう、今回のアスカの企画したキャンプには、もう一つの目的があった。エヴァのパイロットが第3新東京市外に出た時の警備訓練を行うという目的が。このため、今回のキャンプの警備には、ワイルドウルフ1個中隊があたっていた。

この部隊の中隊長はマリアであるため、マリアは当然の如く今回のキャンプに参加する必要があったのだが、ミンメイは理由は分かつ

ていても面白くない。

「でもさあ、マックスに、ミリアに、アリオスに、アールコートは、ワイルドウルフに同行してるんでしょ。きつと、温泉にでも入ってゆっくりしてるに違いないわよ。ハウレーンが本部待機で、私達が土木作業。どう見ても、貧乏くじを引いてるわよねえ。」

そう言うって、ミンメイは頬を思いつきり膨らませた。

「まあまあ、怒らない、怒らない。」

サーシャには、今回の作戦の重要性が分かっていた。今後、平和維持活動に従事することになった場合、エヴァのパイロットがテロの標的にされる可能性は極めて高い。だから、パイロットの警備についてのノウハウを今のうちに蓄積する必要があるのだ。

パイロットが襲われる場合、最も隙を衝かれ易いのが作戦行動前だ。エヴァが作戦行動を起こしてからでは警戒も厳重になるだろうし、準備も大変だ。だから、実力のある組織ならば、普段の生活を狙う可能性がある。

とはいっても、普段からパイロットの警備は厳重なはずであり、そうなるとう今回のように遠出をする時が警備の準備が整わず、一番の狙い目となる可能性があるのだ。だから、そのような時でも万全の警備体制を取れるように、訓練をする必要があるのだ。

これは、本部や他の支部のパイロットが応援のために紛争地帯へ派遣される場合にも、同じことが言える。

だが、ミンメイは少しは分かっているのだろうが、次から次へと不

満たらたらグチを言うのだった。

同じ頃、ワイルドウルフの警備網に怪しい人物が引っかかって、ちよつとした騒ぎになっていた。

「離してよ！私はねえ、シンジに会いたいただけなのよっ！」

そう、マナがシンジを追いかけてやって来ていたのだ。

「駄目です。ここから先は通せんません。」

ワイルドウルフの兵士は、穏やかな語り口であったが、厳しい目でマナを見た。

「ふん！私はねえ、加持さんを知ってるのよ。だから、離しなさいよっ！」

「駄目です。仮に司令が来ても、許可無しには通すなどの命令ですから。」

「なっ！何ですって！」

加持の名前を出せば何とかなると思っていたマナは、当てが外れて、落胆のあまり大声を出した。

「そ、そんなあ。せつかくシンジに会いに来たのに。」

マナは、その場にへなへなと座り込んだ。

結局、マナが保護されたとの通信を聞いたムサシとケイタがマナを
引き取りに来て、事なきを得た。そして、その晩は近くの温泉に泊
まり、マナは酔って大暴れしたという。

第68話補完 警備訓練（後書き）

登場人物紹介その他

リン・ミンメイ：

エヴァンゲリオンの予備役パイロットで、中国支部に所属している。歌が好きで紺色に近い長い髪が印象的な美少女。ミラクル5の一員。最近来日し、市立第壹中学3年A組に在籍する。

サーシャ：

エヴァンゲリオンの予備役パイロットで、エジプト支部に所属している。蒼い瞳、長い金髪、長身、スリム、白い肌が特徴の美少女。目が大きい、大人しい感じがする、14歳のロシア系イスラエル人。MAGIEへのハッキングに成功した、伝説のハッカーグループ『ミラクル5』の一員。同じエジプト支部のザナドとは親戚。最近来日し、市立第壹中学3年A組に在籍する。

Evaパイロット（チルドレン）

チーフ：碓シンジ サ

ブ：鈴原トウジ

初号機：碓シンジ、式号機：未定（綾波レイ）、参考機：鈴原トウジ、四号機：渚カヲル

予備役：惣流アスカ（極秘）、ミリア、マリア、ミンメイ、サーシャ

候補生：マックス、アリオス、アールコート、キャシー、ケンスケ、ハウレーン他38名

トライデント型軽巡洋艦（天竜、地竜、海竜）パイロット

ムサシ、ケイタ、マリア、マックス、ミンメイ、ハウレーン

第69話 みんなでキャンプ 中編

「さあて、もう用意は良いかしら？」

アスカが声をかけると、ヒカリとリツコは頷いた。

「ようし、今日は目一杯遊ぶわよっ！」

アスカはそう言うと、勢い良くドアを開けた。

「お待たせっ！」

アスカの声にシンジ達が振り向いたが、目をまんまるくしていた。

「ア、アスカ、その格好は？」

（ア、アスカが水着姿なるなんてっ！）

シンジが驚くのも無理は無い。アスカ達は車の中で水着に着替えていたのである。それも、揃ってビキニであり、中学生には少し刺激が強い格好だった。以前ネルフのプールで見た水着と比べて、布地がさらに1割から2割減というところか。

（し、しかも、ビキニなんてっ！な、なんて刺激的な格好をしているんだっ。）

アスカの水着姿を見たため、シンジは少し前かがみの姿勢になってしまった。

(うっ、まずいっ。アスカに知られたら、怒られちゃうよっ！)

シンジは大いに慌てたが、どうやらアスカに気付かれなかったようだ。アスカは、シンジの問いかけに普通に応えた。

「このすぐ近くに泳げるところがあるのよ。アタシ達は先に行つて泳いでいるわね。」

「ぼ、僕達はどうするの？」

「大丈夫よ。日向さんが水着を持ってきてくれているから。あっ、マリア達も用意が出来たようね。じゃあ、お先に〜。」

こうして、女性陣は先にすたすたと行つてしまった。

「シンジ、良かったな。こんな山の中で惣流の水着姿を拝めて。」

「そ、そういうケンスケの方が喜んでいないか。森川さんの水着姿を見られて、嬉しいんだろう。」

「まあな。それはお互いさまか。」

そんな会話を交わしつつも、残った男性陣は急いで着替えて後を追うことにした。

「うわあっ、気持ち良いわね。」

「本当ね、水が冷たくって、最高ね。」

行った先には小さな滝があり、川の流れが一部せき止められて、普通の池よりもかなり広いスペースがあった。池といっても、水の深さは膝よりも少し上程度で、一部深いところがあったが、遊ぶには程よい広さであった。

アスカやヒカリは、いつもの暑さから解放されて嬉しそうだ。嬉しくて、それを他の人に無理やり分けたくなるのも人情であろう。

「ユキッ、気持ち良いわよっ！」

アスカは、水をすくってユキに浴びせかけた。

「きゃっ。いきなりひどいですよ。」

「いいじゃない。今日は無礼講よ。」

「い、意味が違いますよ。」

「良いのよ、アタシ、ニホンゴワカリマセ〜ン。ちょっとは大目に見なさいよ。」

そう言いながらヒカリやマリアにも水をかける。ユキと違ってこの2人はアスカに仕返しとばかり水を浴びせ返し、次第にお互いに水の掛け合いが始まった。

「お待たせ。」

そこにシンジ達が到着する。

「あら、来たわね。そのビーチボールを膨らませてよ。みんなでバレーボールでもしましょうよ。」

「うん、良いよ。トウジやケンスケも良いよね？」

「おう、かまへん。」

「もちろんさ。」

下心のある男どもに異論があるはずがない。トウジ達の返事を聞くと、シンジはカヲルにすまなさそうに言った。

「カヲル君は、最初は少し離れて見ててよ。すぐに遊び方は分かるから。そうしたら一緒に混ぜてよ。」

「ああ良いよ、シンジ君。」

こうして、最初はビーチボールで遊び、しばらくしてカヲルが加わってからは、4対4のバレーボールの試合をして遊んだ。最初はアスカシンジペアとユキケンスケペアが組んだ。

「そりゃあっ！」

アスカが豪快なサーブを打つ。

「なんとおっ！」

「それっっ！」

それをマリアやトウジが受け止める。そんな具合に試合が進んで行った。アスカのチームは、アスカ以外ははっきりいって足手まとい

であったため、アスカ一人で戦っているようなものだった。

(うづうづ、マリアさんの胸が揺れているよつ。見ちゃ駄目だ、見ちゃ駄目だ。)

シンジは、あんまりボールを見ずに、マリアの豊かな胸に目が吸いよせられていた。これでは足を引っ張る訳だ。おそらく、ケンスケも同様であろう。

これに対してマリア達は、ヒカリ以外は戦力が揃っていたが、アスカの力が抜きんでいたため、全体としては良い勝負だった。

何度か試合をしてから、アスカは他の遊びを提案した。

「ねえ、他の遊びにしましょうよ。」

「なあに、アスカ？」

マリアが尋ねると、アスカは胸を張って言った。

「もちろん、水上騎馬戦よっ！」

「ええっ！」

ユキが驚きの声を上げたが、特に反対の声は出なかった。ヒカリとマリアには、アスカが事前に根回しをしていたからだ。

「じゃあ、良いわよね。」

ユキは誰も反対する者がいなかったため、渋々頷くしかなかった。

「シンジ！右行って、右よっ！」

「そ、そんなこと言ったって、急には無理だよっ！」

（ア、アスカの太股が気になるんだよっ！）

「うっさいわねえ。男だったら口応えしないっ！」

「わ、分かったよ。」

（うっ、動かないですよ。）

などというペアもあったが、それ以外のペアは概ね和やかな雰囲気
の元、水上騎馬戦を行った。何せ人数が少なく、3人1組の騎馬が
作れないため、男が女の子を背負う変則的な形になってしまったの
だ。

それぞれ2組に別れて戦ったのだが、お互いに気を遣うようなペア
では良い動きは出来ない。

「あの〜、鈴原、右に行って欲しいんだけど。」
とか、

「相田君、右に行ってくれないかしら。」
とか、

「渚君、右に行ってちょうだい。」

「えっ、右つてどっちだい？」
とか、

そんな調子のペアがアスカ達のペアに太刀打ち出来る訳がなく、どんな組み合わせでもアスカのいる組が必ず勝つことになった。

そんな中、ある事件(?)は起きた。

アスカのペアとヒカリのペアが一緒に戦っている時、アスカが後ろからユキに襲いかかった。

「もらったあっ！」

「きゃあっ！」

「へん、やったわね。あっ、まずいっ！ユキ！胸を隠してっ！」

「えっ。きゃあんっ！」

そう、アスカの左手には、ユキのブラが握りしめられていた。ユキは叫びながら胸を隠そうとして、反射的にンスケの背中に胸を押しつけてしまった。途端に極上の微笑みを浮かべるケンスケだったが、ユキはしばらく気付かなかった。

「うっそ〜っ！もう、いやあん。」

気付いても離れるに離れられず、アスカがタオルを持ってくるまで、ユキはケンスケの背中に胸を押しつけたままいるしかなかった。

「うつつ、惣流さん、酷いですよ。」

「ごめんね、ユキ。手が滑ったのよ。お願い、許してね。」

手を合わせて頭を下げるアスカに、ユキは少し慌てた。

「そ、そんな。頭なんて下げないで下さい。私も悪かったんですから。許すなんて、当たり前じゃないですか。」

アスカは頭を上げると、ニコリと笑った。

「良かったわ、許してくれて。で、相田はどうする。」

「えっ、どうするって?」

「どうしたら許すかよ。」

アスカはそう言いながらケンスケを見る。ケンスケは、次の言葉に少し怯えたが、ユキは慌てて言った。

「そ、そんな。相田君は悪くありませんから。悪いのは胸を押しつけた私ですから。私のほうこそ、相田君に謝らないと。」

「そう? まあ、ユキが良いならいいけどね。良かったわね、相田。命拾いしたわね。」

「あっ、ああ。ごめんな、森川。俺がもうちょっと気を利かせて、何かしてあげれば良かったんだよな。でも、嬉しくて体が動かなくなっちゃって。」

「あ、相田君…。」

ユキは真っ赤になってしまった。ケンスケもそれを見て真っ赤になる。

「あゝあ、暑い、暑い。そろそろお昼ご飯にしましょう。」

アスカが手で顔を扇ぐ真似をすると、その場は大爆笑に包まれた。

お昼ご飯は、ユキとヒカリの作ったサンドイッチであった。食べながらこれからどうしようかと話し合ったが、午後はテニスをしたいと言うユキの意見は通らずに、結局もつとここで遊びたいというおちびちゃん達の意見を尊重することになった。

おちびちゃん達は、リツコとマコトが見守る中、泳いだり水を掛け合ったり小川の小動物を観察したりして、ワイワイしながら楽しい時を過ごしていたのである。

アスカ達というと、午後はしばらく全員で遊んだ後、探検しようとしてアスカが言い出して、サンダルを履いて上流の方へと向かって行き、珍しい生き物を次々に見つけてははしゃぎ、こちらも結構楽しく過ごしたのだった。

結局、2時間ほどで探検が終わってからは、再びビーチボールで遊んだり、ゲームをしたりして遊び、夕方を迎えた。そうして、この日は1日中水着姿で遊んだのである。

「さあて、キャンプ場へ行くわよっ！」

そして夕方5時前に、アスカの号令でみんなで車に乗り込んで、キャンプ場へと移動した。

「はーい、みんな。早いとこ降りて荷物を運んでね。」

キャンプ場に着くなり、アスカに急かされたみんなは、荷物を宿泊施設のログハウスへと運んでいく。このハウスは8人用で、2人用の部屋が2つ、4人用の部屋が1つあった。

気になる部屋割りは、次の通りである。

ログハウスA

1号室 シンジ、マコト、ケンスケ、カヲル

2号室 リツコ

3号室 トウジ、ハルナ

ログハウスB

1号室 ユキ、アキコ、マモル

2号室 ヒカリ、コダマ

3号室 アスカ、マリア

「荷物を運んだら、バーベキューの用意よっ！シンジ、準備よろしくねっ！」

「うん、分かったよ。」

シンジは、かねてからの打ち合わせ通りに肉の調理を行い、ヒカリとユキとアスカがご飯を炊いたり野菜などを洗って切ったりと、手早く食材の準備を行う。

外ではマコトを中心に鉄板や炭の用意を行った。鉄板は2枚あり、鉄板から少し離れたところにテーブルと椅子を用意した。こっちの準備は割合時間がかからず、さっさと終わって、後は待ちの姿勢である。

「はい、お待たせえ。」

5時半になると、ヒカリが山盛りの肉を持ってやって来た。片方の鉄板を肉中心と決めて、鉄板の上に肉をどっさり置き、カナルが早速焼き始める。

「うわあ、おいしそうだなあ。」

おチビちゃん達は、嬉しそうに肉を見つめる。トウジなどは、涎を垂らしそうな勢いだ。

「こっちも焼くわよ。」

もう片方の鉄板は、海産物が中心だ。エビやイカを少し弱めの火で焼いている。こっちを焼くのはケンスケだ。

「そろそろ焼けたかしら。じゃあ、食べましょう。」

リッコの合図でどつと鉄板にみんなが群がる。むろん、小さい子が優先である。カナルとケンスケが焼くそばから箸が伸びてきて、肉が、野菜が、エビが、イカが、次々と減っていく。

当然ながら、トウジが大量にかっさらっていくため、順番は最後であるが、一杯食べられるため文句は無いようだ。

頃合いを見てカヲルとトウジが交代し、ケンスケとシンジが交代するが、トウジは焼く傍らで自分も食べたりしている。

「もう、意地汚いんだから。」

ヒカリに睨まれても、食い意地の方が上と見えて、止める素振りも見せない。さすがにヒカリも諦めて、ため息をついたりしてる。

そんなこんなで、全員がお腹一杯食べ終わったのは、6時半頃だった。その後は男性陣が後片付けを行い、女性陣はお風呂である。

そして、8時からはログハウスのA1号室でトランプ大会である。むろん、おチビちゃん達もログハウスBの1号室でトランプや花札で遊ぶ。マコトとリツコは、今日1日子供の面倒を見てくれたくなり、今日は早めに就寝した。

こうして、おチビちゃん達が寝たのは夜11時過ぎ、アスカ達が寝たのは、夜中の2時を回った頃であった。このため、夜の部屋割りには次のようになった。

ログハウスA

1号室 シンジ、ケンスケ、カヲル、トウジ

2号室 リツコ

3号室 マコト

ログハウスB

1号室 アキコ、マモル、ハルナ、コダマ
2号室 ユキ、ヒカリ
3号室 アスカ、マリア

「ぎゃあっくっ！」

真夜中に、かすかに少女の叫び声が聞こえてきた。

(これは、やっぱりアスカの声だ。)

シンジは、他の3人を起こさないように気をつけて起きると、アスカの元へと向かった。

「マリアさん、アスカはどうなの？」

アスカの寝ている部屋に入ると、マリアが真っ青な顔をしていた。

「そ、それが、アスカはさっきから物凄い叫び声を上げているの。私ではどうしようもないのよ。」

「分かったよ。後は任せてよ。」

シンジは、アスカの側に寄ると、アスカの手を優しく握りしめた。

「アスカ、僕が付いているよ。安心していいんだよ。」

シンジが何度か繰り返して言うと、アスカの叫び声が聞こえなくな

った。そして、安らかな寝息に変わる。

「ふうん、愛の力っていう奴かしら。私がどんなことをしても駄目だったのに、碓君なら一発で直る訳ね。」

「そ、そんなんじゃないよ。」

シンジの顔が少し赤くなる。

「まあ、いいわ。私は赤木先生のところで寝るわ。だから、後はよろしくね。」

「うん、分かったよ。」

マリアは去ろうとしたが、一旦足を止めてシンジに向き直った。

「碓君、アスカをよろしくね。私の大切な仲間だから。本当にお願
いね。」

「うん、任せてよ。アスカは、僕が守るよ。」

「頼りにしてるわよ。それじゃあ、お休みなさい。」

「うん、お休み。」

そう言うと、今度こそマリアは去って行った。マリアが去ったのを見ると、シンジは思わず呟いた。

「アスカ、やっぱりまだ駄目なのか。」

実は、今回のキャンプの隠れた目的の一つに、アスカが一人で眠ることが出来るかどうか試すというのがあったのだ。さすがにもうすぐ高校生になるうかという男女が一緒に寝るのは良くないため、今回のキャンプを機会にアスカがシンジと離れて眠れるのか試すことになったのだ。

だが、結果は見てのとおり大失敗だった。これで、当分アスカは一人で眠ろうとはしなくなるだろう。

「でも、その方が僕は嬉しいけどね。」

シンジは、アスカに優しくキスをすると、アスカを後ろから抱きしめる形で眠ることにした。

「あゝあ、明日は早く起きないといけないんだよね。それだけは参ったよな。」

グチをこぼすが、顔はにやけているシンジであった。

第69話 みんなでキャンプ 中編（後書き）

のどかな自然の中で、アスカは久々に自由に遊べて楽しい気分です。なお、トウジの妹をハルナに、ユキの妹をアキコ、弟をマモルとしました。いつまでも、妹や弟では可哀相なので。

さて、アスカが悪夢から解放されるのはいつの日か。でも、シンジはアスカと一緒に眠れるので嬉しそうです。ちなみに、寝る部屋は、次のとおりとなりました。

ログハウスA

1号室 ケンスケ、カヲル、トウジ

2号室 リツコ、マリア

3号室 マコト

ログハウスB

1号室 アキコ、マモル、ハルナ、コダマ

2号室 ユキ、ヒカリ

3号室 シンジ、アスカ

第69話補完 シンジなんか、好きじゃない。

「あゝあ、やっぱり駄目だったのね。」

アスカはため息をついた。横ではシンジが安らかな寝息をたてている。

「マリアがいなくなって、シンジが横に寝ているっていうことは、やっぱりアタシったら凄くうなされたのかしら。」

そう、隣のベッドで寝ているはずのマリアの姿は無く、今は代わりにシンジが横で寝ているのだ。

「そうよねえ、また怖い夢を見たんだわ、きつと。それでうなされて、マリアがシンジを呼んだのか、シンジがやって来たのか、どっちかね。」

そう、アスカはおぼろげながらにはあるが、怖い夢を見たことを覚えていた。そして、誰かが助けに来てくれたことも。

「そうか、シンジが手をつないでくれたからね、きつと。だから、悪夢が終わったんだわ。シンジのおかげって言うわけか。でも、情けないわねえ。こんな奴と一緒にじゃないと眠れないなんて。はゝあ、本当に情けないわね。」

アスカは、肩を落とした。

「でも、何でシンジだと大丈夫なんだろう。マリアなら大丈夫だと

思ったのに。アタシったら、自分でも気付かないうちにシンジのことが好きになってているのかなあ。こんな情けない奴を。何か、信じられないわよね。」

アスカは、シンジの鼻を軽く弾いた。

「ううん、こいつは弱っちいし、情けないし、バカでドスケベだし、すぐ逃げるし、なあんにも良いところが無いのよねえ。アタシがこんな奴を好きになるなんて、あり得ないわ。こいつがエヴァアのパイロットで、アタシのことを助けたことがあるから、だからよね、きつと。アタシはこいつのことなんか、これっぽっちも好きじゃないもの。」

アスカはそう言いつつ、シンジに軽くキスをした。

「でもシンジ、アタシはとっても義理堅いのよ。だから、アンタがアタシのために頑張ってくれたから、感謝してあげる。

マグマの中に飛び込んで、アタシを助けてくれたこと。
アタシのためにおいしい料理を作ってくれたこと。
サイドインパクトが起きた時、アタシに会いたいと思ってくれたこと。

悪夢に怯えるアタシを見捨てずに助けてくれたこと。

弱虫なのに、アタシのためにゼーレと戦ってくれたこと。

だから、アンタにキスしてあげる。ご褒美もあげる。

でもね、アタシはアンタのことが、これっぽっちも好きじゃないのよ。自惚れないでね。アタシがアンタにキスするのも、アタシが義理堅いから。

アタシは多分、アンタの子を産むことになると思うわ。そうね、最低でも2人は産むことになるかしらね。ううん、アンタはドスケベだから、2人だけじゃすまないわね、きつと。3〜4人産むことになっちゃうかもね。

でも、それもこれも、アタシが義理堅いからよ。そこんことを、誤解しないでよね。アタシは、アンタなんか、好きじゃないのよ。

でもね、アタシがアンタの子供を産むつもりなんてことは、まだ教えてあげない。だって、言ったら、アタシがアンタのことを好きだって誤解されるもの。」

アスカは、再びシンジにキスをする、しばらく微笑んだ後、横になって静かに目を閉じた。

「明日は、シンジの頬にでもキスしてあげるわ。手をつないで寝てくれたお礼にね。だから、少しは義理堅いアタシに感謝しなさいよね。」

そう呟いた後、アスカは静かに寝息をたてた。

第69話補完 シンジなんか、好きじゃない。(後書き)

アスカの本心の一部が明かされました。頭は良くても、恋愛には疎いアスカです。もし、ヒカリやユキの前で同じことを言ったら、「それって、碇君のことが好きだってことよ!」と、言われてしまうでしょう。分かっているから、寝ているシンジの前でしか言えないアスカなのです。でも、いつかシンジのことが好きだという、自分の本当の気持ちを認めることになるでしょう。

第70話 みんなでキャンプ 後編

「みんな、おっはようっ！」

昨日、悪夢を見たことなど全く感じさせずに、アスカは大きな声を張り上げていた。アスカの声によって、みんなが次々と起きてきた。

「アスカ、おはよう。」

シンジは、眠そうに目をこすっている。明け方になって部屋に戻ったため、他のみんなよりも睡眠時間が短いのだ。アスカは、眠そうなシンジを見て、キョロキョロと辺りを見回した。

アスカは、誰もいないことを確認すると、シンジの頬に…。

「チュツ。」

とした。

「あつ。」

（ア、アスカがキスしてくれるなんて、う、嬉しいようっ！）

驚くシンジに、アスカは恥ずかしそうな顔をした。

「昨日は、ありがとね。」

そう言って、アスカは走り去って行った。そして、その先でユキと鉢合わせした。

「惣流さん、今日こそはテニスですよ。」

ユキは、朝っぱらからテニスウェアを着て現れて、ニコリと笑った。昨日テニスをしなかったことを根に持っているのかもしれない。

アスカは内心では驚きながらも、努めて平静に応えた。

「も、もちろんよ。今日は1日コートを取ってあるから。」

「そうですね、嬉しいです。急いで食べて、早くテニスコートに行きましょうよ。」

そう言って、ユキは再びニコリと笑った。

「さて、テニスコートに行きましょー！」

朝食を食べ終わると、アスカはみんなに号令をかけた。そして、次々に車に乗っていく。テニスコートまでは歩くと遠いので、車で行くことにしたのだ。

コートは、車で10分位の距離にあった。コートに着くと、真っ先にユキが降りて、嬉しそうな顔をした。

「ねえ、惣流さん。準備体操しましょうよ。」

「ええ、良いわよ。」

アスカはユキと組んで準備体操やら柔軟体操をした。そして、ある程度体が温まってから、軽くストロークを打つことにした。

「行くわよ、ユキ。」

「はい、お願いします。」

アスカの、本気の半分位の威力のサーブに、ユキはなんとか当たって返す。

「ユキ、甘いわよ。」

アスカは、それほど早くはないが、正確にコントロールされたボールを返して、ユキをコートの中へ左へと走らせる。

「ひええっ。惣流さん、もっと手加減して下さいよっ。」

早くもユキは音を上げ出した。

「何言ってるのよ。それでもテニス部の副部長なの？しっかりしなさいよ。」

アスカは汗一つかかずに、涼しげな表情だ。

「そんなこと言われても、疲れますよっ。」

「しょうがないわねえ。じゃあ、最初は軽くやりましょうか。ねえ、シンジ。こっち来て。相田も、こっちに来なさいよ。」

「えっ、どうしたの。」

「どうしたんだ？」

急に呼ばれた二人は、駆け足でやって来た。

「ユキがねえ、疲れたって言うのよ。だから、1コートダブルスで使いましょうよ。その方が疲れないから。」

「うん、分かったよ。」

「了解。」

シンジもケンスケも、嬉しそうに頷いた。

「さて、試合をするのよっ！」

結局、午前中は練習だけで終わってしまったため、午後のテニスを再開する時に、アスカは試合をすることを提案した。と言うよりも決めてしまった。

「でも、アスカ。どういう風にするの？」

ヒカリの問いに、アスカはユキへと話を振った。

「ユキ、どうしようか。」

「そうですね、最初はダブルスの試合をやって、次にシングルスにしましょうか。総当たり戦にしましょうよ。」

「ええっ、やだな。」

ユキの提案に、シンジは真っ先に反対した。その時、みんなは一斉にアスカを見たが、みんなの予想を裏切って、アスカは全然怒らなかつた。

「じゃあ、シンジ。シングルスは、嫌な人は代わりにダブルスの試合を増やすっていうのはどう？」

「ああ、それならいいかな。」

「じゃあ、始めましょうよ。」

こうして、試合が始まった。

初戦は、アスカ・シンジペア対ヒカリ・トウジペアとマリア・カヲルペア対ユキ・ケンスケペアである。

アスカとシンジのペアは、最初はアスカがサーブをする。シンジが必ずと言っていいほど、サーブをミスするからだ。もちろん、ノーマスのアスカに対して、シンジはミスだらけだった。それでも、ヒカリ達に対して、6 - 4、6 - 3で勝つことが出来た。

次は、ユキ達との試合だったが、この時はシンジのミスが更に目立ち、5 - 6、6 - 5、4 - 6で、惜しくもアスカ達が敗北してしまつた。

最後のマリア達との試合では、シンジはコート隅に立って、殆どボールを触らなかつた。実質、アスカのシングルス対マリア達であった。ところが、何と6 - 2、6 - 1で勝利してしまったのである。

その結果、ペア対抗ダブルスは、1位、アスカ・シンジペア。2位、ユキ・ケンスケペア。3位、マリア・カヲルペア。4位、ヒカリ・トウジペアという結果になった。

ユキ・ケンスケペアがマリア・カヲルペアに負けたことにより、2勝1敗が3ペアになったため、得失ゲーム数で順位を決めたためである。

次のシングルスでは、シンジ、ケンスケの2人が棄権した。このため、残る6人で戦ったのだが、結果は圧倒的なアスカの勝利に終わった。アスカは、1ゲームも落とさずに全員に勝ったのである。

ちなみに、2位マリア、3位ユキ、4位ヒカリ、5位カヲル、6位トウジであった。

そうして、試合が終わった後は、めいめいのペアに別れてボールを打ち合い、夕方を迎えた。

「今日は、花火をするわよっ！」

食事が終わった後、アスカは、急遽ワイルドウルフの兵士に持って来させた花火を手にして言った。本当は、肝試しをするつもりだったのだが、昨日の悪夢で、すっかりその気をなくしたアスカが考えついたのが花火だったのだ。

「あら、面白そうね。やりましょっよ。」

マリアがそう言って口を出した。マリアにとって、花火は珍しいものだったからだ。

「そうね、いいわね。」

「私も賛成です。」

ヒカリとユキが賛成し、女性陣の態度が固まると、これで決まりである。お風呂に入る前に花火をしようということになった。そこで早速みんな揃って湖畔に向かった。

「みんな、火を点けるから離れてっ！」

火を点けるのは、アスカの指名によってケンスケが務めることになった。そこで、ケンスケは安全に配慮して、特に小さい子の動きに注意して花火に点火した。

「うわあ、綺麗だね。」

「でしょ、シンジ。」

「ねえ、トウジ。綺麗よね。」

「おお、綺麗やな。」

などと、良い感じのペアもいて、打ち上げ花火系は30分位かかって、全て使い切った。その後は各自が花火をするのである。

「ねえ、アスカ。一緒にやろうよ。」

「ええ、良いわよ。シンジ、火を点けるのお願いね。」

ちよつと花火を怖がっているアスカにとって、シンジの手助けは渡りに船だった。だが、よく周りを見ると、しっかりペアで花火をやっていた。例外は、子供の世話を押しつけられたリツコとマコトであった。

だが、みんな良い雰囲気の花火を楽しんだ。アスカはシンジと、ヒカリはトウジと、ユキはケンスケと、それぞれいつになく良い雰囲気の花火をしたのである。

そんな様子を、リツコとマコトは微笑ましく見つけるのだった。

「今日は最終日よっ！頑張って遊ぶわよっ！」

翌日の朝食の時に、アスカは胸を張って言った。

「でも、アスカ。今日はどうするの？」

ヒカリが聞いてきたが、アスカは自信満々で答えた。

「午前中はテニス、午後は山中湖でボート、夕方は下部温泉よっ！」

「げえっ、大変そうだなあ。」

思わず呟いたシンジを、アスカはギロリと睨む。

（うっ、まずいかもっ。早くごまかさないと。）
「あっ、でも色んなところに行けて、楽しそうだなあ。」

シンジが目をさまよわせて言うと、アスカは満足して頷いた。

「じゃあ、急ぐわよっ！」

こうして、最終日は過密スケジュールとなった。

午前中のテニスは、最初は普通に練習して直ぐにダブルスの試合を行った。だが、順位は昨日と変わらなかった。

昼食は、昨日のうちに作ったおにぎりだった。男子は女子が着替えてシャワーを浴びている間に、女子は車で山中湖へと移動している間に、昼食を済ませた。

山中湖に着くと、アスカはケンスケに命じて焼きとうもろこしと焼きイカを人数分買ってこさせた。それから各ペアに別れてボートに乗った。最初は足で漕ぐタイプのものにして、焼きとうもろこしと焼きイカを食べることにした。

特に女性陣が喜んで食べたが、トウジは足りなさそうな顔をしていたため、後でアスカに『大食らい』と言われる羽目になった。

次に、手漕ぎのボートに乗り換えた。そして、各ペアで対抗戦をすることになった。もちろん、漕ぐのは男である。

結果は、トウジ達が1着、カヲル達が2着、ケンスケ達が3着、最後がシンジ達だった。アスカは、少しだけ不満そうな顔をしたが、直ぐに笑って言った。

「シンジ、もつと訓練に力を入れなさいよね。」

「う、うん、分かったよ。」

怒られると思ったシンジだったが、アスカが機嫌を悪くしなかった
ので、ほっと一息ついて安心出来た。

夕方になると下部温泉へと向かい、日帰り客でも入れる温泉を探し
て、男女に別れて入った。アスカ達はゆっくりと温泉に浸かり、1
日の疲れを十分に癒して上機嫌になった。

アスカ達が温泉に入っていると、ミリアとアールコートが入って来
たため、ユキが少し驚いて聞いた。

「あれっ、お二人ともどうしたんですか。」

「ああ、ちょっとな。」

ミリアが少しドスの効いた声で言うと、ユキは何も聞けなくなった。
そのため、アスカやミリアが、ミリア達と目で合図をしていること
に気付かなかった。

「そっぴや、霧島マナが昨日隣の宿に泊まっていたぞ。」

「げっ、やっぱり来たんだ。」

ミリアの言葉に、アスカは少しだけ顔を曇らせた。

「もう、本当にしつこいですね。」

ユキも苦々しい顔をする。

「でもいいじゃない。温泉って、本当に気持ち良いわよね。」

ヒカリの言葉に頷く女性陣であった。

「あらあら、しょうがないわね。みんな寝ちゃって。」

帰りの車の中で、リッコは笑って言った。リッコの隣では、マリアが寝息を立てていた。真ん中の席では、トウジの頭がヒカリの肩に乗っていたし、後部座席では、シンジの膝の上にアスカの頭があった。

おそらく、もう1台の車も同じような状況であろう。

「でも、今は平和なんだから、これでいいのかしらね。でも、この平和は、いつまで続くのかしら。」

リッコの呟きに答える者はいなかった。

第70話 みんなでキャンプ 後編(後書き)

2泊3日のキャンプで、アスカ達は目一杯遊び、楽しい時を過ごしました。いつまでもそんな楽しい時が過ごせれば良いのですが、なかなかそう上手くはいかないようです。

第70話補完 ため息

「はああつ、まいったなあつ。」

マナは、深いため息をついた。結局、連休中はシンジに会えずじまい。一度は良い雰囲気になったシンジだが、今では遠い存在に感じる。

「テリー君達の協力も得られそうにないなあ。」

そう、例の一件がリヨウジの耳に入り、マナはリヨウジからやんわりと注意を受けてしまったのだ。それ以来、テリー達とは連絡が取れない。学校で見かけても、テリー達は逃げてしまうのだ。おそらく、アスカの差し金だろうとマナは思っていた。

せつかくネルフ内の情報源を得たと思ったのに、これでは一からやり直しなうえに、シンジの情報を得られる術が無い。これでは、ますますシンジは遠のいてしまう。

「何とかネルフに入れないかなあ。」

そう思つて、一度リヨウジに頭を下げたのだが、『おいおい、勘弁してくれよ。アスカに怒られちゃうよ。』と言われてしまった。

「ムサシとケイタは役に立たないなあ。」

そう、二人ともエヴァの研修生ではないため、ネルフ内でもシンジとは会った試しが無いという。もちろん、研修生達のスケジュール

についても極秘扱いである。スケジュールを管理している人に聞いてみると頼んでみたものの、その相手がアスカだと知ってさすがに諦めた。

「何か良い方法は無いかなあ。」

マナはベッドに転がっていたが、良い考えが浮かぶ分けが無く、少し滅入っていた。

一方、テリーとニールも同じような状況だった。

「あゝあ、参ったよなあ。アスカちゃんに嫌われちゃったかな。」

テリーが呟くと、ニールも力なく答えた。

「そりゃそうだ。俺達は碇シンジを呼び出して、霧島さんと二人きりにしたからな。伊吹さんの話だと、アスカちゃんは物凄く怒っていたらしいよ。」

「ああ、伊吹さんが怖くてアスカちゃんに近寄れないって言うていたもんな。俺達がどんな風に思われているのか、予想はつくよな。」

「失敗したな。」

後悔したため息をついても、もう遅かった。この一件で、二人は正副パイロットのいずれにもなれないことが確定してしまったようである。

そこに、イギリス支部のイライザとアニーがやって来た。

「あら、ニールにテリー、浮かない顔してどうしたの？」

「ああ、アスカちゃんに嫌われちゃったんだよ。あゝあ、参ったなあ。」

イライザの問いかけに、ニールが応えた。

「そう、でも惜しかったじゃない。まあ、シンジ様と霧島さんを一緒に閉じ込めるっていう作戦は気に入らないけど、アスカとシンジ様を引き離すのが先決のようね。」

「そうだけど、何か良い方法はねえかなあ。」

「うゝん、難しいわね。アニーはどう思う？」

「良い方法は無いわね。ってことより、そんなことするの、止めましょうよ。私は、シンジ様に嫌われるのは嫌だし。」

「あゝあ、あんな奴のどこがいいのかね。」

テリーの頬がむくれる。

「そんなことも分からないの!？」

イライザとアニーがハモって言った。だが、分からないものはしょうがない。テリーとニールは、揃って頬を膨らますのだった。

第71話 戦争の影 前編

第71話 戦争の影 前編

「はい、みなさん。1カ月の研修ご苦労さまでした。」

マヤが笑顔で言うと、研修生達の顔が緩んだ。そう、この1カ月は厳しい訓練が続いたのだから無理もない。やっと次のステップに移れるかと、期待に胸が弾んでいる者も多かった。

「ですが、皆さんに悪い知らせがあります。」

だが、マヤのその言葉によって、研修生達は顔を見合わせた。シンジに頬を張られたイライザ、シンジをマナと二人きりにして間違いを起こそうとしたテリーとニール、この3人の顔は真つ青だった。自分達が本国に強制送還されるという噂があったからだ。

「皆さん、お静かに。実は、今中東で不穏な動きがあります。ですから、研修期間の短縮が検討されているのです。皆さんにはさらに辛い思いをさせてしまうかもしれません。」

マヤが続けて言うと、エジプト支部のザナドが手を挙げた。

「あの、質問してもいいですか。具体的にどんな動きがあるんでしょうか。」

「良いでしょう、お答えします。イラク帝国に不穏な動きがあるの

を察知したんです。」

「やっぱり!」

「サダムかつ!」

「ちくしょうっ!」

研修生達の騒ぎは、次第に大きくなっていった。それを見てマヤが慌てふためいた。

(どうしようかな。マヤさんが困ってるけど。)

後ろの方でシンジがどうしようか迷っていると、シンジの隣にいたアスカが見かねて前に進んでいき、深呼吸をしてから一喝した。

「はい、静かに!イラク帝国の情報は、まだ確実なものではありません。ですから、他言無用です。それに、これからの研修日程を聞きたくない人は退出するように!」

退出という言葉に、研修生達は一瞬で静かになった。

「さあ、マヤ続けて。」

「あ、ありがとう、アスカちゃん。」

こうして、おとなしくなった研修生達を相手に、マヤはこれからのスケジュールを説明するのだった。

「ねえ、アスカ。ちょっといいかしら。」

マヤの話が終わり、シンジが研修室を出ようとしたところ、一緒にいたアスカがサーシャに呼び止められた。ザナドも一緒である。

「何よ？」

「今の話、もっと詳しく知りたいんだけど、教えてくれないかしら。」

「何言ってるのよ。ペーパーのアタシが知るわけないでしょう。マヤに聞いてよ。」

「そりゃあ、聞いてるわよ。でも、教えてくれないでしょ。」

サーシャは、マヤの方を見た。マヤは、研修生達に取り囲まれて質問攻めに遭っていたのだが、どうやら何も答えてくれないようだ。

「アタシだって、何も聞いてないもの。だから、教えることなんか何もないわよ。いくわよ、シンジ。」

「あ、ああ。」

（ああっ、アスカっつ。ちょっと冷たいんじゃないかなっつ。）

その場の気まずい雰囲気を感じて、シンジは元気無く返事をした。だが、少し歩いてから

アスカに恐る恐る声をかけた。

「ねえ、アスカ。さっきのはちょっと冷たかったんじゃないかなあ、なんて思ったりして。」

(頼むよアスカ、怒らないでよね。)

シンジは、アスカが怒りはしないかと、ちょっと腰が引けていた。だが、アスカはにっこりと笑って答えた。

「分かってるわよ、シンジ。でもね、みんなの前では迂闊なことは話せないでしょ。でも、大丈夫よ。あとでちゃんと説明するから。」

「そ、そうだよ。良かった、安心したよ。」

まだまだ小心者のシンジは、アスカの言葉を聞いてほっとするのだった。

それからしばらくして、アスカはサーシャも含めて、ミラクル5のメンバーをアスカルームに呼んだ。

「さあて、みんな揃ったわね。」

アスカはそう言って周りを見渡した。シンジ、トウジ、カヲル、ケンスケらの本部付きのパイロットもいる。

「ごめんね、サーシャ。あんなところで、機密情報をべらべらしゃべる訳にはいかなかたのよ。だから、許してね。」

「ううん、いいのよ。そうよね、あんなところで聞いた私も悪かったわ。でも、焦る理由は分かってくれるわよね。」

「ええ、もちろんよ。だから、ここに呼んだんでしょ。あともう少

し待ってね。加持さんが来るから。」

アスカが言い終わると同時にドアが開いて、リヨウジ、ミサト、リツコの3人が入ってきた。

「よお、お揃いだな。待たせたしたかな。」

リヨウジは、頭をかきながら言った。

「ううん、それほど待たなかったわよ。じゃあ、悪いけど、早速始めてちょうだい。」

「ああ。分かったよ。」

リヨウジは手近なソファに腰を掛けた。すると、マリアがさっとコーヒーを差し出す。

「ああ、ありがとう。」

リヨウジはコーヒーを一口すすった。そして、ゆっくりと話し始めた。

「さて、知らない子もいるだろうから、セカンドインパクト前の話からしよう。俺達が生まれて数年後かな。イラクは隣国のクウェートという小国に攻め入った。それに周辺国が反発したんだ。だが、周辺国ではイラクに太刀打ち出来なかった。

そこに目をつけたアメリカがイラクを懲らしめようと主張して、国連主導で軍隊を結集してイラク軍と戦ったんだ。湾岸戦争って言ったかな。その戦争で、イラクはメタメタにやられたんだ。そして、

事実上降伏したんだな。

ところが、当時イラクの大統領だったフセインは、責任を問われることなく大統領の椅子に座り続けた。さすがに全世界を相手に戦って勝てると思うほどの馬鹿じゃなかったわけだ。だから、自分の保身を図れると分かった途端降伏したのさ。そして、力を温存していたんだ。

当時、イラクは大量の化学兵器を持っていた。だから、国連はその化学兵器を捨てるようにと何度も言った。だが、イラクはのらりくらりとかわして、まんまと化学兵器を温存したんだ。来るべき戦争に備えてな。」

そこまで聞いて、シンジはふと疑問に思うことがあったので、聞いてみることにした。

「あの、何でイラクは隠し通すことが出来たんですか。」

リヨウジは続けて言った。

「もともと、化学兵器は化学工場を転用することで簡単に作れるらしい。それに、イラクは外部の者の入国を制限したり、秘密を他国に漏らすものは虐殺したりして、恐怖によって国民を支配していたらしい。だから、秘密がもれなかったらしいんだ。

おそらく、そのままの状況が続けば、アメリカか国連が停戦協定を無効だとして、イラクに再侵攻していただろう。その時は、おそらくフセイン政権はおしまいになっていたはずだ。だが、その前にセカンドインパクトが起きてしまった。」

「ど、どうしてそんな人が裁かれなかつたんですか。」

「さあな、正直なところ、俺にも分からん。だが、理由はいくつか考えられる。」

一つは戦争の継続によって、石油の採掘に支障をきたす恐れがあったからかな。

それに、戦争反対を叫ぶ市民グループの活動も大きかったようだ。

とにかく、イラクのフセイン大統領は裁かれずに、大統領の地位にとどまった。そして、影でイラク軍の戦力を増強していったんだ。そこにセカンドインパクトが起きて、世界情勢は大きく変わった。

発端は、9月15日だ。インド・パキスタン国境で難民同士が軍事衝突し、それを皮切りに世界各地で内戦が勃発した。イラクはそれに乗じて同じイスラム国家であるパキスタンを支援するという名目で軍事行動を起こしたんだ。

だが、パキスタンに行く前に、イランを通る必要がある。だが、イランはイラク軍をすんなり通す訳がない。以前戦争した間柄だしな。当然ながら、この2国は戦争状態になつたんだ。

普通に考えれば、セカンドインパクト前のイラクの人口は2,400万人、それに対してイランは6,300万人だったから、イラクの侵攻は無謀だと思われたが、結果は違つたんだ。イラクは、隠し持っていた生物兵器や化学兵器を大量に使つて、イラン軍に大打撃を与えたんだ。

そして、フランスから買ったミラーージュ戦闘機や、ロシアから買った

た戦車でイラン軍を打ち破った。50万人いたと言われるイラン軍は、その殆どが殺し尽くされたという。歩兵が主体のイラン軍では、化学兵器や最新兵器にはひとたまりもなかった訳だ。

それだけじゃあない。女性や子供に爆弾をもたせて、イランの指導者達に自爆攻撃を仕掛けたんだ。サダムフエダーインと言ったっけな。そんな名前の民兵組織を使って、イラン政府の指導者を暗殺したんだ。それで、イラン政府の指揮命令系統はズタズタになって、イランはあっけなくイラクの手に落ちたんだ。

そして、イラク軍はパキスタン政府に助力を申し出たが、パキスタンがイラク軍を領土内に入れるわけがない。パキスタンは、アフガニスタンに攻められそうだから、そちらの方を何とかしてほしいと言ったんだ。

そこで、イラク軍はアフガニスタンに攻め入った。そして、ここでも同じように化学兵器や自爆兵器を使って、国土を支配してしまっただ。さらには、トルクメニスタンにも攻め入って、支配下に治めてしまった。

セカンドインパクト前だったら、こんなことをすればアメリカや国連が黙っていかなかったんだが、どの国も自分の国の混乱を収めるのに手一杯だった。

それに、イラクのずるいところは、親米国家やアラブ国家、核兵器を所有している国家をうまく避けたことだ。湾岸戦争では、同じアラブ国家を攻めて、アラブ全体を敵に回してしまったし、親米国家のサウジアラビアも攻めようとして、アメリカの怒りを買ってしまったから、前回の失敗を繰り返さなかったっていう訳だ。

こうして、3つの国を侵略したフセインは、長男ウダイにアフガニスタンを、次男クサイにイランを統治させ、イラク連邦共和国の発足を宣言したんだ。だが、誰もそう呼びはしない。イラク帝国と呼ばれるようになったんだ。

その後、2月14日にバレンタイン休戦臨時条約が締結され、各地の内戦状態は下火になったんだが、その時にイラク帝国の存続が事実上追認されてしまったんだ。

その後、イラクは比較のおとなしくしていたんだが、サードインパクトの発生から少し怪しい動きを始めたんだ。

次の狙いは、3つ考えられる。一つはパキスタン。だが、パキスタンの人口は1億近い。核兵器も持っている。それに、パキスタンを倒すと次はインドと国境を接することになる。だからこの可能性は低いだろう。

一つはトルコ。だが、トルコはNATOという、アメリカも含めたヨーロッパ最大の軍事同盟の一員だ。イラクは、絶対に手を出さないだろう。

最後にサウジアラビアだ。この方が可能性が一番高い。セカンドインパクト前と違って、アメリカに以前ほどの力はない。サウジアラビアが侵略されても、アメリカは文句は言っても軍隊は派遣出来ないだろう。

この前、ゼーレの手先となっていたにせよ、我々がアメリカの戦力を削っちまったしな。あれで、イラクはアメリカに強力な軍隊を派遣する力が無くなって分かってしまったようなんだ。

おそらく、イラクはイスラエルを攻めるといふ名目で、軍隊をシリアやヨルダンやサウジアラビアに侵攻させて、あわ良くばイスラエルに本当に侵攻するつもりなんだろう。状況によっては、エジプトも攻めるつもりかもしれない。

それとも、イスラエルを攻めるといふのは、はったりかもしれない。イラクの真の目的は、アラブ世界の統一を図ることかもしれない。もともと、イラクにはイスラエルを正面きって攻める理由はない。アラブ諸国の受けがいいから反イスラエルと言っているが、あんな狭い国土を侵略してもうまみはないし、かえってパレスチナ人の面倒を見なければならなくなる。

それに、イスラエルの周辺を固めてしまえば、イスラエルはそれほど脅威ではなくなるし、イスラエルの方から攻めなければ、イラクもイスラエルの悪口だけ言って、実際には攻め込まないかもしれない。おそらく、その可能性の方が高いだろう。」

そこまで一気にしゃべると、リヨウジはコーヒーを飲み干した。

「だが、サウジアラビアがイラクに併合されると、世界の石油の2割近くをイラクが握ることになる。これは、いくら弱体化したとはいえ、アメリカはもちろん、国連だって見過ごせない。湾岸戦争の時と同じく、各国が軍隊を送り込むだろう。」

問題は、イラクの侵略がいつか、ということだ。エヴァンゲリオンが出撃すれば、国連軍はかなり有利に戦える。もちろん、ネルフも全面協力することになるだろうから、エヴァが出撃する可能性は高い。

それに、大規模な国連軍の作戦行動は初めてになるだろうから、ネ

ルフの作戦部も国連軍に組み込まれるだろう。もしかしたら、ミサトの指揮で国連軍が動くかもしれない。こう言うては何だが、エヴァを指揮して戦ったことがあるのは、ミサトしかないからな。

そうになると、問題はパイロットだ。シンジ君、君はイラクに行つて戦えと命令されたら、どうする？」

「ぼ、僕は……。」

シンジはアスカをチラリと見た。

(どうしよう。戦いたくないなんて言ったら、アスカに嫌われちゃうかな。そんなの、嫌だよ。)

シンジは、答えに詰まって押し黙ってしまった。誰もがシンジを見て、その返事を待ったが、アスカが沈黙を破った。

第71話 戦争の影 前編（後書き）

のんびりムードから一転、シリアスな展開になりそうです。エヴアの世界では、イラク戦争は起きていないので、フセインは未だに大統領に在職しています。

第71話補完 対立の火種

第71話補完 対立の火種

一方、他の研修生達の間でも、イラクに対してどうするのかという議論が起きていた。

「フセインなんか、早くやっつければ良いんだ。」

そう主張するのが、アメリカ支部、イギリス支部、オーストラリア支部の研修生達だった。

「駄目だ、今は戦争を起こす時じゃない。」

これはドイツ、フランス、ロシア支部の研修生達の主張だった。

他の支部は、支部の中でも意見がまとまっていなかった。このため、奇しくもイラク問題の影響で、ドイツ派と反ドイツ派の争いが下火になったが、代わって英米支部と独仏露の支部の対立が表面化していった。

そして、その対立は次第に大きくなり、特にドイツ支部とアメリカ支部が強く対立するようになっていく。その争いの火種は、研修生だけでなく、大人達にも広がっていく気配を見せていた。

エジプト支部の研修生では、ザナドがイラクへの先制攻撃を主張していたのに対して、他の2人は反対していた。クウェート人と結婚した叔母を持つザナドにとっては、フセインは悪魔の力を借りても倒すべきだと考えた。考えた。

だが、他の二人は考えは違った。フセインがクウェートを侵略したのも、アメリカの罫にはめられたからであり、セカンドインパクト後は同じアラブ国家は侵略しなかったから、今後もアラブには攻め込まないと考えていた。

したがって、同じアラブ国家を先制攻撃などともない主張し、ザナドと激しい言い争いをしていた。

インドネシア支部の研修生も、仲間内で激しい意見をかわしていた。同じイスラム国家を侵略したフセインを裏切り者だと思つる者、イスラム国家をまとめる力を持つと考える者、先に手を出すのが悪いと考える者、その3者で意見がバラバラであった。

こうして、研修生間の亀裂が深まっていくのだった。

「おい、レッドウルフ。お前はどつ思う？イラクを先制攻撃すべきか、それとも敵が攻撃してくるのを待つべきか。」

ジャッジマンはニヤニヤしながら聞いた。イラク問題は、ジャッジマンも気になるらしい。

「ふん、くだらない。どっちだっていいさ。行って戦って来いと言われれば、戦うまでだ。それだけのことだろう。」

レッドウルフは、けだるそうに答えた。

「まあ、そうだな。じゃあ、言い方を変えよう。研修生達の意見が二つに割れていることは知っているな？果たして、どちらの主張がより正しいと思う？」

「ますますもって、くだらないね。ドイツはイラクに化学兵器の技術支援をしたし、フランスとロシアは大量に武器を売りつけた。だから戦争に反対なのさ。アメリカは、金儲けし損ねたから、ここぞとばかりに利権を確保しようとしている。どっちもどっちさ、間違っているよ。」

「はん、可愛げがねえ答えだな。」

「ふん、どうでもいいさ、そんなこと。」

レッドウルフは、最後にポツリと言った。

「だが、先に攻めるのは、ネルフにとっては不利だな。」

その考えは、奇しくもアスカの考えと一致していた。

第71話補完 対立の火種（後書き）

今までの対立の構図

ドイツ派：ドイツ2支部、エジプト支部、インドネシア支部、
中国支部

反ドイツ派：イギリス支部、フランス支部、ロシア支部、アメリカ
2支部、インド支部

中立派：ブラジル支部、オーストラリア支部

イラク問題での対立の構図

先制攻撃派：イギリス支部、アメリカ2支部、オーストラリア支部、
ブラジル支部

反対派：ドイツ2支部、フランス支部、ロシア支部、インド支部

中立派：エジプト支部、インドネシア支部、中国支部

第72話 戦争の影 後編

第72話 戦争の影 後編

「シンジは行かないわよ。アタシが反対するから。シンジはアタシの言うことなら、何でも聞くもの。」

それを聞いて、シンジの顔がぱっと明るくなった。

「えっ、行かなくても良いの？」

（良かった〜っ。アスカに行けって言われたら、断れないもんね。）

「そうじゃないわよ。行っちゃ駄目なの。アンタは、ここで本部を守らなくちゃ。」

「そ、そうだよ。僕もそれがいいと思う。」

（嬉しい〜っ。アスカだったら、どういふ風の吹き回しなんだろう？でも、理由なんてどうでもいいや。）

シンジは、満足そうな笑みを浮かべた。それを見て、リョウジは苦笑しながら続けた。

「おそらく、碇司令も同じ考えだろう。シンジ君一人では本部を守るのに不安があるから、シンジ君だけではなく、他の本部パイロットも本部からは出さないだろう。そうになると、今はイラクに立ち向かえるエヴァが無いことになる。」

では、研修生達はどうか？これも駄目だ。ATフィールドを張れないパイロットでは、正直言ってエヴァが単なる的になる可能性がある。

おそらく、イラクもそのことに気付いたのだろう。だから、半年以内に準備を整えて、サウジアラビアへ侵攻するだろう。

だが、エヴァのいない国連軍が苦戦するのは間違いない。各国の軍隊の寄せ集めだし、勝てるかどうか分からない戦争に、精鋭部隊を出す国もないだろう。最悪の場合、国連軍は敗北し、中東はイラク一国になってしまう。」

そこで、今まで黙っていたサーシャが口を開いた。

「な、何とかならないんですか。パイロットなら私もいますし、ザナドもいます。私なら、命を捨てても構いません。祖国を侵略から守るためにも、戦いたいんです。」

「いや、駄目だな。君は良くても、ネルフとしてはエヴァは出せない。エヴァは建造費もバカ高く、貴重なんだ。簡単に壊してしまう訳にはいかないんだ。」

「じゃあ、イラクの侵略を黙って見ていろって言っんですか。」

「そうは言っていない。だが、今のままではエヴァは出せない。それに、イラクが侵略戦争を始めたら、国連軍が出動するさ。簡単にイラクの侵略が成功するとは限らない。」

「じゃあ、イラクに先制攻撃を仕掛けて下さい。フセイン政権を、今すぐにも倒して下さい。」

「おいおい、無茶を言うなよ。仮にもイラクは主権国家なんだぞ。簡単に先制攻撃なんて出来ないさ。侵略戦争を始めようっていう、確かな証拠が無い限りな。」

「でも、イラクはクウェートに攻め入った過去があります。それを理由に攻めたらどうですか。」

「それは無理だな。バレンタイン休戦臨時条約は知っているだろう。」

「でも、湾岸戦争は、まだ決着が着いていないんですよ。ザナドの叔母さんにクウェート人と結婚した人がいますが、夫をイラク軍に拉致されて、返してもらっていないんです。その叔母さんは、毎日、毎日、アッラーの神にフセイン政権の打倒をお祈りしていると聞いています。そんな人も多いんですよ。」

「そういう人がいるのは知っている。可哀相だと思っし、同情するよ。だが、それを理由に戦争は始められない。」

バレンタイン休戦臨時条約が締結される前だったら、その理由でも良かったかもしれない。クウェートがイラクに拉致されたクウェート人の奪還を理由に停戦条約を破棄して、クウェート軍とそれを支援する軍隊がイラクに攻め入るといふ筋書きが考えられなかった訳じゃない。

だが、その件は一度決着が着いているんだ。一度決着が着いたことを蒸し返すことは無理だな。欧米各国の反戦家も、激しく反対するだろう。」

「その叔母さんは、言っていました。欧米の反戦家は、フセイン政権の存続を手助けしている。彼らは偽善者だ、罪無き弱者の存在に目を瞑って、自己満足のために反戦を叫んで自己陶醉しているだけだ。まして、神の名を騙る、悪魔の化身だって。出来るなら、反戦家を皆殺しにしてやりたい。あなたも、そんな反戦家と一緒になんですか？」

サーシャは、肩を震わせて言った。

「おいおい、そう興奮するなよ。確かに、君の言う通りの反戦家も多い。何も考えずに、反戦だけを叫ぶ愚か者も確かにいる、それは事実だ。それに、反戦を主張する者にも色々いる。」

反米主義者、アメリカが始める戦争は全て悪だと言う人もいる。

反ユダヤ主義者、イスラエルが嫌いだから、イラクに攻めるのは反対と言う人もいる。

武器商人、イラクがお得意さんだから、イラクに攻めるのは反対と言う人もいる。

軍拡主義者、強大な軍事力を持って、アメリカに対抗しようと言う人もいる。

懐古主義者、第三帝国や大日本帝国の夢よ再びと言う人もいる。感情的反戦家、とにかく戦争で人が死ぬのは嫌と言う人もいる。

いずれにも共通するのが、イラク帝国の元でどんなに弱者が虐げられていても、確証が無いとか、アメリカの情報操作だとか言って、フセイン政権で大勢の弱者が死に至っている事実を認めないことだ。

イランに攻め入って数十万のイラン人を殺害し、多くのクルド人を弾圧・虐殺し、クウェートを侵略して大勢の人命を奪い、反体制派を弾圧・虐殺したという事実があり、湾岸戦争後推定100万人の

死者が出ているというユニセフの報告書もあるのにだ。

イラク帝国が出来た時や、それ以降は、さらに多くの犠牲者が出て
いるだろう。

だが、誤解してはならないことだが、反戦家は人道主義者ではない。
自己の利益や欲求を追求しているだけなんだ。人道主義を掲げる反
戦家がいれば、それは確かに偽善者だろう。だが、そう多くはいな
いはずだ。

それに、反戦家にも色々いて、おかしなことを言う人も多い。だが、
仮に戦争に反対する人が全ておかしいことを言っているからといっ
て、戦争が正しいということにはならない。

それに、戦争というのは、感情で始めるのは危険だし、実際に戦場
に行く兵士だって不死身じゃない。必ず死人が出る。正当な理由も
無しに攻め入るのは、兵士の士気にも関わるし、そうそう簡単に出
来るもんじゃない。

特に、実際に兵士を出す国だと、自分の家族を戦争に出したくない
と言う人も多い。他国で数千万の人が死のうとも、家族一人には代
えられないと言う人を責めるのは酷だろう。」

「でも、でも…。」

「それにな、ネルフは対使徒専門機関だ。人間相手に戦争をする軍
隊じゃないし、国連の下部機関だから、戦争を始める権限もない。
事実上、イラクに攻め入ることが出来るのは、国連か、アメリカか、
周辺の国家だろう。戦争を始めるように頼むなら、そこにするんだ
ろうな。」

「そ、そんな、私なんかの意見なんか、聞いてくれる訳ないじゃないですか。あつ、でも、アスカなら、アスカの意見なら聞いてくれるかも。ねえ、アスカ。一生のお願い。国連でもアメリカでもいいから、イラクに戦争を仕掛ける様に頼んで。お願いよ。スーパードールのあなたの頼みなら、きつと国連やアメリカも前向きに検討してくれるに違いないわ。」

「ちょっと、冗談でしょ。アタシは嫌よ。」

アスカは露骨に嫌な顔をした。

「あなたは他人事だからいいでしょうけど、私やザナドにとっては大事なことなのよ。アスカだって、イラクの周辺にお母さんが住んでいたら、同じことを言えるの?」

「ええ、言えるわよ。」

「もし、お母さんがイラク軍に殺されたら、それでも戦争に反対する?」

「反対はしないわ。でも、他国をけしかけて戦争を起こそうとは思わないわ。」

「実際に起きててもそんなことを言えるのかしら。私には奇麗事に思えるわ。」

「どう思ってもらっても良いわよ。それに、エヴァは基本的には防衛兵器よ。こっちから攻めるのは不利なのよ。」

「じゃあ、碇君がイラク軍に殺されても同じことが言えるの？ 仕返ししようとは思わないの？ それとも、ザナドの叔母さんのように、毎日毎日、20年以上も神に祈るの？」

「別に、アタシはシンジが死のうが、どうなるうが、気にしないわ。でも、シンジは本部を守るべきパイロットだから、戦争なんかには行かせないわ。」

「もう、いいわ。アスカがそんなに冷たいとは思わなかったわ。」
サーシャの目には、大粒の涙が浮かんだ。それを見て、アスカはちよつと言いすぎたかなと思ったのか、優しい口調で言った。

「ちよつと待ちなさいよね。別に、何もしいとは言っていないじゃない。アンタがその気になれば、いくらでも出来ることはあるでしょ？ イラク軍の機密データを盗むとか、戦争が起きた時にイラクのコンピュータを狂わせるとか。」

「ええっ、協力してくれるの？」

暗く沈んだサーシャの顔が、アスカの一言でぱつと明るくなった。

「そりゃあ、そうよ。仲間だもの。でもね、アンタはATフィールドを発生出来る様になるまで訓練しなさいよね。そうすれば、アタシが碇司令に掛け合って、万一の場合、エヴァの出撃許可をもらうわ。」

「ア、アスカ…。本当に？」

「ええ、アタシも祖国を守りたいっていうサーシャの気持ちは分か

るから。でも、ATフィールドを発生出来る様になるのが最低条件よ。そうじゃないと、アンタが無駄に死ぬだけだから。」

「ア、アスカ…。ごめんね。酷いこと言って。」

「いってことよ。アタシ達、仲間でしょ。でも、アンタの仲間はアタシだけじゃない、そうよね。」

アスカは、そう言って周りを見渡した。

「ええ、私もお手伝いするわ。」

マリアが最初に口を開いた。

「私も協力するわ。」

次は、ミンメイだった。

「私もだ。」

次はミリア。

「俺も、協力するよ。もちろん、作戦部長や技術部長もな。アスカの頼みじゃ、断れないしな。」

とリョウジが言い、ミサトとリッコが頷いた。

「ワイも協力したるで。」

「僕も協力するよ。」

「僕に出来ることはあるかい？」

「俺も、軍事情報なら任しておけよ。」

こうして、その場の全員がサーシャに協力の意思を表明した。

「ありがとう、本当にありがとう…。」

サーシャは、再び涙を流すのだった。

だが、少し落ち込んでいる人間もいた。シンジである。

『アタシはシンジが死のうが、どうなるうが、気にしないわ。』

なんて言われたものだから、無理も無い。

(やっぱり、アスカならそう言うよね。アスカは僕がどうなってもいいのかなあ。)

シンジは少し悲しい気持ちになった。

家に帰った後、アスカとシンジは少し気まずい雰囲気になっていた。それに気付いてか、アスカは優しくシンジに言葉をかけてきた。

「あのさ、シンジ。さっき、アタシが言ったこと、本心じゃないからね。」

「えっ、どのこと？」

シンジは、分かっているがらすつとぼけた。だが、アスカの優しい

声を聞いて、以前自分が不良高校生に襲われて怪我した時に、アスカが同じような声で物凄く心配してくれたことを思い出した。

「『アタシはシンジが死のうが、どうなるうが、気にしないわ。』って言ったじゃない。あれは、勢いで言っちゃったことで、本心じゃないのよ。」

「うん、分かってるよ。だって、アスカは、僕が不良高校生に襲われて怪我した時に、物凄く心配してくれたじゃないか。そんなアスカが、あんなことを本気で言うなんて、思わないよ。」

「そ、そう。シンジにしちゃあ、良く分かっているじゃない。」

そう言いながらも、アスカはほっとしたようだった。

「分かるよ、だって、アスカは本当はとっても優しいもの。」

「何よ〜っ。誉めても、何も出ないからね。」

「別にいいよ。でも、僕が心配だったのは、アスカに逃げずに戦えて言われることだったんだ。もし、そう言われたらどうしようかと思っ、悩んじゃったんだ。」

「あのねえ、襲いかかってくる敵に対しては逃げずに戦えて言うけど、こっちから戦いを仕掛けるのは別よ。嫌なら戦わなくてもいいのよ。」

「そうだよ。でも、サーシャさんの言うこともよく分かったんだ。もし、家族が向こうにいたら、心配でたまらなくなるだろうから。」

「そうねえ。でもね、戦争って、簡単に起こせるものじゃないのよね。それにね、シンジ。もし、イラク政府が100万の人を殺すって分かったら、シンジは戦う?」

「そ、それは、多分戦わないと思う。」

「それは何で?」

「だって、助かる人もいるけど、僕が殺しちゃう人もでるでしょ。そんなの嫌だよ。」

「そうね、それは人として自然な反応かもね。でも、それを臆病と呼ぶ人もいるわ。卑怯ともね。助けられる人を、なぜ助けられないのかって。」

「そ、そんなこと言われても、僕には分からないよ。」

「そうね、その通りよ。何が正しいのか、分からないわ。だから、戦争って難しいのよ。」

アスカは、そう言って窓の外に目を移し、沈黙した。シンジは、そんなアスカの横顔を、いつまでもながめていた。

第72話 戦争の影 後編（後書き）

アスカは現実主義者ですから、純粹に軍事的な有利不利を考えて、先制攻撃に反対しました。もちろん、シンジは戦争に行くことが自体が嫌です。

第72話補完 乱闘

第72話補完 乱闘

イラク問題で、ドイツ支部とアメリカ支部が強く対立するようになっていき、その争いの火種は、研修生だけでなく、大人達にも広がっていく気配を見せていた。

そんな中、ある事件が起こった。

「はん、ドイツ支部の連中は臆病者だな。そんなにフセインが怖いのかよ。」

「ふん、怖くないさ。攻めて来たらやつつければいい。臆病者は、先に攻めたがるのさ。」

「何をっ！よくも言ったなっ！」

「うるせえっ！」

最初は、アメリカ支部のポールと、ドイツ支部のハンスのケンカだった。だがそこに、運悪くレッドアタッカーズに所属しているポールの兄が通り掛かった。

「おい、止めないかつ、二人ともっ！」

ポールの兄は、一応ケンカを止めようとした。だが…。

「うるせえっ！」

ハンスに殴られて逆上してしまった。

「やったなっ！」

怒ってハンスに殴りかかった。そこに、これまたワイルドウルフのメンバーが通り掛かり、二人を引き離そうとしたのだが、同様に殴られて逆上し、ケンカに加わってしまった。こうして、ケンカは次第にメンバーを増やしていき、大乱闘に発展してしまっただけである。しかも、ワイルドウルフ対レッドアタッカーズのケンカに発展してしまっていた。

一応、この乱闘はまもなく収まったが、ドイツ支部対アメリカ支部の対立に加えて、ワイルドウルフ対レッドアタッカーズの対立という、新たな火種を抱え込むことになってしまった。

第72話補完 乱闘（後書き）

今までの対立の構図

ドイツ派：ドイツ2支部、エジプト支部、インドネシア支部、
中国支部

反ドイツ派：イギリス支部、フランス支部、ロシア支部、アメリカ
2支部、インド支部

中立派：ブラジル支部、オーストラリア支部

イラク問題での対立の構図

先制攻撃派：イギリス支部、アメリカ2支部、オーストラリア支部、
ブラジル支部

レッドアタッカーズ

反対派：ドイツ2支部、フランス支部、ロシア支部、インド支部
ワイルドウルフ、ヴァンテアン

中立派：エジプト支部、インドネシア支部、中国支部

第73話 ハウレーン隊長の誕生

第73話 ハウレーン隊長の誕生

(あれ、どうしたんだろう?)

休み時間に、アスカはどうしているかなあと思っで見ていると、マリアと何事かを話していた。

(何を話しているんだろう?)

シンジは、聞き耳を立てることにした。そして、意識を集中すると、マリアの声を何とか聞き取ることができた。

「アスカ、ごめんなさい。ワイルドウルフのみんなには、私から良く言い聞かせておくわ。ドイツ支部のみんなにも。」

マリアはそう言って頭を下げた。マリアは、ネルフ傭兵部隊ワイルドウルフ中隊の中隊長であったため、さきの乱闘騒ぎに責任を感じていたのだろうと、シンジは思った。

「まあ、今回はいいわ。でもね、内部で争うのはまずいわよ。研修生同士のいざこざならともかく、傭兵同士の争いになったら、下手すると死人が出るもの。」

「そうよね。私も甘く見ていたわ。まさか、こんな大事になるとは

思わなかったもの。」

「問題は、レッドアタッカーズとアメリカ支部の連中ね。」

「ええ、アリオス君とマックス君では抑えきれないみたいね。」

「そつよねえ。」

アスカは少し考えた素振りをした後、キャシーを呼んだ。

「ちよつと、キャシー。こっちに来て。」

「えっ、何ですか。」

何の用ですかあ、と言いつつ、キャシーが歩いてきた。

「アンタに頼みがあるのよ。レッドアタッカーズの連中を大人しくさせて欲しいのよ。」

「そ、そんなこと私に言われても困ります。私は、ただの連絡要員ですから。」

「連絡要員なら、断る理由は無いわよね。ちゃんと責任者に伝えてちょうだい。」

「は、はい。分かりました。」

「今後、ワイルドウルフといさかいを起こさないこと、ネルフ内で乱闘騒ぎを起こさないこと、以上の2点を厳守するようにして。いいわね?」

「は、い、今の言葉を伝えます。」

「頼んだわよ。」

そんなこと急に言われてもね、とボヤキながら、キャシーは去って行った。その後ろ姿を見て、マリアは不安そうに言った。

「ねえ、大丈夫なのアスカ。あのキャシーって子、あんまり頼りにならないと思うんだけど。ジャツジマンさんとかに頼んだ方が良くないかしら。」

「大丈夫よ、マリア。あの子に言うておけば、レッドアタッカーズにはちゃんと伝わるから平気よ。」

「そうかなあ。あの子、元々サグとアスカの連絡役に過ぎないんですよ。それなのにパイロット候補生に選ばれたりして、何か間違っていないかしら。大体、シンクロ率が異様に低いじゃない。何である子が未だに研修生なのよ。」

（そうだよね、キャシーさんのシンクロ率は、未だに10%に満たないよね。）

そのことは、シンジもかねがね不思議に思っていた。

「そう言わないですよ。色々と深い訳があるのよ。」

（何だろう、深い訳って？それに、マリアさんや僕にも秘密だなんて。）

シンジは、いつか聞こうと心に留めた。

「それならいいけどね。でも、研修生はどうしようかしら。傭兵部隊は統制が効くとしても、研修生達はそうはいかないわよ。」

「そうなのよね、頭が痛いわ。」

そう、実際に研修生への対応は難しい。アスカにとっても妙案は無いらしい。

「ねえ、シンジ。アンタ、何かいい考えはないかしら。」

よほど困っているのか、アスカはシンジにも相談してきた。

「そうだねえ。仲良くするように頼むとか。」

シンジは、色々考えたが良い考えは浮かばない。

「あのねえ、それでうまくいくなら、アタシだって悩まないわよ。」

アスカの眉間にしわが寄る。『こいつに相談したのが間違いだったわね。』って顔だ。

アスカは、深くため息をついた。

(アスカが分からないことを、僕が分かる訳ないのに。)

シンジは、心の中では文句を言いつつ、にこやかな顔で言った。

「でも、アスカ。何でドイツ支部の研修生とアメリカ支部の研修生

は仲良く出来ないのかな。」

「アンタ、バカ？エヴァの正パイロットを少しでも自分達のグループで獲得しようって思っているからじゃない。」

「じゃあさ、どちらにも正パイロットを獲得出来ないようにするか。」

「駄目よ。そんなこと出来るわけないでしょ。」

「でもさ、アメリカ支部の研修生は、アメリカ支部に配備されるエヴァに乗るんでしょ。ドイツ支部に配備されるエヴァがどうなったって、関係ないんじゃないかな。」

「あのねえ、ドイツ支部に配備されるエヴァは、ドイツ支部の研修生が乗れるって、決まった訳じゃないのよ。だから、他の支部の連中が正パイロットの座を狙ってるのよ。」

「じゃあ、早く決めちゃえばいいじゃないか。」

「そんなに簡単に決められる訳ないでしょ。」

「でも、アスカ。エヴァは全部で9体あるよね。本部に4体、支部に5体だったっけ。でも、何で本部のエヴァが4体必要なの？3体でもいいんじゃないのかな。」

「えっ。でも…。」

シンジに言われて、アスカは戸惑った顔をした。確かに、4体が絶対に必要なという訳ではない。だが、シンジは気付かなかったが、も

し本部に3体残すとなると、支部に渡すエヴァは必然的に弐号機になるのだ。

「でもって、何かまずいのかな。」

「そうね…。そういう方法もあるわね。」

雌らしく、アスカはシンジの考えを認める発言をした。この時アスカは、未だに弐号機に執着している自分に気付いていたのだった。

その日の夜、アスカはミラクル5のメンバーを、自宅に呼び寄せた。

「悪いわね、急に呼んじやって。」

「ええ、いいえど。何の話しかしら。」

マリアが尋ねる。

「実はね、みんなの気持ちを聞いておこうと思ったのよ。みんな、本部にこのままだいたい？それとも、エヴァが配備されたら、正パイロットになりたいと思う？その辺の本音を聞きたいのよ。」

最初に答えたのは、サーシャだった。

「私は、正パイロットになって、支部に戻りたいわ。そして、平和を守るために戦いたいの。」

「そうよね、祖国を守りたいって言ったものね。」

サーシャの返事は、アスカの予想通りだった。

「私も、出来るなら自分の国に戻りたい。」

次に、ミアリアが答えた。

「ふうん、マックスがこっちに残るとしても？」

「何っ！あいつは残るのかっ！」

「まだ分からないけどね。可能性は五分五分よ。さあ、どうするの？」

ミアリアは、考え込んでしまった。

「まあ、いいわ。マックス次第っていう訳ね。」

それを聞いて、みんながクスクス笑う。そこにシンジがコーヒーを持ってきた。

「みんな、良かったらコーヒーでも飲んでよ。」

シンジは、みんなの前にコーヒーを置くと、アスカの隣に腰掛けた。

「じゃあ、次は私ね。私はどっちでもいいわよ。日本と中国って近いしね。私は、日本に近い中国に、わざわざエヴァを配備しなくてもいいと思っているしね。」

と、ミンメイ。

「最後は私か。私もどっちでもいいわよ。日本にはアスカもいるし、結構ドイツ支部から来ている人も多いしね。」

「そう…。じゃあ、はっきりしてるのは、サーシャだけね。じゃあ、サーシャに聞くわね。各支部に配備予定のエヴァだけど、その中で隊長を決めるとしたら誰がいい？マリア、ハウレーン、キャシーの3人の中から選んでちょうだい。」

「そりゃあ、マリアよ。」

「じゃあ、次は？」

「うーん、ハウレーンかな。実戦経験もあるしね。」

「同じ意見の人はいる？」

「私は同じ意見よ。」
とミンメイ。

「私も同じだ。」
とミリア。

「うーん、私は隊長なんか遠慮したいわねえ。」
とマリア。

「やっぱりそう思うのね。でもね、アタシはキャシーがハウレーンにしようと思ってるのよ。マリアは、出来れば本部に残って欲しいのよ。」

「私が本部に？いいけど、理由はなあに。」

「そうね、消去法になるかしら。本部の傭兵部隊なんだけど、未だに傭兵に対して不信任を持っている人は多いのよ。だから、傭兵部隊をまとめる人がネルフと信頼関係がないとまずいのよ。その点、マリアならうってつけっていう訳なのよ。」

「なるほどね。そういや、私は小学生の時からネルフにいたものね。本部はともかく、ドイツ支部にいる人には知り合いが多いしね。」

「えっ、どういうことなの。」

そこで、初めてシンジが口を出した。

「そうねえ、誰かがマリアのことを知りたくて、ドイツ支部の知り合いに聞くとするじゃない。するとね、『ああ、あの子なら小さい頃から知ってるよ。いい子だよ。』っていう具合になるわけよ。そうなるよね、マリアに対する信頼度が格段にあがる訳なのよ。」

「そうかあ。確かにそうかもね。」
シンジは頷いた。

「それに、マリアのお父さんがワイルドウルフの代表者でしょ。だから、ワイルドウルフの傭兵達がマリアを裏切るとは思わない訳よ。」

「なるほどな。」
「マリアも頷く。」

「その点では、ハウレーンやキャシーでは信頼度が足りないってい

う訳ね。確かにそうよねえ。二人とも、最近ネルフと関わりを持たに過ぎないものね。」

と、サーシャ。

「でも、アスカ。だったらハウレーンを隊長にすればいいんじゃない。正直言つて、キャシーに隊長が務まるとは思えないし。」

「マリアがそう思うのなら、みんなも同意見でしょうね。シンジもそう思うの?」

「うん、そうだね。だって、キャシーさんてシンクロ率が低すぎるよ。だから、エヴァに乗れないんじゃないかな。」

「そうよねえ、パイロットになるのも無理でしょうね。」

と、マリア。

「違うのよ、そうじゃないのよ。キャシーのシンクロ率は、低くはないの。」

「どづいづいと、アスカ。」

「マリア、キャシーのシンクロ率は本当はもっと高いのよ。でもね、実際よりも低く表示されているのよ。」

「どづいづいと?」

「理由は、はっきりとは分からないの。推測はつくけど、今は言えないのよ。いずれ話す時が来ると思うけど。」

「アスカ、それじゃあ訳が分からないわよ。分かる様に言つてよ。」

「だって、アタシにも分からないのよ。しょうがないじゃない。」

「じゃあシンクロ率のことはいいけど、何で実戦経験の無いあの子が隊長になんてなれるのよ？あの子じゃ、誰も付いて来ないわよ。」

「そうね、じゃあ、分かることは話すわ。キャシーはね、レッドアタッカーズの代表者、レッドブルの娘なのよ。その点では、ハウレオンと条件は同じなの。」

「ええっ！だって、あの子はサグのメンバーなんでしょ？それに、レッドアタッカーズって、最近サグの傘下に入ったんじゃない。」

「その辺は分からないわよ。でもね、キャシーは間違いなく場数は踏んでいるわよ。ハウレオンなんか足元にも及ばないくらいね。普段見せている姿は仮の姿よ。」

「ど、どうしてそんなことが分かるの？アスカの考えすぎじゃないの？あの子ったら、普段は碇君ほどじゃないけど、ボケボケっとしてるじゃない。それに、訓練の時だってあんまりパツとしないし。」

（ちょっと待ってよ。何で僕の話しになるのさ。）

シンジは、ちらりとアスカを見た。すると、なぜか、アスカはムツとしていた。

「考えすぎじゃないと思うわ。それに、シンジだって確かに普段はボケボケっとしてるけど、ここぞという時には結構頼りになるじゃない。こないだ、ゼーレが攻めて来た時だって、マリアよりは活躍したでしょ。」

「ちょっと、それ、どういう意味よ。どうせ、私は活躍してませんよ。」

マリアは、頬を膨らませた。

「や、やめてよアスカ。それにマリアさんも。今はケンカしている時じゃないと思うんだけど。どうしちゃったのさ。」

気まずい雰囲気察して、シンジが止めに入った。

「あつ、ごめんね、碓君。碓君のことを悪く言ったから、アスカが怒っちゃったのよ。」

「そんなことないわよ。冗談じゃないわよ。なんで、アタシがシンジの悪口を言われたくらいで怒らなきゃならないのよ。」

アスカも頬を膨らませた。だが…。

「ははっ。でも、怒ったアスカも可愛いな、なんて…。」

「バ、バカッ！急になんてこと言うのよっ！…」

シンジの言葉に、アスカの顔は真っ赤になってしまった。そして、話はしばらく中断してしまった。

結局、アスカはみんなの反発が強いことから、キャシーを隊長に据えることは当面諦め、ハウレーンを隊長にすることにした。そして、暫定的にこの場の全員とキャシー、ハウレーンを正パイロット候補

とすることにした。

キャシーを正パイロットにすることについては、その場の全員が反対したが、キャシーがサグのメンバーで、レッドアタッカーズとの連携が期待出来ることを理由に、アスカは強引に押し通したが、後は全員一致で賛成となった。

正パイロット候補が決まると、自然に副パイロット候補になろうとする競争がメインになるが、マリア達の統制が効きやすくなるため、副パイロットの決定に正パイロット候補の意見を採用入れると発表することにした。

また、碇司令に対しては、海外に6体のエヴァを配備すると説明し、その了承を得てからこれらのことを公表することにした。もし了承を得られなかった場合は、マリアを本部付のパイロットとすることにした。

こうして、正パイロットと隊長が選出されたのだった。

第73話 ハウレーン隊長の誕生（後書き）

人物再紹介

ドイツ支部（Eva配備予定）

マリア・カスタード：エヴァンゲリオン操縦者候補生。市立第壱中学2年A組に在籍する。蒼い瞳に青い髪の人。体型は標準並。大人しそうな感じで、決して美人とは言えないが、人懐こい笑顔が印象のちよつと可愛い雰囲気少女だ。傭兵部隊ワイルドウルフに所属。ミラクル5の一員でもある。実は、アスカが小学生の時から知り合い。

中国支部（Eva配備予定）

リン・ミンメイ：ミラクル5の一員。歌が好き。紺色に近い長い髪が印象的な美少女。

ブラジル支部（Eva配備予定）

ミリア：エヴァンゲリオン操縦者候補生。市立第壱中学2年A組に在籍する。戦闘機乗り。標準よりもやや大きめの体格で、蒼い瞳に緑の髪で、白い肌をしている。ややキツイ目付き。ジャッジマンの部下でアスカのガード役。ミラクル5の一員でもある。孤児で親の顔は知らない。

エジプト支部（Eva配備予定）

サーシャ：エヴァンゲリオン操縦者候補生。蒼い瞳、長い金髪、長身、スリム、白い肌が特徴の美少女。目が大きい、大人しい感じがする、14歳のロシア系イスラエル人。MAGIへのハッキングに成功した、伝説のハッカーグループ『ミラクル5』の一員。ザナドとは親戚。

フランス支部

ハウレーン・プロヴァンス：エヴァンゲリオン操縦者候補生。市立第壹中学2年A組に在籍する。蒼い瞳にピンクの髪、長身でスリムな白人の少女。フランスの傭兵部隊、ヴァンテアンに所属。

アメリカ第3支部

キャシー：エヴァンゲリオン操縦者候補生で、アメリカ第3支部に所属している。市立第壹中学3年A組に在籍する。ドイツ系アメリカ人で、蒼い瞳、短い金髪、スリムな白人の少女。活発な感じで、大きなメガネをかけており、美人には見えないが、スタイルの良さと優しい感じの笑顔がそれをカバーして余りある。ジャツジマンと同じ組織に属している。謎の組織『サグ』とアスカとの連絡員でもある。

第73話補完 正パイロットの発表

第73話補完 正パイロットの発表

「ほう、式号機をドイツ支部にとな。」

「ああ、そうだ。アスカ君の提案だよ、碇。」

アスカ君の話によると、パイロット同士の争いが、看過出来ない位、大きくなっているそうだ。

この辺で、何らかの手を打つ必要があるというのが、アスカ君の意見だ。」

「で?。」

「ドイツ支部に回す予定だった機体を、フランス支部に回す。」

そして、各支部のエヴァとパイロットとの関係を明らかにする。」

「ほう。」

「今の段階では、素案ということにして発表する。」

だが、それでも今の争いを下火にさせる効果はあるだろう。」

ドイツ支部のエヴァのパイロットは、ドイツ支部とドイツ第2支部から選ぶ。」

エジプト支部のエヴァのパイロットは、エジプト支部とインドネシア支部から選ぶ。」

フランス支部のエヴァのパイロットは、フランス支部、ロシア支部、

イギリス支部から選ぶ。

アメリカ支部のエヴァのパイロットは、アメリカ支部とアメリカ第3支部から選ぶ。

中国支部のエヴァのパイロットは、中国支部とインド支部から選ぶ。ブラジル支部のエヴァのパイロットは、ブラジル支部とオーストラリア支部から選ぶ。

但し、必要に応じて、近隣支部のパイロットを選ぶ可能性もある。例えば、中国支部のエヴァのパイロットに、ロシア支部のパイロットを選ぶこともあり得ると発表するのだ。

こうしておけば、ドイツ派、反ドイツ派それぞれの中での競争が表面化し、

両派の決定的な反目という事態にはならないだろう。」

ちなみに、パイロット達は、概ね次のような勢力に別れている。

他にも、イラク問題への対応についても、米独間のいさかきがある。

ドイツ派：ドイツ2支部、エジプト支部、インドネシア支部、
中国支部

反ドイツ派：イギリス支部、フランス支部、ロシア支部、アメリカ
2支部、インド支部

中立派：ブラジル支部、オーストラリア支部

中国支部とインド支部を除いて、同じ派内での争いになることから、ドイツ派と反ドイツ派の争いは自然消滅するか鎮静化するというのが、アスカの意見だった。

「よかるう。反対する理由は無い。」

「しかし、今からこれでは、頭が痛いな、碇よ。」

「ああ、そうだな。」

そして、翌日にはこの内容が発表された。そして、各支部の正パイロット候補も同時に発表されたのだが、これが後で大きな波紋を呼ぶことになる。

支部のエヴァンゲリオン部隊の隊長：ハウレーン

中国支部のエヴァの正パイロット候補　：ミンメイ
ドイツ支部のエヴァの正パイロット候補　：マリア
アメリカ支部のエヴァの正パイロット候補：キャシー
ブラジル支部のエヴァの正パイロット候補：ミリア
エジプト支部のエヴァの正パイロット候補：サーシャ
フランス支部のエヴァの正パイロット候補：ハウレーン

第73話補完 正パイロットの発表（後書き）

研修生同士の争いに対して、アスカの策は、果たして効果があるのでしょうか。

第74話 狙われた？シンジ

第74話 狙われた？シンジ

「ねえイライザ、聞いた？正パイロット候補が発表されたんですってっ！」

イギリス支部の研修生であるアニーが、同じイギリス支部のイライザのところへと走り寄ってきて、開口一番そう言った。

「えっっ！本当なの、アニー？」

イライザは、アニーからの情報に、思わず立ち上がるほどに驚いた。

「ええ、そうなのよ。正パイロット候補は、

中国支部のミンメイ、

ドイツ支部のマリア、

アメリカ支部のキャシー、

ブラジル支部のミリア、

エジプト支部のサーシャ、

フランス支部のハウレーン、以上6人よ。

それで、その中の隊長をハウレーンがするのよ。」

「マリアじゃないの？ハウレーンなんて嘘でしょ？」

「嘘じゃないわよ。私もてっきりアスカの親友のマリアがなるもんだとばかり思っていたんだけど、違ったのよ。」

「それじゃあ、アスカが正パイロットを決めるって言う噂は、嘘だったのね。」

そう、研修生仲間では、正パイロットはアスカが決めるということ、まことしやかな噂が流れていて、それを信じる者も多かった。

「うーん、そうとも言い切れないわよ。ハウレーンも、アスカの言うことは何でも聞けらしいし。」

「冗談でしょ。あの堅物が。」

「ううん、どうも本当らしいわ。理由は分からないんだけど。」

「そうか。アスカは、とりあえずハウレーンを隊長に据えて、後で理由を付けてマリアにすげ替える気かもね。今、マリアを隊長にすると、反ドイツ派の反発が大きくなるし、ハウレーンをドイツ派に取り込もうっていうつもりかもしれないわ。」

「やっぱり、アスカって頭が良いわね。」

「どうしようか。えっ、でもなんて言ったの？正パイロットが6人？5人の間違いじゃないの？」

「それがね、式号機がドイツに配備されるそうなのよ。で、ドイツに配備予定だった機体が、フランスに配備されるっていう訳なのよ。」

「何ですって！冗談じゃないわっ！何で、フランスなのよっ！」

「ちよ、ちよつとイライザ、怒鳴らないでよ。そんなこと、私に言われても困るわよ。」

「はっ。わ、悪かったわね。でも、急にどついうことなのよ。」

「ううん、分からないわ。でも…。」

アニーは、イライザにかいつまんで話をした。

支部に配備されるエヴァが6体になったこと。

パイロットは、

ドイツ支部のエヴァは、ドイツ支部とドイツ第2支部から選ぶこと。
エジプト支部のエヴァは、エジプト支部とインドネシア支部から選ぶこと。

フランス支部のエヴァは、フランス支部、ロシア支部、イギリス支部から選ぶこと。

アメリカ支部のエヴァは、アメリカ支部とアメリカ第3支部から選ぶこと。

中国支部のエヴァは、中国支部とインド支部から選ぶこと。

ブラジル支部のエヴァは、ブラジル支部とオーストラリア支部から選ぶこと。

但し、必要に応じて、近隣支部のパイロットを選ぶ可能性もあること。

「なによ、それじゃあ私達はフランス支部のエヴァに乗るの？」

しかも、正パイロットはハウレーンに決まったって？参ったわね。

ドイツ相手なら負けても言い訳が立つけど、フランス相手に負けたんじゃ、シャレにならないわよ。」

「それより、他の支部の研修生は大騒ぎよ。どうやって挽回しようかってね。」

特に、今まで仲が良かったグループ内でパイロットを取り合う様になったもんだから、

早くもお互いの仲がギスギスしだしてるわ。

変わらないのは、前から仲が悪かった中国支部とインド支部くらいよ。」

「しかし、本当に参ったわよね。」

よりによって、フランスとロシア相手に競争とはね。

反ドイツ連合が解体するのも、時間の問題ね。」

「って言うか、もう解体してるわよ。でも、どうしよう。ハウレーンは実戦経験もあるし、支部のエヴァ部隊の隊長っていうんじゃ、正パイロットの座は動かないわよ。」

アニーの顔は、心なしが青かった。

「何か良い手はないかしら。あつ、と言う様な逆転の方法は。」

「考えつくのは、シンジ様をお願いするか、アスカに頭を下げるか、どちらかしかないと思うけど。それも、効果はあんまり期待出来ないわね。」

「うーん、何か良い方法は…。」

イライザとアニーは、額を寄せ合って考えた。だが、妙案が浮かぶはずも無かった。

「ちょっと、シンジ。アタシに付き合いなさいよ。」

放課後、シンジはアスカに呼び止められた。

「うん、いいけど。何の用なの？」

（なっ、何の用だろう。何か、嫌な予感がするな。）

「ふうん、何か用が無いとシンジを呼んじゃいけないっていうわけえ？」

アスカは、途端に機嫌の悪そうな顔になった。

「ちっ、違うよっ！で、でもっ…。」

（やばいっ！何とかごまかさないと。あっ、そうだ。）

「でも、何よ？」

「どこでキスするのかなあ、なんて思っで。」

「ふざけんなっ！」

哀れシンジは、アスカのゲンコツを食らうはめになってしまった。

「まったく、もう。なに盛ってるのよ、シンジは。」

アスカはぶんぶんである。

「だって、アスカから声をかけてくるなんて珍しいからさ。いつもアスカには考えることが後ろ向きだって言われているから、僕にとつては前向きに考えたつもりなんだけど。」

「向きが悪いわよ、向きが。まあ、いいわ。さあ、入るわよ。」

アスカに案内されてやって来たのは、校舎のすみっこにある空き教室だった。

そこには既に、アメリカ支部のアルコート、ドイツ第2支部所属のウィチタ、それにマリアが待っていた。

「さあて、研修生達の動きを教えてくださいましょう。」

アスカはそう言って胸を張った。

「じゃあ、私から言うわよ。」

最初に口を開いたのは、ウィチタだった。

ちなみに、ウィチタはラプリーエンジェルの一員である。

だから、アスカやマリアとも仲がいいのだ。

「ドイツ支部は、特に大きな騒ぎにはなっていないわ。」

アスカと碓君の仲が良いのは知られているし、

アスカと仲が良いマリアが正パイロットになるのは、みんな予想していたから。

でも、フランスやイギリスの研修生と争うと思っていたもんだから、可能性が大きくなったって喜んでるわね。

みんな、サブパイロットの座ならゲットできるかもしれないって、目の色を変えているわ。」

「トホホ。私は、アスカと仲が良いから正パイロットに選ばれたと思われてるの？いやゝな感じね。まあ、どうでもいいけどさあゝ。」
マリアは、少し頬を膨らませた。

「でもね、残る6人のうちから、サブが1人に予備役が2人でしょ。2分の1の確率じゃない。張り切る訳よ。でもね、エジプトとインドネシアの間でサブパイロットの座を取り合う様になったでしょ。だから、あっちの支部の人達は、結構ピリピリしだしたわ。」

「ふうん、思った通りね。」
と、アスカ。

「で、中国支部の方は大喜びよ。何たって、仮とはいえ正パイロットの座をインドに奪われなかったもんだから。これで、エヴァの配備も間違いないって感じのこと言ってたわ。」

「そうねえ、地理的にはインドでも良いと思うかもしれないけど、インドに配備したら、日本の負担が増えるしね。」

そのアスカの言葉に、残る3人はなるほどと頷いた。

「じゃあ、アールコートの方はどうなのよ。」

「はい、アメリカ支部の方は、私かアリオス君が正パイロットになるものだと思っていましたから、みんな驚いています。それで、ちよっと困ったことになってます。」

「ふうん、なあに。」

「テリーさんとニールさんが正パイロットに選ばれた訳を教えろって、キャシーさんに凄いい剣幕で詰め寄ったんです。」

「ええっ。そりゃあまずいわね。」
とマリア。

「キャシーって、あの、碇君並にポケポケっとしてる子でしょ。可哀相よねえ。」
とウイチタ。

だが、シンジは面白くない。

（なっ、なんで僕がそんな言われ方をするのさっ。まったく、もうっ。）

ちょっとムツとしたのだが、誰にも気付かれなかった。そして、話は中断していた。

「ええ、でも…。」

アールコートが口ごもっていたが、アスカは笑って言った。

「テリーもニールも、逆に叩きのめされたんでしょ。」

「え、ええっ。そうですね…。でも、どうして分かったんですか。」

「分かるわよ、それくらい。ふふん、あいつらもいい気味だわ。」

くっくっくつと笑うアスカに、マリアが叫んだ。

「あゝっ、アスカッ！それを狙って、キャシーを正パイロットにしたんでしょっ！」

「ち、違っわよ、何を言ってるのよ。」

アスカの顔がなぜか赤くなる。

「でも、それだけじゃないんです。ちょっとまずいことになりそうなんです。」

「何よ、言ってみなさいよ。」

「それが、その、とにかくまずいんです。」

「それじゃあ、分からないでしょ。ちゃんと言いなさいよ。」

「実は、何人かの女の子が集まって話しているのを聞いちゃったんです。正パイロットに選ばれたのはみんな女の子だから、きっと碓君の意向に違いない。だから、碓君に頼んでパイロットに選んでもらおうって。」

「はあっ、馬鹿ねえ。シンジに頼んだくらいで、何とかなる訳ないでしょうに。」

アスカはケラケラと笑った。

「それが…。体を張って頼むって言ってたんです。」

「えっ、何ですって。」

アスカの笑いは止まり、途端にアスカの声が低くなった。

「えっ、体を張ってって、どういう意味なの？」

（も、もしかして…。えっちなことなのかな。わくわく…。）

シンジが聞いたが、アスカが睨み付けたため、黙ってしまった。

「お子ちゃまのシンジには、関係無いのよ。黙ってなさいよ。」

「う、うん。」

（まずいつ。アスカったら、本気で怒ってるよ。こりゃあ、しばらく黙っていよう。）

シンジも、アスカには逆らえない。小さくなってしまふ。

「アールコート、後でどの支部の誰なのか報告するのよ、いいわね。」

「は、はい。分かりました。」

気弱なアールコートは、ちょっと体が震えている。

アスカはシンジを見て、こう言った。

「シンジ、アンタはしばらくの間、絶対に独りにならないこと、いいわね。」

「あ、う、うん、いいよ。」

（うっ、アスカの目が怖いよ。）

アスカの睨み付ける様な視線に押されてか、シンジは少し怯えていた。

「そうねえ、必ず鈴原か、相田か、渚と一緒にいなさい。アリオスかマックスでもいいわ。どうしても駄目なら、マリア、サーシャ、ミンメイ、ハウレーン、アールコート、キャシーにミリア。誰でもいいから一緒にいなさいよね。」

「う、うん。分かったよ。」

(そ、そんなに睨まないでよ。)

シンジは、カクカクと首を縦に振るしかなかった。

「絶対よ。」

「うん、絶対だ。」

シンジは、首を縦に振り続ける

「アンタ、2度も約束破っているんだから、今度約束破ったら承知しないからね。」

「う、うん、分かってるよ。」

「まあ、いいわ。アンタが約束破るなら、アタシも破るからね。」

「えっ、それって。」

(まさか、あの約束じゃあ。)

シンジの目が、大きく見開かれた。

シンジの頭に浮かんだ約束とは、シンジが20歳の誕生日に、アスカと結ばれるというものだった。

「アタシがアンタと交わした約束は一つだけだから、分かるわよね。」

「そ、そんなのないよお。」

（ガーン！やっぱりそうだ。そりゃあないよお。）

シンジは泣きそうな顔をした。

アスカとの約束が、とつても、とつても、とつても、楽しみなのだから、しょうがないのだが。

「アンタが約束を守ればいいのよ。簡単でしょ。」

「で、でもさ。不可抗力ってこともあるじゃない。」

シンジは必死である。

「でもも、かかشもないの。いいから、アタシの言うことを聞きなさいよね。」

「う、うん、もちろんだよ。だって、アスカのことが大好きだから。」

「は、恥ずかしいことを言わないでよねっ！」

シンジの言葉に、アスカの顔が真っ赤になった。

だが、怖くて誰も突っ込みを入れることが出来なかった。

「シンジ、もう寝た？」

「うっん、まだだよ。」

その晩、アスカはシンジに話しかけた。

「シンジ、分かっているとは思っけど、女の子の誘いに乗ったら駄目よ。」

「ああ、分かってるよ。」

「何よ、2回も引つかかったくせに、よく言うわよ。」

「それは、ごめん…。」

「あのねえ、アタシはシンジの体のことが心配で言ってるのよ。研修生達だって、一応身元ははっきりしてるけど、ゼーレや他の組織の息がかかっていないとは言いきれないんだから。」

「そ、そうなの。」

「そうよ。だから、鼻の下を伸ばして行ったりしたら、銃でバン！って撃たれる可能性もあるのよ。シンジの性格からして、他の女の子を楯にされたら、逆らえないでしょ。」

「そ、そうかもしれない。」

「だからね、人気の無いところへは行かないこと、独りでは行動しないこと、いいわね。」

「うん、分かったよ。アスカは、僕のことを心配してくれているだね。ありがとう、嬉しいよ。」

「ふ、ふん。今頃分かったの？そんなんだから、みんなに『ポケボケ』としてる。』なんて言われるのよ。」

「そうだね、これから気をつけるよ。だから、約束を守ってね。」

「ふん、シンジのスケベ。」

「だって、しょうがないよ。僕だって男だもん。」

「あゝっ、開き直ったわね。」

「そ、そうじゃないよ。」

「そんなんじゃない、やっぱり考え直そうかなあ。」

「それだけは勘弁してよ、アスカゝっ。」

涙声になるシンジに、アスカは呆れたような顔をするのだった。

第74話 狙われた？シンジ（後書き）

アスカの思惑通り、支部間の対立は下火になりつつあります。その代わりに、巻き返しを画策する者が当然出てくるわけで、その矛先がシンジに向かいそうです。さて、アスカはどうするのでしょうか。

第74話補完 悪巧み

第74話補完 悪巧み

「ぬあんですって！それって、本当なの？」

「ううん、まだ確かな情報じゃあないんだけど、五分五分ってところかしら。」

「むっつ。」

同じ頃、アスカは唸っていた。

マリアらの情報によると、現在4つのグループがシンジのことを狙って、悪巧みをしているというのだ。

1組目は、ロシア支部のエカテリーナ、ドイツ支部のハンナ、オーストラリア支部のジュリアの3人組だ。

2組目は、ブラジル支部のエドナ、インドネシア支部のクリスティン、中国支部のフェイの3人組。

3組目は、アメリカ第3支部のジャネット、ドイツ第2支部のナスターシャ、フランス支部のソフィーの3人組。

4組目は、エジプト支部のイリス、インド支部のカリシュマ、イギリス支部のイライザの3人組。

この4グループが密会を重ねているらしいのだ。それも、目的はシンジを色仕掛けでモノにして、エヴァのパイロットの座を射止めようというものである。

組み合わせを見る限りでは、ドイツ派と反ドイツ派が結構手を組んでいることから、両派の対立を抑えるという目的はある程度達成されたようだが、話が変な方向に進んでしまっていた。

アスカも、まさかシンジが狙われるとは、夢にも思わなかったのである。

(ちっ、しくじったわね。)

アスカは、何人かの女の子がシンジにアプローチすることは想定していたのだが、研修生達も一応支部の代表であり、それなりのプライドを持っていると思われることから、さすがに下劣な策を採ると思わなかったのだ。

それが、マリアらの情報を総合すると、どうもなりふり構わずシンジにアタックしようとしているらしい。それも、体を張って。

グループによっては、ビデオやカメラを購入したり、基礎体温を計り出したり、妊娠検査薬を購入した女の子もいるらしいのだ。

その目的は分かりやすいが、アスカにとっては、とんでもない話である。

だが、止めようにも証拠は少ないし、いかんせん数が多すぎる。研修生の3割、女の子に限れば6割になるのだ。

下手に止めようとして研修生を帰国させようとするれば、大騒ぎになるのは間違いないし、イラクによる戦争の危機が迫る今、研修計画

を大幅に遅らせる訳にもいかなかった。

女の子のアスカと、ネルフ幹部としてのアスカの心が激しくぶつかったが、アスカの頭に良い考えがふつと浮かんだ。

（そっだ、あいつの力を借りよう。確か、あいつが得意なのは…。）

アスカは、ある人物を心に浮かべた。

第75話 罨に落ちた？二人

第75話 罨に落ちた？二人

暗がりの中で、3人の少年がヒソヒソ話をしていた。

「おい、どうだ。作戦は上手くいきそうか。」

「ああ、大丈夫だ。碇がない時に、上手く……を呼び出して……。」

「……を部屋に閉じ込めて、それから……。」

「……の頭を地面にこすりつけて……。」

「それから、何度も何度も……。」

「そして、……恥ずかしい写真を……。」

「あの、綺麗な蒼い瞳、紅茶色の髪の毛……が俺達の……に。」

「俺達……何でも言う通りに……。」

「……そして、俺達はエヴァのパイロットになるんだっ！」「」「」

3人の少年達は、くっくっくっくと笑った。

「ジャンケン、ポン！」

「あいこでしょ！」

「やったあ〜っ！勝ったわ〜っ！」

「き〜っ！悔しい〜っ！」

「そ、そんなあ〜っ！」

学校の片隅で、3人の女の子がジャンケンをしていた。

だが、それはただのジャンケンではなかった。シンジへのアプローチ権を賭けたジャンケンだったのだ。

「よ〜しっ！これで碇君は、私のものよっ！」

そう言うのは、ロシア支部のエカテリーナ。

「あ〜あっ。私は二番手か。」

そう愚痴るのは、オーストラリア支部のジュリア

「私は最後の〜っ。参ったわね〜っ。」

最後はドイツ支部のハンナである。

実は今、3人でシンジにアタックしようと思巧みを計画していた。シンジを軟禁し、色仕掛けで迫ろうといていたのだ。

だが、最初に誰が迫るのか、その場で争うのは愚かしいので、前もって決めようという話しになったのである。

「いいなあ、エカテリーナは。」

ジュリアは恨めしそうに言う。

「何言ってるのよ、あなたはまだお子ちゃまなんですよ。

あなたが最初だったら、上手くいくものも上手くいなくなるわよ。みてらっしゃい。」

碇君を私のモノにしてみせるわ。惣流アスカなんには負けないんだから。」

「でもさあ、碇君たら、惣流さん一筋っていう噂ですよ。」

惣流さんの悪口を言ったイギリス支部のイライザは、思いつきり頬を引っぱたかれたってという話だし。

うまくいくかなあ。」

ハンナは不安げである。

「ふん、大丈夫よ。碇君だって男の子だし、目の前のごちそうを見逃すはずが無いでしょ。」

それに、もし駄目だったとしても、裸で絡み合っている写真を撮って、いざとなったら脅せばいいじゃないのよ。」

アスカに見せるって言えば、碇君なら何でも言うことを聞きそうじゃない。」

エカテリーナは、胸を張る。

「でもさあ、上手く行き過ぎて、子供が出来ちゃったらどうするの？」

ハンナは、まだ不安そうである。

「馬鹿ねえ、結婚を迫ればいいじゃない。そうすりゃあ、ネルフ司令の親族よ。」

パイロットやるよりも、よっぽどいいじゃない。」

こうして、3人の少女達による悪巧みが、着々と進行しようとしていた。

だが、悪巧みを企てていたのは、この3人だけではなかったのである。

同じようなことをしているグループが、他にもあったのだ。

それから数日間、水面下で4つのグループが激しい駆け引きを繰りひろげた。

最初にどのグループがシンジを上手くおびき寄せることが出来るのかによって、パイロットへの道のりに大きな差がつくと思う彼女達である。

言葉には言い表せない醜いバトルが他の研修生をも巻き込んで繰りひろげられたのである。

生き馬の目を抜くような争いに勝利したのは、意外にもドイツ第2支部のナスターシャらのグループだった。

それには理由があった。

ナスターシャらのグループは、いずれのメンバーも成績が低く、し

かも同じ支部に有力な候補がいたからだ。
自然、彼女達は切羽詰まって、なりふり構わぬ行動に走ったのである。

ナスターシヤは、マリアが当確であり、それ以外に成績の良いウィチタ、ハンナ、ハンスといったライバルがいた。

ソフィーは独仏露の3支部での競争になり、大激戦のうえ、当確のハウレーンとは仲が悪く、イライザ、トム、アニー、エカテリーナらの成績が優秀なライバルがいた。

ジャンネットはさらに悲惨で、当確のキャシー以外に、ほぼ当確のアリオスやアルコートを除く1つの椅子しかないのに、ポール、テリー、ニールらの手ごわいライバルがいた。

こうして、切羽詰まってなりふり構わぬ手段を講じたナスターシヤ達3人組は、ネルフ施設のはずれに、ある人物を巧妙に呼び出していた。

その人物は、周りをきよるきよる見ながら、会議室に入ってきた。

「あのお、誰が僕を呼んだの？誰かいないの？」

その会議室の半分から向こうはパーティーションで区切られて見えなかったが、小さなドアが付いていた。

「いないなら帰るよ。」

その人物が言うとドアが開いて、ナスターシヤが顔を出した。

「碇君、ちょっとこっちに来て。」

「わっ！」

シンジは慌てた。

「どうですか。アスカさんよりは大きいと思いますけど、お気に召しましたか？」

「や、止めてよっ！何をするのさっ！」

「私は、シンジ様が大好きなんです。だから、今日はシンジ様のモノになりたくて、ここにお呼びしたんです。」

「そんなの、嫌だよっ！」

「そうおっしゃらずに。聞くところによると、アスカさんはシンジ様に、まだエッチなことをさせてくださらないとか。なんて可哀相なシンジ様。私がアスカさんの代わりに、どんなエッチなことでもさせていただきます。どうぞ、遠慮なさらずにお気に召すままのことをして下さい。」

「い、嫌だよっ！」

「私は、アスカさんとシンジ様には、仲良くしてもらいたいと思っているんですよ。」

でも、アスカさんは男のエッチな本能を理解していないようですね。それがもとで、お二人の仲が悪くなるのは忍びないのです。

ですから、私相手に思う存分エッチなことをしていただいて、発散して下さい。

そして、アスカさんとは今まで以上に仲良くなさって欲しいのです。それが、お二人のためなのです。」

「そつ、そんなことないよっ!」

「ああ、シンジ様。

あまり我慢をなさらないで。無理に我慢するとお体にも良くないですし、欲求不満もたまります。

そんな状態では、アスカさんにも嫌われてしまいますよ。それでもいいんですか。」

「そ、そりゃあよくないけど。」

「でしょう。ですから、私相手にシンジ様のエッチな欲望を全てぶつけて下さい。

私はシンジ様の欲望ならば、全て受け入れます。

アスカさんが絶対に許してくれないようなことでも、私なら簡単に許しますよ。

どんなことで、何度でも、好きなだけしていただいてもいいんですよ。もちろん、このことは死んでもアスカさんには話しません。

ですから、安心してシンジ様の欲望を、この私に好きなだけぶつけて下さい。」

「でも、僕はアスカじゃなくちゃ嫌だ。」

「それでは、今だけでも私のことをアスカさんだと思って下さい。」

そう言いながら、ナスターシャはもう片方のシンジの手を、自分の服の中に入れた。

「どうですか。アスカさんは、こんなことをさせてくれますか?」

「あ、あのっ。」

「シンジ様、大好きですっ！」

ナスターシャは、シンジを布団の上に押し倒した。

「シンジ様、大好きです。私をアスカさんだと思って、好きなようにして下さい。アスカさんにしようと思っても出来ないようなエッチなこと、いやらしいこと、どんなことをしても構いません。」

「ま、待ってよ。」

「いいえ、待ちません。」

ナスターシャは、いきなりシンジにキスをした。

「うっっ。」

シンジはつめいたが、両手が自由にならないので、何も出来ない。

「シンジ様。今だけ、私はアスカさんです。アスカと呼んで下さい。そして、好きなようにして下さい。」

ナスターシャは、シンジの片手を股間に挟むと、自由になった片手で上手に自分の服を脱ぎ出した。

そして、あっという間に下着1枚だけの姿になると、今度はシンジの服も上手に脱がし、残すところあと1枚だけにしてしまった。

「シンジ様、大好きです。シンジ様っ！」

ナスターシャは、身につけた最後の布地も脱ぎ捨てた。そして、再びキスをしながらシンジを強く抱きしめた。

「カシャッ、カシャッ、カシャッ。」

その瞬間、シャッター音が部屋に響いた。

シンジが何事かと音のする方を見ると、それまでどこに隠れていたのか、全裸の女の子が二人いた。ソフィーとジャネットである。

「なっ、何をするんだよっ！」

シンジは、慌ててナスターシャから体を離し、上半身を起こした。

「ナスターシャさん、うらやましいわ。私達にも、少しだけ喜びを分けて。」

ジャネットは、そう言いながらシンジの口に豊満な胸を押しつけた。

「んんっ！」

慌てるシンジに、ジャネットは言った。

「シンジ様。私も大好きです。」

そうして、上手にナスターシャと入れ替わり、シンジの膝の上に座ると、シンジに情熱的なキスをした。

「カシャッ、カシャッ、カシャッ。」

その姿を、ソフィーは何度も写真に撮った。

「さあて、次は私の番ね。」

今度は、ナスターシャがカメラを受け取り、ソフィーはジャネットと上手く入れ替わると、

同じようにシンジに抱きついてキスをした。

「カシャツ、カシャツ、カシャツ。」

その姿を、ナスターシャは何度も写真に撮った。

「さあ、もういいでしょう。シンジ様の最初の相手はこの私よ。

さあ、シンジ様、お待たせしました。といっても、これからが長いんですけどね。」

ナスターシャは、妖艶に微笑んだ。

「私を、シンジ様のものにしてください。」

その言葉を合図に、ジャネットがシンジの右手を掴み、自分の胸に押しつけた。

そして、シンジの右足に自分の両足を絡めて、押さえつけた。

シンジの左手と左足はソフィーが押さえつけた。

そうして、シンジが身動きできないようにすると、ナスターシャはシンジに熱い口づけをした。

「シンジ様、大好きです。お慕いしています。」

ナスターシャは、シンジを力強く抱きしめた。

「どっ、ソフィー。そろそろ言いましょうよ。」

シンジが会議室に閉じ込められてから、既に1時間が経過した時のことだった。

ナスターシャの問いに、ソフィーは嬉しそうに言った。

「そうね。もう、全てが終わった頃ね。」

「なっ、何を言ってるのさ。」

シンジは、会話の内容に一抹の不安を感じたようだった。

「実はね、アスカさんのことを大好きな人達がいてね、

今頃アスカさん呼び出して、とってもいいことをしている頃なの。」

「どっ、どっということなの?」

「ふふふっ、多分、アスカさんを部屋に閉じ込めて、それからとても素晴らしいことをするのよ。」

「アスカさんの頭を地面にこすりつけて、押さえつけて、抵抗出来なくするの。」

「それから、何度も何度も、嫌がるアスカさんに、言葉に出来ないようなエッチなことをするのよ。」

「そして、アスカさんの恥ずかしい写真を何枚も、何枚も撮るの。」
「あの、綺麗な蒼い瞳、紅茶色の髪のアスカさんが、シンジ様以外の男の子達のものになるのよ。」

「そして、アスカさんは、男の子達の奴隷。何でも言う通りにするようになるの。」

「『そして、シンジ様は、アスカさんのことを嫌いになるのよっ！』」

3人の少女達は、そう言っつて、くっくっくつと笑った。

時を同じくして、ミサトがリョウジに緊急の呼び出しをかけていた。

「かじっ！早くアスカを探してよっ！」

ミサトは、急いでいたためか、リョウジを旧姓で呼んでいた。未だに急いでいるときは、加持と呼んでしまうらしい。

「どうしたんだよ。」

リョウジは、のんびりとした返事をした。

「大変よっ！一部の研修生が、アスカを襲おうとしてるのよっ！今、それが分かったの。」

早く、アスカを探してよっ！今、リッコにも手伝わってもらっているけど、見つからないのよっ！」

「大丈夫だよ、アスカなら。研修生が束になって襲ったって、簡単に撃退できるさ。」

「それがね、そうもいかないのよ。

薬品保管庫から、即効性の気体麻酔薬が無くなっていたの。

いくらアスカが強くても、麻酔薬がかがされたら眠らされてしまうわっ！

そうしたら、何をされるか、分からないわっ！」

「何だっ！」

リョウジの背中に冷たいものが流れた。

確かにアスカが強くても、眠らされたらおしまいだ。

しかも、一緒に眠るのを覚悟で、アスカの至近で液体麻酔薬を使用したら、アスカに避ける術はない。

そして、残った仲間が、アスカをいかようにでも料理出来るのだ。

しかも、アスカは腕に覚えがあるだけに油断しやすく、意表を衝いた畏には簡単にひっかかってしまうだろう。

「ちくしょうっ！そんなことは、絶対に許さんっ！」

リョウジは、弾けるように行動を開始した。

第75話補完 アスカ襲撃計画

第75話補完 アスカ襲撃計画

シンジが襲われる少し前、アスカも罠にかかっていた。

「惣流さん。碇君が女の子に呼び出されて、会議室に閉じ込められてしまったんだ。一緒に助けに行こうよ。」

「ええっ、シンジがっ！分かったわっ！」

声をかけてきたのが、エジプト支部のザナドであったため、アスカは簡単に信用してしまった。

ザナドがサーシャの親戚で、サーシャから信頼出来る男の子だと聞いていたからだった。

そして、ザナドの後に付いて行って、人気の無い会議室に入ったまでは良かったが、
肝心のシンジが見当たらなかったのだ。

「何よ、シンジはどこなの？」

「碇君は、残念ながらここにはいませんよ。」

ザナドがそう言ったのと同時に、会議室のドアが閉まった。そして、会議室の机の影に隠れていた少年が二人現れた。

(しまったっ！畏だったのねっ！)

アスカは、拳に力を込めた。

(ちくしょう、ふざけやがって！叩きのめしてやるわっ！)

アスカは、怒りに燃えていた。

話は少し遡る。数日前、イライザは他の支部の研修生から密かに呼び出された。

「私をこんなところに呼び出して、どういふことかしら。」

イライザの問いかけに、逆にナスターシャが問いかけた。

「あなたは、惣流アスカさんのことが嫌い。そうよね?」

「そんなことはどうでもいいでしょ。」

「実はね、私達もそうなのよ。だからね、彼女を懲らしめてやろうと思っっているの。」

「懲らしめる?」

「そう、懲らしめるのよ。」

そのために、男の子を声をかけているんだけど、あなたにも協力してほしいのよ。

悪い話じゃないでしょ？」

「ふうん、アス力をねえ。良い話だわ。」

「でしょ？だから、あなたからニール君やテリー君を誘って欲しいの。」

なるべく、大勢の男の子であの子を襲わせたいのよ。」

「分かったわ。ニールとテリーに声をかければいいのね。」

「頼むわね。」

「で、あの子に何をするの？」

「簡単なことよ。人には絶対に言えないような恥ずかしい目に遭わせて、それを写真に撮るの。」

そして、シンジ様と別れさせるのよ。」

「ふふふっ、いいわねえ。今から楽しみだわ。」

「それじゃあ、頼んだわよ。」

こうして、イライザはナスターシャ達と別れた。だが…。

「あっ、そうだ。テリーに声をかけるのは、アニーからにしてみらおう。」

テリーはアニーのことが好きみたいだから、アニーから頼んだ方が確実だわね。」

イライザは、アニーも巻き込むことにしたが、それが後に予想外の結果を呼ぶことになる。

第76話 悩み

第76話 悩み

「あの、ジャツジマンさん。すみません、急にお呼びしちゃって。」

シンジは、ジャツジマンをネルフ内のある会議室に呼び出していた。

アスカがザナドに呼び出されるよりも1時間ほど前のことだった。

「ああ、構わんよ。で、話ってなんだい。」

ジャツジマンはにこやかに笑った。

ジャツジマンは普段は厳しい男だが、子供に対しては意外と優しいのだ。

「ちょっと、ご相談したいことがあるんですが。」

シンジは遠慮がちに聞いた。

「何だ？恋の悩みか。」

ジャツジマンの顔が、少し真剣になった。

「ええ、まあ。似たようなもんです。」

「ああ、いいぞ。俺で良ければな。」

ジャツジマンの答えを聞いて、シンジはほっとした。もしかしたら、笑い飛ばされるかもしれないと心配していたからだ。そのため、少し落ち着いて尋ねることができた。

「僕は、自分のことを意気地なしで情けない男なのかもしれないと思っているんですが、そんなのは嫌なんです。なんとか胸を張って生きていけるような、一人前の男になりたいんです。」

それにはどうしたらいいのか分からなくて。それで、ジャツジマンさんにどうしたらいいのか、お聞きしたいと思っただけです。」

「原因は、惣流アスカだな。」

「はい、そうです。」

アスカは何て言うか、僕には全然釣り合わないくらいの素晴らしい女の子なんです。

僕よりもずっと大人だし、頭もいいし、強くて綺麗だし。

どんな分野でも人よりもずば抜けて優秀だし。

何から何まで僕とはレベルが全然違うんです。」

「まあ、そうかもしれないな。」

「だから、心配で心配でたまらないんです。」

いつの日か、アスカがそれに気付いて僕を見捨てるんじゃないかって。

その前に僕はアスカに見捨てられない程度の男にはなりたいて、そう思うんです。」

でも、どうしたらいいのか全然分からないんです。
ジャッジマンさん、何か良い方法はないんですか。」

「うーん、何て言うか。お前は何か勘違いをしているぞ。」

「えっ、どういうことですか。」

「お前は、自分で思っているほどレベルの低い男じゃないってことだ。」

いいか、普通はお前の年で使徒なんてバケモノと戦えるなんて、生半可なことじゃあ出来やしない。

もちろん、大人だってそうだ。それだけ一つとっても、お前は並の男以下じゃあないって言える。

それは、俺が保証する。」

「ありがとうございます。でも、まだまだアスカと釣り合うにはほど遠いんです。」

だから、僕はもっともっと自分を磨く必要があるんです。でも、どうしたらいいのか分からないんです。」

「あのなあ。ちょっと気負い過ぎだぞ。お前は、世界を破滅から救った英雄なんだ。」

それだけでも彼女と釣り合うには十分じゃないか。そうは思わないか?」

「そうでしょうか。」

僕からエヴァのパイロットであることを取ったら、何も良いところはないと思うんですが。」

「じゃあ、俺から傭兵であることを取ったら、一体何が残るんだ。」

「そ、それは…。僕はジャッジマンさんのことを良く知らないのだから…」

「俺もお前と同じだ。傭兵であることを取ったら、何も残らん。だがな、何で取る必要がある？そうは思わないか。」

「そ、それは…」

「人間から長所を取ったら、欠点だけが残る。そんなのは、当たり前だろ。」

そんなことを考えて、一体何になる。あんまり後ろ向きに考えるなよ。

くだらんことを考える暇があるなら、その時間を努力することに使え。結果は自ずと出るはずだ。」

「確かにそうかもしれませんが…」

「いいか。お前は使徒と戦った。ゼーレとも戦った。戦場にも丸腰で行ったじゃないか。」

お前は、自分で思っているよりも勇気がある。根性もある。信義に厚い。

俺は、エヴァのパイロットであることを差し引いても、お前がなかなか見どころのある奴だと思っている。

お前に悪いところがあるとすれば、それは後ろ向きな考えをすることと、自分に自信を持たないことだ。」

「そうですか…」

「いいか。さっきも言ったが、お前は世界を破滅から救った英雄な

んだ。

そのお前が何も良いところがないと言う。じゃあ、お前以外の男は一体なんなんだ。

いいか、英雄と一般人のどっちが下だと思う？」

「そ、それは…。」

(一般人ですよ、きつと…。)

そう言おうとしたシンジだったが、結局言葉にはしなかった。そのため、ジャツジマンは続けて話した。

「もちろん、一般人だ。

じゃあ、お前が何も良いところがないなら、さらに下の一般人は、一体何なんだという話になる。

そうは思わないのか。」

「そ、そんな…。」

「そうだ。お前は自分のことを卑下しているようできて、実際は他人のことを更に見下したようなことを言っているんだ。それが分からないのか？」

「はい…。そう言われると、何となく分かるような気がします。」

(そういや、アスカにも同じようなことを言われたっけ。)

シンジは、以前アスカに同じようなことを言われたのを思い出した。

「分かるなら、そんなくだらん考えは捨てる。

いつまでもそんな考えだと、それこそ彼女に見捨てられるぞ。いいのか？」

(そっ、そんなんっ！)

「い、嫌ですっ！」

シンジは、思わず大声で叫んだ。アスカに捨てられるなんて、考えたくもないことだった。

「お前は、自分の言葉の意味を良く考えろ。もう少し考えてからものを言え。」

俺だから忠告するが、お前のことを良く思わない人間だったら、何も言わないぞ。

馬鹿なことを考える奴だと思つか、思い上がった奴だと思つか、いずれにせよ良い事は何も無い。」

「はい、分かりました。気をつけます。ありがとうございました。」

「まあ、お前が不安になるのも分かる。あんな、綺麗なフィアンセだものな。」

人には取られたくないって思うのも無理はないな。」

「そうですよね。分かってくれましたか。」

「ああ。だが、安心しろ。彼女は、まず間違いなくお前のことを心から好きか、愛しているはずだ。」

「何でそう思うんですか。」

「お前は、以前高校生に襲われたことがあっただろう。その時彼女がどうしたのか、聞いているか？」

「ええ。戦ったけれど、多勢に無勢。窮地に陥ったところを、加持さんに助けられたって聞いています。」

「それは嘘だ。」

「えっ？」

(嘘って…。どういうことなんだろう?)

シンジは、少なからず動揺した。

「彼女はな、高校生達を全員叩きのめしたんだ。それも、鬼のような顔をしてな。」

俺が断言する。彼女は、お前のことが好きだ。でなければ、あんなに怒るはずがない。」

「そ、それって本当ですか?でも、それじゃあ何でアスカは僕を騙したんですか。」

(そ、そんな…。ジャッジマンさんは、僕に嘘をついているの?それとも、アスカが嘘をついたの?)

シンジは、どちらの言うことを信じてよいのか分からなかった。

「お前は、大怪我をしたんだろう。」

その時に、彼女が暴力を振るう女の子だって知ったら、あんまりいい気持ちにはならないだろう。」

下手をすると、彼女を避けるようになるかもしれない。」

「そ、そんなことはあり得ませんっ!」

シンジは興奮して大声をあげていた。

「だが、彼女にはそんなことは分からない。だから、嘘をついた。そう考えるのが妥当じゃないかな。」

「でも、何故？」

「そんなことも分からないのか。お前に好かれていたからだろうに。」

それが、女心っていうもんだろつが。」

「そつ、それは本当ですか。」

「良く考えれば分かるだろう。逆の立場になって考える。」

「は、はい。」

(でも、本当かなあ？本当なら嬉しいんだけど。)
少し疑いつつも、シンジはちよつぴり良い気分になった。

「それにだ。お前は彼女が素晴らしい女の子だと言ったよな。それは外見のことか？それとも中身のことか？」

「もちろん、中身です。」

「だったら、そんな素晴らしい女の子が、他に良い男が現れたくらいで、お前を捨てるか？」

そんなことは、あり得ないだろう。そつは思わないか。」

「は、はい。そうですね。」

（そ、そうか。そうかもしれない。アスカは、人のことを裏切るようなことはしないもの。）

加持さんも、マリアさんもそう言っていたっけ。）

シンジは、リョウジやマリアから、昔のアスカの話聞いたことがある。

アスカはドイツにいた頃から人を裏切るような人は嫌いだったと言
うのだ。

もちろん、アスカは人を裏切るような真似は滅多にしないとい
うことだった。

「いいか、自分に自信を持て。そして、彼女を信じるんだ。

彼女は決して人を裏切らない。お前と違ってな。」

「そ、それは、どういうことですか？」

「婚約者に内緒で逢い引きをして、裸の女の子と抱き合ったことが
ある裏切り者は誰かな？」

俺が知らないとも思っているのか？」

「あはははっ。」

（げっ。何で知っているんだろっ。）

シンジは、笑ってごまかすしかなかった。

「そうか、そうだね。僕ったら、一体何を考えていたんだろっ。

アスカが僕のことを裏切る訳がないよね。そんな風に考えたら、ア

スカに悪いや。

本当に僕ってどうしようもないよね。おっと、この考え方も悪いんだっけ。

スカにも言われているのに、なかなか直らないや。」

シンジは、ジャッジマンと別れて、ネルフ内をぶらぶらしていたと、そこに携帯電話に電話がかかってきた。

「おや、加持さんか。どうしたんだろう。」

シンジがボタンを押すと、リョウジの声が聞こえてきた。

「おい、シンジ君。スカの居場所を知らないか。」

「いえ、知りませんが。アスカルームじゃないんですか。」

「ああ、居場所が分からないんだ。しかも、何者かがスカを襲おうとしているらしい。」

だから、今は手を尽くしてスカを探しているんだ。」

「本当ですか？分かりました。僕もスカを探してみます。」

そう言って、シンジは電話を切った。だが…。

（待てよ。ネルフ内でのスカのガードは、ミアさんがしているんだっけ。）

シンジは、以前スカから教わったことを思い出していた。

ミアは、サグという組織に属しているのだが、エヴァの予備役パ

イロツトでありながら、アスカの護衛役でもある。
このため、学校内とネルフ内では必ずアスカから少し離れたところにいる。

今も、アスカの身に何かあれば、体を張って助けるべく待機しているはずである。
ミリアから少し離れたところには、これまたサグのメンバーが3人待機しているはずだ。

普段のアスカのガードは、ワイルドウルフが2人、レッドアタツカーズが2人、
合わせて通常4人いるが、学校とネルフでは危険はあまりないため、それらのガードはつかない。
このため、学校内ではミリアのみがアスカのガード役であるが、ネルフ内ではそれに加えて3人のアスカ専用のガードがついているのだ。

だから、アスカを襲撃しようと思う者がいても、事実上不可能に近いのだ。
しかも、このことは一部の人間しか知らず、リョウジでさえも知らされていないはずなのだ。

「一応、ミリアさんに連絡してみよう」と。
シンジは、ミリアの携帯電話に連絡を入れた。すると…。

「ミリアだ。何の用だ。」

いつもと変わらない、ミリアの感情を感じさせない無機質声が耳に入った。

ミリアが出たということは、アスカが無事である可能性が高い。シンジは、内心ほっとした。

「ああ、ミリアさん。アスカに用があるんだけど、アスカは側にいる？」

「ああ、近くにいます。」

「アスカと連絡を取りたいんだけど。今、アスカは電話に出られないかなあ。」

「今は駄目だ。」

「そうか。実は、葛城諜報部長がアスカの居場所を探しているんだけど、至急連絡をとってもらいたいんだ。」

「分かった。速やかに伝えよう。」

ミリアはそう言って電話を切った。

「はあっ、ミリアさんて話しづらいなあ。」

シンジはため息をついた。だが、ものの10分もしないうちにアスカから連絡が入った。

「何よ、シンジ。」

「ああ、アスカ。加持さんが探していたんだけど、連絡してくれた。」

「ええ、つい今し方連絡したわよ。」

「なんだか、加持さん。かなりアスカのことを心配していたよ。」

「何言ってるのよ。アタシなら大丈夫よ。アンタと違うわよ。」

「はははっ、そうだよな。」

「まあ、いいわ。シンジ、先にアタシの部屋に行って、待っててよ。」

アタシの部屋とは、通称アスカルーム。技術部副部長室のことである。

「ああ、いいよ。アスカも早く来てよね。」

「はいはい、りょくかい。」

こうして、シンジはアスカルームへと向かったのである。

第76話 悩み（後書き）

ちょっと（かなりかも）分かりにくいので、時系列を整理しました。

16:00 シンジがジャツジマンに悩みを相談する。（76話）

17:00 アスカがザナドに呼び出される。（75話補完）

17:05 ナスターシャ達が、シンジを呼び出す。（75話）

18:00 ミサトがリョウジに緊急の呼び出しをかける。（75話）

18:02 リョウジがシンジに電話をかける。（76話）

18:05 シンジがミアリアに電話をかける。（76話）

18:10 アスカがシンジに電話をかける。（76話）

以上のお話には、いくつかの矛盾があります。その矛盾を解消するのは、次話以降で。

第76話補完 新たな下僕

新世紀エヴァンゲリオン 蒼い瞳のフィアンセス

第76話補完 新たな下僕

シンジが何故、何事も無かったのか。
それを知るためには、ナスターシャ達がシンジを襲った時の、その後を語らなければならない…。

「シンジ様。さあ、私と一つになりましょうよ。」

ナスターシャはそう言いながら、シンジのブリーフに手をかけた。
だが…。

「くっくっくっ…。」

どこからともなく、何者かの笑い声がした。

「誰っ!」

「どこにいるのっ!」

「なによっ!」

ナスターシャ達は、辺りを見渡した。

すると、パーテーシヨンのドアを開けて、思いがけない人物が入っ

てきた。

「なっ！アスカさんっ！」

「どうしてここにっ！」

「うっそっ！」

ナスターシャ達は、次々と驚きの声をあげた。

今頃は、仲間の男達に襲われているはずのアスカが姿を現したのだから無理も無いが。

「ふんっ！アタシが誰の奴隷になるですって！」

黙って聞いてりゃあ、好き勝手言いやがって！ふざけんじゃないわよっ！」

ギン！という音がしそうなほど、アスカは3人組を睨み付けた。だが、3人組の中で一番強気なナスターシャが反論した。

「あら、遅かったわね。愛しのシンジ様は、私達のものよ。証拠の写真もあるわ。

言っておくけど、カメラの中のデータを壊しても無駄よ。無線で別の場所に送ってあるもの。」

勝ち誇るナスターシャに、アスカは笑った。

「はんっ！アンタ、もうお芝居はいいわよ。」

「はあっ？何を言ってるの、アスカさん。」

ナスターシャ達は、首を傾げた。

「はははっ、そのシンジをもう一回見てみなさいよ。」

「……えっ!」「」

3人同時にシンジを見た…つもりだったが、そこにはシンジとは似ても似つかない、別の人物がいた。

「よっ、ジャネット。お久しぶり。」

「あ、あなたは、ケーシー。どうして、こんなところに…。」

ジャネットは腰を抜かさんほどに驚いた。

ケーシーは、日本行きのメンバーには選ばれず、今はアメリカ第3支部にいるはずだったからだ。

「そいつはね、レッドアタッカーズの中隊長なのよ。そしてね、変装のエキスパートでもあるの。」

だからね、シンジに変装して、アンタ達におびき出されたフリをして、魂胆を知ろうっていう計画だったのよ。」

それに、間抜けなアンタ達は、見事に引っかけたっていう訳よ。」

そう、レッドウルフは、アメリカ第3支部では、普段はケーシーと名乗っていた。

そのレッドウルフは、特に変装は人並み外れた能力を誇っていたのである。

それをジャツジマンから聞いていたアスカが、今回のこの作戦を思いついたのだ。

「そ、そんなあ。」

「シ、シンジ様じゃなかったなんて…。」

「パ、パイロットの座が遠のく…。」

3人とも、今まで乳繰り合っていた男が憧れのシンジではなかったと知って、呆然としてしまった。

「ふんっ！説教して許してあげようと思っていたけど、気が変わったわ。

アンタ達がアタシをどうしようと思っていたか、よく分かったわ。だから、同じ目に合わせてあげるわね。」

アスカが指をパチンと鳴らすと、ミア、アールコートに加えて、研修生達のクラスの担任である、メルフェイス先生とレイリィ先生が入ってきた。

いずれも、サグのメンバーである。

「こいつらの、ものすごく恥ずかしい写真を一杯撮ってよね。頼むわよっ！」

アスカはそう言つと、くるりと背を向けた。

「いやあ〜っ！許して〜っ！」

「ごめんなさい〜っ！」

「すみませんでした〜っ！もう、しませ〜んっ！」

3人組の泣き声が聞こえてきたが、アスカは振り返らずに立ち去った。

「ふう、シンジが引っかからなくて良かったわ。」

アスカは、会議室を出ると胸をなでおろした。
おそらく、シンジだったら簡単に落とされていただろう。替え玉作戦は大成功である。

「でも、さつきは本当に驚いたわね。」

アスカは、つい先程の出来事を思い出した。

(こいつらっ！アタシを毘にかけるなんて、許さないっ！)

会議室に閉じ込められたアスカは、即座に戦闘体勢に入ったが、ザナドは大いに慌てた。

「アスカ様！すみませんっ！」

「すみませんでしたっ！」

ザナド達は、自分達の頭を地面にこすりつけて、アスカに謝った。
おそらく、アスカに対して害意が無いことを示すためであろう。

(なっ、なんなのよっ！こいつらはっ！)

アスカは、ちょっと調子が狂ったが、それでも臨戦態勢を崩さなかった。

だが、ザナド達は何度も何度も謝り続けた。

「アスカ様！こんなところにお呼びして、すみませんでしたっ！」

「すみませんでしたっ！」

「お呼びしたのは、アスカ様にお願いがあるからですっ！」

「お願いがあるからですっ！」

「どうか、話を聞いて下さいっ！」

「聞いて下さいっ！」

（うん、どうしようか。）

アスカは少し悩んだ。畏のような気もするが、

サーシャからはザナドのことは色々の良い話を聞いていたため、と
りあえず話を聞いてみることにした。

残る二人の顔が見えなかったのが気がかりだったが、今のところは
どうも危険はなさそうなので、

距離をとって話を聞くことにした。

（まあ、アタシに何かしようっていう訳じゃないみたいだから、話
しだけでも聞いておこうかしら。）

「まあ、いいわ。聞いてあげる。」

「あっ、ありがとうございますっ！」

「ありがとうございますっ！」

「実は、僕達3人とも、アスカ様の大ファンなんです。それで、2
つお願いがあります。」

「お願い？」

「はい。僕達は、それぞれの国でアスカ様のファンクラブを結成しているんですが、アスカ様公認ということにしたいので、お許しをいただきたいのです。」

「へっ！ファンクラブですって！」

(うーん、そういや、ユキもそんなことを言ってたっけ。)

アスカは、数日前にユキが似たようなことを言っていたことを思い出した。

確か、アスカは承諾した記憶がある。だが、ユキの言っていたファンクラブは、メンバーは女性のみという話だった。

「どうでしょうか？」

「うーん、ちょっと考えちゃうわね。」

「そうですか…。では、アスカ様と碇シンジ君の交際を祝福するよくなファンクラブではどうでしょうか？」

「アタシとシンジの？そんなのに入る人がいるの？」

「はい、大勢います。」

(うーん、それならいいかなあ。シンジも反対しないだろうし。)

ユキがアスカのファンクラブを結成するという話を、最初にシンジのところを持っていったらしいのだが、シンジはメンバーに男が入っていることに難色を示したらしく、それで結局メンバーを女性のみにした経緯があるのだ。

だが、自分とシンジの交際を祝福するようなものならば、シンジは男が入っていても気にしないかもしれないと、アスカは考えた。

「うーん、シンジに相談してみる。シンジがいいなら、前向きに考えてもいいかなあ。」

「あつ、ありがとうございますっ!」

「ありがとうございますっ!」

「まだ決まった訳じゃないのよ。分かってるの?」

「いえ、即座に却下されなかつただけでも嬉しいです。では、次のお願いですが、僕達3人を、アスカ様の下僕にして下さいっ!」

「下僕にして下さいっ!」

「はあっ?」

アスカは、意外なお願いに驚いた。少し魅力を感じないわけでもないが、シンジが何ていうのかが気にかかる。

だが、男の下僕は相田だけではちょっと物足りないのも事実ではあるが。

そうやって考え込むアスカを見て、ザナドは次なる提案をした。

「アスカ様。机の上を見てください。」

「ん、どれどれ。」

アスカが机の上を見ると、ミニアルバムが数冊置いてあった。

「なによ、これ？」

「はい、僕達が本気であることを知っていたため、僕達の恥ずかしい写真を多数用意しました。

もし、僕達がアスカ様を裏切るようなことがありましたら、その写真をどうぞ公開してください。結構です。

1から5までありますが、5が一番恥ずかしい写真です。ですから、1から見てください。」

「ふうん、どれどれ。」

アスカは、アルバムを開いてみた。

「ぶっ！何よ、これっ！ぎゃはははっ！」

アスカは、その写真を見て大笑いした。

アスカの想像を絶するような恥ずかしい写真が、たくさん入っていたからだ。

普通の人なら、こんな恥ずかしい写真を公開されたくはないだろう。

それだけに、この3人が冗談や半端な気持ちではないことがうかがえた。

「でも、どうしてこんな写真なんかにしたのよ。もっとやりようがあったでしょうに。」

「はい、アスカ様のために命を懸けるとか、体に一生消えない傷を付けるとか、

色々考えたのですが、アスカ様が嫌がるかもしれないと思いついて、このような手段を選びました。

この方法なら、アスカ様が嫌がるならば、写真を捨てれば済む話ですし、

うまくいけば、アスカ様の笑い声が聞こえると思ったからです。」

「ふうん、少しは考えているんだ。さあて、どうしようかな。」

アスカは考えた。

(下僕が増えるのはいいいことかもね。

それに、裏切られたらこいつらの写真を公開すればいいし。でも、最初は様子見かしらね。)

アスカの頭の回転は早い。短時間で結論を出すと、口を開いた。

「すぐにOKという訳にはいかないわ。当分の間、相田の弟子になりなさい。」

それで働きが良ければ考えてやってもいいわ。」

「あっ、ありがとうございますっ!」

「「「ありがとうございますっ!」」」

「僕達、アスカ様の下僕です。何でも言う通りにいたしますっ!」

「「「いたしますっ!」」」

「何でも言いつけて下さいっ!」

「「「言いつけて下さいっ!」」」

「分かったから、顔を上げなさいよ。」

そう、3人ともずっと頭を床にこすりつけていたのだ。

「「「はいっ!」」」

だが、そのうちの一人を見て驚いた。

「アンタ、テリーじゃないのよっ!」

それを聞いたテリーは、バツの悪そうな顔をした。

「すみませんでした。アスカ様を慕うあまり、余計なことをしてしまつて。」

でも、心を入れ換えて頑張りますので、お許し下さい。」

そう言つて、テリーは深々と頭を下げた。

「「「じゃあ、聞くけど、なんでマナなんて利用したのよ。」」」

「はあ、マナちゃんの話の聞くかぎりでは、碓君は浮気性で、アスカ様にはふさわしくないと思ったんです。

それに、アスカ様は碓君のことを単なる同居人だと言っていたという話だったので、

まさか本当に好きだったとは思わなかったんです。」

「うっ。」

アスカは返答に詰まった。

シンジのことが好きではないとは言えないし、さりとて、ここで反論しないと、

アスカがシンジのことを好きだという話が広まる可能性もある。

「テリー、言っておくけど、アタシが誰を好きかなんて話は、金輪際しないこと、絶対にね。分かった？」

「……はいっ!」「」「」

3人の少年達は、声を揃えた。

「あっ、そうだ。隣の部屋に、アスカ様を襲おうとしていた奴らを縛って捕まえてあるんですが、どうしましょうか。」

「好きにしていいわ。」

「分かりました。」

そこに、アールコートからの連絡が入り、ナスターシャ達がシンジに変装したレッドウルフを呼び出したことを知った。

「じゃあ、アタシはもう行くから。後は、相田にちゃんとあいさつして、弟子入りするのよ、分かった？」

「……はいっ！」「……」

こうして、一件落着となった。だが、アスカが去った後…。

「やったっ！上手くいったぜ！」

「うわあ〜いつ！やったなっ！」

「大成功だっ！」

「……でも、アスカちゃんって、本当にかっわいくなっ！」「……」

3人の少年達は浮かれて喜んでいた。

一方、部屋を出たアスカは、ミリアに呼び止められた。

「ああ、ミリア。お役目ご苦労さん。で、何の用なの？」

「ああ、先程から葛城諜報部長達が、惣流さんの居場所を必死に探しているようだ。」

それで、教えてもいいかどうかを確認したい。」

「ああ、そういうことなら、アタシが連絡するわ。」

アスカは携帯電話を取り出して、リョウジと連絡をとった。

「ああ、加持さん。アタシよ、アスカ。えっ、アタシを狙っている奴らがいるって？」

「ああ、大丈夫よ。撃退したから、心配しないで。」

電話の向こうで、リョウジが安堵の声をあげるのを聞いて、アスカはなんだか嬉しい気分になった。

「さて、アンタ達。十分反省したかしら。」

「はい…。」

翌日、アスカはナスターシャ達を呼び出して説教をしようとした。だが、ナスターシャ達は、3人とも目に涙を浮かべている。

「ん？どうしたのよ、アールコート。」

アスカは、3人組を連れてきたアールコートに尋ねた。

「昨日は、かなり凄い写真を撮られていましたから…。」

「ふん、そうなんだ。ちょっと見せてよ。」

「はい。1から10まであって、10が一番凄いんですが。」

「じゃあ、1を見せて。」

アスカが見てみると、1でも超恥ずかしい写真が満載だった。

「はっつ、これは凄すぎるわねえ。ちょっと公開するのはためらっちゃうわねえ。」

「お願いします。そんな写真、誰にも見せないで下さい。」

「もう2度とあんなことはしませんから、許して下さい。」

「反省してます。本当にすみませんでした。」

3人とも、涙ながらに謝った。深々と頭を下げながら。

「まあ、いいわ。で、次はと。」

2と書かれたミニアルバムを見たが、さっきよりもさらに恥ずかしい写真になっていた。

「ねえ、アールコート。これって、誰が考えたの？」

「それは、先生達です。」

「そうか、大人のセンスっていう訳ね。」

アスカは次々に写真を見たが、3までで止めてしまった。

アスカの感覚では、ついていけないレベルになっていたからだ。

「そうだ、アンタ達、本当に反省してる？」

「はい。」

「じゃあ、ごうじましようか。3人とも、ヌード写真集を相田に作ってもらうこと。」

一番出来の良い写真集を作った人は、許してあげるわ。

そして、そうねえ。この、10と書いてある写真は返してあげてね。」

「「「ええっ!」「」」

「嫌ならいいわよ。どうするの?」

「「「分かりました...。」「」」

ナスターシャ達は、ガツクリと肩を落とした。

全部返して欲しいのが本音だが、今はそんなことを言える雰囲気ではないことは分かっているらしい。

「ああ、それと、アンタ達。今付き合っている男はいるの?」

「ええ、ドイツにいます。」

ナスターシャは怯えながら言った。すると、アスカの目が少しつり上がった。

それを見たためか、後の二人も怯えながら小さな声で言った。

「いません。」

とソフィー!。」

「私もいません。」

とジャンネット。」

「ふうん、じゃあ、ナスターシャ以外の二人は、もう1冊作ること。それは、男の子と絡むシーンだけにすること。付き合っている男がいないならいいわよね。」

「「えっつ！」」

途端にソフィーとジャネットが大声を出す。

「実は、私は付き合っている人がいるんです。」

「私もです。」

ソフィーとジャネットが言ったが、アスカは顔をしかめた。

(こいつら、この期に及んで嘘を言うなんて。まだ反省してないっていう訳ね。)

「それ以上言ったら、3人以上の男と絡むこと、いいわね。」

それを聞いたソフィーとジャネットは、うつむいて沈黙するしかなかった。

第76話補完 新たな下僕（後書き）

シンジの偽物を使って、ナスターシャ達の企みを未然に防いだアスカです。そう、シン

ジは、ナスターシャ達に呼び出されてはいなかったのです。代わりに、シンジに変装した

レッドウルフが呼び出されていたっていう訳なんです。

アスカにかかったら、研修生達は赤子の手をひねるようなもの。それに気付かなかった

ナスターシャ達は、反対に死ぬほど恥ずかしい目に遭いました。イライザは、なぜか上手

く切り抜けたようです。

第76話補完その2 マナの涙

第76話補完その2 マナの涙

「え〜っ！シンジが研修生達に襲われそうになったって〜っ！どう
いうことなのよっ！」

「ま、待ってよ、マナ。僕だっではっきりとした情報は掴んでいな
いんだから。」

首を絞められて、ケイタは苦しそうである。

「襲われそうになったって言っても、女の子に色仕掛けで迫られた
らしいんだ。」

「ぬあんですって！ちょっと、どういうことなのよっ！！
誰よ、そういう卑怯な真似をする奴はっ！！！」

マナだっつて、同じことをしたのにと、うっかり口を滑らせそうにな
って、寸前でケイタは堪えた。

このため、危うく命拾いをする。そして、知っている限りの情報を
話した。

「あ〜あ、やっぱりシンジったら、人気が高いんだ。

アスカだけじゃなくって、他の女の子からも狙われているなんて。

アスカだっつて正面切つては戦えないけど、他の研修生の女の子達だ
っつて、

みんなスタイルはいいし、美人も多いし、勝負にならないよお。どうすればいいのよ。」

マナは、いずれアスカがシンジを見限るものと考え、その時に全てを賭けるつもりでいた。アスカは、明朗快活、スポーツ万能、容姿端麗、頭脳明晰で、そのうえ資産家らしい。さらにはネルフの広報部でチーフとして一人前以上に働いていると聞いており、世界規模でのスーパーアイドルにもなっている。あらゆる面で、マナはかなわないと考えていた。

だが、長所と短所は紙一重。そんなスーパー美人のアイドルを世間がほっておくわけがない。きつと、世界中の素晴らしい紳士が、アスカを求めてやってくるはずなのだ。

億万長者も足元に及ばないような資産家、超一流の世界的なスポーツ選手、大国の若手の有能な政治家、一国の王子や貴族、そういったマナから見れば雲の上の人達が、アスカにはふさわしいと考えていた。

そんな人達と比べると、シンジはさすがに見劣りするのは間違いない。

あと5年もすれば、アスカはお婿さん候補がよりどりみどり。

いずれ、シンジよりも礼儀正しく性格も良く、洗練された品性を持つ紳士達とシンジは見比べられることになる。

しよせん、アスカがシンジとくつついているのは、周りにシンジよりも良い男がいないだけ。シンジよりも素敵な紳士が大勢現れれば、アスカもシンジを見限るものとマナは考えていた。

だが…。

「もうっ、これじゃあアスカがシンジを見限っても、私にチャンスはめぐって来ないじゃない。どうしよう……。うっ、うっうっ……。」

ついにマナは泣き出してしまったが、ケイタにはどうすることも出来なかった。

第77話 公認ファンクラブ

第77話 公認ファンクラブ

「はい、休憩！みんな、少し休もう！」

ケンスケが声をかけると、場の雰囲気は緩んだ。

「はい、タオルをどうぞ、ジャネットさん。」

ユキが裸のジャネットに大きめのタオルを差し出した。

「ありがとう、森川さん。」

ジャネットは、恥ずかしそうにタオルを受け取った。

「ニールさんもどうぞ。」

これまた裸のニールに、ユキはタオルを渡した。

「ああ、ありがとう。」

ニールはにっこり笑って礼を言った。

そう、今日はジャネットのヌード写真集の撮影を行っているのだった。

ケンスケが撮影するのだが、当然助手はユキである。

ケンスケが裸の女の子の撮影をするなんて、ユキは当然面白くないが、
アスカからも頼まれているので渋々手伝うという感じである。

「冷たいものでもどうかしら。アイスコーヒーを用意したわ。」

タイミング良く、お盆に人数分のグラスを載せて、アニーがやって来た。

「あつ、アニーさん。ありがとうございます。私も運びます。」

ユキが小走りに近付く。

「ええ、ありがとう。」

そうして二人で飲み物をみんなに配った。

「はあつ、アニーにはやられたわね。まさか、イライザがアニーに言うとはね。」

おかげで作戦は大失敗。私はこんな目にあつし、いやになっちゃうわ。」

アニーを見たジャネットは、そう言ってぼやいた。

ジャネットは、襲撃作戦が失敗したのは、アニーから情報がもれたからだと考えていたからだ。

情報がもれていなくても、アスカの護衛のミリアやサグのメンバーが常時アスカをガードしているのだから、

襲撃作戦が成功するはずはないのだが、そんなことはジャネットには分からない。

すっかりアニーのせいだと思っていた。

「イライザが言わなくても、テリーが私に言ったはずよ。

大体、アスカさんを襲ったりするなんて、狂気の沙汰よ。

もし、このことが碇君の耳に入ったら、大変なことになるわよ。

イライザなんて、アスカさんの悪口を言っただけで引っぱたかれたんだから。」

「そうねえ。そう考えると、失敗して良かったかもね。」

ジャネットは、ため息をつく。

「そうそう。俺もこんな役得が回ってきたしな。」

ニールはそう言って笑う。ニールの手は、良く見るとジャネットのお尻を撫で回している。それも、アニーには見えないように。

「そうよ。それに、そんなことをしたら私が許さないわよ。」

ジャネットの苦境に気付かぬアニーは、そう言って胸を張る。

「何を話しているんですか。」

そこにユキがやって来た。

ユキはアスカ襲撃未遂事件のことは知らなかったため、ジャネットは意図的に話題を変えた。

ニールも、さっと手を引っ込めた。

「しっかし、アニーがイギリスの惣流アスカファンクラブの会長とはねえ。驚いたわよ。」

「そりゃあそうよ。イライザにだって、内緒にしていたんだもの。」

「でも、驚きました。メールでのやりとりはしていたんですが、アニーさんが会長だって知った時は本当にびっくりしましたよ。」

ユキも驚きの表情だった。

「それで、テリーがアメリカ、ザナドがエジプトで、それぞれファンクラブの会長とはね。」

恐れ入ったわよ。そこでつながっていた訳ね。」

ジャネットがため息まじりに言ったが、アニーはやっぱり否定した。

「うーん、少し違うわね。イライザとニールはいとこで、私とテリーはその線で知り合いなの。」

ザナドとは、ファンクラブの会長同士だっていうことが分かったからで、こっちに来てからの付き合いなのよ。」

ここで解説しよう。今回のアスカ襲撃作戦は、ナスターシャら3人組が、

研修生の男子を3〜4人集めてアスカを襲わせようとしたもので、ナスターシャはイライザに目を付けてニールやテリーを引き込もうと考えていた。

だが、イライザがアニーに相談した時点で、アニーに猛反対され、『シンジにばれたら、絶対に嫌われる。』という言葉が決め手となって、

結局イライザは手を引くことにして、ニール達にも声はかけなかった。

それでアニーがテリーやザナドに襲撃作戦の阻止を相談したのだ。

3人とともに、自分の国では惣流アスカファンクラブの会長であり、ハンドルネームではメールのやりとりは結構している仲だった。

それが、日本の第3新東京市に行くということをお互いに話したことから、お互いの素性が分かったのである。

そして、日本に来てからも、みんなには内緒で、お互いに集めたアスカの情報を交換するなどして、連絡を取り合っていた仲という訳だったのだ。

アニーの相談に対し、サーシャからケンスケのことを聞いていたザナドの発案で、

襲撃作戦を阻止すると同時に、アスカの下僕にしてもらうことにしたのである。

結果は、アスカ襲撃作戦はザナド達によって阻止され、実行に移そうとした2人の研修生達は、揃って帰国させられた。

万ーシンジに知られて、シンジが暴走しては困ると考えたアスカの判断である。

余談だが、ロシア支部のエカテリーナ、ドイツ支部のハンナ、オーストラリア支部のジュリアの3人組も同じようにレッドウルフが変装したシンジに引っかかっていた。

ブラジル支部のエドナ、インドネシア支部のクリスティン、中国支部のフェイの3人組も、同様に、まんまと引っかかった。

だが、特に汚い手段を用いた訳では無かったため、説教されただけで許された。

なお、イギリス支部のイライザ達だけは、結局色仕掛けではなく、シンジの家来になりたいと頭を下げただけだった。

このため、特にお咎めを受けることは無かった。

こうして、シンジの与り知らぬところで、シンジとアスカの襲撃作戦はことごとく失敗した。

そして、アスカの新たな下僕が3人生まれたのである。

これによって、研修生達の勢力図が大きく変わることになった。

さて、黒幕のナスターシャやジャネット達は、恥ずかしい写真をたくさん撮られたうえに、ケンスケの手によるヌード写真集を作るはめになった。

だが、今日撮影されるヌード写真の一部は、ホームページ上で後日公開される予定である。

もともと、今後のアスカに対するナスターシャ達の態度によっては、公開時期が遅れたり、比較のおとなしめの写真が使われる可能性が高まるのだ。

例えば、背中からのショットだけになるといったような具合に。

これで、事実上ジャネット達はアスカの下僕状態になった。

アスカに対しては、一切の反論や口答えが出来なくなってしまうのだ。

もし、アスカに少しでも反抗する気配を見せたら、

恥ずかしい写真がネルフやアスカファンクラブのホームページに載

って、

死ぬほど恥ずかしい思いをすることになるからだ。

とは言っても、ジャネット達が国へ強制送還されることを免れていたのには理由がある。

もちろん、短い期間とはいえ研修を受けた成果を無にしたくないという事情もあつたのだが、

アスカの意のままに動く研修生を増やすという意図もあつたのだ。

これは、アスカの遠大な計画を実施するための布石なのだが、そのことに気付く者は誰もいなかった。

ジャネット達、いや、シンジでさえもそのことに気付くのは、10年以上後のこと。

そう、2032年になってからのことである。

「そうだ、ユキさん。相田君と惣流さんのファンクラブの話をしみましょうよ。」

「ええ、いいわ。」

話が一段落すると、アニーはユキに声をかけた。そして、すぐるよきな目をして、

心の中で『行かないでっつ！』と大声で叫んでいるジャネットを置いて、二人はケンスケのもとへと向かった。

これは、アスカを襲おうとしたジャネットに対するアニーのささやかな嫌がらせであつた。

「へっつ、アニーは気が利くなあ。さすが、イライザの友達だけ。」

と言いつつ、ニールがすり寄ってきてジャネットの体を触る。

「うーん、極楽、極楽。」

一方のジャネットは、されるがままである。ここでニールにひじ鉄でも食らわせてやりたいが、そうなると別の相手を探さなくてはならず、その相手がもつというらしい男ではないという保証は無いからだ。

しかも、ユキやケンスケには本当の事は言えないので、一緒に写真を撮るのは恋人同士だからと嘘をついている。

その嘘がばれて困るのはニールではなく、ジャネットなのである。だから、ジャネットはいやらしいことをされても、反抗出来ないのだ。

だが、さすがのニールも、近くに女の子がいればジャネットにいやらしいことは出来ないが、離れてしまえばその歯止めが無くなり、いやらしいことをし放題となる。

アニーはそれを知っているからこそユキをジャネットから引き離したのである。

「あつ、ジャネットさん達、いちやいちゃしてますねえ。」

「邪魔しちゃ悪いから、しばらくは二人きりにしてあげましょっよ。」

「ええ、そうですね。」

抱き合つて熱烈なキスをしている二人を見て、ユキの顔は赤くなっていたが、アニーはクスクスと笑っていた。

だが10分後、ジャネットの顔が泣きそうになったのを見て、さすがにアニーも可哀相にと思つて、ジャネットのもとへと戻つていったのである。

戻つたアニーに、ジャネットは嬉し涙を流さんばかりであつた。

数日後、ユキとアニーが揃つてアスカのところへとやつて来た。用件は、惣流アスカファンクラブの公認に関することである。このため、サーシャもザナドの代理としてやつて来ていた。

あんまり知らない男が来ると、シンジの機嫌が目に見えて悪くなるため、ザナドとテリーは来ていない。それぞれ、サーシャとアニーに全権委任である。

「あのお、惣流さん。いかがですか。」

一通りアスカとシンジに説明した後で、ユキが問いかけた。

「そうねえ、大体こんなもんかしら。アタシはいいわよ。シンジはどう？」

「そうだね。まあ、いいかなあ。」
（）と言つるか、とっても嬉しいな。（）

シンジはニコニコしている。自分とアスカの仲を応援するファンク

ラブと知って、物凄く機嫌がいいのだ。

「それじゃあ、世界初の惣流さん公認ファンクラブの誕生ですね。本部は日本で、会長は私、森川ユキが務めさせていただきます。それで、ヨーロッパ支部長がアニーさんということ。但し、メンバーは女性のみになります。また、略称はA・F・Cです。」

それから、惣流さんと碇君を応援する会も、A・F・Cの下部組織として発足します。」

これまた本部は日本で、会長は相田君、副会長は私が。アメリカ支部長がテリー君、アジア・アフリカ支部長がザナド君、ヨーロッパ支部長がイライザさんですね。」

「うーん、そこは気に入らないわねえ。」

アスカの顔が少し歪む。そこに、慌てたアニーが必死にとりなす。

「ほ、本人も反省していますから、許してあげてください。」

アニーはそう言いながら、ぺこぺこ頭を何度も下げた。

「ねえ、アスカ。許してあげたら。本人も反省しているんですよ。」

サーシャも口添えする。

「そうねえ、どうしようかなあ。シンジはどう思う。」

「そうだね、僕もあの人は気に入らないな。反省したと言っても、口だけかもしれないしね。」

「そ、そんなあ〜。」

アニーは泣きそうになった。

「まあ、この件は保留にしましょう。今すぐに決めなくてもいいし。」

「

アスカがそう言うと、アニーがアスカの袖を引っ張った。

「あの、ちょっとお話が。」

「何よ。ここでは言えないの?」

「ええ、みんなには聞かれたくないので。」

「アタシはここを動くのは嫌よ。」

「じゃあ、ちょっと聞いてくださいね。」

アニーは、アスカの耳元でみんなに聞こえないように話をした。

それによると、イライザもアスカの下僕になるとのことで、ザナド達と同じく恥ずかしい写真を撮ったらしい。

「ふうん、ちょっと見せてみなさいよ。」

「これです。」

アニーの差し出したミニアルバムには、確かに他人には見せられないような

イライザの恥ずかしい写真がたくさんあった。

「ふうん、少しは反省しているようね。分かったわ。許してあげる。シンジもいいわね。」

「うん、アスカがそう言うのなら。」

「あ、ありがとうございます。」

アニーは、ほっと胸をなでおろした。

「でも、それって何なの。見せてよ。」

シンジは気になって覗いたが、アスカは慌ててその写真を隠した。

（ちえっ、ケチ。）

シンジは不満だったが、さすがにアスカにはそんなことは言えない。

「じゃ、じゃあ、次の話に。」

会の略称は、ラングレー・アスカ、アンド、シンジ、ファン、クラブ、

それぞれの頭文字を取って、L・A・S・F・C 又はL・A・S
にします。それでいいですね。」

「いいんじゃない。」

アスカがGOサインを出し、シンジが頷いた。これで決まりである。

「それでは、惣流さん。ネルフのホームページからのリンクをお願い

いします。」

「ええ、いいわ。」

「アニーさん、サーシャさん、各支部のホームページの管理運営をお願いします。」

「任せておいて。」

「こつちも準備万端よ。」

かくして、アスカ公認のアスカファンクラブと、シンジも公認のL・A・Sファンクラブが誕生したのである。

むろん、L・A・Sの本当の意味は違う。

ラブラブ・アスカ（アンド）・シンジの頭文字をとったものなのだ。だが、A・A・S、アスカ・アンド・シンジ、というのでは語呂が悪いと、みんなでアスカを騙したのである。

本当の意味を教えてもらったシンジは、諸手を挙げて賛成したのは言うまでもない。

第77話 公認ファンクラブ（後書き）

とうとう、アスカ公認のL・A・Sファンクラブが誕生しました。シンジは、内心大喜びでしよう。

（参考）チルドレン一覧

は、予備役 は、研修生 ・は、新

研修生

本部

パイロットリーダー（架空の人物、正体はアスカ）

？綾波レイ（行方不明）？欠番、？碓シンジ？鈴原トウジ？渚カヲル
アスカ 相田ケンスケ

ドイツ支部（Eva配備予定）

マリア・カスタード：エヴァンゲリオン操縦者候補生。市立第壱
中学3年A組に在籍する。蒼い瞳に青い髪の白人。体型は標準並。
大人しそうな感じで、決して美人とは言えないが、人懐こい笑顔が
印象のちよつと可愛い雰囲気少女だ。傭兵部隊ワイルドウルフに
所属。ミラクル5の一員でもある。

・ハンス

・男

・ハンナ：シンジに色仕掛けをしようとして失敗。

ドイツ第2支部

・ウイチタ：傭兵部隊ワイルドウルフに所属。アスカが小学生の頃
からの知り合い。

・男：帰国させられる。

・ナスターシャ：シンジに色仕掛けをしようとして失敗。アスカの下僕に。

イギリス支部

・イライザ（イライザ・ラガン）：シンジの家来にしてもらおうよう頼むが、失敗。だが、アニーの後押しで、L・A・S・F・Cのヨローツパ支部長になる。

・トム

・アニー（アニー・ブライトン）

中国支部（Eva配備予定）

リン・ミンメイ：ミラクル5の一員。歌が好き。紺色に近い長い髪が印象的な美少女。

・ジャッキー

・フェイ：シンジに色仕掛けをしようとして失敗。

・男

フランス支部

ハウレーン・プロヴァンス：エヴァンゲリオン操縦者候補生。市立第壹中学3年A組に在籍する。蒼い瞳にピンクの髪、長身でスリムな白人の少女。ミリアほどではないが目付きが鋭い。美人度はミリアよりも劣るが格好良いお姉様という感じ。フランスの傭兵部隊、ヴァンテアンに所属。

・ジャン

・ソフィー：シンジに色仕掛けをしようとして失敗。アスカの下僕に。

・男：帰国させられる。

ロシア支部

・エカテリーナ：シンジに色仕掛けをしようとして失敗。

・男

・男

アメリカ支部（Eva配備予定）

アリオス・テオマン：エヴァンゲリオン操縦者候補生。市立第壹

中学3年A組に在籍する。蒼い瞳で茶髪、長身だが体格のがつちりとした白人の少年。ハキハキとした感じで、好感が持てる。ジャツジマンの部下でトウジのガード役。

アールコート・マリウス：エヴァンゲリオン操縦者候補生。3年B組に在籍する。割ときゃしゃな感じの少女で、蒼い瞳、紫色の髪をした白人の少女。ジャツジマンの部下。

・ポール
・女

アメリカ第3支部

キャシー：エヴァンゲリオン操縦者候補生。市立第壱中学3年A組に在籍する。ドイツ系アメリカ人で、蒼い瞳、短い金髪、スリムな白人の少女。活発な感じで、大きなメガネをかけており、美人とは言えないが、スタイルの良さで優しい感じの笑顔がそれをカバーして余りある。アスカの髪を短くして、金髪に染めて、メガネをかけたような感じ。ジャツジマンと同じ組織に属している。謎の組織とアスカとの連絡員でもある。その正体は、レッドウルフ。

・テリー：L・A・S・F・Cのアメリカ支部長になる。

・ニール（ニール・ラガン）

・ジャネット：シンジに色仕掛けをしようとして失敗。アスカの下僕に。

ブラジル支部（Eva配備予定）

ミリア：エヴァンゲリオン操縦者候補生。市立第壱中学3年A組に在籍する。戦闘機乗り。標準よりもやや大きめの体格で、蒼い瞳に緑の髪で、白い肌をしている。ややキツイ目付き。ジャツジマンの部下でアスカのガード役。ミラクル5の一員でもある。孤児で親の顔は知らない。

マックス（マクシミリアン・ジーナス）：エヴァンゲリオン操縦者候補生。市立第壱中学3年A組に在籍する。戦闘機乗り。線の細い優男で、メガネをかけている。黒い瞳に青い髪。母は日本人、父は白人のハーフ。ジャツジマンの部下でシンジのガード役。

・男

・エドナ：シンジに色仕掛けをしようとして失敗。

・女

エジプト支部（Eva配備予定）

サーシャ：エヴァンゲリオン操縦者候補生。蒼い瞳、長い金髪、長身、スリム、白い肌が特徴の美少女。目が大きい、大人しい感じがする、14歳のロシア系イスラエル人。MAGIへのハッキングに成功した、伝説のハッカーグループ『ミラクル5』の一員。ザナドとは親戚。

・ザナド：エヴァンゲリオン操縦者候補生。黒い瞳、黒い縮れた短髪、長身、スリム、褐色の肌が特徴の、精悍な顔つきをしている14歳の少年。正義と愛を重んじる、勇敢なイスラームの戦士でもある。サーシャとは親戚。L・A・S・F・Cのアジア・アフリカ支部長になる。

・男

・イリス：シンジの家来にしてもらおう頼むが、失敗。

インド支部

・ラシッド

・男

・カリシユマ：シンジの家来にしてもらおう頼むが、失敗。

インドネシア支部

・ハッサン

・男

・クリスティン：シンジに色仕掛けをしようとして失敗。

オーストラリア支部

・男

・ジュリア：シンジに色仕掛けをしようとして失敗。

・女

第77話補完 殺到

第77話補完 殺到

「ひええ〜っ、なんてこった！こりゃあ、大変だ〜っ！」

ケンスケは、一人頭を抱えていた。

それは、『惣流アスカと碇シンジを応援する会』、
略称『LASの会』又は『L・A・S・F・C』あるいは『
L・A・S』への入会希望者が予想をはるかに超えており、
その処理にてんてこ舞いしていたからだった。

「どうですか、相田君。」

そこにユキがやって来た。

「おっ、森川。良いところに来てくれた。入会希望者が多くて、大
変なんだよお。手伝ってくれよ。」

ケンスケは、藁にもすがるような目でユキを見た。

「ええ、いいですよ。」

もともと手伝うつもりだったユキは快諾し、二人がかりで頑張った
のだが、なかなか処理が追いつかない。

それどころか、どんどん未処理の入会申込が増えていくありさまだ
った。

「ど、どうしてこんなに入会希望が殺到しているんですか。」

「うーん、多分ネルフのホームページにリンクを貼ったからだと思う。いわば、ネルフ公認だからな。」

「そうですね。良く考えればその通りですよ。」

でも、このままだと大変なことになりますよね。どうしましょうか。

「

「そうだなあ。何かいい方法はないかなあ。」

「惣流さんに相談しましょうよ。」

「いや、それはまずい。」

ケンスケは、アスカに今相談するのは直感で危険だと判断したのだ。

「じゃあ、どうします?。」

「最初はシンジに相談してみるよ。」

ケンスケは、すぐにシンジに連絡した。

すると、シンジはその点是对策を既に講じているとのことだった。

(げっ！嘘だろ…。)

内心思いつきり疑ったケンスケだったが、シンジの言うことを黙って聞いた。

シンジの話によると、自動で入会処理を行うソフトの開発を、シンジがリツコとマヤに頼んでおいたとのこと。
それで、さっき出来たって連絡があったと言うのだ。

「えっ、本当かよ。そりゃあ、助かるなあ。ありがとう、シンジ。」
シンジは、自分とアスカのためにやってくれてるんでしょ、これくらい当たり前だよと笑って答えた。
そして、今からソフトを送るとも。

「ああ、頼むよ。」

ケンスケは電話を切ると、パソコンでシンジからのメールを受信し、直ぐにソフトをインストールした。

「どうですか、相田君。」

ケンスケがパソコンをいじっている後ろから、ユキが覗き込んできた。

「うん、こりゃあいいや。」

パソコンを起動しておいてネットにつないでおけば、自動的に入会処理をしてくれるみたいだ。」

「まあ、良かったですね。碓君もたまには気が利くんですね。」

「ああ、そうだな。」

そう答えたケンスケだったが、心の中では別のことを考えていた。

（きつと、惣流が手を回したんだろうな。
リッコさんからシンジに提案させて、シンジが自分の意思で頼んだ
ように思わせて。）

そうじゃなければ、シンジがそこまで気が回る訳がないよなあ。（

むろん、ケンスケの予想は大当たりだった。

ともあれ、『LASの会』の入会希望者が殺到し、1日も経たない
うちに会員は10万人を超えてしまった。

会費を月500円にしたことから、5千万円の収入が見込まれるの
である。

「こ、これは、大儲けのチャンスだったのにつ！」

だが、ケンスケは逆に肩を落とした。

会長になってしまったからには、アスカの写真でボロ儲けなどとい
うセコイ真似は出来そうに無いからだ。

「でも、しょうがないか。」

ケンスケは、もうすぐ給料日が来ることを思い出した。

アスカの話では、今後給料日ごとに最低でも100万円はもらえる
とのことだった。

「そっぴや、惣流の下僕になることこの条件に、写真の販売をやめる
っていうのがあったっけ。陰で写真を売って、万一惣流にばれたら
ただじゃ済まないか。」

ケンスケは、エヴァンゲリオンのパイロットになったことを少しだけ後悔した。だが…。

「まあ、いいや。金儲けにならなくても。俺の撮った写真を、少しでも多くの人に見てもらえるもんな。」

そう呟きながら、ケンスケは会員証に使ったための写真を選ぶのだった。

一方、その頃…。

「キーンツ！悔しいっ！」

マナは『LASの会』のホームページを見て、怒り狂っていた。

第77話補完 殺到（後書き）

『LASの会』の会員は、その殆どがアスカファンです。公認アスカファンクラブが、女性限定であるため、アスカファンの男は『LASの会』に入るしかないわけです。

第78話 シンジの誕生日 前編

第78話 シンジの誕生日 前編

「ねえ、シンジ。アンタの誕生日のことなんだけどさあ、どうしようか。」

5月最後の土曜日、朝食タイムに、アスカがシンジに問いかけてきた。

今日は珍しく全員揃っているため、シンジの誕生日のことを決める丁度いい機会だと思ったからだろう。

そう、この場には、シンジ、アスカ、ミサト、リョウジ、リツコ、マコト、ユキ、ケンスケ、カヲル、マリアの10人が揃っていた。朝食に全員が揃うのは珍しいのだ。

「どうしようって、例えば？」

アスカの意図が分からず、シンジは首を傾げた。

「誰を呼ぶとか、どこでやるかとか、そういうことよ。」

ちよつといらついたように、アスカは答えた。

「え〜っ、急にそんなことを言われても困るよ。」

シンジは、アスカと二人つきりだと考えていたので、急な話しに困

ったような顔をした。

「碓君は、あんまり大勢ではやりたくないんじゃないですか？」

そんなシンジの心中を察したのか、見かねて、ユキが助け船を出してくれた。

「そうなの、シンジ？」

「うーん、そうだね。あんまり大勢じゃない方がいいな。」

さすがのシンジも、みんながいる前ではアスカと二人っきりでは言えなかった。

「そうねえ。ヒカリの誕生日の時は、確か20人位だったっけ。シンジはそれ位だったらいいの？それとも、もっと少ない方がいいのかしら。」

「うーん、それ位ならいいかなあ。」

「えーと、ヒカリの誕生日には、誰を呼んだっけ。ヒカリとシンジ以外に、ノゾミちゃん、コダマさん、ユキとその弟さんに妹さん、鈴原と妹さん、相田に渚、リツコとミサト、それにマリア、ミリア、キャシー、マックス、アリオス、アールコートの計20人よね。で、後で加持さんと日向さんが加わったのよね。」

「そうだね。」

「で、今回は、この場のメンバーは確定だから、ちょっと呼ぶ人を変える必要があるわね。今は10人いるし、ヒカリと鈴原も呼ぶか

ら12人。あと8人をどうするかね。」

「どうする、シンジ君。シンジ君が、同年代の友達だけの方が良ければ、俺達大人は適当に飲んで遅く帰るぞ。」

リョウジの言葉に、シンジは首を振った。

「いえ、そんなことはありません。でも…。」

「でも、本音はアスカと二人つきりがいいんだろ？」

そう言いながら、ニヤリと笑うリョウジ。

「えっ！いえ、あの、そのお…。」

シンジは、真っ赤になってしまった。凶星だったので無理も無い。

「何よ、アンタ。そんなことを考えていたわけえ。そんなの却下よ、却下。」

アスカは少し頬を染めて、プリプリしながら言う。

「あはははっ、やっぱりそうだよね。」

(ガーン！そ、そんな…。)

シンジは笑ってごまかしたが、内心では、かなりのショックであった。

恋人同士の甘い雰囲気の日を、少しばかり期待していたのだから無理もない。

「そんなのはね、大人になってからでいいのよ。
今のうちだね、大勢ではあつと賑やかにやらなくちゃ。」

（大人になつてとしても、二人つきりで出来るとは限らないのになあ。まったく、もうっ。）

心の中で、ブツブツ文句を言うシンジであつた。

「でも、アスカ。シンちゃんは、愛するアスカと二人だけで過ごしたいみたいよ。」

「うっさいわねえ、ミサトは。余計なこと、言わない。」

ミサトのからかひに、アスカは思いつきり頬を膨らます。

「へいへい。分かりましたよつと。」

ミサトも、これ以上言つとまずいと思つたのか、早々に降参した。

「で、シンジ。どうすんのよ。アンタが言わないなら、アタシが決めるわよ。ミリアとマックス、アールコートとアリオス、サーシャとザナド、アニーとテリー、そんなところしら。」

「そうだね、そんなところかな。」

（アスカと二人つきりになれないんなら、どうでもいいや。）

シンジは、既に諦めの境地に陥っていたため、コクンと頷いた。

「でも、アスカ。ハウレーンやミンメイは呼ばないの？それに前回呼んだキャシーは？」

そこにマリアが口を出す。ミラクル5のメンバーが2人欠けているのが気になるらしい。
キャシーはそのおまけだろう。

「アタシの誕生会だったら呼ぶんだけど、今回はシンジのでしょ。一応、シンジが主役なんだから、女の子の方が多いっていうのも変でしょ。」

「うーん、言われてみるとその通りね。でも、ハウレーンやミンメイは同じパイロット仲間だし、碇君と一緒に戦った仲間でしょ。だから、どうかなあって思っただけ。」

「うーん、それもそうね。シンジはどう思う？」

どうでもいいよと言いつつになったシンジだったが、アスカの機嫌を悪くするのは得策ではないと思いついた。

「そう言われると、確かにマリアさんの言う通りだね。アニーさんとテリー君の代わりにハウレーンさんとミンメイさんと呼ばうかなあ。」

シンジの呟きに、今度はユキが反応した。

「でも、テリー君はLASの会のアメリカ支部長ですし、アジア・アフリカ支部長のザナド君だけを呼ぶのはどうかと思いますけど。」

「そうだねえ。どうしようか。」

シンジは、うんと唸る。

「おい、シンジ君。そう悩むことないぞ。ゼーレとの戦いの時にいた子と、その『LASの会』っていろいろの関係者を呼べばいいだろう。男が少なければ、一緒に来る男を誘ってもらえばいいだろう。」

たまりかねてリョウジが声をかけた、ように見えるが、実際はアスカから前もって言い含められたことを言ったのである。

もつとも、気付いた者はいなかったが。それにシンジは誰を呼ぶかなんて、もうどうでも良くなったから、早く話を終わらせようとした。

「それもそうですね。」

シンジがウンウンと頷くと、アスカが締める。

「それじゃあ、確認するわね。」

メンバーはシンジ、アタシ、ミサト、加持さん、リツコ、日向さん、ヒカリ、鈴原、ユキ、相田、マリア、渚、ミリア、マックス、アールコート、アリオス、ハウレーン、ミンメイ、サーシャ、ザナド、テリー、アニー、イライザ、ニール、そんなところかしら。

ハウレーンとミンメイは、誰か男の子の研修生と一緒に来るように言うわね。それでいい?」

「うん、それでいいよ。」

シンジが頷き、一番重要なメンバーが決まり、話は次に移った。

そして、誕生日会はシンジの誕生日の直前の土曜日に開くことが決まった。

それからはヒカリを呼んで、料理の内容、準備の手順などを決めていった。

「ねえ、シンジ。プレゼントは何がいいの？」

その日の夜、寝る前にアスカから尋ねてきた。どうもアスカは、明日にシンジのプレゼントを買うつもりらしい。

「言っても怒らない？」

シンジは、もじもじしながら言った。ちょっと言いにくそうだ。

「へっ？どういことよ。」

アスカは、シンジの意図が分からず、首を傾げる。シンジの返答はアスカの予想外だったようだ。

「僕は、みんなの前でアスカにキスして欲しいんだけど、やっぱり駄目だよね…。」

シンジはそう言いながら、はははっと笑った。

「シンジ、それって本気なの？」

アスカの眉間に、少し皺が寄る。

「一緒にお風呂に入るとか、寝る時に何も着ないとか、そういうのも駄目だよね。」

アスカの目が少しつり上がる。

「シンジ。そんなに、アタシの愛情のこもったパンチが欲しいわけえ？」

アスカはこれみよがしに、拳を作る。

「あははっ、遠慮しとくよ。」

シンジは、慌てて引いた。アスカの目が真剣だったからだ。

「アンタねえ、アタシは真面目に聞いているんだけど。」

「ごめん。でも、誕生日だから、もしかしたらアスカがウンって言うってくれるかなあなんて、ちよっとだけ期待していたんだけど…。」

(はあっ、やっぱり駄目か…。悲しいなあ。)

シンジは少し暗い顔になり、がっくりと肩を落とした。それを見たせいかな、アスカは少し優しい声でこう言った。

「それについては、ちよっと考えさせて。それはそれ、これはこれよ。」

「えっ！考えてくれるのっ！」

シンジの顔は、パッと明るくなった。そして、はち切れんばかりの笑顔に。

だが、あまりにも早いシンジの変わり身に、アスカは頭にくるとい
うより、呆れてしまったようだ。

「いいから、質問に答えなさいよっ！」

(げっ。まずいや、アスカを怒らせないようにしないと。)

シンジは、慌てて答える。

「う、うん。そうだねえ。アスカとおそろいの服なんかがいいなあ。
服じゃなくても、何でもいいんだけど。」

「だったら、寝間着なんかどう？」

「え〜っ、嫌だよ。寝る時しか使えないじゃないか。」

「でもさ、毎日着るのよ。」

「でもさ、誰にも見てもらえないじゃないか。」

「何よ〜っ。みんなに見せびらかしたいわけえ？」

「う、うん。そうかなあ。」

「もうっ、シンジったら、本当にお子ちゃまね。でも、まあいいわ。
シンジの服のセンスは良くないから、アタシが良いのを選んであげ
るわね。」

「ほ、ほんと？頼むよ、アスカ。」

「じゃあ、そろそろ寝ましようか。」

だが、その時。シンジはシゲルとマヤからの頼まれごとを思い出した。

「あっ、もうちょっといいかな？」

「何よ。」

「実はね、他にも呼びたい人がいるんだけど、どうかなあって。」

「ぬあんですって!!!」

なぜか、アスカは大激怒した。

(お、おかしい。何でアスカは怒ってるの?)

「で、でも、何か可哀相でさあ。」

シンジは、アスカが怒る理由が分からず慌てたが、それでもマヤからの頼みだったので、少し頑張って言うてみた。

「いいのよっ!アンタがどうしても呼ぶっていうなら、アタシは出ないわよっ!」

それでいいのねっ!」

アスカは、怒ってシンジの首を絞めた。

「く、苦しいよっ、アスカ。でも、マヤさんだって、十分反省して

いるみたいだし…。」

「へっ？マヤなの？」

マヤの名前を出した途端、アスカの手から力が抜けた。

「そ、そうだよ。マヤさんだよ。アスカは誰だと思ったの？」

「も、もちろん、マヤよ。」

そう言うアスカだが、冷や汗が垂れているようだ。

どんな勘違いをしたのか気にはなったが、話がそれるとろくな事はないので、シンジは話を続けた。

「でもさあ、もう許してあげなよ。可哀相だよ。」

「ま、まあ、シンジがそこまで言うなら呼んでもいいわよ。でもね、許すかどうかは別問題よ。」

「それでもいいよ。じゃあ、マヤさんと呼んでもいいんだね。」

「まあね。シンジの誕生日だし、勝手にすれば。」

アスカはそう言ってベッドに横になった。

「ありがとう、アスカ。」

シンジは、そんなアスカの背中に向かってお礼を言った。

翌日、シンジはアスカに連れ回された。

目的は、シンジにプレゼントする服を買うことである。

本来、もらう時まで知らない方がいいのだが、

アスカはシンジが気に入らないものを贈ってもしょうがないと考えたらしい。

「さあ、シンジ。行きましょうよ。」

「うん、待つてよ、アスカ。」

「早くしなさいよね。まったく、もっつ。」

「分かったよ。」

ネルフの仕事をしていたシンジだったが、アスカに急かされて断念した。

「今日は、そうねえ。手を繋ごうか。」

「えっ、いいの？嬉しいなあ。」

シンジはニコニコである。

「まあね。良く考えたら、アタシ達、恋人同士だもんね。だから、これ位はね。」

「そっ、そっだよね。」

「それに、最近デートもあんまりしてないし。シンジも可哀相かな

あつて思ったのよ。」

「そ、そうだよね。」

「あのねえ、こういう時は、そんなことないよって言うのよ。まったく、シンジは気が利かないわねえ。」

「ごめん…。」

「ま、いいわ。アンタの言うことをいちいち気にしててもしょうがないものね。それよりもシンジ。気に入らないものは気に入らないって正直に言うのよ。」

アンタが気に入らないものを買ってもしようがないんだからね。」

「うん、分かったよ。正直に言うよ。」

だが、分かっているのは、アスカも同じだった。元々、服を選び好まないシンジである。

だから、アスカからもらった服ならば、何でも気に入るに決まっているのだ。

「じゃあ、早速あの店に入るわよっ！」

今日は、20以上のお店を回るつもりだから、そのつもりでいてよねっ！

「ええっ、ちよつと多いんじゃない。」

「何よっ。一杯お店を回れば回るほど、アタシと一緒に時間が増えるのよ。」

それでも嫌って言うの?」「

「そっ、そんなこと、ないよっ!」

慌てて否定したシンジだったが、アスカの思いつきぽである。

「ふふふっ、今日は長〜い一日になりそうね、シ・ン・ジ。」

「そ、そうだね。」

そう言いつつも、シンジの心は複雑だった。

(アスカとデートなのは嬉しいけど、今日も足が棒になるまで市中引き回しの刑に遭うんだろっな…。)

当然ながら、シンジの不安は的中するのであった。

第78話 シンジの誕生日 前編（後書き）

久々のアスカとのデートですが、結局お店巡りになってしまい、素直に喜べないシンジです。でも、アスカと二人っきりの時間が持てるのは嬉しいようで、複雑な心境のシンジでした。

第78話補完 明暗

第78話補完 明暗

「え〜っ！本当なのっ！うれし〜っ！」

イライザは、シンジの誕生会に呼ばれたことをアニーから聞いて、大喜びで舞い上がっていた。

「ええ、そうよ。メンバーはシンジ様、惣流さん、ミサト先生夫婦、リッコ先生とその彼、渚君、鈴原君、洞木さん、相田君、森川さん、 MARIA、ミリア、マックス、アールコート、アリオス、ハウレーン、ミンメイ、サーシャ、ザナド、テリー、ニール、そんなところかしら。」

「やったじゃない。」

本部パイロットや正パイロット候補達と仲良くなれば、正パイロットは無理だとしても、私達にもまだまだ副パイロットになれるチャンスはあるわ。」

「そうね。それに惣流さんから聞いた話だと、私達はアメリカ支部やドイツ支部のパイロットになる可能性もあるんでっすって。」

「ええっ、本当なのっ？」

「ドイツ第2支部のナスターシャが、何か事件を起こしたらしくて、

パイロットになる可能性は物凄く低くなったらしいの。

フランス支部のソフィーやアメリカ第3支部のジャネットもね。

ただでさえ、先日急にドイツ第2支部とフランス支部の候補生が帰国したでしょ。

その辺が理由らしいわ。」

「それじゃあ、マリアやキャシーにペコペコすればいいのね。

あの二人なら、ハウレーンよりはマシなもの。」

「でも、変ね。キャシーは呼ばれていないみたい。」

「それはおかしいわね。何でかしら。」

「共通点と言えば、ゼーレが攻めて来た時、キャシーとアールコート以外の子は、エヴァに乗っていた、それくらいかしらね、考えられることといえば。」

「あつ、そうか。アールコートは、アリオスのおまけなのよ。

だって、シンジ様の誕生日会だから、呼ばれるのは男の子がメインなんだわ。」

「じゃあ、私達もおまけなの。」

「私はニールとセット。アニーはテリーとセット。おそらく、そういうことだと思っわ。」

「でもまあ、理由はともかく、呼ばれたから良しとしましょうよ。」

「ええ、そうね。月曜日が待ち遠しいわ。みんなに自慢しようかしら。」

「う。」

「いいけど、忘れないでね。金曜日に打合せ。土曜日にリハーサル。日曜日に最終打合せ。全部必ず出るのよ。」

「分かってるわよ。」

イライザは、そう言いながらも、嬉しくてたまらなかった。

「悔し〜いつ!」

誕生会に呼ばれなかったマナは、非常に機嫌が悪かった。

マナからすれば新参者のアニーやイライザが誕生会に呼ばれたと聞いて、余計に頭にきたのだ。

「トホホ…。俺達、どうすりゃいいんだよ。」

そのうちにとばかりが来ると分かっている、ムサシとケイタには、為す術が無かった。

第78話補完 明暗（後書き）

シンジの誕生会に呼ばれて、有頂天のイライザ。呼ばれずに落ち込む…のではなく荒れるマナ。

嫌いなアスカに媚びへつらつてまで、エヴァのパイロットの座を獲得しようとするイライザに対して、アスカとあくまでも渡り合おうとしているマナ。この二人の明暗が分かります。

第79話 シンジの誕生日 中編

第79話 シンジの誕生日 中編

「シンジ、誕生日おめでとう！」

「…………おめでとう！」

「…………おめでとうございますっ！」

アスカの合図で、みんなは一斉に大きな声でシンジの誕生日を祝った。

クラッカーがポン、ポンと良い音を立てながら飛び散り、誕生日の雰囲気をかもし出している。

今日は6月4日の土曜日。

シンジの誕生日の2日前になるが、土曜日の方が準備がし易くいとのアスカの主張が通り、この日に誕生日会を開くことになったのである。

昨日の夜からヒカリやユキが中心となって下準備をして、

今日も朝早くからマリアやアールコートを加えた4人で料理を作り始めた結果、豪華な料理が所狭しと並んでいた。

部屋にはテーブルが5つ繋げて並べられ、その上にはジュースや料理が山のように並べられた。

ジュースは、オレンジ、アップル、グレープの3種類に、炭酸飲料も5種類ほど。

それ以外に、アイスコーヒーやアイスティーもあった。

料理に加えて、コアラのマーチやポテトチップ、チョコレート菓子などを中心にして、主に女の子が喜びそうなお菓子も並んでいた。

ちなみに、料理については時間とお金をかけているため、かなり豪華であった。

ヒカリをして、『私の時より遥かに豪華だわ……。』と言わしめたほど。

「リツコは普段あんまりお金を使わないから貯め込んでいるし、シンジはリツコの実験に協力しているからよ。」

アスカはすかさずフォローした。

一応、現在の保護者はリツコになっているため、スポンサーはリツコということになっていた。

実際には、アスカがお金を出していたのだが、それはシンジにすら秘密である。

なお、さすがのヒカリも寿司やロブスター、カニなどの料理は出来なかったのだ、これらの料理は特注したのだが、金に糸目をつけなかったのだ、かなり豪華な料理であった。

「ええっ！今日はリハーサルじゃないの？」

一方、午後からやって来たイライザやアニー達は、今日はリハーサルと聞いていたため、着いた早々驚いていたが、飛び入り参加者を防ぐためだというアスカの説明に一応納得していた。

実はテロ対策なのだが、さすがのアスカもみんなに本当のことは言

わなかった。

と言う訳で、午後1時を少し回った頃にシンジの誕生日会が始まった。

「さあ、みんな。シンジにプレゼントを渡しましょうー！」

続いて、シンジにプレゼントを次々に渡していく。

「ありがとう、みんな。」

シンジは、一人一人にお礼を言っていく。そして、最後にアスカが渡した後、トウジが大声で叫んだ。

「シンジ！お前の一番欲しいプレゼントは何やっ！」

これに対して、シンジは迷わず即答した。

「そ、それは、アスカのキスですっ！」

シンジが言った途端にアスカの顔色が変わり、何か言おうとしたのだが、それは、みんなの声でかき消された。

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

ほぼ全員で、キスコールをしたためである。
おそらく、トウジが事前に根回しをしていたのだろう。
シンジの返答に対する反応が、あまりにも早い。

「い、いやよ、冗談じゃないわよ。」

アスカは反対したが、トウジはアスカの反論を許さなかった。

「そういう惣流は、ヒカリの誕生日に一体何をしたんや、ええつ。
往生際が悪いで。」

「うっ！」

ヒカリの誕生会で、アスカがトウジに対してキスコールを起こしたのは事実。

その時の仕返しを、今しようというらしい。

「さあつ、早くするんや。さあつ！さあつ！さあつ！」

トウジがせつつく。アスカが周りを見回すと、一部浮かない顔をしている者もいるが、大半は期待のまなざしを向けている。
アスカは、観念したのかシンジの方を向いた。

「シンジ、誕生日おめでとう。これは、アタシからのプレゼントよ。
ありがたく受けなさいよっ！」

ニコリと笑って、シンジの唇に自分の唇を近づけ、そっと触れるよ
うなキスをする。

（チャンスだっ！）

シンジはその瞬間、左手でアスカの頭を掴み、残る右手で背中を抱きしめて離さない。

アスカの両手もシンジの背中に回っている。

（いいぞっ！今だっ！）

すかさず、アスカの口の中に舌を侵入させる。

（よし、反撃してこないよね。だったら、もっちょっただ。）

シンジの口撃は、さらに激しさを増していく。だが、アスカの抵抗は無い。

（良かったっ！アスカは嫌がっていない。嬉しい！本当に嬉しいっ！）

嬉しいことに、二人のキスは20分以上も続いたのである。

その結果、アスカがシンジの唾液をたっぷりと飲んだことは言うまでもない。

少なくとも、アスカの喉は、コクン、コクンと、10回以上鳴ったのである。

「アスカ、ありがとう。今までの人生の中で、最高のプレゼントだよ。」

長いキスが終わった後、シンジは輝かんばかりの笑顔で言った。もう、嬉しくてたまらないといったオーラが、体中から発散されているようである。

「どういたしまして。シンジに喜んでもらって嬉しいわ。」

それに対して、意外な事にアスカは笑顔で応えてくれた。

（良かった。トウジやケンスケのおかげだよ、ありがとう…。

アスカは、僕のが好きだったんだね。本当に嬉しいよ。生きてて、本当に良かった…。）

シンジは、歓喜に震えながら、数日前の出来事を思い出していた。

「はあっ…。」

訓練の後、シンジはため息をついていた。

「おい、シンジ。どうしたんだよ。」

「どないしたんや。」

ケンスケとトウジが、心配して近寄ってくる。

「うん、じつはね。悩みがるんだ。」

シンジは、少し暗い顔をした。そんなシンジを見て、

「どっせ、惣流のことだろ。」

ケンスケが事も無げに言ったが、シンジは慌てた。

「ど、どうして分かったの？」

「だって、シンジ。お前は惣流のこと以外で悩むことがあるのかよ。」

うん、と考えてから、シンジはぼつりと言った。

「そうだね、無いね。」

「だろ？で、今度は何だよ。」

「うん、じつはね。」

誕生会のプレゼントに、みんなの前でキスをするようにお願いしたのに断られちゃったんだ。

トウジはいいよね。委員長なんか、喜んでキスしてくれたもんね。それに比べて、アスカったら酷いんだ。あんまり言うと、僕を殴るって言うんだ。あんまりだよね。

アスカは僕のことなんか、好きじゃないのかなあって、そう思ったら、無性に悲しくなったんだ。」

それを聞いた二人は、開いた口がふさがらなかった。

(普通、男からそんなことを頼むかよ。

お前は、そんなくだらないことで悩んでいたのか。惣流が怒るもの無理ないぞ。)

ケンスケは呆れたままだったが、トウジは違った。

(そつや。あん時は惣流にはめられて、みんなの前でキスすることになったんや。

今度はこっちがお返しする番や。(

「なあ、シンジ。そういうことなら、ワイに任せときいな。何とかしたる。」

「ほんとう？、ありがとう、トウジ。」

その瞬間、シンジの顔が、ぱあっと輝いた。

「それにな、惣流は、多分お前のことを好いとる。間違いない。」

「でも、何か自信が無くて。」

それを聞いて、トウジは内心しめた、と思った。

「じゃあ、こういう風に試すのはどうや。」

惣流とキスする時、惣流の口の中に唾液を流し込むんや。

惣流がシンジのことを好きなら、必ず飲むはずや。」

「アスカが飲む訳ないよ。唾液って、つばのことでしょ。」

そんな汚いもの、飲む訳がないじゃないか。」

「ほな、シンジは惣流のつばは汚いと。だから飲まないんやな。」

「そ、そんなことないよ。」

「それは、なんでや。」

「もちろん、アスカのことが大好きだから。」

「そやる。好きな人のつばやったら、飲むはずや。逆に、飲んだら好きってことや。」

「それも、かなり好きってことや。」

「そ、そうか。」

「そうだよ。僕だって、委員長や森川さんは好きだけど、つばなんて汚くて飲めないもんね。」

「そやる。そういうことや。まあ、頑張れや。」

トウジは、内心少し複雑な気持ちだったが、精一杯励ました。

「上手くいくといいな。」

ケンスケも一応励ます。

「うん、ありがとう。頑張るよ。」

「惣流とキスする時、思いっきり強く抱きしめるんや。絶対に離れたらアカン。」

「うん、分かったよ。ありがとう、トウジ。」

こうして、シンジはトウジにそそのかされて、事に及んだのであった。

むろん、シンジが喜んでスキップしながら帰った後、トウジとケンスケが大笑いをしたことは言うまでもない。

だが、トウジ達は、まさかシンジが実行するなんて、露ほどにも思っていなかったのだが。

「ねえ、アスカ。今日は、僕の側にいてほしいんだけど、いいかな？」

「ええ、いいわよ。今日の主役はシンジだもの。」

長いキスが終わり、ようやく席に着いたアスカに、シンジは遠慮がちに頼みごとをした。

これに、アスカは二つ返事で応じた。

「じゃあさ、もうちょっとこっちに寄ってよ。」

「ええ、いいわよ。」

アスカがシンジの側に寄ると、シンジはアスカの肩に手をかけた。今日のアスカは、ノースリーブのポロシャツを着ているため、シンジの手がアスカの素肌に直接触れる。

（アスカの肌って、すべすべしてるね。とっても気持ちいいや。）

シンジは、無意識の内にアスカに対する所有権を主張していた。

普段のアスカなら、ふざけんじやないわよと、烈火の如く怒るところだが、今日はシンジの誕生会だからと、我慢しているのか、特に反撃は無かった。

それからしばらくの間は、各自おしゃべりをしながらのお食事タイムだったのだが、トウジとケンスケがしゃしゃりでて、ゲームの開始を宣言した。

最初のゲームは、定番のビンゴゲームである。

「はい、司会の相田ケンスケです。最初に景品の紹介をします。景品は5つあります。」

5等の人は、最新の高性能パソコンとプリンタのセットです。」

ケンスケが言い終わると同時に、おおっ、と一部の人間から声がある。

マリア達、ミラクル5のメンバーは、パソコンには目がないため、特に欲しそうな顔をしている。

「続いて、4等は碓君の写真の入ったアルバムです。」

きゃあっ、と一部の女の子から声があがる。シンジファンの女の子、特にイライザの目つきが変わる。

「続いて、3等は惣流さんの写真の入ったアルバムです。」

おおっ、と男どもから声があがる。これにはシンジも物欲しそうな顔をした。

「続いて2等です。2等はなんと、碓君のお古のTシャツが3枚です。」

きゃああっ、と再び一部の女の子から声があがる。少しだけ、アスカの顔が歪む。

「さて、最後に1等です。1等は、惣流さんのお古のTシャツが2枚ですっ!」

うおおっ！と言って、ザナドやテリー達が立ち上がった。つられてシンジまでも。

今度は、露骨にアスカの顔が歪んだ。

「さて、今1等、2等などと言いましたが、最初にビンゴになった者から好きな商品を選んで構いません。

要は、早いもの勝ちですので、皆さん頑張ってください。」

こうして、ビンゴが始まった。

「やったわっ！」

最初にビンゴになったのは、マリアだった。

「おめでとございます。景品は何を？」

「もち、パソコンよ。」

マリアが言うと、ほっと肩をなでおろす人間が大勢出た。

「おや、ビンゴみたいだね。」

次は、カヲルだ。

「おめでとございます。景品は何を？」

「そっだねえ。それでは……。」

カヲルが言い終わる前に、シンジが叫んだ。

「カヲル君！アスカのＴシャツにしてよ。そして、僕にちょうだいよ。」

「ああ、分かったよ、シンジ君。それでは、惣流さんのＴシャツを頼む。」

「はい、どうぞ。」

カヲルは、トウジからＴシャツを受け取ると、直ぐにシンジに手渡した。

「ありがとう、カヲル君。物凄く嬉しいよ。」

「どうしてそんなに欲しかったんだい。」

「だって、アスカの着た服を、他の男の手に触れさせたくなかったんだよ。」

それを聞いたみんなの反応は……。

「惣流さんて、碓君にそんなに思われているんですね。羨ましいです。」
「とユキ。」

「まあ、お暑いこと。アツアツねえ。」
とマリア。

「シンちゃんらしいわね。もう、ラブラブね。」

とミサト。

「本当に、羨ましいわあつ。」
とアニーにイライザ。

などと、暖かい反応が多かった。

「はい、では次のゲームです。」

ケンスケとトウジは、その後も手を変え品を変えゲームを続けたの
だが、段々お色気のあるものになっていった。

第79話 シンジの誕生会 中編（後書き）

シンジの唾液を、たっぷりと飲まされたアスカですが、意外や意外、何ら反撃がありませんでした。トウジの言う通り、シンジのことが好きだからでしょうか。

いずれにせよ、シンジは大喜びでした。シンジも、アスカに好かれていたという自信がついたことでしょう。めでたし、めでたし。

第79話補完 げろげろっ！

第79話補完 げろげろっ！

これは、シンジが知らない方が良い事実。アスカから見た、キスの真相である。

最後にアスカがプレゼントを渡した後、トウジが大声で叫んだ。

「シンジ！お前の一番欲しいプレゼントは何やっ！」

これに対して、シンジは迷わず即答した。

「そ、それは、アスカのキスですっ！」

（ぬあっにーっ！やられたーっ！）

アスカは何か言おうとしたのだが、それは、みんなの声でかき消された。

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

ほぼ全員で、キスコールをしたためである。
おそらく、トウジが事前に根回しをしていたのだろう。
シンジの返答に対する反応が、あまりにも早い。

「い、いやよ、冗談じゃないわよ。」

アスカは反対したが、トウジはアスカの反論を許さなかった。

「そういう惣流は、ヒカリの誕生日に一体何をしたんや、ええつ。
往生際が悪いで。」

「うっ!」

ヒカリの誕生会で、アスカがトウジに対してキスコールを起こしたのは事実。

その時の仕返しを、今しようというらしい。

「さあっ、早くするんや。さあっ! さあっ! さあっ!」

トウジがせつつく。

アスカが周りを見回すと、一部浮かない顔をしている者もいるが、大半は期待のまなざしを向けている。

(シ、シンジは?)

シンジはと見ると、どう見ても期待に胸を膨らましている顔に見える。

おそらく、今断ると泣いてしまっただろう。アスカは僕のが嫌いになったんだ、などと言いながら。

そうになると、今日の誕生会は台無しである。

(げっ。や、やられた…。)

アスカは、トウジにはめられたことに気付いた。

いくら天才アスカでも、こういう策略には引つ掛かり易いらしい。

断れば、誕生会を台無しにするうえに、シンジが泣くかもしれないため、キスをする以外に選択肢は考えられない。

もつとも、死ぬほど嫌なことならば、シンジが泣こうがわめこうが断るのだが、さすがにそこまで嫌なことではない。

朝のキスは欠かさずしているし、気分が良いときだけといえ、人前でなければ、シンジの求めに応じてキスすることもあるのだ。

(ヒ、ヒカリはどうなの？ユキは？)

アスカは、唯一味方になりそうな二人を探した。

だが、ヒカリはどう見ても喜んでいそうな顔だし、ユキも目を輝かせてこつちを見ている。

きっと、トウジに言い含められているのだろう。

アスカがみんなの前でキスするのが嫌だとは分からないらしい。

(あつ、そう言えば、ユキは婚約披露パーティーの時にいたわよね。

あの時は、調子に乗ってシンジと一杯キスしたんだっけ。

だから、アタシが嫌がっているだなんて、思うわけないわよね。)

アスカにすれば、あの時は立つのも辛い状態だったから、シンジに体重を預けて楽をするために、やむを得ずシンジとキスをしたのだが、ユキにはそんなことは教えていなかったのだ。

また、その時の話は、ヒカリにも伝わっている可能性が高い。

(ちっ、しょうがないわねえ。もうっ、こっになったら、自棄よ。)

アスカは、意を決してシンジの方を向いた。

どうせ逃れられないのなら、嫌々キスをして場を盛り下げようよりも、積極的にキスをして、せめてこの場を盛り上げようと思ったのだ。

「シンジ、誕生日おめでとう。これは、アタシからのプレゼントよ。ありがたく受けなさいよっ！」

ニコリと笑って、シンジの唇に自分の唇を近づけ、そっと触れるようなキスをする。

(うんっ！なっ、何よっ！)

アスカは、少ししたら離れようと思っていたのだが、シンジが左手でアスカの頭を掴み、残る右手で背中を抱きしめて離さない。

アスカの両手もシンジの背中に回っているため、離れようにも離れられない状況である。

(んんっ！何よっ！)

そのうち、アスカの口の中に侵入してくるものがあった。もちろん、シンジの舌である。

(げっ！気持ち悪いっ！冗談じゃないわよっ！早く離れてよっ！)

だが、アスカの気持ちを知ってか知らずか、シンジの口撃は止むどころか、さらに激しさを増していく。

（いやあっ！シンジの唾液が入ってくるよっ！汚いよっ！息苦しいよっ！早く離れなさいよっ！ぎゃあっ！）

しかし、アスカの願いも虚しく、二人のキスは20分以上も続いたのである。

（うげえっ！げろげろっ！気持ち悪いっ！もうやめなさいよっ！）

気持ち悪くなって、どんどん顔が真っ青になっていったアスカだったが、シンジは全く気付かなかった。

その結果、アスカがシンジの唾液をたっぷりと飲まされたことは言うまでもない。

少なくとも、アスカの喉は、コクン、コクンと、10回以上鳴ったのである。

「アスカ、ありがとう。今までの人生の中で、最高のプレゼントだよ。」

長いキスが終わった後、シンジは輝かんばかりの笑顔で言った。

もう、嬉しくてたまらないといったオーラが、体中から発散されているようである。

「どういたしまして。シンジに喜んでもらって嬉しいわ。」

（ひえ〜んっ。苦しかったよっ。汚いよっ。吐きたいよっ。げろげろっ！）

それに対して、アスカは顔で笑って、心の中では泣いていた。

その場を盛り下げないために必死になって吐き気に耐え、作り笑いをしたのだった。

（それもこれも、あのバカのせいよ。覚えていなさいよ、鈴原の奴めえっ。）

そして、トウジに対して、密かに復讐を誓ったのであった。

なおその日、アスカはずっと気分が悪く、かなり低いテンションであつた。

そのため、シンジが肩を抱いたりしても、反撃する気すら起きずなすがままになつていた。

それをシンジはアスカが自分に好意を抱いているためと勘違いし、その日中機嫌が良かった。

第79話補完 げろげろっ！（後書き）

ヒカリの誕生会での一件の仕返しを図ったトウジ。それは見事に成就しました。でも、アスカはちょっと可哀相かも。

第80話 シンジの誕生会 後編

第80話 シンジの誕生会 後編

「はい、では次のゲームですつ。」

ケンスケとトウジは、その後も手を変え品を変えゲームを続けたのだが、段々お色気のあるものになっていった。

ビンゴの次は、新聞紙を使ったゲームだった。

男女がペアになって新聞紙の上に乗り、ジャンケンをするのだが、負けたら新聞紙を半分に折るといふ単純なゲームである。

当然ながら、何回か負けると足場が無くなるのだが、その場合は男が女の子を抱っこしたり、おんぶしたりするのだ。そして最後は片足で立つのだが、耐えきれなくなって新聞紙の外に足が出たら負けである。

このゲームは、勝った者がどんどん抜けていくため、ジャンケンに弱い者や重い物を持ってない男がいるペアが不利である。また、抱っこされている女の子が、恥ずかしがって体を揺すったりすると、これまた不利になるのだ。

最初は、恋人同士ではないペアによる対戦である。

くじ引きの結果、イライザ・ニールのペア対サーシャ・ザナドのペアが対戦した。

ジャンケンはいライザの方がやや強かったが、イライザが抱っこを要求し、抱っこに慣れていないニールがバランスを崩して新聞紙から足を出したため、結果的にサーシャ達が勝った。

次のマリア・カラルのペア対アールコート・アリオスのペアは、マリアがジャンケンに異様に弱かったため、アールコート達が勝ち抜いた。

次にハウレーンのペアとミンメイのペアが戦ったのだが、親しい男友達のいないハウレーンが無理に連れてきた男の子と組んでいて、呼吸が合わなかったのに対し、ミンメイはそこそこ気心の知れた男友達と組んでいたため、勝利を掴んだ。

そして、この対戦は勝った組が抜けていくため、イライザ達とマリア達が対戦することになった。
結果は、ジャンケンのカラルがすることにしたマリア達の勝ちとなった。

最後に、ハウレーン達とイライザ達が対戦したのだが、ハウレーン達があっけなく負けてしまった。

「はい、ハウレーン・ジャンのペアの負けですね。それでは、罰ゲームです。
罰として、ハウレーンさんは、ジャン君の頬にキスをしてもらいます。」

ケンスケに促され、ハウレーンは渋々ジャンの頬にキスをした。
その後、みんなにからかわれて、ハウレーンの顔は真っ赤になって

しまった。

「はい、次はカップル同士による対戦です。

くじ引きの結果により、最初は僕と森川さんのペアと、ミア・マックスのペアでの対戦になります。」

そして、ケンスケは司会をトウジに任せてミア達と勝負をした。もともと、ケンスケは端から勝つ気が無かったため、ユキの太股をわざとまさぐって、

驚いてユキが身をよじった時にバランスを崩したふりをして、上手く負けることに成功した。

「ひえ〜っ、惣流さん。まいりましたよ〜っ。」

ユキは、アスカの側に寄ってきて、困ったような顔をした。

「いいじゃないの。負けてもキスするだけなんですよ。

アタシだけがするなんて不公平だから、ユキもしなさいよね。」

「そっ、そんなあ〜っ。」

「ヒカリも、自分の誕生日の時にやったしね。まあ、諦めなさいよ。」

アスカは、自分がもう済んだもんだから、気楽に言う。

「ひえ〜ん。いやですよおっ。」

それに対して、ユキは泣きそうな顔をしていた。

「いいじゃない。相田とキスくらいしたことあるんでしょ。」

「え、ええっ。そりゃあ、無いとは言いませんけど。惣流さんには遠く及びませんよ。」

「何よお。それじゃあ、アタシがしょっちゅうしてるみたいじゃない。」

「えっ、違うんですか。毎日、最低2回はしているっていうのは、嘘なんですか。」

「誰よおっ、そんなことを言う奴はっ。」

アスカは、内心では驚きながらも、努めて平静を装う。

「あのお、本人の前なんで、言えません。」

「何っ。」

ユキの視線の先には、シンジがいた。シンジは、アスカから体を離れた。

「あっ、あのっ、アスカ。怒らないでね。」

（げえっ！森川さんたら、何てことを言うんだよっ！）

シンジは怯えて後退る。

「シンジ、みんなにそういうことを言いふらしている訳えっ。」

アスカの眉は、見事につり上がった。

「ご、誤解なんだ。前に1回だけ、トウジに言ったただけなんだ。ほら、ゼーレとの戦いの前に、アスカと婚約を一時解消したでしょ。あの頃のことなんだ。」

「本当にそうなの？」

婚約解消の時の話を出したら、アスカも口調がトーンダウンしてしまった。

「うん、本当だよ。」

シンジの顔が少し青くなり、しきりに首を縦に振った。

「もうっ、しょうがないわねえ。あっ、見て。ヒカリ達が負けたわよっ！」

アスカが言った時、ヒカリ達は、テリーとアニーのペアに負けるところだった。

シンジは、危機一髪のところまで助かったようである。

「じゃあ、次は私達ですね。頑張らないと。」

ユキは、張り切って言うと同時に立ち上がった。

「頑張つて負けなさいよね、ユキ。」

「ひくん、惣流さん。酷いですよお。」

真面目な顔が、一瞬にして泣きべそのような顔に変わった。

「あははっ、見てよシンジ。ユキったら面白い顔をしてるわよっ。」

「そ、そうだね。」

内心、一緒に笑いたいシンジであったらうが、ユキに恨まれるのを恐れて、素直に笑うことはなかった。

そして、結果は…。

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

「キ〜ス！キ〜ス！キ〜ス！」

みんなの声援を受けて、ユキは泣く泣くケンスケとキスをした。

だが、キスを終えたユキの顔は紅潮し、まんざら嫌な様子ではなかった。

むしろ、ケンスケが極上の笑顔を浮かべていたのは、言うまでもない。

もちろん、ユキは知らなかった。

ヒカリ達がわざとアニー達に負け、ケンスケがわざと負けたことをこの企みに、ヒカリまでもが加担していることに。

「ひくん、惣流さん。負けちゃいましたよお。」

ユキは、半べそをかきながら、アスカの元にやって来た。

「よしよし、ユキ。良く頑張ったわね。えらいえらい。」

アスカは、ユキの頭をよしよしと撫でた。

「やめてくださいよっ。すっごく、恥ずかしかったんですよおっ。」

「その割りには、嫌がっていなかったじゃない。」

「だって、嫌そうな顔を見ると、相田君に悪いと思ったんですよっ。」

「まっ、その調子じゃ、あんまり仲は進んでいないけど、それなりに順調って感じかしらね。デートなんかもたまにはしてるんですよ。」

「ええ、まあ。毎週、相田君に誘われてます。」

「家にも来るんですよ。」

「ええ。妹達と遊んでくれて、結構助かってます。」

「ふふふっ、そういう惣気が言えるんじゃない、ばっちりね。」

「え〜っ、惚気なんかじゃないですよっ。」

「本人にはその気が無くても、そういうのは惚気って言うのよ。」

「そうですかあ。」

「そうよ。」

そう言いながら、アスカはゲームはどうなっているのかと見てみたら、凄いことになっていた。

「げっ！リツコがキスしてるっ！」

そう、マヤ・シゲルのペア対リツコ・マコトのペアが勝負していたのだが、なんと、男が女を抱っこして、女が男の頭の後ろに手を回しながらキスをしていたのだ。結果は、マヤ達の負けであった。

だが、アスカは次のケンスケの言葉でさらに驚く。

「はい、次は碓・惣流ペア対葛城夫妻ペアです。」

「ぬあんですってっ！」

アスカは、愕然とした。だが、異様に盛り上がっているこの場では、今更断れない。

「よっ、アスカ。頑張れよ。」

アスカの心の内を知ってかしらさずか、リョウジが気軽に声をかけた。

「加持さくん。お願いだから、さくつと負けてね。」

両手を合わせるアスカだったが、ミサトが横から口をはさんだ。

「そうはいかないわよ、アスカ。私は、負けるのが嫌いだから、本気でいくわよ。」

「げえっ。勘弁してよおっ。」

むろん、ユキと同じでアスカも知らない。みんながグルであることを。

リヨウジとシンジがジャンケンを長引かせるべく、事前に打合せをしていたことを。

そして、結果は…。

「げえっ！負けちゃったじゃないっ。」

そして、次はマヤ達との勝負である。アスカは、マヤを思いつきり睨み付けた。

「マヤッ！もしアンタ達が勝ったら、絶対に許さないからねっ！」

「そ、そんなあ。たかがゲームなのに。」

眉をひそめるマヤの耳元で、アスカ小声でささやいた。

「その代わり、わざと負けてくれたら、アンタのこと、許してあげ

るから。」

そう、アスカは罰ゲームが恐ろしかったのだ。おそらく、とんでもない罰ゲームが待っているに違いない。だが、断ることも出来ない。

そうになると、なりふり構わず勝つしかないのだ。たとえば、マヤを脅してでも。

「分かったわ…。」

マヤが頷くのを見て、シゲルがにやりと笑ったのだが、マヤは気付かなかった。

そして、結果は…。

「やったわあつ。勝ったわ、勝ったわよっ!」

アスカは、満面の笑顔を浮かべた。

そう、なぜか急にバランスを崩したマヤを支えきれずに、シゲルがよろめいたため、アスカ達が勝利したのである。

そして、罰ゲームは…。

「さて、今回の罰ゲームを考えたのは、葛城ミサトさんです。

負けたペアは、2つの罰ゲームのうち、1つを選ぶことができます。1つは、10分間一緒にシャワーを浴びて来ること。

もう一つは、布団の中で10分間裸で抱き合うこと。さあ、どちらにしますか。」

マヤは、迷った末に一緒にシャワーを浴びてくるところを選んだ。みんなの視線を感じなくてすむからだ。

マヤは恥ずかしそうに、シゲルは嬉しそうな顔をして、浴室に消えて行った。

10分後に現れた二人が、思いつきからかわれたことは言うまでもない。

「ふっつ、助かったっつ。」

ほっとしたアスカだったが、それ以後も気を抜けなかった。

ゲームはそれで終わりでは無かったからだ。

その後も、男女が組んで対戦するお色気ゲームが続いたのである。

次なるゲームは、ペアビンゴゲームだった。

ビンゴゲームと違うところは、大きな紙の上で男女が交代に体の一部を数字の上に置くところだ。

男女交代にというのがミソで、男女の体の一部が接触する可能性が非常に高いのだ。

これも同じような組み合わせで行い、アールコートがアリオスの頬にキスをし、再びユキとケンスケがキスをし、リツコとマコトと一緒にシャワーを浴びる結果となった。

その後にみんなで夕食を食べ、またもやゲームをすることになった。

その次のゲームは、くっつきゲームだった。ペアが交代であらかじめ用意してある紙をめくっていくのだが、その紙には体の一部が書

いてあるのだ。

例えば、男が「右手」を引いて、女が「胸」を引いたら、男は女の胸に右手を触れるのだ。

もちろん、パスが3回まで認められていている。

物理的に触れることが出来ない場合や、先の例の場合のように、女の子が嫌がった場合などに認められている。

パスが4回になった時点で、そのペアの負けとなる。

このゲームは結構盛り上がった。

女の子が結構きわどい体勢になったり、罰ゲームが秘密であったため、負けるのを嫌がった女の子が、パスをあまり使わなかったためである。

最初の組合せでは、アールコートだけがパスを多用したため、結果的にアリオスと10分間キスすることになってしまった。

次の組合せでは、ユキがやや多くパスを使ったため、罰ゲームをすることになってしまった。

罰ゲームは、再びくつつきゲームをすることだったが、ルールがかなり違っていた。

今度は、服の上から触れることは認められず、しかも、物理的に不可能な場合以外は、パスが認められないのだ。

最後の組合せの中で、アスカはパスを使わなかった。

胸にシンジの手が触れようと、お尻にシンジの頬がくつつこうとも、物理的に触れることが可能であれば、パスをしなかったのだ。

このため、再びマヤ達を負けることになってしまった。

最後に、ユキ達とマヤ達の勝負になったのだが、この勝負は苛烈を極めた。

ケンスケの右手は運良くユキの背中に触れることになったのだが、左手は胸になってしまった。

しかも、ユキの左手はケンスケのお尻に触れることになってしまった。

だが、運良くユキは勝ち残り、マヤ達の負けとなった。

罰ゲームは、裸で抱き合つてキスをすることだった。

もちろん、男どもは部屋から追い出され、終わった後に服を着たマヤしか見ることが出来なかったのだが。

こうして、トウジ達の企みで、シンジの誕生会はお色気たっぷりなものになり、特に男子が異様な盛り上がりを見せる結果となった。また、いわゆる、おいしい思いをした男子も多かったのである。

イライザなどは内心面白くなかったが、それはむしろ例外で、女子も他のカップルを見て、きゃあきゃあ言いながら喜んでいたのである。

そして、ゲームが終わった後も、夜遅くまで宴は続けられた。

罰ゲームをした女の子が感想を聞かれまくられたのは言うまでもない。

「はあつ。疲れたわねえ。シンジ、直ぐに寝よう。」

誕生会が終わり、みんなを送り出して、アスカとシンジはベッドの上で横になった。

「うん、いいよ。でも、お願いがあるんだけど。」

シンジは、アスカが疲れているように見えたが、思い切って先日のお話を切り出した。

「ああ、この間のお願いのこと？他のお願いじゃ駄目なの？」

「う、うん。だって、僕はとっても不安なんだ。」

アスカがいつか、僕から離れてどこかに行ってしまうんじゃないかって。だから、…。」

そう言いながら、シンジは俯いた。そして、祈った。

神様、仏様、アツラーの神様、その他どんな神様でもいいから、僕の願いをかなえて下さいと。

「でもね、シンジ。アンタ、ケダモノにならないって約束出来るの。我慢出来るもんなの。ちよっと信じられないんだけど。」

「そうだよね、信じてもらえないよね、僕なんか。」

シンジの顔は、暗くなっていく。

「もうっ、そんなに落ち込まないでよね。分かったわよ、信じてあげるわよ。」

だが、お祈りの効果があったのか、アスカの答えはシンジの悪い予感を裏切った。

「ええっ、じゃあっ。」

「でもね、今日じゃないわ。2日後よ。」

「えっ。どういこと?」

「当日に言っって驚かそうと思っっていたんだけど、まあいいか。明後日はねえ、一流ホテルのディナーを予約しているの。もちろん、シンジと二人つきりで食事をするのよ。」

「ええっ、本当なの?アスカと二人つきりなの。凄く嬉しいな。」

シンジの顔が、ぱあっと明るくなった。さきほどまで落ち込みかけていたのが、嘘のようである。

「そのまま、そのホテルに泊まることにするわ。お風呂でシンジの背中を洗っってあげるし、何も着ないで一緒に寝てあげる。」

「でもね、それ以上のエッチなことは駄目よ。それは約束してね。」

「うん、約束するよ。エッチなことは、絶対にしないよ。」

男は必ずそう言っつが、約束を守る男の方が稀である。

「絶対よ。破ったら承知しないから。」

「うん、約束する。アスカが嫌がることはしないよ。アスカのことが大好きだから。」

「はいはい、信じてるわ。」

そう言って、アスカはにっこり笑った。

その夜、シンジは嬉しくて、なかなか眠れなかった。

こうして、二日後に二人っきりでホテルで豪華なディナーを食べることにになり、シンジにとって最高の誕生日となった。

その夜二人の間に何があったのか、それは分からない。

だが、翌日のアスカは、普段と何ら変わらぬ歩き方をしており、まだまだ少女のままであったようだ。シンジは約束通り、ケダモノにはならなかったようだ。

かくして、シンジの押しが弱いのか、アスカが堅いのか、二人の関係が劇的に進展することは無かった。

それでも、二人の心は確実に近付いたようである。シンジに対するアスカの態度が、以前と比べてかなり柔らかいものになっているからだ。

これからも、二人の仲は山あり谷あり、色々な障害が待ち受けていることだろう。

だが、シンジがアスカを愛している限り、いずれはアスカもシンジの気持ちに応えてくれるようになるだろう。

その兆候は既に現れている。

シンジは知りようもないが、アスカはこの時既にある決意をしていた。
何年か後のシンジの誕生日に、シンジの至上の喜びと引き換えに、
激痛を伴う経験をするのを。
そして、いつの日かシンジの子供を産む事を。

もちろん、アスカのことだから、シンジをどうやってコントロールしようか、子供をどういう風に育てようかと、既に考えを巡らせていることだろうし、シンジがアスカに逆らえるとは思えない。

おそらくは一生アスカの言いなりになるシンジは不幸なのか、それとも幸せなのか、それは本人にしか分からないが、シンジに聞けば必ずこう答えるだろう。

「僕は、世界で一番アスカを愛している。アスカには、いつも輝いてほしい。

そんなアスカの側にいるだけで、僕は幸せなんだ。」と…。

第80話 シンジの誕生会 後編（後書き）

蒼い瞳のフィアンセスは、今回でおしまいです。長い間、ご愛読ありがとうございます

た。この続きは、次回作「蒼い瞳のツインズ」をご覧ください。アスカの子供達が登場します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0422k/>

蒼い瞳のフィアンセS

2010年10月9日15時20分発行